

博士論文

能因法師の歌風の研究

嚴
教欽

能因法師の歌風の研究

目次

序論	1
第一章 『拾遺集』との重出歌からみた『玄々集』	
はじめに	1
第一節 『玄々集』と『拾遺集』の重出歌（A群）	2
第二節 A群歌人の『玄々集』におけるその他の歌（B群）	3
第三節 能因独自の撰歌による歌人と歌（C群）	5
おわりに	8
第二章 『玄々集』所収長能詠の撰歌意識	
はじめに	2
第一節 長能詠の他歌集への入集状況及び詠歌時期	7
第二節 長能詠の表現の特徴	8
おわりに	9
第三章 藤原公任に対する認識	
はじめに	4
第一節 能因と公任の関連説話	1
第二節 公任の秀歌意識	4
第三節 『玄々集』所収公任詠と公任の自賛歌	4
おわりに	8
第四章 『能因集』における作歌方法	
はじめに	5
第一節 三代集の読人知らず詠を踏まえた歌	3
第二節 『伊勢物語』の影響が想定される歌	7
第三節 貫之詠の継承と変奏	0
おわりに	1

第五章 『能因歌枕』の「国々の所々名」考

はじめに	73
第一節 「国々の所々名」の概観	74
第二節 『玄々集』の歌枕との関係	75
第三節 『能因集』の歌枕との関係	76
第四節 勅撰集の歌枕との関係	78
おわりに	79

第六章 新古今時代の能因受容の様相

はじめに	88
第一節 『新古今集』の歌枕	92
第二節 『新古今集』の陸奥の歌枕	104
第三節 西行と定家における能因受容	118
おわりに	129

結論	130
----	-----

参考文献	140
------	-----

初出一覧	164
------	-----

資料編	165
-----	-----

序論

この論文は平安時代中期に活動し歌人、能因法師（以下、能因）の作品に即しながら、庶幾した歌風とは何か、その歌風に至るためにとった詠歌方法、そしてそのような活動を通して後世どのような影響を与え、和歌史の中で能因をどのように位置づけするかを考察するものである。

先ず、能因が活動した平安時代中期までの勅撰和歌集（以下、勅撰集）の撰集状況について確認する必要があるように思われる。和歌史を通史的観点から考察する時、勅撰集を中心とする考察は有効な方法であるが、それは勅撰集が天皇の命令によって編まれた権威ある書物として、いわば「その時代の歌風」を代表するからである。

十世紀初、日本最初の勅撰集が編まれた。醍醐天皇の命によるものである。『古今和歌集』（以下、『古今集』）と名付けられたこの勅撰集は、『万葉集』が編まれてから約一五〇余年間、公的な地位を得ることが出来なかった和歌^一が表舞台に立つようになった作品である。撰者としては、紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人が務めた^二。それをきっかけに、漢詩の陰に潜めて詠まれてはいたが、公的な地位を確保できなかった和歌は、一気に日本文学史上の市民権を得ることになった。『古今集』の成立から約五〇年、村上朝には二番目の勅撰集である『後撰和歌集』（以下、『後撰集』）が『古今集』とは性格は異にしつつ成立した^三。撰者を務めたのは大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城のいわば、「梨壺の五人」である。また五〇年が経って十一世紀初的一条朝には、花山院の親撰かと思しい『拾遺和歌集』^四（以下、『拾

一 『古今集』仮名序に「今の世の中、色につき、人の心、花になりけるより、あだなる歌、はかなき言のみいでくれば、色好みの家に埋れ木の、人知れぬこととなりて、まめなる所には、花薄穂に出すべきことにもあらずなりにけり」とある。

二 ただし、紀友則は『古今集』の仮名序に筆頭撰者として記録されているものの、『古今集』に友則の死を追悼する歌があることから、撰集作業には参加したが、奏覧時にはすでに古人であったと思われる。

三 「（前略）『古今集』が一度は抽象したはずの、恋歌の道具ともいべき色好みの和歌が「語り」として後宮サロンで語られたりして、その社会的地位を高くするに至ったのである。後宮殿舎の一つである梨壺で撰集された『後撰集』は、それにふさわしく、このような文化的状況をそのままに反映して、前大の権威ある歌人の作に、当代の権門貴紳と女房たちの「みやび」を加えることよって撰集制確立期における文学的記念碑となったのである。」『日本古典文学大辞典』、岩波書店、一九八四年、『後撰和歌集』「意義」の項、片桐洋一執筆。

四 花山院の単独の撰というより、藤原長能・源道済の助力があったかとされる。長能は能因の歌道上の師匠とされ、道済は能因の自撰家集からその親交が確かめられる、先輩格の歌人である。長能に関しては第三章で論じた。なお、『拾遺集』と藤原公任撰の『拾遺和歌抄』（以下、『拾

遺集』)が編纂されることによって、いわゆる「三代集」が成立する。この時期の歌人たちは、天皇の命によって編まれた勅撰集に自分の歌が撰ばれることによって、公的な「歌詠み」としての名声を得ることが出来た。しかし、藤原道長によって築かれ、その子の頼通の代まで続く撰集最盛期に入ると天皇の権威は落ち、勅撰集の撰集作業も行われなくなる。第四番目の勅撰集である『後拾遺和歌集』(以下、『後拾遺集』)が編纂される応徳三(一〇八六)年まで、歌人たちは約八十年間の空白期を待たなくてはならなかった。

能因の生年は、能因の自撰家集である『能因法師集』(以下、『能因集』)の九二番歌から「秋兒屋池亭五首」との歌群があり、そこには「小序」と漢文序が添えられ、「昔元和二年秋、樂天年三十七」「今万寿元年秋、我等年三十七」とあるので、生年は永延二(九八八)ということになる。没年は定かでないが、「永承五年六月五日庚申祐子内親王歌合」^五以後晴の歌合からみられなくなるので、永承五(一〇五〇)年後、まもなく亡くなったかと思われることから、まさしく『拾遺集』から『後拾遺集』に至る勅撰集空白期を生きた人物である^六。『中古歌仙三十六人伝』や『橘氏系譜』等によると、文章生出身で、在俗時は肥後進士、出家後は古曾部入道と号し、出家当時は融因と称したが、後に能因と改めた^七。『能因集』以外に、私撰集である『玄々集』、歌学書である『能因歌枕』が現存し、『八十島紀』『題抄』『坤元儀』などは散逸し、現存しない。

『玄々集』と『能因歌枕』に関する先行研究は第一章と第五章で確認することにし、序論では、『能因集』に関する先行研究について確認することにする。

能因に関する本格的な研究は清水文雄による「新資料能因法師集の研究」^八から始まる。

「榊原子爵家蔵本」と「宮内省図書寮御蔵本」を新資料として紹介したこの論文において、

『能因集』が「一生のの作歌生活を回顧して、自己の詠歌を年代順に排列しよう」とする「作

遺抄』)の前後関係が古来問題視され、『拾遺集』を抄出して『拾遺抄』が成立したという説が支持された時期もあったが、現在は『拾遺抄』を増補させて『拾遺集』が成立したとみるのが定説として認められている。

^五 萩谷朴『平安朝歌合大成「増補新訂」』二、同朋舎出版、一九九五年、一〇〇〇〜一〇一三頁。以下、歌合の引用は全て同書による。

^六 『拾遺集』が寛弘年間(一〇〇四〜一〇一二)初期に成立したが、当時能因はまだ十代であり、勅撰歌人にはなれなかった。

^七 塙保己一(編)『橘氏系譜』『群書類従』第五輯卷第六十三、続群書類従完成会、一九六〇年、訂正三版。「中古歌仙三十六人伝』『群書類従』第五輯卷第六十五、続群書類従完成会、一九六〇年、訂正三版。

^八 清水文雄「新資料能因法師集の研究」『国文学試論』第二号、東京春陽堂、一九三四年六月。

者の一貫した態度があらはれ^九ている自撰家集であることを指摘した^九。『能因集』が自撰家集であることから、この家集を中心とした能因の伝記の研究が盛んに行われた。その代表的な先行研究を確認すると、清水文雄が前述した「新資料能因法師集の研究」の「成立」の部分を発表させた形で発表したのが三回にわたる「能因法師伝」^{一〇}である。「能因法師伝(その一)」ではその出生に関して詳しく論じ、生年や記録類から見られる家族関係、そして能因が生まれた年である永延二(九八八)当時の社会環境や能因を取り巻く周辺人物の年齢等について考察した。続く「能因法師伝(その二)」では、『袋草紙』を中心に説話化された能因の逸話を考察した。「能因法師伝(その三)」では能因の閲歴を考察し、『能因集』の上中下巻がそれぞれ青年期・壮年期・老年期に該当すると指摘した。

目崎徳衛は交友と出家と旅を考察し、能因の出家が「仏門に帰依して純粋な宗教人となるためではなく、官人的秩序と現世的拘束を離れるよすがとして選ばれた」とした上で、古曾部や陸奥が牧場と馬の産地として古来有名であり、『能因集』に馬に関する歌が多くみられることから、出家後の能因が生計のために馬の交易に携わっていたのではないかと推測し、このような生活様式は「僧俗二つの道を二つながら拒否した独特の様式」と指摘した^{一一}。

犬養廉は、清水文雄の「能因法師伝(その三)」をさらに詳しく論証し「能因法師研究(一)―その歌人的出発まで―」と「能因法師伝(二)―青年期の周辺―」^{一二}を発表した。「能因法師研究(二)―その歌人的出発まで―」において、記録類にみられる能因の父親に対する齟齬を究明し、文章生時代の長能の師事の年次を推定した。続く「能因法師伝(二)―青年期の周辺―」ではその文章生時代の環境や交友関係から、河原院グループとの繋がりを提示した。

このような伝記の研究を踏まえた『能因集』の表現論としては、小町谷照彦の「和歌的幻想の追求―能因法師論ノート―」と「能因における〈すき〉の旅」^{一三}があげられる。前者では「花の都」という当時流行した歌語に着眼し、それは「現実で失ってしまったものを詞によつ

九 清水文雄、前掲論文、二四九頁。

一〇 清水文雄 「能因法師伝(その一)」 『文芸文化』第四卷第一号、日本文学の会、一九四一年一月、「能因法師伝(その二)」 『文芸文化』第四卷第四号、日本文学の会、一九四一年四月、「能因法師伝(その三)」 『文芸文化』第四卷第五号、日本文学の会、一九四一年五月。

一一 目崎徳衛 「能因の伝における二、三の問題」 『平安文化史論』(桜楓社、一九六八年)

一二 犬養廉 「能因法師研究(一)―その歌人的出発まで―」 『国語国文研究』第三〇号、北海道大学国文学会、一九六五年三月。「能因法師伝(二)―青年期の周辺―」 『国語国文研究』第三五号、北海道大学国文学会、一九六六年九月。

一三 小町谷照彦 「和歌的幻想の追求―能因法師論ノート―」 『日本文学』第一九卷、日本文学協会、一九七〇年七月。「能因における〈すき〉の旅」 『国文学解釈と教材の研究』第二五〇号、学灯社、一九七三年七月。

て回復しようとするものであり、いわば詞で築かれた和歌的幻像」だが、能因の「すき」とはこのような「言葉によって現実を把握しようとする」姿勢であると指摘した。後者は前者で指摘したことが能因の旅でどのように表れているかを敷衍する論考である。

『能因集』における文芸意識に注目したのは平野由紀子であった。「能因集の一研究―家集の自律的世界―」^{一四}では家集内の哀傷歌が離れたところから呼応することを検証し、そこには「時間のながれ」が考慮されていることを「自律的世界」と称し、「人生のどの面をとらえて文学にするかという明確な認識のもとにつくられている」と論じた。「能因の〈想像奥州十首〉について」^{一五}では家集の「想像奥州十首」にも哀傷歌のような論理が働いていることを指摘した。

増田繁夫は「能因の歌道と求道―歌道における「すき」の成立―」^{一六}において、家集を検討した上に、家集で「僧としての生活にふれることは抑制されて」いて、「能因は自分に適しい僧としてのあり方を求めて、この時期から社会的にも顕著になり始めた新しい僧のあり方、所謂「ひじり」とよばれるやうな、ヒューマニズムの立場に傾斜した僧の一つの道を開いた」と指摘した。

そして川村晃生の『撰関期和歌史の研究』^{一七}は能因研究の一つの集大成といえる。同書の第一章第一節「能因法師研究」の「一、初期能因伝をめぐって」では、能因の父親について再検討し、父親死別後の能因に橘氏の同族である為義の助力があった可能性を指摘した。「二、能因の旅」では、能因の旅を六つに大別し、家集に沿いながら検証する。「三、能因と光孝源氏歌人たち」では、源道済・源為善・観教など、能因と深い関係を持っていた歌人たちを考察し、「四、能因と大江氏歌人たち」では大江正言・大江嘉言・大江公資・相模に焦点を当てて考察する。「五、説話の能因像」では『袋草紙』をはじめとする諸歌学書や説話集などの説話が、家集から変化・発展していく様相をたどる。「六、能因の末裔」は能因の子孫である橘元任・橘能元と、系図上には関係性がみとめられないが、諸記録によって関係があると思われる橘栄職・橘成元について検証した。

以上の先学の研究において、能因の特性としてよく出されるキーワードは「すき」である。『日本国語大辞典』では「すき」について次のように定義する。

^{一四} 平野由紀子「能因集の一研究―家集の自律的世界―」、関根慶子教授退官記念会（編）『関根慶子教授退官記念 寝覚物語対校・平安文学論集』、風間書房、一九七五年。

^{一五} 平野由紀子「能因の〈想像奥州十首〉について」『和歌文学研究』第三七号、和歌文学会、一九七七年九月。後に『平安和歌研究』（風間書房、二〇〇八年）に収録された。

^{一六} 増田繁夫「能因の歌道と求道―歌道における「すき」の成立―」、財団法人古代学協会（編）『後期撰関時代史の研究』、吉川弘文庫、一九九〇年。

^{一七} 川村晃生『撰関期和歌史の研究』、三弥井書店、一九九一年。

すき 【好・数奇・数寄】

- (1) (形動) 物事を愛好する心持。すきこのむこと。また、そのさま。
- (2) 風流、風雅の道に深く心をよせること。風流の物好み。
- (3) 風流、風雅の道。和歌、茶の湯など。
- (4) (形動) 恋愛の情趣を好むこと。女色を好むこと。また、そのさま。色好み。
- (5) (形動) 自分の思うままにふるまうこと。また、そのさま。好き勝手。
- (6) (形動) 物好きなこと。また、そのさま。

語誌

(2)(3)の場合には、「数奇」「数寄」と表記されることが多い。この表記は、「元和本下学集」に「数奇(スキ) 辟愛之義也」とあるように、愛着の程度が並でない状態を指していた。中世前期は、主に和歌についてだったが、中世後期以降になると、「永祿二年本節用集」に「数奇(スキ) 花ノ数奇茶ノ数奇」と記されているように、茶の湯や華道について使用された。「数奇」「数寄」は当て字と考えられるが、「明応五年本節用集」に「数奇(スキ) 愛物云也〈略〉或数寄(スキ)」とあることから、「数奇」から「数寄」へ交替していったものと考えられる。その時期に関して、近世末期の国学者岡本保孝の「随筆・難波江・五」には「下学集より慶長十六年の節用集迄は、奇僻の奇の字を書き、正保三年の節用集より今日までは、寄附の寄の字をかく」とある。この交替は、不幸せ・不運の意を表わす漢語「数奇(すうき)」との混同を避けようとしてなされたものと思われる。^{一八}

「中世前期は、主に和歌についていった」もので、「愛着の程度が並でない状態」を指すという。そして松村雄二は次のように定義している。

〈数奇〉という語は、後世はもっぱら侘茶の数寄を指すようになったが、本来は動詞「好く」から発生して、多くは色好みの意味での「好く」「好きずきし」「好き者」という用法で使われ(『伊勢物語』等)、その用法は後世まで続いた。一方では、色事以外にも早く風流を愛する、風流人といった意味で「只今のすきはあぢきなくぞ侍る」(『宇津保物語』蔵開上)、「歌なむ詠むといひてすき者ども集まりて」(『大和物語』一八)などと使われるようになり、やがて十一世紀初頭撰関体制の欄熟期に多くの数寄者が輩出したことが転機となって、風流事に偏執してゆく精神を示すある特有なタムとしても用いられるようになった。それ以降、歌人や管弦の道に携わる楽師、あるいは遁世者たちの世界で、ある種の脱俗

一八 『日本国語大辞典』、ジャパンナレッジより引用。傍線は筆者による。以下、『日本国語大辞典』の引用は、ジャパンナレッジによる。

的な生の方向を示す指標として、〈数奇〉ないし〈数奇〉の漢字を当てて使用されたが、しばしば俗世の価値観を転倒し、〈無用〉の世界に遊狂する反社会的な側面を帯びるので、後世のいわゆる〈風狂〉の精神とつながる面を持つ。^{一九}

つまり、能因は和歌に並々ならぬ愛着を持った者で、「十一世紀初頭摂関体制の爛熟期に多くの数寄者が輩出」された「数寄者」の中の一人なのである。能因がこのような異名を持つにいたるまで大きな役割を果たしたのは、藤原清輔の『袋草紙』であった。

たとえば、『袋草紙』の雑談部には多くの歌人たちの逸話を伝えているが、能因に關した最初の逸話は次のようなものである。

長元歌合の日、能因きぬかぶりして、窃かに入りてこれを聞く。恋歌に、

くろかみの色もかはらぬ恋すとてつれなき人にわれぞ老いぬる

と云ふ歌を、読みたりと思ひて、勝負を聞きに参り入るなり。而して敵方より、

あふまでとせめてわが身の惜しければこひこそ人の命なりけれ

と云ふ歌を講じ出だすを聞きて、窃かに退出すと云々。適に非ざるの由を存ずるか。^{二〇}

「長元歌合」とは、『能因集』下巻の冒頭にある「長元八年夏関白殿歌合」のことである。

関白左大臣藤原頼通の主催で、長元八年（一〇三五）五月十六日に行われた^{二一}もので、能因にとっては中央歌壇にデビュー出来た歌合である。能因は自分の歌に相当自信があつたらしく、衣を被つて密かに講評を聞くも、自分の歌と番えられた藤原頼宗の歌を聞き、勝てそうにないことに気づき、そのまま退出したというこの逸話で語られる能因はどこまでも滑稽である。

加久夜の長の帯刀節信は数奇者なり。始めて能因に逢ひ、相互に感緒有り。能因云はく、

「今日見参の引出物に見るべき物侍り」とて、懐中より錦の小袋を取り出だす。その中に鉋屑一筋有り。示して云はく、「これは吾が重宝なり。長柄の橋造るの時の鉋くづなり」と云々。時に節信喜悅甚だしくて、また懐中より紙に裹める物を取り出だす。これを開きて見るに、かれたるかへるなり。「これは井堤の蛙に侍り」と云々。共に感歎しておのおのこれ

^{一九} 松村雄二「数奇に関するノート―和歌の数奇説話を中心として―」『共立女子短期大学文科紀要』第三二号、共立女子短期大学文科、一九八八年二月、五一頁。傍線は松村による。

^{二〇} 藤岡忠美校注『袋草紙』新日本古典文学大系、岩波書店、一九九五年、八三頁。以下、『袋草紙』の引用は本書による。

^{二一} 萩谷朴『平安朝歌合大成「増補新訂」』二、前掲書、「一二三 長元八年五月十六日関白左大臣頼通歌合」、八三二〜八六七頁。

を懐にし、退散すと云々。今の世の人、嗚呼と称すべきや。三

節信のことが「数奇者」と語られるが、そのような人と話し合える人もまた「数奇者」でなければならぬ。そして著者である清輔は二人のことを、衆人の言葉を借りて、「今の世の人、嗚呼と称すべきや」と評する。

これに比べて、『袋草紙』より早く成立した『俊頼髓脳』の能因の逸話は態度が違う。

讃岐の前司兼房と申しし人の、能因を、車のしりにのせて、ものへまかりけるに、二条と、東の洞院とは、伊勢が家にてありけるに、子日の小松のありけるを、さきを結びて植ゑたりけるが、生ひつきて、まことに大きなる、松にてありしが、木末の見えければ、車のしりより、まどひおりければ、兼房の君、心も得ず、「いかなる事ぞ」と尋ねければ、「この松の木は、高名の、伊勢が結び松には候はずや。それが松をば、いかでか、車にのりながらはすぎ侍らむ」といひて、はるかに歩みのきて、木松の隠るる程になりてこそ、車にはのれりける。

また、右近の大夫国行と申しける歌よみの、陸奥の国に下りけるに、歌よみあつまりて、餞しけるに、「白河の関すぎむ日は、水鬢かき、うちぎぬなど着てすぎよ」と教へければ、「いかなれば、さはすべきぞ。国の人、あつまりて見るか」と問ひければ、「いかでか、能因法師、秋かぜぞ吹く白河の関と、詠みたらむ関にては、けなりとて、鬢ふくだめてはすぎ給はむ」といひければ、人々わらひけりとや。さりとて、「この道を好まむとおぼさば、さやうにしてぞ、歌は詠まれ給はむ」とぞ申しける。されば、この道を好まむ人は、世の末なりとも、かしこまるべきなめり。三

能因の逸話に対して直接評価はしていないが、能因がとった行動を見習って国行がとった行動に対して「されば、この道を好まむ人は、世の末なりとも、かしこまるべきなめり」とする俊頼の評言は、そのまま能因の行動に対しての評言とみて差し支えないであろう。

つまり、能因という同一人物に対しての評価は、「語られたこと」を抛りどころとしていて、分かれる部分が大いのである。しかし、能因は果たして、先述した『袋草紙』にみられたような、衣を被って奇行に走るような人物であったのだろうか。能因における「数奇」とはどのようなものであったか、能因自身が「語ったこと」に基づいて考える必要があるように思われる。

『能因集』と『玄々集』には漢文序が添えられているが、その内容を検討してみると、いくつ

三 『袋草紙』、前掲書、八七頁。

三三 橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『歌論集』新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇六年、一三六〜一三七頁。傍線は筆者による。以下、『俊頼髓脳』の引用は、本書による。

か注目される部分がある。

『玄々集』序

和歌者、本朝之風俗也、源流起_二於神代_一、雅詠盛_二于人世_一、是以延喜御宇之時、紀貫之奉_レ勅撰_二玄之又玄三百六十首_一、其外撰集之家往々有之、今予所_レ撰者、永延以来寛徳以往篇什也、不_レ知當時之褒貶_一、只憶_二向後之消没_一之故也、上自_二王后_一下至_二士女_一、粗擢_二其間之上科_一聊叙_二此道之中興_一而已_{二四}

『玄々集』を選集する動機として、「本朝之風俗」である和歌の「向後之消没」を危惧するからであり、「此道之中興」を願うためであるとす_{二五}。また『能因集』の序文ではもつと詳しく撰集する動機を述べている。

予_二歴覽天下之人事_一、有_レ才者心有_二其用_一、有_レ芸者心有_二其利_一。雖_二彼質張里之者_一、由_レ芸有_レ利。矧鴻才鳳夢之衆、依_レ学多_レ禄者也。蓋_レ学而無_レ益者、本朝之俗和歌之道而已。設雖_レ有_下伝_二此道_一者_上、以_二貴_レ耳賤目_一、偏_レ為人之大情_一、設雖_レ有_下失_二其体_一者_上、以_二隨時依_レ人、猥為_二世之許_一也。故嗜_レ之者有_二衆人之嘲_一、識_レ之者無_二片時之興_一、如_二彼天曆以往_一、廼三代之明主、降_レ勅恢_二兹道_一、四人之歌仙、奉_レ詔獻_二家集_一。是以王道股肱之臣、訪_二於衆心_一採_レ詞、儒林河漢之才、冠_二卷首_一而顯_レ序。仍雖_二枉夫之芻言_一、頗有_二比興之詞_一、擢而書_二撰集之中_一、雖_二君子篇詠_一、亦無_二詞義之備_一、扱而捨_二卷帙之外_一。繇_レ是其名顯_二於身後_一、其言朗_二於世上_一矣。嗟乎、善惡取捨、不_レ繫_二貴賤_一、我今當_レ齊_二竹笋之濫吹_一、何得_二嶧峒之知音_一乎。寔是雖_二消没之道_一、宿僻尚未_レ能弃。仍聊揣_二所思之篇_一、以言_二家之端_一、云_レ爾。

(予天下の人事を歴覽るに、才有る者は必ず其の用有り、芸有る者は必ず其の利有り。彼質張里の者と雖も、芸に由りて利有り。矧や鴻才鳳夢の衆、学に依りて禄多き者也。蓋し学びて益無き者は、本朝の俗和歌の道なるのみ。設ひて此の道を伝ふる者有りと雖も、耳を貴び目を賤しむるを以て、偏へに人の大情と為し、設ひ其の体を失ふ者有りと雖も、時に随ひ人に依るを以て、猥りに世の許と為す也。故に之を嗜ぶ者に衆人の嘲有り、之を識る者に片時の興無し。彼の天曆以往の如く、廼ち三代之明主、勅を降して茲の道を恢め、四人の歌仙、

^{二四} 『玄々集』序の引用は川村晃生『能因法師集・玄々集の研究』(三弥井書店、一九七九)、
『能因集』序と訓読文は、同『能因集注釈』(貴重本刊行会、一九九二)による。傍線は筆者による。

^{二五} また、『玄々集』の序文や『能因集』の序文には紀貫之を意識した表現がみられるが、これにかんしては第四章で考察する。

詔を奉はりて家集を献ず。是を以て王道股肱の臣、衆心を訪て詞を採り、儒林河漢の才、卷首に冠して序を顕はす。仍りて枉夫の芻言と雖も、頗る比興の詞有れば、擢きて撰集の中に書き、君子の篇詠と雖も、亦詞義の備無ければ、扱びて卷帙の外に捨つ。是に繇りて其名身後に顕はれ、其の言世上に朗なり。嗟乎、善悪取捨、貴賤に繫らず。我今竹笋の濫吹を斉ふるに当りて、何ぞ嶧峒の知音を得んや。寔に是れ消没の道と雖も、宿僻尚ほ未だ弃つること能はず。仍て聊思ふ所の篇を揣めて、以て家の端に言ふと、爾云ふ。」

「蓋し学びて益無き者は、本朝の俗和歌の道なるのみ」と、国の風俗である和歌の道は学んでも益にはならないとする。その理由は、「耳を貴び目を賤しむるを以て、偏へに人の大情と為し」と、耳に聞こえる古き時代を尊び、目に見える今は卑しむのが大体の認識であるからである。「我今竹笋の濫吹を斉ふるに当りて、何ぞ嶧峒の知音を得んや」と、自分の詠草を整理するにあたって、自分の歌の価値を分かってくれる友を得ることを願いながら、このように自分の家集を撰する理由として、「寔に是れ消没の道と雖も、宿僻尚ほ未だ弃つること能はず。仍て聊思ふ所の篇を揣めて、以て家の端に言ふ」と、この和歌の道が消滅する道であるといっても、長く身につけてしまった性癖はやはり捨てることできないから家集を残す、とする。

この両序文から注目すべき部分が二つあると思われる。その一、和歌は国の風俗ではあるが、消滅が危惧されること、その二、「此道之中興」のために、撰集すること、である。「中興」の意味が「いったん衰えた物事を中頃に再び盛んにすること」^{二六}であることを考えると、能因は撰集する時点で、すでに「此道」が衰えたと認識しているのであり、『玄々集』と『能因集』はその「道」を「中興」するためのものなのである。平野由紀子は前掲の「能因の〈想像奥州十首〉について」において、

一首一首は実人生から生まれた詠歌ではあるが、生涯の詠作からどれを選択しどのように編集するかについて、能因は、けっして歌風の高さや歌の巧みさを基準で歌を選んだり、書く年毎の秀歌を選んで年代順に並べたわけではない^{二七}。

と述べる。誠に的確な指摘であるが、序文の態度から考えて、自分の家集を撰ぶにあたって歌の良し悪しをないがしろにしたとは考え難い。平野由紀子が論証した通り、能因は歌を撰定する基準の大きな柱は「時間のながれ」に置きつつ、歌の良し悪しも考慮したと思われる、ひいては歌の詠み方をも提示しようとしたのではないか。『能因集』の序文にみられる「耳を貴び目を賤しむる」「我今竹笋の濫吹を斉ふるに当りて、何ぞ嶧峒の知音を得んや」からは、家集に含まれるの

二六 『日本国語大辞典』、ジャパンナレッジ。

二七 平野由紀子、注一四の前掲論文、三一九～三二〇頁。

であろう自分の歌に対しての自負の念が感じられるからである。先行研究において、能因の伝記や周辺人物との交友関係・環境、歌人としての生き方などは明らかにようになってきたが、能因が『玄々集』『能因集』そして『能因歌枕』を通して「此道之中興」のためにどのようなにかかわろうとしたのかについてはまだ考え余地が残っているように思われる。

本論では、能因の撰集類にあらわれている歌風に焦点を合わせ、能因がどのような詠法を庶幾し、自分の歌の上ではどのように適応したか、それが後世にはどのように受容されていたかを考察していくことにする。まず、第一章から第三章までは能因の私撰集である『玄々集』に注目し、第一章では『玄々集』と『拾遺集』の重出歌に着眼した。『拾遺集』は能因が生きている間に編まれた唯一の勅撰集で、公的な権威を持つ撰集である。『玄々集』の全体の約五分の一角が『拾遺集』との重出歌であるが、能因がこれらの歌については『拾遺集』の撰歌意識に共感したことになる。この重出歌を手掛かりに、能因がどのような歌人の歌をどれほどとっているか、それがどのような意味をもつかを考察する。

第二章では、『玄々集』の最多入集歌人である藤原長能の歌について考える。長能は能因の歌道上の師匠とされる人物で、『拾遺集』初出の歌人である。当時歌壇の権威として君臨していたのは第三章で考察する藤原公任であるが、能因はあえて師匠である長能の歌をもっとも多くとっている。『玄々集』所収の長能詠の特徴を考えることで、能因の秀歌の基準を考察していきたい。第三章では、公任の『玄々集』入集歌の特徴について考察する。公任は『拾遺集』の元となつたとされる『拾遺抄』の撰者であるので、能因が生きていた時代には公任が歌壇の一人者であったにもかかわらず、第二章で述べた長能に劣る、六首入集にとどまる。そこには、歌の是非と人間関係が絡んでいると思われるふしがあるので、説話類を検討しつつ考察を進める。

第四章では、自撰歌集である『能因集』の歌を分析する。『能因集』の歌が、編年体の構成をとっており、それが単純な年代順のみでないことは先述したとおりである。この章では、焦点を能因の詠法に当て、能因が自分の家集を編むに当って、どのような詠法の重視し歌を集めていたかを考察する。

第五章では、能因の歌学書である『能因歌枕』の「国々所々の名」の部分について考えてみる。『能因歌枕』は能因と撰とされながらも、『玄々集』や『能因集』に比べて、その成立や構成面において、不明瞭な部分が多い。この『能因歌枕』には「国々所々の名」という部分が存在し、歌枕を国別に分類した部分があるが、その部分は旅を続けた能因の生と相まって注目される。「国々所々の名」と他の能因の撰集の中の歌枕、そして勅撰集の歌枕との関係について考察すると同時に、『能因歌枕』の成立時期について考えてみる。

第六章では、能因が後代において、どのように解釈され、受容されていったかを考えるが、特にその時代を『千載和歌集』（以下、『千載集』）の成立から『新勅撰和歌集』（以下、『新勅撰集』）が成立するまでの間、つまり新古今時代に限定して考えることにする。能因は『後拾遺集』初出歌人（三一首）であるが、死後約一五〇年後成立した『新古今和歌集』（以下、『新古今集』）において、一〇首入集し、再評価された歌人であるといえる。新古今時代の歌人た

ちが能因のどのような部分に興味を示し、受容したかを考察する。

つまり、本論文は、第一章から第三章にかけて『玄々集』を考察することで、能因が庶幾した歌風とは何かを考察することになるが、これは歌集編集者としての能因の側面といえる。続く第四章では、『玄々集』を通して確認できた歌風が『能因集』においてどのように発現するかを確認することになる。これにより、和歌の実作者としての能因の側面が窺えることを期待する。続く第五章では、第一章から第四章までの能因の姿が『能因歌枕』にどのように影を落としているかを確認するが、これは歌学者としての能因の側面である。最後の第六章では、新古今時代の能因の受け入れ方を考えることで、平安時代から中世への架け橋としての能因という歌人がもつ特性と位置づけを試みることになる。増田繁夫は「歌のために「ひじり」的な僧の道をえらんだといふわけではなく、さういふ歌の「すき者」でもあるやうなあり方が、そのまま能因の歩む「ひじり」としての僧の道であり、当時の「ひじり」の一つにはさうした性格のものもあつたかと思ふ。これは歌人としても一歩中世に入りこんだ姿なのである」^{二八}と指摘するが、生き方だけでなく、詠作の上でも中世に繋がる要素があるように思われる。以上の考えのもとで、能因の歌風が「此道之中興」とどのように関係しているか詠み解くことを試みる。

第一章 『拾遺集』との重出歌からみた『玄々集』

はじめに

序論では主に『能因集』に関する先行研究をあげたが、『能因集』の分析に入る前に、第一章から第三章までは、能因の私撰集である『玄々集』に焦点を当てて考察を進める。『玄々集』の先行研究としては、後代の歌集への影響関係に關した研究¹によって『金葉集』と『詞花集』、『新撰朗詠集』への受容の様相が論じられた。成立時期と歌人意識に關した研究²によって『能因集』とほぼ同じ時期に成立され、入集歌人は撰集時点ですでに故人となった歌人と生存していた歌人に大別できることが明らかになった。本文系統に關した研究³によって、今は散逸した定家本によって原型に近く復元出来ることが明らかになった。しかし、『玄々集』そのものの内容、特に撰歌意識についてはまだ考える余地があるように思われる。

本章では、『玄々集』の歌を勅撰集の部立に沿って分類・分析するが、三つに大別して定量的な分析を試みる。この場合、大別する基準となるのは『拾遺集』との重出歌である。『拾遺集』は能因が生きている間編纂された唯一の勅撰集であり、第一節では、『拾遺集』との重出歌を「A群」と称し、能因がどのような歌を撰んでいるのかをみる。A群は、能因以前にすでに秀歌として認められた歌であり、能因もその撰歌に共感して撰んだものであるといえよう。第二節では、A群に属する歌人たちの、『玄々集』における歌を「B群」と称し考察を行う。B群は、『拾遺集』の歌人意識に共感しつつ、能因の撰歌意識のもとで撰んだ歌である。第三節では、A群に属しない歌人たちの『玄々集』に入集した歌を「C群」と称し、考察する。C群は能因独自の歌人意識と秀歌観で撰ばれたと言える。

この分析を通して、能因がどの群に重点を置いてあるのか、各群にどのような歌が含まれてい

一 谷山茂「玄々集と金葉集三奏本」『国語国文』第二一卷九号、京都大学文学部国語国文学研究室、一九五二年十月。同「金葉集と詞花集―玄々集をめぐる―」『国語国文』第二二卷六号、京都大学文学部国語国文学研究室、一九五三年六月。川上新一郎「『新撰朗詠集』と三奏本『金葉集』―『玄々集』の受容について―」『和歌文学研究』第三八号、和歌文学会、一九七八年三月。

二 安西廸夫「玄々集の成立」『国文学言語と文芸』第六卷四号、大修館書店、一九六四年七月。以下、安西の論はこの論文による。

三 久保木哲夫「『玄々集』定家筆本の形態」『国文学言語と文芸』第八九号、大塚国語国文学会、一九八〇年二月。平野由紀子「『玄々集』本文考―現存本の限界と失われた系統―」『国語と国文学』第五七卷七号、至文堂、一九八〇年七月。

るのが浮かび上がると思われる。

第一節 『玄々集』と『拾遺集』の重出歌（A群）

まず、『玄々集』の構成について言及しておく、円融院から始まり最後の藤原範永まで、二人の歌人の歌一六七首に、補入歌として、小式部の歌一首を含め、計九三人一六八首歌が収められている^四。勅撰集のような部立は存在せず、歌人別に歌が収められていて、その歌人別に入集歌数を十首から一首まで差をつけた形になっている点、藤原公任の「三十六人撰」と共通するところがある。

その一六八首のうち、このA群に該当する『拾遺集』との重出歌は三六首であり、比率としては二一・四％、全体の一／五強を占めている。三六首の内訳と歌人構成を表わすと二二頁の【表1】のようになる。歌人の構成として、大江為基、源為憲、御形宣旨、粟田殿の上、観見僧都、平祐拳、源頼光、大江正言、善滋為政以外の十九人は勅撰集入集歌数が十首以上であり、『拾遺集』での入集歌数こそ少ないが、後代の勅撰集に多く採られる歌人が揃っているといえる。そして御形宣旨^五以外の歌人が全て『拾遺集』初出の歌人であるのは、『玄々集』の基準によるものである^六。

定量的に歌を分類してみると、四季歌が十二首、恋歌が五首、雑歌が八首、哀傷歌が十首である。勅撰集の場合、四季歌と恋歌が大きな二本柱となり、雑歌がそれに次ぐのが一般的であるが、能因は『拾遺集』から歌を撰ぶ際、雑歌や哀傷歌からも積極的に歌を撰んだようである。

内容的にみると、四季歌の場合、三代集的な世界の完成とも言われる『拾遺集』からの撰歌だけあって、伝統的な詠法で詠まれた歌が多い。例えば、

はじめの春

^四 『玄々集』の引用は、川村晃生『能因法師集・玄々集とその研究』、三弥井書店、一九七九年による。私に漢字を当てたところがある。

^五 初出は『新古今集』であるが、『玄々集』入集歌が『拾遺集』の哀傷部に読人知らず詠として入集している。

^六 『玄々集』の序文に「今予所撰者、永延以来寛徳以往篇什也」とある。つまり『古今集』から『後撰集』時代の歌人は撰歌の対象外であった。安西迪夫によれば、高松殿の上を基準にその前に配列されている歌人は寛徳年間以前に没した歌人、その後に配列されている歌人は寛徳年間生存していた歌人であるという。安西迪夫、前掲論文。

吉野山峰の白雪いつ消えてけさは霞のたちかくすらん(玄二九・源重之)^七

五月闇倉橋山のほととぎすおぼつかなくも鳴きわたるかな(玄二三・藤原実方)
水うみに秋の山辺のうつれるははたばりひろき錦とやみむ(玄八五・観教僧都)

「吉野山」は、春の景物である桜・雪・霞と詠まれるのが一般的な歌枕であるが、重之の歌はそのような伝統に倣って、降っていた雪がいつの間にか消えて、春の霞が立ち込めて吉野山を隠している様子を歌う。実方の歌は、夏の景物である時鳥の鳴き声のおぼつかなさを、「くら(暗い)イメージを持つ名の倉橋山によせて、さらに枕詞「五月闇」で山の名を引き出す伝統的な詠法である。観教の歌もまた、「はたばり」という歌語は珍しいが、紅葉した山を錦に喩え、水面にそれが映っている風景を詠むのは秋歌の伝統的表現である。続いて人事詠では、

移ろふは八下葉ばかりと見し程にやがて秋にもなりにけるかな(玄八〇・馬内侍)

ゆくすゑのしるしばかりに残るべき松さへいたく老いにけるかな(玄一一三・源道済)

服脱ぎける日

限りあればけふ脱ぎすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり(玄二〇・藤原道信)

馬内侍の歌は、季節の「秋」に恋人の変心を表わす「飽き」を掛けて、秋になって植物―おそらく萩―の下葉だけが色変わりするのではなく恋人の心にも「飽き」が訪れて変わってしまったと詠む。道済の歌では、長寿の象徴として松が歌われ、その松さえも大変年老いたことへの驚きを歌う。道信の歌は喪の期間が限りがあるので藤衣を脱ぐけれど、古人を偲ぶ涙は限りがないものであったと、「藤衣―涙」の歌語、「限り―はてなき」の対句という伝統的な枠の中での作と言える。

このように伝統的な詠法の歌が多い中、能因が『拾遺集』から次の二首を『玄々集』に撰んだことは注目してよいかと思われる。

都人寝でまつらめや郭公いまぞ山辺を鳴きてすぐなる(玄一五・道綱母)

天の原空さへさえやわたるらんこほりと見ゆる冬の夜の月(玄三六・惠慶法師)

道綱母の歌は郭公の鳴き声を待つ人を詠んだ歌であるが、この歌では「都」と「山辺」という二つの場所が登場し、作者は都の外側に身をおいて郭公の鳴き声を聞いている^九。「すぐなる」

七 『玄々集』の歌番号は「玄十数字」であらわした。

八 『玄々集』は「移ろへば」とするが、『拾遺集』によって改めた。

九 『玄々集』には詞書がないが、『拾遺集』(夏・一〇二)では「寛和二年内裏歌合に」とある

とあるから作者も実際に郭公を目にはしてないのが分かり、「いまぞ」とあるので、その鳴き声は聴覚をとがらせていなければ聞くことのできない、刹那の声だったはずである。つまり、都の外側で都を意識し、郭公の鳴き声はその二つの空間をつなげるものになるのである。『能因集』には、聴覚による歌^{一〇}や都の外に身を置きながら自然を媒介にして都を意識する歌^{一一}が散見するが、この道綱母の歌がそのような歌であるといえる。続いての恵慶法師の歌は夜空に氷と見えるまで冴えわたる冬の月を詠んだ歌で、言葉上の技巧がほとんどなく、眼前の景色をそのまま詠む能因の叙景歌^{一二}と通じるところがあるといえる。道綱母は能因の歌道上の師と言われる藤原長能と兄弟であり、恵慶法師は河原院に集まって文芸活動をしていた、いわゆる「河原院文化圏」に属する歌人であって、能因も先輩歌人を通して河原院に出入りしたようなので^{一三}、このような二首が『玄々集』に採られたのであり、能因の歌風はこのような歌に学ぶところが多かったと思われる。

以上、『拾遺集』と『玄々集』の共通歌を見てきたが、概して伝統的な詠法の歌が多い中、能因の詠法と通じる歌も積極的に選んでいることが確認できる。

第二節 A群歌人の『玄々集』におけるその他の歌（B群）

前述したように、A群は三六首であり、能因がその歌全てを直接『拾遺集』から撰んだとは限らないが、『拾遺集』の撰歌意識に共感したところがあつての撰歌であるといえる。一方、能因はA群歌人の歌を、自分の秀歌観のもとで同数の三六首撰んできて、その内訳は二三頁の【表2】の如くである。定量的には四季部の歌が五首に過ぎず、恋歌が十首、雑歌が八首、哀傷歌が五首と、四季歌より人事歌をもっと積極的に撰ぼうとした態度が窺える。

内容的な面で、四季部の歌の数は少ないが、やはり伝統的な詠法の歌を撰んでいる。

ので、題詠であり、この場合作者は場面の外に存在する。

一〇 「十月ばかりに、山里によるとまりて／神な月ねざめにきけば山里の嵐のこゑは木の葉なりけり」（能因集・三八）など。

一一 「詠月／千鳥鳴く海辺に月をひとり観て都のほかには年の暮れぬる」（能因集・二二六）など。

一二 「夏児屋池亭／わが宿のこずゑの夏になる時は生駒の山ぞ山がくれける」（能因集・八五）など。

一三 「河原院にて、むすめにかはりて／ひとりふす荒れたる宿の床の上にあはれいく夜のねざめしつらん」（能因集・三四）

我が宿の柳のいとほ細けれどくるうぐひすぞたえずもあらなん（玄一四・道綱母）
高砂のをのへにたてる鹿の音にことのほかにも濡るる袖かな（玄三七・恵慶法師）

道綱母詠は柳と鶯を詠み込み、細い柳の枝を糸に喩え、そこに来て鳴く鶯が後を絶たないことを願う心を、糸の縁語である「細い」「絶ゆ」を利用して詠んでいる。秋の景物である鹿は、歌枕では「高砂」、他の景物の組み合わせとしては「萩」と一緒に詠むのが一般的な詠法であるが、恵慶法師の歌はまさにそれに従って、高砂に立って妻を恋う鹿の鳴き声から秋の寂しさを表現している。

人事詠の場合も、

風をいたみいはうつ波のをのれのみくだけて物を思ふころかな（玄三〇・源重之）

服脱ぎける日

藤衣ぬかん涙の川水はきしにもまさる物にぞありける（玄一八・道綱母）

重之の歌は、初句から三句までが四句以下を導き出すための序詞になっている、古典的な方法に基づいているといえる。道綱母の歌は前節で挙げた、喪の期間が終わって喪服を脱ぐ気持ちを詠み、「涙」が「川水」になるといい、服を「着し」ことに「川」の縁語である「岸」を掛けて詠んでいる点、伝統的な範疇に納まる歌である。

以上、能因が撰んだこの群に属する三六首の中では、次の歌語が注目される。

円融院、うせ給ひてのころ、粟田殿にて

この春はいざやま里にすぐしてむ花の都はおるも露けし（玄二五・藤原実方）

ふるさとの花の都はすみわびて八雲たつてふ出雲へぞゆく（玄一〇一・大江正言）

実方の哀傷歌では、円融院が亡くなったために都にいても涙がちになるから山里で過ごそうと歌っている。正言の歌では、都に住むのが厭わしくなったので、出雲へ下ろうと歌っている。この場合、両首とも都を単なる「都」ではなく「花の都」と表現することに共通する。自分が行くところA（山里、出雲）と、それに対応する場所B（花の都）の二元構造になっている点、前述した道綱母詠（玄一五）と通じるところがあり、華やかな都を相対化する態度ということができる^{一四}。

^{一四} 小町谷照彦によれば、「花の都」は三代集にあまり用例がなく、『後拾遺集』に六例見え、都の外側からもしくは外側と関連づけて詠まれる歌語であり、春の花から連想される華やかな雰囲気を表わすという。「和歌的幻像の追求―能因法師論ノート―」『日本文学』第一九巻、日本

もう一つ注目される点は、歌枕の多様化ともいえる、歌枕の増加である。前節での三六首の中、歌枕を詠み入れた歌をあげると、

春日野におほくの年をつみつれど老いせぬものは若菜なりけり(玄一・円融院)
吉野山峰の白雪いつきえてけさは霞のたちかくすらん(玄二九・源重之)
山吹のはなのさかりに井出にきてこのさと人になりぬべきかな(玄三八・惠慶法師)
春立ちて朝の原の雪みればまだふるとしのこちこそすれ(玄八九・平祐拳)
逢坂の関のいはかどふみならし山たちいづるきりはらの駒(玄三九・大式高遠)

のように、大和、山城、近江など、畿内に集中していて、三九の高遠詠の「きりはらの駒」は信濃の歌枕ではあるが、この場合は「逢坂の関」と一緒に詠まれていて、A群の中で単独の用例は見当たらない。これに比べて、B群の三六首中の歌枕をあげると、

前一条院の、京極殿に、行幸せさせたまひけるに
君が代にあぶくま河のそきよみ世々をかさねてすまんとぞ思ふ(玄一〇・藤原道長)
いかでかは思ひありともしらすべき室の八島のけぶりならでは(玄二四・藤原実方)
都にて越路の空をながめつつ雲るとききしほどに来にけり(玄七五・御形直旨)
胸はふじ袖は清見が関なれやけぶりも浪もたたぬ日ぞなき(玄九〇・平祐拳)
道貞、陸奥へ下るを、聞きてをくりける

もろともにたたまし物を陸奥の衣の関をよそに聞くかは(玄一三二・和泉式部)

のように、陸奥、下野、駿河、越前など、多岐にわたっていることが分かる。もちろん、各々の作者が歌枕まで実際に足を運んで詠んだ歌でないことは確かである。僅か御形直旨の歌から旅歌としての実情が感じられるぐらいで、他は全部言葉の技巧上の歌枕であり、観念上の歌枕である。但しこのように各国の歌枕の歌を積極的に選んでいる点には注目すべきである。『玄々集』で歌われた歌枕は『能因集』に見えないものもあるが、その歌枕が属した国には全て足を運んでいる^{一五}。『玄々集』は能因の晩年の撰とされる^{一六}が、人生の長い間、旅を続けた能因であったからこそその撰歌であると言えよう。

文学協会、一九七〇年七月。

^{一五} 川村晃生は『能因集』の配列順に添って甲斐・三河・陸奥・遠江・美濃・伊予への旅のありようを論じている。「二、能因の旅」『撰関期和歌史の研究』第一章第一節、三弥井書店、一九九一年。

^{一六} 安西廸夫、前掲論文。

第三節 能因独自の撰歌による歌人と歌（C群）

A群とB群で考察の対象ではなかった六六人、つまり『拾遺集』との共通歌を持たない六六人は、そのほとんどが『拾遺集』以後の勅撰集の初出歌人^{一七}なので、能因が『玄々集』を撰ぶ際独自の歌人意識と秀歌観で撰んだ歌人であり、その歌数は九五首である。定量的な内訳（二四頁【表3】）をみると、四季歌が三一首、雑歌二二首、恋歌一九首、旅・哀傷歌が各八首、別四首の順であり、四季歌が多く採られてはいるものの、人事詠を積極的に選ぶ姿勢は変わらない。

山桜手ごとに折りてかへるをば春のゆくことや人のみるらん（玄一二〇・源登平）

宿ちかく花橘はほりうへじ昔をこふるつまとなりなき（玄四・花山院）

旅雁

春は行秋はうちくる雁が音は花に紅葉をまさるとや思ふ（玄一四五・小一条院）

もろともに山めぐりする時雨哉ふるにかひなき世とはしらずや（玄一五二・藤原道雅）

わぎもこが袖ふりかけし移り香のけさは身にしむものをこそ思へ（玄八八・源兼澄）

つくしより、かへりたまひて

つれづれとあれたる宿をながむれば月影のみぞ昔なりける（玄五九・藤原伊周）

登平の歌は折った山桜を手持って帰る光景を春の擬人化によって詠んだ歌で、そのような法は『古今集』以来の伝統的な方法である。花山院の歌も「花橘の香は昔を思わせる」という和歌の約束の上で成立している。小一条院の歌は、春と秋の季節の対立を、「花―紅葉」として捉え、季節によって行き来する雁の習性を利用して、道雅の歌は冬の景物である時雨を利用して、雁も時雨も伝統的な素材である。兼澄の歌の「袖の移り香」もまた和歌に物語的世界を展開させる恋歌の代表的な素材であって、伊周の歌の荒れた宿を照らす月も、寂寥した雰囲気をもし出すのによく詠まれるのである。このように歌を撰びつつ、能因は次のような歌をも撰んでいる。

河霧はみぎはをこめてたちにけりいづくなるらん千鳥鳴くなり（玄六七・藤原長能）

^{一七} 実因僧都、藤原長能、承香殿女御、源兼澄、大江嘉言、平公誠、佐忠弁、戒秀の八人は『拾遺集』初出歌人ではあるが、『拾遺集』入集歌が『玄々集』に採られていない。また、藤原有国、藤原宣孝、源時明、橘道時、交野の女、すけきた（大江景理か）、弓削仲宣、藤原広業、水成瀬女の九人は勅撰歌人ではない。

山深みおちてつもれる紅葉ばのかはけるうへに時雨するなり(玄九六・大江嘉言)

遍照寺の、月を見て

すむ人もなき山里の秋の夜は月のひかりもさびしかりけり(玄一六七・藤原範永)

水面に霧が立って視界が完全でない中、どことなく、千鳥の鳴き声が聞こえてくる。それははつきりとした声ではないが、思わずその声をする方へ向かわせる声であるう。長能の歌はそのように解しえると思われる。嘉言の歌も場所こそ違え、似たような状況といえる。深い山の中にいるので、周辺は静かなはずである。もしくは庵にいることも考えられる。紅葉も全部散って、乾いたその上に冬の景物の時雨が降る。「なり」とあるので時雨が紅葉の上に落ちているのを直接は見えていないが、音から判断して分かるのであり、それは静寂な空間の中で耳を澄ましたからこそ得られる発見である。範永の歌は聴覚による歌ではないが、人の気配なく月の光だけが注いでいるさびしい山里の光景を、目に見えるまま技巧無しで詠んでいる。三首とも、聴覚・視覚による歌という差はあるものの、叙景歌として共通するといえる。

この歌群の歌枕の場合は、次のようにもっと豊富に採られている。

関こゆる人にとはばや陸奥の安達のまゆみ紅葉しにきや(玄一四九・藤原頼宗)

思ひいでもなくてや我身やみなましおぼすての山の月見ざりせば(玄一六六・斉慶法師)

式部、道定に忘られて、ほどもなく、一宮に参る、

と聞きて、和泉の守となりしころ

うつろはでしばし信太の杜を見よかへりもぞする葛のうら風(玄一四〇・赤染衛門)

ここにあげた歌以外にも、歌枕、もしくは地名を詠みこんだ歌が九五首中三一首にもものぼり、歌枕に対する能因の並みならぬ関心のほどが窺える。そしてC群では、A、B群より旅歌が多く採られているが、それに伴い、

熊野にまいりて、月をみて

都にてながめし月のもろともに旅の空にもいでにけるかな(一二六、道明阿闍梨)

有馬に、おはしまして

いさやまたつづきもしらぬ高嶺にてまづくる人に宮古をぞとふ(一四七、藤原頼通)

任はてて、京にのぼる時、香椎社にて

五とせはしるしの杉につかへてきことしはむめの花の都へ(四四、藤原有国)

のように、都を意識する歌も多くなっている。道明の歌は旅路での月を見て都を思い出し、頼通は山を越えてくる人に都のことを聞こうと歌っている。有国は五年間の任を終わらせて華やかな都に帰る気持ちが歌語「花の都」に込められている。

最後に、C群にはA、B群に比べて、次のような沈倫の歌ととれる歌が多く見受けられる。

もろこしに、わたるとて

とどまらむとどまらじとも思ほえずいづくもつゐのすみかならねば(四七、三河入道)

宇治にて

あじろには沈むみくづもなかりけりうちわたりに我やすままし(八三、大江以言)

ことありて、近江に、こもり侍りける比

ことしげき世中よりもあしひきの山の上こそ月はきよけれ(一一九、大江公資)

閑院大納言もとへ、まかりける人に、とはせ給はば、かく申せとて

さすらふる身をいづくぞと人とはばはるけき山のかひにとをいへ(四〇、藤原師経)

三河入道の歌は中国に渡ることを前にして、定まった住処もなく漂うことを、以言の歌は自分を「みくづ」と認識し、名前から「憂し」の意を持つ宇治に自分の居場所を求め、公資はせわしい世の中から離れて、山の中で見た月に慰められる。このような沈倫意識を見事に表現しているのが師経の歌の「さすらふる身」という自己認識ではないだろうか。そのような人が行く場所は都からはるか離れた、名前に「生き甲斐」の意を持つ「かひ」なのである。能因もまた『能因集』の中で自分を「さすらふる身」と認識していた^{一八}ので、この歌が『玄々集』に入集されるのは必然であつただろう。

おわりに

以上、『玄々集』所収歌をA、B、C群の三つに分けて、勅撰集の部立に合わせた定量的な分類と内容の分析を試みた。その特徴として、一、自然詠と人事詠とに分けた場合、A・B・C群共に数の上で人事詠を積極的に採ろうとしたことが分かった。二、内容の面で自然詠は伝統的な詠法に基づいた歌が多数ではあるが、技巧を凝らずに目に見えるまま詠む叙景歌をも提示している。三、人事詠もまた、伝統的な詠法の歌が多数を占める中、C群には沈倫の歌が多いことが指摘できる。四、多くの歌枕や地名を詠み入れた歌が存在することは、『能因集』と共通し、それは能因の人生を通して各国を旅した経験の結果である。特に能因の独自の基準が働いたB、C群に見える多様な歌枕は、能因の歌人的な特質をよく表わしているように思われる。五、旅の経験のもう一つの結果として、都を相対化し、自然を媒介にして絶えず都に回帰しようとする歌を選

^{一八} 「浜名のわたりに行くとて／さすらふる身はいづくともなかりけり浜名の橋のわたりへぞ行く」(能因集・一八四)

ぶ態度が窺える、ということが指摘できる。

『玄々集』は勅撰集のような部立を有する歌集ではなく、歌仙意識に基づいて、さらに歌人の間でも歌数の差をつけて歌人別にまとまった形式をとっている歌集なので、部立に基づいた分類が必ずしも『玄々集』に当てはまるとは限らないが、その凡その撰歌の傾向は確認できたと思われる。『玄々集』での特徴は『能因集』と通じるところがあるといえる。『能因集』は「早春庚申夜恋歌十首」という歌群で始まり、幾度の旅を重ねる内に詠まれた歌、その間次々と亡くなっていく友人を偲ぶ歌、そして自分の老いを嘆く歌など、人事詠が大きな部分を占めている。また、歌枕が『能因集』でもつ位相はいうまでもない。両家集は能因の晩年、ほぼ時期を同じくして編まれたものである。『玄々集』の撰歌には能因のそのような経験が働いたと考えられる。そして『玄々集』の詠風においては、『拾遺集』重出歌から伝統的な詠法の歌をとりながら、それに甘んずることなく、新しい歌風を提示しようしたと思われる。機智や複雑な技巧に走ることなく、ひとすじに詠み下す詠法がそれであり、淡々と叙景を詠みながらそのなかで抒情を醸し出す詠法がそれである。また歌枕においても、各国の歌枕詠や現地詠を多くとっているのは、平安時代のほとんどの貴族が一生京から出ることなく観念上・修辞上の歌枕、それも畿内に集中した歌枕を詠むことに対して、一つの詠み方を提示しようとしたと思われる。『玄々集』は、和歌の伝統を認めつつ、新しさを追究した能因の姿勢が窺える歌集であると思われる。続いての第二章では、このような意味を持つ『玄々集』において、最も多くの歌が撰ばれている藤原長能の歌を対象に、検証を進めていきたい。

【表1】

連番	歌人																					計						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21		22	23	24	25	26	27
連番	円融院	具平親王	藤原道長	道綱母	藤原道信	藤原実方	大江為基	源重之	惠慶法師	大式高遠	小大君	藤原公任	選子内親王	藤原為頼	源為憲	御形宣旨	栗田殿上	馬内侍	観教法師	平祐拳	源頼光	大江正言	曾根好忠	大中臣輔親	源道濟	善滋為政	和泉式部	
拾遺集 総歌数	2	4	2	6	2	7	4	13	18	1	3	15	1	4	1	1	1	4	1	2	1	3	9	1	1	1	1	
共通 歌数	1	1	1	3	2	1	1	2	3	1	1	3	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1		
自然詠	春								1										1									
	夏				1			1																				
	秋								1	1							1											
	冬									1																		
人事詠	恋			1													2				1							
	別																					1						
	雑																								1	1		
	哀傷																										1	

【注】『拾遺集』では「の源為憲詠が藤原為頼詠に、「の御形宣旨永が詠人知らず詠、「の栗田殿上詠が栗田殿詠となっている。

【表2】

計	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	連番	
	和泉式部	善滋為政	源道濟	大中臣輔親	曾根好忠	大江正言	源頼光	平祐挙	観教法師	馬内侍	栗田殿上	御形宣旨	源為憲	藤原為頼	選子内親王	藤原公任	小大君	大式高遠	恵慶法師	源重之	大江為基	藤原実方	藤原道信	道綱母	藤原道長	具平親王	円融院	歌人	
36	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	3	1	1	3	2	1	1	2	3	1	1	1	共通 歌数	
36	5	0	4	0	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	1	3	2	0	2	3	1	2	1	4	1	1	1	その他 の歌数	
2			1																				1				春	自然 詠	
																											夏		
2																		1	1								秋		
1	1																										冬		
10	1		1				1								2	1			1	1	1	1						恋	人事 詠
3	1				1														1									別	
1											1																	旅	
4			1		1				1																1			賀	
8	2													1		1		1					2		1			雑	
5			1												1							1		1		1		哀傷	

【表3】

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	連番	
佐忠弁	平公誠	大江嘉言	橘為義	弓削仲信	大江景理	大蔵種材	源兼澄	中将尼	交野の女	承香殿女御	大江以言	四条宮	清照法橋	藤原長能	橘道時	一条院后	藤原伊周	藤原相如	明円聖人	実因僧都	三河入道	源時明	藤原宣孝	藤原有国	藤原師綱	清胤僧都	藤原道綱	一条院	花山院	歌人	
7	6	33	4	0	0	1	12	1	0	3	1	3	1	50	0	8	6	7	1	1	3	0	0	0	1	3	5	8	70	勅撰集 歌数	
3	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	玄々集 歌数	
																													2	春	自然詠
1																				1								1	夏		
		2												5				1								1		1	秋		
1														3																冬	
	1		1		1		1		1					1									1					1	1	恋	人事詠
1																1					1									別	
		1													1															旅	
														1																賀	
		1		1		1		1			1	1					1					1		1	1					雜	
										1		1	1					1													哀傷

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	連番			
出羽弁	中将乳母	中原長国	相模	伊勢大輔	藤原家経	高階俊平	藤原資業	藤原兼房	藤原道雅	藤原定頼	藤原長家	藤原頼宗	藤原頼通	小一条院	上東門院	高松殿上	赤染衛門	増基	道命阿闍梨	水無瀬女	藤原広資	清少納言	藤原頼孝	橘則長	源登平	大江公資	戒秀	藤原為時	安法法師女	歌人			
18	3	4	108	51	17	3	7	17	7	45	43	42	17	4	27	3	90	30	57	0	0	15	1	4	2	7	3	4	2	勅撰集 歌数			
1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	3	1	2	2	6	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	玄々集 歌数			
				1																					1		1			春	自然詠		
																																夏	
						1						1	2	1																		秋	
									1																							冬	
1			1					1								1	1					1		1						1	恋	人事詠	
																						1											別
					1		1			1							1																旅
																			1										1				賀
	1	1					1								2	1	3	2		1							1						雜
											1																			1		哀傷	

計	65	64	63	62	61	連番	
	藤原範永	齊慶法師	藤原義忠	弁女	江侍従	歌人	
	32	2	5	29	13	勅撰集 歌数	
95	1	1	1	1	1	玄々集 歌数	
5						春	自然詠
3						夏	
15	1	1				秋	
8			1			冬	
19				1	1	恋	人事詠
4						別	
8						旅	
2						賀	
23						雜	
8						哀傷	

第二章 『玄々集』 所収長能詠の撰歌意識

はじめに

序論で言及したごとく、能因の逸話を多く伝え、説話での能因像の形成に大きな影響を与えたのは『袋草紙』であるが、能因の師弟関係について、次のような逸話を伝えている。この記述は、歌人が歌道上の師弟関係を結んだ初例として、古来より注目されてきた。

和歌は昔より師なし。而して能因、始めて長能^{伊賀守なり}を師となす。(中略)能因云はく、

「和歌は何様に読むべきや」と。長能云はく「山ふかみ落ちてつもれる紅葉葉のかわける上にしぐれ降るなり。かくの如く読むべし」と云々。これより師となす。仍りて玄々集に多く長能が歌を入るるなり。予これを案ずるに、件の歌は嘉言の歌なり。何ぞ後進の歌をもつて証となせるや。もし口伝の僻事か。賀陽院一宮歌合に、能因の歌に云はく、

はるがすみしがの山ごえせし人にあふ心ちする花ざくらかな

時の人、意を得ざるの由を称すと云々。ある人能因に問ひて云はく、「この御歌、世もつて不審となせり。その趣如何」と。能因答ふることなし。仍りて興違ひして座を起ちて退去せし時、能因窃かに云はく、「故守は、歌をばかやうによめとこそありしか」とつぶやくと云々。故守は伊賀守長能なり。一

この記述は二つの逸話を伝えている。前半は能因が長能に師事したこと、後半は晴れの舞台で師の教えに従って歌を詠むも、座中から共感を得ることが出来なかつたことである。逸話で言及されている賀陽院一宮歌合に参加した時、能因はその晩年であつたと思われる(当時能因は六三歳であつたと推測される)が、ここでも長能に学んだ通りに歌を詠んでいるところを見ると、能因が師の教えを生涯にわたって大切に守っていたことが分かる^二。能因のその態度は『袋草紙』も「仍りて玄々集に多く長能が歌を入るるなり」と指摘するように、『玄々集』の撰歌において

一 『袋草紙』、前掲書、一一七〜一一八頁。

二 松原一義は、『能因集』の歌の配列を検討し、「能因の長能邸初訪問は、寛弘三年初冬(十月頃)のことかと推測されるのである」とする。寛弘三年の能因は十九歳である。「長能・能因の師弟関係―『玄々集』の原資料の考察から―」『平安文学研究』第七〇号、平安文学研究会、一九八三年十二月。なお、この逸話には能因の貫之に対する意識も窺えるが、この点においては、第四章第三節を参照。

も現れている。つまり、長能は当時の歌壇の権威であった藤原公任（六首）をぬいて、一〇首^三で一位である。本章では、『玄々集』に最も多く入集した歌人である長能の歌を考察することによって、能因の撰歌意識の一端を考えてみたい。

第一節 長能詠の他歌集への入集状況及び詠歌時期

歌の表現についての分析に入る前に、『玄々集』より先行する撰集での長能詠と、『玄々集』所収の長能詠との入集関係について見てみよう。最初に、『玄々集』中の長能詠を挙げると次のとおりである。

- a あられふるかたののみ野のかりころもぬれぬやどかす人しなれば（玄六三）
 - b 水上の山の紅葉ばちりにけりしがらみかけよしら河の水（玄六四）
 - c ひぐらしに見れどもあかぬ紅葉はいかなるやまのあらしなるらん（玄六五）
 - d 月も日もかはり行けどもひさにふるみむろのやまのとこ宮所（玄六六）
 - e 河ぎりは汀を籠めてたちにつくりいづくなるらんちどりなくなり（玄六七）
 - f わかくさ^四の妹が手なれの夏^五ころもかさねもあへずあくるしのめ（玄六八）
 - g とりつなげ美豆野の原のはなれごま淀の川ぎりあきたちにけり（玄六九）
 - h みかりする末野にたてるひとつ松とがへるたかの木居にかもせん（玄七〇）
 - i いづくにか駒をとどめんもみぢばのいるなるものはこころなりけり（玄七一）
- 雨の夜萩をおもふ
- j ぬれぬれもあけばまづ見ん宮城野のもとあらの小萩しをれしぬらん（玄七二）

この中でbとg^五の歌は流布本・異本いずれの『長能集』^六にも見られない歌で、dの歌は、

^三 後述するが、万葉歌と思われる歌が一首含まれている。

^四 底本は「わかくは」^七。傍記に従って改めた。

^五 後述するが、異本『長能集』には「みかりするみそのにたてるひとつ松とがへるたかのこゝみにかもせん」という歌があり、能因が改めた可能性も考えられる。

^六 『長能集』には二系統があり、以下、一類本を流布本『長能集』、二類本を異本『長能集』と呼ぶことにする。各系統の性格については、流布本『長能集』は他人が手を加えた痕跡はあるが長能自身によるメモ的な未整理本、異本『長能集』は他人に依って集成・整理された痕跡が濃厚な本であるという。犬養廉「藤原長能とその集―能因研究の一環として―」『中央大学文学部紀要文学科』第三二号、一九七三年三月、七頁。以下、本章における犬養の論はこの論文による。

『万葉集』七卷十三にある「月も日もかはりゆけども久にふる三諸の山のとつ宮ところ（月日撰友久経流三諸之山礪津宮所）」の異伝歌と思われる。一類本『玄々集』の巻末には、各歌人の名前と入集歌数を記録した「玄々集目録」というものがあるが、そこには「長能九首」とある。b・d・g三首とも長能詠と断定出来る確証は得難いが、最初に『玄々集』が編まれた際には、dの歌を除いた九首が長能詠として入集し、原因は不明であるが、書写される過程で、dの歌が混入されたものと考えられる。よって、本稿ではdの歌以外の九首を長能詠として、考察の対象とする^八。

さて、『玄々集』（一〇四六年頃成立）より先行する撰集として、勅撰集は『拾遺集』、私撰集は『拾遺抄』『金玉集』『和漢朗詠集』、歌合や歌学書としては「三十人撰」「三十六人撰」「前十五番歌合」「後十語番歌合」「深窓秘抄』『九品和歌』等が挙げられ、当時の歌壇での位置もあつて、公任関連の撰集類が目立つ。これらの撰集類における長能詠の入集状況を調べると、次のようになる。

拾遺抄…六首。九九六〜七成立。

拾遺集…八首（読人知らず詠一首を含む）。一〇〇五〜七成立。

後十五番歌合…一首。一〇〇八〜九成立。

この中で、『玄々集』所収の長能詠と共通するのは、僅かcの一首のみ、『拾遺集』に初句を「ひねもすに」、読人知らず詠として入集するだけで、その他は『玄々集』以前の撰集類からはみることが出来ない歌である。

『玄々集』に採られた長能詠が、『拾遺抄』『拾遺集』『後十五番歌合』の成立より後に詠まれた可能性もあるので、『長能集』の詞書によって、詠歌時期を確かめてみよう。九首の中、詞書によつて詠時期を推定できるのは次の五首である。

e 「こくらの少将の御もにて、あきのよの雨といふ題をよませたまひしに」

f 「左大弁の、はじめの北方の御もとおはしはじめのころほひ、そこにとのゐての暁に」

g 「いづれの年にかありけむ、花山院九月九日歌合せさせ給はむとてありけるとまりにけれど、歌は人々奉れと仰せられければ、霧」

^七 『万葉集』の引用は、小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『万葉集』新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇六年による。以下、『万葉集』の引用は本書による。

^八 平野由紀子も、「定家本『玄々集』には、「月も日も」の歌は含まれていなかったのではないかと考えられる」と指摘する。「『玄々集』本文考―現存本の限界と失われた系統―」『国語と国文学』第五七卷七号、東京大学国語国文学会、一九八〇年七月、三五頁。

i 「左の大臣の、大井におはしまして、もみぢをたづねたまふ心、よませ給ひしに」
j 「おなじ人の、石山にまうでて、よる河霧といふ題をよませたまひしに」

この内、e・jは『長能集』の連続する二首、一三・一四に該当するので、jの「おなじ人」はeの「こくらの大将」を意味する。犬養廉は、「をくらの少将」^九が異本『長能集』では「こ左近少将」となっていることから、ここで言及されている人物として、その当時左近少将であった藤原義孝（天延二（九七四）年卒）を想定している^{一〇}。

gで言及されている歌合について、萩谷朴は、実現には至らなかったものの、寛弘年間（花山天皇が崩御する寛弘五年（一〇〇八）以前であろう）に予定されていた歌合であったとしている^{一一}。

fの詞書は本によつて「左大弁」と「左大臣」という違いが見られるが、「左大弁」なら源扶義・藤原行成・藤原説孝が、「左大臣」とすると藤原師尹・藤原在衡・源雅信・源重信・藤原道長が該当する^{一二}。仮に道長だとすると、鷹司殿倫子と結婚した永延元年（九八七）頃のことと考えられる。

iを犬養廉は、『権記』の長保元年（九九九）九月十二日条に見える道長の大井川遊覧の時の作かとする^{一三}。

このように見ると、能因は『玄々集』を撰ぶ際、『拾遺抄』の成立より前に読まれたと思われる長能の歌も視野に入れていたと考えられる。同時に、『拾遺集』の読人知らず詠一首（二二五↓c）を撰んではいるものの、能因は原則として、長能詠の中でも撰集類に入集されていない歌を撰ぶ方針であったと思われる。そうすることによって、独自の撰歌眼を前面に出す意図があったと思われる。

最後に詞書についてであるが、『玄々集』の長能詠中詞書を有するのは一首のみである。そも

九 流布本系統の中で群書類従本は「をくら」、神宮文庫本は「こくら」となっている。

一〇 犬養廉、前掲論文、八頁。なお、『長能集注釈』は「醍醐天皇の皇子兼明親王（延喜十四年（九一四）〜永延元年（九八七））が嵯峨の小倉に隠棲しており（寛和二（九八六）年）、その子伊陟は「公卿補任」によると天徳二（九五八、二三歳）年に「左少将」となっていて、伊陟が小倉の少将と呼ばれた可能性はある」とする。平安文学輪読会『長能集注釈』、塙書房、一九八九年。

一一 「寛弘年間花山法皇歌合雑載」、萩谷朴『平安朝歌合大成増補新訂』二、同朋舎出版、一九九五。

一二 『長能集注釈』、前掲書。

一三 犬養廉、前掲論文、一二頁。

そも『玄々集』には詞書に関して厳格な基準がなかったように思われる^{一四}が、長能詠においては、或は歌を詞書から独立させる意図があったとも考えられる^{一五}。

第二節 長能詠の表現の特徴

それでは、長能の歌と思われる九首の表現について、検討してみよう。

a あられふるかたののみ野のかりころもぬれぬやどかす人しなければ(玄六三)

この歌には『伊勢物語』の第八十二段の影響が見られる。

(前略) 親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河原のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり

親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえたまはず。紀の有常、御共に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ^{一六}

長能の a の歌は、歌語の上では有常の歌の下の句「宿かす人もあらじ」の影響を受けているが、惟喬親王が提示した「交野を狩りて、天の河原のほとりにいたる」という題の影響も認めるべきであろう。a の歌は異本『長能集』に収録されているが、そこでの詞書には「中宮御屏風に、かりする所にあきあられふる」とあるのみで、「交野」という地名は提示されていないからである。a と同時に詠まれたと言われる源道済の「ぬれぬれもなほかりゆかむはしたかのうはばのゆきをうちはらひつつ」にも「交野」の地名は詠まれていない。つまり、長能は有常の歌の表現を踏まえつつ、「交野」という地名をも入れることによって、自詠の背景に『伊勢物語』を色濃く投影

^{一四} 例えば、入集歌数二位の道綱母の歌七首中、詞書を有するのは四首、三位の公任の六首中詞書を有するのは五首である。

^{一五} そのような試みの好例として、『古今集』の撰者の一人である貫之が『新撰和歌』を撰ぶ際、『古今集』から歌を多く採りながら、全ての詞書を省略したことが挙げられる。

^{一六} 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校註・訳『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年、一八五頁。以下、『伊勢物語』の引用は本書による。

させているといえる。この「交野」という地名は長能が活動した時代より前に成立した『伊勢物語』の影響を表していると同時に、長能詠の新しさを表現する歌語でもある。歌語「交野」は、長能以前の勅撰集には『後撰集』にわずか一例があり、勅撰集で用例が増えるのは『金葉集』からである。そして『後撰集』の一例も、

えがたう侍りける女の家のまへよりまかり

けるを見て、いづこへいくぞといひいだし

て侍りければ

藤原ためよ

逢ふ事のかたのへとてぞ我はゆく身をおなじに思ひなしつづ（後撰・恋・九一七）

のように、「交野」に「難い」をかける修辭的用法で使われている。長能はそれを狩で有名な歌枕として詠み、臨場感を出している。諸説話によると、公任は先述した道済の歌をもっと優れた歌として評価したというが、能因はこの歌を長能の歌の先頭歌として位置付けている^{一七}。

b 水上の山の紅葉ばちりにけりしがらみかけよしら河の水（玄六四）

の歌は、第一節で述べたように、現存する『長能集』のいずれからも見出すことが出来ない歌で、具体的な詠歌状況は分からないが、次のような歌の影響を想定することが出来る。

たつた河のほとりにてよめる

春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり（古今・秋下・三〇三）

（題知らず）

紀貫之

涙河おつるみなかみはやければせきぞかねつる袖のしがらみ（拾遺・恋・八七六）

歌語上で、列樹詠とは「かける」「しがらみ」「紅葉」が共通し、秋歌であることも共通する。貫之詠は恋歌である点は違うが、「水上」^{一八}「しがらみ」が共通する。そして、発想の上では次の二首の影響を考えてよいと思われる。

さきのおほきおほいまうちぎみをしらかはの

^{一七} 道済は『玄々集』に五首入集しているが、能因は「ぬれぬれも…」の歌を採っていない。しかし、後述するが、長能の「ぬれぬれも…」の歌（^{一七}）はまた採っているのが注目される。

^{一八} 但し、「水上」は、貫之詠では「源流」の意味、長能詠では「上流」の意味として使われていると思われる。

あたりにおくりける夜よめる

素性法師

血の涙おちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそ有りけれ（古今・哀傷・八三〇）

十一月

水上に嵐吹くらし山川のせにもみぢの早くみゆれば（順集・二二三）

素性法師の歌は哀傷歌ではあるが、「血の涙」と「白河」の色の対比によって、自分の悲しさを強調している。長能詠もまた、「紅葉」と「白河」を同時に詠むことよって、紅葉の色を鮮明に表現しようとしたと思われる。また、順の歌は、今眼前に見える紅葉から、上流に嵐が吹いたかと推定するが、長能はそれを上句で「ちりにけり」と気付き、その美しい紅葉が流れてしまわないように、「しがらみ」をかけるよう「白河」に呼び掛けたところに一首の狙いがあったと思われる。

○ ひぐらしに見れどもあかぬ紅葉はいかなるやまのあらしなるらん（玄六五）^{一九}

歌語「あらし」は、次の歌に見られるように、紅葉を散らすものとして認識されていた。

（題知らず）

よみ人知らず

葦引の山のみぢばちりにけり嵐のさきに見てましものを（後撰・秋下・四一一）

そして、この『後撰集』の四一一番歌のように、紅葉は嵐が散らす前に見るべきものであって、まだ散っていない間であっても、いつ散ってしまうかと心配させる存在である。

よるのあらし

もみぢゆへみやまほとりにやどとりてよるのあらしにしづころなし（恵慶集・一一〇）
ちりまがふあらしの山のみぢゆえこころつくさぬときのなきかな（小大君集・一五八）

それを、長能の○の歌は逆手に取って、散っている「もみぢ」を「あらし」と把握する。つまり、もともとは色があるはずもなく、普段は美しい紅葉を散らす否定的なイメージの嵐から、色を見つけ出し、実態化しようとするのである。このような詠み方は季節こそ違いますが、貫之の拾遺集の歌、「桜散る木の下風はさむからでそらにしられぬ雪ぞふりける」と発想の面で通じる部分

^{一九} また流布本『長能集』には、「ひぐらしにみれどもあかず女郎花のべにやこよひたびねしなまし」（六七）と、第三句までが同じ歌もある。この歌は、「嵯峨のにせんざいほりにまかりて」として、『拾遺集』に入集する。

があると思われる。

e 河ぎりは汀を籠めてたちにけりいづくなるらんちどりなくなり (玄六七)

この歌の基底にあるのは、

(秋)

(忠岑)

千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく (古今・賀・三六一)

である。『古今集』の歌は紅葉で山の色が濃くなっていくことから、佐保川の河霧が「たちぬらし」と推定するが、eはもうすでに周り一面に河霧が立ちこめている。そのため、どこからか知らないが、千鳥の鳴く声が聞えてきて、どことなく寂しい気持ちを催させる。これには、

題知らず

紀貫之

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり (拾遺・冬・二二四)

題知らず

紀友則

ゆふさればさほのかはらの河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり (拾遺・冬・二三八)

という二首の影響も想定してよいかと思われる。忠岑・貫之・友則と、『古今集』の撰者たちの歌を踏まえながら、第三(たちにけり↓事実)・四(なるらん↓自問)・五句(なくなり↓感覚)切れという独特な構造をとったところに特色を認められる歌である。

f わかくさの妹が手なれの夏ごろもかさねもあへずあくるしのため (玄六八)

歌語「わかくさ」は『万葉集』に多くの用例があるが、勅撰集で枕詞として使われた例に限定すると、次の『古今集』の一首のみである。

(題知らず)

よみ人知らず

かすがのはけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり (古今・春上・一七)

しかし、この場合は「わかくさの妻」とかかるのであって、長能詠のように「妹」にかかる例は、『拾遺集』の異本歌に一例あるに過ぎない。

わかくさのいものりたりわれものりふねかたぶくなふなかぜふくな

(拾遺・異本歌・一三五八)

つまり、「わかくさ」という枕詞は長能の活動した時代にはすでに古い歌語として認識されていたと思われる。「妹」もまた、「わかくさ」よりは用例が多い^{二〇}ものの、その用例が急増した『拾遺集』においても、そのほとんどが万葉時代の歌人の歌か、読人知らずの歌で、古い歌語であったようである^三。それでは、長能は何故、「わかくさ」を「妹」にかかると枕詞として詠んだのだろうか。そこには、a詠のように、『伊勢物語』の影響を考えてよいと思われる。『伊勢物語』の第四九段には、

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ

と聞こえけり。返し、

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな^{三三}

という話がある。ここでは「わかくさの妹」とは詠んでいないが、男が、妹の比喻として「若草」と詠んでいるのは参考になる。

そして第五句は、

(寛平御時きさいの宮の歌合の歌) 紀貫之

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのめ(古今・夏・一五六)

の影響を受けたものである。貫之詠を踏まえて「夏の夜は短い」という通念を、「夏ごろもかさねもあへず」と、共寝が出来ないほどだと表現している。そこには、ただ短いだけでなく、後朝を惜しむ気持も表現されている。また、「夏衣」は「うすい」ものとして詠まれるのが普通であるが、ここでは「短い夏の夜」を表す素材として詠まれているのも特色である。

g とりつなげ美豆野の原のはなれごま淀の川ぎりあきたちにけり(玄六九)

『後拾遺集』の相模の次の歌は、「美豆の御牧」を詠んだ最も有名な歌である。

二〇 ひめまつるの会編『八代集総索引』(大学堂書店、一九八六年)によると、『古今集』に三例、『後撰集』に二例、『拾遺集』に二二例ある。

二一 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年、「妹」の項。

三三 『伊勢物語』、前掲書、一五五〜一五六頁。

宇治前太政大臣家にて卅講ののち、うたあはせし

はべりけるにさみだれをよめる

相模

さみだれは美豆の御牧のまこも草刈り干すひまもあらじとぞ思ふ（後拾遺・夏・二〇六）

『袋草紙』は、歌合でこの歌が披露された時、座中がどよめくほどであったと伝えている^{三三}。この歌以前の勅撰集での「美豆」の用例は、『後撰集』の次の二首のみである。

人のもとにつかはしける

よみ人しらず

逢ふ事をよどに有りてふみづのもりつらしと君を見つるころかな

返し

みづのもりもるこのごろのながめには怨みもあへずよどの河浪

（後撰・恋六・九九四、九九五）

しかしこの場合は、「みづ」を「見つ」にかけたり（九九四）、「みづのもり」↓「漏る」（九九五）のように、修辞上の用法として詠まれている。私家集や私撰集まで範囲を広げると、

都までなつけてひくはをがさはらみづのみまきの駒にやあるらん（六帖・一七七）

みづのみまき

まこも刈る美豆の御牧の駒の足のはやくたのしき世をも見るかな（兼盛集・六一）

を見ることが出来るが、早い時期から「美豆」は「みづのみまき」の形として、「駒」と一緒に詠まれていたことが分かる。長能のgの歌もこの流れに立つものとして、ただ修辞上の用例ではなく、場面描写の場として詠まれたように思われる。

h みかりする末野にたてるひとつ松とがへるたかの木居にかもせん（玄七〇）

この歌は流布本『長能集』には存在しないが、異本『長能集』に、「いづれの中納言にか、御屏風のれうとのたまはせかれて／みかりののみそのにたてるひとつまつとかへるたかのこゐにかもせむ」という、初句・第二句を異にする歌があり、どれが原形に近いのか判断し難いが、もし

^{三三} なお、『玄々集』は相模詠一首を収めるも、この歌を採っていない。

くは『玄々集』を編む際、能因が改めたものとも考えられる^{二四}。歌語「末野」は、地名ではなく、見晴らしのいい野原の意味の普通名詞のようである^{二五}が、だとすると、鷹狩の途中、広々とした野原で鷹が羽を休める場所としての「木居」の意味も強調される。また、歌語「とがへる」は、「鷹の毛が、秋から冬にかけて生え変わる」^{二六}ことで、色としては、

関白前左大臣家に人々経年恋といふ心をよみはべりける

左大臣

われがみはとがへるたかとなりにけりとしはふれどもこゝろはわすれず

(後拾遺・恋一・六六一)

深山の霰をよめる

大藏卿匡房

はしたかのしらふにいろやまがふらんとがへるやまにあられふるらし (金葉・冬・二七六)

のように、「白」を意味する。つまり、野原に立っている一本松の緑と、色変わりする鷹の白のコントラストにも注目した歌であることが分かる。

i いづくにか駒をとどめんもみぢばのいろなるものはこころなりけり(玄七二)

この歌で特徴的な表現は「いろなる」であろう。長能以前の「いろなる」の用例を見ると、

つきかげのおなじいろなるむめのはないるともをりてみつべかりけり(中務集・二三二)

しらののはま、松原に人々遣遙したり

なみたてる松はみどりのいろなるをいかでしらののはまといふらん(能宣集・四六四)

のように、具体的な色彩をさす場合が多い。それを長能は、具体的な色彩である「もみぢのいろ」↓「紅葉が美しく、様々な色を帯びているように」いろなるものはこころであった、と詠んだところに、この歌の狙いがある。色があるはずのない心について詠むに当って、「いろ」を掛

^{二四} 前述したように、異本『長能集』は他撰本と考えられるので、断定は出来ない。ちなみにこの歌は『金葉集』三奏本に、aの歌に続いて、『玄々集』と同じ形で入集されているが、これが勅撰集での「末野」の初出である。

^{二五} 吉原栄徳は、長能より後の例ではあるが、定家の歌や契沖の著作での用例から判断して、「眺めやる遙か向うの野の意の普通名詞と見るのが穏当のようである」とする。『和歌の歌枕・地名大辞典』おうふう、二〇一四年。

^{二六} 『角川古語大辞典』、角川書店、一九九四年。

詞として利用して、紅葉の色に心を奪われ、どこに馬を停めていいか分からないほど、心が移り気なることを、艶なることを詠んだのである。

この歌は『金葉集』三奏本に入集するが、

ひとのいへのみづのほとりにをみなへしの
はべりけるをよみはべりける 堀川右大臣

をみなへしかげをうつせば心なきみづもいろなる物にぞありける（後拾遺・秋上・三二一）

（題知らず） 藤原基俊

宮城野のはぎやをしかのつまならんはなさきしより声の色なる（千載・秋上・二四九）

のような歌の先駆けとなる表現であるということができ、特に藤原頼宗の『後拾遺集』三二一番歌はその影響が顕著であると思われる。

雨の夜萩をおもむ

j ぬれぬれもあけばまづ見ん宮城野のもとあらの小萩しをれしぬらん（玄七二）

この歌の第三・四句は『古今集』の次の歌、

（題知らず）

よみ人知らず

宮木ののもとあらのこはぎつゆをおもみ風をまつごときみをこそまで

（古今・恋四・六九四）

の初・二句をそのまま詠んでいる事は明らかである。この『古今集』の歌以来、「宮城野」は「萩」の名所として、そしてその「萩」は歌の主役であるより、脇役であることが多かった。

露むすぶもとあらの萩もすゑをたをに成りゆく秋もちかづきにけり（海人手古良集・二〇）
風をいたみもとあらのはぎのつゆだにもあはれいかなる人をまつらむ（実方集・二二六）

二首とも、『古今集』の影響を受けていることが分かる。そして、『海人手古良集』での「萩」は主役である「萩」が近づいてきたことを表すための、『実方集』は第五句の「人をまつらむ」を表すための脇役に過ぎないのである。それを長能は、夜の間降った雨のせいで萩が萎れてはいないのか、濡れながらも確かに行かなければならない、というふうに一首の主役としている

ところに狙いがあったと思われる^{二七}。『古今集』に歌語の大きな部分を依りながら、視点を変えた歌であるといえよう。

おわりに

以上、『玄々集』の長能詠を見てきたが、それでは最後に、長能の歌がどのような特徴を持っているかを、能因がどのような歌を『玄々集』に採っているのか考えてみよう。長能の歌風について例えば犬養廉は、「一と筋に詠み下して平明な」「万葉的な表現構造の作品が目立って」いて、「同音の繰り返しによるリズムカルな声調が重要な役割を果たしている」こと、「必ずしも万葉的ではないが、疊語表現は長能の作風の一つの特色」であることを指摘し、「王朝和歌の美意識の枠から必ずしも逸脱するものではないが、縁語、懸詞に縫った複雑な技巧歌は極めて少ない」^{二八}と評する。

また、金子英世は、長能が「和歌を学ぶ初期の段階で、好忠の『毎月抄』に出会い、その影響を強く受けたものと考えられ」、長能の歌から見られる古風な表現や独特な表現に「好忠やその周辺の新しい和歌表現や手法を、積極的に学び、獲得しようとしていた長能の姿勢が指摘される」とした。^{二九}

そして西村加代子は、「長能は用語や措辞において比較的自由な工夫を試みている様子がかがわれ」「当時歌語としてはあまり用いられない語や、変った表現が長能集に少なからずあ」るが、同時に「花山院に仕えた宮廷歌人として当然のことながら、保守的な傾向も合わせもつている」と指摘する^{三〇}。

どの歌人であっても、一貫して保守的であったり、革新的な面だけを持っているわけではない。保守的な歌風に徹していても、その質は別として、そこに自分の個性を出そうとする試みがあるはずであり、いくら革新的な詠みぶりの歌人であっても、それが和歌の伝統からあまりに逸脱しない」と指摘する^{三〇}。

^{二七} 長能には、「萩／宮ぎののつまよぶしかぞさけぶなるもとあらの萩のつゆやさむけき」(一九二)という屏風歌があるが、この歌においての「もとあらの萩」は、詞書に反して歌の主役となっていない感が否めない。

^{二八} 犬養廉、前掲論文、一三〇～一三五頁。

^{二九} 「藤原長能の和歌について―好忠受容を中心に―」『和歌文学研究』第七四号、和歌文学研究会、一九九七年七月。なお、徳植俊之によって、この金子の論に対する反論がだされている。

「藤原長能の和歌―その歌風形成と特質について―」『国語と国文学』第八七巻一〇号、二〇一〇年十月。

^{三〇} 「藤原長能の歌覚え書き」『国文学研究ノート』第四号、一九七四年七月、四〇～四四頁。

てしまうと、作品として、歌人として認められないのが当然のことである。長能もまた、その両面を合せ持っている歌人であって、『拾遺集』以下勅撰集に五〇首以上入集したことは、もちろん各撰集類にどのような傾向の歌が採られているかの検証が必要となるが、保守的でありながら新しい表現を求めた姿勢が認められた結果だといえるだろう。

それでは能因は『玄々集』に、長能詠のどのような部分を評価し、撰んでいるのか。第二節で長能詠の表現を考察したように、『玄々集』の長能詠からは、耳馴れない新奇な造語などは見ることができない。わずかにhの歌で詠まれた「末野」がそれに当り、これも能因の改変である可能性は前述した通りである。それ以外の歌語や表現については概ね伝統的な和歌の表現の範疇にある歌が採られているといえよう。むしろ古い歌語を詠んで『万葉集』の影響を感じさせる歌（f）や、背景に『伊勢物語』を響かせた歌（a・f）、『古今集』の表現をそのままとりしているか、もしくは『古今集』の撰者たちの表現を大きな拠り所としている歌（b・e・j）などが入集し、能因は長能の保守的な面を尊重しているかのように見える。しかし、詠法においては、修辭的な表現に過ぎなかった歌枕を実際の地名として用いて臨場感を出したり（a）、色の鮮やかなコントラストを詠んだり（b・h）、逆に色のないものから色を見つけ出す（c・i）など、伝統的な素材を、視点を変えて新しく詠む歌が採られていることが認められる。特に「河ぎりは汀を籠めてたちにはけりいづくなるらんちどりなくなり」（e）などは、上の句で視覚表現、下の句で聴覚表現を詠みながら、どことなく寂しい秋の情景を頭の中に描かせる、犬養廉の指摘するところの「一と筋に詠み下して平明な」歌であるように思われる。能因は、『玄々集』に長能の歌を撰ぶ際、敢えて『玄々集』より先に成立した撰集類に採られていない歌を対象に、和歌の伝統の中での歌語や表現を踏まえながら、新しい視点を提示する歌を採る事によって、師の歌の優れている点を訴えると同時に、既存とは違う独自の撰歌眼を見せる意図があったと思われる。

続く第三章では、『玄々集』所収の藤原公任詠を考察することによって、長能詠の撰歌過程においてみられた能因の撰歌意識が公任詠においても働いていたかを考えていきたい。

第三章 藤原公任に対する認識

はじめに

能因が活動した時代に、歌人の中で特に重要な位置を占めているのは言うまでもなく藤原公任であろう。藤原頼忠の長男として康保三（九六六）年に生まれ、長久二年（一〇四一）に没するまで、藤原道長を頂点とする撰関期の歌壇の権威であった。著書とされる『拾遺抄』は後に増補され『拾遺集』に発展し、その他の私撰集として『和漢朗詠集』『前十五番歌合』『三十六人撰』『金玉集』『深窓秘抄』等がある。歌学書としては『新撰髓脳』『和歌九品』があり、有識故実にも長け、『北山抄』も著するなど、管絃の才能をも含めて「三舟の才」とまで言われた。

『能因集』では公任への贈歌と思われる歌がみえ、『玄々集』にも「四条大納言」として公任詠が入集されている。そして『俊頼髓脳』や『袋草紙』以下の歌学書からは能因と公任の関連説話もみえることから、二人の接点は少なからずあったと思われる。この章では、能因と公任が互いをどのように認識していたか、そして能因は『玄々集』に公任のどのような歌を撰んでいるかを確認することで、能因がどのような歌風を重視していたか確かめていく。

第一節 能因と公任の関連説話

『袋草紙』は、多くの説話を挙げながら著者の各撰集類や歌に対する疑問を提示し考証を試みる。清輔が挙げている説話の全てがそのまま真実とすることは出来ないし、著者の意図をも考慮しなければならぬが、ある程度の見方を示唆してくれるのは事実である。そのような説話の所々で能因と公任の名前をみる事が出来る。各々多くの説話を『袋草紙』に残している能因と公任であるが、次の逸話は唯一、能因と公任が同時に言及された説話として注目される。

長元歌合の時、四条大納言入道長谷に居住す。左方の人々行き向ひて歌を撰ばしむ。能因の郭公の歌に云はく、

ほととぎすき鳴かぬよひのしるからば寝る夜もひと夜あらましもを

入道云はく、「歌合の歌には似ず」と云々。仍りてこれを入れず。予これを案ずるに、「夜居」と「夜」となほ快からざるの故か。また月の歌に云はく、

月かげのさらにひるともみゆるかな朝日の山をいでやしぬらん

この歌入るべしと云々。而るに能因の歌と聞ける後に云はく、「更に」の字別様なり。入

るべからず」と云々。歌の事は古へも今も人によるか。一

長元歌合とは、長元八（一〇三五）年に関白藤原頼通邸で行われた三十講歌合のことである。能因にとつては、はじめて中央歌壇の歌合に出席した、大きな意味を持つ歌合であった^三が、「ほととぎす」の歌も「月かげの」の歌も歌合には選ばれていない^三。「月かげ」の歌に対して公任は、最初歌合の歌として相応しいと判断するも、作者が能因であることを知って「更に」という表現がよくないという理由で判断を覆した。「ほととぎす」の歌に対しては、公任が思う歌合の歌として適切ではない理由が別に語られていないが、清輔は「夜居」と「夜」となほ快からざるの故か」と推測する。公任の歌学書『新撰髓脳』やそこでの公任の主張については後に述べることにするが、清輔のこの推測はおそらく『新撰髓脳』の歌病^四に基づいたもので、根拠のある推測である。しかし、「月かげの」歌に対しては、「歌の事は古へも今も人によるか」と、清輔は公任の判断に疑問を呈する。公任のこの判断が、本当の理由はどうであれ、「更に」という歌語がよくないとしたことは、歌語を問題にしたことになる。

但し、「更に」という表現がよくない、という公任の発言をそのまま受け入れるには、どうも腑に落ちない点がある。何故かという『古今集』以来、「更に」または「今更に」の形での歌語は枚挙に暇がないほど用例の多い歌語だからである。例えば、『古今集』には「更に」という歌語が詠まれた歌が九首あり、『後撰集』に一首、『拾遺集』に七首、公任によって選ばれたとされる『拾遺抄』にも一首の用例を見ることが出来る。このような点から考えて、単に公任が「更に」という歌語だけを問題にしたとは考えられない節がある。やはりここでは、歌の良し悪しも問題ではあるが、公任が能因という歌人をさほど高く評価しなかったことを読み取るべきであろう。

そのような公任の態度は、第二章で取り上げた、能因の師であった長能に対してもあまり変わらなかったようである。

一 『袋草紙』、前掲書、一九八頁。

二 『能因集』の上中下の三巻の巻頭には、人生において転機となった時期の歌を配置している。下巻にこの歌合での歌が並べられているのは、この歌合に参加したことが能因にとってどれほど大きな意味を持っていたかを物語る。

三 この歌合の判者は大中臣親輔がつとめた。

四 『新撰髓脳』には「ことをあまたある中に、むねと去るべきことは、二所に同じ事のあるなり。但し詞同じけれども、心異なるは去るべからず。…詞異なるれども心同じきをばなほ去るべし」とある。引用は久松潜一・西尾實校注『歌論集・能楽論集』日本古典文学大系、岩波書店、一九七一年による。

昔より道を執するは興有る事なり。長能花山院において三月尽の歌を詠みて云はく、

こころうき年にも有るかな廿日あまりここぬかと云ふに春はくれぬる

この歌講ずる時、四条大納言云はく、「春は卅日やはある」と云々。長能この後この事痛みて病に伏す。万死一生の由を聞きて、かの納言、使をもつてこれを訪ふ。返り事に云はく、

「畏まり承り畢んぬ。この病、別の事に非ず。先日春は卅日やはあると仰せ候ひし、心うく思ひ給へてこれを歎く間、不食に成りてすでに今日明日か罷らん」と云々。その後遂にもつて死去す。大納言大いに歎思せらると云々。執する人の事、荒涼に難ずべからざるか。^五

『袋草紙』ではこの逸話以降、歌道に執心した歌人の話がしばらく続くので、この逸話もまた歌に執心する長能の態度がメインテーマであり、冒頭の「昔より道を執するは興有る事なり」という評言も、清輔の関心の在りかをよく表している。

しかし、この逸話の裏から、歌壇の権威として君臨していた公任が、長能を高く評価していないということを見逃してはいけなように思われる。元々長能と公任は、ともに花山院を中心とするグループで活動したが、生涯花山院側に残っていた長能とは違って、公任は次第に藤原道長に近づき、この「こころうき」の歌を詠まれた時期^六には、すでに道長側に立っていたと思われる^七。長能の歌はたださえ春が過ぎ去るのは心惜しいことなのに、今年は例年より三月が少ない年に当たるので、三月二十九日である今日春が終わってしまう、と表現したところに一首の狙いがある。それを公任は、「春は卅日やはある」と、つまり春は三十日だけでなく、三か月だから九十日あるのだと反駁した。もちろん、公任ほどの歌人が、この歌が春を惜しむ歌人の心を詠んだ歌であることを知らないはずがない。逆に、公任の言うとおりに春は三か月もあるなどと歌

^五 『袋草紙』、前掲書、八一頁。

^六 二三月が廿九日でおわるのは、院が帰京してから歿するまでの間に、正歴五・長徳三・同四・長保三・同四・同五・寛弘二の各年であるが、その何れであるかは決し得ない。」、今井源衛『花山院の生涯』、桜楓社、一九七六年、一九二頁。

^七 「当初、公任は、長能たちとともに、花山院歌壇の中心歌人であった。その妹禊子が花山院即位時代の女御であったことにもよろう。だが、花山院は、その退位にあたって、禊子に対しては冷淡であったと思われ、禊子は出家して、姉の遵子（円融院女御）のもとに身を寄せることとなる（『大鏡』頼忠伝参照）。その後、公任は、しだいに花山院から離反し、道長に接近してゆくこととなる。だが、これは、花山院側近の反感を買うことになり、長徳三年（九九七）四月十六日、公任は、斎信とともに道長邸から退出した時、花山院の従者に襲われ、乱暴狼籍を受ける（『小右記』）。この事件により、公任も花山院側近に対して、恨みを抱くこととなったと思われる。」、松原一義「藤原長能と三月尽説話」『国文学攷』、広島大学国語国文学会、第九二号 一九八一年十二月、七頁。

を詠もうとすると、説明っぽくなりかねない。それなのに、あえて理屈をつけて歌を批判したことは、長能に対する公任の認識をよく表している。「執する人の事、荒涼に難ずべからざるか」という清輔の評言からも明らかのように、もちろんこの逸話の焦点は歌道に執心したあまり命を失ってしまう長能に当てられているが、公任の長能に対する理屈っぽい批判を見逃してはいけなように思われる。この逸話もまた、能因の時と同様、公任が歌の良し悪しを判断する際、個人に対する感情に影響される傾向があったことを表わしている。

そして同時に、前述した能因詠が歌合に相応しくないと判断した時と同じく公任が歌を問題にする際、「歌語」または「表現」について指摘していることも確かである。それでは、公任の歌論に照らし合わせて能因詠や長能詠を考えてみよう。

第二節 公任の秀歌意識

公任の歌学書である『新撰髓脳』には、公任の歌に対する考えを述べた部分がある。少々長くなるが、引用すると、以下の通りである。

うたのありさま三十一字、惣而五句あり。上の三句をば本と云ひ、下の二句をば末といふ。一字二字あまりたりとも、うちよむに例にたがはねば癖とせず。凡そ歌は心ふかく姿きよげにて、心におかし所あるを、すぐれたりといふべし。事おほく添へくさりてやと見たるがいとわろきなり。一すぢにすぐよかになむよむべき。心姿相具する事かたくは、まづ心をとるべし。終に心ふかゝらずは、姿をいたはるべし。そのかたちといふはうち聞ききよげにゆへありて、歌ときこえ、もしはめづらしく添へなどしたるなり。ともに得ずなりなば、いにしへの人おほく本に歌まくらを置きて、末に思ふ心をあらはす。さるをなむ、中比よりはさしもあらねど、始めにおもふ事を言ひあらはしたる、わろきことになんする。貫之、躬恒は中比の上手なり。今の人のこのむ、これがさまなるべし。

(中略)

凡そこはくいやくしく、あまりをいらかなることばなどを、よくはからひしりて、すぐれたることあるにあらずは詠むべからず。「かも」「らし」などの古詞などは別して、つねに詠むまじ。ふるく人の詠めることばをふしにしたるわろし。一ふしにてもめづらしきことばを、詠みいでんとおもふべし。

古歌を本文にして詠める事あり。それはいふべからず。すべて我はおぼえたりとおもひたれども、人も心得がたき事はかひなくなんある。むかしの様をこのみて、今の人にことにこのみ詠む、われ一人よしとおもふらめど、なべてさしもおぼえねば、あぢきなくなんあるべき。

(以下略) 八

前半では良き歌としての条件を提示し、後半では自分より前の時代の人の歌を利用する際の注意点が語られている。能因の「月かげの」の歌と、長能の「こころうき」の歌を公任の歌論に照らし合わせて考えると、「上の三句をば本と云ひ、下の二句をば末とい」い、「いにしへの人おほく本に歌まくらを置きて、末に思ふ心をあらはす。さるをなむ、中比よりはさしもあらねど、始めにおもふ事を言ひあらはしたる、わるきことになんする」という部分は判断の根拠を提供してくれるように思われる。公任は心と詞と姿を相具することをいい歌の条件とするが、それが出来ない場合、古き時代の人たちは「本に歌まくらを置きて、末に思ふ心をあらは」したとする。「始めにおもふ事を言ひあらはしたる、わるきこと」とまで言い切るのである。

さて、能因の「月かげの」詠は三句切れ・長能の「こころうき」詠は二句切れとなっていて、ともに上句に感情や判断をあらわにし、下句でその理由・根拠を提示するといった点で共通する。下の句の理由や根拠も、例えば「月かげ」↓「ひる（明るい）」↓「朝日の山」といったふうに、機知を働かせてはいるが、「心ふか」い歌とは言いがたい。もちろん、二句切れや三句切れの歌全てが批判の対象になるとは言いがたいが、能因や長能のこのような上の句から直接感情を露わにする詠み方は、「始めにおもふ事を言ひあらはしたる、わるきことになんする」とする公任の歌論の立場からすると、真つ向から対立する歌であり、「我はおぼえたりとおもひたれども、人も心得がたき事はかひなくなんある」ことなのである。

それでは、能因や長能の場合とは違って、公任から歌を称賛された例を『袋草紙』から見てみよう。

範永朝臣若き時、遍照寺において月を詠みて云はく、

すむ人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり

時に四条大納言、出家して北山の長谷に住めり。定頼卿この和歌等をもつて送らる。この大納言、この歌深く感歎して、この歌の表に書きて、「範永とは誰人ぞや。和歌その躰を得たり」と。範永この事を聞きて感に堪へず、定頼卿の亭に向ひ、かの愚草を取りて、錦の袋に納めて重宝となすと云々。^九

藤原範永は和歌六人党の筆頭歌人で、能因には後輩格にあたる人物である。その範永の「すむ人も」の歌が公任から「範永とは誰人ぞや。和歌その躰を得たり」と称賛され、その評が書かれた紙を錦の袋に入れ大切にしたいというこの話は、公任の権威をよくあらわすと同時に、『新撰髓

八 『新撰髓脳』、前掲書、二六〇二九頁。

九 『袋草紙』、前掲書、八四頁。

『脳』の歌論と照らし合わせた時、いくつか示唆するところがあるように思われる。

範永の歌は、ただでさえ寂しさを感じさせる秋を詠むにあたって、舞台を人が住まない山里に設定することによって、山里だけでなく月の光までもが寂しさを増幅させる。それといった技巧はないが、読んだ人の心の中に寂寥とした秋の夜の風景を思い出させる、まさに「事おほく添へくさりてやと見たるがいとわるきなり。一すぢにすくよかになむよむべき」という条件にかなった歌であるといえる。このように、公任に高く評価された範永の歌は、『後拾遺集』の秋上部に「広沢の月を見てよめる」という詞書で入集した。

また、公任の歌人意識や秀歌意識を考える上で忘れてはならない歌人として、『古今集』の撰者の一人、紀貫之をあげられる。『袋草紙』は、公任と具平親王の間で行われた柿本人麿―紀貫之の優劣論争を次のように伝えている。

朗詠の江注に云はく、四条大納言、六条宮に談ぜられて云はく、「貫之は歌仙なり」と。宮云はく、「人丸には及ぶべからず」と。納言曰はく、「然るべからず」と。ここに秀歌十首を書きて、後日に合はせらる。八首は人丸勝ち、一首は貫之勝つ。「この歌持なり」と云々。なつのよのふすかとすれば子規。この事より起りて卅六人撰出来せるか。件の撰不審有り。いはゆる、深養父・元方・千里・定文等、これに入らず。この人々、あに頼基・仲文・元実等の類に劣らんや。一〇。

貫之は歌仙であると主張する公任に対して、具平親王は人麿には及ばないとしたので、それぞれの秀歌を十首ずつ合わせて比較した結果、人麿の圧勝で終り、それが『三十六人撰』に繋がったのだとある。『三十六人撰』はその名前の通り、三十六名の歌人の歌一五〇首を歌人別に歌数の軽重をつけて撰んでいる^二が、最初に人麿と貫之を番えて配置している^三。貫之を優れたとす

一〇 『袋草紙』、前掲書、一一六頁。

二 人麿・貫之・躬恒・伊勢・兼盛・中務の六人は各々十首、他の三十人は各々三首ずつで、特に人麿以下六人を歌人として高く評価していることが分かる。

三 人麿詠十首をまとめて挙げた後に貫之の歌十首を挙げたり、人麿詠と貫之詠を一首ずつ交互に挙げたり、人麿詠を上段、貫之詠を下段に配置するなど、伝本によって形は異なるが、人麿と貫之が三十六人の筆頭に置かれていることには差がない。この点及び『三十六人撰』の成立過程に関しては樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』（ひたく書房、一九八三年）に詳しく考察されている。なお、『三十六人撰』の歌人意識や撰歌意識に関しては阪口和子「三十六人撰における公任の撰歌意識について」『研究紀要』第二〇号、羽衣学園短期大学、一九八三年十月、新井英之「藤原公任『三十六人撰』における結番と撰歌に関する一考察―兼盛・中務の結番

る公任の主張は退けられたが、それでもなお、公任は貫之を重要な歌人として位置づけしていることが分かる。そして、公任が自分の歌論や詠作においても貫之の影響を強く受けていることは先学が指摘している通りである。

例えば、『新撰髓脳』で説かれているように、公任はいい歌の条件として「心」「詞」「姿」を提示するが、この中で「心」「詞」の概念は、

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ
繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。

というあまりにも有名な『古今集』の仮名序を継承していることはいまでもなく、そこに一首の全体の調べとしての「姿」という概念を打ち出して発展させたところに新しさがある^{三〇}。

続いて歌に関していうと、小町谷照彦は公任の歌から「山里」という歌語が頻出することに着眼し、『古今集』では都の貴族の生活圏から離れた寂しい場所としての用例しかないのに対し、後述する「春きてぞ人もとひける山里は花こそやどのあるじなりけれ」という公任の自賛歌は具体的な場所としての「山里」を規定し、そこから積極的に美的意味を提示しようとするこの背景に、貫之の「山里に住むかひあるは梅の花見つゝ鶯聞くにぞありける」（貫之集・一四一）「立ちぬとは春は聞けども山里は待どほにこそ花は咲きけれ」（貫之集・二九七）のような歌の影響を指摘する^{三四}。その他の用例を全部挙げることは出来ないが^{三五}、貫之を『古今集』の筆頭撰者として、尊敬の念を抱くだけでなく、実作にあたって積極的に受容していた様子が窺える。

第三節 『玄々集』所収公任詠と公任の自賛歌

を中心に――』『日本文学研究』第四一号、大東文化大学日本文学会、二〇〇二年二月に詳しい。

三〇 小沢正夫「平安朝歌論の成立と展開――貫之から公任まで――」『国語と国文学』第三九巻四号、東京大学国語国文学会、一九六二年四月。木越隆「藤原公任の歌論――「姿」を中心として――」『峯村文人先生退官記念論集 和歌と中世文学』、東京教育大学中世文学和談会、一九七七年。伊庭京子「貫之から公任への美的転位」『日本文学研究』第三三巻第四号、関西学院大学日本文学会、一九八一年十二月。同「藤原公任の歌論――『和歌九品』を中心に――」『日本文学研究』第三五巻第二号、日本文学会、一九八三年六月など。

三四 「藤原公任の詠歌についての一考察――古今集美学の展開として――」『東京学芸大学紀要』第二部門第二四号、東京学芸大学紀要出版委員会、一九七三年二月。

三五 公任の貫之受容に関するまとまった研究書として、阪口和子『貫之から公任へ――三代集の表現――』、和泉書院、二〇一四年は大変参考になる。

公任がどのような秀歌観を持ち、能因（または能因を含む周りの歌人たち）をどのように認識していたかについて考察してきたが、それでは、能因は公任をどのように認識していたのかについて考えてみる。残念ながら、説話では判断できそうな逸話はないので、『玄々集』所収の公任詠を手がかりに考えることにする。

『玄々集』の公任の歌は以下の六首が入集されている。

屏風

a むらさきの雲とぞ見ゆる藤の花いかなるやどのしるしなるらん（玄五一）

山家

b 春きてぞ人もとひける山ざとは花こそやどのあるじなりけれ（玄五二）

少納言きんまさが、出家して、近江に侍りけるに、

つかはしける

c さぐなみやしがのうらかぜいかばかりこころのうちのすゞしかるらん（玄五三）

閑院大将の、五節の所に、有ける女子に

d あまつ空とよのあかりにみしひとのなをおもかげのしるてこひしき（玄五四）

e ひとたびはおもひしりにし世中をいかにすべきしづのおだまき（玄五五）

父殿、うせ給ひて

f いにしへをこふるこころにくらされておぼろにみゆるあきの夜の月（玄五六）

まずaの「むらさきの」の歌であるが、「紫の雲」は、勅撰集では『拾遺集』を初出とする歌語である。このaの歌が「藤の花宮の内には紫の雲かとのみぞあやまたれける」（雑春・藤原国章・一〇六八）と並んで取られたのがそれである。公任以前の用例としては、「むらさきのくもかけて詠まれるか、「むらさきの雲うちなびく藤の花ちとせの松にかけてこそみれ」（兼盛集・一七六）「むらさきのくものたなびくまつなればみどりのいろもことにみえけり」（実方集・七二）のように、吉兆として長寿の象徴である松と一緒に詠まれた。そして歌語「しるし」も、『古今集』の「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（雑下・読人知らず・九八二）以降、「ゆきのうちにみゆるときははみわやまのやどのしるしのすぎにぞありける」（躬恒集・一五六）「三輪の山しるしの杉は有ながら教へし人はなくて幾世ぞ」（拾遺・雑上・元輔・四八六）「世中はいかがはせまし茂山の青葉の杉のしるしだになし」（拾遺・雑恋・読人知らず・一二三六）のように、「杉」がその対象となることが多かった。伝統的な素材の組合せから大きくはみ出ることはないが、新しく詠んだ詠法を評価したと思われる。

bの「春来てぞ」の歌は、『金玉集』や『拾遺抄』（雑上・三八八）に取っていることから考えて、公任の自賛歌であり、他撰の『公任集』の巻頭歌であることから、公任の代表作として認

識されていたようである。住んでいる人ではなく、花を会いに来ることを諷刺し、「花こそやどのあるじ」と詠んだところに狙いがある歌である。公任以前に花を宿の主と詠んだ歌としては、「ぬしもなきやどにきぬればをみなへしはなをぞいまはあるじとはおもふ」（躬恒集・二九〇）があるぐらいで、「露だにもなだたるやどのきくならば花のあるじやいくよなるらん」（伊勢集・四七一）「桃の花やどにたてればあるじとてすけるものとや人のみるらん」（嘉言集・一六二）のように、宿の主と花は別の存在として詠まれた。

cの「さざなみや」の歌は、「さざなみ」が地名「志賀」を導き出す枕詞として使われる『万葉集』以来の伝統を引き継ぎつつ、それまでの用例があまりなかった「志賀の浦風」を利用して、志賀の浦風が涼しいように、ついに出家を成し遂げた心はどれほど爽やかなのだろうと、見舞をやったのである。公任以前に「志賀の浦風」を詠んだ歌は勅撰集には全くなく、私家集まで範囲を広げて「あふみのやしがるかぜうらめしくたづねきたれどかひなかりけり」（伊勢集・三九五）のわずか一例のみで、伊勢の歌は同音反復によって三句の「うらめしく」を導くための序詞の中で「うらかぜ」が詠まれたので、公任の歌とはその質を異にすることが分かる。

以上の三首は、『拾遺集』にも入集している歌（この内、『拾遺抄』にも入集しているのはbのみである）で、能因が『玄々集』を編む以前、既に撰集類に入るべき歌として認められたといえる。能因はその価値を認めた上で、さらに次の三首の歌を公任の秀歌として撰んでいる。

dとeの歌は、同時に考えたほうがいいと思われる。他撰である『公任集』ではe（二二二）↓d（五四六）順に離れて収録されているが、dの歌は詞書を「左大將朝光朝臣五節舞姫たてまつりけるをみてつかはしける」、eの歌は「人の御むすめを聞え給ひけるに、内に参るべしと有りければ」となっている。竹鼻績はこの時期の入内した史実を検討し、「五節舞姫」と「人の御むすめ」は藤原朝光女姚子と推定する^{一六}。それを認めるならば、『玄々集』の配列はdの歌は懸想歌、eの歌はそれが終わった後の歌になる。『玄々集』に入集した他の公任の歌には簡略な形ではあるが詞書が付されているのに、eの歌にだけ詞書がないのは、能因が公任と朝光女との関係を知っていて、この二首を一つの関連歌として読ませようとした意図があったとも解せる。

表現として、dは「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」（古今・恋一・読人知らず・四十八）「天つ風雲の通ひ路ふきとちよをとめの姿しばしとどめむ」（古今・雑上・宗貞・八七二）を背景に、技巧を凝らさず素直に詠んでいる。eは歌語「しづのおだまき」が特徴的だが、これも「いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりは有りしものなり」（古今・雑上・読人知らず・八八八）「なげきつつふれども数にあらぬ身はいかがはすべきしづのをだまき」（馬内侍集・二八）など、前例をしっかりと踏まえて詠んでいる。特に馬内侍の歌は、eとの前後関係ははっきりし難いが、四・五句が完全一致することが注目される。

最後にfの歌は、秋の月は鮮明に見えるはずなのに、父の生前を偲ぶ心のために涙でかすんで

見ると詠む。月が涙でかすむ発想は、「さやかにも見るべき月をわれはただ涙にくもる折ぞおほかる」（拾遺・恋三・中務・七八八）や「さやかにも人はみるらんわが目には涙にくもるよひの月影」（和泉式部続集・一三〇）のように主に恋歌で詠まれるが、それを哀傷歌に置き換え、季節を月がくつきりと見える秋にすることで、悲しさを効果的に表現したのである。

以上、『玄々集』に入集した公任詠を考察したが、以下のような共通点があるように思われる。最初に、前述したような、公任から批判された二句切れ・三句切れの歌は全くとっていないことである。わずかbのみが、「さざなみや」と初句切れとはなるが、二句以下の「志賀の浦風」を導く枕詞的な役割として、さほど違和感が感じられない。そして六首とも、技巧がほとんどなく、素直な詠みぶりの歌を撰んでいるといえる。aは、『公任集』等によれば、道長の娘である彰子が入内するにあたって詠んだ歌なので、「藤の花」には道長や彰子を含む藤原家を寿ぐ意味も込められているが、それを除いて考えても一首の屏風歌として成立する歌である。それ以外にはcの「浦風」を利用して清々しい気持ちを詠んだぐらいで、縁語や掛詞などの技巧はないと言ってもよからう。最後に、前の用例をすっかり踏まえた歌を撰んでいることがあげられる。奇抜な歌語や新奇な表現があまりないのは、公任という歌人の特性でもありながら、能因がそのような点で公任やその歌を評価したともいえる^{一七}。ただ能因は、伝統的な表現の枠の中でのみ詠まれた歌を撰んでいるわけではない。例えば、「しるし」になるのが杉ではなく「紫の雲」に見える「藤の花」であり（a）、人ではなく花が「やどのあるじ」であり（b）、普段は美しいもので、賞讃の対象となることが多い「秋の夜の月」が悲しさを増す存在であると詠んだ歌を撰んでいるのは、伝統的な素材を詠みながらも、その中で視点を変えたり、季節を変えることによって新しさが醸し出される歌を能因は評価したことが分かる^{一八}。

そして能因もまた、公任と同じく貫之への傾倒が見える歌人である。その一例を挙げると、能因は『能因集』と『玄々集』に両方とも漢文序を附しているが、これは、当時の歌集の形からして相当特殊なケースであると言わざるを得ない^{一九}が、その両方の漢文序から貫之の影が確認出来る。例えば、「曾禰好忠の三百六十首に云はく、鳴けや鳴けよもぎが柚のきりぎりすすぎゆく秋はげにぞかなしき、長能云はく、「狂惑のやつなり。蓬が柚と云ふ事やはある」と云々。」という『袋草紙』の逸話は、前例のない、耳慣れない奇抜な歌語を歌人が容易に受け入れることが出来ないことをよく表すと同時に、そのような新奇な評言が好忠という歌人の特徴でもあることを語っている。このような点からすると、『玄々集』の公任詠の歌語は伝統的な範疇のものが選ばれている。

一八 このような点は、第二章で考察したように、『玄々集』に長能詠を撰ぶ際にも働いた。

一九 勅撰集の場合でも、『後撰集』と『拾遺集』（『拾遺抄』も含む）には序文がなく、能因以前の私家集や私撰集まで範囲を広げても漢文序はもちろん、仮名序を持つものもあまり見当たらない。

来ることからも、能因が貫之を意識してことが確かめられる¹⁰⁾。

本章で考察した、能因が撰んだ『玄々集』の公任詠からは、貫之の影響がみられる歌はあまり見られない。むしろ、六首中二首（a・b）から凡河内躬恒の影響が認められるが、躬恒は前に挙げた『新撰髓脳』にもみえるように、貫之と並んで「中比の上手」と公任が賞讃した歌人である。能因が意図して躬恒の影響が考えられる公任詠を撰んだと直ちに断定は出来ないが、歌風としては『古今集』の撰者時代の表現を踏まえながら新しさを開拓しようとした公任の歌を評価していたといえる。

おわりに

以上、勅撰集の空白期を生きていた二人の歌人、能因と公任の相互認識について考察した。まず、公任が能因（または、その師である長能）の歌を批判した説話からは、公任は能因に対して、それほど高く評価していなかったことが分かった。重代の歌人として、歌壇の指導者的位置にいた公任にとって、歌道に執心し、「数奇」を詠歌方法としていた能因は、あまり快く見られなかったものと思われる。そして政治的な判断で、花山院側から道長側にスタンスを変えた公任にとっては、理由はともあれ、元々自分が属していた花山院グループの歌人への批判を強める必要があったように思われる。歌の良し悪し以前に人間関係が働いたことは確かである。しかし、原因はそれが全てだったとは言い切れない。説話の能因詠や長能詠は『新撰髓脳』で公任が提示した詠法に適った歌でないと考えられるからである。

一方、能因の公任に対する認識も、歌の表現と人間関係、両方から考えられる。能因は公任を時代の重要な歌人として認識していた。それは『玄々集』に公任の歌を多く採っていることから間違いない。しかし、『拾遺集』の元となった『拾遺抄』を作り、歌壇の一人者であった公任との差はあまりにも大きな隔てがある。『玄々集』の入集歌数において、長能詠を公任詠より多く採っていることは、もちろん歌人としての公任をそのように評価したこともあるが、長能が自分の師であるという人間関係も働いた結果であり、いわば、対抗意識である。この点は、貫之に対する態度においても考えられる。能因が著書に序文をつけていることは、当時の私家集や私撰集の形式から考えて、異様であるといえる。その中でわざと貫之の名を挙げていることは、公任に対する能因の認識にあらわれであると思われる。そして、『玄々集』に入集した公任詠の歌風としては、『古今集』撰者時代の歌を踏まえた歌など、伝統的な枠からあまり出ないで、新しさを追究した歌をとっているといえる。

以上、第一章から第三章まで『玄々集』を中心に、全体的な歌の撰歌傾向と、能因が歌人とし

¹⁰⁾ この点については、第四章第三節を参照。

て活動するに当って大きな影響を及ぼしたと思われる二人の歌人、長能と公任のどのような歌が『玄々集』に選ばれていたかについて考察を行った。その結果、『玄々集』を撰集するにあたり、能因は比較的保守的な立場から撰集を進めたふしが認められると思われる。三代集時代、特に『拾遺集』を中心とする時代の歌人たちの歌が多くとられた影響もあるうが、概して、典拠や用例が確認出来る、和歌の伝統的な表現を踏まえた歌が重視されていると考えられる。しかし、保守的なスタンスに徹することなく、その中で新しい視点がみられる歌や、奇抜な歌語や新奇な表現ではなく既存の歌語を利用した穏やかで新しい表現が詠まれた歌、そして詠みぶりとしては、複雑な技巧無しで詠み下した歌を撰ぼうとしたと思われる。このような歌を撰んで撰集することによって、自分がよしとする詠法を提示しようとしたと考えられる。続いての第四章では、焦点を『能因集』に移して、はたして自分の歌を詠むに当ってはこのような姿勢がどうあらわれているかを考察していきたい。

第四章 『能因集』における作歌方法

はじめに

序論で述べたように、『能因集』は編年体の構成をとっていて、古来、能因の伝記的資料として注目されてきた。同時に、歌集内の離れた箇所には置かれた歌が、互いに呼応する箇所が多く、自分の歌集に一つの文学作品のような世界を作ろうとした意図があったことについても考察が行われた。先学の考察によって、歌集の構成と、能因の生涯や、自分の歌集を通して何を見せようとしたのが明らかになったが、本章ではそのような成果を踏まえつつ、能因が実作においてどのような詠法をとっていたかについて、考察を加えたいと思う。

第一節 三代集の読人知らず詠を踏まえた歌

能因が活動した十一世紀中頃まで成立した勅撰集は『古今集』『後撰集』『拾遺集』で、いわゆる「三代集」である。三代集には数多くの読人知らずの歌が収められ、もちろんそれぞれ勅撰集が編まれた時期とあまり隔たりのない時代の歌だがわざと作者名を隠した歌や、作者名が伝わらない歌もあるが、『万葉集』から『古今集』にいたる古い時期のものも多いとされる。三代集時代のよみ人知らず詠などの影響が想定される『能因集』の歌をみてみよう。

かく言ひわたる人、九月ばかりになくなりけりと

聞いて、あはれ桜を惜しみしものをなど思ひて

桜花ちるを惜しみし言の葉になみだの露の今朝は置くかな（能因集・七〇）

（題知らず）

あはれてふ言の葉ごとに置く露は昔を恋ふる涙なりけり（古今・雑下・九四〇・読人知らず）

『能因集』の中巻はある女との贈答歌群（六六〇七〇）から始まるが、七〇番歌はその女が亡くなった時に能因が詠んだ哀傷歌である。歌語「言の葉」「露」「置く」「涙」が『古今集』の歌と共通し、『古今集』の歌では歌の中にある「あはれ」が、能因詠では詞書にある。『古今集』詠は恋歌として解せないこともないが、下の句の内容と、雑下に配置した撰者の意図を

一 以下、『能因集』の引用は『新編国歌大観』によって引用し、私に漢字や濁点を改めたところがある。傍線は筆者による。

考慮すると、述懐歌と考えた方が適切かと思われる。その歌の歌語を多く取り入れながら、恋歌に変えて詠んだところに能因の狙いがあったと思われる。

津の守保昌の朝臣、六条の家に宮城野の萩をおもひ

やりつつ植ゑたるを見て

宮城野を思ひいでつつうしけるもとあらの小萩花咲きにけり (能因集・一三〇)

(題知らず)

宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風を待つごと君をこそ待て

(古今・恋四・六九四・読人知らず)

こもの花の咲きたるを見て

はなかつみおひたる見ればみちのくの安積の沼の心地こそすれ (能因集・二〇九)

(題知らず)

みちのくの安積の沼の花かつみかつみる人に恋ひやわたらむ

(古今・恋四・六七七・読人知らず)

山寺の春の暮

山里を春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける (能因集・八四)

(題知らず)

山寺の入相の鐘の声ごとにけふもくれぬと聞くぞ悲しき

(拾遺・哀傷・一三二九・読人知らず) 二

詠法がよく似た歌三組である。まず、一三〇番歌は『古今集』六九四番歌の影響下にある。

『古今集』の歌は第一句から第四句までが第五句の「君をこそ待て」を導き出すための比喩の序詞として用いられた、古い形式の歌である。能因詠は、恋歌である古歌で詠まれた「宮城野」の景物「もとあらの小萩」を具現化したところに成立する。『能因集』の中巻には、少なくとも二回の陸奥下向が見られるが、先学によって指摘されてきた^三ように、能因の旅は主に歌枕を訪ねるのが目的であった。『古今集』の歌以来、萩の名所となった宮城野に足を運ぶことは十分考えられる。詞書からして、知人の藤原保昌が自分の館に宮城野を模倣して萩を植えたのであるが、実景を目にする機会があったであろう能因にとって、保昌の館の風景は格別なものがあったと思われる。『古今集』の歌を充分に踏まえながら、叙景歌としたところに能因の詠法

二 『拾遺集』には読人知らず詠となっているが、『玄々集』には御形宣旨の歌として入集。

三 川村晃生「二、能因の旅」『撰関期和歌史の研究』、前掲書など。

が認められる。

続く二〇七番歌と『古今集』六七七番歌も同じ関係であるといえる。『古今集』の歌は第一句から第三句までは第四句の「かつ」を引きだす序詞として詠まれた恋歌で、歌枕「安積の沼」の景物として「花かつみ」が詠まれている。能因詠は詞書から実景を詠んだ歌であることが確かである。「安積の沼」もまた陸奥の歌枕で、右で述べたように、能因はその実景を目にする機会があったはずである。その風景は能因の脳裏に鮮明に焼き付いていたらしく、「はなかつみ」を見て、遠く離れた陸奥の「安積の沼」に思いを馳せる。このように詠むことによって、読者をして「はなかつみ」が咲いている眼前の光景から、「安積の沼」を想像させる狙いがあったと思われる。古歌にあった歌枕とその景物の具現化という方法として一三〇番歌と共通する。

三首目の八四番歌には一三〇番歌や二〇七番歌のような、具体的な歌枕や景物は詠まれている。この能因詠は『拾遺集』の一三二九番歌と歌語「山寺（山里）」、「入相の鐘」が共通し、前述の二組の歌より共通項は少ない。しかし、『拾遺集』の歌が夕暮に聞えて来る山寺の鐘の音を通して少しずつ死に向かっていくさびしさを詠んだ哀傷歌であるのに対して、その空間的背景「山寺（山里）」と聴覚的背景「入相の鐘」を借りながら、「入相の鐘」に合わせて散る「花」を詠むことで、目には見えない音を具現化している。続いて、二首の歌の影響下にある場合である。

甲斐にて、山梨の花を見て

甲斐がねに咲きにけらしな足曳の山なし岡の山なしの花（能因集・四二）

世の中をうしといひてもいづこにか身をばかくさむ山なしの花

（古今和歌六帖・第六・山なし・四二六八）

足ひきの山なし岡にゆく水のたえずぞ君を恋ひわたるべき

（古今和歌六帖・第二・岡・一〇四三）

四二番歌は『古今和歌六帖』の二首の歌からそれぞれ歌語を取り入れていると思われる。四二六八番の「山なしの花」は、歌の内容からして、厭世の気持ちが強く感じられ、「山梨」から「山無し」で、辛い世の中から逃れようとしても、身を隠せる場所がないことを詠んでいる。一〇四三番歌での「山なし岡」は第一句から第三句までが第四句以降を導く序詞の中で詠まれている。「山なしの花」も、「山梨岡」も、この『古今和歌六帖』以外にさほど詠まれる歌語ではないようだが、出家前の能因が甲斐下向の際、山梨の花を目にしてこの二首を拠りどころとしたことは、能因が普段からこのような歌語や歌も熟知していたことを語る。

面影のなほ忘られて見ゆるかなまがきの島とむべもいひけり(能因集・一四五)

(陸奥歌)

我が背子を都にやりて塩竈のまがきの島の松ぞこひしき(古今・東歌・一〇八九)

是貞の親王の家の歌合に

にはかにも風の涼しくなりぬるか秋立つ日とはむべもいひけり

(後撰・秋上・二一七・読人知らず)

「想像奥州十首」(一四〇～一四九)中の一首である。この定数歌は、二度にわたる陸奥下向から戻ってきた能因が、都にいなながら陸奥の歌枕を回想して詠んだ歌である。その十首の中には二回目の陸奥下向のとき、実際現地で詠んだ歌が確認出来る歌枕もあるが、この「まがきの島」での歌はみえない。しかし、能因詠が念頭においたかと思われる『古今集』での東歌に「塩釜のまがきの島」と詠まれているように、「塩釜(の浦)」と「まがきの島」は地域的に離れていないし、陸奥下向の歌の中には「塩釜」での歌がみえるので、「塩釜」に行つた際、「まがきの島」にも寄つたと思われる。『古今集』の東歌から歌枕を受容しつつ、第五句で「むべもいひけり」と納得する対象を第四句において、上の句でその理由を説明する一首の歌の構成は『後撰集』の歌に倣つたものと思われる。ただし、『後撰集』の歌は『古今集』の秋部の巻頭歌と同じく、秋部の巻頭に置かれ、風の変化に立秋を感じて^四「むべもいひけり」と詠み、比較的一首の意味がはっきりしているのに比べ、能因詠は地名「まがき(籬)」より「かき(垣)から垣間見」の連想で「恋人を垣間見したように、「まがきの島」のその面影が今でも忘れられない」という、やや複雑な過程を必要とする。「塩釜」詠のような現地詠ではなく、都で思案して詠んだ歌であるせいかも知れないが、能因の詠法を考える上では参考になる一首である。

末の松山にて

白波の越すかとのみぞ聞えける末の松山松風の声(能因集・一〇八)

(陸奥歌)

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山浪もこえなむ(古今・東歌・一〇九三)

(題知らず)

秋風の吹きしく松は山ながら浪立ちかへる音ぞ聞ゆる(後撰・秋上・二六四・読人知らず)

一〇八番歌も右の一四五番歌のように、『古今集』と『後撰集』両方の影響が想定される。

^四 「秋立つ日よめる／秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(古今・秋上・一六九・藤原敏行朝臣)

「末の松山」は、『古今集』の東歌以来、「波が越える」「越えない」と詠まれた歌枕であるが、一〇八番歌は、そのような伝統に触発された能因が実際現地まで行って詠んだ歌である。『古今集』から歌枕とそれが持つイメージを受容しつつ、『後撰集』二六四番歌の松に吹く風が『古今集』の東歌にも登場する「浪」のような音であるから、それを共通項として、「松風の声」の一言で置換したところに一〇八番歌が成立する。「末の松山松風の声」とリズムカルに詠む方法は、前述した「山なし岡の山なしの花」（能因集・四二）にも通じるところがあった興味深い。新しい歌の素材や題材を詠みつつ、古代歌謡のように「うたわれる」ことを狙ったものと思われる。

第二節 『伊勢物語』の影響が想定される歌

『能因集』からは前述の三代集の読人知らず詠だけでなく、その用例は少ないが、『伊勢物語』の影響を想定出来る歌がみえるのでそれについて考えてみたい。

上巻には友人たちとの行楽の歌や郊外での歌会の歌^五がみえるが、その中に次のような歌がみえる。

住吉にまうでて、かきつく

すみの江の久しき年はしら波の立つを数にて神やかぞへん（能因集・一五）

この歌には、『伊勢物語』の次の段が関係している。

百十七 住吉行幸

むかし、帝、住吉に行幸したまひけり

われ見ても久しくなりぬ住吉のきしの姫松いくよ経ぬらむ

おほん神、げぎようしたまひて、

むつましと君はしら浪みづがきの久しき世よりはひそめてき^六

住吉に行幸した帝が、古来長寿の象徴である松がどれぐらい久しいものかと詠んだところ、

^五 「長楽寺にて、人々故郷の霞の心をよむ中に／渡りつる水の流れをたづぬれば霞める程や都なるらん」（二五、嘉言）、「山たかみ都の春を見わたせばただ一むらの霞なりけり」（二六、正言）、「よそにてぞ霞なたびく故郷の都の春は見るべかりける」（二七、みずから）など。

^六 『伊勢物語』、前掲書、二二一～二二二頁。

住吉大神が現れて、命の限りのある松よりも打ち寄せては帰る白波のように、久しく昔から帝を祝ってきたというのである。能因はこの段を踏まえて、住吉の久しい歴史を、神は海のたつ白波の数で数えているのだろうか、と詠む。歌語上『伊勢物語』のこの段を確かに意識していたと思われ、詞書の「住吉にまうでて、かきつく」とは、この歌を住吉大神に捧げるための参詣であったとも捉えられる。そして、中巻以降の歌枕への実地探訪と、現地で古歌を踏まえて歌を詠むという態度は、このような上巻の比較的早い時期から見られるのである。

『伊勢物語』を踏まえた現地詠をもう一首みてみよう。

しかすがのわたりに宿りて

思ふ人ありとなけれど故郷はしかすがにこそ恋しかりけれ（能因集・九〇）

三河下向の際の歌であるが、難所とされた「しかすがのわたり」を前にすると、「思ふ人」があるというわけでもないが、やはり故郷が恋しくなると素直に詠んだこの歌は、有名な次の段に拠っている。

九 東下り

（前略）なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あり。…その河のほとりにむれあて、…みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、…京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。七

世の中を憂しと感じた昔男が、都にはいられなくなって、東国に下り、武蔵と下総の境に至った。三河と駿河を経てたどり着いたので、都を離れてから相当の月日が過ぎたはずである。そこで見知らぬ鳥の名が「都鳥」であると聞いて、都に残してきた「思ふ人」が思いやられて涙が催されるのである。能因詠は歌の位置からして出家した後の歌なので、俗を捨てた身として昔男の一行のような「思ふ人」があるわけではないが、それでも故郷が恋しくなるのだというのである。

いまの男の、せきもりありけりなどいひたるに、

又かはりて

をばすての山となりにし我なればいまさらしなに関守もなし(能因集・四四)

『能因集』には能因が他人に代わって詠んだ歌が散見されるが、出家した後の中・下巻には都合での代作が目立ち、在俗時代の上巻には女性に代わって詠んだ歌が目立つ。四四番歌もそのよ
うな女性の代作中の一首である。ある男が女性に通わない理由として「せきもりありけり」と言
い訳をしてきた時に代わって詠んだ歌である。「せきもり」という言葉から直ちに思い浮かぶの
は次の段である。

五 関守

むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、かど
よりもえ入らで、わらはべの踏みあげたるついでひぢの崩れより通ひけり。人しげくもあらね
ど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をすゑて守らせけれ
ば、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにもうちも寝ななむ

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。二条の後に忍びて参りけるを、
世の聞えありければ、兄たちの守らせたまひけるとぞ。^八

昔男が五条わたりの女に忍んで通ったところ、屋敷の主が制止するために監視役の番人を出
して守ったので、昔男は歌を詠み、結局主は通うことを許したというのである。能因はこの段
を利用しながら、更科の歌枕である「をばすての山」を詠むことで、『伊勢物語』のように主
が咎めるのでもないのに通わないで、言い訳を並べる男に対して訴えるのである。

最後に、『伊勢物語』と『古今集』の両方を踏まえたと思われる歌がある。

ものなどいふ人のほらからなる人の見ゆるに、
かういひやる

色にこそいづとなけれど紫の一もとゆゑに思ひそめてき(能因集・四〇)

これもまた上巻の恋歌の中の一首であるが、在俗時付き合っていた女の姉妹をみて詠んだ歌で
ある。この歌の背景には次の二首がある。

(題知らず)

紫の一もとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る(古今・雑上・八六七・読人知らず)

むかし、女はらから二人ありけり。一人はいやしき男のまづしき、一人はあてなる男もたりけり。いやしき男もたる、十二月のつごもりに、うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざも習はざりければ、うへのきぬの肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。これをかのあてなる男聞きて、いと心ぐるしかりければ、いと清らなる緑衫のうへのきぬを見いでてやるとて、

むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武蔵野の心なるへし九

歌語上では『古今集』に負うところが多い。ただ一本の紫草が好きな故に、武蔵野に生えている草全てに親しみを感じるという『古今集』の歌は、この歌だけでも恋歌として読めないことはないが、雑上にある以上、表面的な意味と取るべきであるが、この歌が『伊勢物語』の四十一段と結合すると、愛する人のゆかりの人であるために、親しみを感じるという歌になり、能因詠もそのような認識のもとで詠まれている。

以上みてきたように、歌数は少ないものの、『能因集』には『伊勢物語』を踏まえた歌が確認出来る。『相模集』によれば、能因は「歌語り」をよくする人であったようだ^{一〇}。『能因集』の二三八番歌には「京にて、好事七、八人ばかり、月の夜客に会ふといふ題をよむに」という詞書が見えるが、相模は、そのような集まりに列席したとも考えられる^{一一}。その場では、歌を詠む方法などが主に語られたと思われるが、能因はその場の先輩格もしくは指導者格として、詠歌方法の一つとして『伊勢物語』のような歌物語を話題にしていたと思われる。

第三節 貫之詠の継承と変奏

第一節と第二節で考察したように、『能因集』では、詠歌方法として三代集の読人知らず詠・

九 『伊勢物語』、前掲書、一四九〜一五〇頁。

一〇 「津の国にすむこやの入道、歌ものがたりなどおほかたにいふ人なりけり。門の前をわたるとて、いそぐ事ありてえまゐらず、なにごとかといひたれば／なには人急がぬたびのみちならばこやとばかりも言ひはしてまし」（相模集・一八五）

一一 『橋為仲朝臣集』に「夜のあられを多ちうのかみ頼家がもとにて、古曾部入道相模不会／とふ人もなき冬の夜のさよなかにおとする物はあられなりけり」（二六）とあり、普段から歌会に参加していたことがわかる。

『伊勢物語』のような、和歌の伝統の中で形成された作品や歌群などを踏まえた歌があることを確認した。本節では、もう一つのそのような例として、貫之を取り上げて考察を進めたい。貫之を取り上げる理由としては、前述の第一節・第二節で確認した詠歌方法をもっとも主体的に、積極的に利用したのが貫之の歌に依拠して歌を詠んだ例からみられるからであり、『能因集』のみならず第一章から第三章まで取り上げた『玄々集』の序文でも、貫之を意識した記述がみられるからである。本節では、能因の歌人形成にとつて、貫之詠と貫之の存在が持つ意味と、またそれが能因の特徴として指摘されてきた「数奇者」という個性とどのように共存し得たかについて考察する。

まず、第二章で長能との関係について考察した、『袋草紙』の「賀陽院一宮歌合」での逸話も一度確認する。

賀陽院一宮歌合に、能因の歌に云はく、

④はるがすみしがの山ごえせし人にあふ心ちする花ざくらかな^二

時の人、意を得ざるの由を称すと云々。ある人能因に問ひて云はく、「この御歌、世もつて不審となせり。その趣如何」と。能因答ふることなし。仍りて興違ひして座を起ちて退去せし時、能因窃かに云はく、「故守は、歌をばかやうによめとこそありしか」とつぶやくと云々。故守は伊賀守長能なり。^{一三}

「賀陽院一宮歌合」で能因は「はるがすみしがの山ごえせし人にあふ心ちする花ざくらかな」、意味としては、「春霞がかかる、志賀の山越えで逢えた人に会った気持ちになる桜の花だなあ」という歌を詠んだが、当時の人はその意味が分からなかった。能因の歌が次の貫之の歌を踏まえていることは、『後拾遺抄注』や『袖中抄』に早くから指摘されてきた。

しがのやまごえに女のおほくあへりけるにつかはしける つらゆき

梓弓春の山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

(古今・春下・一一五)

しかし、詞書によって「花Ⅱ女性」という比喩が成立し、一首の歌としてまとまる貫之の歌に對して、能因の歌は貫之の歌と「春」「山」「花」という歌語は共通するものの、歌合の歌であるので詞書のような付加情報を持たず、「なぜ桜を見ることが志賀の山越えをする人に会った気持ちになるのか」「春霞は桜の花とどのような関係なのか」のような歌内部の因果関係はもちろ

二 以下、本節では能因の歌にはアルファベットで通し番号を附し、太字処理を施した。

三 『袋草紙』、前掲書、一一七～八頁。

ん、貫之の歌を踏まえたことさえ気づきにくい歌となっている。それに比べて、『後拾遺集』の橘成元の歌、

山路落花をよめる

橘成元

さくらばなみちみえぬまでちりにけりいかはすべきしがのやまこえ

(後拾遺・春下・一三七)

は、上の句が貫之詠の下の句を踏まえながら、実際の落花を詠んだ歌であることがよく分かる。貫之の歌を踏まえたこの能因詠は、歌合では相模の歌と番えられる。

「永承五年六月五日庚申 祐子内親王歌合」^{一四}

六番 桜 左勝

相模

浅緑かすむ山べは白栲のさくらにのみぞ春は見えける

右

能因

春がすみ志賀の山越えせし人にあふちちする花桜かな

能因の歌は相模の「浅緑かすむ山辺は白栲のさくらにのみぞ春は見えける」と番えられ負けの判を得た。相模詠は「浅緑」と「白」の対比によって主題である桜を浮き彫りにする点において能因詠に勝っているといえよう。

この逸話は能因の詠法を考える際、示唆的であると言える。なぜかと言うと、この歌合が行われたのは永承五(一〇五〇)年なので、この年能因は六十三歳、最晩年のことであるからである。歌合に参加するほど、歌人としてある程度位置にあったはずの能因が、この時に限って貫之詠を踏まえた歌を詠んだとは考えにくいからである。それでは、具体的に能因がどのように貫之の歌を受容していたか、『能因集』を通して見ることにする。

『能因集』の歌二五六首の内、貫之の影響が想定される歌は十七首であるが、この数は、『能因集』で他の歌人の影響が想定される歌の数として、群を抜いて多いと言える。まず、「一、歌語や発想上の受容の様相」において、能因が歌語や発想の上でどのように貫之詠を受容したかを考察し、「二、詠法の特徴」で能因がそれを踏まえて、どのように独自の詠法で詠んだのか、について考えていくことにする。

一、歌語や発想上の受容の様相

①一首の二句ほどをほぼそのまま用いる。

^{一四} 『平安朝歌合大成「増補新訂」』、前掲書、一〇〇〇～一〇一三頁。

貫之の歌の一首中二句ほどを、ほぼそのまま用いる場合である。

⑥ はまなのはしをはじめてみて

今日みれば浜名の橋を音にのみ聞きわたりけることぞくやしき(能因集・一五八)

住吉に国の官の臨時祭し侍りける、舞人にて、

かはらけ取りて詠み侍りける

音にのみ聞きわたりつる住吉の松の千とせを今日見つるかな

(拾遺・雑上・四五六／貫之集には無)

例歌⑥「けふみればはまなのはしをゝとにのみきゝわたりけることぞくやしき」は、『拾遺集』の貫之の歌「おとにのみききわたりつる住吉の松のちとせをけふ見つるかな」と「音にのみ聞きわたる」「今日見る」が共通し、貫之の歌を拠り所としていることが分かる。能因は歌語上大きな部分を共通項としながら、貫之の歌を第五句からそのまま逆順に並べた構造をとり、貫之の歌にはなかった「くやし」というもつと直截な感慨を加えて一首を成立させている。

②一首から歌語や発想を利用する。

③ (冬二首)

涙川こひより出でてながるればかくこほる夜もさえぬなりけり(能因集・八)

題知らず

世とともに流れてぞ行く涙川冬もこほらぬ水泡なりけり

(古今・恋二・五七三／貫之集・六一九、第二句「流れてぞ経る」)

例歌③「涙川こひより出でてながるればかくこほる夜もさえぬなりけり」は、貫之の『古今集』の歌「世とともに流れてぞ行く涙川冬もこほらぬ水泡なりけり」と、恋歌であること、冬を背景にする歌であることが共通する。歌語上では「涙川」「流る」「こほる」が共通し、能因詠では「夜」の「よ」、貫之詠では「世間」の「よ」と、意味は違うが「よ」も音の上で共通する。例歌③ほど、共通する歌語の量は多くはないものの、一首の意味をなす上で中心となる歌語は全部共通させながら、「世間とともに涙は絶えず流れるので冬でも凍る事がない」と歌った貫之の発想を借りつつ、「冴ゆ」という歌語を新しく入れることによって「恋」という「火(ひ)」から流れ出る涙なので、その涙は凍てつく冬でも凍るところか、冴える事もない」と歌ったのが能因の③の歌である。この場合、一首から歌語と発想の両方を利用しているといえよう。

③二首から同時に影響が見られる。

次に例歌④は、貫之の歌二首から同時に受容が見られる用例である。

⑩ 土佐の守なりひらの朝臣の下るに、二条の
宮の亮の家にて、水のほとりに別れを惜し
む心、人々よむに

別れゆくかげは汀にうつるともかへらぬ波にならふなよ君（能因集・一七二）
信濃の国に下りける人のもとに、

つかはしける 貫之

月影は飽かず見るとも更級の山の麓に長ぬすな君

（拾遺・別・三一九／貫之集・七六三・詞書「しなのへ行く人におくる」）

法皇西河に御坐しける日、鶴、洲に立、と云

ことを題にてよませ給ける （貫之）

蘆鶴の立てる川辺を吹く風に寄せてかへらぬ波かとぞみる

（古今・雑上・九一九／貫之集に無）

「別れゆくかげは汀にうつるともかへらぬ波にならふなよ君」は、貫之の『拾遺集』の歌「月影は飽かず見るとも更級の山の麓に長ぬすな君」と、上の句で仮定条件を提示し、第五句が「禁止命令+君」で終わるといふ、一首の構造が同じであることは一目瞭然である。同時に、第四句の「かへらぬ波」といふ歌語も注目し値するかと思われる。歌語「波」は「寄せては帰る、帰ってもまた戻って来る」特性が詠まれるのが一般的であるが、能因は「かへらぬ波」と詠んでいる。貫之にも「かへらぬ波」を詠んだ歌が一例あって、『古今集』の歌「あしたづのたてるかはべを吹風よせてかへらぬなみかとぞみる」がそれにあたる。能因以前に「かへらぬ波」の用例はこの貫之の用例のみであるので、貫之の表現の受容を考えてよいかと思われる。このように能因は一首の歌を詠むにあたって、構造や歌語を二首の貫之の歌からそれぞれ受容することも試みたと思われる。

以上、言葉や発想の上で能因が貫之の歌をどのように受容しているかを見てきたが、能因はただ単に貫之の表現をそのまま自分のものにしたわけではなく、そこに自分なりの変化を加えることによって新しさを追求しようとした。次はそれについて見てみよう。

二、詠法の特徴

① 題詠を現地詠に変えて詠む。

最初に、能因の歌からは、貫之の題詠を踏まえて現地詠として詠む用例を見ることが出来る。

② 甲斐にて、山なしの花を見て

甲斐がねに咲きにけらしな足曳の山なし岡の山なしの花（能因集・四二）

哥たてまつれとおほせられしとき詠たてまつれる

桜花咲きにけらしなあしひきの山のかひよりみゆる白雲

(古今・春上・五九／貫之集には無)

例歌⑤「甲斐がねに咲きにけらしな足曳の山なし岡の山なしの花」は、甲斐の国で目にした山梨の花が、偶然にも山梨の岡に咲いているのをリズムカルに詠んだところに眼目が置かれた歌である。この歌は「哥たてまつれとおほせられし時読たてまつれる」という詞書から題詠であることが確認される、貫之の「桜花咲きにけらしなあしひきの山のかひよりみゆる白雲」という歌と「咲きにけらしな足曳の山」が共通し、能因詠では甲斐の国の地名であり、貫之詠では山の合間という意味の違いはあるが、「かひ」も音の上で共通する。構造からも「けらしな」の第二句切れ、第五句が体現止めであることも共通し、詠まれた素材は「桜」と「山なしの花」と違って白い花であることも共通する。歌が詠まれた状況は違っても、このような共通点は貫之の題詠を十分に熟知した上で能因が現地詠を詠んだことを物語ると思われる。

⑥ 山水をむすびてよみ侍りける^{一五}

足引の山した水にかけみればまゆしろたへにわれ老いにけり

(新古今・雑下・一七二〇／能因集・一五四、第五句「なりにけるかな」)

題知らず

つらゆき

人しれずこゆと思ふらしあしひきの山した水にかけは見えつつ

(拾遺・雑上・四九二／貫之集・一七・第二句「こゆとおもひし」)

・詞書「延喜六年、つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、

せじにてこれをたてまつる廿首、しがのやまごえ」)

次の⑥の例歌は「山水をむすびてよみ侍りける」という詞書から、現地詠であることが分かる。「足引の山した水にかけみればまゆしろたへにわれ老いにけり」という歌の内容からも自分の老いへの実感が窺える。この歌は『拾遺集』の貫之歌「人しれずこゆと思ふらしあしひきの山した水にかけは見えつつ」によつていられると思われ。能因詠は貫之詠の第三句以下をそのままの句に持つて来、「影はみえつつ」↓「(その)影をみればまゆしろたへに」と、実感を率直に吐露している。「足引きの山下水」は『古今集』以来「人の目につかない場所を流れる」という意味として用例の多い表現ではあるが、「足引きの山下水に影」まで共通するのは貫之と能因だけである。そして「水に自分の影を映す」という行為を詠む場合「山の井」「苗代水」「泉」など、いわば「溜まっていて流れの少ない」歌語が詠まれるが、そのような面でも、能因の⑥の

^{一五} 『能因集』では詞書を「やまかはにてあふとて」とし、石田吉貞『新古今和歌集全註解』

(有精堂出版、一九六〇)では「手あらふとて」の誤りかとする。

歌から貫之の歌の影響を考えてもよいと思われる。

②貫之詠の時点をずらして詠む。

続いて、貫之詠の時点をずらして詠む方法である。

㊦ (早春庚申夜恋歌十首) 雑二首

たてぬきに思ひ乱れぬしづはたの絶えてわびしき恋にもあるかな (能因集・九)

しづはたにみだれてぞおもふ恋しさをたてぬきにしておれるわが身か (貫之集・六二七)

例歌㉠「たてぬきに思ひ乱れぬしづはたの絶えてわびしき恋にもあるかな」は貫之集の歌「しづはたにみだれてぞおもふ恋しさをたてぬきにしておれるわが身か」と「しづはた」「みだる」「おもふ」「恋」「たてぬき」と多くの歌語を共通とし、「恋による物思いを、縦糸と横糸が交錯するしづはたの模様に喩える」という発想の面でも同じであることが分かる。しかし能因詠には貫之詠と大きな差が見られるが、それは主人公が置かれた状況である。貫之詠の主人公は、「まさに今」恋の物思いにふけているのに対し、能因詠の主人公は歌語「絶えて」から、「もうすでに過ぎ去った恋」の歌として詠んでいる。貫之詠と多くの歌語と発想を共通としつつ、時点の後の方にずらし、絶望的な状況の歌として新しくしたところに能因の狙いがあると思われる。次の例歌㉡も時点をずらした例としてみる事ができる。

㉡ 嘉言あづまへくだるとて、をくりし

長月は旅の空にて暮れぬべしいづこにしぐれあはむとすらん (能因集・一一)

道行く人のしぐれにあへる

みちすらに時雨にあひぬいとどしくほしあへぬ袖のぬれにけるかな (貫之集・一三六)

この例に関してはまず貫之集の例をみることにする。「みちすらに時雨にあひぬいとどしくほしあへぬ袖のぬれにけるかな」は、悲しさで濡れた「道行く人」の袖が「時雨」に逢うことよってさらに濡れてしまう、旅路の気持ちを詠んだ題詠であるが、能因はそれを踏まえて「長月は旅の空にて暮れぬべしいづこにしぐれあはむとすらん」と友人に送った。旅路での寂しい気持ちを詠む発想と、歌語「時雨」「あふ」が共通する。能因はそこに変化を加え、「時雨」を初冬の歌語として捉え、秋である「長月」を一首の中で一緒に詠む。例歌㉠とは反対に貫之詠より時点を前のほうにずらし、「まだ遭っていない時雨と旅路のどの辺りで遭うのだろうか」と思いやっているのである。

③貫之詠の表現を踏まえて新しい視点を提示する。

最後に、貫之詠の表現を踏まえて新しい視点を提示する詠法についてみることにする。

① 齋院にて月のあかき夜、木立にて月のもりたる、
いとをかしうみゆれば

庭の面ぞ夜の綾とはなりにける木の下陰の月のまにまに (能因集・二八)

北山に紅葉折らむとてまかれりける
ときによめる づらゆき

見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

(古今・秋下・二九七／貫之集には無)

(題知らず)

貫之

花の香に衣は深くなりにけり木の下陰の風のまにまに

(新古今・春下・一一一／貫之集には無)

例歌①「庭の面ぞ夜の綾とはなりにける木の下陰の月のまにまに」は、月が明るい夜、木の葉から漏れた月光と、その影が織りなす庭の模様を「夜の綾」と表現している。この歌の背景には二首の貫之詠の影響が想定されるが、一首は『古今集』の歌、「みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるのにしきなりけり」である。「夜の錦」は中国の故事を踏まえたもので、貫之詠以降「甲斐のないもの」として多く詠まれてきた。それを能因は「夜の綾」という独自の表現に変え、積極的に「美しい、価値のあるもの」として詠んでいる。そしてその「綾」を作り出すのは「木の下陰の月のまにまに」であるが、この第四、五句もまた貫之の『新古今集』の歌「花のかにころもはふかくなりにけりこのしたかげの風のまにまに」の第五句の「風」を「月」に変えただけでそのまま用いている。つまり、前に考察したように、貫之の二首に掛けて多くの歌語を受容しながら、「夜の綾」という前例のない歌語を作り出し、新しい視点を提示しようとしたのがこの①の歌である。

① 住吉にまうでゝあるほどに、雪の降るを

水のうへに降り積む雪はしら波のわたつうみ立つ色にぞ有ける (能因集・六一)

(題知らず)

貫之

物ごとによりのみかくす雪なれど水には色ものこらざりけり

(風雅・冬・八五九／貫之集八八・詞書「延喜十七年八月宣旨によりて」)

住吉で雪が降るのを見て詠んだ①の歌「水のうへに降り積む雪はしら波のわたつうみ立つ色にぞ有ける」は、貫之の題詠「物ごとによりのみかくす雪なれど水には色ものこらざりけり」によっていると考えられる。「降る」「雪」「水」「色」が共通し、「水の上に雪が降った後の色に注目した」発想も同じである。しかし、「降っては物ごと隠してしまう雪でも、水の上には色が残らない」と詠む貫之に対し、能因は「海に立つ白波が、水の上に降った雪の色なのだ」と主張

する。「水の上に降り積る雪」は、実際にはありえない。しかし、貫之の歌を踏まえながら新しい発見を提示しようとする能因の姿勢が見られる歌であるといえよう。

以上、『能因法師集』の貫之の影響が想定される用例を見てきたが、従来能因の歌の特徴として指摘されてきた、「歌枕を詠み入れた歌が多いこと」以外に、表現技法や発想の面で貫之の歌をしつかり吸収した上で詠まれた歌が多いことも確認できたかと思われる。このような能因の態度は、歌だけでなく『能因集』と『玄々集』の序文にも一貫して現れる。先ず、『玄々集』の序文から、貫之を意識した表現を確認する。

『玄々集』序

和歌者、本朝之風俗也、源流起_二於神代_一、雅詠盛_二于人世_一、是以延喜御宇之時、紀貫之奉_レ勅撰_二玄之又玄三百六十首_一、其外撰集之家往々有之、今予所_レ撰者、永延以来寛徳以往_二六篇_一什也、不_レ知_二當時之褒貶_一、只憶_二向後之消没_一之故也、上自_二王后_一下至_二士女_一、粗擢_二其間之上科_一聊叙_二此道之中興_一而已

↓『新撰和歌』序_{一七}

故拙_二下始_一メ_レ自_二弘仁_一至_二マテノ于延_一長_二ハ_一詞_一人_一ノ之_レ作_レノ、花_一実相兼タルヲ上_レ而已。
今之所_レハ_レ撰_二玄ノ之又玄ナリ也_一、…惣_二テ三百六十首分テ為_レ四_一軸、…

『玄々集』の序文の傍線部、「是を以て延喜の御時、紀貫之勅を奉り、玄之又玄三百六十首を撰ぶ」という所が、貫之の秀歌撰『新撰和歌』の序文の「今の撰ぶ所は玄之又玄也…すべて三百六十首を分けて四軸と為す」を踏まえていることは、早くから指摘されてきた^{一九}。また、能因が『玄々集』の撰歌の時代的な範囲を『玄々集』序の点線部「永延以来寛徳以往」と規定しているのも、『新撰和歌』序の「弘仁より始め延長に至るまで」に倣っている。貫之が限定した時代とは違うが、時代を問わず優れた歌を集めるのではなく、「特定の時代の秀歌を集める」という姿勢は同じである。能因がそのような姿勢を継承しつつ、時代を自分が生きてきた時代に限定することを序文で表明したことは、貫之がそうであったように、「自分がこの時期の秀歌を提示する」といった意図の表明であり、宣言である。

『能因法師集』序

^{一六} 九八七年～一〇四六年。

^{一七} 『新撰和歌』の引用は、松平文庫影印叢書による。

^{一八} 八一〇年～九三二年。なお、この箇所の訓読点は群書類従によって改めた。

^{一九} 安西迪夫「玄々集の成立」、前掲論文。

予歴^二覽天下之人事^一、有^レ才者必有^二其用^一、有^レ芸者必有^二其利^一、…如^二彼天曆以往^一、廼^三三代之明主、降^レ勅恢^二茲道^一、四人之歌仙、奉^レ詔獻^二家集^一、是以王道股肱之臣、訪^二於衆心^一、採^レ詞、儒林河漢之才、冠^二卷首^一而顯^レ序、…我今当^レ齊^二竹筍之濫吹^一、何得^二嶧峒之知音^一乎、寔是雖^二消没之道^一、宿僻尚未^レ能^レ弃、仍聊揣^二所^レ思之篇^一、以言^二家之端^一、云^レ爾

↓『新撰和歌』序

貫之秩^一罷^レテ歸ル^一日、將^レセシ^二以上^一獻^レセント^一之。…伝ル^レ勅納言亦已薨逝シス。空ク貯^レヘ^二妙^一辞ヲ於箱ノ中^二ニ^一。獨^レ屑^二落^一涙ヲ于襟上^二ニ^一。若^レ貫之逝^レ去^レ、歌モ亦散逸シナン。恨クハ使シメン事ヲ^下絶艷ノ之草ヲ、復混セ^中鄙野ノ之篇^上ニ。故^二聊^一ニ記メ^レ本^一源ヲ以伝来代^二ニ^一云爾。

『能因集』の序文にも、貫之を思わせる部分がある。『能因集』序文の傍線部、「四人の歌仙、詔を奉り家集を献ず」という部分は、『古今集』の四人の撰者を意味し、ここでは、貫之と直接名を挙げてはいないが、「歌仙」と称していることが注目される。能因は家集を残す理由として、『能因集』『玄々集』両方の序の波線部で「消没の道と言へども」「只向後の消没を思ふ故なり」と、歌道の衰えを案ずるがゆえと言うが、それもまた貫之が「もし貫之が逝去せましかば、歌も亦散逸しなん」（『新撰和歌』序の波線部）と『新撰和歌』を残す理由を語る部分と通じるところがあるといえよう。

管見の限り、能因以前に一人の作者が自撰家集と秀歌撰を撰じ、両方に漢文序まで付している歌人は、類を見ることができない。このような形の能因の歌集は、単なる備忘録や手引書のような目的ではなく、誰かに詠ませるための一つの文学作品にしようとした強い目的意識が働いた結果である。能因が生きていた時代まで貫之は、勅撰集の入集歌数において常に一位であったが、能因が序文でそのような貫之を言及することは、自分の作品にある意味「権威」を与えようとしたものと思われる。能因は貫之の詠やその存在を主体的に、かつ積極的に取り入れていたと考えられる。

第一節から本節まで確認したように、能因には前世代を継承し、その流れの中で自分を位置付けようとした意図があったと思われるが、そのような態度は序論でも揚げた、『俊頼髓脳』の話からも確認できる。

讃岐の前司兼房と申しし人の、能因を、車のしりにのせて、ものへまかりけるに、二条と、東の洞院とは、伊勢が家にてありけるに、子日の小松のありけるを、さきを結びて植ゑたりけるが、生ひつきて、まことに大きなる、松にてありしが、木末の見えければ、車のしりより、まどひおりければ、兼房の君、心も得ず、「いかなる事ぞ」と尋ねければ、「この松の木は、高名の、伊勢が結び松には候はずや。それが松をば、いかでか、車にのりながらはすぎ侍らむ」といひて、はるかに歩みのきて、木松の隠るる程になりてこそ、車にはのれりけ

る。

また、右近の大夫国行と申しける歌よみの、陸奥の国に下りけるに、歌よみあつまりて、餞しけるに、「白河の関すぎむ日は、水鬢かき、うちぎぬなど着てすぎよ」と教へければ、「いかなれば、さはすべきぞ。国の人、あつまりて見るか」と問ひければ、「いかでか、能因法師、秋かぜぞ吹く白河の関と、詠みたらむ関にては、けなりとて、鬢ふくだめてはすぎ給はむ」といひければ、人々わらひけりとや。さりとも、「この道を好まむとおぼさば、さやうにしてぞ、歌は詠まれ給はむ」とぞ申しける。されば、この道を好まむ人は、世の末なりとも、かしこまるべきなめり。二〇

車に乗っていた能因が女流歌人伊勢の歌で有名な松があるところを通る際、車から降りたのでその理由を聞くと「この松の木は、高名の、伊勢が結び松には候はずや。それが松をば、いかでか、車にのりながらはすぎ侍らむ」と言い、敬意を表したという逸話である。従来能因の「数奇ぶり」を表わす有名な逸話であるが、「数奇」の歌人として片づけられがちな能因が、今まで見てきたように、歌を詠む際、自分より前世代の貫之の歌を重要視していたことから考えると、歌道に執心したあまり取った行動であると同時に、和歌の伝統を尊重する心が行動として現れたものと考えられる。俊頼の「されば、この道をこのまん物は、世の末なりとも、かしこまるべきなめり」という発言もまた、能因の行動をただ「数奇者」の行動としてみるより、和歌を尊重し、伝統を敬う行動の一つとして伝えていようと思われる。

それでは、何故能因は貫之の歌を積極的に受容し、わざと自分の作品の序文に貫之の名を挙げ、他人に奇異な行動と映ることをしたのだろうか。その一端を考えるに参考になるのが、第三章で取り上げた公任との『袋草紙』での逸話であるので、もう一度みてみよう。

長元歌合の時、四条大納言入道長谷に居住す。左方の人々行き向ひて歌を撰ばしむ。能因の郭公の歌に云はく、

ⓧほととぎすき鳴かぬよひのしるからは寝る夜もひと夜あらましもを

入道云はく、「歌合の歌には似ず」と云々。仍りてこれを入れず。予これを案ずるに、「夜居」と「夜」となほ快からざるの故か。また月の歌に云はく、

ⓧ月かげのさらにひるともみゆるかな朝日の山をいでやしぬらん

この歌入るべしと云々。而るに能因の歌と聞ける後に云はく、「更に」の字別様なり。入るべからず」と云々。歌の事は古へも今も人によるか。二一

二〇 『歌論集』、前掲書、二二六～二二七頁。

二一 『袋草紙』、前掲書、一九八頁。

長元八年頼通歌合に出詠した能因の㊦の歌「ほととぎすき鳴かぬよひのしるからば寝る夜もひと夜あらまほしものを」と㊧の歌「月かげのさらひにとみゆるかな朝日の山をいでやしぬらん」は採用されなかった。特に、㊧の歌は、最初は採用されたものの、後に詠者が能因であることを知った公任によって退けられたとのことである。この逸話は歌壇での能因の位置を端的に表わしているように思われる。何回かの歌合には参加出来たと言え、結局能因の歌壇での位置は出身の家柄をも含めて、けっして高いとは言えなかったようである。能因の貫之を意識した一連の行為には、そのような沈倫意識が働いたと思われる。能因には、貫之の歌に基づいて歌を詠み、貫之という存在を言及することによって、和歌史においてもっと自分を前面に出し、主流に位置付けようとする意図があったと思われる。

おわりに

『玄々集』と『能因集』の序文を振り返ってみよう。能因は私撰集『玄々集』の序文にて、『玄々集』を編む理由として「此道之中興」にあると述べる。つまり能因は、『玄々集』を編纂した時期に「此道」——歌道——が衰退していると認識しているのであり、それをもう一度「中興」させるための役割を担おうとするのである。勅命で当代の優れた歌の集を編纂するという事業は『拾遺集』が成立してから長い間絶えてしまい、私撰集である『玄々集』を編むことは能因の考えた「中興」の一つの方法であったと思われる。同時に能因は、「設雖有伝此道者、以貴耳賤目」（『能因集』序）とも述べていて、目で確かめるしかない古い歌は価値あるものとし、耳で確かめることのできる当代の歌はあまり価値のないものと認識する時勢を嘆く。しかし、歌というものは伝統を無視して独り立ち出来るものではあるまい。そこで能因がとった詠法は古歌を受容しながらそこから新しさを発見・提示しようとするのであった。そのためには、まず、自分より前の世代から積み重ねられてきた伝統を価値のある「古典」として認識することから始まる。考察してきた『能因集』の歌は、そのような試みの産物である。そのような点において、『能因集』は単純に自分の佳詠を集めた歌集ではなく、「歌はこう詠むべき」という能因の姿勢を見せようとしたのであったと思われる。秀歌撰である『玄々集』ももちろんそのような性格を持っているが、他人の歌を撰じたものである以上、詠歌方法をもっと積極的に表わすという点においては、『能因集』がより適したと考えられる。そのような姿勢がもっとも顕著にあらわれるのは、貫之の歌を踏まえて歌を詠む場合であった。能因が貫之詠を計画的に、主体的に、積極的に踏まえて自分の歌を詠んだことは確かである。歌壇での位置が決して高くはなかった能因は、貫之詠だけでなく、自分の撰集の序文において、繰り返して貫之を言及することで、その権威に与えようとする。このような行動の根底に流れるのは能因の沈倫意識であったが、理由は何にしる、その結果として能因がとった行動は、貫之を含む、「古典」への回帰であった。本格的な本歌取りは新古今時代を待たなければならぬが、能因

のこのような詠法は、本歌取りの前段階・前史として注目してよいと思われる。

以上、『玄々集』と『能因集』を中心とする能因の歌風について考察してきたが、続く第五章では、焦点を『能因歌枕』に移し、歌枕を中心に能因の歌風や撰集がどのようにかかわって来るかについて考察していきたい。

第五章 『能因歌枕』の「国々の所々名」考

はじめに

第一章から第四章に掛けて、能因の二つの撰集である『玄々集』と『能因集』について考察したが、本章では歌学書である『能因歌枕』について考察を行う。その構成を簡略に説明すると、「天地、あめつちといふ」から始まる歌語の読み方や意味を説明する部分、続いて「ある人の抄云」と、同じく歌語の読み方や意味説明の部分、「国々の所々名」と国別に歌枕が列挙される部分、最後に「又或人の撰集に」で始まる、また歌語の読み方や意味を説明する部分で構成されている。「能因歌枕」をひもとくと、誰もが気付くことであろうが、『能因歌枕』の構成や内容は、『能因集』や『玄々集』ほど整ったとは到底考えられず、何処までを能因の手になる部分かと決めることすら難しい形となっている。特に「ある人の抄云」と「又或人の撰集に」で始まる部分は、その書き方からして、能因の説とは別の人物の説のように思わせる^二。

しかしその間に位置する「国々の所々名」は、そのような記載が一切なく、只歌枕が国別に羅列されているだけである。前述したように、能因は生涯をかけて旅を続けた歌人であり、それは『能因集』に多く撰入されている歌枕を詠み入れた歌によく表れて——もしくは表して——いて、「国々の所々名」は歌枕という共通項で能因の歌人的特徴と繋がっているように思われる。「国々の所々名」が持つ特殊な内容と形は色々な角度から考察され、田尻嘉信は『能因歌枕』全体の歌語の選別をも含めて考察し、「伝統に即しながらも、進取な選別の意識が作用し」、「国々の所々名」の未整合性や過度的性格を認めながらも「次の段階のための備忘録的な地名集録の性格が濃」く、「国々」を視野として多数の名所の採録は、明らかに能因の「数寄」である」と評する^三。沢西稔子は「既成の名所歌枕だけにとらわれるのではなくその枠を一步押し広げた名所歌枕的発想の言語観にささえられ」ていて、『枕草子』の類聚的章段との共通性を指摘

一 浅田徹は、諸歌学書の逸文を集成・分析し、『能因歌枕』の最初の歌語の読み方や意味を説明する部分の一部が先に成立し、長い期間にかけて他の部分が増補されてきたことを指摘する。

二 「能因歌枕」原撰本と現存本」『国文学研究』第九二号、早稲田大学国文学会、一九八七年六月。

三 浅田の前掲論文によると、『能因歌枕』の初めから約九〇項目までが原形に近い部分ではないだろうか、とする。

四 田尻嘉信「『能因歌枕』の名所記載」『跡見学園国語科紀要』第三三号、跡見学園国語科研究会、一九八五年四月。

する^四。及川道之も『枕草子』の類聚的章段との共通性を認めつつ、能因や清少納言の「各々の名称の由来に対する作者の興味からこうした地名が記述される結果を見た、ととらえるべき」と指摘する^五。本章では、先学の成果を踏まえながら、『能因歌枕』の「国々の所々名」と『玄々集』『能因集』との関係、そして勅撰集との関係について、主に定量的分析を通して考察を加えたいと思う。なお、先行研究においてはあまり触れることのなかった『能因歌枕』の成立時期に關しても考えて行きたい。

第一章 「国々の所々名」の概観

それでは先ず、「国々の所々名」という部分がどのような内容になっているかを確認しよう。畿内の「山城国」と、東山道の「みちのくに」、西海道の「ふこの国」（豊後国であろう）をそれぞれあげると次のようである^六。

山城国

おとは山 ふしみ山 深草山 稻荷山 いはし水 かも神社 えの松はら その池 あかたの井 広幡宮 桂河 大井河 宇治河 みなせ河 ななせかは 白河 あかの森 衣手森 はらへの森 かさとり山 男やま とりふ山 水の森 おくらやま せうなこのもり 松之崎 をしほやま 恥(の)森 ふちせ山 鞍馬やま 紫野 絹笠をか 御垂河 大原山 梅津河 うりふ山 いろこやま ならせの池 なかをか さかのうち山 しめしの山 さかやま うのはら 淀河 おとはの瀧 つらゝ坂 うちはし 伏見里 はゝその森 からはし あめ山の森 たいふの森 しめしの こからしの森 和泉河 かもやま 水のみ(「み」ミセケチ、森) こひのもり山 いはたの森 あらしやま かはたき かめやま さくらたにさての里 ふなをか なるたき あさ人山 ひら野 草の森 かうしのをか 白河のたきいひをか 衣のさと ふちのもり まかせ山 みくらやま 鶯のたに 衣のたき あらしのみね さくら井 あめの森 かくらをか みのさと かへての森 梅のやま たこの井 きよみつ

四 沢西稔子「元禄刊本「能因歌枕」地名の部についての考察」『和歌文学研究』第五四号、和歌文学会、一九八七年四月。

五 及川道之「能因歌枕「国々の所々名」が意味すること」『日本文学風土学会紀事』第一七号、日本文学風土学会、一九九二年三月。

六 『能因歌枕』の引用は、川村晃生・能因歌枕研究会編「校本「能因歌枕」」『三田国文』第五号、三田国文編集委員会、一九八六年六月による。

みちのくに

白河のせき なとりかは たけくまの松 たまつくりのせき 衣のせき いはるか は あひ
この山 みゝやま まきの島 かせのさと いはてのこほり あえるのおか おしの井て
しほかまのうら わすれすの里 はつかしの里 宮このしま なとりのみね たつくらのほ
ま かみやとのしま うきしま 衣かは いはせかは まつしま みくらし山 おとりの池
いはむかは とかけのさき あそひのをか あふくまかは みかたの井 たのめの関 水の
(補入「二」)しま からすきかさき たちはなの山 あひえのをか おこのぬま たかのせ
き あねとり山 いにしへのかは かさのさと をやまたのせき

ふこの国 十三

にしき野 ふしま

三か国を比較すると一目瞭然であるが、国別に分類され、それぞれに何の説明もなく歌枕が並べられている。そして各国別に記載された歌枕の数は、山城国は八七か所、陸奥国は四二か所、豊後国は二か所と、均衡が取れているとはいえない。そしてそれぞれの歌枕の所在や用例を確認すると、たとえば、山城国の「おとは山」のように古来有名な歌枕もあれば、「せうなこのもり」のように、所在も用例も確認出来ないものもある。そして違う国に入っている歌枕もあれば、同じ歌枕が二か国に入っている場合もあることは、『能因歌枕』が整った体裁でないことを物語る。この点を勘案しつつ、各国別に記載された歌枕の数を表すと、八一頁の【表1】の通りである^七。

歌枕の数は、都を中心とする畿内が一九〇か所で最も多く、東海道・東山道の順である。東山道の歌枕の数は東海道より少ないものの、国の数は東海道の国々の半分に過ぎない。後述することになるが、これには能因の東国紀行が影響を及ぼしていると考えられる。これに比べ、北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道のほうは歌枕の数が少ないだけでなく、所在や用例を確認することが出来ない所が多い。『能因集』からこれらの街道に該当する国々全てに能因が足を運んだことは確認できないものの、その街道上の幾つかの国に行ったことは確かめられる。以上のことを念頭に入れつつ、能因の他の作品での歌枕との関連性について確認していきたい。

第二節 『玄々集』の歌枕との関係

^七 テキストでは「しもつけ」となっているが、下総(東海道)が正しい。飛騨(東山道)・佐渡(北陸道)・伯耆・隱岐(山陰道)・美作(山陽道)・大隅(西海道)は底本に存在しない。

第一章から第三章に掛けては、『玄々集』所収歌の歌風に焦点をあてて考察したが、第一章で確認したように、『玄々集』所収歌にも、歌枕を詠み入れた歌が多く確認される。今、その焦点を歌枕に当てて『玄々集』の入集歌を分類すると、八二頁の【表2】の通りである。

歌枕を詠み入れた歌は六〇首で、比率では全体一／三強の35・9%である。「国々の所々名」と同じく、畿内・東海道・東山道の歌枕が圧倒的に多く、北陸道・山陰道・山陽道・南海道はわずか一／三首に過ぎず、西海道の歌枕は全くない。九州地方という、都を中心として活動した当時の歌人たちにとって馴染み深いとはいえない地域の所以であろう。東山道の歌枕の数が東海道より多く採られているのは「国々の所々名」と違うところである。この歌枕の中、「国々の所々名」と共通する歌枕を数えたのが八三頁の【表3】である。

共通する主な歌枕としては「春日野」(大和)、「生田の森」(摂津)、「筑波嶺」(常陸)、「逢坂の関」(近江)のような、著名で用例の多い歌枕が多くみられるが、用例は少ないが特異な歌枕としては「白良の浜」(紀伊)、「木曾路の橋」(信濃)、「天の橋立」(丹後)が注目される。勅撰集の歌枕については後述するが、「白良の浜」^八は勅撰集にその用例がまったくみられず、「木曾路の橋」は『拾遺集』から、「天の橋立」は『金葉集』以降から確認できる。もちろん「木曾路の橋」を詠んだ源頼光^九や「天の橋立」を詠んだ赤染衛門^{一〇}が能因と同時代の人物である点はあるが、能因がそのような歌枕にまで目を配っていたことは注目してよいかと思われる。総括すると、『玄々集』に入集した歌枕五四か所の内、二三カ所が「国々の所々名」で確認でき、比率では42・6%である。

第三節 『能因集』の歌枕との関係

生涯をかけて旅を続けた能因だけあって、『能因集』からは、数多くの歌枕をみることが出来る。『能因集』の歌枕を分類すると、八四頁の【表4】の通りである。

畿内・東海道・東山道の歌枕が多く見られるのは「国々の所々名」『玄々集』と共通し、東海道よりも東山道の歌枕が多い点も『玄々集』と共通するところである。これには前述したように、中巻からみられる、二度にわたる陸奥下向が影響をしていることは確かである。歌枕を詠み入れた歌数が一〇八首で、全体の42・2%の歌から歌枕が確かめられる。

八 「きのかみ、あふひにをくりける／なには江のとしふるよりはきのくにのしらゝのはまのかつきめにせん」 (玄九二・すけきた)

九 「中々にいひもはなたでしなる木曾路のはしのかけたるやなぞ」 (玄九五・源頼光)

一〇 「丹後に、くだりて／おもふ事なくてや見ましよさの海にあまのはしたてみやこなりせば」

(玄一三六・赤染絵門)

そして『玄々集』と同様、「国々の所々名」との共通項を調べたのが八五頁の【表5】である。「国々の所々名」と『玄々集』の共通項より、さらに特定の国々に偏重していることが確認できる。『玄々集』ではわずかでありながら存在していた、山陰道の歌枕、南海道の歌枕との共通項（前述した「天の橋立」「白良の浜」）がなく、播磨の歌枕（「高砂」「明石の浦」）を除くと、共通項の全ては畿内・東山道・東海道の歌枕のみである。用例の数の上では、摂津と陸奥が目立つが、摂津の用例の半分以上が「難波堀江」「難波江」「難波」「難波潟」「難波浦」のように、難波関連の歌枕であるのに対し、陸奥の歌枕は前述した「白河の関」を含め、「武隈の松」（能因集・一〇七、一四一）「名取川」（能因集・一二六）「塩竈の浦」（能因集・一四四）「籬島」（能因集・一四五）と、多様な歌枕が共通している。

このことを手掛かりに、『能因歌枕』のおよその成立時期について考えてみたい。『能因集』と「国々の所々名」で共通する畿内の歌枕は先述した難波関連を除いてあげると、「伏見里」（能因集・一三）、「住江」（能因集・一五）、「長柄橋」（能因集・一六）、「岩瀬森」（能因集・一七）、「生駒山」（能因集・八五）、「天河」（能因集・一五六）である。続いて、東山道の共通歌枕をあげると、「逢坂」（能因集・一七）、「更級の姨捨山」（能因集・四四）、「白河関」（能因集・一〇一）、「武隈松」（能因集・一〇七）、「塩竈浦」（能因集・一〇九）、「名取河」（能因集・一二六）、「籬島」（能因集・一四五）である。そして東海道の共通歌枕は「富士」（能因集・一二）、「甲斐嶺」（能因集・四二）、「志賀須賀」（能因集・九〇）、「筑波嶺」（能因集・一〇五）、「浜名橋」（能因集・一三九）である。一方、畿内の「朝日山」（能因集・一五九）、「榎津海」（能因集・一六九）、「常盤森」（能因集・一七三）、「吹飯浦」（能因集・二〇一）は「国々の所々名」にみられない。東山道からは「撫子山」（能因集・一四六）、「姉齒橋」（能因集・一四七）、「三江浦」（能因集・一四八）、「野田玉河」（能因集・一四九）、「梓杣」（能因集・一七四）、「近江海」（能因集・一七四）がみられない。東海道からは「山梨岡」（能因集・一四九）、「清見関」（能因集・八八）がみられない。『能因集』が編年体の家集であることを念頭に入れて『能因集』の歌枕と「国々の所々名」との共通項をみると、畿内であれば「天河」（能因集・一五六）までは「国々の所々名」にあるが、「朝日山」（能因集・一五九）以降はみられない。東山道であれば「籬島」（能因集・一四五）までは「国々の所々名」にあるが、「撫子山」（能因集・一四六）以降はみられない。東海道であれば「浜名橋」（能因集・一三九）まで「国々の所々名」みられ、みえない「山梨岡」「清見関」は家集内で「浜名橋」より前に位置する。このようにみると、『能因集』と「国々の所々名」の共通歌枕の線は「天河」（能因集・一五六）に引けると思われる。「天河」（能因集・一五六）を中心に、その以降に詠まれた『能因集』の畿内・東海道・東山道の歌枕は「国々の所々名」にみる事が出来ないからである。

それでは、「天河」を詠み入れた一五六番歌の詠歌年次はいつ頃であろうか。一五六番歌と近い位置に『能因集』下巻の巻頭歌（能因集・一五九）があり、詞書を「長元八年夏関白歌合」となっている。これは長元八（一〇三五）年に行われた「長元八年五月十六日関白左大臣頼通歌合」

二であり、この二首前の一五七番歌の詞書に「夜の雪」とあるので冬の歌となり、長元八年の
前年の冬と思われる。つまり、一五六番歌は長元七（一〇三四）年頃の歌である可能性が高く、
「国々の所々名」を含む『能因歌枕』の原型は、この頃の成立ではないかと思われる。『玄々集』
と『能因集』の成立が一〇四五年頃なので、約一〇年ほど先だって「原『能因歌枕』」が成立し、
便覧的・メモ的性格を有しつつ、随時増補されていったかと思うのである。『玄々集』と同様、
『能因集』も全体歌枕七七か所の内、半分にも満たない三二か所だけが「国々の所々名」と共通
する（共通率41・6%）ことは、このような成立過程を想定すると必然的なことであつたと思
われる。

第四節 勅撰集の歌枕との関係

それでは最後に、勅撰集の歌枕との関係について考えてみたい。勅撰集と限定したのは、天皇
の命令による権威を持つ撰集であることと、ある特定の時代に好まれた歌枕や表現を巨視的に俯
瞰できるからである。八六頁の【表6】は、「国々の所々名」の歌枕の中、二一代にわたる勅撰
集全体からその用例が確認できる数と比率を表したものである。

勅撰集からその用例が確認できる項目は二〇二か所で、全体項目の六八八か所の三〇%弱であ
る。令制国で見ると、北海道の国々との共通項が三〇%を越えただけで、北陸道・山陰道・山陽
道・西海道の国々の歌枕の中、勅撰集からその用例が確認できるのは約一〇%前後に過ぎない。
それに比べて畿内・東海道・東山道の歌枕はやはり高い比率をみせ、特に畿内の歌枕の半数以上
が勅撰集からその用例を確認することができる。このような結果は、「国々の所々名」が多くの
歌枕を有しながらも、その二／三強は普遍的な歌枕として定着していないものであることを意味
し、その原因は、前述したように、『能因歌枕』が持つ網羅的な性格に起因すると思われる。

そして、「国々の所々名」と勅撰集の歌枕を比較する間に気づくのは、意外と三代集にない歌
枕が多く含まれている点である。周知のように、三代集は『古今集』『後撰集』『拾遺集』のこ
とで、一〇五〇年からあまり下らない時期に亡くなったと思われる能因が、生前手にすることが
できた勅撰集はこの三集である。一〇四五年を前後してほぼ時期を同じくして成立した『能因集』
『玄々集』に比べ、前述したように、「原『能因歌枕』」はそれより一〇年ほど前の一〇三四年
頃の成立かと思われるが、能因が『能因歌枕』を編んだ際、この三代集を参考せずに『能因歌枕』
を著したとは考え難い^{二〇}。そこで、勅撰集全体の歌枕と共通するこの二〇二か所を、能因が生

二〇 『平安朝歌合大成「増補新訂」』、前掲書、八三二〜八六七頁。

二一 松原一義は『玄々集』を分析し、能因の歌道上の師である藤原長能との師弟関係において、
『拾遺集』の編纂に関っていたであろう長能が、集積した歌集を能因に相伝したことを想定す

前確認できたであろう三代集に限定してその用例が見られるものと見られないものをまとめると、八七頁の【表7】のようになる。

たとえば、山城は全体の勅撰集にわたって四四か所の歌枕が見られるが、その内、一六か所は三代集にその用例が確認できず、『後拾遺集』以降の勅撰集から用例が確認できる。この一六か所の内には「標野」のように、『続古今集』にわずか一首のみの歌枕もあれば、「石清水」のように三代集以降の勅撰集に四〇首と、その用例が急激に増える歌枕もある。このように全体の統計を出すと、「国々の所々名」と勅撰集の共通歌枕二〇二か所の内、三代集に用例のない歌枕は七五か所(37・1%)と、全体の一／三以上にもなる。前述したように、『玄々集』や『能因集』は能因が晩年に自分の人生を振り返りながら撰じたものであるが、『能因歌枕』はそれらの性格を異にし、成立した当時定まった形を取っていたものではなく、メモや備忘録のような性格のものであったと思われる。漢文序まで付している『玄々集』や『能因集』とは異なり、普段から自分の手元において利用するのが第一の目的であったのではなかったか。雑然とした体裁はそのような利用目的の差に起因すると思われる。勅撰集の歌枕との関係も、そのような観点から考える必要があると思われる。三代集の伝統的な歌枕を二／三ほど記録しつつ、旅を続けた歌人の目で、これからの勅撰集に入りそうな地名を積極的に収集した結果であると思われる。

おわりに

以上、『能因歌枕』の「国々の所々名」に収録されている歌枕と、『玄々集』と『能因集』、そして勅撰集の歌枕の関係を概観してみた。「国々の所々名」の歌枕は国別に分類され、何の説明も無しで並べられているだけであるが、能因の他の著書である『玄々集』と『能因集』と比較した結果、『玄々集』の全体の歌枕の42・6%が、『能因集』の全体の歌枕の41・6%が「国々の所々名」から確認出来た。ほぼ同じ比率で収斂されることは興味深いことであるが、『能因集』での共通歌枕が詠まれた年次から想定して、『能因歌枕』の最初の形は『玄々集』と『能因集』より約一〇年ほど前に成立し、順次必要に応じて増補されていたものと思われる。雑然とした形は最初から誰かにみせるのが目的ではなく、自分の手元において使う、実用的な目的があったと思われる。そして勅撰集との関係を調べた結果、「国々の所々名」の約一／三が勅撰集で確認できる歌枕であることが分かった。そしてその内また約一／三は、能因が参考にした

る。「長能・能因の師弟関係―『玄々集』の原資料の考察から―」『平安文学研究』第七〇号、平安文学研究科、一九八三年十二月。花山院を手伝って『拾遺集』の撰集に関与したともいわれる長能からの相伝が行われたとすれば、能因が『古今集』『後撰集』を手にする機会があったことも十分考えられよう。

と思われる三代集からは用例がみえない歌枕であることも確認でき、それは『玄々集』や『能因集』と『能因歌枕』との関係と同じく、厳密な目的意識があったのではなく、自由に随時増補を行った結果であると思われる。但し、その根底には和歌の伝統の中で成立した歌枕を記録すると同時に、次世代に歌枕になりそうな地名を収集しようとする目的意識は確かに働いていたと思われる。

このような結果から「国々の所々名」の特徴を考えると先学の指摘の通り、歌枕への並々ならぬ関心の結果という点では能因の歌人的特徴が良く表れていて、その原型は能因の手によって成立し、生きている間随時増補されていたとはいえ、その全てが能因の手によって一気に書かれたとは考えるのはやはり難しいと思われる。第一、『能因歌枕』全体の形からして、「天地、あめつちといふ」で始まる部分に順次内容が補われ、「ある人の抄云」等が付け加えられたとすれば、『能因歌枕』の全体の約三／四の部分に位置する「国々の所々名」だけがまったく影響されずに原型を留めているとは到底考えられないからである。第二、勅撰集との一致率から考えて、能因が三代集を中心とする歌枕と、歌枕になりそうな地名を収集し基本的な形は作られたと思われるが、中世以降の影響をも視野に入れる必要があるように思われるからである。このようなことを考えると、やはり基本的な形は能因の手によって作られ、時代が下るにつれ、そこに肉付けされていったと考えるのは自然かと思われる。たとえば、越前国の歌枕としてあげられている「たいふ山」のように、勅撰集をはじめとした他の撰集類にはその用例をみることでできない歌枕の用例が、『能因集』にはみられる(一一二〇)場合もあるからである。能因の生き方と、地名とその起源に対する並でない関心が、『能因歌枕』が補強・増補されていく原動力であったと思われる、中世の『八雲御抄』などの歌学書に繋がる要素をもっていたと考えられる。

続く第六章では、このような要素をもっていた能因が、新古今時代には、どのように受容されていたかの考察に進みたいと思う。

【表1】「国々の所々名」の歌枕分類

5か国 190か所											摂津	河内	和泉	大和	山城	畿内
											38	14	8	43	87	
15か国 133か所	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	東海道
	14	5	5	5	8	14	15	5	10	10	10	10	3	10	9	
7か国 128か所									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江	東山道
									19	42	5	11	15	10	26	
6か国 54か所										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭	北陸道
										8	11	5	5	9	16	
6か国 34か所										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波	山陰道
										4	5	5	5	5	10	
7か国 49か所									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	山陽道
									5	4	10	5	5	5	15	
6か国 38か所										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊	南海道
										5	5	4	5	5	14	
10か国 62か所						対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前	西海道
						5	5	5	5	5	5	2	15	5	10	
62カ国、688カ所																計

【表2】『玄々集』の歌枕分類

5か国 26か所												摂津	河内	和泉	大和	山城	畿内
												8(8)	1(2)	1(2)	8(9)	8(9)	30首
4か国 6か所	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀		東海道
	1(1)	・	・	・	・	・	2(3)	・	2(3)	1(1)	・	・	・	・	・		8首
4か国 14か所									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江		東山道
									・	6(6)	1(1)	・	5(5)	・	2(3)		15首
1か国 1か所										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭		北陸道
										・	・	・	・	1(1)	・		1首
3か国 4か所										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波		山陰道
										・	1(1)	・	・	2(1)	1(1)		3首
2か国 2か所									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨		山陽道
									・	・	・	・	1(1)	・	1(1)		2首
1か国 1か所										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊		南海道
										・	・	・	・	・	1(1)		1首
—						対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前		西海道
						・	・	・	・	・	・	・	・	・	・		
20か国、54か所、60首																	計

《注》
 それぞれの国の歌枕と、その歌枕が詠まれた歌数を括弧の中に表した。たとえば、「山城、8(9)」であれば、山城の歌枕8種類あって、それを詠み入れた歌が9首、ということになる。

【表3】『玄々集』の歌枕と「国々の所々名」の共通率

3か国											摂津	河内	和泉	大和	山城	畿内	
11か所											3(3)	・	・	6(7)	2(3)	13首	
3か国	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	東海道	
3か所	1(1)	・	・	・	・	・	1(1)	・	1(2)	・	・	・	・	・	・	4首	
3か国									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江	東山道	
6か所									・	2(2)	・	・	2(2)	・	2(3)	7首	
—										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭	北陸道	
										・	・	・	・	・	・		
1か国										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波	山陰道	
1か所										・	・	・	・	1(1)	・	1首	
1か国									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	山陽道	
1か所									・	・	・	・	・	・	1(1)	1首	
1か国										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊	南海道	
1か所										・	・	・	・	・	1(1)	1首	
—							対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前	西海道
							・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
12か国、23か所、27首、42.6%																計	

【表4】『能因集』の歌枕分類

5か国												摂津	河内	和泉	大和	山城	畿内
34か所												17(26)	2(3)	1(1)	6(7)	8(8)	45首
5か国	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	東海道	
8か所	1(2)	・	・	・	・	・	3(5)	・	2(2)	1(3)	1(1)	・	・	・	・	13首	
5か国									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江	東山道	
25か所									2(2)	15(26)	2(2)	・	3(6)	・	3(3)	39首	
2か国										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭	北陸道	
3か所										・	1(1)	・	・	2(2)	・	3首	
1か国										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波	山陰道	
1か所										・	1(1)	・	・	・	・	1首	
2か国									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	山陽道	
4か所									2(1)	・	・	・	・	・	2(3)	4首	
—										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊	南海道	
										・	・	・	・	・	・		
1か国							対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前	西海道
2か所							・	・	・	・	・	・	・	・	・	2(3)	3首
21か国、77か所、108首																	
計																	

【表5】『能因集』の歌枕と「国々の所々名」の共通率

4か国 17か所												摂津	河内	和泉	大和	山城	畿内 26首
												10(17)	1(2)	・	3(4)	3(3)	
5か国 5か所	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	東海道 10首	
	1(2)	・	・	・	・	・	1(3)	・	1(1)	1(3)	1(1)	・	・	・	・		
3か国 8か所									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江	東山道 10首	
									・	5(6)	・	・	2(3)	・	1(1)		
—										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭	北陸道	
										・	・	・	・	・	・		
—										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波	山陰道	
										・	・	・	・	・	・		
1か国 2か所									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	山陽道 3首	
									・	・	・	・	・	・	2(3)		
—										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊	南海道	
										・	・	・	・	・	・		
—							対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前	西海道
							・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
13か国、32か所、49首、41.6%																	計

【表6】「国々の所々名」と歴代勅撰集の歌枕との共通率

5か国 98か所											摂津	河内	和泉	大和	山城	畿内 (51.6%)	
											16	3	1	34	44		
10か国 29か所	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	東海道 (21.8%)	
	4	・	・	・	2	3	2	・	5	4	4	1	・	3	1		
6か国 45か所									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江	東山道 (35.2%)	
									2	13	・	2	7	4	17		
2か国 3か所										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭	北陸道 (6%)	
										・	・	・	1	2	・		
3か国 3か所										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波	山陰道 (9%)	
										1	・	・	・	1	1		
2か国 5か所									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	山陽道 (10.2%)	
									・	1	・	・	・	・	4		
5か国 12か所										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊	南海道 (31.6%)	
										1	1	・	1	1	8		
4か国 7か所							対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前	西海道 (11.3%)
							・	・	・	1	2	・	・	1	・	3	
37か国、202か所、29.4%																計	

【表7】「国々の所々名」と歴代勅撰集の歌枕の内、三代集に用例がない歌枕の割合

5か国 37か所									摂津	河内	和泉	大和		山城		畿内 (37.8%)
									16(8)	3(2)	1(1)	34(10)		44(16)		
10か国 8か所	常陸	下総	上総	安房	武蔵	相模	甲斐	伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	東海道 (27.6%)
	4(2)	・	・	・	2(1)	3(1)	2(0)	・	5(2)	4(0)	4(1)	1(0)	・	3(1)	1(0)	
6か国 17か所									出羽	陸奥	下野	上野	信濃	美濃	近江	東山道 (37.8%)
									2(1)	13(3)	・	2(0)	7(3)	4(2)	17(8)	
2か国 0か所										越後	越中	能登	加賀	越前	若狭	北陸道 (0%)
										・	・	・	1(0)	2(0)	・	
3か国 2か所										石見	出雲	因幡	但馬	丹後	丹波	山陰道 (66.7%)
										1(1)	・	・	・	1(1)	1(0)	
2か国 2か所									長門	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	山陽道 (40%)
									・	1(0)	・	・	・	・	4(2)	
5か国 8か所										阿波	土佐	伊予	讃岐	淡路	紀伊	南海道 (66.7%)
										1(1)	1(0)	・	1(0)	1(1)	8(6)	
4か国 1か所						対馬	壱岐	日向	薩摩	肥後	肥前	豊後	豊前	筑後	筑前	西海道 (14.3%)
						・	・	・	1(0)	2(0)	・	・	1(0)	・	3(1)	
75か所、37.1%																計

《注》
○の数字は、三代集からその用例がみえない歌枕の数と比率をあらわしている。たとえば、「山城44(16)」「能因歌枕」と全体の勅撰集との共通歌枕44か所あり、その内16か所は三代集か用例がみえない歌枕、ということになる。また、「畿内(37・8%)」とあるのは、畿内の歌枕の内、三代集からその用例がみえない割合が37・8%ということになる。

第六章 新古今時代の能因受容の様相

はじめに

本章では、『玄々集』『能因集』『能因歌枕』と続く能因の一連の著作活動が、後代文学、特に新古今時代に及ぼした影響について考えてみたい。作品の受容という観点からは、『玄々集』が成立して間もない頃から注目されてきた。第四番目の勅撰集である『後拾遺集』の序文には次のように述べている。

延喜のひじりの帝は、万葉集のほかの歌廿巻を撰びて、世に伝へ給へり。いはゆる今の古今和歌集これなり。村上のかしこき御代には、また古今和歌集に入らざる歌はたまき撰び出でて、後撰集と名づく。又、花山法皇は先の二つの集に入らざる歌をとり拾ひて、拾遺集と名づけ給へり。かの四つの集は、ことばぬものごとくにて、心、海よりも深し。一

『万葉集』の編纂以降久しく絶えていた勅撰集の編纂事業は、醍醐天皇の治世下で、『古今集』で再び始まる。『古今集』の成立から約五〇年経った村上天皇の時代には、いわゆる「梨壺の五人」の手によって『後撰集』が成立し、また約五〇年の年月過ぎた花山天皇の時代には先立つ二つの勅撰集に入らなかった歌を拾い集めて『拾遺集』が成立する。このように、醍醐・村上・花山朝に亘る、いわば国家事業ともいえる三代集の成立について述べたあと、その国家事業を成立させるための材料となる、注目に値する私撰集について述べる。

このほか、大納言公任朝臣、みそぢあまり六つの歌人を抜き出でて、かれが妙なる歌、もゝちあまりいそぢを書き出だし、又、十あまり五つ番ひの歌を合せて、世に伝へたり。しかるのみにあらず。やまともろこしのをかきこと二巻を撰びて、ものにつけ、ことによそへて、人の心をゆかさしむ。又、ここのしなをやまうたを撰びて、人にさとし、わが心になへる歌一卷を集めて深き窓にかくす集といへり。今も古もすぐれたる中にすぐれたる歌を書き出だして、こがね玉の集となむ名づけたる。そのことば名にあらはれて、その歌なさけ多し。おほよそこの六くさの集は、かしこきもいやしきも、知れるも知らざるも、玉くしげあけれ心をやるなかだちとせずといふことなし。二

一 久保田淳・平田喜信校注『後拾遺和歌集』新日本文学大系、岩波書店、一九九四年、八頁。以下、『後拾遺集』の引用は本書による。

二 久保田淳・平田喜信校注『後拾遺和歌集』、前掲書、八〇九頁。

ここで主に語られるのは公任の数々の撰集である。三十六人の歌人の歌一五〇首を歌合形式に集めた『三十六人撰』、三十人の歌人を歌合形で番えた両度の『十五番歌合』^三、和漢の才能が発揮された『和漢朗詠集』、優れた歌とそうでない歌を九段階に分け、手本を示した『九品和歌』、秀歌撰である『深窓秘抄』と『金玉集』と、撰者である藤原通俊は事細かく公任の業績について説明する。『後拾遺集』の成立は公任死後約四〇年であるが、歌壇における公任の位置が自ずと知られる。能因が語られるのは、このように公任の輝かしい業績が述べられた次である。

又、近く能因法師といふ者あり。心、花の山の跡を願ひて、ことば、人に知られたり。わが世にあひとあひたる人の歌を撰びて玄々集と名づけたり。これらの集に入りたる歌は、あまの栲縄くり返し、同じことを抜き出づべきにもあらざれば、この集に載することなし。^四

能因は『古今集』の六歌仙の一人である僧正遍照と同じく出家歌人であり、その詞は人々に知られたとする。そして、第四章で考察したように、能因が生きていた時代に一緒に活動した歌人達の歌を集めて『玄々集』を編んだ。ただし、『玄々集』に入集した歌は、『後拾遺集』には採らない方針であるとする^五。勅撰集において、先に成立した勅撰集に入集した歌を採らないのが慣例であることを考えると、通俊は『玄々集』を私撰集ではあるが、勅撰集に准ずる扱いをしていることが分かる。

このあと、『麗花集』『山伏集』『樹下集』などの私撰集の説明が続くが、このような能因の説明と『玄々集』の紹介は大変示唆的であると思われる。勅命による編纂作業の産物である三代集の紹介、そして歌壇の権威であった公任の輝かし業績に並んで能因とその撰集が紹介されているということは、通俊がいかに能因を高く評価したかを物語り、『拾遺集』以降長い勅撰和歌集空白期を経て成立した『後拾遺集』における能因の位相が窺える。

このように『後拾遺集』では『玄々集』を採らない方針であったが、続いて成立した『金葉集』と『詞花集』は打って変わって、その撰歌資料として『玄々集』を大きな拠り所としている^六。

三 『前十五番歌合』は公任撰と認められるが、『後十五番歌合』が公任撰であるかについては意見が分かれる。『後拾遺集』の序文では、『十語番歌合』を前後と区別していない。

四 久保田淳・平田喜信校注『後拾遺和歌集』、前掲書、九頁。

五 ただし、三首（秋上・二五八、別・四九六、恋一・六二一）が混入している。

六 谷山茂は『金葉集』三奏本に『玄々集』の歌八〇首がみられ、「三奏本は特にその秋・冬・別離などのしめやかな部において、玄々集的風格を比較的高率に継承してゐる」て、『詞花集』には六五首の『玄々集』撰入歌がみられ、「詞花集は特にその冬・別・雑の部において、玄々集的風格を、より多く継承してゐる」と指摘した。「玄々集と金葉集三奏本」『国語国文』第二一卷第

ここからは焦点を新古今時代^七に当てて考えてみることにする。この時代に着目したのは、第一、この時代に成立した各歌論書に能因の名が散見するからであり、第二、二一代に亘る集において、能因の死後最初に成立した『後拾遺集』に次いで能因詠を多く入集しているのが『新古今集』であり、能因の再評価が行われたように思われるからである。後者については後述することにして、ここでは、この時代の歌論書に見られる能因についてみてみよう。

まず、第七番目の勅撰集である『千載集』の撰者、藤原俊成の歌論書『古来風体抄』には次のように述べている。

その後久しく撰集はなくて、歌人は多く積りにける程に、白河院の御時、勅撰ありて、通俊卿うけ給ひて、後拾遺はまた、後に遺これるを拾へる集と名付けられたるなり。この集ども歌を見るに、歌の道の、少しづつ変りゆる有様は見ゆるものなり。古今ののち後撰集、いかなるにか、歌も古き姿を宗とし、詞も古き様に書かれたるがいみじき事なるとぞ申し伝ふめる。歌の中にぞ贈答などの多く、続きどころの少し乱れたる所もあるなるべし。後拾遺の歌は、上、村上の御時の梨壺の五人が歌を宗として、それよりこなた、拾遺の後、久しく撰集はなくて、世に歌人は多く積りければ、公任卿を初めとして、長能・道濟・道信・実方等の朝臣、女は、小大君・和泉式部・紫式部・清少納言・赤染衛門・伊勢大輔・小式部・小弁など、多くの歌人どもの歌積れる頃ほひ撰びければ、いかに良き歌多く侍りけん。されば、げにまことにおもしろく、聞き近く、物に心得たる様の歌どもにて、おもしろくは見ゆるを、撰者の好む筋にや、ひとへにをかしき風躰なりけん、ことに良き歌どもはさて置きて、狭間の地の歌の、少し前々の撰集に見合するには、たけなども立ち下りにけるなるべし。また、その御時、大納言経信卿今少し先達なるを置きて、中納言通俊卿参議の時、勅撰を承ると言へること、少しはおぼつかなきことなり。さればにや、難後拾遺といふ物ありけるとかや。彼の大納言の歌の風躰は、またことに歌のたけを好み、古き姿のみ好める人と見えれば、後拾遺の風躰を如何ばかり相違して見え侍りけんかし。

(中略)

また、後拾遺より前、勅撰にはあらで私に撰べる集ども数多あるべし。能因法師は玄々集といひ、良暹法師は打聞といふ、また撰者誰ともなくて麗花集といひ、樹下集などいひて、数多あるを、後拾遺撰ぶ時、能因法師の玄々集をば、何とかありけん除けるを、詞花集には勅撰にあらねばとて、玄々集の歌を多く入れたればにや、後拾遺の歌よりも、たけある歌ども

九号、京都大学国文学会、一九五二年一〇月、「金葉集と詞花集―玄々集をめぐる―」『国語国文』第二二卷第六号、京都大学国文学会、一九五三年六月。

^七ここでは、『千載集』の成立から、『新古今集』を経て『新勅撰集』に至る約五〇年間を対象とする。

の入りて、集のたけもよく見ゆるを、また、今の世の人の歌のさまでならぬにや、殊の外の歌どものまたあるとぞ人申すべき。また、地の歌は、多くは誹諧歌の躰に、ざれをかしくぞ見えたるべき。歌の有様のvariety行く程も、撰者の心々も、撰集どもに皆見ゆる事なるべし。

八

『拾遺集』が編纂されてから『後拾遺集』至る空白期があったこと、そしてその間に長能・道濟・道信・実方等の朝臣、女は、小大君・和泉式部・紫式部・清少納言・赤染衛門・伊勢大輔・小式部・小弁といった優れた歌人があったこと、それにもかかわらず、撰者の通俊の好みのせいから『後拾遺集』の歌風が「ひとへにをかしき風躰」であること、歌人として名高い源経信を差し置いて通俊が撰者になったことに対する疑問などが述べられている。そして先述したように、『後拾遺集』が『玄々集』を撰集資料としなかったが、『金葉集』『詞花集』は『玄々集』を撰集資料としたため、「集のたけもよく見」えるとする。俊成は能因の『玄々集』における撰歌眼を評価していて、優れた歌人として名を挙げている長能から小弁までの歌人もまた、全員『玄々集』の入集歌人であることは、能因の歌人意識も認めていると考えてよいであろう。

続いて、順徳院の歌論書である『八雲御抄』では、次のように述べている。

彼輩がのちはただ公任卿一人天下無双、万人これにおもむく。又道信、実方、長能、道濟などを歌人とす。其外には赤染衛門、紫式部、相模、上古にはぢぬ歌人なり。其外も道綱母、馬内侍様の歌人おほく侍しも、皆うせ侍し後、天下に歌人なきがごとし。我もくと思たる人はおほけれど、上にもさして其定あることなし。公任卿、無二無三の人にて有るばかり也。

(中略)

定頼卿の父のあとをつけりといへども、名誉も堪能も及がたし。能因法師といふ物も、幽玄をこのみて歌よみのよしふるまへども、其も花山の跡をよびがたし。

(中略)

此道をもくすべし。しかるを近年人々は大方さもみえず。物に心えたるよしにて、我道の名をしらざる也。能因法師が伊勢のごが家の松を見て車よりおりけんまでこそなくとも、近年は故人をばややもすればきやうまんせんとす。^九

「用意部」では、歴代の重代の歌人評を通して順徳院の歌論が垣間見られるが、その中で能因

八 橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『歌論集』新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇六年、二六七〜二七〇頁。以下、『古来風体抄』の引用は本書による。

九 片桐洋一編『八雲御抄の研究 名所部用意部』、和泉書院、二〇一三年、一六四、一六五、一六九頁。

の名を確認することが出来る。『万葉集』からは大伴家持・柿本人麿・山部赤人、『古今集』からは六歌仙の一部^{一〇}や撰者三人^{一一}、『後撰集』の梨壺の五人・平兼盛・源重之・曾根好忠が名を挙げていて、『拾遺集』の筆頭歌人として公任を「天下無双」「無二無三」の人と評する。赤染衛門・紫式部・相模・道綱母、馬内侍も優れた歌人と評した後、能因が登場するが、「能因法師といふ物も、幽玄をこのみて歌よみのよしふるま」^{一二}うと、その歌人としての能力を認めつつも、「花山の跡をよびがたし」と、先に列挙した歌人たちのように完全に良い評価だけとは言い切れない。ただ、「此道をもくすべし」「能因法師が伊勢のごが家の松を見て車よりおりけんまでこそなくとも」を合せて考えると、やはり順徳院は、能因を歌道を重くする、近年の歌人立ちが見習うべき歌人として評価していることが分かる。新古今時代の歌学書にこのように評価された能因が、『新古今集』を中心とする撰集類ではどのように受容されているかを確認して行きたい。

第一節 『新古今和歌集』の歌枕

『新古今集』にも多くの歌枕がみられるが、その中でいくつかは、『新古今集』より以前の勅撰集を初出とするが、その後の勅撰集にほとんどその用例がみることができなかったものが『新古今集』になって再び取り入れられたものである。これらの歌枕を、能因の撰集類と関連付けて考えてみよう。『勅撰歌歌枕集成』^{一二}を参考にして、各勅撰和歌集別初出・伝承歌枕の一覧を示すと次のようになる。

歌枕 総数	伝承 歌枕	初出 歌枕	
201	0	201	古今集
199	91	108	後撰集
274	114	160	拾遺集
204	114	90	後拾遺集
178	106	72	金葉集
102	69	33	詞花集
283	166	117	千載集
361	260 ^{一三}	101	新古今集

一〇 黒主、喜撰、康秀の名がない。その代わり素性法師と伊勢の名を挙げている。

一一 紀友則の名を見ることが出来ない。他の三人に比べて早く亡くなったせいか。

一二 吉原永徳『勅撰歌歌枕集成』、おうふう、一九九五年。

一三 『勅撰歌歌枕集成』には伝承歌枕の数を261とするが、新古今初出である山城の「伏見」を大和の「伏見」（後撰初出）と重複してカウントしたため、伝承歌枕の数を260と改めた。よって、歌枕の総数も362ではなく、361となる。

三代集にあたる『古今集』『後撰集』『拾遺集』において提示された歌枕は、『拾遺集』を頂点にして、時代が下るにつれ、その数が減少する事が分かる。特に、『金葉集』『詞花集』は他の勅撰集に比べて小規模な勅撰集であることを勘案しても、その傾向が著しい印象を受ける。しかし、『千載集』『新古今集』に至ると、そのような傾向から一転し、再び初出歌枕や伝承歌枕が増えることが分かる。これは、『千載集』の撰者である藤原俊成や、『新古今集』の編纂に主導的な存在である藤原定家の三代集時代を規範にして、特に中でも古今時代を重視して歌を詠む事を力説したのが歌学に影響されてのことではなからうか。ここからは、伝承歌枕の中で、『新古今集』以前の勅撰集にあまり用例のみられない、『古今集』初出の「天の川」、『後撰集』初出の「岩瀬山」、『拾遺集』初出の「十市の里」、『後拾遺集』初出の「生駒山」「有渡浜」についてみてみよう。

『新古今集』における「天の川」の用例は次の二首である。

天の河原を過ぐるとて 撰政太政大臣

昔聞く天の河原を尋ねきて跡なき水をながむばかりぞ (新古今・雑中・一六五四)

題知らず 実方朝臣

天の川通ふ浮き木に言問はむ紅葉の橋は散るや散らずや (新古今・雑中・一六五五)

実方は『拾遺集』初出歌人なので、新古今時代の歌人である藤原良経の歌についてみることにする。一六五四番歌は、河内国の歌枕である「天の川(原)」を詠んでいる。『新古今集』以前の勅撰和歌集における「天の川(原)」の用例は次の二首が挙げられる。

惟喬親王の供に狩りに罷りける時に、

天の川と言ふ所の川の辺に下り居て、

酒など飲みける次に、親王の言ひけら

く、狩りして天の川原に至るといふ心

を詠みて、盃はさせ、と言ひければ、

詠める 有原業平朝臣

狩り暮し七夕女に宿借らむ天の川原に我は来にけり (古今・羈旅・四一八)

(題知らず) (読人知らず)

天の川冬は氷に閉ぢたれや石間に激つ音だにもせぬ (後撰・冬・四八八)

『後撰集』の四八八番歌は、冬部の部立の四八〇番から続く題知らず／読人知らず歌群の中の一首である。冬部の巻末歌である藤原敦忠の五〇六番歌まで二六首続くこの読人知らず歌群の中で、この四八〇番歌以外に歌枕が詠まれているのは、「涙川」を詠んだ四九四番歌、「越の白嶺」を詠んだ四九九番歌、「小倉山」(山城)を詠んだ五〇一番歌以外に見られない。「越の白嶺」

と「小倉山」は歌枕であることが確かであるが、「涙川」は歌枕として詠まれる場合もあれば、「涙が川のように流れる」という隠喩としてもよく詠まれる、普通名詞の用例も少なくない。四八八番歌の「天の川」もまた、七夕と関連した普通名詞としてもよく詠まれるので、題知らずである以上、歌枕と普通名詞どっちとも解釈出来る。

これに比べて、『古今集』の四一八番歌は歌枕としての「天の川」であることが確かめられる。この歌は『伊勢物語』の八二段から確認出来る。

八十二 渚の院

むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花さかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりけむ人を、常に率いておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

とて、その木のもととは立ちかへるに日暮になりぬ。御供なる人、酒をもたせて、野よりいで来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふところにいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒まゐ。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり

親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえしたまはず。紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあるじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語して、あるじの親王、酔ひて入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

親王にかはりてたてまつりて、紀の有常、

おしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も入らじを^{一四}

惟喬親王と、「右の馬の頭」と敢えて名前を伏せている在原業平と、紀有常の親交が語られる。

水無瀬の離宮に出かけた惟喬親王一行は、交野にある渚の院に向かい、「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」^{一五}と、桜の美しさをたたえる歌を詠んだ。その後も酒は進み、天の川まで到達した一行は、その心を題に歌を詠むが、そこで業平が詠んだ歌が『古今集』の四一八番歌である。「狩をして日が暮れてしまったので、織姫に宿をお借りしましょう。天の河原まで来てしまいましたから」と、地名である「天の川」から、織姫を連想し、宿を借りようと、技巧なしで素直に詠んでいる。

『新古今集』の良経の一六五四番歌は、この業平の歌を踏まえている。業平の逸話を「昔聞いたが、その天の河原を訪ねてきたら、「天の川」という名とは違って、「跡なき水を眺めればかりなのである。もしくは良経詠の「跡なき水」とは、ただ単に地名からの連想に過ぎないものではないかも知れない。沈淪の発露とはいえ、『伊勢物語』に描かれた惟喬親王と業平との逸話などは、新古今時代の歌人たちにとって、古典として、優雅なものとして感じられたのではなからうか。良経詠の第五句「ながむばかりぞ」からは、ただ実景を目の当たりにしての感情を越えて、そのようなことがなくなった今現在に対しての良経の寂しい心象風景が感じられる。であると、「跡なき水」も先述べたように、「天の川」からの連想だけでなく、昔のような優雅さがなくなったことを意味すると思われる。

さて、この天の川は『伊勢物語』に逸話が伝えられ、業平の歌も『古今集』に入集したが、『新古今集』の良経と実方詠が入集し、その後の勅撰集に十首と用例が増える以前は、何故か『後撰集』にわずか一例あるのみである。しかし、能因の著作からは、「天の川」に注目していたのではないかと思われるふしがある。『能因歌枕』では、

かさゝぎのはしとは たなばたのあまのがはにむすびわたすを云^{一六}

あまのがはとは そらの白くわたりたる也^{一七}

天をば ならとみといふ あまのはら なかとみとも あまの河とも^{一八}

と、歌語の詠み方や意味を説明したり、同意語を羅列する部分から見ることが出来、この場合は、歌枕としての「天の川」であるよりは、普通名詞としての「天の川」のほうに注目しているように思われる。そして、『能因歌枕』の後半部には、一月から十二月まで、それぞれの月に詠むべき歌語が提示されているところがあるが、その中で、

一五 『古今集』に詞書を「渚院にて桜を見てよめる」（春上・五三・在原業平朝臣）として入集。

一六 『校本「能因歌枕」』、前掲書、三九頁。

一七 『校本「能因歌枕」』、前掲書、四〇頁。

一八 『校本「能因歌枕」』、前掲書、五〇頁。

七月 七夕 ひこぼし なつめ あまのがは かさゝぎのはし いなづま はなすゝき 露
草 萩花 秋霧 白露 小鷹狩 女郎花 しのすゝき うきは つしたま はちすば すま
ひぐさ おぎのは^{一九}

と、七月の歌語として提示されている。この場合も普通の歌語としての扱いになると思われる。そして、第五章で取り扱った「国々所々の名」には、国の分類こそ違うが、

摂津国

住吉 はるみの浦 … まのゝ浦 まつかぜ あくたがは ながらの橋 何波のうら かさ
松 いくたの森 みかみのうら あまのわたり あまのがは …^{二〇}

と、摂津の歌枕としている。勅撰和歌集には用例の少ない歌枕であるが、歌枕としても、そして普通歌語としても能因は自分の歌学書の中でその詠み方を提示している。ただそれだけでない。私撰集である『玄々集』からは「天の川」の用例をみる事が出来ないが、自撰家集である『能因集』では二例確認出来る。

天の河といふ所に

われならぬ人もわたると天の川たなばたつめも今日や見るらん（能因集・一五六）

長久二年之夏、有天旱無降雨、仍詠和歌献霊社、

有神感迺施甘雨一昼夜

天の川なはしろ水にせきくだせあま下ります神ならば神（能因集・二二一）

先ず二二一番歌は、長久二年の夏に、ひどい旱魃があったので、歌を詠んで奉納したら、神が感動して一昼夜にかけて雨を降らしたという、歌徳説話を語る上で欠かせない能因の歌である。ここでの「天の川」は、『能因歌枕』のいうところの普通歌語に該当する。

そして一五六番歌は、詞書から実際に「天の川」に向かった際の歌であることが分かる。先述した『伊勢物語』の業平がそうであったように、歌枕「天の川」から織女を思い出すが、業平詠で宿を貸すよう、問われる立場であった織女が、能因詠では自分以外の人——ここでは能因——が「天の川」を渡るのだろうか、眺める立場になっている。このように能因は、「天の川」の歌枕と普通歌語としての詠み方をしっかり身につけていたのである。また、「天の川」に関連して付け加えると、先に揚げた『伊勢物語』で表れている歌枕は「天の川」以外にも「水無瀬」と

^{一九} 『校本「能因歌枕」』、前掲書、七二頁。

^{二〇} 『校本「能因歌枕」』、前掲書、五七頁。

「交野」があった。『能因集』では、直接『伊勢物語』の八二段とは関係ないが、「水無瀬」
「交野」を詠んだ歌がみられる^{三〇}。「交野」も「水無瀬」も『古今集』から用例はあるが、勅
撰集に用例が増えるのは「交野」は『新古今集』以降、「水無瀬」は『千載集』以降であるとい
える^{三一}。『能因集』に「天の川」「水無瀬」「交野」と同じ畿内に属する「吉野山」「吉野川」
「春日野」のような有名な歌枕がまったくみられないことから考えると、このような歌枕の選択
は意図的であり、後世多く詠まれる歌枕に能因は早くから注目していたと思われる。

続いて、『後撰集』初出の歌枕で、『新古今集』に撰ばれた歌枕の中では、「岩瀬山」が注目
される。大和の歌枕である「岩瀬山」「岩瀬森」は、ともに『後撰集』からみられ、「岩瀬」に
「言はせ」「言はじ(ず)」の意味を掛け、「岩瀬森」の場合はさらに「森」に「漏り」を掛け、
「山」の場合は山の「下水」を一緒に詠み込むことで、主に恋歌として詠まれるので、詠み方こ
そ違うが、歌枕の属性としては大差がないように思われる。『新古今集』には「岩瀬森」の用例
はなく^{三二}、「岩瀬山」の用例が一例あるのみである。

恋の歌数多詠み侍りけるに 後徳大寺左大臣

かくとだに思ふ心を岩瀬山下行く水の草隠れつつ(新古今・恋二・一〇八八)

二 「かたのに行きあひたる人、なほつれなく見ゆれば／ふけぬとも今夜帰らんあひ思ふ人はか
た野のわたりなりけり」(能因集・二九)、「水無瀬河のわたりにをかしき女のあるを、むかへ
にやらん、ただにはあらず、歌よみてやれとなれば、かういひやる／ながらへてすまむとやる
水無瀬河うき瀬おほかるわたりとぞ聞く」(能因集・五六)。出家前の歌だけあって、二首とも
女性に対する歌である。二九番歌では交野で通う女性の態度がつれなくなつたが、それでも逢い
にくと、「逢うことが難しい(↓難い↓交野)」という伝統的な詠法に即して詠む。つれない
相手をあえて「あひ思ふ人」と呼びかけたところの能因の狙いがあったと思われる。五六番歌は
詞書の書きぶりから、遊女に対する歌とも解されるが、歌枕「水無瀬河」の縁語で「うき(浮十
憂)瀬」を詠んだところに技巧がみとめられる。二首とも、直接『伊勢物語』の歌や物語を踏ま
えてはいないが、女性に対する歌なので、『伊勢物語』で馴染の歌枕を詠むことで、色好みの雰
囲気を醸し出す目的があったとも考えられる。

三 「交野」は『新古今集』以前三例あるが、『新古今集』に二例ある以降、一二例みられる。
「水無瀬」は『千載集』以前五例あるが、『千載集』に二例ある以降、一二例みられる。

三三 「岩瀬森」は『後撰集』初出以降、『金葉集』に一例、定家单独撰である『新勅撰集』に二
例みられる。その後歌枕として定着したようで、『新統古今集』まで八例の用例が確認出来る。

一方、「岩瀬山」は『新勅撰集』の異本に『後撰集』での初出歌(岩瀬山谷の下水うち忍び人の
見ぬ間は流れてぞ経る)の異伝歌(第三句を「より忍び」、第四句「人のみ濡れば」)がある以
外は、『統千載集』に一例あるのみである。

藤原実定の一〇八八番歌は、相手を偲ぶばかりで言わない心を、「岩瀬山」の「下行く水」が「草」隠れている様子にたとえて詠んでいる。この歌の本歌は『後撰集』の次の歌である。

忍びたる人に、遣はしける（読人知らず）

岩瀬山谷の下水うち忍び人の見ぬ間は流れてぞ経る（後撰・恋一・五五七）

勅撰集における「岩瀬山」の初出例でもあるこの歌は、あまり人の目に付かない「岩瀬山」の「谷の下水」が、音を立てないで流れるように、自分も人が見ない間は声を潜めて泣きながら時を過ごすばかりだ、と詠む。「谷の下水」の縁語で「流れ」を詠み、その「流れ」に「泣かれ」を掛けて詠んだこの歌を踏まえて、実定詠は「下行く水」がさらに「草に隠れつつ」と詠むことで、歌語としては表現されていない「流れ―泣かれ」までも裏に表現している。

このように、恋歌を詠むに当って効果的な歌枕である「岩瀬山（または森）」であったが、『拾遺集』から『詞花集』まではあまり注目されていなかったようである。しかし、能因は歌枕「岩瀬山（森）」を、かなり重視していたと思われる。『能因歌枕』の歌語説明の部分と、「国々所々の名」では、

よぶこどりとは いはせのもりにかけてよむべし^{二四}

撰津国

… みをつくし はつかしの森 さくら井 ふぢの森 いはせのもり たまさかの松 ゆき
のもり いはせのやま すみのえ せひえのはら 神なびのもり^{二五}

と説明している。撰津国の歌枕である「岩瀬山（森）」は、「言はせ」「言はじ（ず）」に掛けて詠まれる歌語である故、相手を呼ぶ（もしくは呼び掛ける）という意味を持つ景物「呼び鳥」と一緒に詠むべし、と説明する。能因はその実例を、

為義朝臣、人づてに、よばせければ

恋しくは来ても見よかし人づてに岩瀬の森の呼び鳥かな（玄々集・九三・弓削仲宣）

と『玄々集』にとっている。仲宣の九三番歌は、直接言わないで人伝に声を掛けて来る相手を、

^{二四} 『校本「能因歌枕」』、前掲書、三九頁。

^{二五} 『校本「能因歌枕」』、前掲書、五八頁。

「岩瀬（言はせ）森」の「呼子鳥」にたとえる。仲宣詠の上句は、また『伊勢物語』からその典故をみることが出来る。

七十一 神のいがき

むかし、男、伊勢の齋宮に、内の御使にてまぬれりければ、かの宮に、すぎごといひける女、わたくしごとにて、

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし大宮人の見まくほしきに

男、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなく二六

男が内裏のお使いとなって伊勢の齋宮に下った際、「神様の垣も越えてしまいそうです、大宮人であるあなたにお逢いたくて」と恋歌を贈ってきた女性に対して、「恋しいなら来てみてください、恋路は神様が諫められるものではありません」と返したとのことである。仲宣はこの男の歌の上句をそのまま持って来、歌枕「岩瀬森」と景物「呼子鳥」を詠み込むことで一首を仕上げている。

そして、能因も、このような詠み方を習得した上に、『能因集』の中に次のような歌を残している。

ある所にある女の、里に出づることもたはやすからず、

いひつぐ者もくるしげなれば、こと人をかたらはむな

ど思ひてとかういひやる

よぶこ鳥いはせの森にすみわびぬなほあふさかを越えやしなまし（能因集・一七）

ある所にある女と思い通りになれず、仲立ちする人も困る様子なので、自分を「呼子鳥」にたとえ、仲立ちを通して「言はせ（岩瀬）」ることにも疲れたので、逢うことを、または契りを結ぶという意味を持つ「逢坂」を越えるかどうか迷っている、と相手に伝えたのである。

続いて、『拾遺集』初出の歌枕で、『能因歌枕』に記載があつて『新古今集』に再び登場した歌枕としては「十市の里（村）」がある。

春日使に罷りて、帰りて、すなはち女の許に、

遣はしける

一条撰政

暮れば疾く行きて語らはむ逢ふ事の十市の里の住みうかりけり（拾遺・雑賀・一一九七）

大和国

ふるの社 かつらぎの山 とをちの里 はつせがは みゝなし山 さる沢池 …二七

百首の歌奉りし時 (式子内親王)

更けにけり山の端近く月冴えて十市の里に衣擣く声 (新古今・秋下・四八五)

『能因歌枕』では、大和国の歌枕として、「とをちの里」を挙げている。

藤原伊尹の一一九七番歌は、「十市の里」に「遠い」を掛けて、「日が暮れたなら、早く行ってあなたと語り合い合いたいと思う、逢うことが遠いという、十市の里に住みにくかったことだ」と詠む。大和国の歌枕である「春日」の縁で「十市の里」が詠まれたと思われるが、雑賀の部立に入集しているとはいえず、女性への歌であることを考えると、「逢うことが遠い（もしくは待ち遠しい）」という恋歌のような修辭上で詠まれた感が強い。

これに比べて『新古今集』の式子内親王の四八五番歌は、詞書から、題詠であることが分かる。夜が更けて、山の端で月が冴え冴えとくまなく照らし、「十市の里」から衣打つ声が聞こえてくる、題詠であるが、情景が目には浮かぶような詠みぶりである。ここでの「十市の里」はただ地名であるとは思われない。初出の『拾遺集』の伊尹詠がそうであったように、式子内親王詠にも当然、「遠い」と意味が込められている。しかし、「逢うことが待ち遠しい」と抽象的に詠んだ伊尹詠と違う点は、「十市の里」と詠むことによって、実際の距離をも表していると思われるところである。つまり、第三句の「月冴えて」から、晴れた夜の様子が想像され、遠く離れた「十市の里」から衣を打つ声が澄んだ空気を通して聞こえてくる感覚を鮮明にさせるのである。先述した『古今集』や『後撰集』初出の歌枕のような、両首の歌の間に直接的影響関係は認められないが、両勅撰集の間に位置する『能因歌枕』に用例の少ない歌枕が含まれていることは注目してよいかと思われる^{二八}。

以上、『古今集』『後撰集』『拾遺集』の三代集初出の歌枕で、『新古今集』以前あまり用例が見当たらないが、能因の著作でその存在が確認出来るものをみてきた。用例の少ない三代集の

二七 『校本「能因歌枕」』、前掲書、五七頁。

二八 なお、「十市の里」は『新古今集』以降の用例は、六例確認される。「入り方の月の空さへ響くまで十市の村は衣擣つなり」(玉葉・秋下・七六二・入道前太政大臣、詞書「同じ心(擣衣)」)のように、式子内親王の歌を踏まえた歌もあらわれるが、基本的には「露分けて宿借り頃も急げども里は十市の野辺の夕暮」(続千載・羈旅・八一六・従三位宣子、詞書「旅の心を」)のように、伊尹詠で確認したような「十市」に「遠い」を掛ける詠法が一般的になっていく。

歌枕を『新古今集』に再び入集させることは、尊重すべき古典を『新古今集』の中で蘇らせることであつたと思われる。

三代集以降の勅撰集初出の歌枕で、『新古今集』以前用例が少ないが、能因の受容が考えられる例についてみることにする。いずれも『後拾遺集』初出の、「生駒山（嶽）」と「有渡浜」である。まず、『新古今集』の「生駒山（嶽）」詠は次の二首が確認出来る。

題知らず

西行法師

秋篠や外山の里や時雨るらん生駒の嶽に雲の掛かれる（冬・五八五）

（題知らず）

（読人知らず）

君が辺り見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも（恋五・一三六九）

一三六九番の読人知らず詠は、『万葉集』卷十二の異伝歌で、『伊勢物語』の二十三段にも見える歌である。『伊勢物語』では、大和国で、幼い頃から友達であつた女性と結婚した男性が、一時的に河内国の女性のほうに通うようになったのであるが、それでも大和国の妻が一途に自分を待つことを知って、河内国の女性に通わなくなった時にその女性が大和国のほうを眺めながら詠んだ歌であるとする。「な：そ」と歌う恋歌の内容と相まって、ここで詠まれた「生駒山」は、実景であるより、河内国と大和国の境にある山として、河内国から大和国の方角を眺めた時（または行く時の）の一つの通過点のようなイメージが強い。それに比べて、五八五番歌の西行詠は、「生駒の嶽」に雲が掛かっているのを見て、目には見えない「秋篠の外山の里」には時雨が降るのだろうかと思像する。「秋篠や」「外山の里や」「時雨るらん」と上句が全て句切れになつてゐる独特な詠み方であるが、この西行詠には一三六九番の読人知らず詠には見えない、実景への視線がある。西行の念頭には『後拾遺集』の次の歌があつたのではないだろうか。

津の国の古曾部と言ふ所にて、

詠める

能因法師

我が宿の梢の夏になる時は生駒の山ぞ見えずなりぬる（後拾遺・夏・一六七）

津の国に下りて侍りけるに、旅宿遠望

の心を、詠み侍りける

良暹法師

渡辺や大江の岸に宿して雲居に見ゆる生駒山かな（後拾遺・羈旅・五一三）

能因の一六七番歌は、摂津国の古曾部に居ながら、河内のほうを眺めると、夏になって木の葉が茂りになるにつれ、普段はよく見えていた「生駒山」が見えなくなることだ、と詠む^{二九}。

^{二九} なお、『能因歌枕』では「大和国 … たつたやま 神なみ山 をはつせ山 みむろのきし

「梢の夏になる」と詠んだ第二句に能因のこの一首を詠む上での狙いがあったと思われ、普段から生駒山を觀察していた人こそ感じることの出来る、自然の小さな変化を詠んだ歌である。良暹法師の五一三番歌は、能因の一六七番歌に比べて、視野をもっと広くした詠み方である。能因詠が自分の庭の木の葉越しに「生駒山」をみる、いわばミクロの世界であれば、良暹詠は詞書の「遠望」からも分かるように、雲まで含めた「生駒山」の全体の山容がみえるような、マクロの世界である。能因詠と良暹詠、どれの詠歌時期が早いかは決め難いが、いずれにしてもこの二首が勅撰集における「生駒山」の初出である。後述するように、西行は能因の影響が著しい歌人であるので、詠み方の上では良暹詠と「くや」による第一句切れ、「雲」「生駒山」が共通するが、能因詠も視野に入っていたはずである。もしくは西行は良暹詠から歌語や詠み方を受容しつつ、夏歌であった能因詠を念頭に入れながら冬歌に変え、「生駒山」の変化を踏み台にして違う場所へと思いを馳せる歌を詠んだとも解釈できる。

続いて、「有渡浜」であるが、『新古今集』に一例みることが出来る。

(題知らず)

読人知らず

有渡浜の疎くのみやは世をば経む波のよるよる逢ひ見てしがな(恋一・一〇五一)

「有渡浜」の名のように、「うと」くしているばかりで世を過ごすだろうか、波が繰り返して押し寄せるように、夜毎に逢いたいものだ、と詠む一〇五一番歌は、『古今和歌六帖』にもみえる。「有渡浜」から「うと」が導かれ、「有渡浜」の縁語で「波」を詠み、その「波」の「よるよる」に「夜夜」を掛けた、同音反復による民謡風の強い恋歌である。このように詠まれた「有渡浜」が勅撰集に登場するのもまた、能因の『後拾遺集』からである。

式部大輔資業、伊予守にて侍りける時、

彼国の三島明神に、東遊びして奉りけ

るに、詠める

能因法師

有渡浜に天の羽衣昔来て振りけん袖や今日の祝子(後拾遺・神祇・一一七二)

するがの国

たごのうら 富士山 ふしがは うどはま ……三〇

東遊歌の駿河舞に「や 有度浜に 駿河なる有度浜に 打ち寄する浪は 七草の妹 ことこそ

三〇 『校本「能因歌枕」』、前掲書、五七頁。

三〇 『校本「能因歌枕」』、前掲書、六〇頁。

良し」^{三三}とあり、駿河国の歌枕「有渡浜」での駿河舞は古来著名なものであったようである。能因は眼前の東遊びをする「祝子」をみて、遠く昔の天人が着ていた「羽衣」に思いを馳せる。『能因集』からは、地方の風俗に関する歌が散見し、後述する第二次陸奥下向から都に戻った直後に詠まれる「東国風俗五首」^{三三}はそのような能因の地方への関心の程が窺える。能因のこの一七二番歌によって、歌枕「有渡浜」は勅撰集における市民権を得たが、以降の「有渡浜」の用例は『新古今集』のように、「うとく」を導き出すための枕詞的な用例のみ入集する^{三三}。能因詠は勅撰集において詠み方の継承は行われなかったが、その初出を切り開いたことに意味がある。

以上、三代集において初出の歌枕が『新古今集』以前あまり用例が見られず、再び『新古今集』に入集する際、その間に能因の著作の介在が想定出来る例と、『後拾遺集』における能因詠が勅撰集初出で、『新古今集』にその用例がみられる二つの歌枕について考察をした。続いて、第二節では、度々能因の歌人的特性として指摘される陸奥関連の歌枕を中心に、『新古今集』の陸奥詠について考えていきたい。

三三 『後拾遺和歌集』、前掲書、一一七二番歌の脚注。

三三 『能因集』一一三三〜一二七番。

三三 勅撰集からはこの他に「有渡浜」を詠んだ歌を二首確認出来るが、「題知らず／何時となく恋駿河なる有渡浜の疎くも人になり増さるかな」（新勅撰・雑四・一一九八・相模）、「寄海辺恋と言ふ事を／浮き波の掛かるとなれば有渡浜の疎くて人にあらましものを」（玉葉・恋三・一四八七・従三位為子）のように、両首とも第三句に「有渡浜」が位置し、第四句の「疎く」を導く、修辭的な役割に過ぎない。

第二節 『新古今集』の陸奥の歌枕

さて、このように『新古今集』の歌枕を国別に分類すると、当然なことであるが、もつとも歌枕とその用例歌が多く見られるのは山城・大和を中心とする畿内である。そして同時に気付くのは、出羽国を含む陸奥の歌枕が多くみられることである^{三四}。ここで、『古今集』から『新古今集』に至るまでの勅撰集における陸奥関連歌枕の用例数を表わすと次のようになる。

歌集	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
初出歌枕	18	9	9	8	1	3	8	6
伝承歌枕	0	6	5	10	9	5	10	27
陸奥歌枕総数	18	15	14	18	10	8	18	33
用例数	25	25	21	30	14	9	33	56

^{三四} 谷山茂は歌枕個々に対する考察は行っていないが、『新古今集』に塩釜・信夫・末の松山・宮城野・阿武隈・名取川・武隈・安達・象潟・衣川・安積沼・野田の玉川など、陸奥の歌枕が多くみられることについて指摘する。「新古今集の歌枕」『国文学解釈と教材の研究』第二巻第九号、学灯社、一九五七年八月。

伝承																初出																
陸奥																																国
信夫もち摺り (の(摺り)衣・の乱れ)	信夫(の)山	信夫の里(辺り)	信夫	衣川	蝦夷	浮島	岩手	阿武隈(川)	安達の原	安積の沼	雄島の苦屋	松島の海人	野田の玉川	壺の碑	信夫の浦	奥の海	歌枕	用例	初出													
1	4	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	2	1																
古今	千載	後撰	後撰	拾遺	古今	拾遺	千載	古今	拾遺	古今																

初出の歌枕はそれほど多くないが、伝承歌枕が先立つ勅撰集より圧倒的に多く、『古今集』から『千載集』に至るまでの勅撰集から充実に歌枕を継承しながら新しい歌枕も提示しようとする姿勢がみられる。用例数においても、先立つ勅撰集の中で最も用例数の多い『千載集』より二〇以上上回ることは、『新古今集』の陸奥関連の歌枕に対する積極性が窺える。

さらに、『新古今集』に詠まれた陸奥の歌枕とその初出・用例数を表で表すと次の通りである。

伝承															国	
出羽		陸奥													国	
袖の浦	象潟	雄島が海人	雄島が(への)磯	宮城野	宮城が(野の)原	陸奥	松山	松島	名取川	十布(の浦)	武隈の松	末の松山	末の松	塩釜の浦	塩釜	歌枕
2	1	3	2	3	1	3	1	1	3	1	2	3	1	5	1	用例
拾遺	後拾遺	千載	後拾遺	古今	千載	古今	後撰	後拾遺	古今	金葉	後撰	古今	後拾遺	古今	古今	初出

伝承歌枕二七例の内訳としては、『古今集』の伝承歌枕は一〇例、『後撰集』の伝承歌枕は四例、『拾遺集』の伝承歌枕は四例、『後拾遺集』の伝承歌枕は四例、『金葉集』の伝承歌枕はわずか一例、『千載集』の伝承歌枕は四例と、三代集、中でも『古今集』の影響が著しい。「歌の本跡には、ただ古今集をあふぎ信ずべき事なり」「古今歌こそは本たいと仰信すべきものなれば」という俊成の歌論の如く、『古今集』を仰ぎながら当代に相応しい『新古今集』を目指そうとした姿勢が表れているように思われる。

その『古今集』の巻第二十に「大歌所御歌」「神遊びの歌」と並んで「東歌」十四首が入集していることも新古今時代の歌人たちには示唆的であったと思われる。この十四首の後半は、相模歌（一首）・常陸歌（二首）・甲斐歌（二首）・伊勢歌（二首）が含まれてはいるものの、「東歌」の初めから半分までの七首は、陸奥の歌枕を詠み入れた歌が続くからである。また、『新古今集』の代表格撰者である定家の『明月記』には、「東方端方閑所（其所弘有間敷）、令書陸奥（此国殊幽玄名所多難棄、仍御所遠キ方に書之、不可以乱干和之故也、以之用隠方）」^{三五}とあり、「最勝四天王院障子歌合」^{三六}の名所の撰定において、陸奥は「幽玄」な場所が多く、「難棄」ところであるという認識がよく表れている。

能因は生涯を掛けて、旅を続けた歌人であるが、その旅を分類すると次のようになる^{三七}。

- ① 甲斐下向まで―寛弘八（一〇一一）年頃
- ② 三河下向―寛仁（一〇一七）〜治安年間（一〇二四）
- ③ 両度陸奥下向―万寿二（一〇二五）年春〜長元年間（一〇二八〜一〇三七）前半
- ④ 遠江下向―長元八（一〇三五）年前半
- ⑤ 両度美濃下向―長元末（一〇三七）〜長暦初（一〇三七）
- ⑥ 伊予下向―長暦四（一〇四〇）年春〜長久年間（一〇四〇〜一〇四四）

このように能因の旅を俯瞰してみると、能因が積極的に、そして長年を掛けて陸奥への旅に出たことが分かり、『新古今集』がこれほど陸奥の歌枕に対して興味を示していることには、第一節でも確認したように、『新古今集』の陸奥の歌枕詠を撰ぶに当たっても、何らかの能因を意識した痕跡があるのではないかと思われる。そこでまず、『能因集』で両度の陸奥下向が実際どのように表れているかを確認し、両度にわたる陸奥下向が能因においてもつ意味について考えてみたい。

初度下向の関連歌は、『能因集』に次の歌のみである。

二年の春、陸奥国にあからさまに下る

^{三五} ◇ の中は割り注。渡邊裕美子は、「最勝四天王院障子和歌」の歌枕「安達原」を中心に、陸奥の歌枕が新古今時代の歌人たちによって新しい名所として認定され、本意を獲得していく過程を考察した。「陸奥名所歌」『新古今時代の表現方法』第四章第二節、笠間書院、二〇一〇年。^{三六} なお、「最勝四天王院障子歌合」に撰定された陸奥の名所は「白河関」「阿武隈川」「安達原」「宮城野」「安積沼」「塩竈浦」の六か所であり、その内「安達原」以外の五か所は、能因の著作からその用例が確認出来る歌枕である。

^{三七} 川村晃生「二、能因の旅」『撰関期和歌史の研究』、前掲書の分類に従った。

とて、白河の関に宿りて

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関（能因集・一〇一）^{三八}

の一首に過ぎない。「白河の関」の初出は『拾遺集』で確認出来る。

陸奥国の白河関越え侍けるに

平兼盛

たよりあらばいかで宮こへ告げやらむ今日白河の関は越えぬと（拾遺・別・三三九）

平兼盛詠は、「白河の関」を越える感慨を「都にいる人たちに伝えたいものだ」と、技巧なしに淡々と詠む。兼盛詠によつて有名になった歌枕を前にして、能因は「霞が立つ春に都を出発したが、白河の関に着いたら秋風が吹く」と、「都」から「白河の関」に至る空間的距離を「霞」から「秋風」への変化という季節の移り変わりによって表現したところに特徴がある。季節の変化という文学的な誇張が、序論であげたような、陸奥に行かずにして苦心してこの歌を詠んだという説話での能因像を作つていく原因であるが^{三九}、詞書に「あからさまに下る」とあるから、初度陸奥下向は、最初から長く滞在する予定がなかったと思われる。続く一〇二番歌の詞書に「京に上りて、為政の朝臣に馬とらすとて」とあるので、初度の陸奥下向時の歌はこの歌のみになるわけであるが、後述する一〇七番歌から考えて、この初度下向の時も能因は著名な歌枕を訪ねたはずである。ただ、自分の家集を編むに当って、意図的にこの「白河の関」詠以外は伏せたのである。それは、単に自分の気に入る歌が詠まれていなかったことも考えられるが、それよりは、再度下向時の歌枕詠との重複を避けて、この「白河の関」詠を際立たせる意図が働いた結果と考えた方が妥当に思われる。初度下向を伝えるただ一首であるがその影響力は大きく、以降この「白河の関」詠を踏まえた歌が数多く詠まれ、前述した「最勝四天王院障子和歌」の陸奥の歌枕は「白河の関」から始まるのである。

^{三八} 『後拾遺集』に詞書「陸奥国にまかり下りけるに、白河の関にてよみ侍りける」（羈旅・五一八）として入集。

^{三九} 西山秀人は能因の初度陸奥下向について、「おそらく能因は僧侶として勸進を行う傍ら諸国の名所を探訪するなどして、ゆっくりと東山道を下つたいたのであろう。その結果、当該歌（注…「都をば」詠）にうたわれているごとく都を出立ちしてから相当の月日を要してしまったのではなからうか。『袋草紙』では「能因実二八下向奥州」とまで疑われた初度下向の旅ではあったが、その足跡は二度目の奥州下向詠に断片的ながら残されており、『能因歌枕』における名所選択のあり様もきわめて示唆的であるといつてよい。」と指摘する。「能因法師の歌枕の旅―奥州下向を中心に―」、倉田実・久保田孝夫編『王朝文学と交通』、竹林舎、二〇〇九年、三七〇頁。以後、西山の論はこの論文による。

再度下向の関連歌は一〇四番から一二一番までの一八首で、その数から二度目の下向が相当長期間にわたる旅であったことが分かる。以下、『能因集』を辿りながらこの陸奥下向が能因にどのような意味をもつのかを確認したい。

なすべきことありて、また陸奥国へ下るに、はるかに

甲斐のしらねの見ゆるを見て

甲斐がねに雪の降れるか白雲かはるけきほどは分きぞかねつる（能因集・一〇四）

常陸の国にて、筑波の山を

よそにのみ思ひおこせし筑波嶺の峰の白雲けふ見つるかな（能因集・一〇五）

「なすべきこと」があつて、能因は再び陸奥に向かう。その旅の途中、雪が降っているのか、雲がかかっているのか分からないほど遠くから「甲斐が嶺」を眺め、常陸国に入ってからとは無縁なものと考えていた、白雲のかかった「筑波嶺」をみる事が出来た。「甲斐が嶺」も「筑波嶺」も、『古今集』の「東歌」にある著名な歌枕^{四〇}で、能因の感慨のほどが窺える。この二首から、能因が東海道ルートで下ったことが確かめられる^{四一}。

陸奥の国に行きつきて信夫の郡にて、はやう見し

人をたづぬれば、その人はなくなりనికిといへば

四〇 「常陸歌／筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにますかげはなし」（古今・東歌・一〇九五）、「（常陸歌）／筑波嶺の峰のみぢ葉落ち積もり知るも知らぬもなべてかなしも」（古今・東歌・一〇九六）、「甲斐歌／甲斐が嶺をさやにも見しがけけれなく横ほり臥せるさやの中山」（古今・東歌・一〇九七）、「（甲斐歌）／甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人もがもや言つてやらむ」（古今・東歌・一〇九八）。一〇九五番歌は第二句「こものかのも」、第三句から第五句まですべての句に「かげ」が詠まれていて、一〇九六番歌も、第四句「知るもしらぬも」第四、五句が「も」におわる、同音の反復による民謡風のリズムカル感が強い歌である。一〇九七番歌は「甲斐が嶺」をはつきり見たいと願う旅人の心を、一〇九八番歌は遠く離れた人に消息を伝えたい旅人の心を詠んだ素朴な歌である。『古今集』の特徴とされる理知的な歌ではないが、このように勅撰集に入集することで広く知られ、平安時代の人たちの「東国」に対するイメージを形成したと思われる。なお、『能因歌枕』の「甲斐国」には「かひのしらね」が、「常陸国」には「つくばね」が確認出来る。

四一 「今回（注：再度下向）は東海道を經由した可能性が強く（中略）筑波山を見遣りながら常陸国府（茨城県石岡市）を経て、河内駅（水戸市）から東山道連絡路に入り、（中略）東山道本路の松田駅（福島県白河市）に至ったものと推測される。」、西山、前掲論文、三七四頁。

浅茅原荒れたる野べはむかし見し人をしのぶのわたりなりけり（能因集・一〇六）

武隈の松、初めのたびは枯れながらもくひ

などありき、このたびはそれもなし

たけくまの松はこのたび跡もなし千とせを経てや我は来つらん（能因集・一〇七）

陸奥国の信夫の郡に着いたが、能因を待っていたのは以前から交友を持っていた人の死である（一〇六）。そこで能因は地名の「信夫」に古人を「偲ぶ」心をかけて、哀傷歌を詠む。その後訪れた「武隈の松」では、以前訪れた時は枯れながらも切り株があつたものが、今回はそれさえも無くなったことに、「千とせを経てや我は来つらん」と驚きながら嘆く（一〇七）。前述したように、初度下向時の歌は「白河の関」詠しかないが、この「武隈の松」詠の詞書の「初めのたび」と「このたび」によって、初度下向時にも「武隈の松」を訪れた可能性が考えられる。

さて、この亡くなった人が能因とどのような関係であるかは知る由もないが、能因が昔から「信夫」を訪れるようになったのと、「武隈の松」を訪れたのは偶然のように思われない。それは、『伊勢物語』の第一段と、『後撰集』に「武隈の松」の用例があるからである。

一 初冠

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくありければ、心地まどひけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりころもしのぶの乱れかぎりしられず
となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけむ

みちのくのしのぶもぢぢりたれゆゑに乱れそめしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。^{四二}

陸奥守にまかり下れりけるに、武隈の松の

枯れて侍けるをみて、小松を植へ継がせ侍

て、任果てて後、又同じ国にまかりなりて、

かの前の任に植へし松を見侍て 藤原元善の朝臣

植ゑし時契りやしけん武隈の松をふたゝび逢ひ見つる哉（後撰・雑三・一二四一）

能因が訪れた「信夫」は、古来『伊勢物語』の第一段で有名なところであった。元服した男が

魅力的な女性を見つけては、自分が着ていた「しのぶもぢずり」模様の服の裾を切って、その模様に自分の気持ちを喻えて贈ったのが、「信夫」を有名にしたのである。また、『後撰集』の一四四一番歌は詞書から、「武隈の松」が枯れてしまったので、「植へ継がせ」た後に、時を経て再びその松を見た時の感慨を詠んだ歌で、この歌以来、「武隈の松」は有名な歌枕として定着していくのである^{四三}。このように能因は、和歌の伝統の中で形成された歌枕「信夫」と「武隈の松」に直接足を運んで、自分の目で確かめようとするが、そこで経験したのは「はやう見し人」と「武隈の松」の喪失であった。

続いて能因は、「末の松山」「塩竈の浦」を訪れる。

末の松山にて

白浪の越すかとのみぞ聞えける末の松山松風の声（能因集・一〇八）

塩竈の浦にやどりて、都なる人のもとに

さ夜ふけて物ぞ悲しき塩竈はももはがきする鳴の羽風に（能因集・一〇九）

この浦にいみじう年へたる海人のあるを見て

みさごゝる磯辺の松にもろともに塩風におのおいにけらしも（能因集・一一〇）

（陸奥歌）

陸奥はいづくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも（古今・東歌・一〇八八）

君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ（古今・東歌・一〇九三）

能因にしてこの地を訪れるようにしたのは、『古今集』の東歌二首である。一〇九三番歌以来、「波が末の松山を越えるか、越えないか」が重要な問題であった「末の松山」で、能因はその波の音に集中する。それはまるで「松風の声」のようで、歌枕を古歌の蓄積してきたイメージの中

^{四三} この歌以来、「武隈の松もひとと枯れにけり／武隈の松もひとと枯れにけり風にかたぶく声のさびしさ」（重之集・一九九）、のようにまた「武隈の松」が枯れたり、「則光朝臣の供に陸奥国に下りて、武隈の松をよみ侍りける／武隈の松はふたきを都人いかがと問はばみきと答へむ」（後拾遺・雑四・一〇四一・橘季通）と、都人にとつては陸奥に下向したら、見るべきものとして認識されていた。なお、重之詠の「ひとと枯れにけり」、季通詠の「武隈の松はふたきを」から、「武隈の松」は普段は二本あって、一本が枯れても一本が残っていて、枯れたほうを植え替えていったようである。このように考えると能因の歌は、「武隈の松」の数には触れていないが、直接いつてみたら、そのような和歌の伝統とはうらはらに、「武隈の松」の跡が全く無くなったことへの嘆きであり、人一倍歌枕に執心した能因という歌人を考えると、その喪失感は相当なものであったと思われる。

でのみ経験する人は決して味わえない、現地を訪れた能因だけが実感出来る感覚である。一〇九番歌も同様なことがいえる。この歌の背景には、『古今集』の一〇八八番歌以来の「塩釜の浦」の物悲しさという共有認識があるが、それが実際どのようなものであるかは、実は『古今集』の一〇八八番にははっきりあらわれていない。「陸奥はどこでもそうであるが、塩竈の浦の海人が引く綱手で漕いで行く舟もかなしい」と、その悲しさの正体はかなりぼんやりしているように思われる。現地に辿りついた能因は、その悲しさを実感しているのである。その媒体となるのは「鳴の羽風」であるが、夜が更けて周りが静まった中、「ももはがきする」鳴の羽音が聞こえてくる。それを「羽風」と表現したのは、ちょうどその音を聞いた瞬間に風が吹いてきたかも知れない。または「松風」(二〇八)―「羽風」(二〇九)―「塩風」(一一〇)の、歌語上の狙いがあったとも考えられる。ともかく、『古今集』の東歌では不確かであった「かなし」の实体を、能因は「鳴の羽風に」感じたのであり、詞書の「都なる人」が誰であるかは確かめ得ないが、「都なる人のもとに」とあるので、能因はこの実感をその人と共有しようとするのである。そしてこの「物ぞ悲しき」経験は、一一〇番歌の「いみじう年へたる海人」をみていよいよ鮮明になるのである。

くりはらの郡にて、そこにあるもの、是は

音無の滝に侍り、また河は昔河とぞいひ侍
るといへば

都人きかぬはなきを音無の滝とはなどかいひはじめけむ(能因集・一一一)

いかにしていひ始めける言の葉ぞ昔河にぞとふべかりける(能因集・一一二)

とかはといふ所を船にて下る程、船にある者

この渡りをあやのせとぞ言ひ侍る、歌よみて

神にたてまつる所なりといへば

あやの瀬に紅葉の錦立ちかさねふたへにおれるたつ田姫かな(能因集・一一八)

「くりはらの郡」に至っては、現地の人に「音無の滝」と「昔河」という地名を聞いて、その名前に興じ、起源について考える。順番は前後するが、一一八番歌の詞書からもそのような姿勢が窺われる。歌の伝統の中で培われてきた歌枕を生涯にかけて直接探訪し続けた能因の姿勢が表れていると思われる、このように繰り返しその地名の起源について考える態度は、第五章で考察したように、「国々の所々名」の中に多く見出される、三代集までは歌枕として定まっていなかった地名の収集・記録する態度と繋がると思われる。たとえば、「国々の所々名」の「陸奥」に記録されている「わすれずの里」「はづかしの里」「いはせかは」「いはむかは」「あそびのをか」

などは、この一一一・一二二・一一八歌のような詠作の中で収集された地名であると考えられる。陸奥国から出羽国にわたった能因は、「やそしま」^{四四}に至って次の三首を詠むが、能因における陸奥下向がもつ意味を考える上で、一一三番歌と一一五番歌は重要な位置を占めていると思われる。

出羽の国やそしまに行きて、三首

世中はかくてもへけりきさかたやあまのとま屋をわが宿にして（能因集・一一三）

嶋中有神、云蚶方

天にます豊岡姫に言問はむいく代になりぬきさかたの神（能因集・一一四）

わび人はとづくにぞよき咲きて散る花の都はいそぎのみして（能因集・一一五）

一一三番歌で「世の中はこのようにしてもやっていけるものだ、象潟の海人の苦屋を我が宿として」と歌う。都を出立ち、再度陸奥に向かつてからすでに相当の期間が過ぎたはずである。能因の旅は国守であった友人たちを頼つてのことが多かった^{四五}が、「あまのとま屋をわが宿にしたことから考えると、出羽国への旅はそれを期待出来なかったようである。「あまのとま屋」なので、みすばらしい極まりないことは言うまでもない。そのようなところでも、人生はやっていけるのだと悟りに近いものを能因は覚えた。歌枕の実地に足を運んで感じた感慨とはまた別のもので、都ににいるだけでは決して得ることの出来ない経験である。このような経験は一一五番歌で、「侘び人である自分には、このような僻地こそ相応しいのだ。花が咲いては散ってしまう、花の都はせわしいので」と表れる。この歌の背景には、上巻からみられる大江正言との贈答歌がある。

正言、出雲へ下るとて、かういひおこせり

故郷の花の都に住わびて八雲たつてふ出雲へぞ行く（能因集・五〇）^{四六}

返し

とづくにはいづにもあるを君などて八雲たつてふうらにしも行く（能因集・五一）

^{四四} 『枕草子』の「島は」の段に「島は八十島、浮島、たはれ島、絵島、松が島、豊浦の島、まがきの島」とあり、『能因歌枕』の「出羽国」に「ねずみの関 たちがさき かみがは つりやま やそ島 たまさかの松 …」とある。ただし、一一三番歌の中には「やそしま」が詠まれていない。

^{四五} 川村晃生「二、能因の旅」『撰関期和歌史の研究』、前掲書。

^{四六} この歌は、家集と同じ形で『玄々集』（一〇一）にもとられていて、能因はこの歌を自分の歌人人生において記憶すべき歌であると考えると同時に、正言の代表的な秀歌として認めていたことが分かる。

下向の理由は不明であるが、普段から親交をもっていた正言が「花の都が住みづらくなったので、八雲が立つといふ出雲へ行く」とよこしてきたのに対し、「都から離れた国ならどこにでもあるのに、何故八雲が立つという浦に行こうとするのか」と返したのは能因であった。しかし出家し、長い期間旅を続け、その間歌枕を実見し机上の歌作では得られない経験もしたが、同時に親しかった人と古来著名な歌枕の喪失なども経験した能因は、自分を「わび人」と認識し、「かくてもへけり」（一一三）という受動的な現実の受け入れ方から「とづくにぞよき」（一一五）と能動的に現実を受け入れようとする。

冬、雪に降りこめられて

千早ふる神な月ぞと言ひしより降りつむ物は峰の白雪（能因集・一一六）

陸奥にかたらふ人なくなりけりと聞きて、行きて

見れば、荒れたる宿に荒き馬をつなぎたり

とりつなぐ駒とも人を見てしかなつひにはあれじと思ふばかりに（能因集・一一七）

かうのみありてなど思ひて

岩ま行く水にも似たる我身かな心にもあらでのどけからぬよ（能因集・一一九）

都から遠く離れた地で冬を迎えた時の歌が一一六番歌である。和歌において神無月の天象といえば、「時雨」が挙げられる^{四七}が、今能因がいる辺境地では神無月になってすぐ、時雨の代わりに雪が降るのである（一一六）。そしてもう一度能因は知人の喪失を経験する。陸奥にいた人が亡くなり、その宿を訪ねたらすでに荒れている。そこにいる繋いでいる馬をみて、その馬が離れることがないように、亡くなった知人もそうであってほしいと追悼する（一一七）。そして岩間を流れる「のどけからぬ」水をみては、定まった居場所もなく漂泊する自分のことを考える（一一九）。このような一連の歌から考えるに、「やそしま」で得られた「世中はかくてもへけり」という現実把握と、「わび人はとづくにぞよき」という自己認識は、加速化していったかと思われる。

以後、能因は都へ戻ったらしく、復路での二首が続く。

^{四七} 「（題知らず）／神無月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神奈備の森」（古今・秋下・二五三・読人知らず）とあるように、神無月は時雨によって紅葉し始まる時期であることが歌を詠む上での約束事であった。能因のいる地は都よりも北の方であるゆえ、神無月になって時雨の代わりに雪が降る微妙な差を捉えて詠んだのである。

越前たいふの山といふ所に宿りて、六月ばかりに

を山田もまだいふばかりなきものをうたて露けき旅衣かな（能因集・一二〇）
はこそその山

草枕夜や更けぬらん玉くしげはこそその山は明けてこそ見め（能因集・一二一）

一二〇番歌は、「まだいふばかり」に地名である「たいふ」掛けた物名仕立ての歌で、下句の「うたて露けき旅衣かな」から旅の実感が感じられる。一二一番歌は、「はこそその山」という名に興じての歌で、「はこ」↓「明けて」に一首の技巧が認められるが、「草枕夜や更けぬらん」に旅の実感が確かめられる。この二首から、出羽国から北陸道を通して都に戻ってきたと考えられ、以上が能因の再度陸奥下向の歌群である。

そしてこのような旅の中で確認できるのは三点挙げられる。その一は、古来の歌枕を実際に目で確かめようとする姿勢が見え、それは歌の伝統の蓄積の中に自分を位置づけることであり、言葉の世界で存在する歌枕の具現化ともいえる。その二、地名の起源に対する好奇心がみられることであるが、これは歌枕を実見しようとする姿勢とも繋がっている。前述した陸奥の「音無の滝」「昔河」は歌枕として定まったところではなかったが、それでも能因はその地名の由来を探ろうとする。既に定まった歌枕を探訪しつつ、新しい歌枕を見つけようとする挑戦とも考えられる。そして最後は、旅の経験から得られた自己認識である。歌枕の実地まで足を運んで見つけた新しい発見もあったが、その間に知人や念願の歌枕の喪失なども経験している。そして長期間の旅から来る疲労と異郷の環境は、自分を内省する機会になったと思われる。この三つは個別に存在するのではなく、能因という歌人の特性として融合されているのであるが、古今時代を今に蘇らせるべき時代と認識していた新古今時代の歌人たちにとって、特に重視されたのは第一の特性ではなかったかと思われる。

このような陸奥下向から得られた経験が結実したのが、家集の一四〇〜一四九番に見られる「想像奥州十首」である。

想像奥州十首 三江浦月

さ夜ふけて都にいづる月影をみつ江の浦によひに見しかな（能因集・一四〇）

武隈の松

あとなくていくよ経ぬらんいにしへはかはり植ゑけん武隈の松（能因集・一四二）

宮城野

宮城野に秋の夕暮むしのねを草枕にていく夜ねにけん（能因集・一四二）

末の松山

白波のこゑに松風うちかへてたえせぬものを末の松山（能因集・一四三）

塩竈の浦

塩竈のうらに波立ちさ夜ふけて我身のうへと思ひしものを（能因集・一四四）

まがきの島

面影のなほ忘られで見ゆるかなまがきの島とむべもいひけり(能因集・一四五)
なでしこの山

つねに我が旅寝せしかなおくたまのなをつかしみなでしこの山(能因集・一四六)

あねはの橋

朽ちぬらんあねはの橋も朝な朝な浦かぜ吹きてさむき浜べに(能因集・一四七)

みつのえのあま

もしほ焼くあまだにいまは住まずとかみつえの浦に煙たえつつ(能因集・一四八)

のだのたま河

夕さればしほ風こしてみちのくの野田の玉川ちどり鳴くなり(能因集・一四九)

この十首の「想像」とは、何もないところから思い起こす意味での「想像」ではなく、都にいなながら、二度にわたる陸奥下向の経験や記憶を思い出す意味での「想像」である。この歌群には「武隈の松」「末の松山」「塩竈の浦」のように、下向の際の詠歌が確かめられる歌枕もあれば、「三江」「宮城野」「まがきの島」「なでしこの山」「あねはの橋」のように下向時の詠歌が確認できないものもある^{四八}が、今まで考察してきたような陸奥詠が凝縮されているような体になっている。たとえば、一四〇番歌は「夜深くなって都に出る月の光を、三江の浦では宵に見たことだ」と詠むが、それは「三江の浦」が都より東の方角にあるためで、場所によって月が出る時刻が変わる微妙な差を捉えた歌であるが、このような捉え方は前述したように、場所によって雪の降る時期が変わることを詠んだ一一六番歌からすでにみられた。また、一四二番歌の「宮城野で、秋の夕暮に虫の音を草枕にして、いく晩寝たのだろうか」という旅の実感が感じられる歌は、帰路での詠である一二〇・一二一番歌などで確認出来る。「塩竈の浦に波が立ち、夜が更けた。老けるのは自分のことだけだと思つたのに」と歌う一四四番歌の背景には、塩竈で「いみじう年へたる海人のあるを見て」詠んだ一一〇番歌が投影されている。この歌群の中で『新古今集』の陸奥詠と関連して注目されるのは、最後の「野田の玉川」である。

前述したように、『新古今集』に見られる初出の陸奥歌枕は全六種あるが、その内「信夫の浦」

^{四八} 平野由紀子はこの十首を、都から回想を語法で示しているものを一類、必ずしも語法からは都よりの回想といえないものを二類と分類してみると、二類の歌は旅での詠と呼応するような詠み方になっていることを指摘し、一類は呼応する歌がない分、読者にして省略された部分を想像させる効果があるとす。能因のこのような編集態度を「読み手に家集の一首一首を独立して評価してもらうより、歌ははじめから読み進むにつれ展開する世界を、全体として把握してほしかったのではなからうか」と指摘する。「能因の〈想像奥州十首〉について」『和歌文学研究』第三七号、一九七七年九月、三一五〜三一六頁。

の場合は「信夫」が『後撰集』初出、「松島の海人」の場合は「松島」が『後拾遺集』初出、「雄島の苦屋」の場合は「雄島が磯」が『後拾遺集』に、「雄島が海人」が『千載集』にそれぞれ初出である。つまり、これらの三つは『新古今集』初出ではあるが、先行する勅撰集で別の形の歌枕があつて、それを利用して新古今時代に新しく勅撰集への入集を果たしたものであるといえる。

そして「奥の海」と「壺の碑」の場合は先行する勅撰集からはそのバリエーションをみることは出来ないが、それぞれ歌の内容からして、修辭的な用法の歌枕であると考えられる。

(千五百番歌合に) 定家朝臣

尋ね見るつらき心の奥の海よ潮干の潟のいふかひもなし(恋四・一三三二)

前大僧正慈円、文にては思ふほどのことも

申し尽くし難きよし申し遣はして侍りける

返り事に 前右大将頼朝

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書き尽くしてよ壺の碑(雑下・一七八六)

定家の一三三三番歌は、詞書の通り歌合での作で、『源氏物語』の須磨卷の「伊勢島や潮干す潟にあさりてもいふかひなきは我が身なりけり」を本歌取りして、「伊勢島」の「潮干す潟」を陸奥の「潮干の潟」に、本歌では「いふかひなき」「我が身」を、相手の「つらき心」が「いふかひもなし」と変えて詠む。そして「奥の海」が単独の歌語というより、第二句からの続きで「心の奥の海」と、計り知れない相手の心を表現したように思われる。

続いての頼朝の一七八六番歌は、慈円の贈歌「思ふこといさみちのくのえぞいはぬ壺の碑書き尽くさねば」に対する答歌で、「いはで」に「岩手」、「しのぶ」に「信夫」、「えぞ」に「蝦夷」、「碑」に「文」が掛けられている。一首の中に多くの地名を詠み入れた巧みな詠みぶりではあるが、そのいずれも掛け詞としてのみ意味をもつものである。

これらに比べ「野田の玉川」詠では歌枕がもつ固有の力が生かされている。

陸奥国にまかりける時、よみ侍りける 能因法師

夕されば潮風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり(冬・六四三)

「想像奥州十首」の能因詠が冬部に撰ばれている。『拾遺集』の紀友則の歌「夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥鳴くなり」(冬・二三八)に影響を受けた能因詠は、「夕されば」と時間設定は同じくしながら、空間的背景を「佐保川」から「野田の玉川」に変え、「潮風こしてみちのく」と詠むことで、読者にして都から遠く離れた辺境地を思わせ、一首の中に感情を表わす歌語は詠まれていないが、「千鳥鳴くなり」の背景に友則詠の「友まどはせる千鳥鳴くなり」響かせることで、群れからはぐれた千鳥の鳴き声の寂しさを感じさせる。古今時代の歌人である

友則の歌を踏まえながら、聴覚による風景描写だけであるが、そこらしみじみと感じられる哀愁が新古今時代歌人たちの好尚にあい、『新古今集』への入集を果たしたと思われる。このように能因詠によって勅撰集の市民権をえた「野田の玉川」は、勅撰集での用例はそれほど多くないが、

光そふ野田の玉川月きよみ夕しほ千鳥夜はに鳴くなり（後鳥羽院御集・八八二）

百番の歌合に（順徳院御製）

陸奥の野田の玉川見渡せば潮風越して凍る月影（続古今・冬・六一七）

のように、新古今時代の歌人に影響を与えた。後鳥羽院の歌も能因詠の影響下にあるが、特に、順徳院の六一七番歌は、能因詠の本歌取りであることが確かめられる。両首とも、能因詠を下敷きとしながら、「野田の玉川」の景物として新たに「月」を詠み入れることで、新しさを追究したところに、新古今歌人たちの好尚が窺える。

以上、能因家集にみえるの陸奥下向を中心に『新古今集』の陸奥詠との関係を考えてきたが、第三節では、能因の影響が顕著であると指摘される西行法師の詠歌と、新古今時代の代表的歌人である定家の作かとされる『定家十体』にとられた能因詠を中心に、考察を進めて行きたい。

第三節 西行と定家における能因受容

前述したように、能因は『新古今集』に一〇首入集し、『後拾遺集』の三一首入集以来、『新古今集』において再注目された歌人であるといえる。新古今時代に再び注目される理由は、今まで考察してきたように、自分より前の歌人たちによって蓄積されてきた和歌の伝統を古典として認識し、それを積極的に踏まえて詠じることで新しさを作り出そうとした能因の姿勢が、新古今時代の一般的な詠歌方法として定着した本歌取り・本説取りの原型ともいえるところにあつたと思われる。同時に、第二節で確認したような、和歌の伝統の中で成立した歌枕に直接赴いて体験することで詞である歌枕を現実の中で蘇らす歌に対する態度が、都を中心に活動し、思いを巡らせて歌を詠む当時の歌人たちには新鮮であつたと思われる。そして、このような能因にもつとも刺激を受けたのは西行であろう。『詞花集』に一首（但し、読人知らず詠）、『千載集』に一八首を入集し、『新古今集』に九四首入集で入集歌数一位であり、新古今時代を代表する歌人である。西行の歌からは能因を意識した表現が見えるが、西行の歌での能因の受容様相を考察することによって、能因のどのような面を慕ったのかを確認したい。また、西行と並んで新古今時代を代表する歌人として挙げられるのは定家であろう。父親である俊成が撰した『千載集』初出で、『新古今集』の代表的撰者であり、『新勅撰集』を単独で撰するなど、新古今時代を語る上で欠かせない存在である。定家においては、西行のように明らかに能因を意識して詠んだ歌などはみ

られないが、定家の作とも考えられる『定家十体』に能因の歌がみられるので、どのような基準で能因の歌が選ばれているかを確認したい。

先ず、西行の能因受容であるが、「行動におけるの受容」と「詠歌における受容」の二大別にして考えて行きたい。「行動におけるの受容」は、『山家集』から確認することが出来る。

陸奥国へ修行してまかりけるに、白川の関に

泊りて、所柄にや常よりも月おもしろく哀れ

にて、能因が、秋風ぞ吹、と申けん折いつな

りけんと思ひ出でられて、名残多く覚えけれ

ば、関屋の柱に書付ける

白川の関屋を月の漏る影は人の心の留むるなりけり（山家集・一一二六）

第二節で確認した能因の陸奥下向と同様、西行もまた二回陸奥に下向している。三〇代〜四〇代の頃二回下った能因と比べて、西行の初度の下向の年次は定かでないが三〇歳を前後しての頃で、再度下ったのは文治二年、六九歳のことであった^{四九}。一一二六番歌はその初度下向時の歌で、長い詞書の中に能因の追慕の念が明らかにあらわれている。

陸奥に修行しに下った西行は白河の関に辿りついて、直ちに能因が「都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（能因集・一〇一）と詠んだのはいつ頃だったのかと思ひ起こす。折節月の光も普段より面白く哀れだったので詠んだ歌が一一二六番歌である。能因の歌では「秋風ぞ吹く」と歌が詠まれた季節があらわれているが、一一二六番歌では季節が直接あらわれていない。しかし、月が面白く哀れに人の感情を催す季節はやはり秋である。「白河の関」の関屋に泊って、「月の漏る影は人の心の留むる」のであるが、その「人」とは、今実際関屋に泊って月影を眺めている西行であり、昔「白河の関」を過ぎた能因でもある^{五〇}。能因の歌を慕って白河の関に下るといふ行動だけでなく、能因も昔眺めたであろう、変わることはない月影を眺めることでその「人の心」までも追体験しようとする西行の姿勢がみられる。

^{四九} 中西満義「西行の陸奥への旅」『国文学解釈と鑑賞』第七六卷第三号、至文堂、二〇一一年三月。以後、中西の論はこの論文による。

^{五〇} 白田昭吾も「能因の詠作時の状況や心境をもっと具体的に問う意識が強くなったことを考慮に入れれば、「とむ」は掛詞となっていると考えた方がよいのではなからうか。即ち、「人の心」には白河の関を訪れた折の能因の思い、及び、それが偲ぶ西行自身の心がこめられている」と指摘する。「白河の関」が「心かすめ」たのは、なぜ「逢坂の関」までなのか―西行の初度陸奥の旅詠「みやこいで」歌の詠みをめぐって―『弘前大学国語国文学』第一五号、弘前大学国語国文学会、一九九三年三月、五七頁。

関に入りて信夫と申渡りあらぬ世の
ことに覚えて哀也。都出し日数思ひ
続けられて、霞とともに、と侍こと
の跡たどりまうで来にける心一つに
思ひ知られてよみける

宮古出て逢坂越し折までは心かすめし白川の関（山家集・一一二七）

続く一一二七番歌では、「白河の関」を過ぎて「信夫と申渡り」に着いての詠である。西行にして「信夫の渡り」に足を運ばせたのは、第二節で考察した「浅茅原荒れたる野べはむかし見し人をしのぶのわたりなりけり」（能因集・一〇六）という歌であり、能因はここで「はやう見し人」の訃報を経験したところであった。西行はこの場所に来て、都を出てここまで辿りついた旅を省みるが、その原因となるのは「あらぬ世」である。能因の一〇六番歌において「信夫の渡り」は、知人が亡くなってすでに「浅茅原荒れたる野べ」と化していた。西行が実際にその場所についたところ、能因が知人を亡くして感じたような「あらぬ世」を感じたはずである。一一二六番では能因ゆかりの「白河の関」について、月影に催されて「人の心の留むる」と詠んだ西行である。「白河の関」の「月の漏る影」と、「信夫の渡り」の「あらぬ世」の格差は、今までの旅を省みるきっかけになったと思われる。

武隈の松も昔に成たりけれども、跡をだに

とて見にまかりてよみける

枯れにける松なき宿の武隈は見きと言ひても効なからまし（山家集・一一二八）

西行が次に訪れたのは「武隈の松」である。第二節で考察したように、「武隈の松」は『後撰集』の「植ゑし時契りやすけん武隈の松をふたゝび逢ひ見つる哉」（雑三・一二四一・藤原元善）という歌以来、「松が枯れる／植え替えられる」ことが主な詠み方であるが、この西行詠は直接的には『後拾遺集』の「武隈の松はふたきを都人いかかと問はばみきと答へむ」（雑四・一〇四一・橘季通）を踏まえている。しかし、「武隈の松」を实見しようとした動機になるのは、能因の「武隈の松、初めのたびは枯れながらもくひなどありき、このたびはそれもなし／たけくまの松はこのたび跡もなし千とせを経てや我は来つらん」（能因集・一〇七）なのである^{五二}。能因詠は詞書「初めのたびは枯れながらもくひなどありき、このたびはそれもなし」を「このた

^{五二} 白田昭吾「西行のみちのく」『国文学解釈と教材の研究』第三九卷第八号、学灯社、一九九四年七月、に指摘がある。中西満義、前掲論文にも同じ指摘がある。

「跡もなし」と詠むが、西行はそれを受けて、「武隈の松も昔に成たりけれども、跡をだにとて見にまか」るのである。「枯れては植え替えられる」のが一つの詠み方であると指摘したが、それならば西行は生きている「武隈の松」を見にいつてもよいはずであるが、最初から「昔に成たりけれども」と、植え継がれたのは遠の昔のことと規定し、「跡をだに」とするところが、「枯れては植え替えられ」たものを見にいくわけではなく、もうそこに「武隈の松」がないのを承知の上で、能因がみたとする「跡もなし」「武隈の松」を見にいくのである^{五二}。

このようにみると、西行の能因に対する並々ならぬ敬慕の念が確認出来る。西行にしてこのような行動に出るようにしたのは、出家後の修道者としての生き方は別として、同じ出家歌人としての認識もあつたと思われるが、それよりも、能因が実体験によって自分の歌の境地を獲得して行ったことへの尊敬の念が大きかつたと思われる。西行も能因を追体験することによって、言葉の中に存在する情緒を具体的なものとして内在化しようとしたと思われる^{五三}。

ここまでは『山家集』を中心に、西行の能因を追慕する行動について考察したが、『新古今集』入集の西行詠を通して「詠歌における受容」を確認して行きたい。第一節で確認した、「秋篠や外山の里やしぐるらん生駒の嶽に雲のかかれる」（冬・五八五）から能因の影響が確認されるが、それ以外にも、能因詠の影響が考える西行詠は、次のような歌がある。

（題知らず）

西行法師

心なき身にもあはれは知られけり 鳴立つ沢の秋の夕暮（新古今・秋上・三六一）

（題知らず）

西行法師

津の国の難波の春は夢なれや 蘆の枯葉に風渡るなり（新古今・冬・六二五）

三六一番歌と、六二五番歌が次の次の能因詠の本歌取りであることは、知られている。

正月ばかりに津の国にありて、人のもとにいひやる

心あらむ人に見せばや 津の国の難波の浦の春のけしきを（能因集・八三）

^{五二} 白田昭吾も「最初からいないことが判っていないながら、敢てこの地を尋ねたのは、歌枕を實地に確認したいという歌枕探訪の目的もあるが、能因に縁ある場であつたことがより強いインパクトになっていたのではなかったろうか。」と指摘する。前掲論文、八六頁。

^{五三} なお、菊池成子は、西行の若年の頃の周辺に、能因の逸話を伝える『俊頼髓脳』の著者源俊頼をはじめ、能因と同族である橘氏の人物が多かつたことが西行の能因像の形成に影響を及ぼした可能性を指摘する。「西行と能因―能因追慕の素因をめぐって―」『国学院雑誌』第八五巻第七号、一九八四年七月。

能因の八三番歌は、「題不知／難波潟浦吹く風に波たてばつのぐむ蘆の見えみ見えずみ」（後拾遺集・春上・四四・読人知らず）のように、「難波」の景物である「蘆」を直接詠まずに、「難波の浦の春のけしき」と詠むことで、小さい詠歌対象に集中するのではなく、一つの全体像としての絵、いわばパノラマのような視点を美意識として提示し、それに応えられる人を「心あらむ人」と規定する。この挑発的ともいえる問いかけに対して、西行は自分を「心なき身」と規定し、それでも「あはれは知」と応える。それを知らしめるのが下句であるが、体言止めにより、余情がしみじみと伝わってくる^{五四}。六二五番歌はもつとはつきり能因の八三番歌を踏まえていて、「心あらむ人」に見せたいと思っていた「難波の春」が夢のように消え去り、枯れた蘆に風が吹き渡る寂しい情景が淡々と詠まれているが、第三句の「夢なれや」に詠者の気持ちが深くあらわれている。二首とも、能因の歌を踏まえながら、季節を変え、または詠者の自己認識を変えて本歌とは全く違う歌として詠み上げている。また、西行が二首も同じ能因詠を踏まえて詠んだことは、先述した西行の行動にもあらわれているように、普段から能因詠に注目し、そこから自分の歌境を拡張していったことを物語る。

以上、西行における能因の受容を考察したが、新古今時代を代表する歌人の形成において、能因という存在がもつ意味が確認出来たと思われる。続いて、定家の『定家十体』の入集の能因詠について考察を進めたい。『定家十体』について、『和歌文学大辞典』では次のように説明されている。

定家十体「鎌倉時代歌学書」藤原定家撰。『十体』『和歌十体』とも。和歌の歌体を一〇種類に分類し、各々の歌体について例歌を掲出するという形態の歌学書。建保六・1218年頃の成立か。歌体分類の書としての『和歌体十種（忠岑十体）』『和歌十体（道濟十体）』の系譜を受け継ぐ。一〇の歌体の名称は『毎月抄』中に見える一〇の歌体と一致しており、『毎月抄』と一具の書として構成されたと推定される。『毎月抄』とともに偽書説も根強いが、撰歌の様相から推論して定家の作と判断される。（中略）例歌の約八割は『新古今和歌集』から選ばれており、（中略）各歌体の特性を意識しつつ、自由な蓮想に基づく撰歌と配列が為されている。^{五五}

十体を挙げると、「幽玄様」^{五八首}「長高様」^{二二首}「有心様」^{三九首}「事

^{五四} なお、第二節で考察した能因の陸奥下向の歌の中で、塩竈で詠んだ「さ夜ふけて物ぞ悲しき塩竈はもはがきする鴨の羽風に」（能因集・一〇九）歌に「鴨」も詠まれていて、西行の三六一番歌との関連性を思わせる。

^{五五} 『和歌文学大辞典』、古典ライブラリー、二〇一四年、執筆は田仲洋己。

^{五六} 〇の歌数は『新編国歌大観』での各歌体の例歌数。

可然様」(二五首)「麗様」(二四首)「見様」(一二首)「面白様」(三三首)「濃様」(二八首)「有一節様」(二六首)「鬼拉様」(一二首)であり、能因詠はこの中で「幽玄様」に一首(四五)^{五七}、「長高様」に二首(六五・七八)、「濃様」に一首(二二二)、「鬼拉様」に一首(二七二)と、計五首が撰ばれていて、全て『新古今集』に入集した歌である。

能因詠を確認する前に、『定家十体』ではそれぞれの歌体について全く説明されていないので、『毎月抄』での歌体の説明をみることにする。

一、もとの姿と申し候は、勘へ申し候ひし十体の中の幽玄躰・事可然躰・麗躰・有心躰、これらの四つにて候べし。この躰どもの中にも、古めかしき歌どもはまま見え候へども、それは古躰ながらも苦しからぬ姿にて候。ただ素直にやさしき姿をまづ自在にあそばしたためて後は、長高躰・見躰・面白躰・有一節躰・濃躰などやうの躰はいとやさき事にて候。鬼拉の躰ぞたやすくまなびおほせ難う候なる。それも練磨の後はなどかよまれ侍らざらむ。初心の時よみ難き姿にて侍るなるべし。^{五六}

二、さて、この有心躰は余の九躰にわたりて侍るべし。その故は、幽玄にも心あるべし、長高にもまた侍るべし。残りの躰にもまたかくの如し。げにげにいづれの躰にも、実は心なき歌はわるきにて候。^{五九}

三、申さば、すべて詞にあしきもなく宜しきもあるべからず。ただ続けがらにて歌詞の勝劣侍るべし。幽玄の詞に鬼拉の言葉などを列ねたらむは、いと見苦しからむこそ。^{六〇}

四、さきに記し申しにし十躰をば、人の趣を見て授くべきにて候。器量も器ならぬもうけたるその躰侍るべし。或は幽玄の躰をうけたらむ人に鬼拉の躰をよめと教へ、また長高様得たる輩に濃躰をよめと教へむ事は何かよかるべき。^{六一}

『毎月抄』にも歌体一つ一つに対してどのよな意味であるかはほとんど説明されておらず、ほぼ心構えに近い内容になっているが、歌体を学ぶことには段階が必要で、まず基本になるのは「幽玄躰・事可然躰・麗躰・有心躰」の四体である。それに馴れると「長高躰・見躰・面白躰・有一節躰・濃躰」の五体を詠めるようになるが、この中で「有心躰」は九つの体にわたってあるものとする。そして詞続きにおいて、体を混同して連ねると、見苦しい歌になるとする。そして人によってはそれぞれ得意とする体とそうでない体があつて、「幽玄体」を得意とする人に「鬼

五七 ○は『新編国歌大観』での歌番号。

五八 『歌論集』、前掲書、四九四～五頁。

五九 『歌論集』、前掲書、四九七頁。

六〇 『歌論集』、前掲書、四九八頁。

六一 『歌論集』、前掲書、五〇五頁。

「拉躰」を詠むように教えたり、「長高様」を得意とする人に「濃体」を教えるのはよくないこととする。ここには、「幽玄体」と「鬼拉躰」が、「長高様」と「濃体」がそれぞれ対照的な歌体のような書き方になっている。武田元治は一〇体を詳しく考察しそれぞれの体の特徴について簡単に要約したが、能因に該当する体のみを取り上げると次のようになる。

幽玄様―世俗を離れた深さを特徴とする歌体。

長高様―格調の高さや大きさを特徴とする歌体。格調は作品の単なる外面的な体裁や調子でなく、精神が作品の形態に表れた特徴としてのそれらを意味する。

農様―感情内容をきめ細かく表現した点を特徴とする歌体。

鬼拉様―力強い表現を特徴とする歌体。^{六二}

なお、『定家十体』の体裁には「前後の歌々との間に様々な連想の脈絡を張り巡らせながら基本的に自由な選歌態度を取るものの、本書の撰者は季節や部立や主題の配分についてもけつして無頓着ではなく、例歌群全体の撰歌のバランスと言ったものにも一定の配慮を払っていると考えられ」「修辞、表現面のみならず、例歌各々の作者の次元においても、前後の歌との間に配列上の関連性を見出すことのできる部分が幾つか存在する」^{六三}ので、このような考察を念頭に置きつつ能因詠をみることにする。まず、「幽玄様」に選ばれた一首は、

山里の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける

（定四五／新古今・春下・一一六、詞書「山里にまかりてよみ侍ける」）^{六四}

である。『拾遺集』にある「山寺の入あひのかねのこゑごにけふもくれぬときくぞかなしき」（哀傷・一三二九・読人知らず）と、「入相の鐘」を詠んでいる点は共通するが、その鐘の音によつて一日が暮れてしまう悲しさを詠んだ『拾遺集』一三二九番歌に対し、能因詠は山里の長閑な春の夕暮を場面とする。そして花が散る瞬間と入相の鐘が響く瞬間が重なり、聴覚を視覚で、または視覚を聴覚で捉えたような歌境をみせている点が「幽玄様」に撰入された理由であったと思われる。また、「幽玄様」の中での構造の面から考えると、

紫の戸に匂はむ花はさまあらばあれ眺めてけりな恨めしの身や

^{六二} 武田元治『定家十体の研究』、明治書院、一九九〇年、三〇三〜三〇五頁。

^{六三} 田仲洋己「『定家十体』再考」『岡山大学文学部紀要』第三九号、二〇〇三年七月、五三〜五四頁。

^{六四} 『定家十体』での番号を「定十数字」で表記した。

(定四三・前大僧正／新古今・雑上一四七〇)

花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふる眺めせし間に

(定四四・小町／古今・春下・一一三)

山寺の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける

(定四五・能因／新古今・春下・一一六)

桜咲く花の山辺は憂かりけり世を逃れにと来しかひもなく

(定四六・多けい／新古今・春下・一一七)

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ

(定四七・西行／新古今・雑中・一六一九)

四三番歌から四七番歌までは、主に「花」を中心に連想が働き、四三から四四には「眺め」「身」の共通点が、四五番の「山寺」は四六番で「山辺」と転じ、「花」(四五)↓「桜」(四六)↓「吉野山」(四七)の連想も働いたと思われる。また、四三番から四七番までは四四番を除いて、出家歌人の歌が続くが、その間に小町詠が挟まれているのは、一番の理由は先指摘したように四三番歌との歌語の共通が一番の理由であると思われるが、『能因集』の上巻末に出家前の能因が夢の中で小町と歌を詠み合った歌が並べられている(『能因集』六三〇六五)ことが考慮されているとも考えられる。

続いて「長高様」には、次の二首がとられている。

かくしつつ暮れぬる秋と老いぬればしかすがに猶ものぞ悲しき

(定六五／新古今・秋下・五四八、詞書「暮の秋、思ふ事侍ける頃」)

時雨の雨染めかねてけり山城の常磐の森の真木の下葉は

(定七八／新古今・冬・五七七、詞書「十月ばかり、常磐の杜を過ぐとて」)

五四八番歌は、自分の老いを素直に詠んだ歌である。ただでさえ物悲しさを催す秋なのに、その秋が暮れるのと一緒に自分も老いてしまう。それは自分でも充分承知しているけれど、それでもやはり物悲しい気持ちはどうしようもない、と詠む。歌は表現の上では特にこれといったものがなく、ただ素直に自分の老いへの実感を詠んだ歌であるが、これが「長高様」に撰入された理由は何であるうか。もちろんこの歌がしみじみとした述懐歌としての価値を認められた理由もあるが、それを考えるに、この歌の前に並べられている歌が参考になるとと思われる。

岡の辺に里の主をたづぬれば人は答へず山下ろしの風(定六二・前大僧正)

立田山あらしの後の高嶺より木の葉曇らで月や出づらむ(定六三・丹後)

いづ方へ雲居の雁の過ぎつらむ月は西へぞかたぶきにける(定六四・かやの齋院)

かくしつつ暮れぬる秋と老いぬればしかすがになほ物ぞかなしき(定六五・能因)

「山下ろしの風」(六二二)から「あらし」(六三二)が連想され、第五句の「月や出づらむ」(六三三)から「月」(六四四)が詠まれる。そしてその「月」が「西へかたぶ」くことは、時間の経過を意味し、「暮れぬる秋」(六四五)となり、それと共に自分の老いへの実感をする、という構造になろうかと思われる。

五七七番歌の撰入理由を考える上で、『新古今和歌集全註釈』^{六五}は、『新古今和歌集聞書』に、この歌に対して次のような解釈していることを指摘する。

槇は常磐なる物也。紅葉したるには非ず。木はことごとく紅葉して、時雨にあらそふ躰なし。常住なる槇に打めぐりく時雨のするを見て、「うき事はのがれざりけり。心の内にはさぞくるしかるらん」とおもひやる心の色を染たる也。大事の歌也。能々秘すべし。此歌にて、俊成卿、心とや紅葉はすらん竜田山待つは時雨にぬれぬ物かは

『新古今集』での詞書「十月ばかり、常磐の杜を過ぐとて」を読む限り、この歌は歌枕「常磐の杜」と、針葉樹である「真木」が紅葉しないことに興じての歌であり、『新古今和歌集聞書』のこのような忍耐の精神等を詠み取ることは難しいように思われる。しかし、「長高様」に撰入する理由としては、『新古今和歌集全註釈』が指摘する「中世の人々が木々を紅葉させる時雨に抗している「真木の下葉」ということで、この歌に一種の強さを感じたらしい」ことも無視できないように思われ、同時に「時雨の雨」と、万葉時代を思わせる歌語を詠み入れたことも撰入の理由として考えられる^{六六}。

続いて「濃様」に撰入した歌は、

夏草のかりそめにとて来しかども難波の浦に秋ぞ暮れぬる

(定二二二／新古今・秋下・五四七、詞書「津の国に侍ける頃、道済が許につかはしける」)

^{六五} 久保田淳『新古今和歌集全註釈』第二巻、角川学芸出版、二〇一一年、三六一頁。

^{六六} 武田元治は、定家の「たけ」に関する歌合の評語を考察して、「定家の「長高」関係の評語の用法は、俊成の観点をほぼ充実に継承している」とするが、俊成の「長高」に関する評語は「『万葉集』の歌などに一般に見られる格調の高さや大きさを認めた評語として考え」られる藤原基俊の観点を継承しつつ、「優美な中に感じられる格調の高さや大きさを意識していたと見られる」と指摘した。「長高様」、前掲書第五章、一五五〜一七九頁。

である。『新古今集』の詞書は『能因集』^{六七}に比べて簡略な形であり、ただ道済に歌を贈っただけのことになっているが、『能因集』によると、一緒に津の国に下る約束をして能因が先に下って待ったが、季節が変わっても来る気配のない道済に贈った歌である。『定家十体』には詞書がないので、どれほどこの歌の背景を汲んで「農様」に撰入したかは疑問ではあるが、『能因集』の詞書をも視野に入れての撰入であれば、このような知人に対する細やかな感情を汲んでの撰入であったと思われる。また、前後する歌との関係においては、

しめ置きて今はと思ふ秋山のよもぎがもとに松虫の鳴く

(定二一八・俊成／新古今・雑上・一五六〇)

我のみやあはれと思はむひぐらしの鳴く夕影の大和撫子

(定二一九・素性／古今・秋上・二四四)

眺めわびぬ秋よりほかの宿もがな野にも山にも月やすむらむ

(定二二〇・かや／新古今・秋上・三八〇)

荒れわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露の夕暮

(定二二一・俊成卿／新古今・雑上・一五六一)

夏草のかりそめにとて来しかども難波の浦に秋ぞ暮れぬる

(定二二二・能因／新古今・秋下・五四七)

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟

(定二二三・たかむら／古今・羈旅・四〇七)

草枕ゆふ風寒くなりにつけり衣打つなる宿や借らまし

(定二二四・貫之／新古今・羈旅・九〇五)

忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものをふるさとの月

(定二二五・後京極殿／新古今・羈旅・九四一)

月見ばと契り置きてしふるさとの人もや今宵袖濡らすらむ

(定二二六・西行／新古今・羈旅・九三八)

のように、二一八番から二二二番まで、秋の景物を詠み入れた歌が四首続き、二二三番の能因詠を挟んで、二二三番から二二六番まで羈旅の歌が四首続くのである。つまり、秋歌(二一八〜二二二)↓秋が詠まれている羈旅の要素(第三句「来しかども」)を持つ歌↓羈旅(二二三〜二二六)という構造も想定出来る。この点から考えると、『定家十体』には詞書がないが、やはり能

^{六七} 「秋、津の国に下りて、道济朝臣のもとに、くだらんなどもいひしものを、など思ひてかういひやる」(能因集・四八)から、道济が一緒に下ることを約束したが、来なかったことが分かる。

因の二二二番歌を選定するにあたって、その背景にある事情をも考慮されての撰定であり、この位置に配列したと思われる。

最後に、「鬼拉体」の歌は、

ねやの上に片枝さし覆ひそともなる葉広柏に霰降る也

(定二七二／新古今・冬・六五五、詞書「(題知らず)」)

である。歌は大きく二つに分けて考えられるが、一つは自分の「ねや」を覆いかぶさるように生えている「葉広柏」の描写がそれであり、一つはその「葉広柏」に降る霰の音である。静かに降る雪ではなく、霰なのでその音が想像され、また草原のような広々としたところでなく自分の「ねや」を覆っている「葉広柏」という歌語もまた太い線を感じさせる。「鬼拉体」への撰入はそのような力強さを感じさせる詠みぶりであったと思われる。なお、この歌は次の宮内卿の歌「片枝さす」をふの浦梨初秋になりもならずも風ぞ身にしむ」(定二七三)と、「片枝さす」という歌語が共通するだけで、それ以外の前後の歌とはあまり共通点はみられない。

以上、『定家十体』の撰入された五首の能因詠を確認したが、定家が直接それぞれの歌体についての性格規定をしていないので、特にどの面を重視したかを推測するしかないが、次のような点を確認されたかと思われる。

一、「かくしつつ」(六五)のような、嘆老歌も含まれているが、一応五首とも『新古今集』の四季部に属する歌が撰ばれている。

二、能因詠そのものの価値も認められたはずではあるが、前後する歌との関係・連想において役割をする場合も確認できる。

三、前述したように、『毎月抄』においては、「幽玄様」と「鬼拉様」、「長高様」と「濃様」が互いに対照的な歌体のような書き方になっているが、能因詠は五首に過ぎないにもかかわらずこの四つの歌体に全部撰入されている。

以上、『定家十体』における能因詠の撰入状況を確認したが、定家が直接能因を取り上げて言及する表現がないため断定は出来ないが、右の「三」でみたように、能因詠から多面的な要素を認めて『定家十体』に撰入したと思われる。先に考察した西行の能因の受容を含め、新古今時代を代表する二人の歌人が能因に対して方向性こそ違いますが、興味を持っていたことは確かめたと思われ、それは能因という歌人に、中世に繋がる要素があったからこそそのことではなかったかと思われる。

おわりに

以上、新古今時代の能因がどのように受容されたかを考察した。第一節では『古今集』初出の歌枕「天の川（原）」、『後撰集』初出の歌枕「岩瀬山」、『拾遺集』初出の歌枕「十市の里（村）」、『後拾遺集』初出の歌枕「生駒山（嶽）」と「有渡浜」を対象に、それぞれの歌枕が初出以来用例があまり見られずに『新古今集』に再び用例が見られる場合、その間に『能因歌枕』や『能因集』『玄々集』からその用例を確認すること出来ることを論じた。第二節では、『新古今集』に多くみられる陸奥関連の歌枕に対する関心の有りかを考える際に、『能因集』の中巻にみられる二度にわたる陸奥下向の歌と関連づけて考えて見た。その結果、能因の陸奥旅は、自分の足で和歌の伝統の中で形成された歌枕を探訪することであり、その過程で得られた経験によって歌を詠むことで歌境を広くすると同時に、和歌の伝統に自分を位置づけることでもあることが確認出来た。第三節では、新古今時代に特に大きな存在である西行と定家を中心に、能因の受容を考えた。西行の『山家集』の歌からは、能因を追体験することが西行という歌人の形成において大きな影響をあたえたことが確認出来、『新古今集』に入集した歌の中、能因詠を本歌取りした二首の歌からは、西行が普段から能因の歌を熟知していて、それを本歌取りすることで自分の歌境を広げて行ったことが確かめられた。定家においては、『定家十体』に新古今時代の歌人を多く撰入する中で、それに並んで能因の歌も五首とり、「幽玄様」と「鬼拉様」、「長高様」と「濃様」というそれぞれ対照的な性格を持つとされる歌体に撰入することで、能因詠がもつ多面的な性格を認めていたと考えられる。能因詠は歌そのものの価値が認められた結果撰入されたと思われるが、特定の歌や歌人の間に配置されることで、前後する歌の連想を繋ぐ役割をも担っていることが確認出来た。総じて、新古今時代の能因受容は、古今を新しく蘇らせようとした時代の風潮と、能因の和歌の伝統の中に自分を位置づけようとした生き方から形成された歌風とが融合し、注目された結果であったと思われる。

結論

本論文においては「能因法師の歌風の研究」というテーマで、能因の撰集から確認出来る能因の歌風について考察を行った。それぞれの章を短く要約してみたい。

第一章「『拾遺集』との重出歌からみた『玄々集』」では、『玄々集』にみられる、三六首の『拾遺集』との重出歌に焦点を当てて考察した。『拾遺集』に注目したのは、この集が、能因が生きている間に撰集された唯一の勅撰集であるからである。天皇の命によって編纂される勅撰集は撰集された当時のもっとも権威のある歌集で、時代の好尚を反映していると思われる。また、歌人にとっては、勅撰集の入集歌人になることが歌詠みとしての公的な地位を付与される意味を持つていたのである。『拾遺集』が編纂された寛弘初期の能因は、十代半ばを過ぎた頃であったと思われる。第二章で考察する、歌道上の師匠とされる藤原長能邸の門を叩いたのもこの頃であったと思われる。つまり、勅撰歌人になるには若すぎたのである。能因は、『拾遺集』が編纂されるのをみて、いつかは自分も勅撰歌人になることを夢見たはずであるが、生前そのようなことはなく、能因が勅撰歌人になるのは死後三〇余年が経つてのことであった。能因は『拾遺集』の次なる勅撰集の編纂事業を待ちつつ、『玄々集』を撰集したと思われるが、『拾遺集』との重出歌を三六首有しつつ、自分で撰歌した歌を加えて歌集を成立させたことは、示唆的である。何故なら、『拾遺集』との重出歌がもつ意味は、能因が『拾遺集』の撰歌眼に共感するということであり、それに自分の撰歌眼によって新しく歌を撰んだことになるからである。それでまず、第一節「『玄々集』と『拾遺集』の重出歌（A群）」では、実際『拾遺集』との重出歌はどのようなものが撰ばれているか、どのような歌人が撰ばれているかを確認した。『拾遺集』との重出歌三六首は歌人で分類すると二七人で、御形宣旨以外は全て『拾遺集』初出歌人であることは『玄々集』序文の「今予所撰者、永延以来寛徳以往篇什也」の撰歌範囲を充実に守っていることが分かる。また、大江為基、源為憲、御形宣旨、栗田殿の上、観見僧都、平祐拳、源頼光、大江正言、善滋為政以外の十八人は勅撰集入集歌数が十首以上であることは、『拾遺集』での入集歌数こそ少なくとも、後世の勅撰集において高く評価される歌人たちが揃っている点で、能因の撰歌意識と歌人意識の正しさがあらわれている。また、この三六首の歌を勅撰集の部立を基準に分類すると、勅撰集の両柱である四季歌と恋歌のみならず、雑歌と哀傷歌も大きな部分を占めていることが分かる。『能因集』にみられる多くの知人を偲ぶ哀傷歌や、中巻以降特に顕著にあらわれる述懐歌や嘆老歌は、このような基盤の上で形成されていると思われる。また、歌の表現においては、三代集的世界の完成ともいわれる『拾遺集』との重出歌だけあって、伝統的な素材を伝統的な詠法で詠んだ歌を撰んでいる傾向がある。複雑な技巧なしで、ひとすじで詠み下す歌が多くみられる。その中でも、聴覚や視覚など、感覚を詠んだ歌には情景をそのまま充実に詠む歌が目みられるが、『能因集』にみられる情景歌は、このような詠法に影響されつつ形成されたと思われる。

第二節「A群歌人の『玄々集』におけるその他の歌（B群）」では、『拾遺集』との重出歌を持つ歌人の、能因が自分の撰歌意識のもとで撰んだ歌を考察した。この歌数もまた三六首であるが、

四季歌は五首と少数に過ぎず、恋歌・雑歌・哀傷歌を積極的に撰んでいる。四季歌からは、伝統的な詠み方に立つ季節と景物の組み合わせがみられ、人事詠からも序詞のような能因の時代にはすでに古い詠法や、縁語・掛け詞による歌がよくみられる。その中で、この三六首の中に「花の都」を詠んだ歌を撰んでいるのが注目される。「花の都」は都の外側から眺めて華やかな都を相対化した歌語で、勅撰集では『後拾遺集』初出である。この「花の都」を詠んだ歌は「花の都」と対応する場所が一緒に詠まれる二元構造になっていることが多く、「花の都」をせわしい場所と感じながらも、身を都の外に置きながら絶えず心は都に回帰する、揺れ動く感情を詠むことが多い。能因はいち早くこの歌語を詠んだ歌を自分の私撰集に入れつつ、『能因集』にも自分が詠んだ「花の都」詠を撰んでいる。『拾遺集』時代の歌人の歌語を摂取し、自分の詠歌の上で生かしていく態度が窺える。またもう一点、この歌群で注目されるのは、歌枕の多様化である。第一節で考察した『拾遺集』重出歌歌群で確認出来る歌枕は、「春日野」「吉野山」「井出」「朝の原」「逢坂の関」のような、大和・山城・近江といった畿内の歌枕に集中する傾向があったが、この歌群では「あぶくま河」「室の八島」「越路」「富士」「清見が関」「衣の関」のような、陸奥・下野・駿河・越前など、多岐にわたる。もちろんその詠法においては、現地詠でないのがほとんどなので、観念上・修辞上の歌枕ではあるが、能因にして旅に立たせたのはこのような和歌の伝統から生まれた歌枕なのである。それは、『能因集』における多くの旅詠として結実をみることになる。

第三節「能因独自の撰歌による歌人と歌（C群）」では、『拾遺集』以後の勅撰集初出歌人（『拾遺集』初出歌人ではあるが、『拾遺集』との重出歌をもたない歌人八人を含む）や、勅撰歌人ではないが能因が独自の撰歌意識で撰んだ歌について考察した。この条件に該当する歌人は六五人で、歌数は全体の半分以上の九五首である。第一節と第二節で考察した歌人たちは『拾遺集』によってすでに公的な歌詠みとして地位を認められた歌人たちであるが、この六五人は能因の独自の歌人意識や撰歌意識で撰ばれたといえる。この内九人は勅撰歌人にはならなかったが、（『拾遺集』初出の八人を除く）他の四八人は『後拾遺集』以降の勅撰集に入集を果たすことから、能因の歌人意識が確かなものであったことが分かる。定量的に歌を分けると、第一節と第二節の歌より四季歌が多く撰ばれているが、人事詠を重視する姿勢は変わらない。四季歌においては、三代集時代の擬人法や、特定の季節と景物の組み合わせを利用した、技巧無しの歌を多く撰んでいる。このような傾向で注目されるのは、第一節で考察したような、聴覚と視覚による感覚的で清新な情景歌を積極的に撰んでいることである。しかも、そのような歌を詠んだ歌人たちは藤原長能・大江嘉言・藤原範永といった、能因と深く親交を持った歌人たちである。能因は『玄々集』を通して積極的に知人たちの詠歌の価値を知らせようとする一方、『能因集』においてそのような詠風を充実に取り入れた跡がみえる。歌枕においては、第二節で確認したように、畿内地方に限定されず、多くの地方の歌枕詠が確認でき、能因の関心のありかを見せる。この歌群は第一節と第二節の歌群に比べ、現地詠が多くとれているのが特徴であるが、それに伴って、都への回帰を強く意識する歌がみられる一方、厭世の歌や沈淪の歌も目立つ。能因の晩年の撰集

であって、人生を省みた感慨が他人の歌の撰歌にも影響を及ぼしたと思われる。

以上のように、『玄々集』の歌を三つの歌群に分けて考えた際、能因は『拾遺集』重出歌から伝統的な詠法の歌をとりながら、それに甘んずることなく、新しい歌風を提示しようとしたと思われる。機智や複雑な技巧に走ることなく、ひとすじに詠み下す詠法がそれであり、淡々と叙景を詠みながらそのなかで抒情を醸し出す詠法がそれである。また歌枕においても、各国の歌枕詠や現地詠を多くとっているのは、平安時代のほとんどの貴族が一生京から出ることなく觀念上・修辞上の歌枕、それも畿内に集中した歌枕を詠むことに対して、一つの詠み方を提示しようとしたと思われる。新しさを追究した能因の姿勢が窺えるが、ここで忘れてはならないのは、能因が和歌の伝統に立って新しさを追究したことである。能因のスタンスの基本はあくまでも和歌の流れの中に自分を位置づけることであつたと思われる。

第二章「『玄々集』所収長能詠の撰歌意識」においては、『玄々集』所収の長能詠を考察した。特に長能詠を取り上げた理由は、長能が『玄々集』の最多入集歌人であるからである。当時の歌壇の第一人者は第三章で取り上げる藤原公任であつたが、能因は敢えて長能の歌を『玄々集』に多く撰んでいる。第一章で確認したように、『玄々集』には、和歌の伝統に立ちながらなお、自分の撰歌意識を通して詠み方を提示しようとする態度があらわれている。そのような意味で、最多入集の長能詠がもつ意味は大きいといえる。

第一節「長能詠の他歌集への入集状況及び詠歌時期」では、長能詠の表現を考察するに先だつて、『玄々集』の長能詠の詠歌年次について考えた。底本とした『玄々集』の長能詠は一〇首であるが、その内一首は、原因は不明であるが、『万葉集』の異伝歌と考えられるので、九首を対象とした。『玄々集』より先立つ撰集類への長能詠の入集状況を確認すると、『拾遺抄』『拾遺集』『後十五番歌合』にそれぞれ入集が確認出来るが、『玄々集』の長能詠との共通歌は、『拾遺集』に一首あるのみで、その一首も「読人知らず」となっている。『玄々集』の長能詠が、『拾遺抄』『拾遺集』『後十五番歌合』より後に詠まれた可能性も考えられるので、『長能集』で確認出来る詞書の登場人物の官職表記によって詠歌時期を考えた。その結果、『拾遺抄』の成立より前に詠まれたと思われる歌も撰歌の対象としていたと考えられ、『拾遺集』との重出歌を一首（読人知らず詠）あるが、能因が長能詠を撰ぶ基本方針として、他の撰集類に入集していない歌を撰ぶ方針であつたと思われる。それは、自分の師の歌を、自分の撰歌眼で撰んだことを前面に出す意図が働いた結果であると思われる。

第二節「長能詠の表現の特徴」では、そのような独自の撰歌意識で撰ばれた長能詠の詠み方の分析を試みた。その結果、『伊勢物語』の影響が想定できる歌・古今時代の歌人たちの歌の歌語や発想を踏まえた歌・長能が活動した時代にすでに古いとされる万葉時代の歌語を詠み入れた歌のように、保守的な宮廷歌人としての一面が窺える。一方、その中からは、修辭的な意味で詠まれることの多かった歌枕に臨場感をあたえる詠み方をとったり、色の鮮やかなコントラストに主眼を置いたり、色のないものに色を見つけ出す詠み方をするなど、新しい試みもみとめられる。『玄々集』に長能の歌を撰ぶ際、敢えて『玄々集』より先に成立した撰集類に採られていない歌

を対象に、和歌の伝統の中での歌語や表現を踏まえながら、新しい視点を提示する歌を撰ぶ事によって、師の歌の優れている点を訴えると同時に、既存とは違う独自の撰歌眼を見せる意図があったと思われる。

第三章「藤原公任に対する認識」では『玄々集』の公任詠と関連説話を中心に、能因の公任に対する認識を論じた。能因が活動していた時代にもっとも重要な位置を占めていた歌人は公任で、藤原道長を頂点とする撰関期の歌壇の権威であった。撰集として『拾遺抄』『和漢朗詠集』『前十五番歌合』『三十六人撰』『金玉集』『深窓秘抄』等を、歌学書として『新撰髓脳』『和歌九品』、有識故実書として『北山抄』を著するなど、管絃の才能にも長け、「三舟の才」とまで言われた人物である。そのような人物であるにも関わらず、能因は『玄々集』において、最多入集歌人の座を与えなかった。『能因集』でも公任への贈歌と思われる歌がみえるので、能因が普段から公任を意識していたことは確かであるが、『玄々集』に公任詠をもっとも多くとっていない理由は奈辺にあるか、また公任は能因という歌人をどのように判断していたかを考えてみた。

第一節「能因と公任の関連説話」では『袋草紙』を手掛かりに考察した。『袋草紙』の所々から能因と公任の名をみることが出来るが、二人が同時に登場するのは、歌合への撰定をめぐる逸話一つのみである。この逸話において、公任は能因作と知らずに歌合に似合う歌として選定するが、後に能因作であることを知ってからは能因詠の歌語に釈然としない理由をつけて退けてしまう。公任の能因に対するこのような態度は、第二章で取り上げた長能に対する態度とも変わらない。『袋草紙』には、公任に歌を難じられて憤死する長能の逸話をみることが出来るが、その背景には、一時は一緒に花山院グループに属していたが、やがて公任は道長側に立つようになり、対立するようになった人間関係が影を落としている。それと同時に、公任が長能と能因それぞれを歌を難ずる際、歌語や歌の表現を問題視していることも確認出来る。

そこで、第二節「公任の秀歌意識」では長能詠と能因詠を公任の歌学書『新撰髓脳』の所説の「いにしへの人おほく本に歌まくらを置きて、末に思ふ心をあらはす。さるをなむ、中比よりはさしもあらねど、始めにおもふ事を言ひあらはしたる、わるきことになんする」という一文に照らし合わせて考えることで、公任の秀歌観を考察した。公任は心と詞と姿を相具することをいい歌の条件とするが、長能詠と能因詠は機智を効かせたが複雑な構造の、心深い歌とはいえない歌であった。これに比べて、『袋草紙』で公任が歌を賞賛した逸話の歌は、「事おほく添へくさりてやと見たるがいとわるきなり。一すぢにすくよかになむよむべき」に適う歌であることが分かる。同時に、第四章で取り上げる紀貫之が公任の歌人意識を考える上で重要な位置を占めていることを確認した。

第三節「『玄々集』所収公任詠と公任の自賛歌」では、能因側から、公任のどのような歌を『玄々集』に撰んでいるかの分析を試みた。『玄々集』の公任詠は六首であるが、『拾遺集』入集歌が三首、能因が独自で撰んだ歌が三首である。『玄々集』の公任詠は六首いずれも、第二節で考察した、公任がよしとする「一すぢにすくよか」な歌であり、技巧がほとんどない素

直な詠みぶりの歌を撰んでいる。そして、前の用例をしっかりと踏まえた、奇抜な歌語や新奇な表現があまりみられないことも指摘できる。同時に、伝統的な擬人法に基づきながら新しい歌語を詠み入れたり、賞賛の対象であった月を、哀しさを増幅する媒体として詠んだ歌を撰ぶなど、伝統的な素材や詠法を踏まえながら新しさが醸し出される歌を評価していることが確認できた。

第一章から第三章までは『玄々集』を中心に、能因がどのような詠風を重視していたかを確認したが、第四章「『能因集』における作歌方法」では焦点を『能因集』に変えて考察を進めた。『能因集』は能因に関する伝記資料が乏しい中、編年体で書かれたものというところで、能因の生涯を伝える資料として注目されてきた。上中下巻の三巻構成になっていて、上巻の巻頭には「早春庚申恋歌十首」という、本格的に歌を詠み始めた青年期の能因の初々しい姿が、中巻の巻頭には親しくしていた女性との贈答歌と、その女性の死、そして出家を果たす能因の姿が、下巻の巻頭には「長元八年夏関白殿歌合」という、晴れの歌合に列席出来た時の詠歌が置かれている。つまり、各巻頭には能因の人生にとって節目とされる時期や事件の関した歌群が置かれているわけで、平野由紀子の指摘する「時間のながれ」が意識されていることと、人生のある部分を浮き彫りにさせようとする文芸意識が働いていることは確かである。それと同時に、自分の家集を編むに当って、歌の良し悪しを度外視したとは考えられないことも事実である。『能因集』は『玄々集』とほぼ同時期に撰集されたとされるが、第一章から第三章にかけて考察して得られた結果が『能因集』にはどのように適応できるかを念頭に置きながら考察を進めた。

第一節「三代集の読人知らず詠を踏まえた歌」では、三代集時代の読人知らず歌を踏まえた能因詠について考察した。勅撰集には、『万葉集』にはなかった部立が設けられるが、能因は三代集の読人知らず歌を利用し、たとえば述懐歌であった歌を踏まえて恋歌を詠んだり、恋歌であった歌を踏まえて情景歌として詠んだ例が確かめられる。特に後者の場合は、中巻で顕著にみられる、旅での現地詠でもみられ、能因が普段から自分より先立つ世代の詠歌を熟知していたことを物語る。

第二節「『伊勢物語』の影響が想定される歌」では、第一節の用例よりは少ないが、『伊勢物語』を意識的に踏まえた表現について考察した。能因の「住吉」や「しかすがの渡り」での現地詠には、それぞれ『伊勢物語』の第百十七段と第九段の表現を踏まえたと思われる。自分の恋歌や女性の代作を詠むに当たっても、それぞれ『伊勢物語』の第四十一段と第五段の知識が利用したふしを確認される。特に、『伊勢物語』の第四十一段を踏まえて自分の恋歌を詠んだ例では、『伊勢物語』のみならず、『古今集』の雑歌も同時に利用している事は、第一節で考察した、参考した歌の部立を変えて自分の歌を詠む詠法をとっている。題詠などのように与えられた題をじっくり考える余裕のない現地詠や恋歌において、このような自分より先立つて成立した和歌の伝統的な表現を踏まえて、変化させて詠むことは、能因の普段からの古歌に対する姿勢と知識の蓄積を窺わせる。

第三節「貫之詠の継承と変奏」では、第一節と第二節での考察の延長線として、特に紀貫之の

歌の表現を踏まえた能因詠に注目して考察を行った。貫之詠に焦点を当てた理由は、第一節や第二節で確認出来た詠歌方法が、もつとも意識的に働いているのが、貫之の歌を利用する場合であり、第一章から第三章まで考察した『玄々集』と、『能因集』の序文からは、貫之を意識した表現が散見され、能因の貫之に対する関心のほどが窺えるからである。まず、貫之への意識をあらわす一例として、『袋草紙』の歌合での能因の難解な歌について考察した。この歌合が行われたのは永承五（一〇五〇）年なので、能因の最晩年のことであり、能因はこの時期にも貫之詠に基づいた歌を詠んだということになる。『能因集』から貫之詠を踏まえる用例を分析すると、①一首の二句ほどをほぼそのまま用いる②一首から歌語や発想を利用する③二首から同時に影響が見られるという、主に三つのパターンに大別することが出来た。同時に能因は、貫之の歌をただ利用するだけでなく、自分の歌として詠むに当って、①題詠を現地詠に変えて詠む②貫之詠の時点をずらして詠む③貫之詠の表現を踏まえて新しい視点を提示することで、新しさを追求したことが確認出来る。このような能因の貫之に対する強い思い入れは、『玄々集』と『能因集』の序文からも確かめられ、能因が序文でそのような貫之を言及することは、自分の作品にある意味「權威」を与えようとしたのではないだろうか。能因は貫之詠やその存在を主体的に、かつ積極的に取り入れていたと考えられる。また、能因が「数寄」のあまりに『袋草紙』にみられるような、奇行に走るばかりの人ではなく、和歌の伝統を尊重し、自分をその流れの中に位置づけようとする、強い願望を持っていたことを物語る。そして、『能因集』の撰集は、自分の人生の軌跡を振り返ると同時に、読者に貫之を中心とした古今時代とその前後の時代の歌を尊重し、それを踏まえながら歌を詠む、歌の詠み方をも提示しようとしたものであったと思われる。能因がそのような行動に出た背景には、第三章で考察した、公任との歌合をめぐる逸話からも確認されるように、歌壇においての能因の位置が絡んでいると思われる。能因の沈倫意識と、公任に対する対抗意識が貫之への傾倒を加速させたと思われる。能因のこのような貫之詠を利用する詠法は、当時はまだ理論化されていなかった「本歌取り」の前段階として注目してよいと考えられる。

第五章「『能因歌枕』の「国々の所々名」考」では、『能因歌枕』、その中でも国別に歌枕を集成した「国々の所々名」を取り上げて考察し、その過程において、先行研究ではあまり触れることのなかった、『能因歌枕』成立時期及び『玄々集』『能因集』との前後関係の究明を試みた。歌枕は、最初は歌に詠まれた歌語全般を意味し、そのような歌語を収めた書物も歌枕と呼んだが、時代が下るにつれ、歌に詠まれた地名、その中でも、長い和歌の歴史の中で成立した、特定のイメージを担う地名を意味するようになる。そのような意味で『能因歌枕』は、歌語全般を説明する部分を有しているという意味でも、地名としての歌枕をたくさん収録しているという意味でも、両方の歌枕を収めた書物としての意味でも、「歌枕」の名に相応しい著作であると思われる。特に「国々の所々名」は、生涯をかけて旅を続けた能因であることを考えると、能因の歌人的特性とよくあらわしていると思われる。

第一節「『国々の所々名』の概観」では、「国々の所々名」の国別に分類されている歌枕を、五畿七道によって再分類し、その分布について概観を試みた。その結果「国々の所々名」には、

六二か国の延べ六八八か所の歌枕が記録されていることが確認でき、平安時代の生活基盤となっていた畿内五か国の歌枕が集中していることを確かめた。東海道・東山道・北陸道のように東国を経て陸奥までの歌枕の数が、山陰道・山陽道・南海道・西海道のような畿内より西側の歌枕より圧倒的に多いのは、平安時代の東国や陸奥に対する一般的な関心のほどとみることも出来ようが、このような結果になったのは、能因の生き方は反映されたものであると考えられる。

第二節「『玄々集』の歌枕との関係」では、「国々の所々名」の歌枕と、『玄々集』の歌枕の関係について考察した。まず、『玄々集』の歌枕を詠み入れた歌は五四か所六〇首で、比率では全体歌数の一／三強の35.9%である。「国々の所々名」と同じく、畿内・東海道・東山道の歌枕が圧倒的に多く、北陸道・山陰道・山陽道・南海道は少数に過ぎず、西海道の歌枕は全くみられない。この結果と「国々の所々名」の歌枕と比較すると、『玄々集』にみられる歌枕五四か所の内、二三か所(42.6%)が「国々の所々名」から確認出来た。

第三節「『能因集』の歌枕との関係」では、「国々の所々名」の歌枕と、『能因集』の歌枕の関係について考察した。まず、『能因集』の歌枕を詠み入れた歌は七七か所一二一首で、比率では全体歌数の一／二弱の47.3%である。「国々の所々名」『玄々集』と同じく、畿内・東海道・東山道の歌枕が圧倒的に多く、北陸道・山陰道・山陽道・西海道は少数に過ぎず、南海道の歌枕は全くみられない。東山道の歌枕詠が東海道の歌枕詠より三倍も多いが、それは中巻からみられる二度にわたる陸奥下向が影響している。この結果と「国々の所々名」の歌枕と比較すると、『能因集』にみられる歌枕七七か所の内、三二か所(41.6%)が「国々の所々名」から確認出来た。『能因集』と『能因歌枕』の共通歌枕が畿内・東海道・東山道に集中していることから、編年体をとっている『能因集』の各歌枕が詠まれた年次を確認したところ、家集の一五六番歌に詠まれた「天河」を境界線に、それ以降『能因集』に見られる畿内・東海道・東山道所在の歌枕が『能因歌枕』の「国々の所々名」には見られないことが確かめられた。家集の一五九番歌が長元八(一〇三五)年の夏の歌で、一五六番歌との間に越冬をあらわす歌を挟んでいることから、一五六番歌は長元七(一〇三四)年に詠まれた歌ということになり、「国々の所々名」を含む原『能因歌枕』ともいえるものはこの時期に一応成立し、随時増補されていったかと思われる。

第四節「勅撰集の歌枕との関係」では、「国々の所々名」の歌枕と、全二十一代の勅撰集の歌枕との比較を試みた。勅撰集からその用例が確認できる項目は二〇二か所で、「国々の所々名」全項目の六八八か所の一／三弱の29.4%である。『玄々集』『能因集』の傾向と同じく、畿内・東山道・東海道との共通率が高く、北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道との共通率は低かった。「国々の所々名」の約70%の歌枕が勅撰集からみられないのは、「国々の所々名」の作成の目的が最初からすでに歌枕として定まった地名の収集にあるのではなく、その名から歌枕になる可能性のある地名を収集する、網羅的なところにあったことを思わせる。そして、勅撰集での用例がみられる二〇二か所を対象に、さらに能因の没年(一〇五〇年頃)を基準に、その前に成立した三代集に用例のある歌枕と、没後成立した『後拾遺集』以降の勅撰集にみられるはじまる歌枕とに分類すると、三代集に用例のない歌枕は七五か所で、一／三強の37.1%で

ある。能因は三代集によってすでに歌枕として認識されたところ以外にも、自分の目で、足で発掘した歌枕になりそうなところを提示しようとしたと思われる。『能因歌枕』は『玄々集』『能因集』のように独立した作品にしようとするより、メモや備忘録のように手元で自由に増補していく意識が働いたものと思われ、勅撰集の歌枕との関係も、そのような観点から考える必要があると思われる。三代集の伝統的な歌枕を二／三ほど記録しつつ、旅を続けた歌人の目で、これからの勅撰集に入りそうな地名を積極的に収集した結果であると思われる。

第六章「新古今時代の能因受容の様相」では、『千載集』が成立してから『新勅撰集』が成立するまでの約五〇年の間を新古今時代と規定し、能因の歌や能因が提示した歌枕等がこの時代にどのような受容され、評価されたかを考察した。この時代を取り上げたのは、『後拾遺集』で能因詠が三一首入集して以来、『新古今集』に一〇首と、勅撰集において二番目に能因詠が多く取られたからであり、藤原俊成の歌学書『古来風体抄』や順徳院の歌学書『八雲御抄』に能因の名が取り上げられているなど、再評価された時期と思われるからである。平安時代末期から中世に差し掛かるうとした時期、そして中世に入ったこの時代の歌人たちに能因のどのような部分が評価されたかの考察を試みた。

第一節「『新古今和歌集』の歌枕」では、『新古今集』以前の勅撰集初出の歌枕が、以降用例が少なく、再び『新古今集』においてあらわれた場合、その間に能因の歌や撰集類の介在を想定出来る例について考えた。『古今集』初出の「あまの川」、『後撰集』初出の「岩瀬山(森)」、『拾遺集』初出の「十市の里(村)」はそれぞれの勅撰集に初出以来、勅撰集での用例があまり確認されない歌枕であるが、『能因歌枕』の歌語説明部もしくは第五章で取り上げた「国々の所々名」にその記載が確認でき、『玄々集』または『能因集』から用例が確認出来る。また、能因没後の成立ではあるが、『後拾遺集』初出の「生駒山(嶽)」と「有渡浜」は『新古今集』に再びみられるようになるが、いずれも勅撰集での初出用例は能因詠である。このように、勅撰集初出以来用例の少ない歌枕が『新古今集』に再び登場する場合、一つの可能性として、能因詠とその作品の受容が考えられる。

第二節「『新古今集』の陸奥の歌枕」では、『新古今集』の陸奥歌枕の増加と、能因の陸奥下向を関連付けて考察した。『新古今集』での陸奥関連歌枕が多いことは、『古今集』の「東歌」であらわれるような、平安時代時代の陸奥に対する関心の延長線上にあると思われるが、能因は自分の意思で陸奥に足を運んだ歌人として注目されたと思われる。能因の二度にわたる陸奥下向を確認すると、それは和歌の伝統の中で形成された歌枕を自分の目で確かめることであり、そのような経験で得られた実感を詠むことで、言葉の中にあつた歌枕を具現化する過程であつたと思われる。その過程において、歌枕の実見できた感動とともに、知人や歌枕の喪失も経験し、自我の省察に至る。この経験の結実が「想像奥州十首」であるが、その中の「野田の玉川」詠は勅撰集初出歌枕として『新古今集』に入集し、後鳥羽院や順徳院など、新古今歌人に大きな影響を与えたとと思われる。

第三節「西行と定家における能因受容」では、新古今時代の代表的な二人の歌人、西行と定家

における能因の受容を考えた。西行においては、「行動における受容」と「詠歌における受容」の両面が見られ、「行動における受容」は、『山家集』にみられるような、能因を慕って陸奥に下る行動によくあらわれている。能因の歌で詠まれた歌枕に赴き、能因の追体験することによって自分の歌境を目指すこのような行動は、能因が和歌の伝統の中で形成された歌枕を訪れることで言葉の中に存在する歌枕を内在化し、具現化する行動とよく似ている。そして「詠歌における受容」として、『新古今集』に入集した、能因の「心あらむ人み見せばや津の国の難波の浦の春のけしきを」を踏まえた二首の歌を考察することで、西行が普段からよく能因詠を熟知していて、それを踏まえて詠むことで自分の歌境を広めようとしたことが確認された。続いて、定家の撰とされる『定家十体』の能因詠五首を考察したが、『毎月抄』において対照的な歌体のような書き方になっている「幽玄様」と「鬼拉様」、「長高様」と「濃様」にそれぞれ撰入されていて、能因詠の多面的な要素が注目されていたことを確認した。能因詠は歌そのものの価値が認められた結果撰入されたと思われるが、特定の歌や歌人の間に配置されることで、前後する歌の連想を繋ぐ役割をも担っていることも確認出来た。以上のような新古今時代の能因受容は、古今を新しく蘇らせようとした時代の風潮と、能因の和歌の伝統の中に自分を位置づけようとした生き方から形成された歌風とが融合し、注目された結果であったことが確かめられた。

以上、能因の撰集類と歌学書からみられる歌風について考察した。第一章から第三章までは、私撰集である『玄々集』を中心に、能因が他の歌人の歌を利用して撰集するに当って、どのような歌風を重視したのかを確認し、第四章では、自撰歌集である『能因集』において、実作をする際、どのような詠法で歌を詠んだのかを論じ、第五章では、歌学書である『能因歌枕』の「国々の所々名」を取り上げて、他の能因の撰集と勅撰集の関係性について考察した。つまり、第一章から第三章までは撰者として庶幾した歌風、第四章では歌の実作者として庶幾した歌風、第五章では、歌風とはいえないが、歌学者、もしくは理論家としての姿勢をみる事が出来た。このように確認した三点から導き出せる結論としては、能因は、和歌の伝統を重んじ、その流れの中に自分を位置づけようとしながら、それに甘んじることなく、体験することによって新しさを追求した歌人であるということである。旅によって体験するに至る原因は閉塞した時代に対する沈淪意識であったと思われるが、だからこそ、和歌の伝統への執心が人一倍であったと考えられ、そのように自分の前にある和歌の蓄積を価値のある古典として認識し、それを主体的・積極的に踏まえることで独自の歌風に到達しようとした。それが能因にとつての「歌道の中興の方法」であったと思われる。第六章で確認したように、新古今時代の歌人たちには、能因のそのような部分が受け入れられ、『新古今集』に多く入集され、歌学書類でその名が取り上げられるようになったと思われる。この意味で、能因の歌風は本歌取りが本格的になる中世和歌と繋がる一面をもっていたと評価でき、中古から中世への橋渡しの役割を果たしたといえる。

このようにして、能因の歌風を確認したが、残された課題はまだ多いと思われる。本論文においては、一部を除いて主に勅撰集での用例を中心に考えてきたが、それは勅撰集がある時期の好尚を俯瞰するのに適した作品であるからで、そのような勅撰集を支えるのは多くの私家集や私撰

集である。考察の範囲を広げて、詠歌の前後関係や影響関係の精度を上げるために努めてきた。また、『能因歌枕』においては、歌語部の内容の検討を含め、『玄々集』や『能因集』との成立時期の問題、中世以降の歌学書との影響関係も視野に入れていくことを今後の課題とした。

《参考文献一覧表》（著者名・編者名五十音順）

【一次資料】（テキスト・注釈書）

- ・浅見和彦『十訓抄』（小学館、一九九七年）
- ・芦田耕一『清輔集新注』（青簡社、二〇〇八年）
- ・伊井春樹・津本信博・新藤協三『公任集注釈』（風間書房、一九八九年）
- ・石井文夫『橘為仲全釈』（笠間書院、一九八七年）
- ・石田吉貞『新古今和歌集全註解』（有精堂出版、一九六〇）
- ・伊藤敬・荒木尚・両角倉一・石川一・祐野隆三・外村展子『中世日記紀行文学全評釈集成』一
　　〽七（勉誠出版、二〇〇四年）
- ・稲岡耕二『万葉集』一〜四（明治書院、一九九七〜二〇一五年）
- ・犬養廉・後藤祥子・平野由紀子『平安私家集』（岩波書店、一九九四年）
- ・井上宗雄・片桐洋一・川村晃生・小町谷照彦・杉山重行・滝澤貞夫『名所歌枕伝能因法師撰の
　　本文の研究』（笠間書院、一九八六年）
- ・小沢正夫・後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂『袋草紙注釈』上・下（塙書房、一九七四〜一九
　　七六）
- ・小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』（小学館、一九九四年）
- ・風間景次郎・小島吉雄『山家集 金槐和歌集』（岩波書店、一九六一年）
- ・片桐洋一『後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）
- ・片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子（校注・訳）『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平
　　中物語』（小学館、一九九四年）
- ・片桐洋一編『八雲御抄の研究 名所部用意部』（和泉書院、二〇一三年）
- ・片野達郎・松野陽一『千載和歌集』（岩波書店、一九九三年）
- ・川村晃生『能因法師集・玄々集とその研究』（三弥井書店、一九七九年）
- ・川村晃生・能因歌枕研究会「校本『能因歌枕』」『三田国文』五、一九八六年六月
- ・川村晃生・柏木由夫・工藤重矩（校注）『金葉和歌集 詞花和歌集』（岩波書店、一九八九年）
- ・川村晃生『能因集注釈』（貴重本刊行会、一九九二年）
- ・川村晃生・久保田淳『長秋詠藻・俊忠集』（明治書院、一九九八年）
- ・川村晃生・松本真奈美『惠慶集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇六年）
- ・久保木哲夫・加藤静子・平安私家集研究会『範永集新注』（青簡舎、二〇一六年）
- ・久保田淳・平田喜信『後拾遺和歌集』（岩波書店、一九九四年）
- ・久保田淳『新古今和歌集全註釈』（角川学芸出版、二〇一一年）
- ・桑原博史『源道济集全釈』（風間書房、一九八七年）

- ・小島憲之・新井栄蔵『拾遺和歌集』（岩波書店、一九八九年）
- ・小島憲之・木下正俊『万葉集』一～四（小学館、一九九四～一九九八年）
- ・後藤昭雄・池上洵一・山根對助『江談抄 中外抄 富家語』（岩波書店、一九九七年）
- ・小町谷照彦『拾遺和歌集』（岩波書店、一九九〇年）
- ・笹川博司『紫式部集全釈』（風間書房、二〇一四年）
- ・佐々木信綱『日本歌学大系』一～三（風間書房、一九七二年）
- ・佐藤道生・柳澤良一『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（明治書院、二〇一一年）
- ・新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観』第二版（CD-ROM、角川書店、二〇〇三年）
- ・鈴木健一・櫻片真王・倉島利仁『おくのほそ道』（三弥井書店、二〇〇七年）
- ・鈴木徳男『続詞花和歌集の研究』（和泉書院、一九八七年）
- ・鈴木徳男『続詞花和歌集新注』上下（青簡社、二〇一〇～二〇一一年）
- ・関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子『赤染衛門集全釈』（風間書房、一九八七年）
- ・谷脇理史・岡雅彦・井上和人『仮名草子集』（小学館、一九九九年）
- ・竹鼻績『公任集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇四年）
- ・田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』（風間書房、一九九七年）
- ・田中喜美春・平沢竜介・菊池靖彦『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』（明治書院、一九九七年）
- ・中川博夫『新勅撰和歌集』（明治書院、二〇〇五年）
- ・西尾光一・小林保治『古今著聞集』上下（新潮社、一九八三年）
- ・錦仁・柏木由夫『金葉和歌集・詞花和歌集』（明治書院、二〇〇六年）
- ・西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『山家集・聞書集・残集』（明治書院、二〇〇三年）
- ・日本古典文学会『榊原本私家集』一～三（貴重本刊行会、一九七八～一九七九年）
- ・根来司『新校本枕草子』（笠間書院、一九九一年）
- ・野中和孝『井蛙抄 雑談篇 注釈と考察』（和泉書院、二〇〇六年）
- ・萩谷朴『平安朝歌合大成『増補新訂』』一～五（同朋舎出版、一九九五～一九九六年）
- ・橋本不美男・有吉保・藤平春男（校注・訳）『歌論集』（小学館、二〇〇二年）
- ・塙保己一・太田藤四郎『和歌現在書目録』続群書類従十七輯、卷四百七十（続群書類従完成会、一九三三年、訂正三版）
- ・塙保己一『橘氏系譜』群書類従五、卷六十三（続群書類従完成会、一九六〇年、訂正三版）
- ・塙保己一『中古歌仙三十六人伝』群書類従五、卷六十五（続群書類従完成会、一九六〇年、訂正三版）
- ・塙保己一『愚秘抄下』群書類従十六、卷三百一（続群書類従完成会、一九六〇年、訂正三版）
- ・久松潜一・西尾實『歌論集 能楽論集』（岩波書店、一九七一年）
- ・藤岡忠美・芦田耕一・西村加代子・中村康夫『袋草紙考証』歌学編・雑談篇（和泉書院、一九

- ・藤岡忠美『袋草紙』（岩波書店、一九九五年）
- ・平安文学輪読会『長能集注釈』（塙書房、一九八九年）
- ・増田繁夫『拾遺和歌集』（明治書院、一九九八年）
- ・松尾聡・永井和子『枕草子』（小学館、一九九七年）
- ・峯村文人『新古今和歌集』（小学館、一九九五年）
- ・平安文学輪読会『長能集注釈』（塙書房、一九八九年）
- ・吉田茂『経衡集全釈』（風間書房、二〇〇二年）
- ・好村友江・中嶋眞理子・目加田さくを『橘為仲朝臣集全釈』（風間書房、一九九八年）

【二次資料】

〈研究文献〉

- ・赤木志津子『撰関時代の諸相』（近藤出版社、一九八八年）
- ・赤瀬知子『院政期以後の歌学書と歌枕…享受史的視点から』（清文堂出版、二〇〇六年）
- ・赤羽淑『和歌の本質と展開』（桜楓社、一九七三年）
- ・秋山虔『王朝女流文学の世界』（東京大学出版会、一九七二年）
- ・芦田耕一『六条藤家清輔の研究』（和泉書院、二〇〇四年）
- ・有吉保・稲岡耕二・上野理・島津忠夫・藤平春男・武川忠一『和歌文学講座 古今集』（勉誠社、一九九三年）
- ・有吉保・稲岡耕二・上野理・島津忠夫・藤平春男・武川忠一『和歌文学講座 和歌の本質と表現』（勉誠社、一九九三年）
- ・有吉保・稲岡耕二・上野理・島津忠夫・藤平春男・武川忠一『和歌文学講座 王朝の和歌』（勉誠社、一九九三年）
- ・有吉保・稲岡耕二・上野理・島津忠夫・藤平春男・武川忠一『和歌文学講座 新古今集』（勉誠社、一九九三年）
- ・池田富蔵『源俊頼の研究』（桜楓社、一九七三年）
- ・犬養廉『平安 和歌と日記』（笠間書院、二〇〇四年）
- ・井上満郎・杉橋隆夫『古代・中世の政治と文化』（思文閣出版、一九九四年）
- ・井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』（笠間書院、二〇〇七年）
- ・今井源衛『花山院の生涯』（桜楓社、一九七六年）
- ・岩津資雄『歌合せの歌論史研究』（早稲田大学出版部、一九六三年）
- ・上野理『後拾遺集前後』（笠間書院、一九七六年）
- ・大阪市立大学文学部創立五十年記念国語国文学論集編集委員会『大阪市立大学文学部創立五十

年記念国語国文学論集編』（和泉書院、一九九九年）

- ・岡崎真紀子『やまとことば表現論―源俊頼へ』（笠間書院、二〇〇八年）
- ・奥村晃作『隠遁歌人の源流―式子内親王 能因 西行―』（笠間書院、一九七五年）
- ・小沢正夫『古代歌学の形成』（塙書房、一九六三年）
- ・小沢正夫・島津忠夫『古今新古今とその周辺』（大学堂書店、一九七二年）
- ・小沢正夫『平安の和歌と歌学』（笠間書院、一九七九年）
- ・小沢正夫『三代集の研究』（明治書院、一九八一年）
- ・片桐洋一『王朝文学の本質と変容』散文編・韻文編（和泉書院、二〇〇一年）
- ・柏木由夫『平安時代後期和歌論』（風間書房、二〇〇〇年）
- ・加藤友康『撰関政治と王朝文化』（吉川弘文館、二〇〇二年）
- ・加藤睦・小嶋奈温子『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇七年）
- ・川上新一郎『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九年）
- ・川平ひとし『中世和歌論』（笠間書院、二〇〇三年）
- ・川村晃生『撰関期和歌史の研究』（三弥井書店、一九九一年）
- ・久下裕利『王朝の歌人たちを考える―交友の空間』（武蔵野書院、二〇一三年）
- ・窪田空穂『歌論』（角川書店、一九六五年）
- ・倉本一宏『撰関政治と王朝貴族』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
- ・黒田彰子『五代集歌枕』（みずほ出版、二〇〇六年）
- ・小島孝之（編）『説話の界域』（笠間書院、二〇〇六年）
- ・古代学協会『撰関時代史の研究』（吉川弘文館、一九六五年）
- ・古代学協会『後期撰関時代の研究』（吉川弘文館、一九九〇年）
- ・後藤祥子（編）『王朝和歌を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九七年）
- ・近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房、二〇〇五年）
- ・阪口和子『貫之から公任へ―三代集の表現―』（和泉書院、二〇一四年）
- ・坂本賞三『藤原通頼の時代…撰関政治から院政へ』（平凡社、一九九一年）
- ・佐々木克衛『中世歌論の世界』（双文社出版、一九九二年）
- ・佐々木忠慧『中世歌論とその周辺』（桜楓社、一九八四年）
- ・佐々木信綱『歌学論集』（本の友社、一九九四年）
- ・杉崎重遠『平安中期歌壇の研究』（桜楓社、一九八三年）
- ・鈴木健一・鈴木宏子（編）『和歌史を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇一一年）
- ・鈴木徳男『俊頼髓脳の研究』（思文閣出版、二〇〇六年）
- ・関口力『撰関時代文化史研究』（思文閣出版、二〇〇七年）
- ・高重久美『和歌六党とその時代―後朱雀朝歌会を軸として―』（和泉書院、二〇〇五年）
- ・高橋良雄『東国の歌枕』（桜楓社、一九九一年）
- ・武田元治『定家十体の研究』（明治書院、一九九〇年）

- ・武田元治『幽玄…用例の注釈と考察』（風間書房、一九九四年）
- ・谷山茂『新古今時代の歌合と歌壇』（角川書店、一九八三年）
- ・中尾彰男『古典和歌の面白さを知る…「てにをは」の巻』（さんこう社、二〇一七年）
- ・西村加代子『平安後期歌学の研究』（和泉書院、一九九七年）
- ・西村加代子『平安後期歌学の研究』（和泉書院、一九九七年）
- ・橋本不美男『院政期の歌壇史研究…堀河院歌壇を形成した人々』（武蔵野書院、一九六六年）
- ・樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』（ひたく書房、一九八三年）
- ・樋口芳麻呂『王朝和歌と史的展開』（笠間書院、一九九七年）
- ・久松潜一『歌学史の研究…歌論を中心として』（岩波書店、一九三二年）
- ・久松潜一・太田善麿・秋山虔・井本農一・宇佐美喜三八・成瀬正勝『日本文学思潮』（矢島書房、一九五三年）
- ・久松潜一・西下経一『平安朝文学史』（明治書院、一九六五年）
- ・久松潜一『日本文学評論史』（至文堂、一九七六年）
- ・福田雄作『定家歌論とその周辺』（笠間書院、一九七四年）
- ・藤岡忠美『平安和歌史論―三代集時代の基調―』（桜楓社、一九七二年）
- ・藤岡忠美『平安朝和歌 読解と試論』（風間書房、二〇〇三年）
- ・藤平春男『新古今歌風の形成』（笠間書院、一九九七年）
- ・藤平春男『歌論の研究』（ぺりかん社、一九八九年）
- ・藤平春男『歌論研究』（笠間書院、一九九八年）
- ・樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』（ひたく書房、一九八三年）
- ・古川麒一郎・大谷光男・岡田芳朗・伊東和彦（編）『日本暦日総覧』（本の友社、一九九二～一九九五年）
- ・平安朝文学研究会『平安朝文学の諸問題』（笠間書院、一九七七年）
- ・平安朝文学研究会『講座平安文学論集』（風間書房、一九八四～二〇〇四年）
- ・平安文学論究会『講座 平安文学論究』（風間書房、一九八五年）
- ・本田義憲・池上洵一・小峯和明・森正人・阿部康郎『説話の場―唱導・注釈―』（勉誠社、一九九三年）
- ・前田妙子『和歌十体論研究』（弘文堂、一九五七年）
- ・増田繁夫小町谷照彦・鈴木日出男・藤原克己『古今和歌集研究集成』一～三（風間書房、二〇〇四年）
- ・三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』（和泉書院、一九九九年）
- ・諸井彩子『撰関期如房と文学』（青簡舎、二〇一八年）
- ・山口博『王朝歌壇史の研究 村上冷泉円融朝篇』（桜楓社、一九六七年）
- ・和歌文学会『和歌文学講座』一～（桜楓社、一九六九年～）
- ・和歌文学会『歌壇・歌合・連歌』（桜楓社、一九六九年）

- ・和歌文学会『和歌史・歌論史』（桜楓社、一九六九年）
- ・和歌文学会『論集古今和歌集』（笠間書院、一九八一年）
- ・和歌文学会『論集和歌とレトリック』（笠間書院、一九八六年）
- ・和歌文学会『論集藤原定家』（笠間書院、一九八八年）
- ・『和歌文学論集』編集委員会『百人一首と秀歌撰』（風間書房、一九九四年）
- ・『和歌文学論集』編集委員会『歌論の展開』（風間書房、一九九五年）
- ・『和歌文学論集』編集委員会『平安後期の和歌』（風間書房、一九九五年）
- ・和歌文学会論集編集委員会『古今集新古今集の方法』（笠間書院、二〇〇四年）
- ・渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）
- ・渡部泰明・川村晃生（編）『歌われた風景』（笠間書院、二〇〇〇年）
- ・渡邊裕美子『新古今時代の表現方法』（笠間書院、二〇一〇年）

〈単行本・雑誌等所収論文〉

- ・青柳恵介「袖の湊―新古今における一つの撰歌意識―」『成城文芸』八九、一九七九年七月
- ・赤司久明「『大日本史』における能因像―その叙述の方向を考える―」『兵庫国漢』二二、一九七六年三月
- ・秋本守英「万葉集の風と三代集の風」『龍谷学会』四三九、一九九一年十二月
- ・浅田徹「『能因歌枕』原撰本と現存本」『国文学研究』第九二号、早稲田大学国文学会、一九八七年六月。
- ・芦田耕一「『清輔雑談集』の編纂意図について」『島根大学法文学部紀要（文学科編）』二、一九七九年十二月
- ・阿部俊子「古今集・新古今集の女流歌人」『国文学 解釈と教材の研究』九・九、一九六四年七月
- ・阿部方行「続詞花和歌集恋部の配列構成」『中古文学』一八、一九七六年九月
- ・新井栄蔵「漢と和 和歌の道―古今和歌集仮名序真名序」『国文学 解釈と教材の研究』三二・五、一九八七年四月
- ・新井英之「藤原公任『三十六人集』における結番と撰歌に関する一考察―兼盛・中務の結番を中心に―」『大東文化大学日本文学会日本文学研究』四一、二〇〇二年二月
- ・安西廸夫「玄々集の成立」『国文学 言語と文芸』六・四、一九六四年七月
- ・石井裕啓「『古今集仮名序』に於ける紀貫之の和歌観について」『学習院大学国語国文学会誌』二八、一九八五年三月
- ・池上洵一「長能説話の文脈―二十日あまり九日といふに春の暮ぬる―」『古代中世和歌文学の研究』（和泉書院、二〇〇三年）
- ・糸賀きみ江「雪月花 万葉・古今・新古今の美意識」『日本の美学』一〇、一九八七年五月

- ・稲垣泰一「『俊頼髓脳』の一和歌説話の解釈とその受容」『説話文学論集』（大修館書店、一九八一年）
- ・稲田利徳「三代の措辞―経信・俊頼・俊恵―」『赤羽淑先生退職記念論文集』（ダイニ印刷、二〇〇五年）
- ・伊庭京子「定家歌論における貫之の位相」『関西学院大学人文論究』二八・四、一九七九年三月
- ・伊庭京子「定家歌論における貫之の評価の問題」『日本文芸研究』三一・二、一九七九年六月
- ・伊庭京子「貫之の歌論と定家の相関」『日本文芸研究』三二・四、一九八〇年十二月
- ・伊庭京子「貫之から公任への美的転位」『日本文芸研究』三三・四、一九八一年十二月
- ・伊庭京子「藤原公任の歌論―『和歌九品』を中心に―」『日本文芸研究』三五・二、一九八三年六月
- ・犬養廉「和歌六人党に関する試論―平安朝歌壇史の一齣として―」『国語と国文学』三三・九、一九五六年九月
- ・犬養廉「橘為仲とその集―古代末期の歌人像―」『国語と国文学』三五・一二、一九五八年一月
- ・犬養廉「能因法師研究（二）―その歌人的出発まで―」『国語国文研究』三〇、一九六五年三月
- ・犬養廉「経信とその家集」『国文学 解釈と教材の研究』一〇・一二、一九六五年一〇月
- ・犬養廉「能因法師研究（二）―青年期の周辺―」『国語国文研究』三五、一九六六年九月
- ・犬養廉「河原院の歌人達―安法法師を軸として―」『国語と国文学』四四・十、一九六七年十月
- ・犬養廉「藤原長能とその集―能因研究の一環として―」『中央大学文学部紀要文学科』三二、一九七三年三月
- ・犬養廉「王朝秀歌鑑賞 王朝の女歌」『短歌』三八・一一、一九九一年一月
- ・犬養廉「能因の小町詠をめぐって―家集上巻末尾三首試考―」『立正大学国語国文』二九、一九九三年三月
- ・犬養廉「梨壺古点の行くへ―長能集のこと―」『文学・語学』一四二・一四三、一九九五年二月
- ・井上宗雄「作品にみる風土―能因歌枕をめぐって―」『国文学 解釈と鑑賞』四八・一二、一九八三年九月
- ・井上宗雄「能因歌枕をめぐって」『国文学 解釈と鑑賞』四八・一二、一九八三年九月
- ・今井優「俊秘抄序説」『追手門学院大学文学部紀要』一一、一九七七年十二月
- ・今井優「俊頼髓脳の歌論史的位置―幽玄の先駆として―」『誤文叢誌』（田中裕先生の御退職を記念する会、一九八一年）
- ・岩井宏子「『古今集』における白詩享受の側面―黒髪を通して―」『帝塚山学院大学日本文

学研究』二八、一九九七年二月

・岩井宏子「歌語「さみだれ」の基層―古今集入時代を中心に―」『国語国文』六九・一、二〇〇〇年一月

〇〇年一月

・岩佐壮四郎「岡本綺堂の喜劇」『関東学院大学文学部紀要』一三一、二〇一四年一月

・岩崎礼太郎「〈旅といのち〉の文学―西行・実朝の歌を中心に―」『文学における旅』（笠間書院、一九八五年）

書院、一九八五年）

・上木永生「みちのくと西行」『東北文学の世界』一、一九九三年三月

・上野理「ひとへにかしき風体―後拾遺集に庶幾した歌風―」『国文学研究』二五、一九六二年三月

年三月

・上野理「和歌六人党に関連して―藝の歌から晴の歌に―」『文芸と批評』六、一九六五年一月

・宇佐美喜三八「源俊頼」『平安朝文学史』（明治書院、一九六五年）

・臼田昭吾「白川の関」が「心かすめ」たのは、なぜ「逢坂の関」までなのか―西行の初度陸奥の旅詠「みやこいでて」歌の読みをめぐる―」『弘前大学国語国文学』一五、一九九三年三月

奥の旅詠「みやこいでて」歌の読みをめぐる―」『弘前大学国語国文学』一五、一九九三年三月

一九九三年三月

・臼田昭吾「西行のみちのく」『国文学解釈と教材の研究』第三九卷第八号、学灯社、一九九四年七月

・渦巻恵「河原院文化圏と「堀河百首」―追考―」『平安朝文学 表層の位相』（新典社、二〇〇二年）

〇二年）

・及川道之「能因歌枕「国々の所々名」が意味すること」『日本文学風土学会紀事』一七、一九九二年三月

一九九二年三月

・大曾根章介「河原院と池亭」『国文学 解釈と教材の研究』二二・七、一九七六年六月

・大谷俊太「歌徳説話の位相―雨乞歌をめぐる―」『国語国文』五七・五、一九八八年五月

・大槻温子「和和泉式部の歌ことば「つれづれ」―特徴的使用に対する試論―」『兵庫国漢』四九、二〇〇三年三月

九、二〇〇三年三月

・大伏春美「讃岐の歌枕について―松山・松が浦を中心に―」『四国の文学』（出版社、一九九五年）

五年）

・岡本敬道「和歌における「数寄」―能因の数寄の位相―」『宇部国文研究』一一、一九八〇年三月

三月

・岡本敬道「「すき」考―明恵・長明の理解をめぐる―」『宇部国文研究』二九、一九九八年三月

三月

・小川豊生「『俊頼髓脳』の歌語と説話―〈異名〉からの接近―」『日本文学』三五・一〇、一九八六年一〇月

一九八六年一〇月

・小川豊生「院政期歌字書の言語時空」『日本文学』三七、一九八八年六月

・小沢正夫「能因歌枕と清少納言枕草子」『国語国文学研究』四、一九四一年七月

・小沢正夫「平安朝歌論の成立と展開―貫之から公任まで―」『国語と国文学』三九・四、一九

六二年四月

- ・角田宏子「公任に於ける小町歌の受容―遍照・業平歌採歌との比較―」『日本文芸研究』四九・一、一九九七年六月

○年四月

- ・片桐洋一「歌枕の成立―古今集表現研究の一部として―」『国語と国文学』四七・四、一九七九年四月
- ・片桐洋一「拾遺抄』の歌材と表現―大和絵屏風との関連において―」『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』（塙書房、一九七二年）
- ・片桐洋一「拾遺集における古今集歌の重出」『王朝文学 資料と論考』（笠間書院、一九九二年）

- ・片桐洋一「拾遺集における後撰集歌」『関西大学国文学』六九、一九九二年一二月

- ・加藤幸一「紀貫之の季節感」『筑波大学日本語と日本文学』六、一九八六年一月

- ・加藤幸一「紀貫之の表現―同時代における類似表現との比較から―」『和歌文学研究』七一、一九九七年一二月

- ・加藤幸一「紀貫之の表現―同時代における類似表現との比較から・承前―」『日本古典文学の諸相』（勉誠社、一九九七年）

- ・柏木由夫「源俊頼の和歌形成―俊綱と経信―」『国語と国文』六八・二、一九九一年二月

- ・金沢規雄「歌枕の伝承過程―みちのくの歌枕行脚―」『山形女子短期大学紀要』三三、二〇〇〇年三月

○年三月

- ・金子郁子「源経信の特性」『うずしお文藻』五、一九八八年三月

- ・金子英世「藤原長能の和歌について―好忠受容を中心に―」『和歌文学研究』七四、一九九七年六月

年六月

- ・金原理「源経信―その詩人としての側面―」『中古文学と観文学』二（汲古書院、一九八七年）
- ・上岡勇詞「『俊頼髓脳』の和歌説話の種々相」『札幌大谷短期大学紀要』二四、一九九一年一月

○月

- ・河合一也「統詞花集の撰集資料について」『日本大学国文学会語文』五二、一九八一年六月

- ・河合一也「統詞花集と前代勅撰集―勅撰集被除歌入集の問題を中心として―」『日本大学国文学会語文』五九、一九八四年五月

学会語文』五九、一九八四年五月

- ・河合一也「『統詞花集』別部の配列構成について」『日本大学国文学会語文』七五、一九八九年一二月

年一二月

- ・河合一也「『統詞花集』旅部の配列構成について」『日本大学国文学会語文』七六、一九九〇年三月

年三月

- ・河合一也「『統詞花集』賀部の配列構成について」『古典論叢』二三、一九九二年七月

- ・河合一也「『統詞花集』哀傷部の配列構成について」『日本大学国文学会語文』八六、一九九三年六月

三年六月

- ・川上新一郎「『新撰朗詠集』と三奏本『金葉集』―『玄々集』の受容について―」『和歌文学

研究』三八、一九七八年三月

・川野良「経信の歌の新しさについての一考察」『ノートルダム清心女子大学清心語文』二、二〇〇〇年八月

・川村晃生「河原院の松（二）」『銀杏鳥歌』一、一九八八年二月

・川村晃生「河原院の松（二）」『銀杏鳥歌』二、一九八九年六月

・川村晃生「歌語・歌枕の成立」『国文学 解釈と教材の研究』三四・一三、一九八九年一月

・川村晃生「私家集と歌壇―堀河院歌壇をめぐって―」『王朝私家集の成立と展開』（風間書房、一九九二年）

・川村晃生「庭園の風景」『新古今集と漢文学』（汲古書院、一九九二年）

・川村晃生「歌学書を読む―『能因歌枕』の場合―」『武蔵野文学』四〇（武蔵野書院、一九九三年一月）

・川村晃生「失われゆく景観（三） 姨捨山―消えゆく観月の風趣」『新編に本古典文学全集（月報）』五六、一九九九年一〇月

・神作光一「西行と漂泊―歌でたどる西行の足跡」『国文学解釈と鑑賞』四一・八、一九七六年六月

・神作光一「古注・新注数種対照 小倉百人一首演習ノート（九）―（六九）能因法師」『東洋』七・一二、一九七〇年十二月

・菊池成子「西行と能因―能因追慕の素因をめぐって―」『国学院雑誌』八五・七、一九八四年七月

・菊池靖彦「『新撰和歌集』論―その性格と問題点の検討―」『平安文学研究』三六、一九六六年六月

・木越隆「曾丹集の歌風成立私考」『文学・語学』二三、一九六二年三月

・木越隆「藤原公任の歌論私考―「あまりの心」「心ふかし」について―」『学習院高等科研究紀要』二、一九六六年九月

・木越隆「藤原公任の歌論―「姿」を中心として―」『和歌と中世文学』（東京教育大学中世文学談話会、一九七七年）

・北村杏子「源経信の歌と古今集」『解釈』二八・一一、一九八二年一月

・北村杏子「源経信の述懐歌をめぐって」『解釈』三〇・三、一九八四年三月

・北村杏子「源経信の楽しみ」『国文学 解釈と鑑賞』三二・六、一九六七年五月

・北村杏子「嘉保元年八月十九日前関白師実歌合」をめぐって―源経信と信濃―」『青山学院女子短期大学紀要』三六、一九八二年一月

・吉川理吉「藤原長能とかげろふ日記の記者ら」『国語国文』一二・六、一九四二年六月

・金任仲「中世説話の和歌―和歌から説話へ―」『国文学 解釈と鑑賞』七二（至文堂、年度）

・木村健「「すき」覚書―その擡頭・展開・終焉をめぐる一視点―」『国学院雑誌』七五・四、

一九七四年四月

- ・久曾神昇「三十六人撰とその秀歌」『愛知大学文学論集』三一、一九六六年一月
- ・具廷鎬「古来風体抄における俊成の万葉歌撰歌意識」『北海道大学国語国文研究』九三、一九九三年二月
- ・工藤重矩「河原院の文学的伝統と宇多天皇」『平安文学研究』五二、一九七四年七月
- ・工藤重矩「金葉集奏覧本は詞花集の撰集資料にはあらざるべし——柏木由夫氏の批判に答えて——」『福岡教育大学紀要』五八、二〇〇九年二月
- ・久保木哲夫「折」と褻と晴」『王朝和歌と史的展開』（笠間書院、一九九七年）初出、
- ・久保木秀夫「和歌六人党と西宮歌会」『中古文学』六六、二〇〇〇年十二月
- ・久保田淳「源経信の和歌について」『山岸徳平先生頌寿 中古文学論考』（有精堂出版、一九七二年）
- ・久保田淳「藤原清輔「袋草紙」」『国文学 解釈と教材の研究』一八・九（学灯社、一九七四年三月）
- ・黒田彰子「『五代集歌枕目録』について」『愛知文教大学論叢』四、二〇〇一年十一月
- ・桑原博史「伝統と独創——西行論」『国文学 解釈と教材の研究』一五・一三（学灯社、一九七〇年一〇月）
- ・桑原博史「源道済について」『文芸言語研究 文芸遍』九、一九八四年十二月
- ・桑原博史「続・源道済について」『文芸言語研究 文芸遍』一〇、一九八五年十二月
- ・桑原博史「時雨の歌——大江嘉言と能因——」『文芸言語研究文芸篇』一四、一九八八年九月
- ・小池博明「三代集の「望月の駒」——歌ことばの生成と定着——」『平安文学 場と表現』（新典社、二〇〇七年）
- ・五島和代「源道済試考」『文芸と思想』三二、一九六八年十一月
- ・小島憲之「古今集以前」『古今集以前』（塙書房、一九七六年）
- ・後藤昭雄「大江以言考」『平安文学研究』四八、一九七二年六月
- ・後藤昭雄「和歌真名序考」『和歌史の構想』（和泉書院、一九九〇年）
- ・後藤昭雄「坤元録屏風詩をめぐる」『成城国文学』二四、二〇〇八年三月
- ・後藤祥子「源経信伝の考察——公任と能因にかかわる部分について——」『和歌文学研究』一八、一九六五年五月
- ・後藤祥子「管弦者の和歌——延久五年住吉御幸和歌の場合——」『日本女子大学紀要』二〇、一九七一年三月
- ・後藤祥子「平安和歌の屈折点——後拾遺集の場合——」『和歌文学の世界』二（笠間書院、一九七四年）
- ・後藤祥子「能因法師集巻頭十首の年次」『和歌史研究会会報』七四、一九八〇年八月
- ・後藤祥子「源経信前史——道済集・公任集の読み——」『古典和歌論叢』（明治書院、一九八八年）
- ・後藤祥子「『後拾遺集』の撰進事業」『国文学 解釈と鑑賞』七二・三、二〇〇七年三月
- ・小林義昭「『新撰和歌』の配列について——巻第一を中心に——」『大谷女子大國文』二二、一九

九二年三月

・小町崎幹雄「藤原俊成における釈教歌—詠歌態度と歌枕の特徴について—」『いわき明星大学文学・語学』七、二〇〇一年八月

・小町谷照彦「藤原公任の詠歌についての一考察—古今的美学の展開として—」『東京学芸大学

紀要 第二部門』二四、一九七三年二月

・小町谷照彦「拾遺集時代の和歌—受領層歌人を中心とする一視点の設定—」『国語と国文学』

四一・七、一九六四年七月

・小町谷照彦「和歌的幻像の追求—能因法師論ノート—」『日本文学』一九、一九七〇年七月

・小町谷照彦「能因における〈すき〉の旅」『国文学 解釈と教材の研究』一八・九（学灯社、

一九七三年七月）

・小町谷照彦「言葉を操る面白さ—類型と個的なもの—」『月刊国語教育』五・一〇、一九八六年

一月

・小町谷照彦「勅撰集序の和歌史意識」『日本文学史を読む二 古代後期』（有精堂出版、一九

九一年）

・小町谷照彦「後拾遺集への階梯」『平安後期の和歌』（風間書房、一九九四年）初出、

・小町谷照彦「歌の家の好士大中臣輔親—平安朝中期歌人の一位相—」『京都語文』三、一九九

八年一〇月

・小町谷照彦「『三十六人集』に見る歌人意識」『国文学 解釈と鑑賞』七二・三（至文堂、二

〇〇七年三月）

・小峯和明「『俊頼髓脳』の歌と語り」『中世文学研究』九、一九八三年八月

・五味文彦「和歌の歴史、歴史の和歌」『和歌を歴史から読む』（笠間書院、二〇〇二年）

・小峯和明「和歌説話の位相」『国文学 解釈と鑑賞』七二・三（至文堂、二〇〇七年三月）

・小山順子「『最勝四天王院障子和歌』の歌枕表現—「名所の景気并に其の時節」をめぐって

—」『国語国文』七二・九、二〇〇三年九月

・小山利彦「能因法師—風狂の歌人として—」『国文学 解釈と鑑賞』六七・一一、二〇〇二年一

一月

・近藤潤一「平安朝歌壇における近代派の形成」『国語国文学研究』一〇、一九五七年四月

・近藤潤一「古代和歌の抒情と虚無—後拾遺集の自然美意識を中心として—」『文学』三二・一

〇、一九六四年一〇月

・近藤潤一「後拾遺集の風体—「をかし」系列とその変容について—」『国語国文学研究』三四、

一九六六年六月

・近藤潤一「藤原通俊の和歌—附、藤原通俊年譜—」『帯広大谷短期大学紀要』四、一九六七年

七月

・近藤みゆき「撰関期和歌と白居易」『日本における受容（韻文篇）』（勉誠社、一九九三年）

・近藤みゆき「王朝表現史管見—源経信の一首「月かげの澄みわたるかな天のはら雲ふき払ふ夜

- 半の嵐に」とその周辺―』論集 中世の文学 韻文遍（明治書院、一九九四年）
- 近藤みゆき「『拾遺和歌集』の成立―勅撰和歌集における王権・政権と和歌の問題として―」『平安文学史論考』（武蔵野書院、二〇〇九年）
- 齋藤清衛「旅の日本文学史」『旅と伝説』八三（東京三元社、一九三四年一月）
- 阪口和子「藤原公任の歌風―先行歌の撰取を中心に―」『中古文学』二七、一九八一年五月
- 阪口和子「三十六人撰における公任の撰歌意識について」『羽衣学園短期大学研究紀要』二〇、一九八三年一〇月
- 阪口和子「『新撰和歌』考―四季の巻の構成について―」『専修国文』三七、一九八五年九月
- 阪口和子「藤原公任の詠歌についての覚書」『羽衣国文』一、一九八七年三月
- 阪口和子「後十五番歌合に関する一試論―撰者及び成立について―」『大谷女子大学紀要』二四・一、一九八九年九月
- 阪口和子「『新撰和歌』と公任―『拾遺抄』四季部を中心に―」『王朝の文学とその系譜』（和泉書院、一九九一年）
- 阪口和子「後拾遺集時代の歌枕―歌語から名所へ―」『平安後期の和歌』（風間書房、一九九四年）
- 阪口和子「拾遺抄の万葉歌」『大阪大谷国文』三七、二〇〇七年三月
- 阪口和子「公任の秀歌撰にみる『万葉集』享受」『百舌鳥国文』一八、二〇〇七年三月
- 坂倉貴子「紀貫之の真名序―『新撰和歌集』―」『研究紀要』四〇、二〇一〇年三月
- 坂倉貴子「勅撰和歌序の様式―仮名序を中心に―」『学芸古典文学』四、二〇一一年三月
- 坂倉貴子「勅撰和歌序の様式―真名序を中心に―」『学芸古典文学』五、二〇一二年三月
- 坂倉貴子「表出する序者―『新撰和歌集』序をめぐる―」『古代文学の時空』（翰林書房、二〇一三年）
- 佐藤和喜「新撰和歌の構成とその表現」『宇都宮大学教育部紀要』三七・一、一九八七年二月
- 笹川博司「『山隠れ』から『山深み』へ―古今集『み山隠れ』の位置―」『王朝文学研究誌』三、一九九三年九月
- 笹川博司「万葉集と八代集の『世の中』―遁世思想との関連を中心に―」『王朝文学研究誌』四、一九九四年三月
- 笹川博司「『山里』の自然美の形成―『拾遺集』春夏から『後拾遺集』秋風へ―」『平安文学の想像力』（勉誠出版、二〇〇〇年）
- 笹川博司「歌枕と名所意識」『王朝文学と交通』（竹林舎、二〇〇九年）
- 佐々木忠慧「源経信の歌論」『宮城学院女子大学研究論文集』三二、一九六八年一〇月
- 佐々木忠慧「飛騨国の歌枕名所考」『宮城学院女子大学研究論文集』七二、一九九〇年一二月
- 佐藤明浩「源俊頼の歌学知識と和歌実作」『詞林』一四、一九九三年一〇月
- 沢田正子「枕草子能因本の性格」『国語語彙史の研究』四（和泉書院、一九八三年）
- 沢西稔子「元禄刊本『能因歌枕』地名の部についての考察」『和歌文学研究』五四、一九八七

年四月

- ・重田仁美「人の心の変るなるべし―源道濟小論―」『花葉』七、一九九二年九月
- ・重松泰雄「新撰和歌集論―その偽書節の検討―」『佐賀龍谷学会紀要』二、一九五四年一二月
- ・実川恵子「『後拾遺集』女流歌人増大の意味するもの」『研究紀要』二八、一九八四年一二月
- ・実川恵子「後拾遺集「名所歌」小考」『文教大学女子短期大学部文芸論集』二八、一九九二年三月
- ・実川恵子「王朝女流歌人の「月」―後拾遺集を中心に―」『文芸論叢』三四、一九九八年三月
- ・島津忠夫「能因法師―研究史的に―」『島津忠夫著作集』七（和泉書院、二〇〇五年）
- ・清水文雄「新資料能因法師集の研究」『国文学試論』二（東京春陽堂、一九三四年六月）
- ・清水文雄「能因の奥州行脚」『文学』六（岩波書店、一九三四年六月）
- ・清水文雄「能因法師伝（その一）」『文芸文化』四・一、一九四一年一月
- ・清水文雄「能因法師伝（その二）」『文芸文化』四・四、一九四一年四月
- ・清水文雄「能因法師伝（その三）」『文芸文化』四・五、一九四一年五月
- ・新谷秀夫「霞の衣を着た（佐保姫）―『万葉集』享受と歌枕の再生―」『天象の万葉学』（笠間書院、二〇〇〇年）
- ・新藤協三「貫之創始の和歌表現」『平安文学史論考』（武蔵野書院、二〇〇九年）
- ・新聞一美「『奥の細道』と能因の「数奇」―白河の関で―」『台大日本語文研究』二九、二〇一五年六月
- ・杉田まゆ子「公任歌学と古今集序注―仮名序古注と公任序注の先後―」『和歌 解釈のパラダイム』（笠間書院、一九九八年）
- ・杉谷寿朗「新撰和歌諸本の系統と性格―中川文庫蔵二本について―」『鈴木知太郎博士古稀記念 国文学論攷』（桜楓社、一九七六年）
- ・杉谷寿朗「長能集とその歌―伝定家筆切を通して―」『日本大学文理部人文科学研究研究所研究紀要』五二、一九九六年九月
- ・鈴木徳男「『統詞花和歌集』についての試論」『龍谷大学国文学論叢』二八、一九八三年三月
- ・鈴木徳男「『統詞花和歌集』の一考察―赤染衛門と和泉式部の入集歌をめぐって―」『相愛女子短期大学研究論集』三〇、一九八三年一二月
- ・鈴木徳男「『統詞花和歌集』の秋月歌群について」『平安文学研究』七二、一九八四年一二月
- ・鈴木徳男「『統詞花和歌集』四季部の配列構成について」『相愛女子大学研究論集』三二、一九八五年二月
- ・鈴木徳男「『統詞花集』の撰集について―勅撰集初出別入集作者一覧―」『国文学論叢』三三、一九八八年三月
- ・鈴木徳男「『統詞花和歌集』の秋月歌群について」『平安文学研究』七二、一九八四年一月
- ・鈴木徳男「『統詞花集』の成立」『国語と国文学』六六・一二、一九八九年一二月
- ・鈴木徳男「統詞花集「釈教」部について」『仏教文学』一七、一九九三年三月

- ・鈴木徳男「続詞花集の方法」『相愛国文』六、一九九三年三月
- ・鈴木徳男・北山円正「『続詞花和歌集』跋文注」『相愛女子短期大学研究論集』四一、一九九四年三月
- ・鈴木徳男「続詞花集の注釈―神習文庫本の濱臣注をめぐって―」『相愛国文』七、一九九四年三月
- ・鈴木徳男「『俊頼髓脳』の周辺」『国語国文』六四・一、一九九五年一月
- ・鈴木徳男「『俊頼髓脳』の本義」『講座平安文学論究』一七（風間書房、二〇〇三年）
- ・鈴木徳男「『俊頼髓脳』の歴史認識―「中頃の人」をめぐって―」『龍谷大学国文学論集』四八、二〇〇三年三月
- ・鈴木徳男「定家と『俊頼髓脳』」『和歌文学研究』一〇五、二〇一二年二月
- ・鈴木宏子「王朝秀歌撰に見る紀貫之の歌」『千葉大学教育学部研究紀要』四六、一九九八年二月
- ・関根よし子「私家集研究の中から―経信集の二種の編纂について―」『お茶の水女子大学人文科学紀要』一七、一九六四年三月
- ・関根慶子「源俊頼の自然詠について」『文学における自然』（笠間書院、一九八〇年）
- ・高重久美「俊綱家歌会和歌六人党」『四条畷紀要』二、一九八九年一月
- ・高重久美「橘為仲朝臣集」における問題―編年性をめぐって―『和歌文学研究』五九、一九八九年一月
- ・高重久美「落葉」の音―源頼実の歌を通して―『文学史研究』三九、一九九八年二月
- ・高重久美「西宮邸―和歌六人党の詠歌の場―」『狭衣物語の新研究―頼通の時代を考える』（新典社、二〇〇三年）
- ・高重久美「長元九年八月十五日夜遍照寺詩歌会―撰津源氏頼家と藤原南家実範―」『文学史研究』四四、二〇〇四年三月
- ・高野平「新撰和歌中古今集以外の採歌について」『語文』四六、一九七八年十二月
- ・高野晴代「歌題の生成と屏風歌―貫之―延喜六年内裏月次屏風歌―を中心に―」『日本女子大学国文学目録』三三、一九九四年一月
- ・高橋宏幸「藤原定家の「仮名遣」成立の時期に関する鶏肋―玄々集と書状―」『都留文科大学国文学論集』二九、一九九三年三月
- ・高橋良雄「生と美学―能因」『国文学 解釈と教材の研究』一六・一五（学灯社、一九七一年一二月）
- ・高橋良雄「詩人たちの旅―能因」『国文学 解釈と教材の研究』・二〇・一五（学灯社、一九七五年一月）
- ・高橋良雄「歌枕「すみだ川」」『学苑』六〇〇、一九八九年一月
- ・高橋良雄「東国歌枕の流転」『学苑』六二七、一九九二年一月
- ・滝澤貞夫「拾遺集時代の枕詞」『国語と国文学』五〇・一、一九七三年一月

- ・滝澤貞夫「『能因歌枕』と『名所歌枕』の比較―信濃の歌枕を通して―」『名所歌枕伝能因法師撰の本文の研究』（笠間書院、一九八六年）
- ・滝澤貞夫「西行の歌枕」『和歌文学の世界―論集 西行』（笠間書院、一九九〇年）
- ・滝澤貞夫「信濃から見た古典文学」『文学・語学』一三八、一九九三年十月
- ・滝澤貞夫「秀歌撰という詞華集―詞書からの自立」『小倉百人一首を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九八年）
- ・田口和夫「『俊頼髓脳』呉松孝説話と源経信―『今昔物語集』典拠論のために―」『説話』九、一九九一年三月
- ・竹下豊「源道済について」『論集 日本文学・日本語二 中古』（角川書店、一九七七年）
- ・竹下豊「源俊頼」『王朝の和歌』（勉誠社、一九九三年）
- ・武田早苗「後拾遺集の排列法―時の推移をめぐって―」『小論』四、一九九五年七月
- ・武田早苗「『後拾遺集』の撰歌意識と歌群構成の一方方法」『相模国文』二七、二〇〇〇年三月
- ・田島智子「拾遺抄・拾遺集の屏風歌の意義―「延喜御時」をめぐって―」『和歌史の構想』（和泉書院、一九九〇年）
- ・田尻嘉信「「高砂」歌詞群考」『跡見学園国語科紀要』二四、一九七六年三月
- ・田尻嘉信「『能因歌枕』の名所記載」『跡見学園国語科紀要』三三、一九八五年四月
- ・橘りつ「能因法師と歌徳説話―烏丸光広の歌徳説話との関連において―」『東洋』一八・八、九、一九八一年九月
- ・橘りつ「中世の紀行文に見られる古典受容についての続考―能因法師からの受容を中心に―」『東洋』三四・四、一九九七年四月
- ・田中徳定「河原院と源融の風流―平安朝文人の意識をめぐって―」『駒沢国文』二三、一九八六年二月
- ・田仲洋己「『俊頼髓脳』の一面」『国語と国文学』六八・一一、一九九二年十一月
- ・田仲洋己「『定家十体』再考」『岡山大学文学部紀要』三九、二〇〇三年七月
- ・谷山茂「玄々集と金葉集三奏本」『国語国文』二一・九、一九五二年十月
- ・谷山茂「金葉集と詞花集―玄々集をめぐって―」『国語国文』二二・六、一九五三年六月
- ・谷山茂「新古今集の歌枕」『国文学解釈と教材の研究』二・九、一九五七年八月
- ・田野慎二「『千五百番歌合』二百三十八番の俊成判について―「同名の歌枕」の問題―」『論考 平安王朝の文学 一条朝の前と後』（新典社、一九九八年）
- ・田淵句美子「能因周辺に関する一試論―「心あらむ人に見せばや」―」『帝国学園紀要』一八、一九九二年一二月
- ・田村柳巷「順徳院歌論覚書―『八雲御抄』用意部について―」『日本大学国文学会語文』四四、一九七八年三月
- ・檀上正孝「芭蕉における「能因」像の形成」『広島大学教育学部紀要』二五、一九七七年四月
- ・千葉義孝「藤原範永試論―和歌六人党をめぐって―」『国語と国文学』四七・八、一九七〇年

八月

- ・千葉義孝「源頼実とその家集」『和歌文学研究』三二、一九七五年三月
- ・塚本洋子「新撰和歌集」についての一考察―巻四「恋雑」をめぐって―『国文』六三、一九八五年七月
- ・手崎政男「『新撰和歌』の編集における貫之の意図―〈花実相兼〉ということの意味するもの―」『富山大学文理文学部文学紀要』一二、一九六三年二月
- ・寺島修一「『奥義抄』と『俊頼髓脳』―清輔の著述態度について―」『武庫河国文』五〇、一九九七年二月
- ・寺島修一「清輔の歌学と『俊頼髓脳』―『袋草神』を中心に―」『国語国文学論集』（和泉書院、一九九九年）
- ・寺島修一「『奥義抄』注説の形成―『俊頼髓脳』―との関わりから」『武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集』（和泉書院、一九九九年）
- ・寺田澄江「歌作りということ―和歌史における俊頼の位置―」『国際日本文学研究会会議録』二七、二〇〇四年三月
- ・寺前友美「隠岐本新古今和歌集削除歌考―撰者名注記から撰歌意識を考える―」『かほよとり』七、一九九九年一二月
- ・百日鬼恭三郎「後拾遺時代における歌枕の創出」『共立女子短期大学（文科）紀要』二九、一九八六年二月
- ・百日鬼恭三郎「『能因歌枕』の引歌について」『共立女子短期大学文科紀要』三三、一九九〇年二月
- ・百日鬼恭三郎「『能因歌枕』の名所部について」『共立女子短期大学文科紀要』三四、一九九一年二月
- ・徳植俊之「藤原長能の和歌―その歌風形成と特質について―」『国語と国文学』八七・一〇、二〇一〇年一〇月
- ・徳原茂美「延喜五年二月二日の河原院と壬生忠岑」『武庫川国文』二四、一九八四年一月
- ・徳原茂美「歌語「高砂」考」『日本語日本文学論集』二、二〇〇七年三月
- ・土佐秀里「歌うスサノヲ―歌の神話史／思想史―」『古代文学の思想と表現』（新典社、二〇〇〇年）
- ・富樫美代子「三代集の歌枕研究―筑紫の歌枕を中心として―」『実践国文学』一八、一九八〇年一〇月
- ・中周子「『拾遺集』における貫之歌風の継承」『文芸論集』二二、一九八四年三月
- ・中周子「『拾遺集』における貫之歌―『拾遺抄』との比較を中心に―」『樟蔭国文学』四三、二〇〇六年一月
- ・中島重子「和泉式部―源道済との贈答をめぐって―」『国文学研究』七二、一九八〇年一〇月
- ・中嶋尚「『枕草子』能因本の本文小考」『むらさき』三四、一九九七年一二月

- ・中野方子「『古今集』における「べらなり」―喩に承接される助動詞―」『国文』八六、一九七七年一月
- ・中野方子「春歌類型の展開における漢詩文の影響―『古今集』から『貫之集』へ―」『立正大
学国語国文』三四、一九九七年三月
- ・中西進「和歌的抒情と漢詩世界―「長恨歌」について―」『日本文学講座 詩歌』（古典編）』
（大修館書店、一九八八年）
- ・中西満義「西行の陸奥への旅」『国文学解釈と鑑賞』七六・三、二〇一―一三月
- ・中村泉子「『百人一首』にみる撰歌意識」『お茶の水女子大学国語国文学会国文』八四、一九
九六年一月
- ・中山昌「源経信と出羽弁」『群馬女子短期大学紀要』四、一九七六年十一月
- ・名子喜久雄「能因の和歌に見られる二つの態度―高邁と卑少さ―」『平安文学研究』五八、一
九七七年十一月
- ・名子喜久雄「藤原長能の和歌―その自己認識について―」『平安文学研究』六五、一九八一年
六月
- ・難波喜造「王朝歌論の形成―古今集所から公任まで―」『日本文学講座 評論』（大修館書店、
一九八七年）
- ・仁尾雅信「和歌に詠まれる「石上布留」―八代集地代の和歌を中心に―」『山辺の歴史と文化』
（奈良新聞社、二〇〇六年）
- ・錦仁「『近代秀歌』覚書―藤原定家と源経信―」『聖和』一三、一九七六年三月
- ・錦仁「源経信の表現―中世和歌への歩み―」『文芸研究』一一七、一九八八年一月
- ・錦仁「源経信の表現観―『難後拾遺』の検討―」『平安文学研究』七九・八〇、一九八八年一
〇月
- ・錦仁「源経信の漢詩文的表現―〈晴〉と〈藝〉ことなど―」『平安後期の和歌』（風間書房、
一九九四年）
- ・錦仁「院政期歌合の構造と方法―〈藝〉から〈晴〉への和歌史観の批判―」『日本文学』四
三・二、一九九四年二月
- ・錦仁「『古今集』仮名序と院政期の和歌観念」『日本文学』四四・七、一九九五年七月
- ・錦仁「和歌の展開―一世紀―」『一一・一二世紀の文学』（岩波書店、一九九六年）
- ・錦仁「音のある風景―『古今和歌集』仮名序を起点に―」『日本文学』五三、二〇〇四年七月
- ・西澤美仁「西行の能因歌享受―「難波の春」から「鴨立沢」へ―」『国語と国文学』五七・一
一、一九八〇年十一月
- ・西澤美仁「西行和歌「鴨立沢」を読み返す」『上智大学国文学論集』四一、二〇〇八年一月
- ・西沢義人「西行の数奇」『国文学解釈と教材の研究』三七・七、一九九二年六月
- ・西村加代子「藤原長能の歌覚え書き」『国文学研究ノート』一四、一九七四年七月
- ・西山秀人「源順歌の表現―好忠および河原院周辺歌人詠との関連―」『和歌文学研究』六四、

一九九二年十一月

- ・西山秀人「歌枕への挑戦―類聚章段の試み―」『国文学 解釈と教材の研究』四一・一、一九九六年一月

- ・西山秀人「源順の屏風歌―その歌風の変遷について―」『学海』一七、二〇〇一年三月
- ・西山秀人「能因法師の歌枕の旅―奥州下向を中心に―」『王朝文学と交通』（竹林舎、二〇〇九年）

- ・仁平恭治「源経信と遁世者―『撰集抄』における経信像―」『筑波大学日本語と日本文学』二、一九八二年十一月

- ・丹羽博之「雨中の花」『平安文学研究』七九・八〇、一九八八年一〇月

- ・丹羽博之「月氷攷―「影見し水ぞまづ氷りける」の展開―」『古今和歌集連環』（和泉書院、一九八九年）

- ・沼田純子「経信詠小考」『叙説』四、一九七九年一〇月

- ・野口博久「歌論書と説話文学―『俊頼髓脳』の説話の伝承をめぐる―」『日本の説話』四（東京美術、一九七四年）

- ・野中春水「清輔本古今集合点歌と新撰和歌集」『国語国文』二二・一二、一九五四年五月

- ・萩原昌好「西行と雪月花―西行の自然観―」『国文学 解釈と鑑賞』六五・三、二〇〇〇年三月

- ・秦澄美枝「『後拾遺和歌集』―転換期の諸相―」『研究と資料』三二、一九九四年一二月
- ・服部一枝「「ことのは」考―『古今集』仮名序における―」『中央大学国文』二六、一九八三年三月

- ・花井滋春「伊勢物語と河原院文化圏」『伊勢物語 虚構の成立』（竹林舎、二〇〇八年）

- ・馬場あき子「歌説話の世界 八、長能と能因」『短歌研究』六〇・五（短歌研究社、二〇〇三年五月）

- ・馬場あき子「歌説話の世界 九、能因の旅説話」『短歌研究』六〇・六（短歌研究社、二〇〇三年六月）

- ・馬場あき子「歌説話の世界 一九、俊頼の髓脳（二）」『短歌研究』六一・五（短歌研究社、二〇〇四年五月）

- ・馬場あき子「歌説話の世界 二〇、俊頼の髓脳（二）」『短歌研究』六一・六（短歌研究社、二〇〇四年六月）

- ・半田公平「寂蓮の名所和歌集入集歌について―『勅撰名所和歌要抄』『勅撰名所和歌抄出』『名所諸抄』『同名歌枕名寄抄』を中心として―」『二松学舎大学人文論叢』七一、二〇〇三年一〇月

- ・樋口芳麻呂「新撰和歌の成立―序を中心に―」『国語と国文学』四四・一〇、一九六七年一〇月

- ・樋口芳麻呂「「十二月事」とその考察」『平安文学研究』四九、一九七二年六月

- ・樋口芳麻呂「『後十五番歌合』考」『平安文学研究』五七、一九七七年六月
- ・久松潜一「歌論史に於ける表現論の類型―歌のさま、余情、調―」『日本女子大学国語国文学論究』（日本女子大学国語国文学界、一九六七年）
- ・久松潜一「随想短歌史 十八 源経信の叙景歌」『短歌』二二・一〇、一九七五年一〇月
- ・日比野浩信「『五代集歌枕』上巻の本文」『愛知淑徳大学国語国文』二八、二〇〇五年三月
- ・平田英夫「西行の〈靈験〉―止雨の歌をめぐって―」『西行学』四、（笠間書院、二〇一三年八月）
- ・平野由紀子「能因集の一研究―家集の自律的世界―」『関根慶子教授退官記念 寝覚物語対校・平安文学論集』（風間書房、一九七五年）
- ・平野由紀子「能因の想像奥州十首について」『和歌文学研究』三七、一九七七年九月
- ・平野由紀子「『玄々集』本文考―現存本の限界と失われた系統―」『国語と国文学』五七・七、一九八〇年七月
- ・平野由紀子「能因・小町・相模」『和歌史研究会会報』一〇〇、一九九二年二月
- ・平野由紀子「夢の小町―能因と順徳院の場合―」『和歌文学の伝統』（角川書店、一九九七年）
- ・平野由紀子「玄々集の三河入道」『古筆と和歌』（笠間書院、二〇〇八年）
- ・広瀬裕美子「『大鏡』の「秀歌」基準―『玄々集』との関連性―」『国語国文学研究』三二、一九九七年二月
- ・福井迪子「大江嘉言考―詠歌活動とその交友―」『語文研究』三四、一九七二年一二月
- ・藤岡忠美「曾禰好忠の訴嘆調の形成―「古今集」時代専門歌人からの系譜―」『国語国文研究』二七、一九六四年二月
- ・藤平春男「俊頼髓脳―中世和歌への道標として―」『国文学研究』四五、一九七一年一〇月
- ・藤平春男「『俊頼髓脳』補説」『国文学研究』四六、一九七二年三月
- ・藤平春男「題詠考―歌論史の角度から（一）―」『早稲田大学国文学研究』一〇二、一九九〇年一〇月
- ・藤平春男「俊頼髓脳―源俊頼」『藤平春男著作集』三（笠間書院、一九九八年）初出、
- ・藤平春男「能因」『藤平春男著作集』五（笠間書院、二〇〇三年）
- ・復本一郎「「田植うた」考―能因への挨拶という視点から―」『人文論集』三三、一九八二年一月
- ・本間洋一「院政期の漢詩世界序説（三）―漢詩と和歌と―」『北陸古典研究』二六、二〇一一年一月
- ・前田敬子「「雪の下折れ」考―『新古今和歌集』六六七番歌をめぐって―」『福井大学国語国文学』三一、一九九二年三月
- ・増田繁夫「平安和歌史で〈はれ〉〈け〉とは何か」『国文学 解釈と教材の研究』二二（学灯社、一九七七年九月）
- ・増田繁夫「能因の歌道と求道―歌道における「すき」の成立―」『後期撰関時代史の研究』

(吉川弘文庫、一九九〇年)

・増田繁夫「歌語「ねざめ」について」『大阪市立大学文学部人文研究』四一、一九九〇年一月
・増田繁夫「河原院哀史」『平安文学の想像力』(勉誠出版、一九九四年)

・増淵勝一「和歌六人党伝考―藤原経衡伝を中心として―」『和歌文学研究』二六、一九七〇年七月

・増淵勝一「源頼家伝考(一)―和歌六人党の成立をめぐる―」『立正女子大学短期大学部研究紀要』一六、一九七二年二月

・増淵勝一「源頼家伝考(二)―和歌六人党の成立をめぐる―」『立正女子大学短期大学部研究紀要』一八、一九七四年二月

・増淵勝一「説話の伝統―和歌六人党の場合―」『今昔物語集―説話文学の世界―』一(笠間書院、一九七八年)

・松井律子「新古今集の自然詠について―聴覚による場合―」『岡大國文論稿』一、一九七三年三月

・松原一義「藤原長能と三月尽説話」『国文学攷』九二、一九八一年十二月

・松原一義「藤原長能の説話とその歌風」『四国女子大学紀要』一・一、一九八一年十二月

・松原一義「藤原長能と『道綱母集』の成立―「原道綱母集」の想定―」『国語と国文学』六〇・二、一九八三年二月

・松原一義「長能・能因の師弟関係―『玄々集』の原資料の考察から―」『平安文学研究』七〇、一九八三年十二月

・松村雄二「倒錯した歌人たち―和歌説話における〈秀歌幻想〉の成立と屈折素描―」『共立女子短期大学紀要』二二、一九七九年二月

・松村雄二「和歌代作論」『共立女子短期大学(文科)紀要』二二、一九七九年二月

・松村雄二「教寄に関するノート―和歌の教寄説話を中心として―」『共立女子短期大学文科紀要』三二、一九八八年二月

・松村雄二「王朝和歌の転移―古今集から新古今集―」『和歌と貴族の世界 うたのちから』(塙書房、二〇〇七年)

・松本治久「『大鏡』と『玄玄集』との関連性について―広瀬裕美子氏の論考についての疑問―」『武蔵野日本文学』一〇、二〇〇一年三月

・松本真奈美「和歌素材「ならの葉」をめぐる―」『尚絅女学院短期大学研究報告』四四、一九九七年一〇月

・松本真奈美「私家集編纂の急増と『拾遺集』」『国文学 解釈と鑑賞』七二・三(至文堂、二〇〇七年三月)

・丸山茂「古典文学の風土 東北―文学の営みを受け止め、創り出してきたもの―」『東北文学の世界』一、一九九三年三月

・三木紀人「教寄者たちとその周辺」『国文学 解釈と教材の研究』一五・一一(学灯社、一九

七〇年八月)

- ・満田みゆき「源道済の和歌における漢詩文受容―句題詠法を軸に―」『国語と国文学』六四・一、一九八七年一月
- ・源義春「中世文学における一つの問題点―定家の撰歌意識をめぐって―」『芦屋ゼミ第二次』九、一九八八年六月
- ・三好英二「長能と道綱母との関係について」『国語国文』一二・九、一九四二年九月
- ・村井梨恵「貫之の和歌における独自性―様々な表現を通して―」『大阪大谷国文』三七、二〇〇七年三月
- ・村瀬敏夫「花山院と公任―『拾遺集』における撰者の問題―」『鑑賞 日本古典文学』七、(角川書店、一九七五年)
- ・目崎徳衛「能因の伝における二、三の問題」『平安文化史論』(桜楓社、一九六八年)
- ・目崎徳衛「六歌仙と三十六人撰―百人一首の作者たち(二)―」『短歌』二八・二(角川書店、一九八一年二月)
- ・森澤眞直「西行「鴨立つ沢」「難波の春」歌考―嘉言・能因を源流とする世界―」『文芸研究』一四六、一九九八年九月
- ・森下純昭「源経信の任太宰権帥をめぐって」『名古屋平安文学研究会会報』三、一九七九年五月
- ・森下純昭「能因の出家をめぐって―能因法師集上巻の内容・構成面から―」『岐阜大学国語国文学』一六、一九八三年一月
- ・森本茂「名所の独立―『能因歌枕』を中心に―」『王朝物語とその周辺』(笠間書院、一九八二年)
- ・森本元子「新古今集・続詞花集の共通作覚えがき」『和歌史研究会会報』七三、一九八〇年五月
- ・森山茂「研究ノート 歌論と説話―『奥義抄』と『袋草紙』とを対象に―」『尾道大学芸術文化学部紀要(日本文学科)』一、二〇〇二年三月
- ・八木意知男「『八雲御抄』における歌枕の論理―歌枕としての帝宮に就きて―」『皇学館論叢』一二・四、一九七九年八月
- ・八木意知男「伝能因法師撰『名所歌枕』入集大嘗会和歌」『神道史研究』三九・三、一九九一年七月
- ・安田純生「源経信伝をめぐって」『樟蔭国文学』一一、一九七四年三月
- ・安田純生「源経信の和歌」『大坂樟蔭女子大学論集』一三、一九七五年三月
- ・安田純生「能因の「入相の鐘」の歌」『白珠』三〇・八(白珠社、一九七五年八月)
- ・安田純生「源頼実の和歌」『城南国文』一、一九七八年九月
- ・安田純生「後冷泉院の源経信」『王朝の歌と物語』(桜楓社、一九八〇年)
- ・安田純生「難波の春(1)」『白珠』四七・一〇(白珠社、一九九二年一〇月)

- ・安田純生「難波の春(2)」『白珠』四八・一(白珠社、一九九三年一月)
- ・安田純生「うたわれた風土・月の歌」『白珠』六二・六(白珠社、二〇〇七年六月)
- ・山内益次郎「能因法師と枕草子」『平安朝文学研究』二、一九五七年十月
- ・山岡道子「『類聚古集』の部類―平安時代における享受―」『龍谷大学国文学論叢』四五、二〇〇〇年二月
- ・山口美夏「『枕草子』の表現についての一考察―好忠および河原院周辺の歌人詠との関連を中心に―」『語文』八四、一九九二年一二月
- ・山本幸一「出家修行者としての西行とその和歌」『仏教文学』四、一九七五年五月
- ・山下文「藤原公任の私撰集編纂―『金玉集』『深窓秘抄』の配列と構成から―」『京都大学国文学論集』二七、二〇一二年三月
- ・山田昭全「佐藤義清と西行と―西行出家の意味―」『国文学解釈と鑑賞』四一・八、一九七六年六月
- ・山田晶子「袋草紙における説話的要素」『国語国文学研究論文集』五、一九六〇年三月
- ・山中裕「撰関政治史―藤原道長を中心として―」『調布日本文化』五、一九九五年三月
- ・湯之上早苗「数寄と求道―(四) 惟規説話と俊頼髓脳」『文教国文学』一五、一九八四年九月
- ・吉田薫「『八雲御抄』名所部における『万葉集』の地名に関する考察―『五代集歌枕』に見えない地名について―」『大阪信愛女学院短期大学紀要』二三、一九八九年四月
- ・吉田茂「『すき』の実践者―和歌六人党とその周辺の歌人たち―」『国語科文集』創立二〇周年記念特別号、二〇〇三年三月
- ・吉田ミスズ「源経信の歌論の一考察―歌詞と声調への関心について―」『関根慶子教授退官記念 寝覚物語対校・平安文学論集』(風間書房、一九七六年)
- ・吉原栄徳「土佐日記記述の動機」『園田国文』一、一九八〇年三月
- ・若林俊英「『統詞花和歌集』の「詞書」の語彙について」『東海大学湘南文学』三九、二〇〇五年三月
- ・渡辺輝道「名所歌枕からみた後拾遺集」『高知国文』一一、一九八〇年一二月
- ・渡辺輝道「後拾遺集の歌枕用法―三代集との共通歌枕を通して―」『高知大國文』一四、一九八三年一二月
- ・渡辺輝道「『難後拾遺』の意味」『高知大文学』一七、一九八六年一二月
- ・渡邊信和「『撰集抄』における源経信」『中京大学文学部紀要』一五・三、一九八一年一月
- ・渡辺久壽「紀貫之『土佐日記』論断章―〈原質〉への回帰―」『山梨英和短期大学』創立十五周年記念 国文学論集(笠間書院、一九八一年)
- ・渡辺麻衣子「源経信と橘俊綱」『白百合女子大学言語・文学研究論集』四、二〇〇四年四月
- ・渡部泰明「藤原清輔の「本歌取り」意識―『奥義抄』『盗古歌証歌』をめぐって―」『国語と国文学』七二・五、一九九五年五月
- ・渡部泰明「西行はなぜ愛されたか」『文化交流研究』二三、二〇一〇年

【辞書・索引類】

- ・『角川古語大辞典』（角川書店、一九九四年）
- ・久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）
- ・ひめまつのかみ編『八代集奏索引』（大学堂書店、一九八六年）
- ・吉原永徳『勅撰歌歌枕集成』（おうふう、一九九五年）
- ・吉原栄徳『和歌の歌枕・地名大辞典』（おうふう、二〇一四年）
- ・『和歌文学大辞典』、古典ライブラリー、二〇一四年

【データベース】

- ・国文学研究資料館「国文学論文目録データベース」(<https://www.njil.ac.jp/>)
- ・ジャパンナレッジ (<https://japanknowledge.com/>)

初出一覧

序論	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
第一章	『拾遺集』との重出歌からみた『玄々集』・・・・・・・・・・
	・・・・・・・・・・『日語日文学研究』第九七卷第二号（韓国日語日文学会、二〇一六年六月）
第二章	『玄々集』所収長能詠の撰歌意識・・・・・・・・『比較文学・文化論集』第三五卷（二〇一八年三月）
第三章	藤原公任に対する認識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	・・・・・・・・・・『日本学研究』第五五卷（檀国大学校日本研究所、二〇一八年九月）
第四章	『能因集』における作歌方法・・・・・・・・『比較文学・文化論集』第三七卷（二〇二〇年三月）
	・・・・・・・・・・『国際日本文学研究集会会議録』第四〇卷（国文学研究資料館、二〇一七年三月）
第五章	『能因歌枕』の「国々の所々名」考・・・・・・・・・・・・・・・・
	・・・・・・・・・・『日本研究』第五二卷（中央大学校日本研究所、二〇二〇年二月）
第六章	新古今時代の能因受容の様相・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし
結論	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・書き下ろし

・吉原永徳『勅撰歌歌枕集成』（おうふう、一九九五年）により、第五章で考察した『能因歌枕』の「国々の所々名」所収歌枕と、全二一代勅撰集の共通する歌枕の、勅撰集における全用例を挙げたものである。（歌枕は五十音順）

・用例を挙げるにあたって、能因の他の撰集である『玄々集』と『能因集』に該当歌枕詠が有る場合、合せて挙げた。

・長歌の場合、前文は挙げず、歌枕の詠み方が確認出来る部分のみを挙げた。

【明石浦】（播磨）

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

磯の宿りにて、夕ふを

入日さす 浪路を見れば ひと雲み 明石の浦は へだたりにけり

（二二六）

●勅撰和歌集……一八例

（題知らず）

（読人知らず）

仄々と 明石の浦の 朝霧に 島隠れ行く 舟をしぞ思ふ

（古今・羈旅・四六九）

明石の浦の辺りを、舟を乗りて罷りけるに 源為憲

世と共に 明石の浦の 松ばらは 波のみこそ 寄るとしるらめ

（拾遺・雑上・四六四）

（題知らず）

（人麿）

白波は 立てど衣に 重ならず 明石も須磨も 己が浦浦

（拾遺・雑上・四七七）

返し

絵式部

眺むらん 明石の浦の 気色にて 都の月は 空にしらなん

（後拾遺・羈旅・五二四）

筑紫に下り侍りけるに、明石と言ふ所にて

詠み侍り

帥前内大臣

ものを思ふ 心の闇し 暗ければ 明石の浦も 甲斐なけりけり

（後拾遺・羈旅・五二九）

水上月を、詠める

藤原実光朝臣

月影の 射すに任せて 行く舟は 明石の浦や 泊りなるらん

（金葉・秋・二〇八）

月の明かりける頃、明石に罷りて、月を見て

上り立ちけるに、都の人々、月は如何かなど尋ね

けるを聞きて、詠める

平忠盛朝臣

有明の 月も明石も 浦風に 波ばかりこそ 寄ると見えしか

（金葉・秋・二一六）

千五百番の歌合に

権中納言公経

つくづくと 思ひ明石の 浦千鳥 波の枕に 泣く泣くぞ聞く

（新古今・恋四・一三三一）

（堀河院に、百首の歌奉りける、忍恋）

基俊

波間より 明石の浦に 漕ぐ舟の 穂には出でずも 恋ひ渡るかな（新勅撰・恋一・六七八）

権中納言道俊の桂の家にて、旋頭歌詠み侍りけるに、

恋の心を、詠める

俊頼朝臣

つれなさを 思ひ明石の 浦見つつ 海人の漁りに 焚く藻の煙 面影に立つ

（新勅撰・雑五・一三四六）

亭子院に侍ひける女に、遣はしける

源嘉種

長き夜の 明石の浦に 焼く塩の 煙は浦に 立ちや上らぬ

月の百首の歌に

前大納言忠良

(続後撰・異本(恋二)・一三七九)

如何なれば 須磨の関屋を

漏る月の 明石の浦に

名を留むらん (続古今・秋上・三九四)

千五百番の歌合に

寂連法師

心とや 一人明石の 浦千鳥 友惑ふべき 夜半の月かは

(続古今・冬・六一一)

文永二年七月、白河殿にて、人々題を探りて

七百首の歌仕うまつりける次に、浦春月

後嵯峨院御製

所柄 光変はらば 春の月 明石の浦は 霞まざるがな

(続拾遺・春下・一三〇)

(千鳥を、詠み侍りける)

読人知らず

山の端も 見えぬ明石の 浦千鳥 島隠れ行く 月に鳴くなり

(玉葉・冬・九一九)

筑紫へ下りけるが、明石と言ふ所に、日数を

経けるに、思ひ続けて

大江忠成朝臣女

寢覚して 幾夜明石の 浦風を 波の枕に 一人聞くらん

(続千載・羈旅・七八二)

世の中騒がしく侍りける頃、三草の山を通りて、

大蔵谷と言ふ所に

前大納言尊氏

今向かふ 方は明石の 浦ながら 未だ晴れやらぬ 我が思ひかな

(風雅・旅・九三三)

堀河院御時の百首の歌に

前中納言匡房

月影に 明石の浦を 漕ぎ行けば 千鳥屢鳴く 明けぬこの夜は

(新続古今・冬・六七四)

【県の井戸】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二例

県の井戸と言ふ家より、藤原治方に、

遣はしける

橘公平女

都人 来ても折らなん 蛙鳴く 県の井戸の 山吹の花

(後撰・春下・一〇四)

題知らず

後鳥羽院御製

蛙鳴く 県の井戸に 春暮れて 散りやしぬらん 山吹の花

(続後撰・春下・一五五)

【浅間の嶽(山)】(信濃)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一一例

(題知らず)

中興

雲晴れぬ 浅間の山の 浅ましや 人の心を みてこそ止まめ

(古今・雑体・一〇五〇)

信濃へ罷りける人に、薰物遣はすとて 駿河

信濃なる 浅間の山も 燃ゆなれば 富士の煙の 甲斐やなからん

(後撰・離別・一三〇八)

(題知らず)

(読人知らず)

何時とてか 我が恋止まむ 千早振る 浅間の嶽の 煙絶ゆとも

(拾遺・恋一・六五六)

東の方に罷りけるに、浅間の嶽に烟の立つを
見て、詠める
業平

信濃なる 浅間の嶽に 立つ煙 遠近人の 見やは咎めぬ (新古今・羈旅・九〇三)

信濃の国に罷りける人に、薰物贈り
侍りける 源有教朝臣

忘るなよ 浅間の嶽の 煙にも 年経て消えぬ 思ひありとは (新勅撰・雑四・一三一一)

同じ心(寄山恋)を、詠ませ給ひける 土御門院御製

信濃なる 浅間の山の 浅からぬ 思ひの末ぞ 煙ともなる (続古今・恋二・一〇七五)

恋の歌の中に 紀貫之

何時とてか 我が恋ひざらん 信濃なる 浅間の山の 煙絶ゆとも

(続古今・恋二・一〇七六)

題知らず 大藏卿有数女

煙立つ 浅間の嶽に あらねども 絶えぬ思ひに 身を焦がすかな (続拾遺・恋二・八三三)

題知らず 津守国道

立ち迷ふ 浅間の山の 峰の雲 煙を人の 見やは咎めん (続千載・羈旅・八四〇)

正治二年、後鳥羽院に百首の歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

春はなほ 浅間の嶽の 空冴えて 曇る煙は 雪消なりけり (新続古今・春上・六)

家に歌合し侍りける時 後九条前内大臣

信濃なる 浅間の嶽の 遠近に 人も咎めぬ 霞立つらし (新続古今・春上・二〇)

【朝の原】(大和)

●玄々集……一例

春立ちて 朝の原の 雪見れば まだふる年の 心地こそすれ (平祐挙・八九)

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二〇例

題知らず 読人知らず

霧立ちて 雁ぞ鳴くなる 片岡の 朝の原は 紅葉しぬらむ (古今・秋下・二五二)

題知らず 平祐挙

春立ちて 朝の原の 雪見れば 未だ旧年の 心地こそすれ (拾遺・春・七)

題知らず 人麿

明日からは 若菜摘まむと 片岡の 朝の原は 今日ぞ焼くめる (拾遺・春・一八)

屏風絵に、鳥多く群れ居て、旅人の眺望する所を、

詠める 藤原長能

狩りに来ば 行きても見まし 片岡の 朝の原に 雉子鳴くなり (後拾遺・春上・四七)

早春の心を詠める 大宰大弍長実

何時しかと 春の証に 立つものは 朝の原の 霞なりけり (金葉・春・六)

草花告秋と言へる事を、詠める 源雅兼朝臣

咲き初むる 朝の原の 女郎花 秋を知らする 端にぞありける (金葉・秋・一六八)

春立ちける日、詠み侍りける 源俊頼朝臣

春の来る 朝の原を 見渡せば 霞も今日ぞ 立ち始めける (千載・春・一)

堀河院御時、百首の歌奉りける時、詠み侍りける

大納言師頼

露繁き 朝の原の 女郎花 一枝折らん 袖は濡るとも (千載・秋上・二五二)

題知らず 前内大臣家

片岡の 朝の原の 雪消えて 草は緑に 春雨ぞ降る (続後撰・春中・六六)

岡若菜を 光明峰寺入道前撰政左大臣

若菜摘む 衣手濡れて 片岡の 朝の原に 淡雪ぞふる (新後撰・春上・二五)

弘徽殿女御の歌合に 相模

春の来し 朝の原の 八重霞 日を重ねてぞ 立ち増さりける (続千載・春上・三五)

秋の歌の中に 従三位為繼

秋草の 色付く見れば 片岡の 朝の原に 鹿ぞ鳴くなる (続千載・秋上・三九九)

宝治の百首の歌召しける次に、寄原恋 後嵯峨院御製

木の根濡る 朝の原の 露けさは 起き別れつる 涙なりけり (続千載・恋三・一三七〇)

題知らず 読人知らず

吉野山 霞立ちぬる 今日よりや 朝の原は 若菜摘むらん (続後拾遺・春上・二〇〇)

原寒草と言ふ事を、詠める 藤原基任

冬枯れに 残る草葉も 片岡の 朝の原は 霜さやぐなり (続後拾遺・冬・四三九)

賀茂社に詠みて奉りける百首の歌の中に、薄

源兼氏朝臣

露深き 朝の原の 花薄 誰が来るさの 袂なるらん (新千載・秋上・三四九)

(冬の歌として、詠ませ給うける)

後宇多院御製

冬来ては 朝の原に 置く霜の 寒く日毎に なり増さりつつ (新千載・冬・六四四)

寄原恋と言へる事を 入道前太政大臣

立ち帰る 朝の原に 置く露は 袖の別れの 涙なりけり (新千載・恋三・一四四一)

長暦二年九月、歌合に 土御門右大臣

匂いこそ 紛れざりけれ 初霜の 朝の原の 白菊の花 (新拾遺・春上・四二)

春の歌の中に 前中納言匡房

見渡せば 峯の春日に 雪消えて 朝の原に 霞棚引く (新続古今・春上・一三)

【明日香(の)川】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……六八例

年の果てに、詠める

春道列樹

昨日と言ひ 今日と暮して 明日香川 流れて早き 月日なりけり (古今・冬・三四一)

(題知らず)

読人知らず

明日香川 淵は瀬になる 世なりとも 思ひ初めけむ 人は忘れじ (古今・恋四・六八七)

(題知らず)

(読人知らず)

絶えず行く 明日香の川の 淀みれば 心あるとや 人の思はむ (古今・恋四・七二〇)

この歌、ある人の曰く、仲臣東人が歌なり

題知らず

読人知らず

世の中は 何か常なる 明日香川 昨日の淵ぞ 今日瀬になる (古今・雑下・九三三)

家を売りて、詠める

伊勢

明日香川 淵にもあらぬ 我が宿も 瀬に変はり行く ものにぞありける (古今・雑下・九九〇)

女の人の許に、遣はしける

(読人知らず)

外の瀬は 深くなるらし 明日香川 昨日の淵ぞ 我が身なりけり (後撰・恋一・五二五)

女の志ある由を言ひ遣はしたりければ、世の中の人の心定め
なければ、頼み難き由を言ひて侍りければ 在原元方
淵は瀬に なり変はるてふ 明日香川 渡り見てこそ 知るべかりけれ

(後撰・恋三・七五〇)

題知らず

伊勢

厭はるる 身を憂はしむ 何時しかと 明日香川をも 頼むべらなり (後撰・恋三・七五一)
返し 贈太政大臣

明日香川 堰きて止むる ものならば 淵瀬になると 何か言はせん (後撰・恋三・七五二)

言ひ煩ひて止みにけるを、また思ひ出でて
訪ひ侍りければ、いと定めなき心かな、と

言ひて、明日香川の心を、言ひ遣はして侍

りければ

(読人知らず)

明日香川 心の内に 流るれば 底の柵 何時か淀まん (後撰・恋六・一〇一三)

定まらぬ心あり、と女の言ひたりければ、遣はしける

贈太政大臣

明日香川 堰きて止むる ものならば 淵瀬になると どうか言はれん

(後撰・恋六・一〇六七)

題知らず

読人知らず

明日香川 我が身一つの 淵瀬故 並べての世をも 恨みつるかな (後撰・雑三・一二三一)

男の、人にも数多問へ、我や仇なる心ある、と

言へりければ

伊勢

明日香川 淵瀬に変はる 心とは 皆上下の 人も言ふめり (後撰・雑四・一二五八)

明日香の女王を納むる時、詠める

人麿

明日香川 柵渡し 堰かませば 流るる水も 長閑けからまし (拾遺・雑上・四九六)

もの言ひ渡る男の、淵は瀬に、など言ひ侍りける返事に、

詠める

赤染衛門

淵やさは 瀬にはなりける 明日香川 浅きを深く なす世なりせば

(後拾遺・恋二・六九六)

題知らず

柿本人麿

明日香川 紅葉葉流る 葛城の 山の秋風 吹きぞ頻くらし (新古今・秋下・五四一)

(題知らず)

権中納言長方

明日香川 瀬々に波寄る 紅や 葛城山の 木枯らしの風 (新古今・秋下・五四二)

初瀬に詣でて帰さに、明日香川の辺りに宿りて

侍りける夜、詠み侍りる

素覚法師

古里へ 帰らむことは 明日香川 渡らぬ前に 淵瀬違ふな (新古今・羈旅・九八六)

天曆御時、屏風に国々の所の名を書かせさせ給ひけるに、

明日香川

中務

定めなき 名には立てれど 明日香川 早く渡りし 瀬にこそありけれ

(新古今・雑中・一六五七)

(題知らず)

(読人知らず)

明日香川 逝廻の岡の 秋萩は 今日降る雨に 散りか過ぎなむ (新勅撰・秋上・二二二)

(五十首の歌詠ませ侍りける時、年の暮れを惜しむと言へる心を)

如願法師

明日香川 変はる淵瀬も あるものを 堰く方知らぬ 年の暮れかな (新勅撰・冬・四四〇)
文集、親愛自零落存者仍別離と言ふ心を、詠み侍りける

八条院高倉

明日香川 今日の淵瀬も 如何ならむ さらに別れば 待つ程もなし

(新勅撰・雑三・一二六二)

題知らず

行念法師

定めなき 世に経る里を 行く水の 今日の淵瀬は 明日か変はらむ

(新勅撰・雑三・一二六三)

(名所の歌、詠み侍りけるに)

真昭法師

明日香川 川瀬の霧も 晴れやらで 徒に吹く 秋の夕風

(新勅撰・雑四・一二七二)

(夏の歌の中に)

大宰大貳重家

五月雨の 引かず増されば 明日香川 さながら淵に なりにけるかな

(続後撰・夏・二〇六)

百首の歌奉りし時、河紅葉

大宰権帥為経

行く水の 淵瀬も分かず 明日香川 秋の紅葉の 色に出でつつ

(続後撰・秋下・四三七)

人々に百首の歌召しける次に

順徳院御製

明日香川 七瀬の淀に 吹く風の 徒にのみ 行く月日かな

(続後撰・雑上・一〇一八)

(述懐の歌の中に)

西園寺入道前太政大臣

明日香川 淵瀬も分かず 底清き 水の心を 知る人もがな

(続後撰・雑中・一一九五)

(題知らず)

雅成親王

五月雨の 継ぎてし降れば 明日香川 同じ淵にて 変はる瀬もなし (続古今・夏・二四三)

貞永元年、百首の歌詠み侍りけるに、氷を

光明峰寺入道前摂政太政大臣

冴え暮れぬ 今日吹く風に 明日香川 七瀬の淀や 凍り果てなん (続古今・冬・六二八)

法印尊海勸め侍りける春日社の十五首に、冬の歌

大納言良教

淵瀬こそ 定めなからめ 明日香川 凍りて変はる 波の音かな (続古今・冬・六二九)

三首の歌講じ侍りし次に、河水を

太上天皇

明日香川 行く瀬の水の 薄氷 心ありてや 淀み初むらん (続古今・冬・六三〇)

女御徽子女王、参らんとてさも侍らざりければ

天曆御製

逢ふ事は 何事にかあらん 明日香川 定めなき世ぞ 思ひ侘びぬる

(続古今・恋二・一〇九一)

(述懐の心を)

後鳥羽院御製

世の中よ 如何が頼まん 明日香川 昨日の瀬の 浅瀬白波 (続古今・雑中・一七〇〇)

(述懐の心を)

源光行

淵は瀬に 変はると見れど 明日香川 沈む香川 沈む水屑は 浮かぶ瀬も (続古今・雑中・一七〇一)

(述懐の心を)

藻壁門院少将

明日香川 変はる淵瀬は あるものを など憂きながら 年の経ぬらん

(続古今 (異本) 雑中・一九二四)

弘長元年十二月、内裏の三首の歌に、河水

後花山院入道前太政大臣

年月は さても沈まぬ 明日香川 行く瀬の波の なに凍るらん (続拾遺・冬・四六四)

一切賢聖皆以無為而有差別

法印公誉

明日香川 同じ流れの 水もなほ 淵瀬はさすが ありとこそ聞け

(続拾遺・釈教・一三六七)

光明峰寺入道前撰政家の三十首の歌に 普光園入道前関白左大臣

明日香川 逝廻の岡の 葛蔓 苦しや人に 逢はぬ恨みは

(新後撰・恋二・九一五)

文永五年九月十三夜、白河殿の五首の歌合に、河水澄月

後嵯峨院御製

我のみや 影も変はらむ 明日香川 淵瀬も同じ 月は澄めども (新後撰・雑上・一三一三)

題知らず

躬恒

今日暮れて 明日香の川の 川千鳥 日に幾瀬をか 鳴き渡るらん

(玉葉・冬・九一四)

千五百番の歌合に

参議雅経

淵は瀬に 変はるのみかは 明日香川 昨日の波ぞ 今朝は凍れる

(玉葉・冬・九四三)

同じ〈述懐〉心を

院新宰相

明日香川 明日とも知らぬ 儂さに よし流れての 世をも頼まじ (玉葉・雑五・二五八三)

人の許に、遣はしける

小野小町

世の中は 明日香川にも ならばなれ 君と我とが 中し絶えずは

(玉葉(異本)・恋三・二八〇七)

建永元年、和歌所の三首の歌に、朝草花

従二位家隆

我が袖を 今朝も干し敢へず 明日香川 逝廻の浮かの 萩の白露 (続千載・秋上・三八六)

(冬の歌の中に)

中納言家持

明日香川 川音高し むば玉の 夜風を寒み 雪ぞ降るらし (続千載・冬・六六〇)

返歌

(赤人)

明日香川 川淀去らす 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに (続千載・雑体・七一〇)

(恋の歌の中に)

大江貞重

とにかくに 変はるぞ易き 明日香川 淵瀬や人の 心なるらん (続千載・恋四・一四五〇)

嘉元の百首の歌に、五月雨

万秋門院

明日香川 浅き瀬もなき 五月雨に 徒波立てて 幾日経ぬらん (続後拾遺・夏・二〇九)

題知らず

権中納言公雄

明日香川 一つ淵とや なりぬらん 七瀬の淀野 五月雨の頃 (風雅・夏・三六二)

(百首の歌奉りし時)

藤原為明朝臣

徒に 今日さへ暮れば 明日香川 また年波の 数や重ねむ (風雅・冬・八九七)

(題知らず)

小町

世の中は 明日香川にも ならばなれ 君と我とが 中し絶えずは (風雅・恋四・一二三二)

普門院、即得浅処の心を

平忠度朝臣

下り立ちて 頼むとなれば 明日香川 淵も瀬になる ものとこそ聞け

(風雅・釈教・二〇五八)

(題知らず)

前僧正公朝

淵は瀬に 変はると聞きし 明日香川 誰が偽りぞ 五月雨の頃 (新千載・夏・二六七)

(題知らず)

権中納言公雄

五月雨に 水増さるなり 明日香川 如何に淵瀬の また変はるらむ (新千載・夏・二六八)

元亨二年三月尽日、内裏にて三首の歌講せられける時、

契変恋と言へる事を、仕うまつりける 前中納言季雄

明日香川 渡らぬ中と なりにけり 頼めし瀬瀬の 変はる辛さに

(新千載・恋四・一四七八)

題知らず

赤人

明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋ならなくに (新千載・恋四・一五一七)

堀河院御時、奉りける百首の歌の中に 俊頼朝臣

明日香川 浮き木に積もる 淡雪の 波立ち来れば 頼もしげなき 世にも降るかな

(新千載・雑下・二二三七)

河五月雨を、詠める

権中納言具行

晴れやらで 降る五月雨に 明日香川 淵は瀬になる 暇やなからん (新拾遺・夏・二六六)

嘉元の百首の歌奉りける時、五月雨 一条内大臣

淵は瀬に 変はる慣ひも 明日香川 聞こえぬ御代の 五月雨の頃 (新拾遺・夏・二六七)

河を 一条太政大臣女

明日香川 明日の淵瀬を 知らぬこそ 定めなき世の 頼みなりけれ

(新拾遺・雑中・一八四四)

延文の百首の歌奉りけるに 宝篋院贈左大臣

五月雨の 水嵩を見れば 明日香川 昨日の淵も 浅瀬なりけり (新後拾遺・夏・二三一)

題知らず 紀親文朝臣

徒に 日数経るなり 明日香川 変はらぬ淵や 五月雨の頃 (新後拾遺・雑春・六八二)

題知らず 従二位家隆

明日香川 岩波高し 葛城の 山の白雪 今や消ぬらし (新統古今・春上・四〇)

貞和の百首の歌に 前中納言為秀

明日香川 変はる辛さの 憂き瀬より やがて涙の 淵となりぬる (新統古今・恋四・一三六六)

題知らず 祝部成光

明日香川 水も増さらで 変はるこそ 人の心の 憂き瀬なりけれ

(新統古今・恋四・一三六七)

逐日増恋と言ふ心を 成恩寺関白前左大臣

昨日と言ひ 今日とは問はずは 明日香川 明日や涙の 淵とならまし

(新統古今・恋五・一四五五)

寄夢無常と言ふ事を 津守国冬

明日香川 明日とも如何が 頼むべき ただ世の中は 夢の浮橋

(新統古今・哀傷・一五八四)

【化野】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

鳥羽殿前裁合に、女郎花を、詠める 春宮大夫公夷

化野の 露吹き乱る 秋風に 靡きも敢へぬ 女郎花かな (金葉・秋・二三七)

題知らず 仁和寺道性法親王

虫の音も 稀になり行く 化野に 独り秋なる 月の影かな (千載・秋下・三三四)

百首の歌に 式子内親王

暮るる間も 待つべき世かは 化野の 季葉の露に 嵐立つなり (新古今・雑下・一八三七)

(題知らず) 西行法師

誰れとても 泊るべきかな 化野の 草の葉毎に 縋る白露 (続古今・哀傷・一四三九)

秋の歌の中に 前権僧正通海

結び置く 露も雫も 化野の 蓬が本にを 払ふ秋風 (新後撰・雑上・一二九四)

題知らず 藤原為道朝臣

化野や 風待つ露を 外に見て 消えんものとも 身をば思はず (新後撰・雑下・一五〇一)

題知らず 後京極摂政太政大臣

人の世は 思へば並べて 化野の 蓬が本の 一つ白露 (玉葉・雑四・二四一三)

題知らず 前中納言為相

消え果つる 草の陰まで 哀しきは 結びも止めぬ 化野の露 (続後拾遺・哀傷・一二五〇)

堀河院御時の百首の歌に

基俊

化野の 心も知らぬ 秋風に あはれ片寄る 女郎花かな (新拾遺・秋上・三六四)

身罷りて侍りける童の為に、仏事営みける人に、遣はしける

二品法親王慈道

外までも 袖こそ濡るれ 化野や 消えにし露の 秋のあはれに (新拾遺・哀傷・九〇六)

(無常の歌に)

如空上人

命こそ なほ頼まれぬ 化野の 露は風待つ 程もある世に (新後拾遺・雑下・一四六七)

【阿武隈川】 (陸奥)

●玄々集……一例

前一条院の、京極殿に、行幸せさせたまひけるに

君が代に 阿武隈川の そこ清み 代代をかさねて すまんとぞ思ふ (藤原道長・一〇)

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一六例

陸奥歌

阿武隈に 霧立ち曇り 明けぬとも 君をば遣らじ 待てば術なし (古今・東歌・一〇八七)

(題知らず)

(読人知らず)

世と共に 阿武隈川の 遠ければ 底なる影を 見ぬぞ侘びしき (後撰・恋一・五二〇)

女の曹司に、夜夜立ち寄りつものなど言ひて後

藤原輔文

阿武隈の 霧とはなしに 終夜 立ち渡りつつ 世をも経るかな (後撰・恋二・六〇七)

橘為仲朝臣陸奥守にて侍りける時、延任しぬ、と聞きて、

遣はしける

藤原隆資

待つ我は あはれ八十に なりぬるを 阿武隈川の 遠離りぬる (金葉・雑上・五八一)

一条院、上東門院に行幸せさせ給ひけるに、詠める

入道前太政大臣

君が代に 阿武隈川の 底清み 千歳を経つつ 澄まむとぞ思ふ (詞花・賀・一六一)

陸奥の介にて罷りける時、範永朝臣の許に、遣はしける

高階経重朝臣

行末に 阿武隈川の なかりせば 如何にかせまし 今日の別れを (新古今・離別・八六六)

返し

藤原範永朝臣

君にまた 阿武隈川を 待つべきに 残り少なき 我ぞ悲しき (新古今・離別・八六七)

最勝四天王院障子に、阿武隈川描きたる所 家隆朝臣

君が代に 阿武隈川の 埋れ木の 氷の下に 春を待ちけり (新古今・雑上・一五七九)

久安百首の歌奉りける長歌 皇太后宮大夫俊成

敷島や… 君が代に 阿武隈川は 嬉しきを 水曲に掛かる… (新勅撰・雑五・一三四二)

隔河恋を 民部卿成範

年経れど 渡らぬ中に 流るるを 阿武隈川と 誰れか言ひけん (新後撰・恋二・九一一)

題知らず 藤原季宗朝臣

人知れぬ 恋路の果てや 陸奥の 阿武隈川の 渡りなるらむ (新後撰・恋二・九一二)

(恋の歌として)

辛くとも 忘れず恋ひん 鹿島なる 阿武隈川の 逢瀬ありやと (玉葉・恋一・一三一七)

嘉元の百首の歌奉りける時、同じ心(河)を 前左大臣

君が代に 阿武隈川の 渡し舟 昔の夢の 例ともがな (続後拾遺・雑中・一一二二)

題知らず 二条院讃岐

如何なれば 涙の雨は 隙なきを 阿武隈川の 瀬絶えしぬらん (新拾遺・恋四・一二六六)

題知らず 祝部成久

待たれつる 此の瀬も過ぎぬ 君が代に 阿武隈川の 名を頼めども (新拾遺・雑中・一七六六)

百首の歌奉りし時、霧 権中納言為重

立ち曇る 霧の隔ても 末見えて 阿武隈川に 余る白波 (新後拾遺・秋上・三四五)

【逢坂の関】(近江)

●玄々集………二例

逢坂の 関の岩角 踏みならし 山立ちいづる 桐原の駒 (大式高遠・三九)

屏風に、逢坂の関かけるを

人も越え 駒もとまらぬ 逢坂の 関の清水の もる名なりけり (小式部・補一)

●能因法師集…一例

ある所にある女の、里に出づることまたはやすからず、

いひつぐ者もくるしげなれば、こと人をかたらはむなど

思ひてとかういひやる

よぶこ鳥 いはせの森に すみわびぬ なほあふさかを 越えやしなまし (一七)

●勅撰和歌集…一五一例

逢坂にて、人を別れける時に、詠める 難波万雄

逢坂の 関し正しき ものならば 飽かず別るる 君を止めよ (古今・離別・三七四)

(題知らず) 在原元方

音羽山 音に聞きつつ 逢坂の 関の此方に 年を経るかな (古今・恋一・四七三)

題知らず 三統公忠

思ひ遣る 心は常に 通へども 逢坂の関 越えずもあるかな (後撰・恋一・五一六)

女の許に、遣はしける 伊尹朝臣

人知れぬ 身は急げども 年を経て など越え難き 逢坂の関 (後撰・恋三・七三一)

返し 小野好古朝臣女

東路に 行き交ふ人に あらぬ身は 何時かは越えむ 逢坂の関 (後撰・恋三・七三二)

返し 下野

道知らで 止みやはしなぬ 逢坂の 関の彼方は 海と言ふなり (後撰・恋三・七八六)

返し (読人知らず)

近ければ 何かは著し 逢坂の 関の外ぞと 思ひ絶えなん
返し 春澄善繩朝臣女 (後撰・恋四・八〇二)

逢坂の 関と守らるる 我なれば 近江てふらん 方も知られず
男の離れ果てぬに、異男を相知りて侍りけるに、元の (後撰・恋四・八五九)

男の東へ罷りけるを聞きて、遣はしける (読人知らず)
ありとだに 聞くべきものを 逢坂の 関の彼方ぞ 遥けかりける
返し (読人知らず) (後撰・恋五・九八一)

関守が 改まるてふ 逢坂の 木綿付け鳥は 鳴きつつぞ行く
また女の、遣はしける (読人知らず) (後撰・恋五・九八二)

行き帰り 来ても聞かなん 逢坂の 関に変はれる 人もやありやと
返し (読人知らず) (後撰・恋五・九八三)

守る人の あるとや聞けど 逢坂の 関も止めぬ 我が涙かな
逢坂の関に、庵室を作りて住み侍りけるに、 (後撰・恋五・九八四)

行き交ふ人を見て 蝉丸
これやこの 往くも還るも 別れつつ 知るも知らぬも 逢坂の関 (後撰・雑一・一〇八九)

師走ばかりに、東より詣で来ける男の元より京に
相知りて侍りける女の許に、正月朔日まで訪れず
侍りければ 読人知らず

待つ人は 来ぬと聞けども 新玉の 年のみ越ゆる 逢坂の関 (後撰・雑四・一三〇三)

少将に侍りけむ時、駒迎へに罷りて 大式高遠
逢坂の 関の岩角 踏み馴らし 山立ち出づる 桐原の駒 (拾遺・秋・一六九)

清慎公五十賀の屏風に 元輔
走井の 程を知らばや 逢坂の 関牽き越ゆる 木綿鹿毛の駒 (拾遺・雑秋・一一〇八)

立春の日、詠み侍りける 橘俊綱朝臣
逢坂の 関をや春も 越えつらん 音羽の山の 今日霞める (後拾遺・春上・四)

(八月、駒迎へを、詠める) 源縁法師
陸奥の 安達の駒は 泥めども 今日逢坂の 関までは来ぬ (後拾遺・秋上・二七九)

父の許に越後に罷りけるに、逢坂の程より
源為善朝臣の許に、遣はしける 藤原惟規 (後拾遺・別・四六六)

逢坂の 関うち越ゆる 程もなく 今朝は都の 人ぞ恋しき
あからさまに田舎に罷る女の許に言ひ遣はしたり (後拾遺・別・四六六)

ける返事に、暫しと聞けど、関越ゆ、などあれば、
遠き心地こそすれ、と言ひて侍りければ、遣はし
ける 祭主輔親 (後拾遺・別・四九〇)

逢坂の 関路越ゆとも 都なる 人に心の 通はざらめや
石山より帰り侍りける道に、走井にて、清水を、 (後拾遺・別・四九〇)

詠み侍りける 堀河太政大臣
逢坂の 関とは聞けど 走井の 水をばえこそ 止めざりけれ (後拾遺・羈旅・五〇〇)

題知らず 藤原道信朝臣
偶に 行き逢坂の 関守は 夜を通さぬぞ 侘びしかりける (後拾遺・恋二・六七六)

人の語らふ女を、忍びてもの言ひ侍りけるに、ものに罷りて帰りける道に、この女を男
田舎へ牽て下り侍りけり。逢坂の関に行き (後拾遺・恋二・六七六)

逢ひてせむ方なく思ひ侘びて、人をして返し、

言ひ遣はしける

大中臣能宣朝臣

何方を 我眺めまし 偶に 行き逢坂の 関なかりせば

(後拾遺・恋三・七二三)

伊勢の齋宮辺より上りて侍りける人に、忍びて通ひ

ける事を、朝廷も聞こし召して、守り目など付け

させ給ひて、忍びにも通はずなりにければ、詠み

侍りける

右京大夫道雅

逢坂は 東路とこそ 聞きしかど 心尽しの 関にぞありける

(後拾遺・恋三・七四八)

大江公資、相模守に侍りける時、諸共にかの国に

下りて、遠江守にて侍りける時、忘れにければ、

異女を牽て下ると聞きて、遣はしける 相模

逢坂の 関に心は 通はねど 見し東路は なほぞ恋ひしき

(後拾遺・雑二・九一五)

女の許に罷りたりけるに、東琴を差し出でて侍りければ

大江匡衡朝臣

逢坂の 関の彼方も 未だ見ねば 東の琴も 知られざりけり

(後拾遺・雑二・九三七)

大納言行成、物語りなどし侍りけるに、内裏の

御物忌に籠れば、とて急ぎ帰りて、翌朝、鳥の

声に催されて、と言ひ遣せて侍りければ、夜深

かりける鳥の声は函谷関の事にや、と言ひに遣

はしたりけるを、立ち返り、これは逢坂の関に

侍り、とあれば、詠み侍りける

清少納言

夜を籠めて 鳥の空音に 謀るとも 世に逢坂の 関は許さじ

(後拾遺・雑二・九三九)

駒迎へをの心を、詠める

源仲正

東路を 遙かに出づる 望月の 駒に今宵や 逢坂の関

(金葉・秋・一八四)

太皇太后宮扇合に、人に代はりて、紅葉の心を、

詠める

源俊頼朝臣

音羽山 紅葉散るらし 逢坂の 関の小川に 錦織り掛く

(金葉・秋・二四六)

関白前太政大臣家にて、八月十五夜の心を、詠める

藤原朝隆朝臣

牽く駒に 影を並べて 逢坂の 関路よりこそ 月は出でけれ

(詞花・秋・一〇二)

京極前太政大臣家歌合に、詠める 大藏卿匡房

逢坂の 関の杉原 下晴れて 月の漏るにぞ 任せたりける

(詞花・雑上・三〇七)

夜、逢坂の関を過ぐとて、詠める 祝部成仲

逢坂の 関には人も なかりけり 岩間の水の 漏るに任せて

(千載・羈旅・五二二)

高倉院御時、仁安三年、大嘗会悠紀方御屏風の歌

宮内卿永範

霜降れど 栄こそませ 君が代に 逢坂山の 関の杉守

(千載・賀・六三九)

恋の百首読侍りける時、寄霞恋と言へる心を、

詠める

賀茂重保

つれもなき 人の心や 逢坂の 関路隔つる 霞なるらん

(千載・恋一・六六九)

恋為後世妨と言へる心を、詠める 藤原家基

越えやらで 恋路に迷ふ 逢坂や 世を出で果てぬ 関となるらん

(千載・恋二・七五二)

(寄源氏物語恋と言へる心を、詠める) (読人知らず)

逢坂の 名を忘れにし 中なれど 堰き遣られぬは 涙なりけり

(千載・恋四・八七二)

関路花を

(宮内卿)

逢坂や 梢の花を 吹くからに 嵐ぞ霞む 関の杉群

(新古今・春下・一二九)

逢坂の関の近き辺りに住み侍りけるに、遠き所に

罷りける人に、餞し侍るとて

中納言兼輔

逢坂の 関に我が宿 なかりせば 別るる人は 頼まざらまし

(新古今・離別・八六二)

つれなく侍りける女に、師走の晦日に、遣はしける

謙徳公

新玉の 年に任せて 見るよりは 我こそ越えぬ 逢坂の関

(新古今・恋一・一〇〇五)

関路花

(後京極摂政前太政大臣)

逢坂の 関踏み馴らす 徒歩人の 渡れど濡れぬ 花の白波

(新勅撰・春下・九七)

題知らず

読人知らず

逢坂の 名をば頼みて 来しかども 隔つる関の 辛くもあるかな (新勅撰・恋二・七三一)

(恋の歌、詠み侍りけるに)

中宮少将

如何にせむ 恋路の末に 関据ゑて 行けども遠き 逢坂の山 (新勅撰・恋二・七五五)

(恋の歌、詠み侍りけるに)

祝部成茂

逢坂の 山は往き来の 道なれど 許さぬ関は その甲斐もなし (新勅撰・恋二・七五六)

女に遣はしける人に代はりて、詠み侍りける 郁芳門院安芸

越えばやな 東路と聞く 常陸帯の 託言ばかりの 逢坂の関 (新勅撰・恋三・七八四)

(題知らず)

(読人知らず)

逢坂の 関は夜こそ 守り増され 暮るるをなどで 我頼むらん (新勅撰・恋四・八七四)

駒迎への心を

大藏卿雅具

逢坂の 関立ち出づる 影見れば 今宵ぞ秋の 望月の駒 (続後撰・秋中・三四〇)

題知らず

平忠盛朝臣

逢坂の 関越えてこそ なかなかに 木綿付け鳥の 音は泣かれけれ

(続後撰・恋三・八四四)

(題知らず)

藤原伊光

何せんに 踏み始めけん 東路や 越えて苦しき 逢坂の関 (続後撰・恋三・八四五)

(題知らず)

藤原時朝

東路は また逢坂を 隔つとも 通ふ心に 関守は居じ (続後撰・恋三・八四六)

百首の歌奉りし時、寄関恋

藻壁門院但馬

思はずよ 越えて苦しき 逢坂の 関止め難き 涙なれとは (続後撰・恋三・八四七)

暮春の心を、詠ませ給ひける

後三条院御製

行く春の 関にし止まる ものならば 逢坂山の 花は散らじな (続古今・春下・一七五)

弘長二年、亀山仙洞にて、人々に十首の歌詠ませ

侍りしに

前関白左大臣

道しれば 降りにし跡に 立ち返り また逢坂の 関の白雪 (続古今・冬・六七八)

駒迎へを、釈教に寄せて、詠める

僧都源信

今日牽ける 駒は法こそ 畏けれ 仏の道に 逢坂の関 (続古今・釈教・八一五)

東に罷りける人を送りて、逢坂より帰るとて 源俊頼朝臣

何しかも なを頼みけん 逢坂の 関にてしもぞ 人に別るる (続古今・離別・八四七)

題知らず

藤原隆祐朝臣

今日はなほ 都も近し 逢坂の 関の彼方に 知る人もがな (続古今・羈旅・九四一)

(文永二年九月十三夜、歌合に、不逢恋) 中宮大夫雅忠

徒に その名も辛し 逢坂の 山は我が身の 関路なりけり (続古今・恋二・一〇七三)

内裏の百首の歌に、寄山恋 侍従行家

人目守る 関より外に 逢坂を 越ゆう山路の などなかるらむ (続古今・恋二・一〇七四)

洞院摂政家の百首の歌の中に 前中納言定家

色変はる 美濃の中山 秋越えて また遠離る 逢坂の関 (続古今・恋四・一二七一)

(題知らず) 前右大臣中

逢坂の 関の彼方の 如何なれば 越えても迷ふ 恋路なるらん (続古今・恋四・一二八七)

題知らず 蟬丸

逢坂の 関の嵐の 激しきに 強ひてぞ居たる 夜を過ぎんとて (続古今・雑中・一七二五)

前関白一条家の百首の歌に、関月 前大納言為家

逢坂や 身の空音の 関の戸も 明けぬと見えて 澄める月かな (続拾遺・秋上・二九四)

弘長元年、百首の歌奉りける時、初春の心を

衣笠内大臣

逢坂の 関の杉群 雪消えて 道ある御代に 春は来にけり (続拾遺・雑春・四七〇)

源光行、東に罷りけるに、遣はしける 如願法師

旅衣 来ても止まらぬ もの故に 人頼めなる 逢坂の関 (続拾遺・羈旅・六六六)

恋の歌の中に 賀茂重保

羨まし 誰れ逢坂の 関越えて 別るる鳥の 音を嘆くらん (続拾遺・恋二・八五九)

寄関恋と言ふ事を 惟宗忠景

逢坂や 別れを止むる 関ならば 木綿付け鳥の 音をも恨みじ (続拾遺・恋三・九二四)

九月十三夜、五首の歌に、同じ心〈絶恋〉を

前大納言良教

逢坂の 道やば変はる 年経れば 人の心ぞ 関となりける (続拾遺・恋四・九六六)

(春の歌の中に) 中務卿宗尊親王

音羽山 花咲きぬらし 逢坂の 関の此方に 匂ふ春風 (新後撰・春上・六三)

(題知らず) 源兼氏朝臣

花の色を えやは止めん 逢坂の 関吹き越ゆる 春の嵐に (新後撰・春下・一三〇)

題知らず 源清兼

横雲は 峰に別れて 逢坂の 関路の鳥の 声ぞ明けぬる (新後撰・羈旅・五八六)

人々勧めて日吉社にて、二十一首の歌詠み侍りける時

天台座主道玄

逢坂の 関の此方の 如何なれば 未だ超えぬより 苦しかるらむ (新後撰・恋二・九一七)

寄山恋と言へる心を、詠ませ給うける 今上御製

関なくて ただ逢坂の 山ならば 隔つる中に ものは思はじ (新後撰・恋二・九一八)

題知らず 権大納言師信

誰れにかは 逢坂山の 名のみして 我が身に超えぬ 関となるらん (新後撰・恋二・九一九)

(題知らず) 前参議実俊

如何にせむ 外の人目の 関守に 通ふ道なき 逢坂の山 (新後撰・恋二・九二〇)

絶経年恋と言ふ事を 中務卿宗尊親王

徒に 年のみ越えて 逢坂の 関は昔の 道となりなき (新後撰・恋六・一一六六)

(題知らず) 藤原秀長

関の戸を 鎖さでも道や 隔つらん 逢坂山の 秋の夕暮 (新後撰・雑上・一三〇一)

題知らず

法印覺寛

逢坂の 関にはあらで 知る知らず 終に行くなる 道ぞ哀しき (新後撰・雑下・一五一九)

関霧

常磐井入道前太政大臣

強ひてやは なほ過ぎ行かん 逢坂の 関の藁屋の 秋の夕暮 (玉葉・秋下・七三〇)

同じ心(旅)を

従三位為夷

逢坂や 急ぐ関路も 夜や深き 袖さへ湿る 杉の下露 (玉葉・旅・一一三七)

東へ下り侍りけるに、逢坂にて 前参議能清

逢坂の 関の戸明くる 東雲に 都の空は 月ぞ残れる (玉葉・旅・一一三九)

源信明朝臣、陸奥守にて罷りけるに伴ひて、任果てて 上り侍りけるとて、逢坂の関にて、詠み侍りける 中務

都人 待つらんものを 逢坂の 席まで来ぬと 告げや遣らまし (玉葉・旅・一一七〇)

思ふこと侍りける頃、逢坂を越ゆとて、詠み侍りける

急ぎても 必ず人に 逢坂の 関にしあらば 嬉しからまし (玉葉・恋一・一三一二)

前大納言隆房

嘉応二年十月、法往寺殿歌合に、関路落葉

逢坂の 関の紅葉の 唐錦 散らずは袖に 重ねましやは

百首の歌奉りし時 前右大臣 (続千載・冬・六一〇)

今もかく 鎖ざしや鎖さぬ

旅人の 道広き世に 逢坂の関 (続千載・羈旅・七九一)

(題知らず)

暁の 関の秋霧 立ち籠めて 都隔つる 逢坂の山 (続千載・羈旅・八三一)

(恋の心を、詠ませ給うける)

逢坂や 通ふ心は 関も居ず 許さぬ中は 人目なりけり (続千載・恋二・一二四九)

(題知らず)

夜な夜なの 夢は通へど 逢坂の 許さぬ中は 人目なりけり (続千載・恋二・一二六七)

題知らず

是法法師

逢坂の 関より奥を 訪ぬらん 越えて帰らぬ 道はありやと (続千載・恋三・一四一五)

関花を、詠める

逢坂の 山の桜や 咲きぬらん 雲間に見ゆる 関の杉群 (続千載・雑上・一六六七)

嘉元の百首の歌奉りし時、関 一条内大臣

立ち帰り また君が代に 逢坂の 越ゆる関路に 末も迷ふな (続千載・雑中・一九一九)

堀河院の百首の歌に、駒迎へ

逢坂の 関の杉群 葉を茂み 絶え間に過ぐる 望月の月 (続後拾遺・秋上・三二五)

平宗宣朝臣、東へ帰り下りける時、申し遣はしける

別れては また逢坂の 関の戸を 何時とも鎖さば 頼みならまし (続後拾遺・離別・五五二)

権中納言公雄

返し 関の戸を 鎖さぬ御代こそ 立ち帰り また逢坂の 頼みなりけり (続後拾遺・離別・五五三)

返し

東の方へ罷りけるに、逢坂の関越ゆとて、詠める 民部卿成範 (続後拾遺・離別・五五四)

越え行けば 哀しかりける 別れ路を 誰れ逢坂の 関と言ひけん

(続後拾遺・離別・五五四)

越え行けば 哀しかりける 別れ路を 誰れ逢坂の 関と言ひけん

(続後拾遺・離別・五五四)

(続後拾遺・離別・五五四)

題知らず

前大納言為家

立ち帰り 来ても止まらぬ 別れかな 何そは名のみ 逢坂の関 (続後拾遺・離別・五五五)

(旅行を)

平英時

逢坂の 山越え暮れて 関守の 止めぬ先に 宿や訪はまし (続後拾遺・羈旅・五八七)

東の方へ罷りける時、逢坂の関にて、嵐のいと寒く
侍りければ 源親長朝臣

逢坂の 関路の嵐 聞きしにも 越えて激しき 朝朗けかな (続後拾遺・羈旅・五九三)

後宇多院に十首の歌奉りし時、寄関恋 右兵衛督為定

何時越えて 人に知らせん 逢坂の 関の此方の 心尽くしを (続後拾遺・恋二・七五一)

同じ心〈寄関恋〉を 伏見院御製

逢坂や 誰が為迷ふ 関路とて 我が身外なる 名を止むらん (続後拾遺・恋二・七五二)

百首の歌奉りし時 中宮大夫師賢

徒に 月日ぞ越ゆる 鳥の昔の 憂かりしままの 逢坂の関 (続後拾遺・恋四・八九〇)

(百首の歌奉りし時)

前大納言為世

立ち帰り またつれなくて 逢坂は 再び超えぬ 関路なりけり (続後拾遺・恋四・八九一)

(逢不会恋を)

読人知らず

逢坂の 関路を如何に 急ぎてか 越えにし後は 遠離るらん (続後拾遺・恋四・八九三)

恋の心を

中務卿宗尊親王

逢坂の 関路に生ふる 真葛 離れにし後は 来る人もなし (続後拾遺・恋四・九一二)

東にて、病限りし侍りける時、詠める 藤原雅頭

思ひきや ありしを永き 別れにて また逢坂の 関越えじとは

(続後拾遺・哀傷・一二六一)

(題知らず)

藤原定宗朝臣

逢坂の 関は開けぬと 出でぬれど なほ道暗し 杉の下陰 (風雅・旅・九〇六)

宝治の百首の歌に、寄関恋を

皇太后宮大夫俊成女

越えてまた 恋しき人に 逢坂の 関ならばこそ 名をも頼まめ (風雅・恋一・九八七)

逢恋

源兼氏朝臣

今更に 苦しき増さる 逢坂を 関越えなばと 何思ひけむ (風雅・恋二・一〇九〇)

題を探りて、人々歌仕うまつりけるに、関と言ふ
事を、詠ませ給ひける 伏見院御歌

逢坂や 眺かけて 鳴く島の 越え白くなる 関の杉群 (風雅・雑中・一六三七)

別れの心を

藤原宗遠

超えぬ間の 関とはならで 逢坂の 過ぎ行く人の 隔てなりけり (新千載・離別・七五五)

思ひの他の事によりて、東の方へ下りける時に、逢坂を

越ゆるとて、思ひ続け侍りける 権中納言具行 (新千載・離別・七五六)

帰るべき 身にしあらねば これやこの 行くを限りの 逢坂の関 (新千載・離別・七五六)

題知らず

権僧正覚信

行く止まる 人しなれば 逢坂の 関の鎖さしも 名のみなりけり

(新千載・羈旅・七七七)

(題知らず)

前大納言為世

現には 未だ越えも見ず 思ひ寝の 夢路ばかりの 逢坂の関 (新千載・恋二・一一六二)

嘉元の内裏の三十首の歌に、夢逢恋と言ふ事を

贈従三位為子

夢路には 現ばかりの 関やなき 越ゆとぞ見つる 逢坂の関 (新千載・恋二・一一六三)

百首の歌奉りし時、寄関恋 等持院贈左大臣

越えて後 また辛くとも 逢坂の 関路の鳥を 聞く夜半もがな (新千載・恋三・一二九九)

題知らず 法印長舜

関守の 心も知らぬ 逢坂を 我が通ひ路と 思ひけるかな (新千載・恋三・一三〇〇)

百首の歌奉りし時、寄関恋 前大納言為定

越えじただ 行くも帰るも 止まらぬ 別れの道の 逢坂の関 (新千載・恋三・一四一六)

題知らず 昭覚法師

帰るさは 守る人ぞなき 逢坂も 越えしまでこそ 関路なりけり (新千載・恋三・一四一七)

(恋の歌の中に)

嫡子内親王

立ち帰り 辛き隔てに 迷ふかな 越えしや何処 逢坂の関 (新千載・恋四・一四五七)

(恋の歌の中に)

大納言顕実母

逢坂は 隔てぬ関と 見しものを 今更何の 人目避くらん (新千載・恋四・一四五八)

(題知らず)

祖月法師

現とも 思はで越えし 逢坂は 帰らぬ夢の 関路なりけり (新千載・恋五・一五七六)

嘉元の百首の歌奉りける時、関

(円光院入道前関白太政大臣)

我かくて 君が七代に 逢坂の 関し正しき 道ぞ知らるる (新千載・慶賀・二三五一)

(堀河院御時、百首の歌に、別れを)

京極前関白太政大臣肥後

別れ路は 関も止めぬ 涙かな 行き逢坂の 名をば頼めど (新拾遺・離別・七四〇)

元亨二年、龜山殿にて、題を探りて歌仕うまつり

けるに、旅行

前中納言有忠

都をば 夜深く出でて 逢坂の 関に待たるる 鳥の声かな (新拾遺・羈旅・七七五)

田上と言ふ所へ罷りける時、関山を過ぎ侍りけるに、

古へ父俊頼朝臣の許に罷りし事を思ひ出でて、車を

止めて休らひける時、詠める

新少将

亡き人に 行き逢坂と 思ひせば 絶えぬ涙は 関止めてまし (新拾遺・哀傷・八五二)

題知らず

源光明

越え侘ぶる 逢坂山の 関よりも 外に漏る名ぞ 苦しかりける (新拾遺・恋一・九八〇)

(題知らず)

平重基

憂き人の 心の関と なり果てて なほ越え難き 逢坂の山 (新拾遺・恋一・九八一)

(寄夢恋)

祝部成景

寝ぬる夜の 夢に越えける 逢坂や 人も許さぬ 関路なるらん (新拾遺・恋一・九九九)

題知らず

法印長舜

関守の 心も知らず 逢坂を 我が通ひ路と 思ひけるかな (新拾遺・恋二・一〇五五)

百首の歌奉りし時、寄関恋

権大納言義詮

逢坂の 木綿付け鳥は 心せよ またも越ゆべき 関路ならぬに (新拾遺・恋三・一一八八)

後西園寺入道前太政大臣家にて、歌詠み侍りしに、

寄山恋

中納言為藤

憂き身には 越えて後こそ 逢坂の 山も隔つる 関となりけれ (新拾遺・恋四・一二二七)

題知らず

権中納言経定女

越えてしも 悔しかりける 逢坂の 関路を何に 許し初めけん (新拾遺・恋四・一二二八)
題知らず 読人知らず

逢坂の 関には雪も 消えなくに 何処を春の 道と来ぬらん (新拾遺・雑上・一五二八)
千五百番の歌合に 野宮左大臣

行く年も 立ち来る春も 逢坂の 関路の鳥の 音をや待つらむ (新拾遺・雑上・一七二五)
題知らず 源氏経朝臣

治まれる 時をぞ告ぐる 我が君の 世に逢坂の 関の鳥の音 待賢門院堀河 (新拾遺・雑中・一七二九)
題知らず

逢坂の 関の杉群 霧籠めて 立ち処も見えぬ 木綿鹿毛の駒 法印頼俊 (新後拾遺・秋上・三六四)
(花の歌の中に)

逢坂の 関は鎖さしも なかりけり 往き来の人を 花に任せて (新後拾遺・雑春・六一四)
延文の百首の歌に、雪 摂政太政大臣

時しあれば 今はた逢ひに 逢坂の 関の白雪 三代に降りつつ (新後拾遺・雑秋・八二七)
題知らず 平政村朝臣

都出でて 今日越え初むる 逢坂の 関や旅寝の 始めなるらむ (新後拾遺・羈旅・八六九)
嘉元の百首の歌奉りけるに、関 後照念院関白太政大臣

越えて行く 杉の下道 明けやらで 鳥の音暗き 逢坂の関 (新後拾遺・羈旅・八七〇)
百首の歌奉りし時、旅 前関白近衛

鳥の音に 関をば越えて 逢坂の 山路よりこそ 明け初めにけれ (新後拾遺・羈旅・八七一)
題知らず 源頼言

身に知らぬ 逢坂山の 真葛 関をば越えて 来る人もなし (新後拾遺・恋二・一〇三二)
寄閑恋 源兼氏朝臣

越えかぬる 慣ひも辛し 逢坂の 山しもなどか 関路なるらむ (新後拾遺・恋二・一〇三八)

延文の百首の歌奉りける時、寄閑恋 前関白近衛
恋路には 迷ふとばかり 思ひしに 越えけるものを 逢坂の関 (新後拾遺・恋三・一一二〇)

千五百番の歌合に 宜秋門院丹後
なかなか 越えてぞ迷ふ 逢坂の 関の彼方や 恋路なるらむ (新後拾遺・恋四・一一七四)

題知らず 権大納言宗実
立ち帰り 越ゆべきものと 思ひきや 絶えにし中の 逢坂の関 (新後拾遺・恋四・一一七五)

雑歌の中に 源頼之朝臣
逢坂の 木綿付け鳥や 急ぐらん 未だ関守も 明けぬ鎖ざしを (新後拾遺・雑上・一二九一)

新玉津島社の三十首の歌に、不逢恋 境空上人
何時までか 関の名にのみ 逢坂を 聞きて甲斐なき 思ひならまし (新統古今・恋二・一一三一)

延文二年、百首の歌に、寄閑恋 前大納言公蔭
走井の 水をば袖に 掛けながら 何らは人に 逢坂の関 (新統古今・恋二・一一三二)

同じ心〈寄閑恋〉を 権大納言為遠

憂き中に 名も睦ましき 逢坂の 関路は許せ 旅ならずとも (新統古今・恋三・一二四八)
寄閑恋を 入道一品親王永助

契りあれば 今逢坂も 越えてけり 関よ別れの 障りともなれ

(新統古今・恋三・一二六九)

平貞国

鳥の音の 辛きばかりを 現にて 夢にぞ越ゆる 逢坂の関 (新統古今・恋三・一二八三)
承元二年、住吉社歌合に、寄旅恋 宜秋門院丹後
枕とて 幾夜の草を 結びても 何時かは君に 逢坂の関 (新統古今・恋三・一三二八)

【天の川】 (河内)

●玄々集……用例無

●能因法師集…一例

天の河といふ所に

われならぬ 人もわたると 天の川 たなばたつめも 今日や見るらん (一五六)

*「天の川」(二二一)は地名ではなく、「銀河」の意味の一般名詞。

●勅撰和歌集…一四例

惟喬親王の供に狩に罷りける時に、天の川と言ふ所の
川の辺に下り居て、酒など飲みける次に、親王の言ひ
けらく、狩りして天の川原に至ると言ふ心を詠みて、
盃はさせ、と言ひければ、詠める 在原業平朝臣

狩り暮らし 七夕女に 宿借らむ 天の川原に 我は来にけり (古今・羈旅・四一八)

(題知らず)

(詭人知らず)

天の川 冬は氷に 閉ぢたれや 石間に激つ 音だにもせぬ (後撰・冬・四八八)

天の川原を過ぐとて

摂政太政大臣

昔聞く 天の川原を 訪ね来て 跡なき水を 眺むばかりぞ (新古今・雑中・一六五四)

題知らず

実方朝臣

天の川 通ふ浮き木に 言問はむ 紅葉の橋は 散るや散らずや (新古今・雑中・一六五五)

(夏の歌の中に)

前大納言為家

天の川 遠き渡りに なりにけり 交野の御野の さも誰の頃 (続後撰・夏・二〇七)

十首の歌合に

従二位家隆

天の川 秋の一夜の 契りだに 交野に鹿の 音をや鳴くらん (続古今・秋下・四四六)

題知らず

詭人知らず

逢ふ事は 今日も交野の 天の川 この渡りこそ 憂き瀬なりけれ (続拾遺・恋四・九九八)

(冬の歌の中に)

前中納言資平

天の川 宿訪ふ道も 絶えぬらし 交野の御野に 積もる白雪 (玉葉・冬・九八四)

(題知らず)

芬陀利花院前関白内大臣家新少将

頼まずよ また逢ふ事も 交野なる 天の川原の 遠き渡りは (新千載・恋四・一五一八)

延文の百首の歌奉りける時

前参議実名

御狩する 交野の雪の 夕暮れに 天の川風 寒く吹くらし (新後拾遺・冬・五二七)

花の歌の中に

津守国助

宿貸さぬ 天の川原や 憂からまし 交野に花の 影なかりせば (新後拾遺・雑春・六一二)

七月七日、住吉より都の方へ罷り侍りけるに、

天の川と言ふ所にて日暮れにしかば 舟を止め

て河原に下り居侍りて

津守国基

七夕は 思ひ知らなん 天の川 急ぐ渡りに 舟を貸しつる

(新後拾遺・雑秋・七一七)

鷹狩を

参議家豊

今日もまた 天の川波 立ち帰り 同じ交野に 狩り暮しつつ

(新統古今・雑上・一七九八)

旅の心を、詠める長歌

大納言経信

長月の… 水馴れて後に 漕ぎ行けば 天の川まで なりにけり…

(新統古今・雑下・二〇四三)

【天の橋立】(丹後)

●玄々集……一例

丹後に、下りて

思ふ事 なくてぞ見まし 与謝の海の 天の橋立 都なりせば

(赤染衛門・一三六)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…九例

公任卿の家にて、紅葉、天の橋立、恋と三つの題を

人々詠ませけるに、遅く罷りて人々皆書く程になり

ければ、三つの題を一つに詠める歌 藤原範永朝臣

恋ひ渡る 人に見せばや 松の葉の 下紅葉する 天の橋立

(金葉・恋下・四二二)

和泉式部、保昌に具して、丹後に侍りける頃、都に

歌合侍りけるに、小式部内侍歌詠みに採られて侍り

けるを、定頼卿、局の方に詣で来て、歌は如何がせ

させ給ふ、丹後へ人は遣はしてけんや、使詣で来ず

や、如何に心許なく思すらん、など戯れて立ちける

を引き止めて、詠める

小式部内侍

大江山 生野の道の 遠ければ 文も未だ見ず 天の橋立

(金葉・雑上・五五〇)

同じ(堀河院)御時、百首の歌奉りけるに、詠める

(源俊頼朝臣)

波立てる 松の下枝を 蜘蛛手にて 霞み渡れる 天の橋立

(詞花・雑上・二七四)

丹後国に罷りける時、詠める 赤染衛門

思ふ事 なくてぞ見まし 与謝の海の 天の橋立 都なりせば

(千載・羈旅・五〇四)

題知らず 正親町院右京大夫

降る雪に 生野の道の 末までは 如何が踏み見む 天の橋立

(続拾遺・冬・四五七)

和泉式部、丹後国に下りける時、幣など賜はずとて、

添へられたりける扇に、書き付けさせ給うける

上東門院

秋霧の 隔つる天の 橋立を 如何なる隙に 人渡るらん

(玉葉・旅・一一一五)

(冬の歌の中に)

前権僧正隆勝

冴ゆる夜の 入海掛けて 友千鳥 月に門渡る 天の橋立

(風雅・雑上・一六一〇)

(題知らず)

前大僧正孝寛

与謝の海の 入海掛けて 見渡せば 松原遠き 天の橋立

(新後拾遺・雑中・一七三三)

天の橋立を見て

藤原為忠朝臣

譬ふべき 方こそなけれ 松が枝に 夕霧渡る 天の橋立

(新統古今・雑上・一七四六)

【嵐山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……四四例

題知らず

読人知らず

訪ふ人も 今は嵐の 山風に 人松虫の 声ぞ哀しき

(拾遺・秋・二〇五)

嵐の山の本を罷りけるに、紅葉のいたく散り

侍りければ

右衛門督公任

朝嵐 嵐の山の 寒ければ 紅葉の錦 着ぬ人ぞなき

(拾遺・秋・二一〇)

承保三年七月、今上、御狩りの次に、大井川に

御幸せさせ給ふに、詠ませ給へる 御製

大堰川 古き流れを 訪ね来て 嵐の山の 紅葉をぞ見る

(後拾遺・冬・三七九)

鹿の歌とて、詠める

藤原顕仲朝臣

世の中を 飽き果てぬとや 小雄鹿の 今は嵐の 山に鳴くらん

(金葉・秋・二二六)

大井河に紅葉見に罷りて、詠める 俊恵法師

今日見れば 嵐の山は 大堰川 紅葉吹き下す 名にこそありけれ

(千載・秋下・三七〇)

大井河に罷りて、紅葉見侍りけるに 藤原輔尹朝臣

思ふこと なくてや見まし 紅葉葉を 嵐の山の 麓ならずは

(新古今・秋下・五二六)

長月の頃、水無瀬に日来侍りけるに、嵐の山の紅葉

涙に類ふ由、申し遣はして侍りける人の返事に

権中納言公経

紅葉葉を さこそ嵐の 払ふらめ この山本も 雨と降るなり

(新古今・秋下・五四三)

母の思ひに侍りける秋、法輪に罷りて、嵐のいたく

吹きければ

皇太后宮大夫俊成

憂き世には 今は嵐の 山風に これや馴れ行く 始めなるらむ

(新古今・哀傷・七九五)

山里に籠り居て侍りけるを、人の訪ひて侍りければ

法印静賢

思ひ出づる 人も嵐の 山の端に 一人ぞ入りし 有明の月

(新古今・雑上・一五〇五)

(題知らず)

大蔵卿有家

秋深み 戸無瀬に激つ 紅葉葉は 名に立つ山の 嵐なりけり

(続後撰・秋下・四三六)

事変はりて後、人々に誘はれて法輪寺に詣でて、

詠み侍りける

如願法師

昔見し 嵐の山に 誘はれて 木の葉の先に 散る涙かな

(続後撰・雑上・一〇九一)

承暦三年、同じ(大井川)逍遙に、水上落葉を

大納言経信

山の彼方の 紅葉葉を 戸無瀬の滝に 落してぞ見る

(続古今・冬・五六五)

弘長二年、亀山仙洞にて、人々に十首の歌詠ませ

侍りしに、朝寒蘆

太上天皇

朝嵐 山の陰なる 川の瀬に 波寄る葦の 音の寒けさ

(続古今・冬・五九八)

亀山の仙洞にて詠み侍りし歌の中に 太上天皇

我が宿の ものかあらぬか 嵐山 あるに任せて 落つる滝つ瀬 (続古今・雑中・一六六四)

弘長元年、百首の歌奉りける時、霧

前大納言為家

朝朗け 嵐の山は 峰晴れて 麓を下る 秋の川霧

(続拾遺・秋上・二七六)

人々題を探りて歌仕うまつりし次に、月前眺望と
言へる心を、詠ませ給うける 太上天皇

嵐山 空なる月は 影冴えて 川瀬の霧ぞ 浮きて流るる

(続拾遺・秋下・二九八)

(建長六年、亀山殿にて、初めて五首の歌講ぜ

られけるに、初紅葉と言ふ事を) 前中納言資平

嵐山 今日の為や 紅葉葉の 時雨も待たで 色に出づらむ

(続拾遺・秋下・三五二)

秋の歌とて、詠み侍りける 山階入道左大臣

吹き萎る むべ山風の 嵐山 夙木の葉の 色ぞ時雨るる

(続拾遺・秋下・三五三)

建仁元年八月十五夜歌合に、古寺残月と

言へる事を 皇太后宮大夫俊成

また類ひ 嵐の山の 麓寺 杉の庵に 有明の月

(玉葉・秋下・七一八)

(山花と言へる心を)

前大納言為氏

嵐山 麓の花の 梢まで 一つに掛かる 峰の白雲

(続千載・春下・九四)

(暮春の心を) 権大納言兼季

吹き下ろす 嵐の山に 春暮れて 井堰に咽ぶ 花の白波

(続千載・春下・二〇七)

永仁二年八月十五夜、十首の歌講ぜられし時、

山月聞鐘と言ふ事を 為道朝臣

更け行けば 鐘の響きも 嵐山 空に聞こえて 澄める月かな

(続千載・春下・五一二)

落葉を 参議公明

神無月 吹くや嵐の 山高み 雲の時雨れて 散る木の葉かな

(続千載・冬・六〇七)

亀山院、芹川に御幸ありて、三首の歌講ぜられ

侍りし時、同じ心(落葉)を 前大納言為世

自ら 吹かぬ絶え間も 嵐山 名に誘はれて 散る木の葉かな

(続千載・冬・六〇八)

(題知らず) 法皇御製

嵐山 麓の鐘は 声冴えて 有明の月ぞ 峰に掛かれる

(続千載・冬・六二一)

秋の歌の中に 藤原頼景

雲は皆 嵐の山の 麓にて 桂の里に 月ぞ限なき

(続千載・雑上・一七五五)

伏見院、花の頃所に御幸ありて御覽せられけるに、

嗟峨にて、詠み侍りける 永福門院右衛門督

眺め残す 花の梢も 嵐山 風より先に 訪ねつるかな

(風雅・春中・一六七)

(落葉を) 鎌倉右大臣

春深み 嵐の山の 桜花 咲くと見し間に 散りにけるかな

(風雅・春下・二四一)

文保の百首の歌の中に 前大納言為世

冬されば 冴ゆる嵐の 山の端に 氷を掛けて 出づる月影

(風雅・冬・七七七)

冬の歌の中に 前関白左大臣基

分きてなほ 凍りやうらん 大堰川 冴ゆる嵐の 山陰にして

(風雅・冬・七九五)

題知らず 後宇多院御製

嵐山 これも吉野や 移すらん 桜に掛かる 滝の白糸

(新千載・春下・一〇五)

百首の歌奉りし時、花 前関白

さしもこそ 厭ふ憂き名の 嵐山 花の所と 如何で成りけん

(新千載・春下・一三五)

亀山殿の千首の歌に 後宇多院御製

春秋の 錦なれとや 嵐山 同じ桜の またも見つらむ

(新千載・秋下・五五九)

建保二年、内裏の歌合に 大蔵卿有家

大堰川 下す桂の 紅葉葉も 一つ嵐の 山の秋風 (新千載・秋下・五六〇)

(題知らず) 惟喬親王

入る月に 照り変はるべき 紅葉さへ 予て嵐の 山ぞ寂しき (新千載・秋下・五六七)

元亨元年十月八日、後宇多院の三首の歌合に、
落葉を、詠める 前中納言有忠

今よりの 衣手寒し 嵐山 峰の木の葉も 脆く散る頃 (新千載・冬・六一五)

初冬落葉と言へる事を 法印長舜

見るままに 紅葉吹き下ろす 嵐山 梢疎らに 冬は来にけり (新千載・冬・六二〇)

永承四年、内裏の歌合に、紅葉を 中納言祐家

散り紛ふ 嵐の山の 紅葉葉は 麓の里の 秋にぞありける (新千載・冬・六二一)

寛治六年十月、殿上の男ども大井河に罷りて、
紅葉見侍りける時、人に代はりて、詠める

周防内侍

古へも 嵐の山の 紅葉葉の 井堰に掛かる 色葉見ざりき (新千載・冬・六二二)

延喜七年、大堰川に行幸の時、序奉りて、泛秋水と言へる

事を、詠める 貫之

波の上を 漕ぎつつ行けば 山近み 嵐に散れる 木の葉とや見ん

(同じ心〈落葉〉を) 前内大臣 (新拾遺・雑上・一六七〇)

大堰川 影見し見ずに 流るめり 誘ふ嵐の 山の紅葉葉

題知らず 内大臣 (新拾遺・雑上・一六七八)

嵐山 散らぬ紅葉の 影ながら 映れば落つる 滝の白波

弘安元年、百首の歌奉りける時 前大納言為氏 (新後拾遺・秋下・四五五)

嵐山 脆き木の葉に 降り添へて 峰行く雲も また時雨れつつ

元亨元年九月、龜山殿にて、五十首の歌講ぜられ (新後拾遺・冬・四七二)

けるに、同じ心〈暮山鹿〉を 前大納言実教

嵐山 入相の鐘に 音を添へて 今日も暮れぬと 鹿ぞ鳴くなる (新統古今・秋下・四九九)

【荒船の御社】(因幡)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一例

荒船の御社

相如

茎も葉も 皆緑なる 深芹は 洗ふ根のみや 白く見ゆらん (拾遺・物名・三八四)

【有栖川】(山城)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……二例

二条皇太后宮、賀茂の齋院と申しける時、本院にて、

松枝映水と言へる心を、詠み侍りける

京極前太政大臣

千早振る 斎の宮の 有栖川 松と共にぞ 影は澄むべき (千載・賀・六一六)

禎子内親王、薨れ侍りて後、棕子内親王代はり

居侍りぬと聞きて、罷りて見ければ、何事も変

はらぬやうに侍りけるも、いとど昔思ひ出でら

れて、女房に申し侍りける 中院右大臣

有栖川 同じ流れは 変はらねど 見しや昔の 影ぞ忘れぬ (新古今・哀傷・八二七)

【伊香が崎】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

伊香が崎

兼覽王

楫に当たる 波の雫を 春なれば 如何が咲き散る 花と見ざらむ (古今・物名・四五七)

伊香が崎と言ふ所を過ぎけるに、舟にて、詠み侍りける

和泉式部

我はただ 風のみこそ 任せつれ 如何が先々 人は行きける (続後拾遺。物名・五二七)

【斑鳩の宮】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

飢人、頭を擡て、御返しを奉る

斑鳩や 富雄川の 絶えばこそ 我が大君の 御名を忘れぬ (拾遺・哀傷・一三五)

近江国百濟寺は上宮太子の草創の由人の申しけるを

聞きて、詠める

権僧正良聖

斑鳩や 富雄川の 流れこお 絶えぬ御法の 始めなりけれ (新千載・釈教・九一九)

【生田の森】(摂津)

●玄々集……一例

為基、摂津国の任、果ててありける所に、をくりける

君住まば 訪はましものを 津の国の 生田の森の 秋の初風 (清胤僧都・二八)

●能因法師集…一例

ちかごとたてよ、などいふ人に

難波なる 生田のもりの いくたびか 神をかけつつ 我はつかはん (四六)

●勅撰和歌集…二二例

清家、父の供に阿波国に下りて侍りける時、かの国の女にもの

言ひ渡り侍りけり、父、摂津国(守)に成遷りて罷り上りにけ

れば、女の便りに付けて、遣はしける

読人しらず

心をば 生田の森に 掛くれども 恋ひしきにこそ 死ぬべかりけれ

(後拾遺・恋三・七三二)

津の国に通ふ人の、今なむ下ると言ひて、後にも未だ京に

ありけるを聞きて、人に代りて詠める 赤染衛門

ありてやは 音信せざるべき 津の国の 今ぞ生田の 森と言ひしは

(後拾遺・雑五・一一四〇)

津の国に住み侍りける頃、大江為基、任果てて上り侍りにければ、言ひ遣はしける 僧都清胤

君住まば 訪はましものを 津の国の 生田の森の 秋の初風 (詞花・秋・八三)

堀河院御時、百首の歌奉りける時、述懐の歌に、詠みて奉り侍りける 源俊頼朝臣

最上川： 津の国の 生田の森の 幾度か： 藤原家隆朝臣 (千載・雑下・一一六〇)

百首の歌詠み侍りける中に 藤原家隆朝臣

昨日だに 訪はむと思ひし 津の国の 生田の森に 秋は来にけり (新古今・秋上・二八九)

名所の歌奉りける時 前中納言定家

秋とだに 吹き敢へぬ風に 色変はる 生田の森の 露の小草 (続後撰・秋上・二四八)

百首の御歌の中に 後鳥羽院御製

木の葉散る 生田の森の 初時雨 秋より後を 訪ふ人もがな (続古今・冬・五五八)

福原の都に罷りけるに、生田と言ふ所にて故郷を思ひ遣りて、人の許に、遣はしける 左京大夫脩範

思ひ遣れ 生田の森の 秋風の 故郷恋ふる 夜半の寝覚めを (続古今・羈旅・八七〇)

(題知らず) 順徳院御製

秋風に またこそ訪はめ 津の国の 生田の森の 春の曙 (続古今・雑上・一五〇一)

弘長元年、百首の歌奉りける時、月を 衣笠内大臣

夜寒なる 生田の森の 秋風に 訪はれぬ里も 月や見るらん (続拾遺・秋下・三一二)

題知らず 藤原景綱

時雨降る 生田の森の 紅葉葉は 訪はれむとてや 色増さるらん (続拾遺・秋下・三五九)

(題知らず) 藤原永光

大方の 言の葉までも 色変はる 秋や生田の 森の白露 (続拾遺・恋四・一〇一二)

(題知らず) 中務卿宗尊親王

津の国の 生田の森の 人は来で 月に言問ふ 夜半の秋風 (新後撰・秋下・三七一)

(杜郭公) 読人しらす

鳴き捨てて 何処生田の 郭公 名残りを止むる 森の下陰 (玉葉・雑一・一九二八)

(題知らず) 洞院撰政前左大臣

津の国の 生田の森の 初時雨 明日さへ降らば 紅葉しぬべし (続千載・秋下・五七一)

(題知らず) 承空上人

秋来ても 訪はれずとてや 津の国の 生田の森に 鹿の鳴くらん (続千載・雑上・一七四七)

名所の歌奉りける時 参議雅経

津の国の 生田の森の 秋風に 鹿の音馴るる 森の下露 (続後拾遺・秋上・二九六)

宝治の百首の歌奉りける時、杜紅葉 皇太后宮大夫俊成女

時雨行く 生田の森の 秋の色を 訪はでぞ外に 見るべかりけり (続後拾遺・秋下・三九六)

光明峰寺入道前撰政家の百首の歌に、杜時鳥を

(前中納言定家)

時雨行く 生田の森の 郭公 己れ住まらずは 秋ぞ訪はまし (新拾遺・夏・二三〇)

百首の歌奉りし時、寄杜恋 関白前左大臣

時雨する 生田の森の 初紅葉 日を経て増さる 色に恋ひつつ (新拾遺・恋二・一〇四五)

百首の歌奉りし時、杜紅葉 前大僧正義賢
紅葉する 生田の森の 幾入も 飽かぬ色とや なほ時雨るらむ (新統古今・秋下・五八二)
承久元年七月、歌合に、杜間雪 従二位行家
訪ひ人も 秋風までぞ 待たれける 生田の森の 雪の夕暮れ (新統古今・冬・七〇七)

【生駒山】 (大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

夏児屋池亭

わが宿の こそ夏の夏に なる時は 伊駒の山ぞ 山がくれける (八五)

●勅撰和歌集……二三例

津の国の古曾部と言ふ所にて、詠める 能因法師

我が宿の 梢の夏に なる時は 生駒の山ぞ 見えずなりぬる (後拾遺・夏・一六七)

津の国に下りて侍りけるに、旅宿遠望の心を、

詠み侍りける 良暹法師

渡辺や 大江の岸に 宿して 雲居に見ゆる 生駒山かな (後拾遺・羈旅・五一三)

題知らず

西行法師

秋篠や 外山の里や 時雨るらん 生駒の嶽に 雲の掛れる (新古今・冬・五八五)

(題知らず)

(読人知らず)

君が辺り 見つつを居るらむ 生駒山 雲な隠しそ 雨は降るとも (新古今・恋五・一三六九)

山路時雨と言へる心を、詠み侍りける 源師賢朝臣

袖濡らす 時雨なりけり 神無月 生駒の山に 掛かる群雲 (新勅撰・冬・三八二)

百首の歌詠み侍りけるに 後京極撰政前太政大臣

久方の 雲居に見えし 生駒山 春は霞の 麓なりけり (新勅撰・雑四・一二七八)

寄雲恋

藤原行家朝臣

生駒山 峰に朝居る 白雲の 隔つる中は 遠離りつつ (続後撰・恋三・八五九)

(題知らず)

読人知らず

難波門を 漕ぎ出でて見れば 神寂ぶる 生駒の嶽に 雲ぞ棚引く

(続後撰・羈旅・一三二二)

洞院撰政家の百首に

源家長朝臣

生駒山 外に鳴尾の 沖に出でて 目には掛からぬ 峰の雨雲 (続古今・雑下・一七二八)

名所の百首の歌召しける次に 順徳院御製

生駒山 雲な隔てそ 秋の月 辺りの空は 時雨なりとも (続拾遺・雑秋・六一五)

堀河院に百首の歌奉りける時

権中納言国信

嵐吹く 生駒の山の 雲晴れて 長居の浦に 澄める月影 (新後撰・秋下・三六八)

白川殿の七百首の歌に、寄雲恋

前大納言為家

生駒山 隔つる中の 峰の雲 何とて掛かる 心なるらむ (新後撰・恋二・九二一)

春日社に百首の歌詠みて奉りける時、春の歌

参議雅経

隔てつる 霞ややがて 曇るらん 生駒の山の 春雨の空 (玉葉・春上・九八)

秋の歌の中に

前参議実俊

朝日射す 生駒の嶽は 現はれて 霧立ち籠むる 秋篠の里 (玉葉・秋下・七三七)

建保の内裏の名所の百首の歌に 前中納言定家

生駒山 嵐も秋の色に吹く 手引きの糸の 夜ぞ苦しき

(玉葉・秋下・七八二)

題知らず

法印定為

春風に 生駒の山の 峰晴れて 隔てぬ雲や 桜なるらん

(続後拾遺・春上・七三)

題知らず

後九条前内大臣

難波門を 漕ぎ出でて見れば 時雨降る 生駒の嶽は 紅葉してけり

(続後拾遺・秋下・三九四)

冬の歌の中に

鎌倉右大臣

雲深き 深山の嵐 冴え冴えて 生駒の嶽に 霰降るらし

(続後拾遺・秋下・四七七)

遠郭公と言ふ事を、詠める

光明峰寺入道前撰政左大臣

郭公 生駒の山や 過ぎぬらむ 隔つる雲の 外に鳴くなり

(新千載・夏・二三一)

難波に月見に罷りて、五首の歌詠み侍りけるに、

海上暁月と言ふ事を

前大納言為世

波の上に 映れる月は ありながら 生駒の山の 峰ぞ明け行く

(新拾遺・秋下・四四一)

(題知らず)

寂真法師

咲き余る 尾上の花や 生駒山 隔つる雲を また隔つらん

(新後拾遺・雑春・六一〇)

(題知らず)

平貞秀

難波より 見えし雲間の 生駒山 今は何処ぞ 五月雨の頃

(新後拾遺・雑春・六八一)

旅の心を、詠める長歌

大納言経信

長月の 月の盛りに… 思ひて行けば 生駒山 麓の里を…

(新統古今・雑下・二〇四三)

【石山】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

石山に詣で侍りて、月を見て、詠み侍りける 藤原長能

都にも 人や待つらん 石山の 峰に残れる 秋の夜の月

(新古今・雑上・一五一四)

【泉川】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一四例

題知らず 読人知らず

都出でて 今日瓶原 泉川 川風寒し 衣鹿背山

(古今・羈旅・四〇八)

泉川

(兼盛)

泉川 長閑けき水の 底見れば 今年は影ぞ 澄み増さりける

(拾遺・神楽・六一六)

(堀河院御時、百首の歌奉りける時、初冬の心を、

詠み侍りける)

藤原仲実朝臣

泉川 水の水曲の 柴漬けに 柴間の凍る 冬は来にけり

(千載・冬・三八九)

奈良の侍従と申しける童の、泉川に身を投げて

侍りければ、詠める

僧都範玄

何事の 深き思ひに 泉川 底の玉藻と 沈み果てけん

(千載・哀傷・五九六)

(左大臣に侍りける時、家に百首の歌合し)

侍りけるに、柞を、詠み侍りける) 定家朝臣
時分かぬ 波さへ色に 泉川 柞の森に 嵐吹くらし
題知らず 中納言兼輔 (新古今・秋下・五三二)

瓶原 湧きて流るる 泉川 何時見きとてか 恋しかるらむ
建仁三年の歌合に、水路夏月 皇太后宮大夫俊成女
月影も 夏の夜渡る 泉川 川風涼し 水の白波
(光明峰寺入道前撰政家の、恋の十首の歌合に)
(玉葉・夏・三九一)

寄衣恋と言ふ事を) 源家長朝臣
包み余る 袖の涙の 泉川 朽ちなむ果ては 衣鹿背山
(返歌) 読人知らず (玉葉・恋一・一二七六)

山城の… 帯にせる 泉川の 上つ瀬に…
元亨三年八月十五夜、月の五十首の歌
召されける次に、夏月 後宇多院御製
(続千載・雑体・七一)

泉川 遠き辺りの 月影に 声を尽くして 鳴く郭公
宝治の百首の歌奉りける時、渡月 従二位行家
(新千載・夏・二七五)

泉川 川瀬の波も 静かにて 遠き辺りに 澄める月影
文治六年、女御入内の屏風に、川の辺に六月
蔽したる所 皇太后宮大夫俊成
(新千載・秋上・四三六)

君が為 今日の祓に 泉川 万代澄めと 祈りつるかな
千五百番の歌合に 野宮左大臣
(新統古今・夏・三四一)

重ねては 衣手寒し 泉川 千鳥鳴く夜の 暁の霜
後一条前関白左大臣家にて、故郷の心を、詠める
源兼氏朝臣 (新統古今・雑上・一七七七)

【五貫川】 (美濃)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…五例

題知らず 藤原道経
君が代は 幾万代か 重ぬべき 五貫川の 鶴の毛衣
左京大夫頭輔家歌合に 大納言成通 (金葉・賀・三二三)

蓆田の 五貫川に 氷桂居て 宿る月には 及くものぞなき
正治二年、百首の歌奉りける時
後京極撰政前太政大臣 (続後拾遺・冬・四五〇)

蓆田の 五貫川に 頻波に 群れ居る鶴の 万代の声
百首の御歌の中に 後小松院御製 (新千載・慶賀・二二七八)

蓆田の 五貫川に 川水と 住むてふ鶴と いづれ久しき
千五百番の歌合に 惟明親王 (新統古今・賀・七九四)

【稻荷山】 (山城)

- 玄々集……用例無

鶴の住む 五貫川の 頻波に なほたち増さる 御代の数かな
(新統古今・賀・七九五)

- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…八例

稲荷に詣で逢ひて侍りける女の、もの言ひ掛け侍り
けれど、答へもし侍らざれば 平定文

稲荷山 社の数を 人間はば つれなき人を 見つと答へむ (拾遺・雑恋・一一二一)

稲荷の宝庫に、女の手に垣付けて侍りける
読人知らず

読人知らず

滝の水 返りて澄まば 稲荷山 七日上れる 験と思はん (拾遺・雑恋・一二八六)

稲荷に、詠みて奉りける 惠慶法師

稲荷山 瑞の玉垣 打ち叩き 我が祈ぎ事を 神も答へよ (後拾遺・神祇・一一六六)

人々、十首の歌詠みけるに、郭公を 中納言実行

稲荷山 訪ねや見まし 郭公 松に験の なきと思へば (金葉(異本)・夏・六七三)

(百首の歌奉りける時の隠題の歌) 水呑 僧都有慶

稲荷山 験の杉の 年古りて 三つの御社 神寂びにけり (千載・雑下・一一七八)

稲荷の社近き所にて、夕郭公と言ふ事を、人々詠み
侍りける時 源頼実

稲荷山 越えて来つる 郭公 木綿掛けてのみ 声の聞ゆる (玉葉・夏・三二八)

(題知らず) 法皇御製

稲荷山 祈る験の 甲斐もあらば 杉の葉挿頭し 何時か逢ひ見ん (続千載・神祇・八八九)

百首の歌詠み侍りけるに 従三位頼政

稲荷山 西にや月の なりぬらん 杉の庵の 窓の白める (風雅・雑中・一七七九)

【犬上】(近江)

- 玄々集…用例無
- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…一例

恋ひしくは、下にを思へ紫の下 読人知らず

犬上の 鳥籠の山なる 名取川 いさと答へよ 我が名漏らすな

この歌、ある人、天帝の、近江采女に賜へると。

(古今・墨滅・一一〇八)

(古今・墨滅・一一〇八)

【石清水】(山城)

- 玄々集…用例無
- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…四〇例

八幡に詣でて、詠み侍りける 増基法師

ここにしも 湧きて出でけん 石清水 神の心を 汲みて知らばや

(後拾遺・雑六・一一七四)

郁芳門院の根合に、祝の心を、詠める 六条右大臣

万代は 任せたるべし 石清水 永き流れを 君に寄そへて (金葉・賀・三〇六)

石清水の社の歌合とて、人々詠み侍りける時、社頭月と

言へる心を、詠める 能蓮法師

石清水 清き流れの 絶えせねば 宿る月さへ 隈なかりけり (千載・神祇・一二八〇)

題知らず 前右近大将頼朝

石清水 頼みを掛くる 人は皆 久しく世にも 住むとこそ聞け (続後撰・神祇・五四四)

正治二年七月、歌合に、水辺月 後鳥羽院御製

石清水 澄みける月の 光にぞ 昔の袖を 見る心地する (続古今・神祇・七〇一)

朱雀院御時、石清水の臨時祭を初めて行はせ給ふ

とて、召されける歌 紀貫之

松も生ひ またも苔生 石清水 行末遠く 仕へまつらん (続古今・神祇・七〇二)

八幡に籠り侍りし時 太上天皇

石清水 木隠れたりし 古へを 思ひ出づれば 澄む心かな (続古今・神祇・七〇三)

石清水社歌合に、社頭月 権中納言長方

神垣や 代代に絶えせぬ 石清水 月も久しき 影や澄むらん (続拾遺・神祇・一四一五)

石清水の社に御幸ありし時、詠ませ給うける 太上天皇

石清水 絶えぬ流れは 身に受けつ 我が世の末の 神に任せん (続拾遺・神祇・一四一八)

宝治元年、十首の歌合に、社頭祝 入道内大臣

君のみや 汲みて知るらむ 石清水 清き流れの 千代の行末 (続拾遺・神祇・一四一九)

宝治の百首の歌召されし次に、寄社祝 後嵯峨院御製

石清水 清き心に 住むと聞く 神の誓ひは なほも頼もし (新後撰・神祇・七二一)

神祇の心を 院御製

石清水 濁らじと思ふ 我が心 人こそ知らね 神は受くらむ (新後撰・神祇・七二二)

題知らず 後深草院御製

石清水 流れの末の 栄ゆるは 心の底の 澄める故かも (玉葉・神祇・二七六四)

臨時舞人にて八幡へ参りて侍りけるに、憚る事

ありて、御前へは参らで馬場に立ちて侍りけるが、

尊げなる僧の侍りけるに語らひ付きて、殿上望み

申しける祈り申しつけて侍りけるに、程なく許さ

れにければ、かの僧の許へ、喜び申し遣はすとて

平忠盛朝臣

嬉しとも 中々なれば 石清水 神ぞ知るらん 思ふ心は (玉葉・神祇・二七六八)

前大納言公任、臨時祭の使にて侍りける時、言ひ

遣はしける 読人知らず

石清水 挿頭す藤波 うち靡き 君にぞ神も 心寄せける (玉葉・神祇・二七七二)

題知らず 大江貞重

祈り来し 験現はせ 石清水 神も我が身を 思ひ捨てずは (続千載・神祇・九一六)

百首の歌召されし次に 法皇御製

世を思ふ 我が末守れ 石清水 清き心の 流れ久しく (続千載・神祇・九一九)

石清水 関白太政大臣

我が身のみ 憂しとは言はじ 水茎の 岡の葛葉も なほ恨むな (続後拾遺・物名・五二六)

石清水臨時祭の舞人にて立ち宿りける家の主、また来ん

春も待つべき由言ひければ、思ふ心ありけむ 藤原定長

またも来ん 春とはえこそ 石清水 立ち舞ふ事も あり難き世に (風雅・雑下・一八五〇)

建武の頃、雑の御歌の中に 後伏見院御製

沈みぬる 身は木隠れの 石清水 さても流れの 世にし絶えずは (風雅・神祇・二一三三)

神祇を 太上天皇

頼む真 二つなければ 石清水 一つ流れに 住むかとぞ思ふ (風雅・神祇・二一三四)

百首の歌に

太上天皇

祈る事 私にては 石清水 濁り行く世を 澄ませとぞ思ふ

(風雅・神祇・二一三五)

神祇の歌の中に

源清氏朝臣

かくて世に 住む甲斐あらば 石清水 心の濁る 名をも流さじ

(新千載・神祇・一〇〇八)

貞和二年、百首の歌召されし時 等持院贈左大臣

(新千載・神祇・一〇〇九)

人よりも 我が人なれば 石清水 清き流れの 末守るらん

(新千載・神祇・一〇〇九)

法印昭清勸め侍りける石清水社の三十首の歌に、寄水祝

前大納言為家

神垣や 影も長閑かに 石清水 住まむ千年の 末ぞ久しき

(新拾遺・神祇・一三九八)

三十首の歌召しける次に、社頭祝を 伏見院御製

石清水 流れの末を 受け継ぎて 絶えず澄まん 万代までに

(新拾遺・神祇・一三九九)

弘安元年、百首の歌召しける次に 龜山院御製

石清水 神の心に 任せてや 我が行末を 定め置きけん

(新拾遺・神祇・一四〇一)

(題知らず) 惟宗光吉朝臣

石清水 神代の月や 濁りなき 人の心の 底に澄むらん

(新拾遺・神祇・一四〇三)

(題知らず) 前中納言親光

三世の跡に 流れを受けて 石清水 澄めるを時と なほぞ仕ふる

(新拾遺・神祇・一四〇六)

(題知らず)

法印幸清

石清水 古き流れの 跡はあれど 我が身一つの 瀬に淀むかな

(新拾遺・神祇・一四〇七)

百首の歌奉りし時、神祇 左大臣

頼むかな 我が源の 石清水 流れの末を 神に任せて

(新後拾遺・神祇・一五一七)

(題知らず)

恒助法親王

さなのなど 濁る心ぞ 石清水 さこそ流れの 数ならずとも

(新後拾遺・神祇・一五一八)

(題知らず)

源顕氏朝臣

よしさらば 神に任せて 石清水 澄める心を 手向にもせん

(新後拾遺・神祇・一五一九)

同年(正治二年)、石清水若宮歌合に 参議雅経

君が為 長閑かに澄める 石清水 千歳の影や 予て見ゆらん

(新統古今・賀・七九八)

家にて、三首の歌詠み侍りし時 左大臣

石清水 瑞垣清き 流れこそ 受けて濁らぬ 代代に知らるれ

(新統古今・神祇・二〇八九)

千五百番の歌合に 従三位保季

君をこそ 神もあはれと 石清水 外より出でぬ 流れと思へば

(新統古今・神祇・二〇九〇)

橘俊綱朝臣家の歌合に、祝の心を 読人知らず

神代より 変はらず澄める 石清水 千歳の後も 汲む由もがな

(新統古今・神祇・二〇九一)

宝治の百首の歌に、寄社祝 入道二品親王道助

踏垂れて 千代ともさらに 石清水 誓ひし末ぞ 今も変はらぬ

(新統古今・神祇・二〇九三)

後法性寺入道前関白太政大臣家の百首の歌に 従三位頼政

浅からぬ 契りを結ぶ 石清水 頼みてもなほ 飽かずもありかな

(新統古今・神祇・二〇九四)

前大納言経房家歌合に

紀行頼

君が経ん 程をばえこそ 石清水 千代も八千代も 神に任せて
(新統古今・神祇・二〇九五)

【岩瀬の森】(大和)

●玄々集……一例

為義朝臣、人づてに、よばせければ
恋しくは 来ても見よかし 人づてに 岩瀬の森の 呼子鳥かな
(弓削仲宣・九三)

●能因法師集……一例

ある所にある女の、里に出づることもたはやすからず。
いひつぐ者もくるしげなれば、こと人をかたらはむなど
思ひてとかういひやる

よぶこ鳥 いはせの森に すみわびぬ なほあふさかを 越えやしなまし (一七)

●勅撰和歌集……一二例

忍びて住み侍りける人の許より、かかる気色人に見すな、
と言へりければ 元方

竜田川 立ちなば君が 名を惜しみ 岩瀬の森の 言はじとぞ思ふ (後撰・恋六・一〇三三)

国信卿家歌合に、初恋の心を、詠める 源兼昌

今日こそは 岩瀬の森の 下紅葉 色に出づれば 散りもしぬらめ (金葉・恋下・四七二)

寛喜元年、女御入内の屏風、社辺山井流水ある所

正三位知家

夕暮れは 夏より外を 行く水の 岩瀬の森の 陰ぞ哀しき (新勅撰・夏・一八八)

(久安の百首の歌奉りける恋の歌) 皇太后宮大夫俊成

散らば散れ 岩瀬の森の 木枯らしに 伝へやせまし 思ふ言の葉 (新勅撰・恋一・六六〇)

(題知らず) 大伴女娘

吹く風に 靡きもしなん 思ふ事 我に岩瀬の 森の下草 (続後撰・恋三・八一)

(家に百首の歌詠み侍りける時、忍恋) 刑部卿頼輔

人知れず 思ふ心を 散らすなと 今日ぞ岩瀬の 森の言の葉 (続拾遺・恋一・八一六)

名所の百首の歌奉りける時

僧正行意

自から 掛けても袖に 知らすなよ 岩瀬の森の 秋の下露 (続拾遺・恋一・八一七)

忍恋の心を 土御門院御製

我が恋は 岩瀬の森の 下草の 乱れてのみも 過ぐす頃かな (新後撰・恋一・七九〇)

(名所の百首の歌奉りける時)

僧正行意

自から 掛けても袖に 知らすなよ 岩瀬の森の 秋の白露 (新後撰(異本)・恋一・一六〇八)

(新後撰(異本)・恋一・一六〇八)

(百首の歌召されし次に) 法印定為

妻恋を 忍びかねてや 郭公 今日岩瀬の 森に鳴くらん (続千載・夏・二五一)

題知らず

新陽明院兵衛佐

思ひ余り 如何に岩瀬の 森の露 染めし心の 程を見せまし (続千載・恋一・一〇八六)

杜郭公と言ふ事を、詠ませ給うける 後二条院御製

郭公 誰れにつけてか つれなしと 岩瀬の森の 村雨の空 (新統古今・夏・二三四)

【岩瀬の山】(大和)

●玄々集……用例無

- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…四例

忍びたる人に、遣はしける (読人知らず)

岩瀬山 谷の下水 うち忍び 人の見ぬ間は 流れてぞ経る (後撰・恋一・五五七)

恋の歌数多詠み侍りけるに 後徳大寺左大臣

かくとだに 思ふ心を 岩瀬山 下行く水の 草隠れつつ (新古今・恋二・一〇八八)

(題知らず) (読人知らず)

岩瀬山 谷の下水 より忍び 人のみ濡れば 流れてぞ経る

(新勅撰(異本)・恋二・一三七七)

(忍恋の心を) 為道朝臣

漏らし侘び 咽ぶ思ひの ありとだに 誰れに岩瀬の 山の下水(続千載・恋一・一〇六八)

【岩田の森】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無

- 勅撰和歌集…三例

山城守になりて嘆き侍りける頃、月の明かかり

ける夜、詣で来たりける人の、如何が思ふ、と

問ひ侍りければ、詠める 藤原輔尹朝臣

山城の 岩田の森の 言はずとも 心の中を 照らせ月影 (詞花・雑上・三〇四)

同じ心(紅葉)を 衣笠内大臣

初時雨 日毎に降れば 山城の 岩田の森は 色付きにけり (新後撰・秋下・四二七)

(恋の心を) 藤原良尹朝臣

柞原 移ろふ色を 辛しとも 誰れに岩田の 森の下露 (新拾遺・恋五・一三四七)

【岩手の郡】(陸奥)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無

- 勅撰和歌集…一三例

(題知らず) 前右京権大夫頼政

思へども 岩手信夫の 摺り衣 心の内に 乱れぬるかな (千載・恋一・六六三)

堀河院御時、百首の歌奉りける時、述懐の歌に、詠みて

奉り侍りける 源俊頼朝臣

最上川… 思ひ知らずは なけれども 岩手はえこそ 渚なる… (千載・雑下・一一六〇)

前大僧正慈円、文にては思ふ程の事も申し尽くし

難き由、申し遣はして侍りける返事に

前右大将頼朝

陸奥の 岩手信夫は えぞ知らぬ 書き尽くしてよ 壺の碑 (新古今・雑下・一七八六)

題を探りて歌詠み侍りけるに、思草を、詠める

前中納言国通

下にのみ 岩手布留野の 思草 靡く尾花は 穂に出づれども (新勅撰・恋二・七七六)

頭中将に侍りける時、忍草の紅葉したるを笛の

中に入れて、女の許に、遣はしける 謙徳公

恋しきは 人には岩手 忍草 忍ぶに余る 色を見よかし
返し 読人知らず (新勅撰・恋五・九四三)

岩手思ふ 程に余らば 忍草 いとど廂の 露や繁らむ
寄雲恋と言へる心を 高階宗成 (新勅撰・恋五・九四四)

岩手のみ 信夫の山に 居る雲や 心の奥を なほ隔つらむ
恋の歌の中に 前内大臣通 (統拾遺・恋一・八〇五)

人知れぬ 袖の涙や 陸奥の 岩手信夫の 山の下露
(題知らず) 大納言師氏 (統千載・恋一・一〇八九)

別れ路は 今日ぞ限りと 陸奥の 岩手信夫に 濡るる袖かな
百首の歌奉りし時、寄杜恋 権大納言義詮 (統後拾遺・離別・五四〇)

露は先づ 色にや出でん 思ふとも 岩手信夫の 森の下草
建保三年、内裏の百首の歌奉りける時 前中納言定家 (新拾遺・恋一・九五九)

岩躑躅 岩手や染むる 信夫山 心の奥の 色を訪ねて
百首の歌奉りし時、寄山恋 前大僧正滿意 (新後拾遺・春下・一四二)

隙ぞなき 信夫の山の 夕時雨 岩手年経る 袖の涙を
後法性寺入道前関白家の百首の歌に、 (新統古今・恋一・一〇四四)

同じ心(忍恋)を 藤原資忠
岩手のみ もの思ふ人の 袖なれや 忍の草に 結ぶ白露 (新統古今・恋一・一〇四八)

【岩見の川】(出羽)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一例

●題知らず

●読人知らず

朝毎に 岩見の川の 身を絶えず 恋ひしき人に 逢見てしがな (新勅撰・雑四・一三二一)

【伊吹嶽(山)】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……七例

撰政太政大臣家の百首の歌合に

中宮大夫家房

逢ふ事は 何時と伊吹の 峰に生ふる さしも絶えせぬ 思ひなりけり (新古今・恋二・一一三一)

恋の心を、詠み侍りける 藤原頼氏朝臣
さし艾 燃ゆる 伊吹の 山の端の 何時とも分かぬ 思ひなりけり (新勅撰・恋二・七七七)

(秋の歌の中に) 寂縁法師
世と共に 燃えて年経る 伊吹山 秋は草木の 色に出でつつ (統後撰・秋下・四三一)

題知らず 曾根好忠 (統古今・冬・六四七)

冬深く 野はなりにけり 近江なる 伊吹の外山 雪ふりぬらし (百首の歌の中に) 中務卿親王

伊吹山 峰なる草の さすもこそ 忘れじとまで 契り置きしか (統古今・恋四・一二七三)

延長五年、五首の歌に、寄山恋
世と共に 燃ゆとも如何が 伊吹山 さしもつれなき 人に知らせむ

大宰権帥為経

(新後撰・恋二・九二二)

弘長元年、百首の歌奉りける時
さし艾 さしも隙なき 五月雨に 伊吹の嶽の なほや燃ゆらん
衣笠前内大臣
(新拾遺・夏・二六九)

【揖保の湊】(播磨)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

揖保の湊にて、千鳥の鳴くを聞きて 大江嘉言

深き夜に 寝覚めて聞けば 播磨瀉 揖保の湊に 千鳥鳴くなり
(新統古今・冬・六六九)

【妹背川】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

(題知らず) (読人知らず)

妹背川 靡く玉藻の 身隠れて 我は恋ふとも 人は知らじな
(続後撰・恋一・六三六)

題知らず 参議篁

身のならん 淵瀬も知らず 妹背川 下り立ちぬべき 心地のみして
(続古今・恋二・一〇九〇)

(続古今・恋二・一〇九〇)

前右大将道綱母、世を恨みて都を遠く侍りける許へ、

遣はしける 尚侍藤原灌子朝臣

妹背川 昔ながらの 中ならば 人の往き来の 影は見てまし
(玉葉・雑二・二〇六九)

後徳大寺左大臣室、身罷りける頃、申し送りける

清輔朝臣

妹背川 帰らぬ水の 別れ路は 聞き渡るにも 袖ぞ濡れける
(新千載・哀傷・二一七二)

延文二年、後光厳院に百首の歌奉りける時、霞を

太政大臣

春と言へば やがて霞の 中に落つる 妹背の川も 氷溶くらし
(新統古今・春上・四)

【妹背山】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二五例

(題知らず) 読人知らず

流れては 妹背の山の 中に落つる 吉野の川の よしや世の中
(古今・恋五・八二八)

兄弟同志如何なる事か侍りけん 読人知らず

君と我 妹背の山も 秋来れば 色変はりぬる ものにぞありける
(後撰・秋下・三八〇)

兄弟の中に如何なる事かありけん、常ならぬ様に

見え侍りければ 読人知らず

睦ましき 妹背の山の 中にさへ 隔つる雲の 晴れずもあるかな
(後撰・雑三・一二一四)

旅にて、詠み侍りける

人麿

大己貴 少名御神の 造れりし 妹背の山を 見るぞ嬉しき

(拾遺・神楽・六一九)

題知らず

読人知らず

睦ましき 妹背の山と 知らねばや 初秋霧の 立ち隔つらん

(拾遺・雑秋・一〇九五)

(題知らず)

春宮大夫公実

妹背山 峰の嵐や 寒からん 衣雁が音 空に鳴くなり

(金葉・秋・二二二)

堀河院に百首の歌奉りける時、山の歌 権中納言国信

浅緑 霞渡れる 絶え間より 見れども飽かぬ 妹背山かな

(新勅撰・雑四・一三三〇)

名所の歌数詠ませ給うける中に、恋 土御門院御製

逢はで経る 涙の末や 増さるらん 妹背の山の 中の滝つ瀬

(続後撰・恋二・七六三)

題知らず

慈鎮大僧正

我が涙 吉野の川の よしさらば 妹背の山の 中に流れよ

(続古今・恋一・一〇二二)

亭子院より、世々を経て絶えじとぞ思ふ、と言ふ

御歌を奉らせ給ひける御返し

延喜御歌

末絶えぬ 吉野の川の 水上や 妹背の山の 中を行くらん

(続古今・雑中・一六六〇)

(題知らず)

正三位知家

落ち激つ 吉野の川や 妹背山 辛きが中の 涙なるらん

(続拾遺・恋五・一〇九三)

妹のをかしきを見て、書き付けて侍りける 参議篁

中に行く 吉野の川は 浅せななん 妹背の山を 越えて見るべく(玉葉・恋一・一二七七)

返し

参議峰守朝臣女

妹背山 影だに見えで 止みぬべく 吉野の川は 濁れとぞ思ふ

(玉葉・恋一・一二七八)

(題知らず)

津守国平

我が涙 よしや吉野の 川となれ 妹背の山の 影や映ると

(続千載・恋二・一二五五)

名所恋と言ふ事を

従二位行家

流れても 憂き瀬な見せそ 吉野なる 妹背の山の 中川の水

(続後拾遺・恋二・七九六)

後宇多院に十首の歌奉りける時、逢増恋 権中納言公雄

妹背山 中なる川の 薄氷 溶けてぞいとど 袖は濡れける

(続後拾遺・恋三・八一八)

題知らず

行念法師

妹背山 渡らぬ中の 吉野川 誰が為変はる 恋の淵瀬ぞ

(新千載・恋三・一三一九)

(題知らず)

前参議彦良

結び置く 契りし深し 妹背山 中なる川の 滝の白糸

(新千載・恋三・一三三五)

題知らず

藤原基世

妹背山 隔つる雲の 夕時雨 誰が憂き中の 涙なるらん

(新千載・恋四・一五三七)

(正和五年九月尽日、後醍醐院未だ東宮に申しける時、

十首の歌召しけるに、見不逢恋) 中納言為藤

妹背山 中なる滝の 音にのみ 聞かぬばかりを なほや頼まん(新拾遺・恋二・一〇四八)

百首の歌奉りし時、款冬 藤原雅永朝臣

言はで思ふ 心の色か 妹背山 中なる川の 山吹の花(新続古今・春下・一九一)

寄滝恋と言ふ事を、詠ませ給うける 後小松院御製

何時よりか 妹背の中に 落ち初めて 吉野の滝を 袖に堰くらん

(新続古今・恋一・一〇六三)

題知らず

祝部成光

来ぬ夜半の 積もれる塵や 我が中に 後は妹背の 山とならまし

(弘安の百首の歌に)

民部卿資宣

(新統古今・恋三・一二四一)

妹背山 思はぬ中に 行く水の 誰が辛さより 名を流すらん

(新統古今・恋四・一三四七)

貞和の百首の歌に

按察使資明

外になる 人の心の 浮き雲や 妹背の山の 隔てなるらむ (新統古今・恋五・一四六五)

【浮島】(陸奥)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

物へ罷りける人に、幣遣はしける衣管に、浮島の

形押し侍りて 能宣

わたつ海の 波にも濡れぬ 浮島の 松に心を 寄せて頼まん (拾遺・雑上・四五八)

浮島

順

定めなき 人の心に 較ぶれば ただ浮島は 名のみなりけり (拾遺・雑恋・一二四九)

(中納言家持に、遣はしける) (山口女王)

塩釜の 前に浮きたる 浮島の 浮きて思ひの ある世なりけり (新古今・恋五・一三七九)

題知らず

後鳥羽院御製

塩釜の 浦の干潟の 曙に 霞に残る 浮島の松 (続古今・春上・四五)

同じ(陸奥) 国へ罷りける人の許に、遣はしける

小野小町

陸奥は 世を浮島も ありと言ふ 関越ゆるぎの 急がざらん (続千載・羈旅・七五八)

【宇治川】(山城)

●玄々集……一例(宇治)

宇治にて

網代には 沈む水屑も なかりけり 宇治の渡りに 我や住ままし (大江以言・八三)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一七例

河霧を、詠める

藤原基光

宇治川の 川瀬も見えぬ 夕霧に 真木の島人 舟呼ばふなり (金葉・秋・二四〇)

宇治平等院の寺主になりて、宇治の住みつきて、比叡の

山の方を眺め遣りて、詠める 忠快法師

宇治川の 底の水屑と なりながら なほ雲掛かる 山ぞ恋しき (金葉・雑上・五九〇)

霧を、詠める

春宮大夫公実

麓をば 宇治の川霧 立ち籠めて 雲居に見ゆる 朝日山かな (詞花(異本)・秋・四一九)

堀河院御時、百首の歌奉りけるに、霧を、詠める

権大納言公実

麓をば 宇治の川霧 立ち籠めて 雲居に見ゆる 朝日山かな (新古今・秋下・四九四)

冬頃、大将離れて、嘆く事侍りける明年、右大将になりて奏し

侍りける

東三条入道前摂政太政大臣

変はる瀬も ありけるものを 宇治川の 絶えぬばかりも 嘆きけるかな

(新古今・雑中・一六四八)

後徳大寺左大臣、十首の歌詠み侍りけるに、遠村霞と
言へる心を、詠み侍りける 皇太后大夫俊成
朝と明けて 伏見の里に 眺むれば 霞に咽ぶ 宇治の川霧
入道二品道助親王家の五十首の歌に、朝時雨を
(新勅撰・春上・一三)

紅葉散る 山の朝日の 色ながら 時雨れて下る 宇治の川波
秋の歌の中に 常磐井入道前太政大臣
(続古今・冬・五七四)

伏見山 麓の霧の 絶え間より 遙かに見ゆる 宇治の川波
水郷月 法印憲基
山本の 遠き辺りは 見え分かで 月にぞ白き 宇治の川波
宝治二年、百首の歌に、秋田 冷泉前太政大臣
(玉葉・秋下・六六九)

穂に出づる 伏見の小田を 見渡せば 稲葉に続く 宇治の川波
永承五年、宇治にて、浪声混雨と言ふ事を 前大納言隆国
(玉葉・秋下・七四八)

宇治川の 早瀬に波の 声すれば 降りくる雨を 知る人もなし
宇治に罷りて、河の魚の為とて、八講行ひ経供養し
などして侍りて 法成寺入道前摂政太政大臣
(玉葉・雑二・二〇七〇)

宇治川の 底に沈める 鱗を 網ならねども 掬ひつるかな
嘉元の百首の歌奉りし時、河 前大僧正道玄
(玉葉・釈教・二七一二)

さのみやは 身を宇治川の 玉柏 君の御代にも なほ沈むべき
月の歌とて 永福門院
(続千載・雑中・一九二七)

更け行けば 槇の尾山に 霧晴れて 月影清し 宇治の川波
(月之歌とて) 藤原為秀朝臣
(続後拾遺・秋下・三三八)

霧晴るる 遠の山本 現はて 月影磨く 宇治の川波
(河霧を、詠み侍りける) 前大僧正実超
(風雅・秋中・六一九)

伏見山 麓の稲葉 雲晴れて 田の面に残る 宇治の川波
貞和の百首の歌に 正二位隆教
(風雅・秋下・六六七)

染め敢へぬ 紅葉の色の 朝日山 深くも見えず 宇治の川波
(新続古今・秋下・五七三)

【打出の浜】(近江)
●玄々集……用例無
●能因法師集……用例無
●勅撰和歌集……五例
女の許に、遣はしける 朝忠朝臣
白波の 打ち出づる浜の 浜千鳥 跡や訪ぬる 導なるらん
(後撰・恋四・八二八)

(題知らず)
近江なる 打出の浜の うち出でつつ 恨みやせまし 人の心を
堀河院御時、百首の歌奉りける時、述懐の歌に、
詠みて奉り侍りける 源俊頼朝臣
(拾遺・恋五・九八二)

最上川……思はん人に 近江なる 打出の浜の 打出でつつ…
前大僧正道玄、日吉社にて、人々に勧め侍りける
源兼氏朝臣
(千載・雑下・一一六〇)

二十一首の歌の中に
鳩の海は 氷溶くらし 白波の 打出の浜に 春風ぞ吹く
(続後拾遺・春上・三八)

題知らず

後鳥羽院御製

駒並べて 打出の浜を 見渡せば 朝日に騒ぐ 志賀の浦波

(新後拾遺・羈旅・八七二)

【宇治の橋(守)】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……八例

(題知らず)

(読人知らず)

忘らるる 身を宇治橋の 中絶えて 人も通はぬ 俊ぞ経にける (古今・恋五・八二五)

題知らず

読人知らず

千早振る 宇治の橋守 汝をしぞ あはれとは思ふ 年の経ぬれば (古今・雑上・九〇四)

撰政左大臣家にて、恋の心を、詠める 源雅光

数ならぬ 身を宇治川の 橋橋と 言はれながらも 恋ひ渡るかな (金葉・恋下・五〇九)

(題知らず)

藤原頭方

我が恋は 年経る甲斐も なかりけり 羨ましきは 宇治の橋守 (千載・恋二・七二四)

嘉応元年、入道前関白太政大臣、宇治にて、

河水久澄と言ふ事を、人々に詠ませ侍りける

清輔朝臣

年経たる 宇治の橋守 言問はん 幾世になるぬ 水の上 (新古今・賀・七四三)

衆生無辺誓願度

参議雅経

行方なき 身を宇治川の 橋柱 立ててしものを 人渡せとは (新後撰・釈教・六八九)

百首の歌奉りし時、寄橋恋

按察使実継

年を経て 恋ひ渡る身の 苦しさを あはれと思へ 宇治の橋姫 (新拾遺・恋二・一〇八二)

権中納言為重家にて、三首の歌詠ませ侍りしに、絶不知恋を

津守国量

我が中は 身を宇治橋と 古りしより いざよふ波を かけて恋ひつつ

(新後拾遺・恋四・一一八八)

【有渡浜】(駿河)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

東遊を見て

うどはまに 天の羽衣 むかしきて ふりけむ袖や けふのはふりこ (二三三)

●勅撰和歌集……四例

式部大輔資業、伊予守にて侍りける時、彼国の 三島の明神に、東遊して奉りけるに、詠める

能因法師

有渡浜に 天の羽衣 昔来て 振りけん袖や 今日の子 (後拾遺・神祇・一一七二)

(題知らず)

読人知らず

有渡浜の 疎くのみやは 世をば経む 波の夜夜 逢ひ見てしがな

(新古今・恋一・一〇五一)

題知らず

相模

何時となく 恋駿河なる 有渡浜の 疎くも人になり増さるかな

寄海辺恋と言ふ事を

從三位為子

(新勅撰・雑四・一一九八)

浮き波の 掛かるとなれば

有度浜の

疎くて人に あらましものを

(玉葉・恋三・一四八七)

【瓜生山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二例

瓜生山を越え侍る

謙徳公

行く人を 止めかねてぞ 瓜生山 峰立ち平し 鹿も鳴くらむ

(新勅撰・羈旅・五〇三)

上東門院、日来同じ所に御座しましけるが、外へ移らせ

給うけるに、瓜を奉らせ給ふとて

西院皇后宮

思へども なほ辛きかな 瓜生山 如何にせよとか 今日はなるらん

(統後拾遺・雑中・一一〇一)

【老蘇の森】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二〇例

相模守にて上り侍りけるに、老蘇の森の許にて、

郭公を聞きて、詠める 大江公資朝臣

東路の 思ひ出でにせん 郭公 老蘇の森の 夜半の一声

(後拾遺・夏・一九五)

鏡を見るに、影の変張り行くを見て、詠める

源師賢朝臣

変はり行く 鏡の影を みる度に 老蘇の森の 嘆きをぞする

(金葉・雑上・五九九)

同じ〈久安〉百首の歌奉りける時の長歌

待賢門院堀河

時知らぬ… 紅葉の下葉 残るやと 老蘇の森に 訪ぬれど…

(千載・雑下・一一六三)

百首の歌奉りし時、夏の歌の中に 民部卿範光

郭公 なほ一声は 思ひ出でよ 老蘇の森の 夜半の昔を

(新古今・夏・二〇七)

題知らず

源泰光朝臣

かくて世に 我が身時雨は 降り果てぬ 老蘇の森の 色も変はらで

(新勅撰・雑一・一一〇二)

(題知らず)

信阿法師

徒に 老蘇の森の 郭公 ただ古へを 忍び音ぞ鳴く

(統後撰・雑上・一〇五七)

身を愁へて、詠み侍りける

基俊

年を経て 嘆く嘆きの 繁り合ひて 我が身老蘇の 森となりぬる

(統後撰・雑中・一一七三)

題知らず

藤原光俊朝臣

袖濡らす 老蘇の森の 時雨こそ 憂きに年経る 涙なりけれ

(統古今・冬・五四九)

(百首の歌奉りし時)

前中納言資平

五十余り 老蘇の森の 神無月 時雨時雨て 身こそ古りぬれ

(統拾遺・雑秋・六三三)

題知らず

読人知らず

外に見る 老蘇の森に 降る雪の 積もる年さへ 身に知られつつ (続拾遺・雑秋・六五九)

題知らず

道円法師

立ち寄れば 袖こそ濡るれ 年経ぬる 身さへ老蘇の 森の下露 (続拾遺・雑中・一二二二)

題知らず

源兼泰

繰り返し なほ憂きものは 数ならで 我が身老蘇の 森も標縄 (新後撰・雑中・一四〇七)

杜郭公

前大僧正良寛

我も早 老蘇の森の 郭公 やよや昔の 事語らなむ (玉葉・雑一・一九二七)

郭公声老と言ふ事を

前大納言俊定

郭公 老蘇の森に 鳴く声は 身に寄そへても あはれとぞ聞く (玉葉・雑一・一九二九)

神無月の頃、老蘇の森を過ぐとて

前大納言俊光

我が身さへ 老蘇の森の 木枯らしに 木の葉よりなほ 降る時雨かな (続千載・雑上・一七八七)

杜初冬と言ふ事を

円光院入道前関白太政大臣

冬の来て 霜の降りはも あはれなり 我も老蘇の 森の小草 (風雅・冬・七二六)

題知らず

前大納言為家

いとせめて なほもの憂きは 春を経て 老蘇の森の 鶯の声 (新千載・雑上・一六六八)

(題知らず)

平氏村

郭公 誰れに昔を 偲べとて さのみ老蘇の 森に鳴くらん (新拾遺・夏・二五五)

百首の歌奉りし時、杜紅葉

二品法親王道明

時しあれば 色をも添へつ 五十余り 過ぎし老蘇の 森の紅葉葉

(新続古今・秋下・五九二)

(落葉を)

兼好法師

逃れえぬ 老蘇の森の 紅葉葉は 散り交ひ曇る 甲斐なかりけり (新続古今・雑上・一七六七)

【音無川】(紀伊)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……四例

忍びて懸想し侍りける女の許に、遣はしける 元輔

音無の 川とぞ終に 流れける 言はでもの思ふ 人の涙は (拾遺・恋二・七五〇)

(卵の花を、詠める)

源盛清

卵の花を 音無川の 波かとて 妬くも折らで 過ぎにけるかな (金葉(異本)・夏・六七二)

都を出でて久しく修行し侍りけるに、訪ふべき人の訪はず

侍りければ、熊野より、遣はしける 大僧正行尊

わくらばに などかは人の 訪はざらむ 音無川に 住む身なりとも (新古今・雑中・一六六二)

題知らず

藤原忠資朝臣

名のみして 岩波高く 聞こゆなり 音無川の 五月雨の頃 (続拾遺・夏・一八四)

【音無滝】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…一例

くりはらの郡にて、そこにあるもの、是は音無の滝に
侍り、また河は昔河とぞいひ侍るといへば

都人 きかぬはなきを 音無の 滝とはなどか いひはじめけむ (一一一)

- 勅撰和歌集…五例

家に歌合し侍りけるに、詠める 中納言俊忠

恋侘びて ひとり伏屋に 終夜 落つる涙や 音無の滝 (詞花・恋上・二二三)

宝治二年、百首の歌、寄滝恋

前大納言為家 (続古今・恋一・一〇二五)

音無の 滝の水上 人間はば 忍びに絞る 袖や見せまし

題知らず 土御門院御製

幾夜とか 袖の柵 堰きも見む 契りし人は 音無の滝 (続拾遺・恋二・八五四)

題知らず 從二位為信

人知れぬ 心の中の 水上に 堰くや涙の 音無の滝 (新千載・恋一・一一三一)

音無の滝にて

能因法師

都人 聞かぬはなきを 音無の 滝とは誰か 言ひ始めけん (新拾遺・雑中・一七六三)

【音羽滝】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無

- 勅撰和歌集…三例

古歌に加へて奉れる長歌

壬生忠岑

呉竹の 世世の古言… 頭は白く なりぬとも 音羽の滝の 音に聞く…

(古今・雑体・一〇〇三)

返し

采女の奉れる

山科の 音羽の滝の 音にのみ 人の知るべく 我が恋ひめやも (古今・墨滅・一一〇九)

後京極撰政治家の六百番の歌合に

大蔵卿有家

名に立てる 音羽の滝も 音にのみ 聞くより袖は 濡るるものか (新後撰・恋一・七八八)

【音羽山】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無

- 勅撰和歌集…二四例

音羽山を越えける時、郭公の鳴くを聞きて、

詠める

紀友則

音羽山 今朝超え来れば 郭公 梢遙かに 今ぞ鳴くなる (古今・夏・一四二)

(石山に詣でける時、音羽山の紅葉を見て、詠める)

貫之

秋風の 吹きにし日より 音羽山 峰の梢も 色付きにけり (古今・秋下・二五六)

音羽山の辺りにて、人を別るとて、よめる 貫之

音羽山 木高く鳴きて 郭公 君が別れを 惜しむべらなり (古今・離別・三八四)

(題知らず)

在原元方

音羽山 音に聞きつつ 逢坂の 関の此方に 年を経るかな (古今・恋一・四七三)

(題知らず)

読人知らず

山科の 音羽の山の 音にだに 人の知るべく 我が恋ひめやも
(古今・恋三・六六四)

古歌奉りし時の、目録のその長歌 貫之

千早振る 神の御代より： 天彦の 音羽の山の 春霞：
(古今・雑体・一〇〇二)

女の許に、遣はしける 読人知らず

ありとのみ 音羽の山の 郭公 聞きに聞えて 逢はずもあるかな
(後撰・夏・一五八)

題知らず 読人知らず

松虫の 初声誘ふ 秋風は 音羽山より 吹き初めにけり
(後撰・秋上・二五一)

常に來とて、煩さがりて、隠れければ、遣はしける

読人知らず

ありと聞く 音羽の山の 郭公 何か來るらん 鳴く声はして
(後撰・雑四・一二六一)

立春日、詠み侍りける 橘俊綱朝臣

逢坂の 関をや春も 越えつらん 音羽の山の 今日霞める
(後拾遺・春上・四)

郭公を訪ねける日は聞かで、二日ばかりありて

鳴さけるを聞きて 橘成元

郭公 音羽の山の 麓まで 訪ねし声を 今宵聞くかな
(金葉・夏・一〇八)

太皇太后宮扇合に、人に代はりて、紅葉の心を、

詠める 源俊頼朝臣

音羽山 紅葉散るらし 逢坂の 関の小川に 錦織り掛く
(金葉・秋・二四六)

(題知らず) 曾根好忠

秋風の 外に吹き來る 音羽山 何の草木か 長閑けかるべき
(新古今・秋上・三七一)

上の男ども、眺望山雪と言へる心を、仕うまつりけるに

高倉院御製

音羽山 清かに見する 白雪を 明けぬと告ぐる 鳥の声かな
(新古今・冬・六六八)

人々に百首の歌召されし次に 太上天皇

今朝變はる 秋とは風の 音羽山 音に聞くより 身にぞ凍みける
(続拾遺・秋上・二一五)

久安六年、崇徳院に百首の歌奉りける時 藤原清輔朝臣

何時しかと 霞まざりせば 音羽山 音ばかりにや 春を聞かまし
(新後撰・春上・五)

(春の歌の中に)

中務卿宗尊親王

音羽山 花咲きぬらし 逢坂の 関の此方に 匂ふ春風
(新後撰・春上・六三)

(題知らず)

源俊頼朝臣

郭公 音羽の山に 聞きつとは 先づ逢坂の 人に語らむ
(新後撰・夏・一八九)

山時雨 院御製

何時しかと 今朝は時雨の 音羽山 秋を残さず 散る紅葉かな
(続千載・冬・五九五)

徇子内親王家の歌合に、風前落葉 読人知らず

音羽山 秋より後の 紅葉葉を 関守る神に 風ぞ手向くる
(続後拾遺・冬・四二二)

宝治二年、後嵯峨院に百首の歌奉りける時、

山霞 常磐井入道前太政大臣

眺め來し 音羽の山も 今更に 霞めば遠き 曙の空
(風雅・春上・二九)

春の初めの歌 源俊頼朝臣

立ち返る 春の証は 霞敷く 音羽の山の 雪の斑消え
(新後拾遺・春上・二)

百首の歌奉りし時、同じ心(初秋)を 二品法親王承道

吹くからに 身に凍む風の 音羽山 関路越えてや 秋も來ぬらん

(新統古今・秋上・三五二)

題知らず
式部卿邦省親王家少将
音羽山 峰の梢も 見えぬまで 関の此方は 雪は降りにけり (新続古今・冬・七〇四)

【大原山】(山城)

●玄々集……用例無
●能因法師集……用例無
●勅撰和歌集……八例
題知らず
和泉式部
樵り集めて 真木の炭焼く 気を微温み 大原山の 雪の斑消え (後拾遺・冬・四一四)
良暹法師の許に、遣はしける 藤原国房
思ひ遣る 心さへこそ 寂しけれ 大原山の 秋の夕暮 (後拾遺・雑三・一〇三八)

人の、炭奉らむ如何が、と言ひたりければ、詠める
読人知らず

志 大原山の 炭ならば 思ひを添へて 燠すばかりぞ (後拾遺・雑六・一二〇八)
少将井の尼、大原より出でたりと聞きて、遣はしける
和泉式部

世を背く 方は何処に ありぬべし 大原山は 住み良かりきや (新古今・雑中・一六四〇)
返し
少将井尼
思ふこと 大原山の 炭竈は いとど嘆きの 数をこそ積み (新古今・雑中・一六四一)

(百首の歌奉りし時、炭竈) 等持院贈左大臣
炭竈に 通ふ行き来の 跡ばかり 雪にぞ見ゆる 大原の山 (新拾遺・雑上・一七二二)
嘆きのみ 大原山の 炭竈に 思ひ絶えせぬ 身を如何にせん (新後拾遺・冬・五六八)

後宇多院に十首の歌奉りける時 民部卿為明
空冴ゆる 雪解の雲も 炭竈の 煙に紛ふ 大原の山 (新続古今・冬・七三三)

【大堰川(大井川)】(山城)

●玄々集……用例無
●能因法師集……用例無
●勅撰和歌集……九四例
奥山の 菅の根しのぎ降る雪下 読人知らず
今日人を 恋ふる心は 大堰川 流るる水に 劣らざりけり (古今・墨滅・一一〇六)

大井なる所にて、人々酒食べける次に 業平朝臣
大堰川 浮かべる舟の 篝火に 小倉の山も 名のみなりけり (後撰・雑三・一二三二)

大井に、紅葉の流るるを見侍りて 壬生忠岑
色々の 木の葉流るる 大堰川 下は桂の 紅葉とや見ん (拾遺・秋・二二二)

同じ〈延喜〉御時、大井に行幸ありて、人々に歌
詠ませさせ給ひけるに (貫之)
大堰川 川辺の松に 言問はむ かかる御幸や ありし昔も (拾遺・雑上・四五五)

(題知らず) 読人知らず
大堰川 下す筏の 水馴れ棹 見なれぬ人も 恋ひしかりけり (拾遺・恋一・六三九)
故式部卿の親王、大井に罷れりけるに、紅葉を、
詠み侍りかえる 堀河右大臣

水上に 紅葉流れて 大堰川 斑濃に見ゆる 滝の白糸 (後拾遺・秋下・三六四)

大井川にて、詠み侍りける 中納言定頼

水もなく 見えこそ渡れ 大堰川 岸の紅葉は 雨と降れども (後拾遺・秋下・三六五)

十月の朔日に、上の男ども大井川に罷りて、歌詠み侍りけるに、詠める

前大納言公任

落ち積もる 紅葉を見れば 大堰川 井堰に秋も 止まるなりけり (後拾遺・冬・三七七)

承保三年十月、今上御狩の次に、大井川に行幸

せさせ給ふに、詠ませ給へる 御製

大堰川 古き流れを 訪ね来て 嵐の山の 紅葉をぞ見る (後拾遺・冬・三七九)

来むと言ひて来ざりける人の、暮れに必ず、と言ひて

侍りける返事に 馬内侍

待つ程に 過ぎのみ行けば 大堰川 頼むる暮れを 如何がとぞ思ふ

(後拾遺・雑二・九〇四)

法輪に参りて、詠み侍りける

源道濟

年毎に 堰くとはすれど 大堰川 昔の名こそ なほ流れけれ (後拾遺・雑四・一〇五九)

実行卿家の歌合に、鵜河の心を、詠める 中納言雅定

大堰川 幾瀬鵜舟の 過ぎぬらん 仄かになりぬ 篝火の影 (金葉・夏・一五一)

宇治前太政大臣、大井河に罷り渡りけるに罷りて、

水辺紅葉と言へる事を、詠める 大納言経信

大堰川 岩波高し 筏師よ 岸の紅葉に あから目なせそ (金葉・秋・二四五)

大井御幸に仕うまつれる 修理大夫顕季

大堰川 井堰の音の なかりせば 紅葉を敷ける 渡りとやみん (金葉・秋・二四八)

落葉蔵水と言へる事を、詠める 大中公長朝臣

大堰川 散る紅葉葉に 埋もれて 戸無瀬の滝は 音のみぞする (金葉・秋・二五三)

大井河に罷りて、紅葉を、詠める 平致親

大堰川 紅葉を渡る 筏師は 棹に錦を 掛けてこそ見れ (金葉・冬・二六二)

大井河に紅葉見に罷りて、詠める 俊恵法師

今日見れば 嵐の山は 大堰川 紅葉吹き下す 名にこそありけれ (千載・秋下・三七〇)

(大井河に紅葉見に罷りて、詠める) 道因法師

大堰川 流れて落つる 紅葉かな 誘ふは峰の 嵐のみかは (千載・秋下・三七一)

題知らず

空人法師

大堰川 戸無瀬の滝に 身を投げて 早くと人に 言はせてしがな (千載・雑中・一一四三)

千五百番の歌合に 皇太后宮大夫俊成

大堰川 簀射し行く 鵜飼舟 幾瀬に夏の 夜を明かすらんむ (新古今・夏・二五三)

(後冷泉院御時、上の男ども大井河に罷りて、

紅葉浮水と言へる心を、詠み侍りけるに)

大納言経信

散り掛かる 紅葉流れぬ 大堰川 いづれ井堰の 水の柵 (新古今・冬・五五五)

大井河に罷りて、落葉満水と言へる心を、詠み侍りける

藤原家経朝臣

高瀬舟 繁吹くばかりに 紅葉葉の 流れて下る 大堰川かな (新古今・冬・五五六)

(題知らず)

清原元輔

大堰川 井堰の水の 邂逅に 今日頼めし 暮れにやはあらぬ (新古今・恋三・一一九四)

(後朱雀院御時、上の男ども大井河に罷りて、
紅葉浮水と言へる心を、詠み侍りけるに、中将
に侍りける時)

九条太政大臣

大堰川 浮かぶ紅葉の 錦をば 波の心に 任せてや立つ

(新勅撰・冬・三七〇)

後冷泉院御時、殿上の逍遙に、同じ心(紅葉浮水)を、

詠み侍りける)

中納言資綱

紅葉葉の 流れも遣らぬ 大堰川 川瀬は波の 音にこそ聞け

(新勅撰・冬・三七一)

承保三年、大井河に行幸の日、詠み侍りける 大宮右大臣

大堰川 古き御幸の 流れにて 戸無瀬の水も 今日ぞ澄みける

(新勅撰・賀・四七九)

(承保三年、大井河に行幸の日、詠み侍りける)

前中納言伊房

大堰川 今日の御幸の 験にや 千代に一度 澄み渡るらん

(新勅撰・賀・四八〇)

今日と頼めける女に、遣はしける 実方朝臣

大堰川 井堰に淀む 水なれや 今日暮れ難き 嘆きをぞする

(新勅撰・恋三・七八三)

久安の百首の歌に、薰物 大炊御門右大臣

大堰川 下す筏の 隙ぞなき 落ち来る滝も 長閑けからねば

(新勅撰・雑五・一三五八)

延喜七年、大井河に行幸の時 坂上是則

紅葉葉の 落ちて流るる 大堰川 瀬々の柵 掛けも止めなん

(続後撰・冬・四七二)

名所の歌奉りける時

前中納言定家

大堰川 稀の御幸に 年経ぬる 紅葉の舟路 跡はありけり

(続後撰・冬・四七三)

家の百首の歌詠み侍りけるに 洞院撰政左大臣

大堰川 風の柵 掛けてけり 紅葉の筏 行き遣らぬまで

(続後撰・冬・四七四)

承保三年十月、大井河に行幸の日、序奉りて 土御門右大臣

大堰川 常より異に 見ゆるかな 君が御幸を 待つにぞありける (続後撰・賀・一三五七)

承久二年十月、光明峰寺入道前撰政、大井川の紅葉

見に罷りて侍りけるに、遣はされける 順徳院御製

大堰川 紅葉の色は 変はるとも 古き流れの 跡は見ゆらん (続古今・冬・五六六)

(題知らず) (読人知らず)

大堰川 井堰を越えて 行く水の 絶えずもものを 思ふ頃かな (続古今・恋一・一〇四五)

題知らず

中務

大堰川 底にも見ゆる 亀山の 変らぬ影は 幾世経ぬらん (続古今・雑中・一六六三)

承保二年二月、大井川行幸に仕うまつりて、詠み侍りける

前中納言匡房

大堰川 千代に一度 澄む水の 今日御幸に 逢ひにけるかな (続古今・賀・一八九三)

人々題を探りて歌仕うまつりし次に、落葉浮水と

言へる心を 太上天皇

大堰川 井堰に秋の 色留めて 紅葉括る 瀬瀬の岩波 (続拾遺・冬・三九八)

名所の歌奉りけるに

源具親朝臣

紅葉葉の 古りにし世より 大堰川 絶えぬ御幸の 跡を見るかな (続拾遺・冬・三九九)

後嵯峨院の御事後、亀山殿にて、詠ませ給うける

法皇御製

大堰川 行く瀬の波も 同じくは 昔に返れ 君が影見ん (新後撰・雑下・一五三〇)

弘安元年、百首の歌奉りし時 入道前太政大臣

水上も 末も遙けし 大堰川 君住む宿の 絶えぬ流れに (新後撰・賀・一五九四)

名所の歌の中に、大井河 皇太后宮大夫俊成

大堰川 岩波早く 春暮れて 筏の床に 夏ぞ来にける (玉葉・夏・二九七)

(夏の歌として) 権大納言公雄

五月雨に 浮き木流れて 大堰川 下す筏の 数ぞ添ひぬる (玉葉・夏・三六一)

同じ心(鵜河)を 龜山院御製

大堰川 鵜舟の篝 仄見えて 下すや波の 寄るぞ知らるる (玉葉・夏・三七八)

大井河逍遙に、人に代はりて、詠める 俊頼朝臣

戸無瀬より 流す錦は 大堰川 筏に積める 木の葉なりけり (玉葉・冬・八七八)

弘長の百首の歌に、落葉を 常磐井入道前太政大臣

大堰川 秋の名残を 訪ぬれば 入江の水に 沈む紅葉葉 (玉葉・冬・八八三)

題知らず 中務卿宗尊親王

大堰川 洲崎の葦は 埋もれて 波に浮きたる 雪の一群 (玉葉・冬・九七一)

(鵜川を) 入道前太政大臣

大堰川 鵜舟下せる 暁の 月は空にぞ 射し昇りける (続千載・夏・三〇一)

(嘉元の百首の歌奉りし時、同じ心(蛭)を) 贈従三位為子

大堰川 空に燃ゆるや 篝火に あらぬ蛭の 思ひなるらん (続千載・夏・三一一)

河月を 平維貞

大堰川 氷も秋は 岩越えて 月に流るる 水の白波 (続千載・秋下・四八四)

題知らず 清原元輔

紅葉葉の 散り来る秋は 大堰川 渡る淵瀬も 見えずぞありける (続千載・秋下・五八〇)

永仁元年、龜山殿の十首の歌に、川上暮水 左大臣

大堰川 流れて早き 木の葉にも 止まらぬ秋の 色は見えけり (続千載・秋下・五八六)

(永仁元年、龜山殿の十首の歌に、川上暮水) 従三位師行

筏師よ 秋の名残の 大堰川 この暮れ暫し 急がずもがな (続千載・秋下・五八七)

久安の百首の歌奉りける長歌 花園左大臣家小大進

君が代は 行末待つに… 取れども絶えず 大堰川 万代を経て… (続千載・雑体・七一一)

弘長の百首の歌奉りし時、同じ心(五月雨)を 前大納言為家

大堰川 音増さるなり 居る雲の 小倉の山の 五月雨の頃 (続後拾遺・夏・二一〇)

四条太皇太后宮歌合に 権大納言長家

大堰川 滝つ瀬もなく 秋暮れて 紅葉の淵と なりにけるかな (続後拾遺・秋下・四〇四)

寛治五年十月、大井河に御幸ありて、落葉満水と言ふ 白河院御製

大堰川 井堰に止まる 紅葉葉は 立ち来る波に 流れぬるかな (続後拾遺・冬・四二三)

事を、詠ませ給うける 寂蓮法師

大堰川 井堰の水や 凍るらん 早瀬に鴛鴦の 声下るなり (続後拾遺・冬・四六九)

題知らず 中務卿宗尊親王

大堰川 鵜舟はそれと 見え分かで 山本巡る 篝火の影 (風雅・夏・三七二)

河霧を、詠み侍りける 前大納言為兼

朝嵐の 峰より下す 大堰川 浮きたる霧も 流れてぞ行く (風雅・秋下・六六六)

人々誘ひて大井川に罷りて、紅葉臨水と言ふ事を、

詠み侍りける

権大納言長家

大堰川 山の紅葉を 移しもて 唐紅の 波ぞ立ちける

(風雅・秋下・六八三)

十月一日、大井に罷りて、これか歌詠みけるに 前大納言公任

落ち積もる 紅葉葉見れば 大堰川 井堰に止まる 秋にぞありける

(風雅・冬・七二五)

弘長二年、嵯峨にて、十首の歌講ぜられける次に、河落葉

後嵯峨院御製

我が宿の 物なりながら 大堰川 堰きも止めず 行く木の葉かな

(風雅・冬・七五三)

冬の歌の中に 前関白左大臣基

分きてなほ 凍りやうらん 大堰川 冴ゆる嵐の 山陰にして

(風雅・冬・七九五)

題知らず 前大納言為兼

大堰川 遙かに見ゆる 橋の上に 行く人凄し 雨の夕暮れ

(風雅・雑中・一七三〇)

性助法親王家の五十首の歌に 前大納言為氏

大堰川 山本下る 篝火の 映りも敢へず 明くる短夜

(新千載・夏・二九一)

前中納言匡房家の歌合に、納涼 読人知らず

大堰川 未だ夏ながら 涼しきは 井堰に秋や 漏りて来つらん

(新千載・夏・三〇四)

元亨三年八月十五夜、後宇多院に、月の五十首の

歌召されける時、秋月 前大納言為世

大堰川 清かに映る 秋の夜の 月の氷に 掛かる白波

(新千載・秋上・四三八)

建保二年、内裏の歌合に 大蔵卿有家

大堰川 下は桂の 紅葉葉も 一つ嵐の 山の秋風

(新千載・秋下・五六〇)

寛喜元年、女御入内屏風に紅葉ある所 従二位家隆

大堰川 紅葉の御舟 差し延へて 古き例に 返る秋かな

(新千載・秋下・五八六)

承保三年十月、大井河の逍遥に仕うまつりて、

詠みて奉りける

大納言経信

古への 跡を訪ねて 大堰川 紅葉の御舟 舟装ひせり

(新千載・冬・六二三)

大井に住み侍りける頃、花おもしろくなりなば、必ず

御覽せん、と帝仰言ありけるを、思し忘れて御座しま

さざりければ、奏し侍りける 藤原季綱

散りぬれば 悔しきものを 大堰川 岸の山吹 今日盛りなり

(新拾遺・春下・一七九)

文保三年、百首の歌奉りける時 中宮大夫公宗母

大堰川 瀬瀬の鵜舟の 数々に 浮きてぞ燃ゆる 篝火の影

(新拾遺・夏・二八三)

秋の月を、詠ませ給うける 土御門院御製

大堰川 下は桂の 月影に 磨きて落つる 瀬瀬の白玉

(新拾遺・秋上・四一二)

小一条院、大井河に御座しましける時、紅葉浮水と

言ふ事を 大納言斉信

秋深く なり行く時は 大堰川 波の花さへ 紅葉しにけり

(新拾遺・秋下・五四二)

題知らず 殷富門院大輔

水上に 風渡るらし 大堰川 紅葉を結ぶ 滝の白糸

(新拾遺・冬・五八六)

承保三年、大井河に行幸の日、詠める 中納言祐家

大堰川 今日御幸に 紅葉葉も 流れ久しき 井堰にぞ見る

(新拾遺・冬・五八七)

寛治五年十月、白河殿、大井川に御幸せさせ給うて、

落葉満水と言ふ事を、詠ませ給うけるに、仕うまつり

ける 権中納言俊忠

大堰川 水の流れも 見えぬまで 散る紅葉葉の 浮かぶ今日かな (新拾遺・冬・五八八)
平兼盛が大井の家にて、冬の歌詠み侍りけるに

二条院女蔵人左近

大堰川 杣山風の 寒けきに 岩打つ波を 雪かとぞ見る (新拾遺・冬・六六九)

承保三年、大井河に行幸の日、詠める 式部卿敦賢親王

大堰川 水嵩や増さる 亀山の 千代の陰見る 御幸と思へば (新拾遺・賀・七〇九)

年来語らひける人の、この夕べ人の婿になるべし

と聞きて、筏を作りて、書きて遣はしける 馬内侍

大堰川 人目守らさぬ 今日やさは 杣の筏師 暮れを待つらむ (新拾遺・恋三・一一一二)

(同じ心(落葉)を)

前内大臣

大堰川 影見し水に 流るめり 誘ふ嵐の 山の紅葉葉 (新拾遺・雑上・一六七八)

河を、詠める 俊頼朝臣

大堰川 水沫逆巻く 岩淵に 立たむ筏の 過ぎ難の世や (新拾遺・雑中・一七五九)

文保三年、百首の歌奉りける時 権中納言公雄

大堰川 返らぬ水の 鶉飼舟 仕ふと思ひし 御代ぞ恋しき (新拾遺・雑下・一九二〇)

百首の歌奉りし時

従三位仲子

大堰川 桜を連れて 越す波に 堰くとも見えぬ 水の柵 (新後拾遺・春下・一二二)

文保三年、百首の歌奉りけるに 前大納言為世

大堰川 山本遠く 漕ぎ連れて 広瀬に並ぶ 篝火の影 (新後拾遺・夏・二四八)

首夏の心を

権律師桓輪

大堰川 春を止めぬ 柵に 花も昨日の 瀬瀬の白波 (新後拾遺・雑春・六五五)

文保の百首の歌奉りけるに

民部卿為藤

大堰川 瀬瀬の幾夜か 水馴れ棹 下す筏の 床の月影 (新後拾遺・雑秋・七四六)

百首の歌奉りし時、水

民部卿実遠

大堰川 井堰の波に 立つ鴨の 帰りに跡に また下りつつ (新後拾遺・雑秋・八〇六)

題知らず

読人知らず

大堰川 下す筏の 如何なれば 流れて終に 恋ひしかるらむ (新後拾遺・恋一・九九五)

深夜鶉川と言へる心を 後嵯峨院御製

傾けば 山陰暗き 大堰川 月にも下す 鶉舟なりけり (新統古今・夏・二九八)

大井河逍遙に、水上落葉と言ふ事を 修理大夫顕季

大堰川 紅深く 匂ふかな 小倉の山の 紅葉散るらし (新統古今・冬・六二九)

元亨三年、亀山殿の千首の歌に 式部卿邦省親王

大堰川 凍れる上は 消えやらで 雪に掛けたる 瀬瀬の柵 (新統古今・冬・七一一)

題知らず 大納言経信

大堰川 久しき事は 影映す 亀の尾山の 松ぞ知るらん (新統古今・賀・七八四)

【鏡山】(近江)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……三五例

(題知らず)

(読人知らず)

鏡山 いざ立ち寄りて 見て行かむ 年経ぬる身は 老いやしぬると (古今・雑上・八九九)
(返し物の歌) 大伴黒主

近江のや 鏡の山を 立てたれば 予てぞ見ゆる 君が千歳は

これは、今上の御嘗の近江の歌。

(古今・神遊・一〇八六)

鏡山を越ゆとて

素性法師

鏡山 山搔き曇り 時雨るれど 紅葉明かくぞ 秋は見えける

(後撰・秋下・三九三)

(題知らず)

貫之

うち群れて いざ我妹子が 鏡山 越えて紅葉の 散らん影見む
ある所に、近江と言ふ人をいと忍びて語らひ侍りけるを、
夜明けて帰りけるを人見て囁きければ、その女の許に、
遣はしける 坂上常景

(後撰・秋下・四〇五)

鏡山 明けて来つれば 秋霧の 今朝や立つらん 近江てふ名は

(後撰・恋四・八四三)

亭子院歌合に

坂上是則

花の色を 映し留めよ 鏡山 春より後の 影や見ゆると

(拾遺・春・七三)

鏡山

能宣

磨きける 心も著く 鏡山 曇りなき世に 逢ふが楽しさ

(拾遺・神楽・六〇六)

鏡山

中務

万代を 明らけく見む 鏡山 千歳の程は 塵も曇らじ

(拾遺・神楽・六一三)

正月ばかり近江へ罷りけるに、鏡山にて雨に遭ひて、

詠み侍りける

惠慶法師

鏡山 越ゆる今日しも 春雨の 搔き曇りやは 降るべかりける

(後拾遺・羈旅・五一〇)

山桜をもて遊ぶと言へる事を、詠める 大弐長夷

鏡山 移ろふ花を 見てしより 面影にのみ 立ちぬ日ぞなき

(金葉・春・四五)

鏡山 峰より出づる 月なれば 曇る世もなき 影をこそ見れ

(金葉・秋・一九六)

百首の歌奉りける時、春の歌とて、詠める 前参議親隆

鏡山 光は花の 見せければ 散り積みてこそ 寂しかりけれ

(千載・春下・一〇五)

久寿二年、大嘗会悠紀屏風に、近江国鏡の山を、

詠める

宮内卿永範

曇りなき 鏡の山の 月を見て 明らけき世を 空に知るかな

(新古今・賀・七五二)

仁安三年、悠紀風俗歌

宮内卿永範

天地を 照らす鏡の 山なれば 久しかるべき 影ぞ見えける

(新勅撰・賀・四八五)

山に登り侍りける道にて、月を見て、詠み侍りける

前大僧正慈円

大嶽の 峰吹く風に 霧はれて 鏡の山に 月ぞ曇らぬ

(新勅撰・雑四・一三〇五)

九月十三夜、十首の歌合に、名所月 祝部成茂

神も見よ 曇りなき世の 鏡山 祈る甲斐ある 月ぞ明けき

(続後撰・賀・一三六三)

鏡山

(前中納言匡房)

曇りなき 君が御代には 鏡山 長閑けき月の 影も見えけり

(続後撰・賀・一三六七)

日吉社に詠みて奉りける歌合に 正三位知家

今はまた 雪と降りつつ 鏡山 見しには変はる 花の影かな

(続古今・春下・一三六)

老後述懐と言ふ事を

徳大寺左大臣

老いらくの 鏡の山 面影は 頂く雪の 色や添ふら

(続拾遺・雑中・一一一六)

月の明かかりける夜、鏡の山を越ゆとて、

詠み侍りける

前参議雅有

立ち寄れば 月にぞ見ゆる 鏡山 偲ぶ都の 夜半の面影
題知らず 法眼源承 (新後撰・羈旅・五六八)

曇りなき 神の御宝に 影添へて 向かふ鏡の 山の端の月
(冬の歌の中に) 前大僧正実超 (新後撰・神祇・七五〇)

暫しこそ 時雨れて曇れ 浮き雲の 跡は鏡の 山の端の月
嘉元の百首の歌奉りし時、歳暮 二品法親王覚助 (続千載・冬・六〇四)

鏡山 見てももの憂き 霜雪の 重なるままに 暮るる年かな
弘安の百首の歌奉りける時 前大納言経任 (続千載・雑上・一八一〇)

二代まで 君が近江の 鏡山 心曇らば 如何が見るべき
村上御時、天慶九年、大嘗会悠紀方の 前大納言経任 (続千載・雑中・一九一八)

巳日参入音声、鏡山を、詠める
読人知らず (続千載・賀・二一四二)

我が君の 千歳の陰を 鏡山 豊明に 見るが楽しき
後鳥羽院御時、五人に二十首の歌を召して百首に書き
なされける時、祝の歌 如願法師 (風雅・賀・二二〇一)

逢ひ難き 御代に近江の 鏡山 曇りなしとは 人も見るらむ
暦応元年、大嘗会悠紀方神楽歌、近江国鏡山 正二位隆教 (風雅・賀・二二〇一)

岩戸開けし 八咫の鏡の 山鬘 掛けて現しき 明らけき代は
湖上水鳥を 中納言為藤 (風雅・賀・二二一一)

鴉鳥は 尾ろの端つ尾に あらねども 鏡の山の 陰に鳴くなり
藤原景綱、東に帰り下り侍りし時、鏡の宿へ、 前大納言為世 (新拾遺・冬・六一三)

遣はし侍りける
言の葉に 歎くとは見よ 鏡山 慕ふ心に 影はなくとも 前大納言為世 (新拾遺・離別・七五七)

宝治の百首の歌奉りける時、同じ心(湖月)を
安嘉門院高倉 (新拾遺・離別・七五七)

鏡山 曇らぬ秋の 月なれば 光を磨く 志賀の浦波
百首の歌奉りし時 前関白近衛 安嘉門院高倉 (新後拾遺・秋下・三九〇)

山の名を 分きて言はじ 月影の 鴉照る海も 鏡なりけり
(月の歌の中に) 山階入道前左大臣 前関白近衛 (新後拾遺・秋下・三九一)

曇りなき 月も真澄みの 鏡山 名に現はれて 見ゆる夜半かな
嘉元の百首の歌に 贈従三位為子 (新統古今・秋上・四六〇)

雪降れば 予てぞ見ゆる 鏡山 散り交ふ花の 春も面影
恋の歌の中に 源経氏 (新統古今・冬・七〇三)

鏡山 年経ぬる身に なりにけり 移りし中に もの思ふとて
弘安の百首の歌奉りける時 前大僧正隆弁 (新統古今・恋四・一四四六)

立ち返り またこそ見つけ 鏡山 つれなき老いの 影を残して
(新統古今・雑中・一九五一)

【笠取山】(山城)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……六例

秋の歌とて、詠める

在原元方

時雨れど 露も漏らじと 笠取の 山は如何でか 紅葉染めけむ

(古今・秋下・二六一)

是貞親王家の歌合に、詠める

忠岑

雨降れば 笠取山の 紅葉葉は 行き交ふ人の 袖さへぞ照る

(古今・秋下・二六三)

宗于朝臣の女、陸奥国へ下りけるに

(読人知らず)

如何でなほ 笠取山に 身をなして 露けき旅に 添はんとぞ思ふ

(後撰・離別・一三二五)

返し

(読人知らず)

笠取の 山と頼みし 君を置きて 涙の雨に 濡れつつぞ行く

(後撰・離別・一三二六)

(題知らず)

(読人知らず)

笠取の 山に世を経る 身にしあれば 炭焼きも居る 我が心かな

(金葉・恋下・四九七)

均子内親王、裳着侍りけるに、尚侍淑子贈り侍りける

屏風に、笠取山の辺を人行く程に、時雨のするに、袖

を被きたる所

大中臣頼基朝臣歟

笠取の 山を頼みし 甲斐もなく 時雨に袖を 濡らしてぞ行く

(風雅・冬・七四四)

【春日野】 (大和)

●玄々集……一例

若菜

春日野に 多くと年を つみつれど 老せぬものは 若菜なりけり

(円融院・一)

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……八六例

(題知らず)

読人知らず

春日野は 今日はな焼きそ 若草の 夫も籠もれり 我も籠もれり

(古今・春上・一七)

(題知らず)

(読人知らず)

春日野の 飛火の野守 出でて見よ 今幾日ありて 若菜摘みてむ

(古今・春上・一八)

歌奉れと仰せられし時、詠みて奉れる

貫之

春日野の 若菜摘みにや 白妙の 袖ふり延へて 人の行くらむ

(古今・春上・二二)

尚侍の、右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の

絵描ける後の屏風に、書きたりける歌

素性法師

春日野に 若菜摘みつつ 万代を 祝ふ心は 袖ぞ知るらむ

(古今・賀・三五七)

春日祭に罷りける時に、物見に出でたりける女の許に家を

訪ねて、遣はせりける

壬生忠岑

春日野の 雪間を分けて 生ひ出で来る 草の僅かに 見えし君はも

(古今・恋一・四七八)

題知らず

(読人知らず)

霞立つ 春日の野辺の 若菜にも なり見てしがな 人も摘むやと

(後撰・春上・八)

師走ばかりに、大和へ事につきて罷りける程に、宿りて

侍りける人の家の女を思ひかけて侍りけれど、止む事な

き事に依りて、罷り上りけり。翌春親の許に、遣はしける

躬恒

春日野に 生ふる若菜を 見てしより 心を常に 思ひ遣るかな

(後撰・春上・一三)

女の宮仕に罷り出でて侍りけるに、珍しき程は、

これかれもの言ひなどし侍りけるを、程もなく一

人に逢ひ侍りにければ、睦月の朔日ばかりに、言

ひ遣はしける

読人知らず

何時の間に 霞たつらん 春日野の 雲だに溶けぬ 冬と見しまに

(後撰・春上・一五)

返し

(読人知らず)

春日野の 飛火の野守 見しものを

なき名と言はば

罪もこそ得れ (後撰・恋二・六六三)

若菜を御覧じて

円融院御製

春日野に 多くの年は 積みつれど 老いせぬものは 若菜なりけり

(拾遺・春・二〇)

人にも言ふと聞きて、訪はざりける男の許に 中宮内侍

春日野の 萩の焼原 漁るとも 見えぬなき名を 負ほすなるかな

(拾遺・雑春・一〇二〇)

京極御息所の春日に詣で侍りける時、国司の奉り

ける歌数多ありける中に

藤原忠房朝臣

鶯の 鳴きつるなへに 春日野の 今日御幸を 花とこそ見れ

(拾遺・雑春・一〇四四)

(京極御息所の春日に詣で侍りける時、国司の

奉りける歌数多ありける中に) (藤原忠房朝臣)

春霞 春日の野辺に 立ち渡り 満ちても見ゆる 都人かな

(拾遺・雑春・一〇四六)

題知らず

大中臣能宣朝臣

白雪の また古里の 春日野に いざうち払ひ 若菜摘みてん

(後拾遺・春上・三四)

(題知らず)

和泉式部

春日野は 雪のみ積むと 見しかども 生ひ出づるものは 若菜なりけり

(後拾遺・春上・三五)

同じ女(道綱母)に

入道摂政

春日野は 名のみなりけり 我が身こそ 飛火ならねど 燃え渡りけれ

(後拾遺・恋四・八二四)

返し

前大納言公任

身を掴みて 覚束なきは 雪止まぬ 春日の野辺の 若菜なりけり

(後拾遺・雑五・一一一三)

子日の心を、詠める

大中臣公長朝臣

春日野の 子の日の松は 引かでこそ 神寂びゆかん 陰に隠れめ

(金葉・春・二二)

冷泉院、春宮と申しける時、百首の歌奉りけるに、

詠める

源重之

春日野に 朝鳴く雉子の 羽根音は 雪の消え間に 若菜摘めとや

(詞花・春・六)

堀河院御時、百首の歌奉りける時、若菜の歌とて、

詠める

源俊頼朝臣

春日野の 雪のを若菜に 摘み添へて 今日さへ袖の 萎れぬるかな

(千載・春上・一四)

堀河院御時、百首の歌奉りける時、残雪の心を、

詠み侍りける

権中納言国信

春日野の 下萌え渡る 草の上に つれなく見ゆる 春の淡雪

(新古今・春上・一〇)

天曆御時の屏風歌

壬生忠岑

春日野の 草は緑に なりにけり 若菜摘まむと 誰れか標めけむ

(新古今・春上・一二)

崇徳院に百首の歌奉りける時、春の歌 前参議教長

若菜摘む 袖とぞ見ゆる 春日野の 飛火の野辺の 雪の斑消え

(新古今・春上・一三)

(題知らず)

壬生忠岑

焼かずとも 草は燃えなむ 春日野を ただ春の日に 任せたらなん (新古今・春上・七八)

女に、遣はしける

在原業平朝臣

春日野の 若紫の 摺り衣 信夫の乱れ 限り知られず

(新古今・恋一・九九四)

(家に百首の歌詠み侍りける時、神祇の心を)

皇太后宮大夫俊成

春日野の 荊棘の道の 埋れ水 末だに神の 驗現はせ

(新古今・神祇・一八九八)

若草を、詠み侍りける 入道二品親王道助

春日野に 未だ萌え遣らぬ わかくさの 煙短き 荻の焼原

(新勅撰・雑一・一〇二六)

(題知らず)

鶯の 羽風を寒み 春日野の 霞の衣 今は立つらん

(続後撰・春上・一七)

鳥羽殿八月十五夜歌合に、野草花 前太政大臣

置く露も あはれは掛けよ 春日野に 残る古枝の 秋萩の花

(続後撰・秋上・二八六)

同〈延喜〉二十一年、京極御息所、春日の社に詣で侍り

ける日、大和の国司に代はりて、詠める 躬恒

年毎に 若菜摘みつつ 春日野の 野守も今日や 春を知るらん (続後撰・雑上・一〇三二)

春の御歌の中に 順徳院御製

春日野や 未だ霜枯れの 春風に 青葉少なき 荻の焼原

(続古今・春上・一六)

(題知らず) 式部卿真楯

春日野に 時雨降る見ゆ 明日よりは 紅葉挿頭さん 高円の山

(続古今・秋下・五二三)

遣唐使にて罷り渡らんとし侍りける頃、春日祭の日、

詠み侍りける 参議清河

春日野に 祝ふ御室の 梅の花 咲きつつ待てや 帰り来るまで

(続古今・神祇・七一七)

後一条院、春日行幸の日、上東門院へ奉りける 法成寺入道前摂政太政大臣

当時や 祈り置きけん 春日野の 同じ道にも 訪ね行くかな

(続古今・神祇・七一八)

建保三年、百首の御歌の中に、去年の行幸の事を思し

召し出でて、詠ませ給ひける 順徳院御製

春日野や 去年の弥生の 花の香に 染めし心は 神ぞ知るらん

(続古今・神祇・七二一)

述懐の百首の歌詠み侍りける時 皇太后宮大夫俊成

春日野の 松の古枝の 哀しきは 子の日に逢へど 引く人もなし

(続古今・雑上・一四八七)

野径雪と言ふ心を、詠み侍りける 左近中将師良

春日野に 古りにし代代の 跡求めて 雪踏み分くる 道を知らばや (続拾遺・雑秋・六五五)

(題知らず) 前僧正公朝

春日野の 野守の鏡 これなれや 外に三笠の 山の端の月 (新後撰・秋下・三五二)

神祇の歌の中に 前太政大臣

過ぎ行けど 忘れぬものを 春日野の 荊棘に余る 雪の恵みは (新後撰・神祇・七二九)

(題知らず) 前関白太政大臣

忘れめや 春日の野辺に 黒木もて 作れる宿の 軒の藤波 (新後撰・雑上・一二六四)

野外雪を 按察使実泰

過ぎ来つる 跡に任せん 春日野の 荊棘の道は 雪深くとも (新後撰・雑上・一三三八)

(子の日の心を) 院御製

春日野の 子の日の松に 契り置かん 神に惹かれて 千代経べき身は

(新後撰・賀・一五七四)

宝治二年、後嵯峨院に百首の歌奉りける時、同じ心
〈若草〉を 常磐井入道前太政大臣

春日野に まだうら若き さいたづま 夫籠るつも 言ふ人やなき (玉葉・春上・一七)

秋の歌とて 藤原冬綱朝臣

露分くる 木の下遠き 春日野の 尾花が中に 小雄鹿の声 (玉葉・秋上・五六三)

正月七日、若菜に付けて、常磐井入道前太政大臣の許へ、
遣はされける 月花門院

春日野の 子の日の松に 惹かれ来て 年は積むとも 若菜ならなん (玉葉・賀・一〇四七)

題知らず 女御徽子女王

春日野の 雪の下草 人知れず 訪ふ日ありやと 我ぞ待ちつ (玉葉・恋二・一四二五)

題知らず 詠人知らず

春日野に 浅茅が上に 思ふどち 遊ぶ今日をば 忘れめやも (玉葉・雑二・二〇六一)

春日社に奉りける百首の歌の中に、野を

春日野は 子の日若菜の 春の跡 都の嵯峨は 秋萩の時 (玉葉・雑二・二〇六二)

(釈教の心を) 権僧正覚円

終夜 法を手向くる 我が袖の 涙に宿る 春日野の月 (玉葉・釈教・二六九一)

年久しく籠り居て後、弘長元年、また関白の

詔蒙ぶりて、詠み侍りける 普光園入道前関白左大臣 (玉葉・神祇・二七五七)

霜枯れし 春日の野辺の 草の葉も 神の恵みに また栄へけり

正治二年、後鳥羽院に百首の歌奉りける時 後京極摂政前太政大臣 (続千載・春上・二一)

春日野の 草の僅かに 雪消えて まだうら若き 鶯の声 (続千載・春上・三三)

謙徳公家の屏風に、春日野に若菜摘める所を、

詠みける 大中臣能宣朝臣 (続千載・春上・三三)

新しき 春来る毎に 古里の 春日の野辺に 若菜をぞ摘む

野萩を 藤原為貞朝臣 (続千載・秋上・三八九)

袖にこそ 乱れて初めけれ 春日野の 若紫の 萩が花摺り

睦月七日、をかしき踏みども人々の許に見ゆるに、身には

さもなければ 祐子内親王家紀伊 (続千載・春下・一五一)

春立つと 聞くにつけても 春日野の 若菜をなどか 人の忘るる (続千載・雑体・七三七)

堀河院に百首の歌奉りける時、早蕨 大納言禁公実

春日野の 草葉は焼くと 見えなくに 下萌え渡る 春の早蕨 (続後拾遺・春上・五八)

(百首の歌奉りし時) 御製

春日野の 若紫の 初草も 変はらぬ色に 咲ける藤波 (続後拾遺・春下・一五一)

秋の歌の中に 前大僧正良信

秋を経て 聞きぞ馴れぬる 春日野は 我が宿近き 小雄鹿の声 (続後拾遺・秋上・二九七)

一条院御時の例にて、後一条院春日社に行幸あり

ける時、上東門院同じく参らせ給うけるに、法の

同じ道にも訪ね行くかな、と申して侍りければ

上東門院

曇りなき 世の光にや 春日野の 同じ道にも 訪ね行くらむ (続後拾遺・神祇・一三二二)

神祇を

前大納言為家

春日野の 昔の跡の 埋れ水 如何でか神の 思ひ出でけん (続後拾遺・神祇・一三二三)

(題知らず)

源俊頼朝臣

春日野の 雪の斑消え 搔き分けて 誰が為摘める 若菜なるらん (風雅・春上・一五)

(題知らず)

人麿

見渡せば 春日の野辺に 霞立ち 開くる花は 桜花かも (風雅・雑中・一四八)

野鹿を

前大僧正範憲

幾秋の 涙誘ひつ 春日野や 聞き手馴れぬる 小雄鹿の声 (風雅・秋上・五二〇)

寒草を、詠める

前大納言実教

古り果つる 我をも捨つな 春日野や 荆棘が道の 霜の下草 (風雅・冬・七七〇)

秋述懐と言ふ事を

前中納言為相

春日野に 秋鳴く鹿も 導せよ 教へし道の 埋もるる身を (風雅・雑五・一五三九)

建保三年、内裏の詩歌合に、野外霞

参議雅経

春日野の 雪間の草の 摺り衣 霞の乱れ 春風ぞ吹く (新千載・春上・九)

題知らず

誑人知らず

昨日こそ 焼くとは見しか 春日野に 何時しか今日は 若菜摘みつつ (新千載・春上・三四)

元亨四年、後宇多院にて十首の歌講ぜられける時、

(新千載・春上・三四)

若菜

後山本前左大臣

雨露の 恵み変はらで 春日野に 多くの春の 若菜摘みつつ (新千載・春上・三六)

題知らず

誑人知らず

春日野の 藤は散り行く 何をかは 御狩の人の 折りて挿頭さん (新千載・春下・一八〇)

延喜二十一年、京極御息所春日社に詣で侍り

(新千載・春下・一八〇)

ける日、大和の国司に代はりて、詠める 躬恒

古里の 春日の野辺の 草も木も 二度春に 逢ふと知らな

(新千載・神祇・九八〇)

(元弘三年、立后月次屏風に、春日祭の儀式ある所を)

誰人も 今日踏み分けて 春日野や 道ある御代に 神祭るなり

等持院贈左大臣

百首の歌奉りし時、鹿の歌 前関白 (新千載・神祇・九八三)

小雄鹿の 起き伏し分かず 仕へ来て 春日野野辺に 秋も経にけり

(新千載・神祇・九八三)

承久元年、内裏の十首の歌合に、野徑霞

(新千載・神祇・九八五)

春日野の 霞の衣 山風に 信夫鍬摺り 乱れてぞ行く

(新千載・神祇・九八五)

(嘉元の百首の歌奉りける時、同じ心《若菜》を)

(新千載・神祇・九八五)

春日野の 春めきにけり 白雪の 消えずはありとも 若菜摘みてん

(新拾遺・春上・四四)

(秋の歌の中に)

前中納言定家

春日野に 朝居る雲の 跡もなく 暮るれば澄める 秋の夜の月

(新拾遺・秋下・四二七)

(神祇を)

前大納言経継

春日野の 松も我が身も 老いにけり 二葉よりこそ 仕へ初めしか

(新拾遺・神祇・一四一六)

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

月を、詠める

前中納言定資

春日野や 雲らぬ月の 影なれば 荆棘の道の 跡も迷はず
(新拾遺・雑上・一六四一)
(題知らず) 前大納言良冬

徒に 老いにけるかな 春日野に 引く人もなき 森の 下草
(新拾遺・雑中・一八八三)
(題知らず) 伊勢

春霞 立ちての後に 見渡せば 春日の小野は み雪寒けし
(新後拾遺・春上・一三)
(若菜を、詠み侍りける) 大中能宣朝臣

春日野の 若菜も今は 萌ゆらめど 人には見せず 雪ぞ降り積む
(新後拾遺・春上・二四)
弘長の百首の歌奉りける時 前大納言為氏

誰れかまた 雪間を分けて 春日野の 草の僅かに 若菜摘むらん
(新後拾遺・春上・二八)
(題知らず) 三善為連

今日もなほ 若菜摘まばや 春日野の 昨日の雪は いとど消ゆらん
(新後拾遺・雑春・五八八)

題知らず

清原深養父

春日野に 今日もみ雪の 降り頗くは 雪路に春や 未だ来ざるらん
(新統古今・春上・五)

延文二年、百首の歌に、若菜を、詠める 前大納言実名

春日野や 同じ荆棘の 道にのみ 若菜を我も 年を摘みつつ
(新統古今・雑上・一六二〇)

擣衣を 紀俊豊朝臣

萩が花 移ろふ頃や 春日野の 若紫の 衣擣つらむ
(新統古今・雑上・一七四二)

寒草を 法印慶運

春日野の 雪間にだにも 萌え出でし 草葉ぞ霜に 敢へず枯れぬる
(新統古今・雑上・一七七二)

皇太后宮大夫俊成、春日野の荆棘の道の埋れ水、

と詠み侍りける事を思ひて、詠める 権大納言遠

末だにと 言ひし契りを 春日野の 驚かしてや 神の祈らん
(新統古今・神祇・二一〇六)

【霞の浦】 (常陸)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……六例

名所の百首の歌奉りける時 前中納言定家

春霞 霞の浦を 行く舟の 外にも見えぬ 人を恋ひつつ
(新後撰・恋一・七八九)

名所の百首の歌召しける次に 順徳院御製

仄かにも 知らせてけりな 東なる 霞の浦の 海人の漁火
(新後撰・恋一・八五二)

名所の百首の歌奉りける時 僧正行意

立ち迷ふ 霞の浦の 夕煙 それとも外に 知る人ぞなき
(新千載・恋一・一一一一)

(寄煙恋) 権中納言経重

共にさて 浮名や立たむ 東なる 霞の浦の 煙ならねど
(新後拾遺・恋一・九六五)

寄舟恋と言ふ事を、詠ませ給うける 今上御製

知られじと 霞の浦に 漕ぐ舟の 仄かに通ふ 心ありとも
(新統古今・恋一・一〇四一)

宝篋院贈左大臣家にて、人々三首の歌詠み侍りけるに、

海辺霞を 従三位雅家

春来ては 海人の藻塩の 煙まで 霞の浦の 名にや立つらむ
(新統古今・雑七・一六一四)

【片岡(野)】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…一例

(木の葉)

夏の日 陰にすずみし 片岡の ははそは秋ぞ 色づきにける

(九五)

●勅撰和歌集…八例

題知らず

読人知らず

霧立ちて 雁ぞ鳴くなる 片岡の 朝の原は 紅葉しぬらむ

(古今・秋下・二五二)

題知らず

人麿

明日からは 若菜摘まむと 片岡の 朝の原は 今日ぞ焼くめる

(拾遺・春・一八)

屏風絵に、鳥多く群れ居て、旅人の眺望する所を、

詠める

藤原長能

狩に來ば 行きても見まし 片岡の 朝の原は 雉子鳴くなり

(後拾遺・春上・四七)

(堀河院御時、百首の歌奉りける時、春雨の心を、

詠める)

藤原基俊

春雨の 降り初めしより 片岡の 裾野の原ぞ 浅緑なる

(千載・春上・三二)

題知らず

前大納言家

片岡の 朝の原の 雪消えて 草は緑に 春雨ぞ降る

(続後撰・雑中・六六)

岡若菜を

光明峰寺入道前摂政左大臣

若菜摘む 衣手濡れて 片岡の 朝の原に 淡雪ぞふる

(新後撰・春上・二五)

秋の歌の中に

従三位為繼

秋草の 色付く見れば 片岡の 朝の原に 鹿ぞ鳴くなる

(続千載・秋上・三九九)

原寒草と言ふ事を、詠める

藤原基任

冬枯れに 残る草葉も 片岡の 朝の原は 霜さやぐなり

(続後拾遺・冬・四三九)

【桂川】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

為政朝臣、石清水臨時祭使に侍りける年、舞人にて

歸りて、またの日、挿頭の花に挿して、遣はしける

実方朝臣

桂川 挿頭の花の 影見えし 昨日の淵ぞ 今日ほ恋ひしき

(続後撰・雑上・一〇四四)

文永二年九月十三夜、仙洞の五首の歌合に、

河月

山階入道前左大臣

久方の 天照る月の 桂川 秋の今夜の 名に流れつつ

(新千載・秋下・四九八)

【葛城山】(大和)

●玄々集……一例(葛城の神十岩橋)

岩橋の 夜の契りも 絶えぬべし 明くる侘びしき 葛城の神

(小大君・四一)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…四二例

古き大和舞の歌

楚結ぶ 葛城山に 降る雪の 間なく時なく 思ほゆるかな (古今・大歌所・一〇七〇)

(題知らず) 貫之

玉蔓 葛城山の 紅葉葉は 面影にのみ 見え渡るかな (後撰・秋下・三九一)

(題知らず) 読人知らず

足引きの 葛城山に 居る雲の 立ちても居ても 君をこそ思へ (拾遺・恋三・七七九)

女の許に、遣はしける文の端を引き破りて、返事を

せざりければ (読人知らず)

跡もなき 葛城山を 踏み見れば 我が渡し来し 片端かも (拾遺・雑賀・一一九九)

雪の歌とて、詠める 源俊頼朝臣

衣手の 冴え行くまに 楚結ふ 葛城山に 雪は降りつつ (金葉・冬・二八八)

法性寺入道前太政大臣家にて、潤底月と言へる

心を、詠み侍りける 源俊頼朝臣

照る月の 旅寝の床や 楚結ふ 葛城山の 谷川の水 (千載・秋上・三〇一)

紅葉の心を、詠み侍りける 仁和寺後入道法親王覺性

初時雨 降る程もなく 楚結ふ 葛城山は 色付きにけり (千載・秋下・三五三)

千五百番の歌合に、春の歌 藤原雅経

白雲の 絶え間に靡く 青柳の 葛城山に 春風ぞ吹く (新古今・春上・七四)

題知らず 柿本人麿

明日香川 紅葉葉流る 葛城の 山の秋風 吹きぞ頻くら (新古今・秋下・五四一)

(題知らず) 権中納言長方

明日香川 瀬々に波寄る 紅や 葛城山の 木枯らしの風 (新古今・秋下・五四二)

(春日社歌合に、落葉と言ふ事を、詠みて奉りし)

藤原雅経

移り行く 雲に嵐の 声すなり 散るか真拆の 葛城の山 (新古今・秋下・五六一)

春の歌とて、詠み侍りける 鎌倉右大臣

み冬次 春し来ぬれば 青柳の 葛城山に 霞棚引く (新勅撰・春上・三〇)

(冬の歌とて、詠み侍りける) (後京極摂政太政大臣)

楚結ふ 葛城山の 如何ならむ 都も雪は 間なく時なし (新勅撰・冬・四二二)

(入道前摂政家の歌合に、雪間花)

藤原隆祐朝臣

桜花 空に天霧る 白雲の 棚引き渡る 葛城の山 (続後撰・春中・七六)

千五百番歌合に 後京極摂政前太政大臣

外ながら 掛けてぞ思ふ 玉蔓 葛城山の 峰の白雲 (続後撰・恋二・七七二)

堀河院の百首の歌奉りける時、山を 権大納言公実

神寂ぶる 葛城山の 高ければ 朝居る雲の 晴るる間ぞなき (続後撰・雑上・一〇〇九)

(花の歌とて) 後堀河院民部卿典侍

外に見る 葛城山の 白雲に 風こそ匂へ 花や咲くらん (続古今・春上・八九)

建保四年、百首に 従二位家隆

桜花 咲きぬる時は 葛城の 山の姿に 掛かる白雲 (続古今・春上・九〇)

春山と言ふ事を 順徳院御製

白雲や 花より上に 掛かるらん 桜ぞ高き 葛城の山 (続古今・春上・九一)

洞院摂政家の百首の歌に、紅葉 西園寺入道前太政大臣

秋の色に 時雨れぬ松も なかりけり 這ふ木数多の 葛城の山 (続古今・秋下・五一九)

秋の歌の中に

従三位通氏

染めてけり 露より後も 楚結ふ 葛城山の 秋の紅葉葉

(続古今・秋下・五二四)

題知らず

従二位家隆

春来れば 桜こき混ぜ 青柳の 葛城山ぞ 錦なりける

(続拾遺・春下・七三)

文永五年九月十三夜、白川殿の五首の歌合に、

暮山紅葉

後嵯峨院宮内卿

時雨れ行く 雲の外なる 紅葉葉も 夕日に染むる 葛城の山

(続拾遺・秋下・三五四)

(冬の歌の中に)

平義宗

嵐吹く 峰の浮雲 絶え絶えに 時雨れて掛かる 葛城の山

(続拾遺・雑秋・六四一)

弘安元年、百首の歌奉りし時

前参議雅有

外に見し 雲もさながら 埋もれて 霞ぞ掛かる 葛城の山

(新後撰・春上・三二)

恋の歌の中に

式子内親王

知るらめや 葛城山に 居る雲の 立ち居に掛かる 我が心とは

(新後撰・恋一・七七九)

宝治の百首の歌奉りける時、山花

山階入道左大臣

乙女子が 葛城山の 桜花 心に掛けて 見ぬ時ぞなき

(続千載・春上・七四)

題知らず

藤原保能

見るままに 光も外に なりにけり 葛城山の 有明の月

(続千載・雑上・一七六六)

(題知らず)

丹波尚長朝臣

跡絶えして 外になりぬと 見る雲の また時雨れ来る 葛城の山

(続千載・雑上・一七八五)

(題知らず)

衣笠前内大臣

桜花 今か咲くらし 青柳の 葛城山に 雪ぞ掛かれる

(続後拾遺・春上・七〇)

名所の百首の歌奉りける時

皇太后宮大夫俊成女

峰高き 雲に桜の 花や散る 嵐ぞ薫る 葛城の山

(続後拾遺・春下・一一九)

恋の歌の中に

従二位家隆

青柳の 葛城山の 外ながら 君に心を 掛けぬ日はなし

(風雅・恋一・九七一)

早春の心を

後西園寺入道前太政大臣

未だ消えぬ 高嶺の深雪 春掛けて 霞みにけりな 葛城の山

(新千載・春上・四)

同じ心(花)を

前参議為秀

桜花 今盛りなり 久方の 雲に雲添ふ 葛城の山

(新拾遺・春下・一〇〇)

題知らず

壬生忠見

折り侘びて 帰らむものか 葛城の 山の桜は 雲居なりとも

(新拾遺・春下・一〇五)

(初秋の心を)

前中納言匡房

手弱女の 衣を薄み 秋や立つ 明日香に近き 葛城の山

(新拾遺・秋上・三一八)

題知らず

大蔵卿長綱

外に見し 雲や時雨れて 染めつらん 紅葉してけり 葛城の山

(新拾遺・秋下・五三〇)

百首の歌奉りし時、雪

前関白左大臣近衛

雲掛かる 葛城山に 降り初めて 外に積もらぬ 今朝の白雪

(新拾遺・雑上・一七一六)

題知らず

従二位家隆

明日香川 岩波高し 葛城の 山の白雪 今や消ぬらし

(新続古今・春上・四〇)

宝治二年、百首の歌奉りける時、初花

皇太后宮大夫俊成女

春も今は 花は桜の 時ぞとや 雲より匂ふ 葛城の山

(新続古今・春下・一二四)

同じ〈新玉津島〉社に奉りける百首の歌の中に

権中納言雅縁

雲の居る 葛城山の 五月雨に 木木の雫も 間なく時なし

(新統古今・夏・二九五)

後鳥羽院御時、秋撰歌合に 後久我太政大臣

吹く風に 下葉かつ散る 青柳の 葛城山に 秋は来にけり

(新統古今・秋上・三六〇)

【甲斐が嶺】(甲斐)

●玄々集……一例

いどみける女、甲斐守に逢ひぬ、と聞きて

甲斐が嶺を 見るとか聞けば まことにや よよをふりせぬ 佐夜の中山(藤原宣孝・四五)

●能因法師集……三例

甲斐にて、山梨の花を見て

甲斐がねに 咲きにけらしな 足曳の 山なし岡の 山なしの花 (四二)

なすべきことありて、また陸奥国へ下るに、はるかに

甲斐のしらねの見ゆるを見て

甲斐がねに 雪の降れるは 白雲か はるけきほどは 分きぞかねつる (一〇四)

(東国風俗五首)

みさかぢは 氷かしける 甲斐がねの さらなかさらす てづくりのこと (一二四)

●勅撰和歌集……七例

甲斐歌

甲斐が嶺を 明にも見しが 心なく 横ほり伏せる 佐夜の中山 (古今・東歌・一〇九七)

(甲斐歌)

甲斐が嶺を 嶺越し山越し 吹く風を 人にもがもや 言伝て遣らむ

(古今・東歌・一〇九八)

隆経朝臣、甲斐守にて侍りける時、便りに付けて

遣はしける

紀伊式部

何方と 甲斐の白嶺は 知らねども 雪降る毎に 思ひこそ遣れ (後拾遺・冬・四〇四)

神無月の頃、東の方へ罷りけるに、佐夜の中山にて、

時雨のしければ、詠める

蓮生法師

甲斐が嶺は 早雪白し 神無月 時雨れて越ゆる 佐夜の中山 (続後撰・羈旅・一三〇九)

(旅の歌とて、詠める)

大江茂重

雪積もる 甲斐の白嶺を 外に見て 遙かに超ゆる 佐夜の中山 (新千載・羈旅・八一二)

(雪の歌とて、詠める)

寂具法師

甲斐が嶺は なほ如何ばかり 積もるらむ 早雪深し 佐夜の中山 (新拾遺・羈旅・八〇八)

光明峰寺入道前撰政家の百首の歌に、名所恋

前中納言定家

甲斐が嶺に 木の葉吹き敷く 秋風も 心の色を えやは伝ふる (新拾遺・恋一・九二九)

【帰山】(越前)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二五例

越へ罷りける人に、詠みて遣はしける (紀利貞)

帰山 ありとは聞けど 春霞 立ち別れなば 恋しかるべし (古今・離別・三七〇)

相知れりける人の、越の国に罷りて、年経て京に詣で来て、
また帰りける時に詠める 凡河内躬恒

帰山 何ぞはありて ある甲斐は 来ても止まらぬ 名にこそありけれ (古今・離別・三八二)

寛平御時、後の宮の歌合の歌 在原棟梁

白雪の 八重降り敷ける 帰山 返る返るも 老いにけるかな (古今・雑上・九〇二)

相知りて侍りける人の、あからさまに越の国へ罷りけるに、幣志すとて 読人知らず

我をのみ 思ひ敦賀の 浦ならば 帰るの山は 惑はざらまし (後撰・離別・一三三五)

(雪の歌とて、詠み侍りける) 右近大将実房

跡も絶え 枝折りも雪に 埋もれて 帰山路に 惑ひぬるかな (千載・冬・四五八)

雪の歌とて、詠み侍りける 前右京権大夫頼政

越えかねて 今ぞ越路を 帰山 雪降る時の 名にこそありけれ (千載・冬・四五九)

(堀河院御時、百首の歌奉りける時、別れの心を、詠み侍りける) 源俊頼朝臣

忘るなよ 帰山路に 跡絶えて 日数は雪の 降り積もるとも (千載・離別・四八一)

夏頃越の国へ罷りける人の、秋は必ず上りなん、待て、

と言ひけるが、冬になるまで上り詣で来ざりければ、

遣はしける 西住法師

待てと言ひて 頼めし秋も 過ぎぬれば 帰山路の 名ぞ甲斐もなき (千載・離別・四九三)

題知らず 伊勢

忘れなん 世にも越路の 帰山 何時はた人に 逢はんとすらむ (新古今・離別・八五八)

遠き境を待つ恋と言へる心を 賀茂重政

頼めても 遙けかるべき 帰山 幾重の雲の 下に待つらむ (新古今・恋二・一一三〇)

雪降りける朝、女の許より帰りて、遣はしける 左近大将朝光

飽かずして 帰るみ山の 白雪は 道もなきまで 埋もれにけり (続後撰・恋三・八三五)

返し 読人知らず

ともすれば 跡絶えぬべき 帰山 越路の雪は さぞ積もるらん (続後撰・恋三・八三六)

百首の歌奉りし時 入道二品親王性助

立ち返る 霞隔てて 帰山 来ても止まらぬ 春の雁が音 (続拾遺・春上・五三)

越に罷りける人に、遣はしける 津守経国

逢ふことを 何時とか待たむ 帰山 ありとばかりの 名を頼めども (続拾遺・羈旅・六六五)

越の国に侍りける時、春の頃、権中納言公雄の許に、

遣はしける 藤原忠資朝臣

思ひきや 慕ひ馴れにし 春の雁 帰山路に 待たんものとは (新後撰・羈旅・六〇三)

宝治の百首の歌奉りける時、同じ心(帰雁)を

花山院前内大臣

春霞 なほ立ち隠せ 帰山 越え行く雁の 道惑ふがに (玉葉・春上・一〇八)

雪未深と言へる心を 観意法師

今日までは 雪踏み分けて 帰山 これより後や 道も絶えなん (玉葉・雑一・二〇四八)

建保二年、秋の歌奉りけるに 従二位家隆

帰山 何時はた秋と 思ひ来し 雲居の雁も 今や相見ん (続後拾遺・秋上・三〇五)

越へ罷りける人に 康資王母

行く雁は 帰山路の 雪見ても 花の都を 思ひ出でなむ (続後拾遺・離別・五四九)

越へ罷りける人に 禅心法師

行末に 帰山路の なかりせば 何を別れの 慰めにせん (新千載・離別・七六〇)

大納言顕実の母、 国々の名所を題にて、人々に

詠ませ侍りける歌に、還山を 読人知らず (新千載・離別・一九一六)

敷島や 正しき道に 帰山 ありてぞ代代の 後も榮行く

題知らず 前中納言基成 (新拾遺・夏・二七五)

照射する 獵夫の檀弓 遙々と 帰山路の 末ぞ明け行く

八条太政大臣家に、歌合し侍りけるに、雪を、 仲実朝臣 (新拾遺・夏・二七五)

詠める 仲実朝臣

何時の間に 降り積もりぬる 雪なれば 帰山路に 道迷ふらん (新後拾遺・冬・五四七)

(百首の歌奉りし時、暮春) 後三条入道前太政大臣女

暮れ果つる 春は何処に 帰山 ありとし聞かば 生きて訪ねん (新統古今・春下・二一六)

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に、尋失恋と言ふ事を

前中納言雅兼

さりともと 訪ね越路の 甲斐もなく 跡をだに見で 帰山か (新統古今・恋二・一一〇二)

【軽の池】 (大和)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一例

(題知らず)

紀皇女

軽の池の 入江巡れる 鴨すらに 玉藻の上に 一人寝なくに (玉葉・恋二・一四二八)

【竈門山】 (筑前)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一例

筑紫へ罷りける時に、竈門山の本に宿りて侍りけるに、

道面に侍りける木に、古く書き付けて侍りける 元輔

(春は萌え 秋は焦がるる 竈門山) 霞も霧も 煙とぞ見る (拾遺・雑賀・一一八〇)

【神奈備森】 (大和)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一三例

(題知らず)

(読人知らず)

神無月 時雨も未だ 降らなくに 予て移ろふ 神奈備の森 (古今・秋下・二五三)

(題知らず)

(読人知らず)

神無月 時雨と共に 神奈備の 森の木の葉は 降りこそ降れ (後撰・冬・四五二)

時雨し侍りける日

貫之

掻き暗し 時雨るる空を 眺めつつ 思ひこそ遣れ 神奈備の森 (拾遺・冬・二一七)

新院、位に御座しましし時、雪中眺望と言ふ事を

詠ませ給ひけるに、詠み侍りける 関白前太政大臣

紅に 見えし梢も 雪降れば 白木綿掛くる 神奈備の森 (詞花・冬・一五七)

宇治関白、有馬の湯見に罷りける道にて、秋の暮れを

惜しむ歌詠み侍りけるに 権大納言長家

神奈備の 森の辺に 宿は借れ 暮れ行く秋も さぞ止るらむ (新勅撰・羈旅・五一六)

百首の歌に紅葉を、詠み侍りける 入道前太政大臣

下葉まで 心のままに 染めてけり 時雨に飽ける 神奈備の森 (新勅撰・雑四・一二八六)

冬の初めの歌として 藤原光俊朝臣

冬の来て 時雨るる時ぞ 神奈備の 森の木の葉は 降り始めける (続後撰・冬・四五八)

宝治二年の百首に、杜紅葉 入道前太政大臣

今よりの 時雨も露も 如何ならん 移ろひ初めし 神奈備の森 (続古今・秋下・五〇五)

題知らず 荒木延季

紅葉葉の 散るを幣とや 手向くらむ 嵐吹くなり 神奈備の森 (続古今・冬・五六〇)

弘安元年、百首の歌奉りし時 入道前太政大臣

予てだに 移ろふと見し 神奈備の 森の木の葉に 時雨降るなり (新後撰・秋下・四二五)

落葉を、詠める 法印隆淵

予てより 移ろひ初めし 紅葉葉の 散るをも急ぐ 神奈備の森 (続後拾遺・冬・四二〇)

(秋の歌の中に) 僧正良瑜

予てより 移ろふ秋の 色もなほ 時雨れて増さる 神奈備の森 (新拾遺・秋下・五四七)

百首の歌奉りし時、寄杜恋 徳大寺前内大臣

神奈備の 森ならねども 予てより 移ろふ色の 見ゆる中かな (新拾遺・恋四・一二五〇)

【神奈備山】 (大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一四例

(題知らず) (読人知らず)

千早振る 神奈備山の 紅葉葉に 思ひは掛けじ 移ろふものを (古今・秋下・二五四)

神奈備の山を過ぎて、竜田川を渡りける時に、紅葉の

流れけるを、詠める 清原深養父

神奈備の 山を過ぎ行く 秋なれば 竜田川にぞ 幣は手向くる (古今・秋下・三〇〇)

(題知らず) (読人知らず)

旅寝して 妻恋ひすらし 郭公 神奈備山に 小夜更けて鳴く (後撰・夏・一八七)

(題知らず) (読人知らず)

己が妻 恋ひつつ鳴くや 五月闇 神奈備山の 山郭公 (新古今・夏・一九四)

題知らず 曾根好忠

千早振る 神奈備山の 櫓の葉を 雪振り放けて 手折る山人 (新勅撰・冬・四二八)

(題知らず) 従二位家隆

幾歳か 鳴き古るしてし 郭公 神奈備山の 五月雨の空 (続後撰・夏・二〇四)

題知らず 読人知らず

神奈備の 山の上なる 岩清水 祝ひてぞ汲む 万代の為
(初冬の心を) 院弁内侍 (続古今・賀・一九〇四)

冬の来る 神奈備山の 村時雨 降らば共にと 散る木の葉かな
洞院撰政治家の百首の歌に、紅葉 前大納言為家 (続拾遺・冬・三七九)

千早降る 神奈備山の 村時雨 紅葉を幣と 染めぬ日はなし
(千五百番の歌合に) 野宮左大臣 (新後撰・秋下・四二六)

榊葉に 霜の白木綿 掛けてけり 神奈備山の 曙の空
題知らず 権大納言宗家 (新後撰・神祇・七六三)

秋毎に 神奈備山の 紅葉葉は 誰れが手向の 錦なるらん
題知らず 赤人 (玉葉・秋下・七九〇)

三室の 神奈備山に 五百枝挿し 繁く生ひたる 梅の木の時
(題知らず) 藤原仲実朝臣 (続千載・雑体・七〇九)

夕掛けて 何処行くらむ 郭公 神奈備山に 今ぞ鳴くなる
冬の御歌 後二条院御製 (風雅・夏・三三九)

神奈備の 山下風の 寒けくに 散り交ひ曇る 四方の紅葉葉
冬 (風雅・冬・七五四)

【亀井】 (撰津)

● 玄々集……一例

天王寺、亀井を、御覧じて

濁りなき 亀井の水を 結びあげて 心の内を すすぎつるかな
(上東門院・一四四)

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……三例

天王寺に参りて、亀井にて、詠み侍りける 弁乳母

万代を 澄める亀井の 水はさは 富雄川の 流れなるらん
(後拾遺・雑四・一〇七一)

天王寺の亀井の水を御覧じて 上東門院

濁りなき 亀井の水を 掬ひ上げて 心の塵を 濯ぎつるかな
(新古今・釈教・一九二六)

同じ寺 (天王寺) にて、所所の名を、人々歌に詠み

侍りけるに、亀井 郁芳門院安芸

稀に説く 御法の跡を 来て見れば 浮木に会へる 亀井なりけり
(新勅撰・釈教・六八〇)

【龜山】 (山城)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……五例

題知らず

中務

大堰川 底にも見ゆる 龜山の 変らぬ影は 幾世経ぬらん
(続古今・雑中・一六六三)

龜山院崩れさせ給ひける次の年の秋、

入道前太政大臣家に、題を探りて、歌

詠み侍りけるに、無常の心を 前参議実時

古への 鶴の林の 春はあれど なほ龜山の 秋ぞ哀しき
(玉葉・雑四・二三七九)

返事 皇太后宮大夫俊成

龜山の 九返りの 千歳をも 君が御代にぞ 添へ譲るべき
(新拾遺・賀・七〇八)

承保三年、大井河に行幸の日、詠める 式部卿敦賢親王

大堰川 水嵩や増さる 亀山の 千代の陰見る 御幸と思へば (新拾遺・賀・七〇九)
題知らず 後嵯峨院御製

亀山の 峰立ち越えて 見渡せば 清滝川を 落とす筏師 (新拾遺・雑中・一七五七)

【賀茂の社】 (山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……一七例

(題知らず) (詠人知らず)

千早振る 賀茂の社の 木綿襷 一日も君を 掛けぬ日はなし (古今・恋一・四八七)

冬の賀茂の祭りの歌 藤原敏行朝臣

千早振る 賀茂の社の 姫小松 万代経とも 色は変はらじ (古今・東歌・一一〇〇)

延喜御時、賀茂臨時祭の日、御前に杯執りて 三条右大臣

かくてのみ 止むべきものか 千早振る 賀茂の社の 万代を見む (後撰・雑二・一一三一)

祭の還さに、酔ひ様乱れたる形描きたる所を 安法法師

安法法師

整へし 賀茂の社の 木綿襷 帰る朝ぞ 乱れたりける (後拾遺・雑四・一〇八〇)

左大将朝光、誓言文を書きて、代はり遣せよと

責め侍りければ、遣はしける 馬内侍

千早振る 賀茂の社の 神も聞け 君忘れずは 我も忘れじ (千載・恋五・九〇九)

百首の歌の中に、神祇歌とて、詠み給ひける 式子内親王

さりともと 頼む心は 神寂びて 久しくなりぬ 賀茂の瑞垣 (千載・神祇・一二五二)

返し

枯れにける 葵のみこそ 哀しけれ あはれと見ずや 賀茂の瑞垣 詠人知らず

読人知らず

(新古今・恋四・一二五五)

百首の歌奉りし時、寄社祝 藤原光俊朝臣

かくしこそ 賀茂の社の 木綿蔓 上治まれば 下も乱れぬ (続古今・神祇・七一〇)

百首の歌の中に 前中納言定家

聞く度に 頼む心ぞ 澄増さる 賀茂の社の 御手洗の声 (玉葉・神祇・二七六六)

御生れの日、訪れて侍りける人の返事に

祐子内親王家紀伊

諸蔓 方方掛くる 心をば あはれとも見し 賀茂の瑞垣 (続千載・神祇・八九四)

久安の百首の歌奉りける時 皇太后宮大夫俊成

千早振る 賀茂の社の 葵草 挿頭す今日にも なりにけるかな (続後拾遺・夏・一六二)

夏の歌に 後一条入道前関白左大臣

諸蔓 まだ二葉より 掛け初めて 幾代変へぬる 賀茂の瑞垣 (風雅・夏・三一二)

(題知らず) 鴨祐光

君が為 御国遷りて 清き川の 流れに澄める 賀茂の瑞垣 (風雅・神祇・三二四)

(題知らず) 賀茂経久

千早振る 賀茂の瑞垣 君が代を 久しかれとぞ 祈り初めてし (新拾遺・神祇・一四〇九)

文治六年、女御入内屏風に、賀茂下社の神館辺に、

葵挿頭したる人ある所 前中納言定家

千早振る 賀茂の瑞垣 年を経て 幾世の卿に 逢ふ日なるらん (新統古今・夏・二二九)

賀茂社に奉りし歌の中に 権中納言雅世

君を守る 賀茂の川波 代代掛けて 澄む瑞垣も なほぞ久しき

(新統古今・神祇・二二〇〇)

題知らず

賀茂秀久

君を守る 賀茂の社の 御標繩 神も契りを なほ結ぶらし (新統古今・神祇・二二〇一)

【鴨山】(石見)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一例

(石見にて、亡くなりぬべき時に臨みて) (柿本人丸)

鴨山の 岩根し枕きて ある我を 知らぬか妹が 待ちつつあらむ

(拾遺(異本)・哀傷・一三五五)

【唐崎】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一二例

唐崎

阿保経覧

かの方に 何時から先に 渡りけむ 波路は跡も 残らざりけり (古今・物名・四五八)

(唐崎)

伊勢

波の花 沖から咲きて 散り来めり 水の春とは 風やなるらむ (古今・物名・四五九)

栗田右大臣家障子に、唐崎に祓したる所に綱引く

形描ける所

平祐挙

禊する 今日唐崎に 下す網は 神の承け引く 証なりけり (拾遺・神楽・五九五)

政治の百首の歌に 後京極摂政前太政大臣

唐崎や 鶏照る沖に 雲消えて 月の氷に 秋風ぞ吹く (続後撰・秋中・三四三)

山階入道左大臣家の十首の歌に、名所松

前大納言為家

我見ても 昔は遠く なりにけり 共に老い木の 唐崎の松 (続拾遺・雑上・一一〇〇)

宝治の百首の歌奉りける時、浦舟 祝部成茂

唐崎や 清き浦曲に 漕ぎ帰り 神の御舟の 跡をしぞ思ふ (新後撰・神祇・七四六)

題知らず

祝部行氏

古への 神の御舟を 引き掛けし 梢や今の 唐崎の松 (続千載・神祇・九〇三)

日吉へ参るとて、唐崎松を見て、詠める

従二位為子

唐崎や 幽かに見ゆる 真砂路に 紛ふ色なき 一本の松 (風雅・雑中・一七二二)

(題知らず)

二品親王慈道

跡垂れし 神の深雪の 古への 思へば遠き 唐崎の松 (新千載・神祇・一〇〇〇)

神祇の歌に

法眼玄全

唐崎や 小波ながら 寄る舟を 神代に返す 松風ぞ吹く (新後拾遺・神祇・一五二四)

建仁元年八月十五夜の撰歌合に、湖上月明と

言ふ心を

参議雅経

唐崎や 秋の今宵を 眺むれば 照る月波に 浦風ぞ吹く

(新統古今・秋上・四四九)

夏祓を、詠める

祝部允仲

立つ波や 秋を寄すらむ 祓する 今日唐崎に 風ぞ涼しき

(新統古今・雑上・一六九二)

【木曾の懸橋】(信濃)

●玄々集……………一例

中々に いひもはなたで 信濃なる 木曾路の橋の 懸けたるやなぞ

(源頼光・九五)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

山寺に罷りて侍りける時に、心ある文を女の屢遣はし侍り
ければ、詠みて遣はしける 空人法師

恐ろしや 木曾の懸路の 丸木橋 踏み見る度に 落ちぬべきかな (千載・雑下・一一九五)

旅の歌の中に 後京極摂政前太政大臣

分け暮らす 木曾の懸橋 絶え絶えに 行末深き 峰の白雪 (続拾遺・羈旅・七〇〇)

【衣笠岡】(山城)

●玄々集……………用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

音に聞く 衣笠岡を 未だ見ねば 待ちつつぞ経る 雨宮には

この歌は、雨宮に衣笠を奉らんと願を立てて、

遅くしける程に、神の示し給ひけるとなん

(続古今・神祇・六九二)

【桐生の岡】(近江)

●玄々集……………用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

贈皇后宮の御産屋の七夜に、兵部卿致平親王の
雉の形を作りて、誰れともなくて歌を付けて侍

りける 清原元輔

朝風 桐生の岡に 立つ雉は 千代の日嗣の 始めなりけり

(拾遺・賀・二六六)

【倉橋山】(大和)

●玄々集……………一例

五月闇 倉橋山の 郭公 おぼつかなくも 鳴きわたるかな

(藤原実方・二三)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

春宮に侍ひける絵に、倉橋山に郭公飛び

渡りたる所 藤原実方朝臣

五月闇 倉橋山の 郭公 覚束なくも 鳴き渡るかな

(拾遺・夏・一二四)

【暗部山】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……一三例

暗部山にて、詠める

貫之

梅の花 匂ふ春辺は 暗部山 闇に越ゆれど 著くぞありける (古今・春上・三九)

月を、詠める 在原元方

秋の夜の 月の光し 明ければ 暗部の山も 越えぬべらなり (古今・秋上・一九五)

是貞親王の家の歌合の歌 敏行朝臣

我が来つる 方も知られず 暗部山 木々の木の葉の 散ると紛ふに (古今・秋下・二九五)

題知らず 坂上是則

我が恋に 暗部の山の 桜花 間なく散るとも 数は増さらじ (古今・恋二・五九〇)

延喜御時に、秋の歌召しければ、奉りける 紀貫之

秋霧の 立ちぬる時は 暗部山 覚束なくぞ 見え渡りける (後撰・秋中・二七一)

題知らず (読人知らず)

君が音に 暗部の山の 郭公 いづれ徒なる 声増さるらん (後撰・恋四・八六七)

承暦二年、御前にて、殿上の御男ども、題を探りて

歌仕うまつりけるに、時雨を取りて、仕うまつれる

源師賢朝臣

神無月 時雨るるままに 暗部山 下照るばかり 紅葉しにけ (金葉・冬・二五七)

我をば離れ離れになりて、異人の許罷ると聞きて、

遣はしける 読人知らず

理や 思ひ暗部の 山桜 匂ひ増される 春を賞づるも (金葉・恋下・四三四)

(題知らず) 大納言経信

小夜更けて 暗部の山の 郭公 行方も知らず 鳴き渡るなり (続後拾遺・夏・一八七)

元亨三年七月、龜山殿にて、人々題を探りて

七百首の歌仕うまつりける時、夜郭公

後大納言公雄

宿りとする 人や聞くらむ 短か夜の 空も暗部の 山郭公 (続後拾遺・夏・一八八)

唐鞍

円光院入道前関白太政大臣

梅が香の 匂ふものから 暗部山 木の本知らぬ 春の夕闇 (続後拾遺・物名・五一三)

夜梅を 中務

匂ふ香の 導ならずは 梅の花 暗部の山に 折り惑はまし (風雅・春上・八二)

題知らず 崇徳院御製

暗部山 木の下陰の 岩躑躅 ただこれのみや 光なるらん (新後拾遺・春下・一四一)

【鞍馬山】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……五例

浄蔵、鞍馬山へなん入ると言へりければ 平中興女

すみぞめの 鞍馬の山に 入る人は 辿る辿るも 帰り来なん (後撰・恋四・八三二)

鞍馬の坂を夜越ゆとて、詠み侍りける

亭子院に今子と召しける人

昔より 鞍馬の山と 言ひけるは 我が如人も 夜や越えけん (後撰・雑二・一一四〇)

鞍馬に詣で侍りける折に、道を踏み違へて、

詠み侍りける

安法法師

覺東な 鞍馬の山の 道知らで 霞の中に 惑ふ今日かな (拾遺・雑春・一〇一六)

鞍馬より出で侍りける人の、月のいとをかし

かりければ、鞍馬の山もかくこそなど思ひ出

でけるを聞きて

齋院中務

住み馴るる 都の月の 清けきに 何か鞍馬の 山は恋しき (後拾遺・雑一・八五〇)

鞍馬に参りて通夜したるに、夜明けなんとするとて、

人々急ぎければ

御形宣旨

名にし負はば 明けずもあらなん 鞍馬山 道見えずとて 我は帰らじ (玉葉・雑三・二二四三)

【位山】(飛驒)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……四六例

(同じ人(清真公)の七十賀し侍りけるに、

竹の杖を作りて)

(能宣)

位山 峰まで衝ける 杖なれど 今万代の 坂の為なり (拾遺・賀・二八一)

人の冠し侍りけるに

元輔

濃紫 棚引く雲を 導にて 位の山の 峰を訪ねん (拾遺・雑賀・一一七〇)

高倉院、春宮御時、権亮に侍りけるを、参議にて

程経侍りける頃、賀茂社歌合とて人々詠み侍り

けるに、述懐の歌とて、詠み侍りける

権中納言実守

位山 花を待つこそ 久しけれ 春の都に 年は経しかど (千載・雑中・一〇七六)

題知らず

法印倫円

上るべき 道にぞ惑ふ 位山 これより奥の 導なければ (千載・雑中・一一一五)

百首の歌奉りし時

土御門内大臣

位山 跡を訪ねて 上れども 子を思ふ道に なほ迷ひぬる (新古今・雑下・一八一四)

正元二年、大嘗会の頃、詠み侍りける 中務卿親王

天皇の 位の山の 小松原 今年や千代の 始めなるらん (続古今・賀・一九〇七)

洞院摂政家の百首の歌に、同じ心(述懐)を

藤原隆祐朝臣

位山 麓ばかりの 道をだに なほ分け難く 掛かる白雲 (続拾遺・雑上・一一六〇)

守覚法親王家の五十首の歌に 三条入道左大臣

位山 坂行き越えて 後にこそ 易くは道に 思ひ入りしか (続拾遺・雑中・一二四五)

述懐の歌の中に

前大納言教良

玉鉾の 道ある御代の 位山 麓に一人 なほ迷ふかな (新後撰・雑中・一四〇三)

権大納言顕朝、中納言になりて九月十三夜、

喜び申し侍りけるに、遣はしける

後深草院少将内侍

心行く 程まで上れ 位山 名高き秋の 月の導に (玉葉・秋下・七〇〇)

(題知らず) 信実朝臣

行く先の 道も覚えぬ 五月闇 位の山に 身は迷ひつつ (玉葉・雑一・一九三三)

(題知らず) 前参議能清

位山 身は下ながら 影見れば 上らぬ峰に 月ぞ明けき (続千載・雑中・一八一六)

(題知らず) 従二位顕氏

位山 かくて変はらぬ 峰の松 今一入の 春を知らばや (続千載・雑中・一九一六)

藤原雅行身罷りて後、叙位に加階し侍りける由、

都より人の申して侍りければ 前参議雅有

なき跡に なほ立ち上る 位山 ありて聞く世と 思はましかば (続千載・哀傷・二〇九二)

題知らず 法性寺入道前関白太政大臣

我が君の 位の山し 高ければ 仰がぬ人は あらじとぞ思ふ (続千載・賀・二二二三)

今上、位に即かせ給うける日、天の降り侍りけるに、

時に臨みて空晴れにければ、言に従ひて、詠める

女藏人万代

明らけき 御代ぞ知らるる 位山 また上もなく 仰ぐ光に (続千載・賀・二二二四)

正和三年二月、春日社に御幸侍りける時、

従上四位に叙せられけるに、詠める 中臣祐親

千代経へき 君が御幸に 位山 また分け上る 峰の椎柴 (続千載・賀・二二二五)

元亨四年、後宇多院に十首の歌

奉りける時、山郭公 権中納言公明

位山 上りて聞けば 久方の 空に語らふ 郭公かな (続後拾遺・雑上・一〇一一)

千五百番の歌合に 前大納言兼宗

位山 何中々の 跡ならむ 峰まで思ふ 程の苦しき (続後拾遺・雑中・一一三六)

隆信朝臣、従上五位にて年経侍りけるに、

一級聴されて侍りける時、詠みて遣はし

ける 清輔朝臣

位山 結ばほれつる 谷水は この春風に 溶けにけらしな (風雅・雑上・一四一八)

返し 藤原隆信朝臣

位山 春待ち得たる 谷水の 溶くる心は 汲みて知らなん (風雅・雑上・一四一九)

嘉禎二年十二月、四位の従上に叙して

慶びを奏しけるに、雪いみじく降り侍

りければ 従三位為継

位山 重なる雪に 跡止めて 迷はぬ道は なほぞ畏き (風雅・雑下・一八〇八)

山を 藤原秀経

道しあらば 今も迷はで 位山 昔の跡に 名を残さばや (風雅・雑下・一八〇九)

百首の歌奉りし時 前大納言実教

老いの身に 今一坂の 位山 上らぬしもぞ 苦しかりける (風雅・雑下・一八一〇)

文保三年、百首の歌召されける時 民部卿為定

今更に 上りぞ遣らぬ 位山 苦しかるべき 代代の跡かな (風雅・雑下・一八五三)

題知らず 源基氏朝臣

位山 今幾坂を 上りてか 雲の上なる 月を見るべき (新千載・秋上・四〇三)

述懐の歌として、詠める 権中納言宗経

位山 迷はぬ人の 跡見ても 今一坂を なほ思ふかな (新千載・雑中・一九二四)

大納言望み申しけるに、滞り侍りける頃、
年の暮れに、詠み侍りける 前大納言公蔭

位山 上りぞ遣らで 急がれぬ 五十の坂を 越えんとすらん (新千載・雑中・一九二五)

貞和二年、百首の歌奉りし時 前大納言為定

いとどしく 老いの坂添ふ 位山 苦しき道と 上りかねつつ (新千載・雑中・一九二六)

文保の百首の歌奉りける時 六条内大臣

位山 上り果てても 峰に生ふる 松に心を なほ残すかな (新千載・雑中・一九二九)

題知らず 前中納言基成

如何で我 位の山に 庵占めて 上り果てなば 身を隠さまし (新千載・雑中・一九三〇)

後醍醐院御時、上の男ども、明り障子と

言ふ事を隠し題にて、歌仕うまつりける

時、詠める 後光明照院前関白左大臣

位山 その品殊に 上りしや 憂しと思はぬ 昔なりけん (新千載・雑下・二一四七)

父身罷りて後、左大臣従一位贈られ侍りし

宣命位記などを見て、詠める 左近中将義詮

帰るべき 道しなれば 位山 上るを見ても 濡るる袖かな (新千載・哀傷・二一九二)

弁官の時、暫く職を去りて侍りける頃、

詠める 按察使資明

位山 荆棘の道も 程遠し 花の外なる 峰の椎柴 (新拾遺・雑上・一五五五)

(題知らず) 前中納言実教

幾世しも 隔てぬものを 位山 上りし跡に など迷ふらん (新拾遺・雑中・一七四四)

天台座主忠尋、僧正になりて、程なくまた法務に

なりぬと聞きて、喜びに遣はしける 祝部成仲

日に添へて 位の高く なり行けば 山の甲斐ある 君とこそ見れ

(新拾遺・雑中・一七四五)

前参議為秀、未だ四位に侍りける頃、

寄山述懐と言へる心を、詠める 藤原為邦

位山 未だ椎柴の 陰に居て 我が上るべき 道は急がず (新拾遺・雑中・一七四六)

従三位仁子、八月十五夜に位記を受け

侍りける時、詠み侍りける 前関白左大臣近衛

今宵しも 光添へける 位山 甲斐ある秋の 月を見るかな (新拾遺・雑中・一七八四)

藏人にて侍りけるが、冠賜はりて後、

詠める 藤原高範

位山 上る我が身の 如何なれば 雲居の月に 遠離るらん (新拾遺・雑中・一七八五)

貞和の百首の歌奉りし時 前中納言雅孝

齡こそ 何時世を越えぬ 位山 絶えにし跡に また上るかな (新拾遺・雑中・一七八六)

入道二品親王詠ませ侍りし五十首の歌に

前中納言定宗

人は皆 越えぬる跡の 位山 遅れてだにも 上りかねつつ (新後拾遺・雑上・一三〇三)

述懐の歌として 前大納言為定

位山 あるに任する 道なれど 今一坂ぞ さすが苦しき (新後拾遺・雑上・一三〇四)

(述懐の歌として)

平政村朝臣

上るべき 程は上りぬ 位山 これより上の 道ぞゆかしき (新後拾遺・雑上・一三〇五)

養徳院左大臣身罷りて後、左大臣従一位

贈られけるに、過ぎにし延文四年、等持

院贈左大臣に同じ官位贈られし時、宝篋

院贈左大臣、帰るべき道しなれば、と

詠み侍りける事思ひ出で侍りて 前大僧正義蓮

位山 跡は昔に 返れども 返らぬ道ぞ 今も哀しき (新統古今・哀傷・一六〇二)

参議に侍りける頃、守覚法親王家の

五十首の歌に、述懐 前大納言兼宗

上るべき 道を思へば 位山 未だ麓なる 我が身なりけり (新統古今・雑中・一九一八)

同じ心(述懐)を 従二位有世

祈り来し 君が恵みに 位山 代代にも越えて 上りぬるかな (新統古今・雑中・一九一九)

【木枯らし森】(駿河)

●玄々集……………用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

返し (読人知らず)

木枯らしの 森の下草 風早み 人の嘆きは 生ひ添ひにけり (後撰・恋一・五七二)

(千五百番の歌合に) 定家朝臣

消え侘びぬ 移ろふ人の 秋の色に 身を木枯の 森の下露 (新古今・恋四・一三二〇)

承久元年、内裏歌合に、杜間雪 正三位知家

秋の色を 払ふと見えし 木枯の 森の梢は 雪も堪らず (後拾遺・冬・四三九)

題知らず 読人知らず

人知れぬ 思ひ駿河の 国にこそ 身を木枯らしの 森はありけれ

(新後拾遺・恋一・九五七)

(百首の歌奉りし時、杜紅葉) 雅永朝臣

この頃は 露も時雨も 隙ぞなき さぞ木枯の 森の紅葉葉 (新統古今・秋下・五八三)

【越(路)の白山(嶺)】(越前)

●玄々集……………一例

都にて 越路の空を 眺めつつ 雲もと聞きし ほどに来にけり (御形宣旨・七五)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一六例

大江千古が越へ罷りける餞別、詠める 藤原兼輔朝臣

君が行く 越の白山 知らねども 雪のまにまに 跡は訪ねむ (古今・離別・三九一)

越の国へ罷りける時、白山を見て、詠める 躬恒

消え果つる 時しなれば 越路なる 白山の名は 雪にぞありける (古今・羈旅・四一四)

返し 宗岳大頼

君をのみ 思ひ越路の 白山は 何時かは雪の 消ゆる時なる (古今・雑下・九七九)

越なりける人に、遣はしける 紀貫之

思ひ遣る 越の白山 知らねども 一夜も夢に 越えぬ夜ぞなき (古今・雑下・九八〇)

(題知らず) (読人知らず)

年深く 降り積む雪を 見る時ぞ 越の白嶺に 住む心地する (後撰・冬・四九九)

女に、遣はしける 源善朝臣

厭はれて 帰り越路の 白山は 要らぬに迷ふ ものにぞありける (後撰・恋六・一〇六三)

題知らず 忠見

年経れば 越の白山 老いにけり 多くの冬の 雪積もりつつ (拾遺・冬・二四九)

越なる人の許に、遣はしける 貫之

思ひ遣る 越の白山 知らねども 一夜も夢に 越えぬ夜ぞなき (拾遺・雑恋・一二四二)

司召の子の日に当りて侍りけるに、按察更衣の
局より松を出だして侍りけるを、詠み侍りける

清原元輔

雪深き 越の白山 我なれや 誰が教ふるに 春を知るらむ

(後拾遺(異本)・雑二・一二二二)

十首の歌人々に詠ませ侍りける時、

花の歌とて、詠める 皇太后宮大夫俊成

み吉野の 花の盛りを 今日見れば 越の白嶺に 春風ぞ吹く (千載・春上・七六)

京極前太政大臣の高陽院の家の歌合に、

雪の歌とて、詠み侍りける 治部卿通俊

押し並べて 山の白雪 積もれども 著きは越しの 高嶺なりけり (千載・冬・四五二)

加賀の守にて侍りける時、白山に詣でたるを

思ひ出でて、日吉の客人の宮にて、詠み侍り

ける 左京大夫頭輔

年経とも 越の白山 忘れずは 頭の雪を あはれとも見よ (新古今・神祇・一九一二)

百首の歌奉りける雪の歌 大納言師頼

搔き暗し たまゆら止まず 降る雪の 幾重積もりぬ 越の白山 (新勅撰・雑四・一三二〇)

(雪を) 安嘉門院甲斐

消ぬが上に さこそは雪の 積もるらめ 名に古りにける 越の白山 (続後撰・冬・五一七)

客人の宮に奉りける 後京極摂政前太政大臣

ここにまた 光を分けて 宿すかな 越の白嶺や 雪の古里 (続古今・神祇・七三九)

堀河院、位に御座しましける時、南殿の

北面に雪山作らせ給ふ由を聞きて、内裏

なる人に、申し遣はしける 周防内侍

行きて見ぬ 心の程を 思ひ遣れ 都の内の 越の白山 (新後拾遺・雑秋・八二九)

【小余綾の磯】(相模)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一三例

寛平御時、上の侍に侍りける男ども、瓶を持たせて、
後の宮の御方に、大御酒の下し、と聞こえに奉りた
りけるを、蔵人ども笑ひて、瓶をお前に持て出でて、
ともかくも言はずなりにければ、使の帰り来て、さ
なむありつる、と言ひければ、蔵人の中に贈りける

敏行朝臣

玉垂れの 小瓶や何ら 小余綾の 磯の波分け 沖に出でにけり (古今・雑上・八七四)
相模歌

小余綾の 磯立ち馴らし 磯菜摘む 目刺し濡らすな 沖に居れ波 (古今・東歌・一〇九四)
題知らず 躬恒

君を思ふ 心を人に 小余綾の 磯の玉藻や 今も刈らまし (後撰・恋三・七二四)
男の久しう訪はざりければ 右近

訪ふ事を 待つに月日は 小余綾の 磯にや出でて 今は恨みん (後撰・恋六・一〇四九)
一条摂政、内裏にては便なし、里に出でよ、

と言ひ侍りければ、人もなき所にて、
待ち侍りけるに、詣で来ざりければ 小式命婦

如何にして 今日を暮さむ 小余綾の 急ぎ出でても 甲斐なかりけり (拾遺・恋四・八五二)

題知らず (読人知らず)

小余綾の 急ぎて来つる 甲斐もなく またこそ立てれ 沖つ白波 (拾遺・雑恋・一二二四)
前太政大臣家に侍りける女を、中将忠宗朝臣、

少将顕国と共に語らひ侍りけるに、忠宗朝臣
に逢ひにけり、その後程もなく忘れにけりと

聞きて、女の許遣はしける 源顕国朝臣
小余綾の 急ぎて逢ひし 甲斐もなく 波寄り来ずと 聞くは真か (金葉・雑上・六〇〇)

題知らず 読人知らず
程もなく 磯路の波も 小余綾の 急ぎ馴れたる 年の暮れかな (新後撰・雑上・一三四六)

月日のみ ただ徒に 小余綾の 急ぐにつけて 暮るる年波 (続千載・冬・六九八)
同じ〈陸奥〉国へ罷りける人の許に、遣はしける 小野小町

陸奥は 世を浮島も ありと言ふ 関小余綾の 急がざらん (続千載・羈旅・七五八)

(題知らず) 読人知らず

浦風や 吹き増さるらん 小余綾の 磯の波間に 千鳥鳴くなり (続千載・雑上・一七九五)

新玉の 今年もかくて 小余綾の 磯路の波を 袖に掛けつつ (続千載・雑中・一八六三)
題知らず 欣子内親王

徒に またこの度も 小余綾の 急がで法の 舟に遅るな (新拾遺・釈教・一四九一)

【衣川】 (陸奥)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……六例

(題知らず) (読人知らず)

袂より 落つる涙は 陸奥の 衣川とぞ 言ふべかりける (拾遺・恋二・七六二)
題知らず 源重之

衣川 見馴れし人の 別れには 袂までこそ 波は立ちけれ (新古今・離別・八六五)
左京大夫頭輔家歌合 法性寺入道前関白家参河

人知れず 音をのみ泣けば 衣川 袖の柵 堰かぬ日ぞなき (新勅撰・恋一・六九八)

前參議教長家歌合に、隔河恋

藤原親盛

妹が住む 宿の此方の 衣川 渡らぬ折も 袖濡らしけり

(新後撰・恋三・一〇四六)

盗人に逢へりけるまたの日、人の許より衣を

贈りて侍りければ

清原元輔

浅からず 思ひ初めてし 衣川 かかる瀬にこそ 袖も濡れけれ

(続後拾遺・雑中・一一三〇)

題知らず

読人知らず

背きても 世に黒染の 衣川 変はる証の なき我が身かな

(新千載・雑下・二〇三四)

【衣手の森】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一〇例

弘長三年、内裏の百首の歌奉りし時、杜蟬 前大納言為氏

をりはへて 音に鳴き暮す 蟬の羽の 夕日も薄き 衣手の森

(後拾遺・夏・二二〇)

贈左大臣長実家にて歌合に 右京大夫頭輔

秋毎に 誰れか染むらん 主知らぬ 唐紅の 衣手の森

(続拾遺・秋下・三六四)

秋の歌の中に 後徳大寺左大臣

山姫の 恋の涙や 染めつらむ 紅深き 衣手の森

(続拾遺・秋下・三六五)

(題知らず)

法印定為

紅葉葉も 今日を限りと 時雨るなり 秋の別れの 衣手の森

(新後撰・秋下・四三九)

(夏の歌の中に)

雅成親王

色深き 涙を借りて 郭公 我が衣手の 森に鳴くなり

(新後撰・雑上・一二七九)

宝治の百首の歌の中に、杜紅葉 前大納言為氏

時雨持て 織るてふ秋の 唐錦 裁ち重ねたる 衣手の森

(玉葉・秋下・七八八)

弘長の百首の歌奉りけるに、納涼 前大納言為氏

涼しさは 立ち寄るからに 知られけり 秋風近き 衣手の森

(続千載・夏・三二八)

百首の歌奉りし時

中宮大夫師賢

白露も 時雨も色に あらなくに 染めて千入の 衣手の森

(続後拾遺・秋下・三九七)

題知らず

安喜門院大弐

もの思ふ 誰が涙にか 染めつらむ 色こそ変はれ 衣手の森

(新後拾遺・雑秋・七六四)

文保三年、百首の歌に

津守国冬

郭公 信夫の乱れ 限りありて 鳴くや五月の 衣手の森

(新統古今・夏・二五四)

【衣の関】(陸奥)

●玄々集……一例

道貞、陸奥国へ下るを聞てをくりける

諸共に たたまし物を 陸奥の 衣の関を よそに聞くかな

(和泉式部・一三二)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一〇例

題知らず

(読人知らず)

直路とも 頼まざらん 身に近き 衣の関も ありと言ふなり

(後撰・雑二・一一六〇)

道貞忘れて後、陸奥国の守にて下りけるに、

遣はしける

和泉式部

諸共に 立たましものを 陸奥の 衣の関を 外に聞くかな

(詞花・別・一七三)

建保六年、歌合、冬関月

順徳院御製

風冴ゆる 夜半の衣の 関守は 寝られぬままの 月や見るらん

(続後撰・冬・四八七)

旅の歌の中に

大蔵卿行宗

都出でて 立ち返るべき 程遠み 衣の関を 今日ぞ越え行け

(続拾遺・羈旅・七一七)

(旅の歌の中に)

衣笠前内大臣

旅人の 衣の関の 遙々と 都隔てて 幾日来ぬらん

(続拾遺・羈旅・七一八)

宝治の百首の歌奉りける時、寄関恋 前参議忠定

跡絶えて 人も通はぬ 独寝の 衣の関を 漏る涙かな

(続拾遺・恋五・一〇四五)

嘉元の百首の歌奉りし時

贈従三位為子

行く人も えぞ過ぎ遣らぬ 吹き返す 衣の関の 今朝の嵐に

(続千載・羈旅・八四三)

同じ心(旅)を

津守国助

旅寝する 衣の関を 漏るものは 遙々来ぬる 涙なりけり

(新千載・羈旅・七九一)

友達の東の方へ罷りけるが、かくとも知らせで罷り

下りにければ、詠みて遣はしける 藤原顕綱朝臣

東路に 立つ日をだにも 知らせねば 衣の関の あるぞ甲斐なき

(新統古今・離別・八八一)

題知らず

寂照法師

陸奥の 衣の関か 人知れぬ 涙押さふる 我が袂は

(新統古今・恋一・一〇三〇)

【嵯峨山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一〇例

仁和の帝、嵯峨の御時の例にて、芹川に行幸し

給ひける日

在原行平朝臣

嵯峨の山 御幸絶えにし 芹川の 千代の古道 跡はありけり

(後撰・雑一・一〇七五)

後白河院、栖霞寺に御座しましけるに、駒牽きの

引き分けの使にて参りけるに 定家朝臣

嵯峨の山 千代の古道 跡留めて また露分くる 望月の駒

(新古今・雑中・一六四六)

百首の歌合に、野行幸を 後京極摂政前太政大臣

芹川の 波も昔に 立ち返り 御幸絶えせぬ 嵯峨の山風

(続古今・雑下・一七五〇)

嘉元の百首の歌奉りしとき、山 前大僧正良覚

千代経べき 君が住み処の 嵯峨の山 今も昔の 跡ぞ畏き

(続千載・賀・二二二六)

文保の百首の歌奉りける時 法印定為

嵯峨の山 今も重なる 跡見えて 行末遠し 代代の古道

(続後拾遺・賀・六〇六)

前大納言定房の家にて月の十五首の歌、

詠み侍りけるに、野月 権律師浄弁

古への 秋にも越えて 嵯峨の山 裾野の月は 影も曇らず

(続後拾遺・雑上・一〇三一)

大覚寺に住み侍りける頃、詠める 二品法親王寛尊

年を経て 荒れこそ増され 嵯峨の山 君住み来し 跡はあれども (風雅・雑中・一七九一)

同じ(後宇多院、崩れさせ給う)頃、前大納言

為世の許に、申し遣はしける 権僧正道我
思へただ 照る日も暮れて 嵯峨の山 迷ふ心の 晴れぬ闇路を (新千載・哀傷・二二二一)
返し 前大納言為世
嵯峨の山 照る日の影の 暮れしより 同じ心の 闇に迷ひき (新千載・哀傷・二二二二)
弥生の頃、源頼之朝臣が遠忌に、嵯峨の墓所に
罷りたりけるに、雪の降るを見て 源道元朝臣
思はずよ 花を形見の 嵯峨の山 雪に跡訪ふ 千代の古道 (新統古今・哀傷・一五六二)

【佐保川】 (大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…三六例

(尚侍の、右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に、

四季の絵描ける後の屏風に書きたりける歌) 素性法師

千鳥鳴く 佐保の川霧 立ちぬらし 山の木の葉も 色増さりゆく (古今・賀・三六一)

(題知らず) (読人知らず)

冬来れば 佐保の川瀬に 居る鶴も 独り寝難き 音をぞ鳴くなる (後撰・冬・四四六)

春日に詣でける道に、佐保川の辺りに、初瀬より

帰る女車の逢ひて侍りけるが、簾の開きたるより

僅かに見入れければ、相知りて侍りける女の、志

深く思ひ交はしながら、憚る事侍りて、あひ離れ

て六・七年ばかりになり侍りにける女に侍りけれ

ば、かの車に言ひ入れ侍りける 閑院左大臣

古里の 佐保の川水 今日もなほ かくて逢瀬は 嬉しかりけり (後撰・雑二・一一六一)

右大将定国家屏風に 忠岑

千鳥鳴く 佐保の川霧 立ちぬらし 山の木の葉も 色変はり行く (拾遺・秋・一八六)

初瀬へ詣で侍りける道に、佐保山の本より罷り

宿りて、朝に霧の立ち渡りて侍りければ 惠慶法師

紅葉見に 宿れる我と 知らねばや 佐保の川霧 立ち隠すらん (拾遺・秋・一九三)

題知らず 紀友則

夕去れば 佐保の川原の 川霧に 友惑はせる 千鳥鳴くなり (拾遺・冬・二三八)

初瀬へ詣で侍りける道に、佐保山の辺りに

宿りて侍りけるに、千鳥の鳴くを聞きて 能宣

暁の 寝覚めの千鳥 誰が為か 佐保の川原に 復ち返り鳴く (拾遺・雑上・四八四)

永承四年、内裏歌合に、千鳥を、詠み侍りける 堀川右大臣

佐保川の 霧の彼方に 鳴く千鳥 声は隔てぬ ものにぞありける (後拾遺・冬・三八八)

太皇太后宮扇合に、月の心を、詠める 大納言経信

春日山 峰より出づる 月影は 佐保の川瀬の 氷なりけり (金葉・秋・二〇四)

撰政左大臣言えにて、蘭を、詠める 源忠季

佐保川の 汀に咲ける 藤袴 波の寄りてや 掛けんとすらん (金葉・秋・二三四)

傳大納言道綱家歌合に、千鳥を、詠める 藤原長能

妹許と 佐保の川辺を 我が行けば 小夜か更けぬる 千鳥鳴くなり (千載・冬・四二四)

佐保の河原に、千鳥の鳴きけるを、詠み侍りける 伊勢大輔

行く先は 小夜更けぬれど 千鳥鳴く 佐保の川原は 過ぎ憂かりけり (新古今・冬・六四二)

嘆く事侍りける頃 知足院入道前関白太政大臣

佐保川の 流れ久しき 身なれども 憂き瀬に逢ひて 沈みぬるかな (新古今・雑中・一六四七)

文治六年、女御入内屏風に、春日祭

入道前関白太政大臣

今日祭る 神の心や 靡くらむ 垂に波立つ 佐保の川風 (新古今・神祇・一八九六)

(題知らず) 中納言家持

千鳥鳴く 佐保の川門の 清き瀬を 駒打ち渡し 何日か通はむ (新勅撰・雑四・一二七四)

光俊朝臣、人々に百首の歌勸め侍りける、冬の歌

中納言為氏

声立てて 千鳥鳴くなり 古里の 佐保の川風 夜寒なるらし (続古今・冬・六〇二)

建保五年、内裏歌合に、冬河風 参議雅経

この頃は 時雨も雪も 古里に 衣掛け干す 佐保の川風 (続拾遺・冬・四三六)

(題知らず) 内大臣

淀むなよ 佐保の川水 昔より 絶えぬ流れの 跡に任せて (新後撰・雑中・一三九九)

題知らず 坂上郎女

打ち渡す 佐保の川原の 青柳も 今は春辺と 萌えにけるかも (玉葉・春上・八七)

題知らず 読人知らず

佐保川に 遊ぶ千鳥の 小夜更けて その声聞けば 寝ねられなくに (玉葉・冬・九二三)

題知らず 大伴郎女

千鳥鳴く 佐保の川瀬の 細ら波 止む時もなし 我が恋ふらくは (玉葉・恋三・一四九七)

(題知らず) 後京極撰政前太政大臣

頼もしな 佐保の川瀬の 神寂びて 汀の千鳥 八千代とぞ鳴く (続千載・神祇・八八四)

後法性寺入道前関白、右大臣に侍りける時、家に

百首の歌詠み侍りける 大宰大貳重家

代代経とも 絶えずぞ澄まん 昔より 流れて久しき 佐保の川水 (続千載・賀・二一三八)

題知らず 昭慶門院一条

冴え増さる 佐保の川原の 月影に 門渡る千鳥 声ぞ更けぬる (続後拾遺・冬・四六三)

(文保の百首の歌奉りける時) 関白太政大臣

家の風 絶えぬ流れと 君知らば あはれは掛けよ 佐保の川波 (続後拾遺・雑中・一一二六)

文保の百首の歌に 芬陀利花院前関白内大臣

沈む身と 何嘆きけん 佐保川の 深き恵の かかりける代に (風雅・雑下・一六二一)

建武二年、内裏にて人々題を探りて、千首の歌仕う

まつりける時、千鳥の歌に 前大僧正覚円

絶えぬべき 法の流れの 友千鳥 佐保の川原に 鳴く鳴くぞ聞く (新千載・釈教・九〇三)

(題知らず) 前関白左大臣

流れをば さすが汲みても 過ぎにけり 水上深き 佐保の川波 (新千載・雑中・一八七八)

(題知らず) 円光院入道前関白太政大臣

佐保川の 古き流れと 思ふにも 老の波こそ 身に知られけれ (新千載・雑中・一八七九)

百首の歌奉りし時、述懐 前関白

百首の歌奉りし時、述懐 前関白

木隠れぬ 名のみ流れて 佐保川の 瀬に立つとしも なき身なりけり (新千載・雑中・一八八〇)

春日社に、詠みて奉りける百首の歌の中に 参議雅経

天の原 振り放け仰ぐ… 水上清き 佐保川の… (新千載・雑下・二一三五)

嘉元の百首の歌奉りける時、千鳥 今出河前右大臣

冬去れば 佐保の川風 冴ゆる夜の 更けたる月に 千鳥鳴くなり (新拾遺・冬・六〇八)

神祇を 藤原長能

三笠山 麓を巡る 佐保川の さして祈りし 身を頼むかな (新拾遺・神祇・一四一五)

柳随風と言ふ事を 西行法師

見渡せば 佐保の川原に 繰り懸けて 風に縊らるる 青柳の糸 (新拾遺・雑下・一九一八)

百首の歌奉りし時 前撰政左大臣

人並みに 世をや渡らむ 佐保川の 澄むも濁るも 分かぬ身にして (新統古今・雑中・一九二一)

後福光園撰政薨れ侍りての頃、源義将朝臣、元より

年月馴れにける事など申して侍る返事に 権中納言雅縁

春日山 木高き松も… 衣手を掛けても干さぬ 佐保川の… (新統古今・雑下・二〇四六)

【佐保山】 (大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一九例

大和の国に罷りける時、佐保山に霧の立てり

けるを見て、詠める 紀友則

誰が為の 錦なればか 秋霧の 佐保の山辺を 立ち隠すらむ (古今・秋下・二六五)

是貞親王の家の歌合の歌

秋霧は 今朝はな立ちそ 佐保山の 柞の紅葉 外にても見む (古今・秋下・二六六)

秋の歌とて、詠める 坂上是則

佐保山の 柞の色は 薄けれど 秋は深くも なりにけるかな (古今・秋下・二六七)

題知らず

佐保山の 柞の紅葉 散りぬべみ 夜さへ見よと 照らす月影 (古今・秋下・二八一)

大和に罷りける時、かれこれ供にて 読人知らず

天の川 雁ぞ戸渡る 佐保山の 梢はむべも 色付きにけり (古今・秋下・三六六)

(題知らず)

初時雨 降る程もなく 佐保山の 梢遍く 移ろひにけり (後撰・冬・四四四)

題知らず

入日射す 佐保の川辺の 柞原 曇らぬ雨と 木の葉降りつつ (新古今・秋下・五二九)

寛平の御時、後の宮歌合に

神無月 時雨降るらし 佐保山の 真拆の葛 色増さり行く (新古今・冬・五七四)

(題知らず)

佐保山の 柞の紅葉 徒に 移ろふ秋は ものぞ哀しき (新勅撰・雑一・一〇九五)

題知らず

吹く風に 散るだに惜しき 佐保山の 紅葉扱き垂れ 時雨さへ降る (続古今・冬・五五三)

初瀬に詣でて、佐保山の紅葉の散りたるを見て 康資王母

佐保山の 嵐ぞやがて 脱がせける 紅葉の錦 身には着たれど (続千載・雑体・七四八)

春日社に奉りける百首の歌の中に 前大納言為家

色変はる 梢を見れば 佐保山の 朝霧隠れ 雁は来にけり (風雅・秋中・五五四)

(冬の歌の中に)

順徳院御製

千鳥鳴く 佐保の山風 声冴えて 川霧白く 明けぬこの夜は (風雅・雑上・一六〇九)

三十首の歌詠ませ給うける中に 伏見院御製

誘ひ行く 佐保山嵐 待て暫し 柞の紅葉 秋深き頃 (新千載・秋下・五八九)

同じ心(落葉)を

殷富門院大輔

神無月 時雨の雨の 織り懸けし 錦吹き下す 佐保の山風 (新拾遺・雑上・一六七七)

題知らず

衣笠前内大臣

佐保山の 梢も色や 変はるらん 霧立つ空に 雁は来にけり (新後拾遺・秋上・三三九)

弘長の百首の歌奉りける時、柳 衣笠前内大臣

佐保山の 峰に霞は 棚引きて 川沿ひ柳 春めきにけり (新続古今・春上・八九)

新玉津島社に奉りける歌の中に、山朝霧と言ふ事を

権中納言雅縁

今朝はなほ 柞の色も 薄霧の 下に待たるる 佐保の山風 (新続古今・秋下・五四六)

弘長元年の百首の歌奉りける時 前大納言為氏

唐錦 染め掛けてけり 佐保山の 梢時雨るる 秋の紅葉葉 (新続古今・秋下・五八九)

【更級】(信濃)

●玄々集……用例無

●能因法師集…一例

九月十三夜の月を、ひとり望月詠之

さらしなや をばすて山に 旅ねして こよひの月を むかし見しかな (二二三)

●勅撰和歌集…二三例

(題知らず)

(題知らず)

我が心 慰めかねつ 更級や 姨捨山に 照る月を見て (古今・雑上・八七八)

義忠朝臣もの言ひける女の姪なる女に、また

住み移り侍りけるを聞きて、遣はしける

赤染衛門

真にや 姨捨山の 月は見る 世に更級と 思ふ辺りを (後拾遺・雑四・一〇九一)

(百首の歌召しける時、旅の歌として、

詠ませ給うける) 藤原季通朝臣

更級や 姨捨山に 月見ると 都に誰れか 我を知るらん (千載・羈旅・五一二)

題知らず

伊勢

更級や 姨捨山の 有明の 尽きずものを 思ふ頃かな (新古今・恋四・一二五七)

題知らず

正三位家隆

更級や 姨捨山の 高嶺より 嵐を分けて 出づる月影 (新勅撰・秋上・二五四)

九月十三夜の月を一人眺めて、思ひ出で侍りける

能因法師

更級や 姨捨山に 旅寝して 今宵の月を 昔見しかな (新勅撰・秋上・二八二)

名所の御歌の中に

後鳥羽院御製

味気無く 慰めかねつ 更級や かからぬ山も 月は澄むらん (続古今・秋上・四一二)

名所の百首の歌人々に召しけるに、更級里秋

(順徳院御歌)

更級や 夜渡る月の 里人も 慰めかねて 衣擣つなり

(続古今・秋下・四七三)

題知らず

鎌倉右大臣

月見れば 衣手寒し 更級や 姨捨山の 峰の秋風

(続千載・秋下・四五九)

題知らず

祝部成茂

更級や 姨捨山の 昔より 秋の心は 月ぞ知るらむ

(続後拾遺・秋下・三五六)

正治二年、百首の歌に

三条入道左大臣

更級や 姨捨山の 月は見じ 思ひ遣るだに 涙落ちけり

(新拾遺・秋上・四〇六)

月の歌とて、詠ませ給うける

後二条院御製

更級や 姨捨山も さもあらばあれ ただ我が宿の 雲の上の月

(新後拾遺・秋上・三六三)

月多遠情と言ふ事を

源有宗朝臣

更級や 姨捨山の 峰までも 思ひ遣らるる 夜半の月影

(新続古今・秋上・四六六)

【猿沢の池】 (大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二例

包み焼き

(輔相)

我妹子が 身を捨てしより 猿沢の 池の堤や 君は恋しき

(拾遺・物名・四一一)

猿沢の池に、采女の身投げたるを見て

人麿

我妹子が 寝腐れ髪を 猿沢の 池の玉藻と 見るぞ哀しき

(拾遺・哀傷・一二八九)

【志賀の嶋】 (筑前)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一例

筑紫の志賀の島を見て 為助

つれなくたてる 志賀の島かな／＼弓張の 月の入るにも おどろか

(国忠)

(金葉・雑下(連歌)・六五五)

【然菅(の渡り)】 (三河)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

しかすがのわたりに宿りて

思ふ人 ありとなけれど 故郷は しかすがにこそ 恋しかりけれ

(九〇)

●勅撰和歌集……五例

大江為基、東へ罷り下りけるに、扇を遣はすとて

赤染衛門

惜しむとも なきもの故に 然菅の 渡りと聞けば 徒ならぬ

(拾遺・別・三一六)

然菅の渡りにて、詠み侍りける

能因法師

思ふ人 ありとなけれど 古里は 然菅にこそ 恋しかりけれ

(後拾遺・羈旅・五一七)

屏風の絵に、然菅の渡り行く人、立ち煩ふ形、

描ける所を、詠める

藤原家経朝臣

行く人も 立ちぞ煩ふ 然昔の 渡りや旅の 泊りなるらん

(金葉・雑上・五八三)

然昔の渡りにて、詠み侍りける

中務

行けばあり 行かねば苦し 然昔の 渡りに来てぞ 思揺蕩ふ

(新勅撰・雑四・一二九一)

(恋の歌の中に)

二品法親王慈道

逢ふ瀬こそ 間遠なりとも 然昔の 渡り馴れにし 中な忘れそ

(続後拾遺・恋三・八五一)

【志賀の浦】(近江)

●玄々集……………一例

少納言統理が、出家して、近江に侍りけるに、つかはしける

さゝなみや 志賀の浦風 いかばかり 心の内の 涼しかるらん

(藤原公任・五三)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…四六例

少納言藤原統理に年来契ること侍りけるを、

志賀にて出家し侍ると聞きて、言遣はしける

(右衛門督公任)

楽波や 志賀の浦風 如何ばかり 心の内の 涼しかるらん

(拾遺・哀傷・一三三六)

題知らず

快覚法師

小夜更くる ままに汀や 凍るらん 遠離り行く 滋賀の浦波

(後拾遺・冬・四一九)

高階成順、石山へ籠りて、久しう音信し侍らざり

ければ、詠める

伊勢大輔

見る目こそ 近江の海に 難からめ 吹きだに通へ 志賀の浦風

(後拾遺・恋三・七一七)

志侍りける女の、異様になりて後、石山に籠り

合ひて侍りければ、詠み侍りける 前大納言経輔

恋しさも 忘れやはする なかなかに 心騒がず 志賀の浦波

(後拾遺・恋三・七五二)

花の歌とて、詠み侍りける

左近中将良経

桜咲く 比良の山風 吹くからに 花になり行く 志賀の浦波

(千載・春下・八九)

法性寺入道前太政大臣家にて、月の歌詠ませ

侍りける時、詠める

大宰大式重家

遠離る 音はせねども 月清み 氷と見ゆる 志賀の浦波

(千載・秋上・二八九)

撰政、右大臣に侍りける時、百首の歌詠ませ

侍りける時、雪の歌とて、詠める 藤原良清

吹雪する 長等の山を 見渡せば 尾上を越ゆる 志賀の浦波

(千載・冬・四六一)

上西門院、賀茂の齋院と申しけるを代はらせ給うて、

唐崎に被へし給ひける御供にて、女房の許に、遣は

しける

八条前太政大臣

昨日まで 御手洗川に せし禊 志賀の浦波 立ちぞ代はれる

(千載・雑上・九七二)

心の外なる事にて、知らぬ国に罷りけるを、事直りて、

京に上りて後、日吉の社に参りて、詠める 平康頼

思ひきや 志賀の浦波 立ち返り また逢ふ身とも ならむものとは

(千載・雑中・一一二〇)

撰政太政大臣家歌合に、湖上冬月 藤原家隆朝臣

志賀の浦や 遠離行く 波間より 凍りて出づる 有明の月

(新古今・冬・六三九)

寛喜元年、女御入内の屏風、湖辺氷結 内大臣

志賀の浦や 氷の隙を 行く舟に 波も道ある 世とや見るらむ

(新勅撰・冬・四〇一)

日吉社垂跡の心を、詠み侍りける 前大僧正慈円

志賀の浦に 五つの色の 波立てて 天下りける 古への跡

(新勅撰・神祇・五五八)

題知らず 左近中将公衡

汀には 峰の桜を 扱き留めて 雲に波越す 志賀の浦風

(続後撰・春下・一三八)

日吉社に詠みて奉りける歌の中に、大宮 後京極摂政前太政大臣

古への 鶴の林に 散る花の 匂ひを寄する 志賀の浦風

(続後撰・神祇・五六八)

百首の御歌の中に 後鳥羽院御歌

春風に 幾重の氷 今朝溶けて 寄せぬに返る 志賀の浦波

(続古今・春上・一四)

(題知らず) 平重時朝臣

楽浪や 長等の桜 長き日に 散らまく惜しき 志賀の浦風

(続古今・春下・九二)

名所の歌奉りける時 前大僧正慈鎮

志賀の浦や 暫し時雨の 雲ながら 雪になり行く 山嵐の風

(続拾遺・冬・四三五)

(題知らず) 院大納言典侍

秋の夜は 比良の山風 冴えねども 月にぞ凍る 志賀の浦波

(新後撰・秋下・三五五)

堀河院に百首の歌奉りける時 権大納言公実

志賀の浦の 松吹く風の 寂しさに 夕波千鳥 立ち居鳴くなり

(新後撰・冬・四八二)

花の歌とて、詠み侍りける 権中納言師俊

楽浪や 長等の山の 花盛り 志賀の浦風 吹かずもあらなむ

(玉葉・春下・一四八)

(題知らず) 読人知らず

志賀の浦や 時雨れて渡る 浮雲に 三上の山ぞ 半ば隠るる

(玉葉・雜一・二〇三一)

弘長元年、後嵯峨院に百首の歌奉りける時 前大納言為家

立ち返り 春は来にけり 楽浪や 氷吹き溶く 志賀の浦風

(続千載・春上・四)

左大将に侍りける時、伊勢の勅使に下り侍り

けるに、逢坂を過ぐとて 後京極摂政前太政大臣

逢坂の 山越え果てて 眺むれば 霞に続く 志賀の浦波

(続後拾遺・春上・三一)

水上月と言へる事を、詠ませ給うける 後鳥羽院御製

楽浪や 志賀の浦に 霧晴れて 月澄み渡る 唐崎の浜

(続後拾遺・秋下・三三七)

建長五年、後嵯峨院に、三首の歌講ぜられる時、

寒夜千鳥 土御門入道内大臣

志賀の浦 汀の波は 凍り居て 己のみ立つ 小夜千鳥かな

(続後拾遺・冬・四五八)

弘安元年、龜山院に百首の歌奉りける時、春の歌 権中納言公雄

鳩照るや 志賀の浦風 春掛けて 小夜ながら 立つ霞かな

(新千載・春上・一六)

貞和二年、百首の歌召されし時 入道一品親王尊円

志賀の浦や 浜松が枝に 春の色を 空に深めて 立つ霞かな

(新千載・春上・一七)

題知らず 伏見院御製

志賀の浦や 寄せ来る波も 白妙に 花咲き下す 比良の山風

(新千載・春下・一五七)

嘉元の百首の歌奉りける時、花 六条内大臣

志賀の浦や 桜吹き越す 山風に 寄る辺定めぬ 花の小波

(新千載・春下・一五八)

近衛院御時、藏人所歌合に、同じ心〈落葉〉を、

詠み侍りける

刑部卿範兼

紅葉散る 長等の山の 風吹けば 錦を畳む 志賀の浦波

(新千載・冬・六一六)

竹生島と言ふ所に住み侍りける頃、山の衆徒愁へ

申す事ありて、日吉社の神事など打ち止むる由伝

へ聞きて、思ひ続け侍りける 法印定宗

遙かなる 沖の小島の 旅寝する 心に掛かる 志賀の浦波

(新千載・羈旅・七七〇)

嘉元の百首の歌奉りける時、霞 円光院入道前関白太政大臣

見る目なき 慣らひ知られて 春はなほ 霞に辿る 志賀の浦波

(新拾遺・春上・三五)

湖月の心を

後二条院御製

志賀の浦や 氷砕けて 秋風の 吹き頻く波に 浮かる月影

(新拾遺・雑上・一六四七)

百首の歌奉りし時、湖月

左大臣

月ばかり 澄めとぞ馴れる 楽浪や 荒れにし里は 志賀の浦風

(新後拾遺・秋下・三八九)

宝治の百首の歌奉りける時、同じ心(湖月)を

安嘉門院高倉

鏡山 曇らぬ秋の 月なれば 光を磨く 志賀の浦波

(新後拾遺・秋下・三九〇)

月の歌とて

源頼春朝臣

楽浪の 音にも夜半や 更けぬらし 月の静まる 志賀の浦風

(新後拾遺・秋下・三九二)

水上花を、詠める

為道朝臣

山風の 桜吹き播く 志賀の浦に 浮きて立ち添ふ 花の小波

(新後拾遺・雑春・六三七)

題知らず

源藤経

比良の山 高嶺の嵐 吹くなへに 花を寄せ来る 志賀の浦波

(新後拾遺・雑春・六三八)

題知らず

後鳥羽院御製

駒並めて 打出の浜を 見渡せば 朝日の騒ぐ 志賀の浦波

(新後拾遺・羈旅・八七二)

立春氷と言へる事を、詠ませ給うける

後小松院御製

志賀の浦や 寄せて返らぬ 波の間に 氷打ち溶け 春は来にけり

(新統古今・春上・二)

延文二年、百首の歌奉りける時、霞を 等持院贈左大臣

楽浪も 春に返りて 志賀の浦や 水海遠く 立つ霞かな

(新統古今・春上・一五)

帰雁を

前大納言為家

遠離る 雲居の雁の 影も見ず 霞みて返る 志賀の浦波

(新統古今・春上・一〇二)

宝治二年、百首の歌召されける次に、湖月と

言へる事を、詠ませ給うける 後嵯峨院御製

楽浪や 志賀の浦風 海吹けば 鳩照り増さる 月の影かな

(新統古今・秋上・四四八)

建仁元年三月尽、歌合に、湖上曉霧と言ふ事を、

詠ませ給うける

後鳥羽院御製

志賀の浦や 鳩照る沖は 霧籠めて 飽きも臆の 有明の月

(新統古今・秋下・五四九)

(応永十四年、内裏の三首の歌合に、浦雪)

小槻兼治

楽浪や 釣りする海人の 袖までも 雪にぞ反る 志賀の浦風

(新統古今・冬・七一三)

(題知らず)

正三位成国

浅緑 霞むを見れば 志賀の浦や 神代の松に 春は来にけり (新統古今・雑上・一六〇八)

【敷島】(大和)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集…四例

雲間微月と言ふ事を 堀河院御製

敷島や 高田山の 雲間より 光射し添ふ 弓張の月

(新古今・秋上・三八三)

題知らず 権中納言長方

敷島や 布留の都は 埋もれて 奈良思の丘に 深雪積もれり

(新勅撰・冬・四一一)

建保二年秋、十首の歌召しける次に 後鳥羽院御製

敷島や 高田山の 秋風に 雲なき峰を 出づる月影

(続後撰・秋中・三二〇)

建保五年、内裏歌合に、冬山霜 順徳院御製

敷島や 三室の山の 岩小菅 それとも見えず 霜冴ゆる頃

(新後撰・冬・四六七)

【志筑の山(森)】(常陸)

● 玄々集……………用例無

● 能因法師集…用例無

● 勅撰和歌集…一例

百首の歌奉りし時、杜紅葉 前内大臣実

染めてけり 時雨も露も 干しやらぬ 志筑の森の 秋の紅葉葉 (新後拾遺・秋下・四四五)

【塩釜の浦】(陸奥)

● 玄々集……………用例無

● 能因法師集…一例

塩釜の浦

塩釜の うらに波立ち さ夜ふけて 我身のうへと 思ひしものを (一四四)

● 勅撰和歌集…二二例

(陸奥歌)

陸奥は 何処はあれど 塩釜の 浦漕ぐ舟の 綱手哀しも (古今・東歌・一〇八八)

返し 能宣

世の中を 思へば苦し… ものとし見し 塩釜の 浦寂しげに… (拾遺・雑下・五七二)

(百首の歌召しける時、月の歌とて、詠ませ給うける) 藤原清輔朝臣

塩釜の 浦吹く風に 霧晴れて 八十島かけて 澄める月影 (千載・秋上・二八五)

百首の歌奉りし時 前大僧正慈円

更け行かば 煙もあらし 塩釜の 浦みな果てそ 秋の夜の月 (新古今・秋上・三九〇)

家に百首の歌、詠ませ侍りけるに 入道前関白太政大臣

降る雪に 焚く藻の煙 掻き絶えて 寂しくもあるか 塩釜の浦 (新古今・冬・六七四)

世の儂き事を嘆く頃、陸奥国に名ある所所 書きたる絵を見侍りて、詠める 紫式部

見し人の 煙になりし 夕より なぞ睦ましき 塩釜の浦 (新古今・哀傷・八二〇)

海辺霞と言へる心を、詠み侍りし 家隆朝臣

見渡せば 霞の内も 霞みけり 煙棚引く 塩釜の浦 (新古今・雑中・一六一一)

屏風の絵に、塩釜の浦描きて侍りけるを 一条院皇后

古への 海人や煙と なりぬらむ 人目も見えぬ 塩釜の浦 (新古今・雑下・一七一七)

十首の歌合に、海辺月と言へる心を、詠ませ給うける

太上天皇

塩釜の 浦の煙は 絶えにけり 月見むとての 海人の仕業に (続後撰・秋中・三四八)
題知らず 読人知らず

塩釜の 浦とはなしに 君恋ふる 煙も絶えず なりにけるかな (続後撰・恋二・七三七)
題知らず 後鳥羽院御製

塩釜の 浦の干潟の 曙に 霞に残る 浮島の松 (続古今・春上・四五)
(題知らず) 大納言経信

煙立つ 海人の苦屋も 見えぬまで 霞みにけりな 塩釜の浦 (続古今・春上・五二)
東に下りて侍りける時、旅の歌数多詠み侍りけるに 従三位行能

同じくは 越えてや見まし 白河の 関の彼方の 塩釜の浦 (続古今・羈旅・九一〇)
(同じ心〈寄煙恋〉を) 正三位知家

塩釜の 浦の煙も あるものを 立つ名苦しき 身の思ひかな (続古今・恋二・一〇八四)
雪中遠情と言ふ事を 法性寺入道前関白太政大臣

搔き暗し 降る白雪に 塩釜の 浦の煙も 絶えやしぬらん (続拾遺・冬・四五五)
嘉元元年、後宇多院に百首の歌奉りける時、霞 入道前太政大臣

海人の焚く 煙よりこそ 塩釜の 浦の霞は 立ち始めけれ (続後拾遺・春上・三二)
文保三年、百首の歌奉りける時 権中納言公雄

塩釜の 浦の煙の 一筋に 立つとも見えず 霞む空かな (続後拾遺・春上・三三)
(題知らず) 藤原為道朝臣

漕ぐ舟も 波の何処に 迷ふらん 霞の奥の 塩釜の浦 (新千載・春上・一二)
題知らず 藤原隆信朝臣

明けぬとや 釣する舟も 出でぬらん 月に棹さす 塩釜の浦 (新拾遺・雑上・一六五〇)
題知らず 正三位知家

春の色は 分きてそれとも なかりけり 煙ぞ霞む 塩釜の浦 (新後拾遺・春上・三九)
(題知らず) 為冬朝臣

塩釜の 浦より外も 霞めるを 同じ煙の 立つかとぞ見る (新後拾遺・雑春・五八四)
贈左大臣長実家にて歌合し侍りける時、霞 源俊頼朝臣

何時しかと 霞みにけりな 塩釜の 浦行く舟の 見え紛ふまで (新続古今・春上・二六)

【標野】(山城)

●玄々集……………用例無

●能因法師集……………用例無

●勅撰和歌集……………一例

文永二年九月十三夜歌合、野鹿を 太上天皇
寝られずや 妻を恋ふらむ 標野行き 紫野行き 鹿ぞ鳴くなる (続古今・秋下・四三五)

【白河】(山城)

●玄々集……………二例

水上の 山の紅葉は 散りにけり 柵掛けよ 白川の水 (藤原長能・六四)

右衛門督の、白川へ、花見になんまかる、

と言ひ入れ給へりければ

春の来ぬ ところはなきに 白河の わたりにのみや 花は咲くらん (和泉式部・一三三)

●能因法師集……………用例無

●勅撰和歌集：一七例

(題知らず)

平貞文

白川の 知らずとも言はじ 底清み 流れて世々に 澄まむと思へば (古今・恋三・六六六)

前太政大臣を、白河の辺りに送りける夜、詠める 素性法師

血の涙 落ちてぞ激つ 白川は 君が世までの 名にこそありけれ (古今・哀傷・八三〇)

高倉の一宮の女房、花見に白河に罷りけるに、

読み侍りける 伊賀少将

何事を 春の形見に 思ふまし 今日白川の 花見ざりせば (後拾遺・春上・一一九)

白河にて、花の散りて流れけるを、詠み侍りける

土御門右大臣

行末を 堰き止めばや 白川の 水とともにぞ 春も行きける (後拾遺・春下・一四録)

白河の花見の御幸に 太政大臣

白川の 流れ久しき 宿なれば 花の匂ひも 長閑けかりけり (金葉・春・三一)

(人に代はりて、詠める) 待賢門院兵衛

万代の 例と見ゆる 花の色を 移し止めよ 白川の水 (金葉・春・三三)

白川に花見に罷りて、詠める 源俊頼朝臣

白川の 春の梢を 見渡せば 松こそ花の 絶え間なりけれ (詞花・春・二六)

新院、位に御座しましたし時、上の男どもを

召して、述懐の歌詠ませさせ給ひけるに、

白河院の御事を忘るる時なく憶え侍りければ

大納言成通

白川の 流れを頼む 心をば 誰れかは空に 汲みて知るべき (詞花・雑下・三七七)

鳥羽院、位下りさせ給ひて後、白河に御幸

ありて、花御覧じける日、詠み侍りける

花園左大臣

影清き 花の鏡と 見ゆるかな 長閑に澄める 白川の水 (千載・春上・四四)

述懐の歌詠み侍りける時、昔白川院に近く仕う

まつりける事を思ひて、詠み侍りける

藤原家基法名素覚

古へも 底に沈みし 身なれども なほ恋しきは 白川の水 (千載・雑中・一〇八一)

最勝寺の桜は、鞠の懸かりにて、久しくなりにしを、

その木年古りて、風に倒れたる由聞き侍りしかば、

男どもに仰せて、異木をその跡に移し植ゑさせし

時、先づ罷りて見侍りければ、数多の年年、暮れ

にし春まで、立ち馴れにける事など思ひ出でて、

詠み侍りける 藤原雅経朝臣

馴れ馴れて 見しは名残の 春ぞとも など白川の 花の下陰 (新古今・雑上・一四五六)

同じ(文永)五年九月十三夜、白河殿の

五首の歌合に、河水澄月 前右兵衛督為教

秋の夜の 月もなほこそ 澄み増され 世世に変はらぬ 白川の水 (新後撰・秋下・三五二)

(同じ(文永)五年九月十三夜、白河殿の

五首の歌合に、河水澄月) 法印憲実

待たれつる 秋は今宵と 白川の 流れも清く 澄める月影 (新後撰・秋下・三五三)

中納言経俊身罷りて後、吉田の家にて、詠み侍りける

前大納言俊定

如何にして 昔より澄む 白川の 跡濁らずと 人に知られん

(続千載・雑中・一九二)

(述懐の歌の中に)

前大納言経顕

今までは 代代経て澄みし 白川の 濁らじ水の 心ばかりは

(風雅・雑下・一八〇)

入道親王覚蒼入室の後、題を探りて歌詠み

侍りける時、河千鳥を 二品法親王覚助

白川の 絶えぬ流れを 訪ね来て 万代契る 友千鳥かな

(新千載・慶賀・二三三)

鳥羽院、位下りさせ給ひて後、白河に御幸

ありて、花御覧じける日、詠み侍りける

法性寺入道前関白太政大臣

常よりも 珍しきかな 白川の 花もて映やす 春の御幸は

(新拾遺・春下・一一二)

【白川】(肥後)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一例

筑紫の白川と言ふ所に住み侍りけるに、大弐

藤原興範朝臣の罷り渡る次に、水飲べむとて

打ち寄りて乞ひ侍りければ、水を持って出でて、

詠み侍りける

檜垣姫

年経れば 我が黒髪も 白川の 瑞齒含みまで 老いにけるかな

かしこに名高く事好む女になん、侍りける。

(後撰・雑三・一二一九)

【白河の関】(陸奥)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

二年の春、陸奥国にあからさまに下るとて、

白河の関に宿りて

都をば 霞とともに 立ちしかど 秋風ぞ吹く 白河の関

(二〇一)

●勅撰和歌集……三一例

陸奥国の白河関越え侍りけるに

平兼盛

便りあらば 如何で都へ 告げ遣らむ 今日白河の 関は越えぬと (後撰・雑三・一二一九)

白河院にて、花を見て、詠み侍りける 民部卿長家

東路の 人に問はばや 白河の 関にもかうや 花は匂ふと (後拾遺・春上・九三)

橘則光、陸奥国に下り侍りけるに、

言ひ遣はしける 中納言定頼

仮初の 別れと思へど 白河の 関止めぬは 涙なりけり (後拾遺・別・四七七)

陸奥国に罷り下りけるに、白河の関にて、

詠み侍りける

(能因法師)

都をば 霞と共に 立ちしかど 秋風ぞ吹く 白河の関

(後拾遺・羈旅・五一八)

白河院、鳥羽殿に御座しましたしける時、男ども歌合し

侍りけるに、卯の花を、詠める 藤原季通朝臣

見て過ぐる 人しなれば 卯の花の 咲ける垣根や 白河の関 (千載・夏・一四二)

(嘉応二年、法性寺殿殿上歌合に、関路落葉と

言へる心を、詠み侍りける) 左大弁親宗

紅葉葉の 皆紅に 散り敷けば 名のみなりけり 白河の関 (千載・秋下・三六四)

(嘉応二年、法性寺殿殿上歌合に、関路落葉と

言へる心を、詠み侍りける) 前右京権大夫頼政

都には 未だ青葉にて 見しかども 紅葉散り敷く 白河の関 (千載・秋下・三六五)

羈中歳暮と言へる心を、詠める 僧都印性

東路も 年も末にや なりぬらん 雪降りにけり 白河の (千載・羈旅・五四三)

後京極摂政家の十首の歌合に、秋旅を 寂蓮法師

逢坂を 越えだに果てぬ 秋風に 末こそ思へ 白河の関 (続古今・羈旅・八六九)

題知らず 藤原秀茂

都出でし 日数は冬に なりにけり 時雨れて寒き 白河の関 (続古今・羈旅・九〇三)

東に下りて侍りける時、旅の歌数多

詠み侍りけるに 従三位行能

同じくは 越えてや見まし 白河の 関の彼方の 塩釜の浦 (続古今・羈旅・九一〇)

東の方に罷れりけるに、思ひの外に日数

積もりて、秋にもなりにければ、詠める

津守国助

白河の 関まで行かぬ 東路も 日数経ぬれば 秋風ぞ吹く (続拾遺・羈旅・六七三)

題知らず 観意法師

夕暮れば 衣手寒き 秋風に 一人や越えん 白河の関 (続拾遺・羈旅・六七四)

陸奥国に罷りて、詠み侍りける 藤原頼範女

音にこそ 吹くとも聞きし 秋風の 袖に馴れぬる 白河の関 (新後撰・羈旅・五七五)

(旅の心を) 法印任弁

越え来ても なほ末遠し 東路の 奥とは言はじ 白河の関 (玉葉・旅・一一六六)

百首の歌奉りけるに 皇太后宮大夫俊成

月を見て 千里の外を 思ふかな 心ぞ通ふ 白河の関 (続千載・秋上・四五四)

(題知らず) 源邦長朝臣

秋風は 思ふ方より 吹き初めて 都恋しき 白河の関 (続千載・羈旅・八四二)

関雪を 大江貞重

別れにし 都の秋の 日数さへ 積もれば雪の 白河の関 (続後拾遺・冬・四九二)

小忌衣 津守国助

都出でて 日数思へば 路遠み 頃も経にける 白河の関 (続後拾遺・物名・五一五)

堀河院の百首の歌に、関 祐子内親王家紀伊

越えぬより 思ひこそ遣れ 陸奥の 名に流れたる 白河の関 (続後拾遺・羈旅・五九六)

普光園入道前関白家にて、七夕の七十首の歌

詠み侍りける時、旅 源兼氏朝臣

限りあれば 今日白河の 関越えて 行けば行かるる 日数をぞ知る

(続後拾遺・羈旅・五九七)

陸奥国へ罷りける時、関を越えて後、白河の関は何処ぞ、

と尋ね侍りければ、過ぎぬる所こそかの関に侍れ、と

蓮生法師申し侍りければ、光台の不見も思ひ出だされて

証空上人

光台に 見しは見しかは 見ざりしを 聞きてぞ見つる 白河の関 (新千載・羈旅・七七九)

東の方へ修行し侍りけるに、白河関にて月の

明かかりければ、柱に書き付けける 西行法師

白河の 関屋を月の 漏る影は 人の心を 止むるなりけり (新千載・羈旅・七八二)

元亨元年八月十五夜、内裏歌合に、関月 丹波忠守朝臣

今宵こそ 月に越えぬれ 秋風の 音にのみ聞く 白河の関 (新千載・羈旅・七八三)

羈旅 後九条前内大臣

秋風に 今日白河の 関越えて 思ふも遠し 古里の山 (新千載・羈旅・七八四)

旅歳暮を 大蔵卿隆博

帰るさは 年さへ暮れぬ 東路や 霞みて越えし 白河の関 (新千載・羈旅・八〇九)

百首の歌奉りし時、旅 左大臣

都をば 花を見捨てて 出でしかど 月にぞ越ゆる 白河の関 (新千載・羈旅・九〇三)

関旅を 平光俊

逢ふ人も 未だ白河の 関越えて 秋風吹くと 誰れに伝てまし (新千載・羈旅・九四三)

寄関恋 源満元

隔て行く 人の心の 奥にこそ また白河の 関はありけれ (新統古今・恋四・一三九二)

*関《白河》

宇治前太政大臣、白河にて、見行客と

言ふ事を、詠める 堀河右大臣

関越ゆる 人に問はばや 陸奥の 安達の檀 紅葉しにきや (詞花・秋・一三〇)

陸奥国の任に侍りける頃、五月まで郭公

聞かざりければ、都なる人に、便につけ

て、申し遣はしける 藤原実方朝臣

都には 聞き古りぬらん 郭公 関の此方の 身こそ辛けれ (続後撰・夏・一九一)

【白河の滝】 (山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

太政大臣の白川の家に罷り渡りて侍りけるに、

人の曹司に籠り侍りて 中務

白川の 滝といと見ま ほしけれど 濫りに人は 寄せじものをや (後撰・雑一・一〇八六)

返し 太政大臣

白川の 滝の営み 濫れつつ 夜をぞ人は 待つ言ふなる (後撰・雑一・一〇八七)

【白山】 (越前)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一二例

越の国へ罷りける人に、詠みて遣はしける (凡河内躬恒)

外にのみ 恋ひや渡らむ 白山の 雪見るべくも あらぬ我が身は (古今・離別・三八三)

古歌に加へて奉れる長歌 壬生忠岑

吳竹：越の国なる 白山の 頭は白く：

(古今・雑体・一〇〇三)

式部卿敦差ね親王忍びて通ふ所侍りけるを、
後々絶え絶えになり侍りければ、妹の前斎

宮内親王の許より、この頃は如何にぞ、と

ありければ、その返り事に女

白山に 雪降りぬれば 跡絶えて 今は越路に 人も通はず

(題知らず) (読人知らず)

新玉の 年を渡りて あるが上に 降り積む雪の 絶えぬ白山 (後撰・冬・四七〇)

白山へ詣でけるに、道中より便りの人に

付けて、使はしける 読人知らず

都まで 音に降り来る 白山は 行き着き難き 所なりけり (後撰・羈旅・一三五三)

題知らず 前大納言公任

白山も 年降る雪や 積もるらん 夜半に片敷く 袂冴ゆなり (新古今・冬・六六六)

(題知らず) (読人知らず)

白山の 雪の下草 我なれや 下に燃えつつ 年の経ぬらむ (新勅撰・恋二・七二六)

天曆御時御屏風の歌 源信明朝臣

昔より 名に降り積もる 白山の 雲居の雪は 消ゆる世もなし (新勅撰・雜四・一三一九)

庚申の夜、御神樂の次に、女房、歌合

し侍りける 祿子内親王家宣旨

雪降れば 皆白山に なりにけり 何処を越の 方とかは見ん (続後拾遺・冬・四九〇)

源順、能登守にて下り侍りける時、
申し賜りける 中務

何処ぞと 待つ程過ぎば 白山の 雪間の跡を 訪ねざらめや (続後拾遺・離別・五四八)

客人権現は無動寺の座主慶命の時より殊に

崇め奉りける事を思ひて、詠める 前大僧正道玄

分きてなほ 頼む心も 深きかな 跡垂れ初めし 雪の白山 (新千載・神祇・一〇〇六)

白山に詣でて、詠み侍りける 読人知らず

千早降る 雪の白山 分きてなほ 深き頼みは 神ぞ知るらん (新拾遺・神祇・一四二九)

【菅田の池】 (大和)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一例

(崇徳院に百首の歌奉りける時、

恋の歌として、詠める) 待賢門院安芸

恋をのみ 菅田の池に 水草居て 住まで止みなん 名こそ惜しけれ (千載・恋四・八五八)

【鈴鹿川】 (伊勢)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一六例

郁芳門院、伊勢に御座しましける時、

あからさまに下りけるに、鈴鹿川を

渡りける時、詠める 六条右大臣北方

早くより 頼み渡りし 鈴鹿川 思ふ事成る 音ぞ聞こゆる (金葉・雑上・五四〇)

題知らず 皇嘉門院治部卿

五月雨の 日を経るままに 鈴鹿川 八十瀬の波ぞ 声増さるなる (詞花・夏・六五)

最勝四天王院の障子に、鈴鹿川描きたる所 太上天皇

鈴鹿川 深き木の葉に 日数経て 山田の原の 時雨をぞ聞く (新古今・秋下・五二六)

後法性寺入道前関白、百首の歌詠ませ侍りける時、

五月雨を、詠める 皇太后大夫俊成

降り初めて 幾日になりぬ 鈴鹿川 八十瀬も知らぬ 五月雨の頃 (新勅撰・夏・一六四)

百首の歌詠み侍りけるに 後京極撰政前太政大臣

鈴鹿川 八十瀬白波 分け過ぎて 神路の山の 春を見しかな (新勅撰・神祇・五五五)

神祇の歌の中に 僧正行意

鈴鹿川 振り放け見れば 神路山 榊葉分けて 出づる月影 (続後撰・神祇・五四一)

式乾門院、齋宮にて伊勢に下り給ひける

時を思ひ出でて、詠み侍りける 式乾門院御匣

都出でて 八十瀬渡りし 鈴鹿川 昔になれど 忘れやはする (続古今・羈旅・九〇一)

人々六帖の題にて、詠み侍りけるに 正三位知家

鈴鹿川 我が身古りぬる 老いの波 八十瀬も近く 濡るる袖かな (続古今・雑中・一七〇二)

鈴鹿川にて、詠み侍りける 前大僧正隆弁

七十の 年経るままに 鈴鹿川 老いの波寄る 影ぞ哀しき (続拾遺・羈旅・七二〇)

延慶元年八月、野宮より出で給ふとて 奨子内親王

鈴鹿川 八十瀬の波は 分けもせで 渡らぬ袖の 濡るる頃かな (玉葉・雑二・二〇七三)

神祇を、詠ませ給うける 院御製

鈴鹿川 八十瀬の波の 立居にも 我が身の為の 世をば祈らず (新千載・神祇・九五五)

太神宮の歌合に 源兼氏朝臣

神代より 幾歳経りぬ 鈴鹿川 八十瀬の波の 秋の夜の月 (新拾遺・神祇・一三八八)

(題知らず) 橘遠村

鈴鹿川 あらぬ流れも 落ち添ひて 八十瀬に余る 五月雨の頃 (新後拾遺・雑春・六八三)

(千五百番の歌合に) 醍醐入道太政大臣

鈴鹿川 古き流れを 伝へ来て なほ末遠き 君が御代かな (新統古今・賀・七九六)

関路氷と言ふ事を 読人知らず

鈴鹿川 氷や関と なりぬらん 八十瀬の水も 行き遣らぬまで (新統古今・雑上・一七七六)

題知らず 従三位雅家

鈴鹿川 憂かりし瀬瀬を 過し来て 澄む世ぞ神の 恵みなりける (新統古今・神祇・二〇八五)

【鈴鹿山】(伊勢)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一二例

女の許に、衣を脱ぎ置きて、取りに遣はすとて 伊尹朝臣

鈴鹿山 伊勢をの海人の 捨て衣 潮馴れたりと 人や見るらむ (後撰・恋三・七一八)

男の訪はずなりにければ 読人知らず

音信もせず 成りも行くかな 鈴鹿山 越ゆてふ名のみ 高く立ちつつ (後撰・恋六・一〇四〇)

返し (読人知らず)

越えぬてふ 名をな恨みそ 鈴鹿山 いとど間近く ならんと思ふを (後撰・恋六・一〇四一)

天曆十一年九月十五日、齋宮下り侍りけるに、
内裏より硯調じて賜はずとて 御製

思ふ事 成ると言ふなる 鈴鹿山 越えて嬉しき 境とぞ聞く (拾遺・雑上・四九四)

諸共に越え侍りて 齋宮女御

世に経れば またも越えけり 鈴鹿山 昔の今に なるにやあるらん (拾遺・雑上・四九五)

時雨を、詠める 撰政家参河

神無月 時雨の雨の 降る度に 色々になる 鈴鹿山かな (金葉・冬・二六〇)

伊勢に罷りける時、詠める 西行法師

鈴鹿山 憂き世を外に 振り捨てて 如何になり行く 我が身なるらむ (新古今・雑中・一六一三)

名所の歌奉りけるに、鈴鹿山 大蔵卿有家

秋深く なりにけらしな 鈴鹿山 紅葉は雨と 降り紛ひつつ (新勅撰・雑中・一二八九)

伊勢に罷りける人に 小弁

振り延へて かくぞ訪ねぬる 鈴鹿山 越ゆる人だに 訪れねども (続拾遺・羈旅・七二二)

なるを鈴鹿山音信なきにのみ歎かるるかな、

と申し侍りける返事に 小馬命婦

数ならぬ 身は鶴の 鈴鹿山 訪はぬに何の 音信をかはせん (玉葉・恋三・一五六八)

夏の歌の中に 前参議雅有

鈴鹿山 明け方近き 天の戸を 振り出でて鳴く 郭公かな (続千載・夏・二五九)

長月の頃、鈴鹿山の紅葉を見て 能宣朝臣

下紅葉 色々になる 鈴鹿山 時雨のいたく 降ればなるべし (風雅・秋下・六九四)

【住の江】 (撰津)

●玄々集……用例無

●能因法師集……二例

住吉にまうでて、かきつく

すみの江の 久しき年は しら波の 立つを数にて 神やかぞへん (一五)

道濟朝臣、筑前にてうせにけりと聞きて

すみのえに 我はしほたる 君は又 死出の山ごえ あはれなるらん (八六)

●勅撰和歌集……一二例

深養父、恋しとは誰が名付けけむことならむ下 貫之

道知らば 摘みにも行かむ 住の江の 岸に生ふてふ 恋忘草 (古今 (墨滅) ・恋四・一一一一)

(題知らず)

(読人知らず)

打ち忍び いざ住の江の 忘れ草 忘れて人の またや摘まぬと (拾遺・雑上・四六六)

洗うと見れど 黒き島かな (頼算法師)

さもこそは 住の江ならむえ 世と共に (読人知らず) (金葉 (異本)・雑下・七一二)

堀河院御時、百首の歌奉りける時、述懐の

歌に詠みて奉り侍りける 源俊頼朝臣

最上川 瀬瀬の岩角… なほ古里に 住の江の 潮に漂う… (千載・雑下・一一六〇)

題知らず 読人知らず

暇あらば 拾ひに行かむ 住の江の 岸に寄るてふ 恋忘草 (新勅撰・雑四・一二七九)

江上月を 皇太后大夫俊成

思ひ出でよ 神代も見きや 天の原 空も一つに 住の江の月 (続千載・神祇・八六六)

恋の歌の中に 典侍親子朝臣

如何にせん 身を住の江の 草の名に 思ひなしてや 訪ふ人のなき

(続千載・恋五・一五七九)

弘安八年、住の江に御幸ありて、行旅述懐と言ふ

ことを講ぜられ侍りけるに、仕うまつりける

前大納言為兼

古りにける 跡を訪ねて 住の江の 御幸重なる 今日にもあるかな

(新千載・神祇・九九一)

(恋の歌の中に)

前中納言為相

枯れねただ よし住の江の 来しもせぬ 辛さばかりの 草の名も憂し

(新千載・恋五・一五八二)

同じ心 (藤の花) を

式乾門院御匣

行く春の 忘れ形見に 住の江の 岸の藤波 今や咲くらん (新統古今・雑下・二〇四)

延喜十三年、菊合に

坂上是則

波とのみ 打ちこそ見ゆれ 住の江の 岸に残れる 白菊花 (新統古今・秋下・五六〇)

(題知らず)

(題知らず)

秋風の 松吹く音も 心寂びて 神も心や 住の江の月 (新統古今・雑上・一七一八)

【住吉】 (撰津)

●玄々集……………用例無

●能因法師集…一例

返し

難波江の 蘆のうら葉に いまよりは ただ住吉の 松としらなむ (三三)

●勅撰和歌集…三三例

相知れりける人の、住吉に詣でけるに、
読みて遣はしける 壬生忠岑

住吉と 海人は告ぐとも 長居すな 人忘れ草 生ふと言ふなり (古今・雑上・九一七)

円融院御時、御屏風の歌 平兼盛

住吉の 岸の藤波 我が宿の 松は梢に 色は増さらじ (拾遺・夏・八四)

(題知らず)

(人麿)

住吉の 岸を田に堀り 蒔きし稲の 刈る程までも 逢はぬ君かな (拾遺・恋三・八三六)

(題知らず)

読人知らず

住吉の 岸に生ひたる 忘れ草 見ずやあらまし 恋は死ぬとも (拾遺・恋四・八八八)

題知らず 人麿

住吉の 岸に向かへる 淡路島 あはれと君を 言はぬ日ぞなき (拾遺・恋五・九二六)

住吉に参りて、詠み侍りける 平棟仲

忘れ草 摘みて帰らむ 住吉の 来し方の世は 思ひ出でもなし (後拾遺・雑四・一〇六六)

百首の歌の中に、藤花を、詠める 修理大夫顯季

住吉の 松にかかれる 藤の花 風の便りに 波や織るらん (金葉・春・八六)

左衛門督家成が家に、歌合し侍りけるに、

詠める 藤原範綱寄御定止了

住吉の 浅沢小野の 忘れ水 絶え絶えならで 逢ふ由もがな (詞花・恋下・二三九)

題知らず 藤原元真

住吉の 恋忘れ草 種絶えて なき世に逢へる 我ぞ哀しき (新古今・恋五・一四二〇)

恋の歌詠み侍りけるに 藤原為忠朝臣

住吉の 千木の片削ぎ 我なれや 逢はぬもの故 俊の経ぬらむ (新勅撰・恋二・七四一)

(題知らず) 和泉式部

住吉の 有明の月を 眺むれば 遠離りにし 影ぞ恋しき (新勅撰・雑四・一二八〇)

洞院撰政家の百首の歌に、忍恋 従三位行能

住吉の 浅香の浦の 濔標 さてのみ下に 朽ちや果てなん (続後撰・恋一・六六三)

(題知らず) 読人知らず

住吉の 榎夏に立ちて 見渡せば 武庫の浦より 出づる舟人 (続後撰・雑上・一〇二二)

内大臣に侍りける時の百首に、名所恋を

住吉の 千木の片削ぎ 年を経て まだ行き逢ひも 知らぬ恋かな

光明峰寺入道前撰政太政大臣

(続古今・恋二・一〇八五)

住吉の社に詣でける人、帰り来んまで忘るな、

と申しける返事に 清少納言

何方か 繁り増さると 忘れ草 よし住吉の 長らへて見よ (続古今・雑中・一六五八)

藤花年久と言へる心を 澄覚法親王

住吉の 松の下枝の 藤の花 幾年波を 掛けて咲くらん (続拾遺・雑春・五二五)

題知らず 権中納言経平

住吉の 岸の徒波 掛けてだに 忘るる草は ありと知らすな (新後撰・恋三・一〇四七)

(忍恋の心を) 源兼氏朝臣

住吉の 波打つ岸の 草なれや 人目忘れて 濡るる袂は (続千載・恋一・一〇六九)

久安の百首の歌に、薰物 久安の百首の歌に、 薰物

忘れ草 摘みに来しかど 住吉の 岸にしもこそ 袖は濡れけれ (続千載・恋五・一五七八)

(題知らず) 読人知らず

住吉の 浅沢小野の 杜若 衣に摺り付け 着ん日知らずも (続後拾遺・春下・一四一)

住吉社に詠みて奉りける百首の歌の

中に、藤 前大納言為家

立ち返り 誰れか見ざらむ 住吉の 松に花咲く 春の藤波 (続後拾遺・春下・一四八)

(早苗を) 阿倍宗長朝臣

松陰の 水堰き入れて 住吉の 岸の上田に 早苗採るなり (風雅・雑上・一五一〇)

(題知らず)

津守国助

住吉の 浅沢水に 影見れば 空行く月も 草隠れつつ (新千載・秋上・四四九)

(題知らず)

人丸

住吉の 遠里小野の 真萩持て 摺れる衣の 盛過ぎ行く (新千載・秋下・五二七)

(恋の歌の中に)

読人知らず

住吉の 岸にはあらで 忘れ草 何時より人の憂きに生ふらん (新千載・恋五・一五六一)

天徳四年、内裏歌合に、詠める 平兼盛

我が行きて 色見るばかり 住吉の 岸の藤波 折りな尽しそ (新後拾遺・春下・一五一)

堀河院に百首の歌奉りけるに、霜 堀河院に

百首の歌奉りけるに、霜俊頼朝臣

住吉の 千木の片削ぎ 行きも合はで 霜置き迷ふ 冬は来にけり (新後拾遺・冬・四八四)

(秋田を、詠める)

前中納言公勝

松にのみ 音は響きて 住吉の 岸田の穂波 秋風ぞ吹く (新後拾遺・雑秋・七三七)

百首の歌奉りし時、忘恋 源義将朝臣

忘れ草 生ふと聞くより 住吉の 岸は外なる 中の通ひ路 (新後拾遺・恋五・一二三五)

題知らず

前大僧正禪守

これもまた 神や植多けん 住吉の 松に掛かれる 岸の藤波 (新統古今・春下・二〇六)

(宝治二年、春日社歌合に、聞遠鹿と言ふ事を)

読人知らず

住吉の 遠里小野の 花薄 仄かに聞きつ 小雄鹿の声 (新統古今・秋下・四九六)

住吉社に、詠みて奉りける歌の中に 四辻入道前左大臣

住吉の 沖つ潮会ひは 見え分かで 霞に浮ぶ 淡路鳥山 (新統古今・雑上・一六一三)

源通清、熊野より帰り詣で来と聞きて、
良き墨や侍る、と尋ねけるに、悪しき

由申したりければ 藤原朝家

住吉と 今は頼まじ 津の国の 難波違へる 所なりけり (新統古今・雑下・二〇七三)

【関の清水】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二例

相知りて侍るける人の、近江の方へ罷りければ

(読人知らず)

関越えて 栗津の森の 逢わずとも 清水に見えし 影を忘るな (後撰・恋四・八〇一)

後冷泉院御時、皇后宮歌合に、駒迎への心を、詠める

藤原隆経朝臣

牽く駒の 数より外に 見えつるは 関の清水の 影にぞありける (金葉・秋・一八三)

【瀬田の橋】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……六例

堀河院御時、百首の歌奉りけるに 前中納言匡房

槿の板も 苔生すばかり なりにけり 幾世経ぬらむ 瀬田の長橋

(題知らず)

橘俊綱朝臣

(新古今・雑中・一六五六)

忘るなよ 瀬田の長橋 永らへて なほ世の中に 住みも渡らば

(続後撰・恋四・八九五)

文永二年七月、白河殿にて、人々題を探りて

七百首の歌仕うまつりける時、橋霞を 前中納言為家

鳩の海や 霞みて暮るる 春の日に 渡るも遠し 瀬田の長橋

(新後撰・春上・三三)

題知らず

左近大将実泰

先立ちて 渡る人だに 見えぬまで 夕霧深し 瀬田の長橋

(玉葉・秋下・七四一)

天禄元年、大嘗会悠紀方屏風の歌、

近江国勢多橋を、詠める 兼盛

貢物 絶えず供ふる 東路の 瀬田の長橋 音も轟に

(風雅・賀・二二〇二)

(冬の歌の中に)

惟賢上人

楽浪や 打ち出でて見れば 白妙の 雪を架けたる 瀬田の長橋 (新拾遺・雑上・一七一四)

【袖の浦】 (出羽)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……三四例

(題知らず)

(読人知らず)

君恋ふる 涙の掛かる 袖の浦は 巖なりとも 朽ちぞしぬべき (拾遺・恋五・九六一)

返し

娘

長居する 海人の仕業と 見るからに 袖の浦にも 満つ涙かな (金葉・雑上・五五二)

同じ(久安) 百首の歌奉りける時の長歌 待賢門院堀河

時知らぬ 谷の埋もれ木… 影見ても 時雨に濡るる 袖の浦に… (千載・雑下・一一六三)

返し

女御徽子女王

古への 泣きに鳴かるる 水茎は 跡こそ袖の 浦に寄りけれ (新古今・哀傷・八〇七)

後の宮より、内に扇奉り給ひけるに 中務

袖の浦 波吹き返す 秋風に 雲の上まで 涼しかるらん (新古今・雑上・一四九七)

百首の歌詠み侍りける、名所恋 前関白

憂しと思ふ ものから濡るる 袖の浦 左右にも 波や立つらむ (新勅撰・恋四・八九七)

題知らず

侍従具定母

干し侘びぬ 海人の刈る藻に 潮垂れて 我から濡るる 袖の浦波 (新勅撰・恋四・八九八)

中納言成家歌合に

藤原通憲

君恋ふる 涙は海と なりぬれど 見る目は刈らぬ 袖の浦かな (続後撰・恋二・七四〇)

(恋の歌の中に)

皇太后大夫俊成

干し侘びぬ 海人の刈る藻に 潮垂れて 我から濡るる 袖の浦波 (続後撰(異本)・恋二・一一三七八)

和歌所にて六首の歌合侍りけるに、初恋 参議雅経

今日よりや 人に心を 沖つ波 掛けても知らぬ 袖の浦風 (続古今・恋一・九四八)

弘長元年、百首の歌奉りける時、逢不遇恋

常磐井入道前太政大臣

嘆かじよ 袖の浦波 立ち返り 思へば憂きも 契りなりけり (続拾遺・恋五・一〇八一)

(恋の歌の中に)

祝部成茂

袖の浦の 湊入江の 濤標 朽ちずはなほや 憂き名立ちなん (新後撰・恋一・八四二)

(題知らず)

高階宗成朝臣

つれなさは ありしに返る 辛さにて またも重ねぬ 袖の浦波 (新後撰・恋四・一〇八六)

五月雨を、詠める

祝部成賢

五月雨に 煙絶えても 海人の なほ潮垂るる 袖の浦波 (続千載・夏・二八二)

(題恋を)

三条入道内大臣

徒に 立つ名も苦し 海人の刈る 海松布は外の 袖の浦波 (続千載・恋一・一一三六)

恋の歌の中に

前参議雅有

海人衣 垂れ添ふ袖の 浦見ても 海松布渚に 藻潮垂れつつ (続千載・恋二・一一七九)

題知らず

為道朝臣

知らせばや 海松布は刈らで 朝夕に 波越す袖の 浦見ありとも (続千載・恋二・一一八〇)

題知らず

従三位親子

朽ちねただ 袖の浦波 掛けてだに 人を海松布は 契りなければ (続千載・恋二・一一八五)

恋の歌とて、詠ませ給うける

亀山院御製

年月の 逢はぬ辛さを 重ねても なほ立ち返る 袖の浦波 (続千載・恋四・一五四四)

題知らず

大納言経信

仮寝の 涼しくもあるか 唐衣 袖の浦にや 秋の立つらむ (続後拾遺・秋上・二四二)

海辺擣衣を、詠める

藤原宗泰

藻潮汲む 袖の浦風 寒ければ 干きでも海人や 衣擣つらん (新千載・秋下・五〇七)

(恋の歌の中に)

権大納言公忠

知らせばや 仮初めなりし 海松布より 絶えずぞ掛かる 袖の浦波 (新千載・恋二・一二〇七)

(題知らず)

法印源意

船止めて 片敷く袖の 浦風を 揺蕩ふ波の 枕にぞ聞く (新拾遺・羈旅・八三八)

題知らず

前大納言為兼

海人の刈る 海松布は外の 契りにて 潮干も知らぬ 袖の浦波 (新拾遺・恋二・一〇五〇)

百首の歌召されし次に、浦霞の心を 御製

春来ぬと 霞の衣 立ちしより 間遠に掛かる 袖の浦波 (新後拾遺・春上・三七)

返し

読人知らず

海松布なき 潮の乱るる 海人なれば 袖の浦にぞ 訪ねても見ん (新後拾遺・恋一・九七八)

建保二年、内裏に百首の歌奉りけるに 正三位知家

暁の 別れは何時も 唐衣 濡れてぞ返る 袖の浦波 (新後拾遺・恋三・一一三九)

家の百首の歌に、忍恋

洞院摂政左大臣

忍びかね 潮干も知らぬ 波の音を なほ吹き寄する 袖の浦風 (新続古今・恋一・一〇七一)

(千五百番の歌合に)

源家長朝臣

夢にだに 見る世もなくて 明くる夜の 返す衣の 袖の浦波 (新続古今・恋二・一一一八)

貞和の百首の歌に

按察使資明

立ち返り 逢ふ夜までなほ 干きで見よ 別れしままの 袖の浦波 (新続古今・恋四・一三四二)

文保の百首の歌に

弾正尹忠房親王

海人衣 なほ如何ならむ 潮汲まぬ 身にだに濡るる 袖の浦波

(新統古今・恋五・一四九一)

(題知らず)

一条前太政大臣女

問へかきな 涙の床に 伏し侘ぶる 我が片敷きの そでの浦波

(新統古今・恋五・一五〇二)

延文二年、百首の歌奉りける時、寄藻恋 進子内親王

海人の 玉藻刈り干す 袖の浦に 我立ち濡れぬ 波の寄る寄る

(新統古今・恋五・一五〇五)

(応永十四年、内裏の三首の歌合に、浦雪)

権大納言経豊

海人の 衣干す間も 白雪の 積もれば掛かる 袖の浦波

(新統古今・雑上・一七九三)

【園原】(信濃)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

兄弟など言はむと言ふ人の、忍びて来む、

と言ひたる返事に

相模

東路の 園原からは 来たりとも 逢坂までは 越さじとぞ思ふ

(後拾遺・雑二・九四一)

父の信濃なる女を住み侍りける許に、遣はしける 平正家

信濃なる 園原にこそ あらねども 我が帚木と 今は頼まん

(後拾遺・雑五・一一二七)

承暦二年、内裏歌合に、紅葉を、詠める 源師賢朝臣

帚木の 梢や何処 覚束な みな園原は 紅葉しにけり

(金葉・秋・二四四)

信濃の神坂の形描きたる絵に、園原と言ふ所に、

旅人宿りて、立ち明かしたる所を 藤原輔尹朝臣

立ちながら 今宵は明けぬ 園原や 伏屋と言ふも 甲斐なかりけり

(新古今・羈旅・九一三)

平定文家歌合

坂上是則

園原や 伏屋に生ふる 帚木の ありとは見えて 逢はぬ君かな

(新古今・恋一・九九七)

【染川】(筑前)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…七例

女の許に、遣はしける

藤原真忠

筑紫なる 思ひ染川 渡りなば 水や増さらん 淀む時なく

(後撰・恋六・一〇四六)

返し

読人知らず

渡りては 徒になるてふ 染川の 心尽くしに なりもこそすれ

(後撰・恋六・一〇四七)

(題知らず)

源重之

染川に 宿借る波の 早ければ なき名立つとも 今は恨みじ

(拾遺・恋二・七〇五)

(題知らず)

在原業平朝臣

染川を 渡らん人の 如何でかは 色になるてふ 事のなからん

(拾遺・雑恋・一二三四)

太刀の緒にすべき皮を求めけるに、監の命婦、
我が許になんあり、と言ひて、久しく送らざ
りければ
良峰宗貞

徒人の 頼め渡りし 染川の 色の深さを 見てや止みなん
権大僧都信聡 (後拾遺・雑中・一二九)

如何なれば 人に心を 染川の 渡らぬ瀬にも 袖濡らすらむ
佐衛門督資康 (新拾遺・恋二・一〇八八)

昨日より 今日の色添ふ 染川に 立つ名も知らず 恋ひや渡らん
(新後拾遺・恋一・九八〇)

【高砂】(播磨)

●玄々集……一例

高砂の 尾上に立てる 鹿の音に ことのほかにも 濡るる袖かな
(恵慶法師・三七)

●能因法師集……二例

秋二首

秋はなほ 我身ならねど 高砂の 尾上の鹿も 妻を恋ふらし
(五)

高砂の松

いたづらに 我身も過ぎぬ 高砂の 尾上にたてる 松ひとりかは
(二三五)

●勅撰和歌集……四五例

是貞親王の家の歌合に、詠める 藤原敏行朝臣

秋萩の 花咲きにけり 高砂の 尾上の鹿は 今や鳴くらむ
(古今・秋上・二一八)

(題知らず)
誰れきけと 声高砂に 小雄鹿の 長長し夜を 独り鳴くらん
読人知らず (後撰・秋下・三七三)

返し
小雄鹿の 声高砂に 聞こえしは 妻なき時の 音にこそありけれ
読人知らず (後撰・恋六・一〇五七)

(題知らず)
秋風の 打ち吹く毎に 高砂の 尾上の鹿の 鳴かぬ日ぞなき
(拾遺・秋・一九一)

遠き所に侍りける人、京に侍りける男を、道のままに
恋ひ罷りて、高砂と言ふ所にて、詠み侍りける
読人知らず

高砂に 我が泣く声は なりにけり 都の人は 聞きや付くらん
(拾遺・恋六・九九八)

内大臣の家にて、人々酒食べて、歌詠み侍り
けるに、遙かに山桜を望むと言ふ心を、詠める
大江匡房朝臣

高砂の 尾上の桜 咲きにけり 外山の霞 立たずもあらなん
能因法師 (後拾遺・春上・一二〇)

(題知らず)
秋はなほ 我が身ならねど 高砂の 尾上の鹿も 妻ぞ恋ふらし
(後拾遺・秋上・二八七)

花の歌とて、詠める 賀茂成保
高砂の 尾上の桜 咲きぬれば 梢に掛くる 沖つ白波
(千載・春上・六八)

高砂の 尾上に立てる 鹿の音に 殊の外にも 濡るる袖かな
恵慶法師

百首の歌に 式子内親王
(新古今(後出)・秋下・一九八六)

高砂の 尾上の桜 訪ぬれば 都の錦 幾重霞みぬ
家の歌合に、雲間花と言へる心を、詠み侍りける
(新勅撰・春上・六二)

前関白

紛ふとも 雲とは分かむ 高砂の 尾上の桜 色変はり行く
百首の歌奉りける時
(藤原顕仲朝臣)
(新勅撰・春上・六四)

高砂の 麓の里は 冴えなくに 尾上の桜 雪とこそ見れ
(題知らず)
権中納言長方
(新勅撰・春下・八〇)

春風の やや吹くままに 高砂の 尾上に消ゆる 雪とこそ見れ
(花の歌詠み侍りけるに)
後京極撰政前太政大臣
(新勅撰・春下・一〇〇)

高砂の 尾上の花に 春暮れて 残りし松の 紛ひ行くかな
藤を、詠める
祝部茂成
(新勅撰・春下・一一五)

立ち帰り なほ見て行かん 高砂の 尾上の松に 掛かる藤波
(鹿の歌とて)
藤原清輔朝臣
(続後撰・春下・一五九)

高砂の 尾上の風や 寒からん 裾野の原に 鹿ぞ鳴くなる
建保二年秋、十首の歌奉りける時
前中納言定家
(続後撰・秋上・二九八)

高砂の 外にも秋は あるものを 我が夕暮れと 鹿は鳴くなり
秋の歌とて、詠める
中務卿親王
(続後撰・秋上・三〇九)

松風も 激しくなりぬ 高砂の 尾上の雲の 夕立の空
秋の歌とて、詠める
平兼盛
(続古今・夏・二六七)

月影に 鹿の音聞こゆ 高砂の 尾上の萩の 花や散るらん
題知らず
紀友則
(続古今・秋下・四五三)

誰れきけと 声高砂に 小雄鹿の 長長し夜を 独り鳴くらん
題知らず
順徳院御製
(続古今(異本)・秋下・一九一八)

桜花 咲くとも見し間に 高砂の 松を残して 掛かる白雲
建保四年、百首の歌奉りける時
参議雅経
(続拾遺・春上・五九)

立ち返り 外山ぞ霞む 高砂の 尾上の桜 雲も紛はず
夜鹿と言ふ事を、詠める
祝部成良
(続拾遺・春上・六〇)

高砂の 松の嵐は 夜寒にて 月に更けぬる 小雄鹿の声
高砂の 尾上の霞 立ちぬれど なほ降り積もる 松の白雪
(題知らず)
式乾門院御匣
(続拾遺・秋上・二六一)

山風は 心して吹け 高砂の 尾上の桜 今盛りなり
(宝治元年、十首の歌合に、山桜)
山階入道左大臣
(新後撰・春上・一九)

春の歌の中に 平忠盛朝臣
春風は 吹くとも見えで 高砂の 松の梢に 掛かる藤波
百首の歌詠み侍りける時
中務卿宗尊親王
(新後撰・春下・一四八)

高砂の 尾上晴れたる 夕暮に 松の葉昇る 月の清けさ
(題知らず)
隆信朝臣
(玉葉・秋下・六三七)

沖つ風 吹くとも見えぬ 高砂の 尾上の松に 掛かる藤波
(嘉元の百首の歌奉りし時、鹿)
法印定為
(続後撰・春下・一九七)

高砂の 尾上の鹿は つれもなき 松を試しに 妻や恋ふらん
嘉元の百首の歌に、鹿
万秋門院
(続後撰・秋上・四〇三)

鳴く鹿の 声も惜しまず 高砂の 尾上の秋や 夜寒なるらん
(続後撰・秋上・四一八)

(題知らず)

入道前太政大臣

待たれつる 山をば出でて 高砂の 尾上の松に 月ぞいざよふ

(続後撰・秋上・四四一)

嘉元の百首の歌奉りし時、雪 前大納言為世

高砂の 尾上の嵐 吹く程は 降れ積もらぬ 松の白雪

(続後撰・冬・六六四)

秋の歌の中に

前僧正道性

高砂の 松に習はぬ 色なれや 同じ尾上の 秋の紅葉葉

(続後拾遺・秋下・三九一)

千五百番の歌合に

皇太后宮大夫俊成女

高砂の 松の緑も 紛ふまで 尾上の風に 花ぞ散りける

(風雅・春下・二二六)

百首の歌奉りし時、同じ心(花)を 右大臣

高砂の 松の木の間に 咲く花や 尾上に立てる 雪と見ゆらん

(新千載・春上・八二)

(題知らず)

前大納言為兼

高砂の 松の緑は つれなくて 尾上の花の 色ぞ移ろふ

(新千載・春下・一三二)

文永二年、白河殿にて、人々題を探りて

七百首の歌仕うまつりける時、山花と言

ふ事を 前大納言為氏

高砂の 尾上の雲の 色添へて 花に重なる 山桜かな

(新拾遺・春上・九二)

後醍醐院、未だ東宮と申しける時、五首の

歌講ぜられるに、月前聞鹿 前大納言経継

高砂の 尾上の月に 鳴く鹿の 声澄み上る 有明の空

(新拾遺・秋下・四五四)

(題知らず)

入道一品親王尊円

高砂の 松を友とも 慰まで なほ妻恋ひに 鹿ぞ鳴くなる

(新拾遺・秋下・四六五)

同じ心(山花)を

入道一品親王詠助

高砂の 尾上の花の 外目こそ 消え敢へぬ松の 雪と見えけれ

(新統古今・春下・一二七)

(題知らず)

中納言家持

秋風は 夜毎に吹きぬ 高砂の 尾上の萩の 散らまく惜しも

(新統古今・秋上・四〇九)

最勝四天王院の障子に、高砂描ける形を 前中納言定家

高砂の 松はつれなき 尾上より 己れ秋知る 小雄鹿の声

(新統古今・秋上・四九二)

秋の歌の中に

前大納言隆直

高砂の 尾上の月に 秋更けて 松風近く 鹿ぞ鳴くなる

(新統古今・秋上・五〇四)

百首の歌奉りし時、待花 直明王

咲きやらぬ 花の梢は 高砂の 松を友とや つれなかるらむ

(新統古今・雑上・一六三四)

小板敷、刻の簡

(按察使資平)

来ぬ夜半と 如何がは辛き 高砂の 鹿の妻問ふ 霧の遠方

(新統古今・雑下・二〇五〇)

【高間の山(峰)】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二五例

崇徳院に、百首の歌奉りける時、

花の歌とて、詠める

左京大夫頼輔

葛城や 高間の山の 桜花 雲居の外に 見てや過ぎなん

(千載・春上・五六)

題知らず

読人知らず

外にのみ 見てや止みなん 葛城や 高間の山の 峰の白雲

(新古今・恋一・九九〇)

(百首の歌に)

(式子内親王)

霞居る 高間の山の 白雲は 花かあらぬか 帰る旅人

(新勅撰・春上・六三)

承暦二年、内裏後番歌合に、霞を、

詠み侍りける

前中納言匡房

葛城や 高間の山の 朝霞 春と共に 立ちにけるかな

(続後撰・春上・二)

千五百番歌合の歌

大藏卿有家

葛城や 高間の山の 花盛り 雲の外なる 雲を見るかな

(続古今・春上・九二)

雪の歌として

後徳大寺左大臣

久方の 空も紛ふひぬ 雲掛かる 高間の山に 雪の降れば

(続古今・冬・六六三)

建長三年、吹田にて、十首の歌奉りけるに 前大納言為家

立ち紛ふ 同じ高間の 山桜 雲の何処に 花の散るらん

(続拾遺・春下・一〇五)

正治二年、後鳥羽院に百首の歌奉りける時 藤原隆信朝臣

葛城や 高間の山の 峰続き 朝居る雲や 桜なるらん

(新後撰・春下・六九)

(洞院撰政家の百首の歌に、霞) 常磐井入道前太政大臣

春霞 立ちにし日より 葛城や 高間の山は 外にだに見ず

(続千載・春上・三八)

弘安の百首の歌奉りける時

入道前太政大臣

さのみなど 高間の山の 峰の雲 外ながら立つ 憂き名なるらん

(続千載・恋一・一一二六)

題知らず

前大納言為氏

春来ぬと 霞棚引く 葛城の 高間の山は 花や咲くらむ

(続後拾遺・春上・六三)

(題知らず)

前中納言匡房

白雲の 立てるや何処 葛城の 高間の山に 花咲きにけり

(続後拾遺・春上・七一)

和歌所にて、釈阿に九十賀賜はせける

時の屏風に

参議雅経

久方の 雲に高間の 山桜 匂ふも外の 春の曙

(続後拾遺・春下・七九)

山月

津守国道

葛城や 高間の山の 月影に 秋風立ちて 雲も掛からず

(続後拾遺・秋下・三四八)

(故意の歌の中に)

式部卿久明親王

知るや如何に 高間の山の 峰の雲 身は外ながら 掛かる心を

(続後拾遺・恋一・六三六)

題知らず

前中納言匡房

白雲の 八重立つ峰と 見えつるは 高間の山の 花盛りかも

(風雅・春中・一五六)

建仁元年三月、歌合に、雪似白雲と言ふ事を 後鳥羽院御歌

雪やこれ 払ふ高間の 山風に つれなき雲の 峰に残れる

(風雅・冬・八一)

後醍醐院未だ東宮と申しける時の歌合に、

山花を

権大納言公明

訪ね来て 今日ぞ高間の 山桜 外ならで見ると 花の白雲

(新千載・春下・一一一)

千五百番の歌合に

参議雅経

葛城や 高間の峰に 雲晴れて 明くる侘びしき 有明の月

(新千載・秋下・五〇一)

夏の御歌の中に

後醍醐院御製

葛城や 高間の山に 居る雲の 外にも著き 夕立の空

(新拾遺・夏・二八九)

百首の歌召しける時、詠ませ給うける 崇徳院御製

入日射す 豊旗雲に 分きかねつ 高間の山の 峰の紅葉葉

(新拾遺・秋下・五三一)

前大納言為世、詠ませ侍りし春日社の

三十首の歌の中に

法印公順

今日こそは 外になりぬれ 葛城や 越えし高間の 峰の白雪

(新拾遺・羈旅・八一四)

光明峰寺入道前摂政家の百首の歌に、名所恋 従二位家隆

葛城や 高間の山に 挿す標の 外にのみやは 恋ひんと思ひし

(新拾遺・恋一・九二七)

(雪の歌の中に)

後徳大寺左大臣

久方の 空も紛ひぬ 雲掛かる 高間の山に 雪の降れば

(新後拾遺・冬・五四一)

新玉津島社の三十首の歌に、同じ心(山月)を

西園寺入道前内大臣女

外にだに 雲こそ見えね 澄み昇る 高間の山の 秋の夜の月

(新後拾遺・雑上・四四三)

【武隈の松】 (陸奥)

●玄々集……………用例無

●能因法師集…二例

武隈の松、初めのたびは枯れながらもくひなどありき、

このたびはそれもなし

たたくまの 松はこのたび 跡もなし 千とせを経てや 我は来つらん

(一〇七)

武隈の松

あとなくて いくよ経ぬらん いにしへは かはり植ゑけん 武隈の松

(二四一)

●勅撰和歌集…一四例

陸奥国守に罷り下るれりけるに、武隈の松の枯れて

侍りけるを見て、小松を植ゑ継がせ侍りて、任果て

て後、また同じ国に罷りなりて、かの前の任に植ゑ

し松を見侍りて

藤原元善朝臣

植ゑし時 契りやしけん 武隈の 松を再び 逢ひ見つるかな

(後撰・雑三・一二四一)

陸奥守にて下り侍りける時、三条太政大臣の

餞し侍りければ、詠み侍りける 藤原為頼

武隈の 松を見つつか 慰めん 君が千歳の 影に習らひて

(拾遺・別・三三八)

相語らひ侍りける人、陸奥国へ罷りければ 能宣

如何でなほ 我が身に代へて 武隈の 松ともならむ 行く人の為

(拾遺・雑上・四六〇)

則光朝臣の供に、陸奥国に下りて、武隈の松を、

詠み侍りける

橘季通

武隈の 松は二木を 都人 如何がと問はば 三木と答へむ

(後拾遺・雑四・一〇四一)

陸奥国に再び下りて後の度、武隈の松も侍ら

ざりければ、詠み侍りける 能因法師

武隈の 松はこの度 跡もなし 千歳を経てや 我は来つらん

(後拾遺・雑四・一〇四二)

橘季通、陸奥国に下りて、武隈の松を歌に詠み

侍りけるに、二木の松を人問はば三木と答へん、

など読みて侍りけるを、伝てに聞きて、詠み侍

りける

僧正深覚

武隈の 松は二木を 三木と言ふは よく詠めるには あらぬなるべし

(後拾遺・雑六・一一九九)

陸奥国の任果てて上り侍りけるに、武隈の松

の許にて、詠める

橘為仲朝臣

古里へ 我は帰りぬ 武隈の 松とは誰れに 告げよとか思ふ (詞花・雑上・三三八)

陸奥国守基頼朝臣、久しく逢ひ見ぬ由申して、
何時上るべしとも言はず侍りければ 基俊

帰り来む 程思ふにも 武隈の 待つ我が身こそ いたく老いぬれ (新古今・離別・八七八)

(橋為仲朝臣、陸奥に侍りける時、歌数多)

遣はしける中に 加賀佐衛門

覺束な 霞立つらん 武隈の 待つ限漏る 春の夜の月 (新古今・雑上・一四七五)

陸奥国へ罷りける人に 藤原清正

仮初の 別れと思へど 武隈の 松に程経む 事ぞ悔しき (新勅撰・羈旅・五〇七)

(題知らず) 円光院入道前関白太政大臣

武隈の 松を頼みに 永らへて 昔を見きと 誰れに語らん (続千載・雑下・一九六九)

藤原兼時、陸奥国(守)になりて下りけるに、

餞賜ふとて 九条右大臣

武隈の 松は幾世か 経にけると 年を数へて 帰り逢はなん (新千載・離別・七四六)

(松上雪を) 源光行

武隈の 松の緑も 埋もれて 雪を見きとや 人に語らん (新拾遺・冬・六六二)

寄松恋を 前中納言為忠

武隈の 待つ程過ぎて 訪はぬかな 昔は三木と 思ひ出でずや

(新続古今・恋四・一四〇七)

【田子の浦】(駿河)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二〇例

(題知らず)

(読人知らず)

駿河なる 田子の浦波 立たぬ日は あれども君を 恋ひぬ日はなし (古今・恋一・四八九)

女の許より、志の程をなんえ知らぬ、と言へりければ 藤原興風

我が恋を 知らむと思はば 田子の浦に 立つらん波の 数を数へよ (後撰・恋二・六三〇)

後一条大臣の家の障子に 能宣

田子の浦に 霞の深く 見ゆるかな 藻塩の煙 立ちや添ふらん (拾遺・雑春・一〇一八)

題知らず 赤人

田子の浦に 打ち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ

(新古今・冬・六七五)

五十首の歌奉りし時 前大僧正慈円

己が波に 同じ末葉ぞ 萎れぬる 藤咲く田子の 恨めしの身や (新古今・雑上・一四八二)

百首の歌奉りし時、海辺の歌 越前

沖つ風 夜寒になれや 田子の浦 海人の藻塩火 焚き荒むらん (新古今・雑中・一六一〇)

兼輔、駿河守になりて、下り侍りけるに 清原元輔

知らざりき 田子の浦波 袖漬ちて 老いの別れに かかるものとは

(続古今・離別・八四二)

千五百番の歌合の歌

後京極摂政前太政大臣

知らせばや 恋を駿河の 田子の浦 恨みに波の 絶えぬ日はなし

(続古今・恋四・一二二五)

田子の浦に罷りて、詠み侍りける 道因法師

田子の浦の 風も長閑けき 春の日は 霞ぞ波に 立ち代はりける (続拾遺・春上・三三)

海辺霧

中原行実

今はまた 田子の浦波 うち添へて 立たぬ日もなき 秋の夕霧 (続拾遺・雑秋・五八五)

(題知らず)

藤原宗泰

沖つ風 吹き越す磯の 松が枝に 余りて掛かる 田子の浦藤 (玉葉・雑一・一九一四)

田子の浦を

平斉時

旅人も 立たぬ日ぞなき 東路の 往来に馴るる 田子の浦波 (続千載・羈旅・七八七)

百首の歌奉りし時

前関白左大臣

田子の浦や 汀の藤の 咲きしより 移るふ波ぞ 色に出でける (続後拾遺・春下・一五〇)

夏の歌として

藤原清輔朝臣

田子の浦の 藻塩も焼かぬ 五月雨に 絶えぬは富士の 煙なりけり (風雅・夏・三六五)

建武二年、内裏にて、人々題を探りて、千首の

歌仕うまつりける時、恋地儀 前大納言実教

田子の浦の 波の濡衣 干し侘びぬ 絶えぬ日もなく 立つ浮名かな

(新千載・恋二・一二〇五)

嘉元の百首の歌奉りし時、山 法印定為

富士の嶺を 田子の浦より 見渡せば 煙も空に 立たぬ日ぞなき

(新拾遺・雑中・一七三九)

応和二年、一宮歌合に

読人知らず

田子の浦の 波は長閑けし 我が袖に 譬へん方の なきぞ哀しき

(新拾遺・雑中・一七五三)

海辺早苗と言ふ事を

前左兵衛督教定

早苗採る 田子の浦人 この頃や 藻塩も汲まぬ 袖濡らすらん (新後拾遺・雑春・六八八)

弘安の百首の歌に

静仁法親王

音に聞く 田子の浦波 それならで 恋すてふ名の 立たぬ日ぞなき

(新統古今・恋四・一三六三)

春の歌の中に

祝部成茂

富士の嶺は そことも見えず 田子の浦の 藻塩の煙 空に霞みて

(新統古今・雑上・一六一六)

【竜田川】 (大和)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……五七例

題知らず

読人知らず

竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなむ (古今・秋下・二八三)

(題知らず)

(読人知らず)

竜田川 紅葉葉流る 神奈備の 御室の山に 時雨降るらし (古今・秋下・二八四)

二条の後の春宮の御息所と申しける時に、

御屏風に竜田川に紅葉流れたる形を描けり

けるを題にて、詠める

業平朝臣

千早振る 神代も聞かず 竜田川 唐紅に 水括るつは (古今・秋下・二九四)

神奈備の山を過ぎて、竜田河を渡りける時に、
紅葉の流れけるを、詠める 清原深養父

神奈備の 山を過ぎ行く 秋なれば 竜田川にぞ 幣は手向くる (古今・秋下・三〇〇)

竜田川の辺りにて、詠める 坂上是則

紅葉葉の 流れざりせば 竜田川 水の秋をば 誰れか知らまし (古今・秋下・三〇二)

秋の果つる心を、竜田河に思ひ遣りて、詠める 貫之

年毎に 紅葉葉流す 竜田川 水門や秋の 泊りなるらむ (古今・秋下・三一)

題知らず

竜田川 錦織り掛く 神無月 時雨の雨を 縦緯にして (古今・冬・三一四)

(題知らず) 御春有助

文なくて 夙なき名の 竜田川 渡らで止まむ ものならなくに (古今・恋三・六二九)

(題知らず) (読人知らず)

竜田川 色紅に なりにけり 山の紅葉ぞ 今散るらし (後撰・秋下・四一三)

(題知らず) 貫之

竜田川 秋にしなれば 山近み 流るる水も 紅葉しにけり (後撰・秋下・四一四)

(題知らず) (読人知らず)

竜田川 秋は水なく 褪せななん 飽かぬ紅葉の 流るれば惜し (後撰・秋下・四一六)

忍びて住み侍りける人の許より、かかる気色人に

見すな、と言へりえれば 元方

竜田川 立ちなば君が 名を惜しみ 岩瀬の森の 言はじとぞ思ふ (後撰・恋六・一〇三三)

平城の帝、竜田川に、紅葉後覽じに行幸ありける時、

御供に仕うまつりて 柿本人麿

竜田川 紅葉葉流る 神奈備の 三室の山に 時雨降るらし (拾遺・冬・二一九)

室の木 高向草春

神奈備の 三室の岸や 崩るらん 竜田の川の 水の濁れる (拾遺・物名・三八九)

(正子内親王の絵合し侍りける銀草子に、

書き侍りける) 伊勢大輔

卯の花の 咲ける盛りは 白波の 竜田の川の 井堰とぞ見る (後拾遺・夏・一七六)

(題知らず) 曾根好忠

夏衣 竜田川原の 柳陰 涼みに来つつ 平す頃かな (後拾遺・夏・二二〇)

永承四年、内裏歌合に、詠める 能因法師

嵐吹く 三室の山の 紅葉葉は 竜田の川の 錦なりけり (後拾遺・秋下・三六六)

後朱雀院御時、御前にて霧蔵紅葉と

言へる事を、詠める 前中納言資仲

紅葉散る 山は秋霧 晴れせねば 竜田の川の 流れをぞ見る (金葉・冬・二六一)

百首の歌の中に、紅葉を、詠める 源俊頼朝臣

竜田川 柵掛けて 神奈備の 三室の山の 紅葉をぞ見る (金葉・冬・二六六)

二条院御時、小坂敷と言ふ五字を句の

上に置きて、旅の心を、詠める 源雅重朝臣

駒並めて いざ見に行かん 竜田川 白波寄する 岸の辺りを (千載・雑下・一一六七)

家に百首の歌詠ませ侍りけるに、紅葉の歌 関白左大臣

竜田川 三室の山の 近ければ 紅葉を波に 染めぬ日ぞなき (新勅撰・秋下・三五五)

(秋の暮れの歌)

参議雅経

秋は今日 紅括る 竜田川 行く瀬の波も 色変はるらん (新勅撰・秋下・三五九)

前内大臣基家の百首の歌合に 中納言

竜田川 紅葉流れて 行く秋の 終に寄る瀬や 何処なるらん (続古今・秋下・五三五)

(題知らず) 躬恒

流れ行く 紅葉の色の 深ければ 竜田の川は 淵瀬ともなし (続古今・冬・五六二)

題知らず 侍従能清

散り積もる 紅葉ならねど 竜田川 月にも水の 秋は見えけり (続拾遺・秋下・三〇〇)

文永五年八月十五夜、内裏の歌合に、河月似氷 典侍親子朝臣

竜田川 岩越す波の 凍るかど 夙なき名の 月に見ゆらん (続拾遺・秋下・三〇一)

正治の百首の歌に 後京極摂政前太政大臣

竜田川 散らぬ紅葉の 影見えて 紅越ゆる 瀬瀬の白波 (続拾遺・秋下・三六六)

家に百首の歌詠み侍りける時、名所恋

光明峰寺入道前摂政太政大臣

竜田川 紅括る 秋の水 色も流れも 袖の外かな (新後撰・恋二・九〇五)

水辺柳と言へる心を 俊恵法師

波掛くる 竜田川原の 伏柳 梢は底の 玉藻なりけり (玉葉・春上・九六)

同じ心(紅葉)を 権僧正雲雅

時雨れ行く 竜田の梢 移ろひて 染めぬ川瀬も 紅葉しにけり (玉葉・秋下・八〇七)

河落葉 法皇御製

竜田川 流るる水も この頃は 散る紅葉故 惜しくぞありけり (玉葉・冬・八八四)

題知らず 皇太后宮大夫俊成

何時しかと 冬の気色に 竜田川 紅葉閉ぢ混ぜ 薄氷せり (玉葉・冬・八九三)

延喜御時、由ありて聞こしめす人を、悪しく

思ふ人の聞こえさせ、疎むとて、徒なる名を

なん立つと聞きて 読人知らず

思ほえず 我になき名の 竜田川 流るる水を 返してしがな (玉葉・恋一・一三五〇)

家の百首の歌に、山五月雨 光明峰寺入道前摂政太政大臣

竜田川 汀の波も 立ち添ひぬ 三室の山の 五月雨の頃 (続千載・夏・二九一)

水郷紅葉を 従二位家隆

竜田川 峰の紅葉の 散らぬ間は 底にぞ水の 秋は見えける (続千載・秋下・五八二)

嘉元の百首の歌奉りし時、紅葉 贈三位為子

竜田川 水の秋をや 急ぐらん 紅葉を誘ふ 峰の嵐に (続千載・秋下・五八三)

弘安の百首の歌奉りける時 権中納言公雄

唐錦 竜田の川の 紅葉葉に 水の秋こそ なほ残りけれ (続千載・冬・六一二)

百首の歌奉りし時 津守国冬

竜田川 氷の上に 掛けてけり 神代も聞かぬ 雪の白木綿 (続千載・冬・六七七)

柳を、詠ませ給うける 後鳥羽院御製

唐衣 竜田川原の 川風に 波もて結ぶ 青柳の糸 (続後拾遺・春上・四一)

二条院の百首の歌奉りける時、

同じ心(月歌)を 刑部卿範兼

神奈備の 三室の山に 雲晴れて 竜田川原に 澄める月影 (続後拾遺・秋下・三三九)

(題知らず)

木枯しの 竜田の紅葉 諸共に 誘へば誘ふ 秋の川波 (続後拾遺・秋下・四〇二)

宝治の百首の歌奉りける時、河紅葉 冷泉前太政大臣

唐錦 竜田川原に 秋暮れて 紅葉を分くる 瀬瀬の岩波 (続後拾遺・秋下・四〇三)

建保五年、内裏の七首の歌合に、冬川風 従二位家隆

竜田川 木の葉の後の 柵も 風の架けたる 氷なりけり (続後拾遺・冬・四七〇)

大梅山別伝院に御幸侍りける時、僧問雲門、

樹凋葉落時如何、雲門云、体露金風と言ふ

因縁を頌せさせ給ひける次に 院御歌

竜田川 紅葉葉流る み吉野の 吉野の山に 桜花咲く (風雅・釈教・二〇七三)

文保の百首の歌奉りける時 三条入道前太政大臣

紅葉葉の 移ろふ波の 竜田川 折られぬ水の 錦とや見む (新千載・秋下・五六一)

千五百番の歌合に 西園寺入道前太政大臣

紅の 色にぞ波も 竜田川 紅葉の淵を 堰き掛けしより (新千載・秋下・五八四)

題知らず 源清兼朝臣

竜田川 流れて下る 紅葉葉の 止まらぬものと 秋ぞ暮れ行く (新千載・秋下・五八五)

正治の百首の歌の中に 式子内親王

神無月 三室の山野 山風に 紅括る 竜田川波 (新千載・冬・六一七)

(題知らず)

津守国夏

竜田川 落ちても見ずに 浮かぶなり 名に流れたる 峰の紅葉葉

建仁三年、仙洞の十首の歌合に、河月似氷と (新千載・冬・六二五)

言ふ事を 後京極摂政前太政大臣

これもまた 神代は聞かず 竜田川 月の氷に 水括るとは (新拾遺・秋下・四三二)

題知らず 前中納言定家

色は皆 空しきものを 竜田川 紅葉流るる 秋も一時 (新拾遺・哀傷・八五五)

宮滝御覽じて還らせ給うとて、竜田山を越え

させ給うける日、時雨のし侍りければ 亭子院御製 (新拾遺・雑中・一七六〇)

世の中に 言ひ流してし 竜田川 見るに涙ぞ 雨と降りける

源政長朝臣の家にて、人々長歌詠みけるに、 (新拾遺・雑下・一八八一)

初冬述懐と言へる心を、詠める 大納言経信

新玉の 年暮れ行きて… 紅葉葉の 竜田の川に 流るるを… (新拾遺・雑下・一八八一)

延文二年、百首の歌奉りけるに 太政大臣

入道二品親王道助家の五十首の歌に、岸柳 源家長朝臣 (新後拾遺・秋下・四五〇)

竜田川 三室の岸の 古柳 如何に残りて 春を知るらむ

建仁元年、影供歌合に、水辺躑躅 前中納言定家 (新統古今・春上・九二)

竜田川 岩根の躑躅 影見えて なほ水括る 春の紅

建保四年、内裏歌合に 前大納言経通 (新統古今・春下・一八八)

が禊 白木綿波の 竜田川 暁掛けて 通ふ秋風

(新統古今・夏・三四六)

【竜田山】 (大和)

●玄々集………用例無

●能因法師集…一例

(ある所の歌合に、人にかはりて) 鹿

聞かせばや つれなき人に 妻恋ふる たつ田の山の さをしかの音を (一九六)

●勅撰和歌集：六九例

仁和の中將の御息所の家に、歌合せむ

とてしける時に、詠める 藤原後蔭

花の散る ことや侘びしき 春霞 竜田の山の 鶯の声

題知らず 読人知らず

風吹けば 沖つ白波 竜田山：

(題知らず) (読人知らず)

誰が禊 木綿付け鳥か 唐衣 竜田の山に 祈り延へて鳴く

古歌奉りし時の目録の、その長歌 貫之

千早振る 神の御代より： 唐錦 竜田の山の 紅葉葉を：

大和に罷りける次に (読人知らず)

雁が音の 鳴きつるなへに 唐衣 竜田の山は 紅葉しにけり

(題知らず) (読人知らず)

妹が紐 解くと結ぶと 竜田山 今ぞ紅葉の 錦織りける

(題知らず) (読人知らず)

雁鳴きて 寒き朝の 露ならし 竜田の山を 紅葉だすものは

竜田山を越ゆとて 友則

かくばかり 紅葉づる色の 濃ければや 錦竜田の 山と言ふらん

題知らず 読人知らず

唐衣 竜田の山の 紅葉葉は もの思ふ人の 袂なりけり

題知らず 貫之

唐錦 竜田の山も 今よりは 紅葉ながらに 常磐なるらん

(題知らず) (貫之)

唐衣 竜田の山の 紅葉葉は 織物もなき 錦なりけり

(題知らず) (読人知らず)

などさらに 秋かと問はむ 唐錦 竜田の山の 紅葉する夜は

題知らず 読人知らず

秋は来ぬ 竜田の山も 見てしがな 時雨れぬ前に 色や変はると

廉義公家の紙絵に、旅人の盗人に遭ひたる形描ける所 藤原為頼

盗人の 竜田の山に 入りにけり 同じ挿頭の 名にや汚れん

(廉義公家の紙絵に、旅人の盗人に遭ひたる形描ける所)

(藤原為頼)

なき名のみ 竜田の山の 麓には 世にも嵐の 風も吹かなん

(題知らず) (読人知らず)

なき名のみ 竜田の山の 青葛 また来る人も 見えぬ所に

(実行卿家の歌合に、霞の心を、詠める) 藤原頭輔朝臣

年毎に 変はらぬものは 春霞 竜田の山の 気色なりけり

百首の歌奉りける時、詠める 藤原清輔朝臣

竜田山 松の群立ち なかりせば 何処か残る 緑ならまし

承暦二年、内裏歌合に、紅葉を、詠める 前中納言匡房

竜田山 散る紅葉葉を 来て見れば 秋は麓に 返るなりけり

題知らず 中納言家持

行かむ人 来む人偲べ 春霞 竜田の山の 初桜花

(古今・春下・一〇八)

(古今・雑下・九九四)

(古今・雑下・九九五)

(古今・雑体・一〇〇二)

(後撰・秋下・三五九)

(後撰・秋下・三七六)

(後撰・秋下・三七七)

(後撰・秋下・三八二)

(後撰・秋下・三八三)

(後撰・秋下・三八五)

(後撰・秋下・三八六)

(後撰・秋下・三八九)

(拾遺・秋・一三八)

(拾遺・雑下・五六〇)

(拾遺・雑下・五六一)

(拾遺・恋二・六九九)

(金葉・春・一〇)

(千載・秋下・三六七)

(千載・秋下・三八五)

(新古今・春上・八五)

八重桜を折りて、人の遣はして侍りければ 道命法師

白雲の 竜田の山の 八重桜 いづれを花と 分きて折りけん (新古今・春上・九〇)

百首の歌奉りし時 藤原定家朝臣

白雲の 春は重ねて 竜田山 小倉の峰に 花匂ふらし (新古今・春上・九一)

題知らず 佐衛門督通光

竜田山 夜半に嵐の 松吹けば 雲には疎き 峰の月影 (新古今・秋上・四一二)

題知らず 俊恵法師

竜田山 梢疎に なるままに 深くも鹿の そよぐなるかな (新古今・秋上・四五一)

入道前関白太政大臣家に、百首の歌詠み

心とや 紅葉はすらむ 竜田山 松は時雨に 濡れぬものは (新古今・秋下・五二七)

侍りけるに、紅葉 皇太后宮大夫俊成

百首の歌奉りし時 宮内卿 (新古今・秋下・五二七)

竜田山 嵐や峰に 弱るらむ 渡らぬ水も 錦絶えけり (新古今・秋下・五三〇)

五十首の歌奉りし時 宮内卿

唐錦 秋の形見や 竜田山 散り敢へぬ枝に 嵐吹くなり (新古今・秋下・五六六)

(詩を歌に合せ侍りしに、山路秋行

と言へる事を) 前大僧正慈円

竜田山 秋行く人の 袖を見よ 木々の梢は 時雨れざりけり (新古今・羈旅・九八四)

名立恋と言ふ心を、詠み侍りける 権中納言俊忠

なき名のみ 竜田の山に 立つ雲の 行く方も知らぬ 眺めをぞする (新古今・恋二・一一三三)

題知らず

人麿

秋されば 狩人越ゆる 竜田山 立ちても居ても ものをしぞ思ふ

(新古今・雑中・一六八八)

(秋の歌詠み侍りけるに)

正三位家隆

白妙の 木綿付け鳥も 思ひ侘び 鳴くや竜田の 山の初霜 (新勅撰・秋下・三三〇)

(十戒の歌詠み侍りけるに) 不偷盜戒 (法眼宗円)

越えじただ 同じ挿頭の 名も辛し 竜田の山の 夜半の白露 (新勅撰・釈教・六一五)

(題知らず)

行念法師

竜田山 紅葉の錦 折り延へて 鳴くと言ふ鳥の 霜の木綿垂 (新勅撰・雑一・一〇九六)

寛喜元年、女御入内屏風に、紅葉 前大納言為家

竜田山 外の紅葉の 色にこそ 時雨れぬ松の 程も見えけれ (続後撰・秋下・四二三)

延喜十三年、陽成院歌合の歌

読人知らず

惜しめども 秋は止まらぬ 竜田山 紅葉を幣と 空に手向けて (続古今・秋下・五三四)

(題知らず)

祝部成賢

竜田山 今は木の葉も 神無月 時雨に添へて 降り増さるなり (続古今・冬・五五一)

亭子院の奈良に御座しましたりける時、

竜田山にて

素性法師

雨降らば 紅葉の陰に 宿りつつ 竜田の山に 今日暮さん (続古今・羈旅・八九八)

弘長元年の百首の歌に

入道前太政大臣

知らせばや 未だ色見せぬ 竜田山 袖に時雨の 染むる心を (続古今・恋一・九五〇)

洞院撰政家の百首の歌に、同じ心(紅葉)を 藻壁門院少将

竜田山 木の葉色付く 程ばかり 時雨に添はぬ 秋風もがな (続拾遺・秋下・三五八)

名所の百首の歌召しける次に 順徳院御製

竜田山 木の葉吹き頻く 秋風に 落ちて色付く 松の下露 (続拾遺・秋下・三七〇)

(落葉を)

従三位忠兼

竜田山 秋は限りの 色と見し 木の葉は冬の 時雨なりけり (続拾遺・冬・三九六)

十戒の歌の中に、不偷盜戒 前大納言為家

主知らず 紅葉は折らじ 白波の 竜田の山の 同じ名も憂し (続拾遺・釈教・一四〇五)

名所の百首の歌に、竜田山秋 前中納言定家

心当ての 思ひの色ぞ 竜田山 今日しも染めし 木々の白露 (玉葉・秋上・四五二)

紅葉を

赤人

雁が音の 鳴くなるなへに 唐衣 竜田の山は 紅葉しぬらし (玉葉・秋下・七九二)

河内国教興寺に住み侍るを、この頃、住む所

何処の程ぞと尋ぬる人のある由申して侍りけ

る人の返事に、詠みて遣はしける 阿一上人

竜田山 嵐の音も 高安の 里は荒れにし 寺と答へよ (玉葉・雑三・二二四二)

嘉元の百首の歌奉りし時、花 贈従三位為子

今よりは 待たるる花の 面影に 竜田の山の 峰の白雲 (続千載・春上・六四)

題知らず

藤原基俊

唐衣 竜田の山の 郭公 心珍しき 今朝の初声 (続千載・夏・二三七)

(花の歌の中に)

権少僧都能信

花は早 下紐解けて 唐衣 竜田の山に 匂ふ春風 (続千載・雑下・一六六六)

百首の歌詠ませ給うけるに、桜を 二条院御製

何時しかと 見まくほしきは 春霞 竜田の山の 桜なりけり (続後拾遺・春上・六四)

尋山花と言ふ事を

藤原基俊

竜田山 心惑はず 花により 雲居遙かに 我は来にけり (続後拾遺・春上・六五)

題知らず

中納言家持

竜田山 見つつ越え来し 桜花 散りか過ぎなん 我が帰る時 (風雅・春上・二二二)

題知らず

己心院前摂政左大臣

竜田山 一群過ぐる 村雨の 跡は千入の 紅葉してけり (新千載・秋下・五五五)

建武二年、人々大を探りて、千首の歌仕う

まつりける時、秋植物と言ふ事を、詠ませ

給うける

後醍醐院御製

竜田山 峰の錦も 中絶えぬ 松を残して 染むる紅葉葉 (新千載・秋下・五五六)

百首の歌の中に、松間紅葉と言へる事を 前大納言為氏

竜田山 尾上の松の 木の間より 緑を分くる 秋の紅葉は (新千載・秋下・五六二)

題知らず

前大納言実躬

竜田山 如何に時雨の 染め分けて 青葉に交じる 紅葉なるらん (新千載・秋下・五七一)

同じ心(乍臥無実恋)を

法印定為

竜田山 木綿付け鳥の 鳴く鳴くぞ 床は草葉の 露と消えにし (新千載・恋三・一三八〇)

題知らず

元妙法師

竜田山 時雨の雨の 経緯に 染めし紅葉や 錦なるらむ (新千載・雑三・一七九六)

(嘉元の百首の歌奉りける時、花)

中納言為藤

竜田山 木綿付け鳥の 己が音を 夜深き花の 色に待つかな (新拾遺・春下・一三一)

(初秋の心を)

後京極摂政前太政大臣

梢吹く 風より秋の 竜田山 下葉に露や 漏らし染むらん
(題知らず) 人麿 (新拾遺・秋上・三一九)

紅の 八入の雨は 降り来らし 竜田の山の 色付く見れば
洞院撰政治家の百首の歌に 従二位家隆 (新拾遺・秋下・五三九)

竜田山 夕越え来れば 大伴の 御津の泊に 舟や待つらん
題知らず 読人知らず (新拾遺・羈旅・八二二)

夕されば 雁の越え行く 竜田山 時雨に競ひ 色付きにけり
伏見院に三十首の歌奉りける時、山紅葉を 津守国冬 (新後拾遺・秋下・四四一)

紅葉葉も 誰が禊とて 竜田山 秋風吹けば 幣と散るらむ
百首の御歌の中に 土御門院御製 (新後拾遺・秋下・四五一)

竜田山 紅葉や稀に なりぬらん 川波白き 冬の夜の月
(題知らず) 人丸 (新後拾遺・雑秋・七九一)

朝夙 我が打ち超ゆる 竜田山 深くも見ゆる 松の色かな
貞和の百首の歌に 入道贈一品親王尊円 (新後拾遺・羈旅・八七三)

秋来ぬと 木綿付け鳥の 鳴くなへに 今朝や竜田の 山の下風
水無瀬殿詩歌合に、山路秋行と言ふ事を (新統古今・秋上・三四九)

心さへ 移りも行くか 竜田山 梢に秋の 色を訪ねて
正治二年、新宮歌合に、山時雨と言ふ事を、 皇太后宮大夫俊成女 (新統古今・秋下・五六八)

詠ませ給うける 後鳥羽院御製
竜田山 梢の紅葉 秋暮れて つれなき松に なほ時雨るなり (新統古今・冬・六一三)

題知らず 法印守遍
白波の 竜田の山は 春風に 花散る頃の 名にこそありけれ (新統古今・雑上・一六四七)

【千曲河】(信濃)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……二例

百首の御歌の中に 順徳院御歌

千曲川 春行く水は 澄みにけり 消えて幾日の 峰の白雪 (風雅・春上・三六)

正治二年、百首の歌奉りける時正治二年、

百首の歌奉りける時 式子内親王

君が代は 千曲の川の 細れ石の 苔生す岩と なり尽くすまで (新統古今・賀・七七八)

【千年山】(丹波)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……三例

天禄元年、大嘗会風俗、千世能山 能宣

今年より 千年の山は 声絶えず 君が御代をぞ 祈るべらなる (拾遺・神楽・六〇九)

同じ(元暦元年)大嘗会主基方の歌詠みて

奉りける、神楽歌、丹波国千年山を、詠める

藤原光範朝臣

千年山 神の寿ませる 榊葉の 栄え増さるは 君が為とか (千載・神祇・一二八八)
祐子内親王家歌合に、千年山を、詠める (読人知らず)
真砂より 岩根になれる 千年山 こや君が代の 例しなるらむ (続後拾遺・賀・六〇三)

【筑波嶺】(常陸)

●玄々集……………一例
筑波嶺の 此の面彼の面の 紅葉葉は 秋果てぬれど 飽かずもある哉 (源重之・三一)
●能因法師集…二例
常陸の国にて、筑波の山を
よそにのみ 思ひおこせし 筑波嶺の 峰白雲 けふ見つるかな (一〇五)
(長元八年夏関白殿歌合)

祝

君が代は 白雲かかる つくばねの 峰のつづきの 海となるまで (一六八)
●勅撰和歌集…例

東宮の帯刀に侍りけるを、宮仕へ仕うまつらず
とて、解けて侍りける時に、詠める 宮道潔興
筑波嶺の 木の本毎に 立ちぞ寄る 春の深山の 陰を恋ひつつ (古今・雑下・九六六)
常陸歌

筑波嶺の 此の面彼の面に 陰はあれど 君がみ陰に 増す陰はなし (古今・東歌・一〇九五)

(常陸歌)

筑波嶺の 峰の紅葉葉 落ち積り 知るも知らずも 並べて哀しも (古今・東歌・一〇九六)
離れ方になりける人に、末紅葉ちたる

枝に付けて、遣はしける 読人知らず (後撰・恋二・六七四)
今はてふ 心筑波の 山見れば 梢よりこそ 色変はりけれ
初めて人に、遣はしける 読人知らず

人伝てに 言ふ言の葉の 中よりぞ 思ひ筑波の 山は見えける (後撰・恋二・六八六)
釣殿の皇女に、遣はしける 陽成院御製
筑波嶺の 峰より落つる 男女川 恋ぞ積もりて 淵となりける (後撰・恋三・七七六)

人の裳を縫はせ侍るに、縫ひて、遣はすとて 読人知らず
限りなく 思ふ心は 筑波嶺の 此の面や如何が あらんとすらん (後撰・雑二・一一五〇)
(題知らず) (読人知らず)

音に聞く 人に心を 筑波嶺の 見ねど恋しき 君にもあるかな (拾遺・恋一・六二七)
長元八年、宇治前太政大臣家歌合に、詠める 能因法師
君が代は 白雲掛かる 筑波嶺の 峰の続きの 海となるまで (詞花・賀・一六四)

藤原実宗、常陸介に侍りける時、大蔵省の
使ども厳しく責めければ、卿匡房に言ひて
侍りければ、遠江に立て替へて侍りければ、
言ひ遣はしける 太皇太后宮肥後
筑波山 深く嬉しと 思ふかな 浜名の橋に 渡す心を (詞花・雑下・三七三)

(題知らず) 源重之

筑波山 端山繁山 繁けれど 思ひ入るには 障らざりけり (新古今・恋一・一〇一三)
また通ふ人ありける女の許に、遣はしける 大中臣能宣朝臣

我ならぬ 人に心を 筑波山 下に通はむ 道だにやなき (新古今・恋一・一〇一四)

(恋の歌、詠み侍りけるに) 正三位経家

筑波山 端山繁山 訪ね見む 恋に増される 嘆きありやと (新勅撰・恋一・六八六)

常陸に罷りて、詠み侍りける 能因法師

外にのみ 思ひ遣せし 筑波嶺の 峰の白雲 今日見つるかな (新勅撰・雑四・一三〇三)

洞院撰政家の百首の歌に、月 従二位家隆

筑波嶺の 山鳥の尾の 真澄鏡 掛けて出でたる 秋の夜の月 (続古今・秋上・三八六)

名所の二十首の歌の中に、恋を 前内大臣基

筑波山 木隠れ多き 月よりも 繁き人目は 守る方もなし (続古今・恋一・九八五)

百首の歌奉りし時 侍従雅有

筑波嶺の 峰の桜や 男女川 流れて淵と 散り積もるらむ (続拾遺・春下・一一八)

洞院撰政家の百首の歌に 正三位知家

年を経て 繁さ増されど 筑波嶺の 峰は嘆きの 程も知られじ (続拾遺・恋一・八〇三)

筑波山 山本入道前太政大臣

押し並べて 四方の草木の 色付くは 止まず時雨の 降ればなりけり (続千載・雑体・七三六)

寄山恋の心を、詠み侍りける 山階入道左大臣

とにかくに 心一つを 筑波山 繁き人目に 守る涙かな (続千載・恋一・一一四三)

前大納言為世、詠ませ侍りし三首の歌に、落花を 法眼兼著

花は皆 散り果てぬらし 筑波嶺の 木の本毎に 積もる白雪 (続千載・雑上・一六九〇)

元亨二年、龜山殿にて、人々題を探りて、

千首の歌仕うまつりし時、花 前大納言為世 (続後拾遺・春下・七六)

見るままに 立ちぞ重ぬる 筑波嶺の 峰の桜の 花の白雲

山紅葉を 中院入道前内大臣

間なく降る 時雨に色や 筑波山 繁き梢も 紅葉しにけり (風雅・秋下・六七八)

恋の歌の中に 権大納言公隆

契りありて かかる思ひや 筑波嶺の 見ねども人の やがて恋しき (風雅・恋一・九六〇)

常陸国に侍りける時、詠める 藤原朝村

仮初めと 思ひし程に 筑波嶺の 裾回の田居も 住み馴れにけり

田家煙 僧正桓覚 (新拾遺・雑中・一八二七)

筑波嶺の 裾回の田居の 秋の庵 此の面彼の面に 煙立つなり (新拾遺・雑中・一八二八)

建保二年、内裏の百首の歌に 従二位家隆

筑波山 雫に堪えぬ 谷水の 如何なる隙に 濡らし初めまし (新後拾遺・恋一・九六七)

雪満群山と言ふ事を 前大納言親雅

筑波山 端山繁山 押し並べて 残る陰なく 積もる雪かな (新統古今・冬・七〇二)

落葉を 前大僧正良瑜

筑波嶺の 此の面彼の面に 山風に 方も定めず 散る木の葉かな (新統古今・雑上・一七六六)

【鼓の滝】(肥後)

● 玄々集………用例無

● 能因法師集………用例無

●勅撰和歌集…一例

清原元輔、肥後守に侍りける時、かの国の鼓の滝と言ふ所を見に罷りたりけるに、異様な法師の詠み侍りける
(読人知らず)

音に聞く 鼓の滝を うち見れば ただ山川の 鳴るにぞありける (拾遺・雑下・五五六)

【都留郡】(甲斐)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

甲斐へ罷りける人に、遣はしける (伊勢)

君が代は 都留郡に 敢えて来ぬ 定めなき世の 疑ひもなく (後撰・離別・一三四四)

甲斐の国へ下る罷り申し侍りけるに 忠岑

君が為 命甲斐にぞ 我は行く 都留郡に 千代は得るなり (新千載・雑下・二一六六)

【常磐山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二八例

(題知らず) (読人知らず)

思ひ出づる 常盤の山の 郭公 唐紅の 振り出でてぞ鳴く (古今・夏・一四八)

秋の歌合しける時に、詠める 紀叔望

紅葉せぬ 常盤の山は 吹く風の 音にや秋を 聞き渡るらむ (古今・秋下・二五一)

(尚侍、右大将藤原朝臣の四十賀しける時、

四季の絵描ける後の屏風に書きたりける歌、

秋) (素性法師)

秋来れど 色も変はらぬ 常盤山 外の紅葉を 風ぞかしける (古今・賀・三六二)

(題知らず) (読人知らず)

思い出づる 常盤の山の 岩躑躅 言はねばこそあれ 恋しきものを (古今・恋二・四九五)

題知らず 大中臣能宣

紅葉せぬ 常盤の山は 吹く風の 音にや秋を 聞き渡るらむ (拾遺・秋・一八九)

(題知らず) (大中臣能宣)

紅葉せぬ 常盤の山に 住む鹿は 己れ鳴きてや 秋を知るらん (拾遺・秋・一九〇)

身の沈みける事を嘆きて、勘解由判官にて 源順

新玉の 年の二十に… 足らざるし 常盤の山の 山寒み… (拾遺・雑下・五七一)

(題知らず) (読人知らず)

逢ふ事を 何時とも知らで 君が言はむ 常盤の山の 松ぞ苦しき (拾遺・恋一・六八一)

実行卿家の歌合に、霞の心を、詠める 少将公教母

朝夙 霞める空の 気色にや 常盤の山は 春を知るらん (金葉・春・九)

百首の歌奉りし時 摂政太政大臣

常盤なる 山の岩根に 生す苔の 染めぬ緑に 春雨ぞ降る (新古今・春上・六六)

(題知らず) 和泉式部

秋来れば 常盤の山の 松風も 移るばかりに 身にぞ染みける (新古今・秋上・三七〇)

久安の百首の歌奉りける、恋の歌 清輔朝臣

年経れど 験も見えぬ 我が恋や 常盤の山の 時雨なるらん (新勅撰・恋一・六七九)

(題知らず) 前内大臣家

吹き変はる 嵐ぞ著き 常盤山 つれなき色に 冬は見えねど (続後撰・冬・四六五)

同じ心(忍恋)を 寂縁法師

下へのみ 思ふ心の 常盤山 如何に時雨れて 色に出でまし (続後撰・恋一・六六四)

(題知らず) 権少僧都公朝

秋の色を 如何に待ち見ん 常盤山 時雨も露も 染めじと思へば (続古今・秋下・五〇一)

寄雨恋を 後鳥羽院宮内卿

色に出でぬ 思ひのみこそ 常盤山 我が身時雨は 降る甲斐もなし (続古今・恋一・九九八)

三百首の歌の中に 三百首の歌の中に

花咲かぬ 常盤の山の 峰にだに 桜を見せて 掛かる白雲 (続古今・雑上・一五〇五)

平時範が常盤の山庄にて、寄花祝と

言ふ事を、詠める 藤原景綱

移ろはで 万代句へ 山桜 花も常盤の 宿の標に (新後撰・賀・一五九三)

建保四年、内裏の百番の歌合に 嘉陽門院越前

常盤なる 山路は秋の 外がとて 眺むる暮れも 小雄鹿の声 (玉葉・秋上・五七二)

久安の百首の歌奉りける長歌 花園左大臣家小大進

君が代は 行末松に… 証には 常盤の山に 並み立てる… (続千載・雑体・七一二)

初冬の心を、詠める 前参議雅有

移り行く 色こそ見えね 常盤山 時雨るる空に 冬は来にけり (続後拾遺・冬・四一一)

頼みて侍りける人身罷りて、後の業し侍りける夜、詠める 藤原高光

頼め来し 常盤の山も 大空の 霞に霞む 世にこそありけれ (続後拾遺・哀傷・一二三三)

宝治の百首の歌に、山月を 前大納言為氏

常盤山 変はる梢は 見えねども 月こそ秋の 恨み侍りければ (風雅・秋中・六二四)

人の文を徒徒しく散らすと聞きて、恨み侍りければ 読人知らず

常磐山 露も漏らさぬ 言の葉の 色なる様に 如何で散りけむ (風雅・恋三・一二一九)

清慎公の七十賀の屏風の歌 大中臣能信朝臣

花咲かぬ 常磐の山の 鶯は 霞を見てや 春を知るらむ (新千載・春上・二六)

題知らず 道濟

誰れ住みて あはれ知るらむ 常磐山 奥の岩屋の 有明の月 (新拾遺・秋下・四三六)

秋の歌の中に 紀貫之

並べてしも 色変はらねば 常磐なる 山には秋も 知られざりけり (新統古今・秋下・五六六)

(新統古今・秋下・五六六)

つれなさを 恨みよとてや 常盤山 下這ふ葛に 風の吹くらん (新統古今・恋五・一五〇三)

(題知らず) 素暹法師

つれなさを 恨みよとてや 常盤山 下這ふ葛に 風の吹くらん (新統古今・恋五・一五〇三)

【鳥籠浦】(近江)

● 玄々集………用例無

● 能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二三例

題知らず

相模

焼くとのみ 枕の上に 塩垂れて 煙絶えせぬ 鳥籠の浦かな

(後拾遺・恋四・八一四)

建保三年、内大臣家の百首の歌に、名所恋 前中納言定家

我が袖に 空しき波は 掛け初めつ 契りも知らぬ 鳥籠の浦風

(続後撰・恋一・六五七)

従二位家隆家にて、浦霞と言ふ事を、詠み侍りける

藤原光俊朝臣

佐保姫も 鳥籠の浦風 吹きぬらし 霞の袖に 掛かる白波

(続古今・春上・五〇)

浦月を 権大僧都定円

敷妙の 鳥籠の浦曲の 波枕 宿るや月の 浮寝なるらん

(続古今・秋上・四〇七)

洞院摂政家の百首の歌に 光明峰寺入道前撰政左大臣

涙のみ 唐土船も 寄りぬべし 身は浮き沈む 鳥籠の浦波

(続古今・恋二・一〇九六)

浦千鳥と言ふ事を 贈従三位為子

小夜更けて 通ふ千鳥の 声すなり 誰が住む鳥籠の 浦路なるらん (新千載・冬・六七五)

百首の歌奉りし時、月の歌に 前大僧正賢俊

浮寝する 鳥籠の浦風 音更けて 波の枕に 月ぞ傾く (新千載・羈旅・七六九)

題知らず

瓊子内親王家治部卿

浮寝する 鳥籠の浦風 寒き夜は 都に通ふ 夢ぞ少なき (新千載・羈旅・七七一)

旅の心を 二品法親王守覺

臥し馴れぬ 鳥籠の浦風 身に凍みて 心浮き立つ 波の音かな (新拾遺・羈旅・八二八)

題知らず

前参議為秀女

寄る舟の 便りはなくて 徒に 我が身焦るる 鳥籠の浦波 (新拾遺・恋二・一〇三三)

題知らず

源頼遠

敷妙の 鳥籠の浦曲の 海人小舟 浮寝定めぬ 月や見るらん (新拾遺・雑上・一六四五)

同じ心〈浦月〉を 法印経賢

海人の 寝る夜はなくて 澄む月の 影のみ宿る 鳥籠の浦波 (新続古今・秋上・四六三)

百首の御歌の中に、海月 後小松院御製

秋の夜の 月にや払ふ 綿津海と 荒れにしままの 鳥籠の浦風 (新続古今・秋上・四六八)

【鳥籠山】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二一例

恋しくは下にを思へ紫の下 (読人知らず)

犬上の 鳥籠の山なる 名取川 いさと答へよ 我が名漏らすな (古今・墨滅・一一〇八)

鹿を、詠める 三宮大進

妻恋ふる 鹿ぞ鳴くなる 独寝の 鳥籠の山風 身にや凍むらん (金葉・秋・二二二)

題知らず

皇太后宮大夫俊成女

徒に散る 露の枕に 伏し侘びて 鶉鳴くなり 鳥籠の山風 (新古今・秋下・五一四)

旅の歌として、詠める 藤原秀能

さらぬだに 秋の旅寝は 哀しきに 松に吹くなり 鳥籠の山風 (新古今・羈旅・九六七)

百首の歌奉りし時、寄風恋 太宰権帥為経

敷妙の 鳥籠の山風 あやにくに 一人寝る夜は 吹き増さるかな (続後撰・恋三・八五八)

寄河恋と言ふ事を

中務卿親王

塵をだに 払はぬ鳥籠の 山川の いさや何時より 思ひ絶えけん

(続古今・恋五・一三五五)

(題知らず)

従二位家隆

君故は 鳥籠の山なる 名も辛し いさや変はらぬ 心とも水

(続拾遺・恋五・一〇三五)

恋の歌の中に

安嘉門院甲斐

徒に 名のみ流れて いさやまた 逢ふ瀬も知らぬ 鳥籠の山川

(新後撰・恋二・九〇七)

題知らず

承鎮法親王

秋深き 鳥籠の山風 身に凍みて 月影寒き 夜半の手枕

(続千載・秋下・五〇二)

(題知らず)

平時元

不知哉川 今や氷も 敷妙の 鳥籠の山風 寒く吹くなり

(続千載・冬・六四一)

題知らず

中原師員朝臣

旅人の 鳥籠の山風 夢絶えて 枕に残る 有明の月

(続千載・羈旅・八三四)

(題知らず)

賀茂景久

苔蓆 ただ一重なる 岩が根の 枕に寒き 鳥籠の山風

(続千載・羈旅・八三五)

(恋の心を、詠ませ給うける)

盛明親王

近江にか あると言ふなる 鳥籠の山 常永遠にこそ 見まくほしけれ

(続千載・恋二・一二四八)

題知らず

前大僧正実超

秋はなほ 如何に刈る藻の 乱るらん 露の伏す猪の 鳥籠の山風

(続後拾遺・秋上・二六二)

題知らず

前中納言定家

吹き払ふ 鳥籠の山風 狭蓆に 衣手薄し 秋の夜の月

(新千載・羈旅・八一七)

(寄夢恋と言へる事を)

源藤経

頼まじよ 夢の直路の 鳥籠の山 いさや忘れぬ 契りなりとも (新千載・恋二・一一七七)

題知らず

題知らず

一人寝る 鳥籠の山風 更けぬとも 逢はで空しき 我が名漏らすな

(新千載・恋二・一二三九)

(恋の歌の中に)

権少僧都寛耀

一人寝る 枕の塵の 積もりてや 空しき鳥籠の 山となるらん

(新拾遺・恋一・九九〇)

題知らず

法印顕詮

露払ふ 草の枕に 聞き侘びぬ 今宵仮寝の 鳥籠の山風 (新後拾遺・羈旅・八八八)

永和の百首の歌に

従一位宣子

必ずと 言ひしもいさや 頼まれず 待つ夜更け行く 鳥籠の山風

(新続古今・恋三・一二五三)

郭公の歌の中に

祝部成賢

郭公 待つとせし間に 更けにけり 寝ぬ夜の鳥籠の 山の端の月

(新続古今・雑四・一六六二)

【十市池】 (大和)

● 玄々集………用例無

● 能因法師集…用例無

● 勅撰和歌集…一例

同じ心〈逢不遇恋〉を
前大納言為家
今は早 十市の池の 三稜草繩 来る夜も知らぬ 人に恋ひつつ

(新後拾遺・恋四・一一七八)

【十市里(村)】(大和)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……八例

春日使に罷りて、帰りて、すなはち女の許に、
遣はしける
一条摂政
来れば疾く 行きて語らむ 逢ふ事の 十市の里の 住み憂かりしも

(拾遺・雑賀・一一七九)

百首の歌奉りし時

(式子内親王)

更けにけり 山の端近く 月冴えて 十市の里に 衣擣つ声
信解品 崇徳院御製

(新古今・秋下・四八五)

数ふれば 十市の里に 衰へて 五十余りの 年ぞ経にける
(同じ心〈擣衣〉を) 入道前太政大臣

(続古今・釈教・七六七)

入り方の 月の空さへ 響くまで 十市の村は 衣擣つなり
(旅の心を) 従三位宣子

(玉葉・秋下・七六二)

露分けて 宿借り頃も 急げども 里は十市の 野辺の夕暮れ
遠村花と言ふ事を 後伏見院御製

(続千載・羈旅・八一六)

桜咲く 十市の村の 夕暮れに 花折り挿頭し 人帰るなり
源政長朝臣の家にて、人々長歌詠みけるに、

(風雅・春中・一九一)

初冬述懐と言へる心を、詠める 大納言経信
新玉の 年暮れ行きて…… 人々の 十市の里に 円居して……
貞和の百首の歌奉りける時 等持院贈左大臣

(新拾遺・雑下・一八八二)

この里は 降らぬも涼し 風過ぎて 十市に晴るる 夕立の空

(新続古今・夏・三二三)

【富雄川】(大和)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……五例

飢人頭を擡げて、御返しを奉る

斑鳩や 富雄川の 絶えばこそ 我が大君の 御名を忘れめ

(拾遺・哀傷・一三五二)

天王寺に参りて、亀井にて、詠み侍りける 弁乳母
万代を 澄める亀井の 水はさは 富雄川の 流れなるらん
祝の心を、詠める 源忠季

(後拾遺・雑四・一〇七一)

君が代は 富雄川の 水澄みて 千歳を経とも 絶えじとぞ思ふ
近江国の百濟寺は、上宮太子の草創の由人の
申しけるを聞きて、詠める 権僧正良聖

(金葉・賀・三二七)

斑鳩や 富雄川の 流れこそ 絶えぬ御法の 始めなりけれ
嘉元の百首の御歌の中に、河 亀山院御製

(新千載・釈教・九一九)

絶えせじな 後の嵯峨野の 末遠く 富雄川の 流れ数多に

(新千載・慶賀・二三四〇)

【長浜】（伊勢）

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

君が代は 限りもあらず 長浜の 真砂の数は 読み尽くすとも
これは、仁和の御嘗の伊勢の国の歌。
(古今・神祇・一〇八五)

天喜四年、皇后宮の歌合に祝の心を、

詠ませ給ひける 後冷泉院御製

長浜の 真砂の数も 何ならず 尽きせず見ゆる 君が御代かな
(金葉・賀・三三一)

天喜四年四月晦日、后宮の歌合に、詠ませ給ひける

後冷泉院御製

長浜の 真砂の数も 何ならじ 尽きせず見ゆる 君が御代かな
(詞花 (異本) ・賀・四一七)

久安の百首の歌奉りける長浜 花園左大臣家小大進

君が代は 行末待つに… 延ぶる命は 長浜の 真砂を千代の… (続千載・雑体・七一二)

返し 兼輔朝臣

誰が為に 我が命を 長浜の 浦に宿りを しつつかは来し
(後撰・恋五・九四五)

【長柄橋】（摂津）

●玄々集……用例無

●能因法師集…二例

長柄の橋

朽ちにける 長柄の橋の みぎにはは 春霞こそ たち渡りけれ
(一六)

歎老五首、齒落如朽株

うもれ木の われがくちばは 難波なる 長柄の橋の はし柱かな
(一九九)

●勅撰和歌集…四一例

(題知らず)

坂上是則

逢ふ事を 長柄の橋の 長らへて 恋ひ渡る間に 年ぞ経にける
(古今・恋五・八二六)

(題知らず)

(読人知らず)

世の中に 古りぬるものは 津の国の 長柄の橋と 我となりけり
(古今・雑上・八九〇)

古歌に加へて奉れる長歌 壬生忠岑

呉竹の 世世の古言… かくしつ 長柄の橋の 永らへて…
(古今・雑体・一〇〇三)

(題知らず)

伊勢

難波なる 長柄の橋も 作るなり 今は我が身を 何に譬へむ
(古今・雑体・一〇五一)

法皇御髮剃し給ひての頃 七条后

人渡す 事だになきを 何しかも 長柄の橋と 身のなりぬらん
(後撰・雑一・一一一七)

御返し

伊勢

古るる身は 涙の中に 見ゆればや 長柄の橋に 誤たるらん
(後撰・雑一・一一一八)

天曆御時、御屏風の絵に、長柄の橋柱の

僅かに残れる形ありけるを 藤原清正

葦間より 見ゆる長柄の 橋柱 昔の跡の 導なりけり
(拾遺・雑上・四六八)

(題知らず)

(読人知らず)

限りなく 思ひ長柄の 橋柱 思ひながらに 中や絶えなん (拾遺・恋四・八六四)

入道撰政の賀し侍りける屏風に、長柄の橋の

形描きたる所を、詠める

平兼盛

朽ちもせぬ 長柄の橋の 橋柱 久しき程の 見えもするかな (後拾遺・賀・四二六)

長柄橋にて、詠み侍りける

前大納言公任

橋柱 なからましかば 流れての 名をこそ聞かめ 跡を見ましや (後拾遺・雑四・一〇七二)

天王寺に参るとて、長柄の橋を見て、詠み侍りける

赤染衛門

我ばかり 長柄の橋は 朽ちにけり 何はの事も 古るる哀しな (後拾遺・雑四・一〇七三)

上東門院、住吉に参らせ給ひて、帰さに、

人々歌詠み侍りけるに

伊勢大輔

古へに 古り行く身こそ 哀れなれ 昔長柄の 橋を見るにも (後拾遺・雑四・一〇七四)

天王寺に詣で侍りけるに、長柄にて、ここなん

橋の跡、と申すを聞きて、詠み侍りける

源俊頼朝臣

行末を 思へば哀し 津の国の 長柄の橋も 名は残りけり (千載・雑上・一〇三〇)

長柄の橋の辺りにて、詠める

道命法師

何事も 変はり行くめる 世の中に 昔長柄の 橋柱かな (千載・雑上・一〇三一)

同じ所(長柄の橋の辺り)にて、詠める 道因法師

今日見れば 長柄の橋は 跡もなし 昔ありきと 聞き渡れども (千載・雑上・一〇三二)

長柄の橋を、詠み侍りける

忠岑

年経れば 朽ちこそ増され 橋柱 昔長柄の 名だに変わらで (新古今・雑中・一五九四)

(長柄の橋を、詠み侍りける)

恵慶法師

春の日の 長柄の浜に 舟泊とめて いつれか橋と 問へど答へぬ (新古今・雑中・一五九五)

(長柄の橋を、詠み侍りける) 後徳大寺左大臣

朽ちにける 長柄の橋を 来て見れば 葦の枯葉に 秋風ぞ吹く (新古今・雑中・一五九六)

六)

謙徳公に、遣はしける 読人知らず

思ふこと 昔長柄の 橋柱 古りぬる身こそ 哀しかりけれ (新勅撰・雑四・一二八三)

春の歌の中に

法性寺入道前関白太政大臣

津の国の 長柄の橋の 跡なれど なほ霞こそ 立ち渡りけれ (続後撰・春上・三六)

九月十三夜、十首の歌合、昔の長柄の橋の橋柱にて

作られたる文台にて、講ぜらえ侍りし時、名所月

太政天皇

月もなほ 長柄に朽ちし 橋柱 ありとやここに 澄み渡るらん (続後撰・秋中・三四四)

題知らず

忠見

人知れず 渡し初めけむ 橋なれや 思ひ長柄に 絶えにけるかな

(続後撰・恋四・八九四)

寄橋述懐と言へる心を

前太政大臣

一人のみ 我や古りなん 津の国の 長柄の橋は 跡もなき世に

(続後撰・雑四・一〇二七)

分別功德品、願我於未來長寿度衆生の心を 兵部卿有教
行末も 長柄の橋の 朽ちずして 尽くる世もなき 人を渡さん

(続後撰・雑四・一〇二八)

分別功德品、願我於未來長寿度衆生の心を 読人知らず
行く末も 長柄の橋の 朽ちずして 尽くる世もなく 人を渡さん

(続古今・釈教・七七九)

前大納言経房家歌合に、久恋

前大納言隆房

人知れず 恋ひ渡る間に 朽ちにける 長柄の橋を またや作らむ

(続古今・恋五・一三八〇)

(祝の歌の中に)

従三位頼政

君が代は 長柄の橋を 千度まで 作り替へても なほや古りなん

(続古今・賀・一九〇三)

橋

(常磐井入道前太政大臣)

聞き渡る 長柄の橋も 朽ちにけり 身の類ひなる 古き名ぞなき

(続拾遺・雑上・一一〇七)

天王寺へ詣で侍りけるに、長柄の橋は何処ぞ、と

人に問ふに、早く過ぎぬ、と答へければ 小弁

橋柱 それとばかりも 見るべきに 知らず長柄も 過ぎにけるかな

(玉葉・旅・一一八三)

名所の百首の歌召されける時、長柄橋 順徳院御製

古へに あらず長柄の 橋柱 古りにし跡を 忍ばずもなし

(玉葉・雑二・二〇七四)

同じ心(長柄橋)を、詠み侍りける 前中納言定家

さもあらばあれ 名のみ長柄の 橋柱 朽ちずは今の 人も偲ばじ

(玉葉・雑二・二〇七五)

弘安の百首の歌奉りける時

民部卿資宣

何と世に 憂き身長柄の 橋柱 なほあり顔に 朽ち残るらん(続千載・雑中・一九四〇)

(五月雨を)

読人知らず

今日幾日 日数も古りぬ 津の国の 長柄の橋の 五月雨の頃

(続後拾遺・雑上・一〇一六)

(題知らず)

前権僧正慈慶

朽ちねただ 憂き身長柄の 橋柱 世を渡るべき 方便だになし

(続後拾遺・雑下・一一七六)

弘安の百首の歌召しける次に

龜山院御製

さてもげに 長柄の橋の 長らへて 世を渡る身ぞ 苦しかりける

(続後拾遺・雑下・一一七七)

文永二年九月十三夜、仙洞の五首の歌合に、絶恋

前大納言為家

今来んと 言ひし長柄の 橋柱 またも通はぬ 名のみ古りつつ

(新千載・恋五・一五五三)

(題知らず)

津守国夏

古への 長柄の橋も 津の国の 名には朽ちせず なほ残りけり

(新千載・雑下・二〇四六)

長元四年九月、上東門院、住吉の社に詣でさせ
給ひける時、人々詠み侍りけるに

法成寺入道前摂政太政大臣

君の代は 長柄の橋の 始めより 神寂びにける 住吉の松 (新拾遺・賀・六七八)

題知らず

花山院御製

千早振る 神の御代より… 言ひ伝えへたる 古言は 長柄の橋の 長らへて… (新拾遺・雑下・一八八二)

宝治の百首の歌奉りける時、寄橋恋 兵部卿隆親

古理にける 長柄の橋の 跡よりも なほ絶えぬべき 恋の道かな (新後拾遺・恋四・一一八二)

恋の御歌の中に

亭子院御製

作るなる 橋と知る知る 恨むれば 思ひ長柄の 言ふにぞありける (新後拾遺・恋五・一二六一)

【長井里(浦)】(掇津)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…四例

(千鳥を、詠める)

法印静賢

霜冴えて 小夜も長居の 浦寒み 明け遣らずとや 千鳥鳴くらん (千載・冬・四二七)

堀河院に百首の歌奉りける時 権中納言国信

嵐吹く 生駒の山の 雲晴れて 長居の浦に 澄める月影 (新後撰・秋下・三六八)

百首の歌召しける時、離別 崇徳院御製

沖つ波 立ち別るとも 音に聞く 長居の浦に 舟止めすな (新千載・離別・七四五)

京極前関白太政大臣家歌合に 藤原頭綱朝臣

君の代は 長居の浦の 細れ石の 岩根の山と なり果つるまで (新千載・慶賀・二三四四)

【渚】(河内)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二例

久安の百首の歌奉りける時、霞、柳、桜 皇太后宮大夫俊成

花の色の 飽かず見ゆれば 帰らめや 渚の宿に いざ暮してむ (続後撰・物名・五〇四)

弘安元年、百首の歌奉りける時 法印定円

交野なる 渚の桜 幾春か 絶えても言ひし 跡に咲くらん (新後拾遺・雑春・六一一)

【名草浜】(紀伊)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…七例

返事せざりける女の文を、辛うじて得て 読人知らず

跡見れば 心名草の 浜千鳥 今は声こそ 聞かまほしけれ (後撰・恋二・六三五)

紀の介に侍りける男の、罷り通はずなりければ、
かの男の姉の許に愁へ遣せて侍りければ、いと
心憂き事かな、と言ひ遣はしたりける返事に

(読人知らず)

紀の国の 名草の浜は 君なれや 事の言ふ甲斐 ありと聞きつる

(後撰・雑三・一二二二三)

同じ(久安)百首の歌奉りける時の長歌 待賢門院堀河

時知らぬ 谷の埋もれ木… 頼むにも 名草の浜の 慰みて…

(千載・雑下・一一六三)

隱名恋と言へる心を

皇太后宮大夫俊成

海人の刈る 海松布を波に 紛へつつ 名草の浜を 訪ね侘びぬ

(新古今・恋一・一〇七八)

(恋の歌の中に)

式部卿親王

何にかは 今は名草の 浜千鳥 文伝ふべき 便りだになし

(玉葉・恋四・一六七二)

百首の歌奉りし時

内大臣

浦伝ふ 跡も名草の 浜千鳥 夕潮満ちて 空に鳴くなり

(続千載・冬・六二六)

(恋の歌の中に)

右衛門督教定

逢ふ事も 今は名草の 浜風に なほ波騒ぐ 袖を見せばや

(続千載・恋四・一四四三)

【勿来関】(陸奥)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一七例

寛平の帝、御髪剃させ給うての頃、御帳の巡りに

のみ人は侍はせ給うて、近う寄せられざりければ、

書きて御帳に結び付けける

小八条御息所

立ち寄らば 影踏むばかり 近けれど 誰れか勿来の 関を据えけん

(後撰・恋二・六八二)

春は東より来たると言ふ心を、詠み侍りける 源師賢朝臣

東路は 勿来の関も あるものを 如何でか春の 越えて来つらん (後拾遺・春下・三)

寄関恋を、詠める

源俊頼朝臣

勿来と言ふ 言をば君が 言種を 関の名ぞとも 思ひけるかな

(金葉(異本)・恋下・六九八)

陸奥国に罷りける時、勿来の関にて、

花の散りければ、詠める

源義家朝臣

吹く風を 勿来の関と 思へども 道も狭に散る 山桜かな (千載・春下・一〇三)

(題知らず)

(小町)

海松布刈る 海人の行き来の 湊路に 勿来の関も 我が据えなくに

(新勅撰・恋一・六五二)

題知らず

西行法師

東路や 信夫の里に 休らひて 勿来の関を 越えぞ煩ふ

(新勅撰・恋一・六七二)

返し

読人知らず

郭公 勿来の関の なかりせば 君が寢覚に 先づぞ聞かまし

(続後撰・夏・一九二)

宝治の百首の歌召しける次に、寄関恋 後嵯峨院御製

聞く度に 勿来の関の 名も辛し 行きては還る 身に知られつつ

(新後撰・恋三・一〇〇五)

恋の歌として

一品資子内親王

夢路には 勿来の関も なしと言ふに 恋しき人の などか見え来ぬ

(玉葉・恋二・一三七一)

人の許より、え詣で来ぬ、など申して侍り

和泉式部

ける返事に、遣はしける 言はねども 心に据うる 関とこそ見れ

(玉葉・恋三・一五五〇)

恋の歌の中に

安嘉門院四条

さてやさは 越えにしものを 今更に または勿来の 関守ぞ憂き

(玉葉・恋五・一七四一)

前右近大将頼朝、都に上りて侍りけるが、東へ

下りなんとしける頃、遣はしける 前大僧正慈鎮

東路の 方に勿来の 関の名は 君を都に 住めとなりけり

(続千載・羈旅・七九二)

返し 前右近大将頼朝

都には 君に逢坂 近ければ 勿来の関は 遠きとを恐れ

(続千載・羈旅・七九三)

東三条入道摂政、消息して侍りける返事に 右近大将道綱母

越え侘ぶる 逢坂よりも 音に聞く 勿来は固き 関と知らなん

(新千載・恋三・一二九六)

嘉元の百首の歌奉りける時 従二位為子

聞くも憂し 誰れを勿来の 関の名ぞ 行き逢ふ道を 急ぐ心に

(新拾遺・恋二・一〇五六)

題知らず

前大納言隆房

如何にまた 心一つの 通路も 末は勿来の 関となるらん

(新拾遺・恋二・一〇五七)

(宝治の百首の歌に、同じ心〈寄関恋〉を) 前大納言為氏

厭はるる 我が身勿来の 関の名は つれなき中や 初めなるらん

(新続古今・恋二・一一三四)

【名取川】(陸奥)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

(東国風俗五首)

名取川 かはなる鳥ぞ ながれても 下行く水の ますもとぞ思ふ (一二六)

●勅撰和歌集……三一例

(題知らず)

忠岑

陸奥に ありと言ふなる 名取川 なき名取りては 苦しかりけり (古今・恋三・六二八)

(題知らず)

(読人知らず)

名取川 瀬瀬の埋れ木 現はれば 如何にせむとか 相見初めけむ (古今・恋三・六五〇)

なき名立ちける人の許、遣はしける 前斎宮内侍

浅ましや 逢ふ瀬も知らぬ 名取川 夙に岩間 漏らすべしやは (金葉・恋上・三九六)

題知らず

源重之

名取川 梁瀬の波ぞ 騒ぐなる 紅葉やいとど 寄りて堰くらむ (新古今・冬・五五三)

撰政太政大臣家歌合に、詠み侍りける 寂蓮法師

ありとても 逢はぬ例の 名取川 朽ちだに果てぬ 瀬瀬の埋れ木 (新古今・恋二・一一一八)

千五百番の歌合に 撰政太政大臣

嘆かずよ 今はた同じ 名取川 瀬瀬の埋れ木 朽ち果てぬとも (新古今・恋二・一一一九)

建保二年、内裏の詩歌を合せられけるに、

河上花 (前中納言定家) 瀬瀬の埋れ木 (続後撰・春下・一三五)

名取川 春の日数は 現はれて 花にぞ沈む 瀬瀬の埋れ木 祝部成賢 (題知らず) 祝部成賢 瀬瀬の埋れ木 (続後撰・春下・一三五)

朽ちねただ なほもの思ふ 名取川 憂かりし瀬瀬に 残る埋れ木 (続後撰・恋四・八九九)

(権僧正円経、勸め侍りける春日社の名所の十首の歌に、述懐) 従三位顕氏

年経れど 変はりも遣らぬ 名取川 憂き身ぞ今は 瀬瀬の埋れ木 (続後撰・雑中・一一六八)

寄河述懐 藤原伊長朝臣

憂き身世に 沈み果てたる 名取川 また埋れ木の 数や添ふらん (続後撰・雑中・一一六九)

光明峰寺入道前撰政、内大臣の時の百首の歌に、名所恋 前中納言定家

現はれて 袖の上行く 名取川 今は我が身に 堰く方もなし (続古今・恋三・一二〇〇)

中務卿親王家の十首の歌合の歌 源時清

陸奥に ありてふ川の 埋れ木の 何時現はれて 憂き名取りけん (続古今・恋四・一二九二)

(恋の歌の中に) 前中納言定家

名取川 如何にせむとも 未だ知らず 思へば人を 恨みけるかな (続拾遺・恋三・九一四)

夏の歌の中に 従三位為繼

名取川 瀬瀬のにありてふ 埋れ木も 淵にぞ沈む 五月雨の頃 (新後撰・夏・二一二)

恋の歌の中に 津守国助女

埋れ木の さてや朽ちなむ 名取川 現はれぬべき 瀬瀬は過ぎにき (新後撰・恋一・八一六)

若宮の神主になりて後、詠める 中臣祐春

代代掛けて 神に仕ふる 名取川 かかる瀬までと 身をぞ折りし (続千載・神祇・八八五)

百首の歌奉りし時 少将内侍

如何にしも 朽ちだに果てむ 名取川 瀬瀬の埋れ木 現はれぬ間に (続千載・恋一・一〇九九)

惜人名恋と言へる心を 式部卿久明親王

流れては 人の為憂き 名取川 よしや涙に 沈み果つとも (続千載・恋一・一一〇〇)

恋の歌の中に 平政長

憂しとても 逢ふにし代へば 名取川 よし現はれよ 瀬瀬の埋れ木 (続千載・恋一・一一二四)

(題知らず) 大江広茂

如何なれば 憂き名ばかりの 名取川 逢ふ瀬を外に 聞き渡るらん (続千載・恋二・一二五六)

(題知らず) 従三位氏久

名取川 逢ふ瀬に淀む 流れ木の 寄る方知らで 濡るる袖かな (続後拾遺・恋一・七〇九)

名所の百首の歌奉りける時 僧正行意

徒に 逢はぬ憂き身の 名取川 梁瀬の波を 袖に掛けつつ (続後拾遺・恋二・七五九)

題知らず 藤原貞忠

名取川 如何なる瀬にか 現はれて 身の埋れ木の 人に知られん (続後拾遺・雑中・一一二二)

中務卿宗尊親王家歌合に 前参議能清

秋の夜の 月の氷の 名取川 なき名現はず 波の音かな (新千載・秋上・四三九)

百首の御歌の中に 花園院御

流れての その夜語りの 名取川 仮の逢ふ瀬に 身をば沈めし (新千載・恋三・一三九九)

(逢不会恋の心を) 権中納言経定女

そのままに 逢ふ瀬は絶えて 名取川 憂き名ばかりぞ 現はれにける (新千載・恋五・一六一八)

嘉元の百首の歌奉りける時、同じ心へ 贈従三位為子

逢不会恋を 現はれて 悔しきものは 名取川 絶えける中の 瀬瀬の埋れ木 (新千載・恋五・一六一九)

文保三年、百首の歌奉りける時 前大納言為定

名取川 瀬瀬の埋れ木 浮き沈み 現はれて行く 五月雨の頃 (新拾遺・夏・二六五)

河上春月と言ふ事を 権中納言为重

夜と共に 霞める月の 名取川 なき名と言はん 晴れ間だになし (新後拾遺・春下・一三九)

百首の歌奉りし時、忍恋 深守法親王

名取川 音にな立てそ 陸奥の 信夫が原は 露余るとも (新後拾遺・恋一・九五二)

文保の百首の歌奉りける時 前中納言有忠

渡らでも 濡るとならば 名取川 掛けてこそ見め 袖の柵 (新統古今・恋一・一〇六八)

【難波(の御)津】(撰津)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一七例

(題知らず) (読人知らず)

君が名も 我が名も立てじ 難波なる 御津とも言ふな 逢ひきとも言はじ (古今・恋三・六四九)

(題知らず)

(読人知らず)

押し照るや 難波の御津に 焼く塩の 辛くも我は 老いにけるかな
または、大伴の御津の浜辺に。

(古今・雑三・八九四)

身の愁へ侍りける時、津の国に罷りて、

・住み始め侍りけるに

業平朝臣

難波津を 今日こそ御津の 浦毎に これやこの世を 倦み渡る舟

(後撰・雑三・一二四四)

燕め

輔相

難波津は 暗目にのみぞ 舟は着く 朝の風の 定めなければ

(拾遺・物名・四〇六)

春の歌とて、詠み侍りける 後京極撰政前太政大臣

難波津に 咲くや昔の 梅の花 今も春なる 浦風ぞ吹く

(新勅撰・春上・四一)

入道二品親王家の五十首、寄煙恋

参議雅経

恨みじな 難波の御津に 立つ煙 心から焼く 海人の藻塩火

(新勅撰・恋二・七六一)

(題知らず)

正三位知家

難波なる 御津とも言はじ 葦の根の 短き夜半の 十六夜の月

(続後撰・夏・二一八)

天王寺に詣でて、詠み侍りける

前大僧正慈鎮

難波津に 人の願ひを 満つ潮は 西を指してぞ 契り置きける

(続後撰・夏・六二九)

(題知らず)

(後鳥羽院御製)

心あらむ 人の為とや 霞むらん 難波の御津の 春の曙

(続古今・春上・四六)

平野社の歌合に

(後鳥羽院御製)

難波津に 冬籠りせし 花なれや 平野の松に 降れる白雪

(続古今・神祇・七一三)

吹田の十首の歌に

前左大臣

難波なる 御津とばかりの 契りにて 起き伏し葦の 音こそ泣かるれ

(続古今・恋一・一〇三一)

人々に勧めて詠ませ侍りける住吉社の

十首の歌に、旅宿風

前大納言為氏

夢をだに 御津とは言はじ 難波なる 葦の篠屋の 夜半の秋風 (続千載・羈旅・八〇二)

恋の歌の中に

為道朝臣女

夢にても 御津とは言ひそ 難波なる 葦の仮寝の 一夜ばかりは

(続後拾遺・恋三・八二五)

阿字観を

前僧正公朝

夢の中に 難波の事を 見つれども 覚むれば葦の 一夜なりけり

(続後拾遺・釈教・一二九六)

徳治二年三月、歌合に

後宇多院御製

難波津の 昔の風は 異なれど 我が世春辺と 咲くや梅が枝

(新千載・恋一・四〇)

嘉元元年、百首の歌奉りける時、霞を

前大納言経継

難波津の 葦の八重垣 荒れぬれど 霞ぞ春は 隔てなりける (新統古今・春上・二三)

浄土宗の心を、詠める長歌

頓阿法師

朝日影 憂き世の闇に… 知る寄り外は 難波なる 御津の心も…

(新統古今・雑下・二〇四七)

【奈良思の山(岡)】 (大和)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……七例

桜の花を、詠める

読人知らず

吹く風を 奈良思の山の 桜花 長閑けくぞ見る 散らじと思へば (後撰・春中・五三)

(題知らず)

山辺赤人

我が背子を 奈良思の岡の 呼子鳥 君呼び返せ 夜の更けぬ時 (拾遺・恋三・八一九)

坂上郎女に、遣はしける

大伴俊見

古里の 奈良思の岡に 郭公 言伝て遣りき 如何に告げきや (拾遺・雑春・一〇七七)

題知らず

田原天皇御製

神奈備の 岩瀬の森の 郭公 奈良思の岡に 何時か来鳴かむ (新勅撰・夏・一四五)

題知らず

権中納言長方

敷島や 布留の都は 埋もれて 奈良思の岡に 深雪積もれり (新勅撰・冬・四一一)

百首の歌召されし次に

法皇御製

鳴き過ぐる 奈良思の岡の 郭公 古里人に 言や伝てまし (続千載・夏・二五〇)

弘長元年、百首の歌奉りける時、鹿を 後九条前内大臣

白露の 奈良思の岡の 真葛 分けて来る鹿や 涙添ふらん (新続古今・秋下・五〇〇)

【鳴滝】(山城)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……一例

(同じ心(六月祓)を)

皇太后宮大夫俊成

鳴滝や 西の川瀬に 祓せん 岩越す波も 秋や近きと (続後撰・夏・二三七)

【錦の浦】(伊勢)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……一例

錦の浦と言ふ所にて

道命法師

名に高き 錦の浦を 来て見れば 潜かぬ海人は 少なかりけり

(後拾遺・雑四・一〇七五)

【布引の滝】(摂津)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……二一例

(宇治前太政大臣、布引の滝見に罷り

たりける供に罷りて、詠める) 読人知らず

天の川 これや流れの 末ならん 空より落つる 布引の滝 (金葉・雑上・五四六)

左衛門督家成、布引の滝見に罷りて、

歌詠み侍りけるに、詠める 藤原隆季朝臣

雲居より 貫き掛くる 白玉を 誰れ布引の 滝と言ひけん (詞花・雑上・二八五)

京極前太政大臣、布引の滝見侍りける時、
詠み侍りける 六条右大臣

水の色の ただ白雲の 見ゆるかな 誰れ晒しけん 布引の滝 (千載・雑上・一〇三七)

布引の滝を、詠める 藤原良清
音にのみ 聞きしはことの 数ならで 名よりも高き 布引の滝 (千載・雑上・一〇四〇)

二条関白内大臣

水上の 空に見ゆるは 白雲の 立つに紛へる 布引の滝 (新古今・雑中・一六五二)

有家朝臣

久方の 天つ乙女が 夏衣 雲居に晒す 布引の滝 (新古今・雑中・一六五三)

布引の滝を、詠める 藤原行能朝臣

布引の 滝の白糸 邂逅に 訪ひ来る人も 幾世経ぬらむ (新勅撰・雑四・一二八五)

名所の歌召しける次に 後鳥羽院御製

布引の 滝の白糸 打ち延へて 誰れ山風に 架けて干すらん (続後撰・雑上・一〇一四)

布引の滝を、詠み侍りける 従二位頼氏

天の川 雲の水脈より 行く水の 余りて落つる 布引の滝 (続後撰・雑上・一〇一五)

洞院撰政治家の百首の歌に 従三位行能

五月雨に 水の水上 澄みやらで 晒す甲斐なき 布引の滝 (続古今・夏・二三九)

月照滝水と言ふ心を 後京極撰政前太政大臣

山人の 衣なるらし 白妙の 月に晒せる 布引の滝 (続古今・雑中・一六四八)

布引の滝を 祭主輔親

水上は 何処なるらん 白雲の 中より落つる 布引の滝 (続古今・雑中・一六四九)

同じ〈布引〉滝見に罷りて、詠み侍りける

源俊頼朝臣

山姫の 峰の梢に 引き掛けて 晒せる布や 滝の白波 (続古今・雑中・一六五〇)

文永二年七月、白川殿にて、人々題を探りて

七百首の歌仕うまつりける時、滝霞を

山階入道左大臣

水上は 雲の何処も 見え分かず 霞みて落つる 布引の滝 (続拾遺・春上・三一)

(千五百番の歌合に) 従二位家隆

水上は 雲の何処も 見え分かず 霞みて落つる 布引の滝 (新後撰・雑上・一二〇八)

布引の滝を見て 西園寺入道前太政大臣

山姫の 手玉もゆらに 織り延へて 千尋に晒す 布引の滝 (続千載・秋上・一六三五)

布引の滝御覽じに御座しましたりけるに、

御供に侍ふ人々歌仕うまつりける次に 龜山院御製

白糸の 世を経て後の 例しかな 今日我が見つる 布引の滝 (続後拾遺・雑上・九七一)

百首の歌奉りし時、五月雨 入道親王覚誉

五月雨の 空掻き暗す 時しもあれ なほこそ晒せ 布引の滝 (新千載・夏・二六一)

夏の歌の中に 中臣祐殖

晒しえぬ 色かとぞ見る 五月雨に 濁りて落つる 布引の滝 (新続古今・夏・二九二)

題知らず 後八条入道前内大臣

日に磨き 月にぞ晒す 白玉の 乱れて落つる 布引の滝 (新続古今・雑下・二〇一四)

布引の滝を
藤原基隆
津の国の 生田の川の 水上は 今こそ見つる 布引の滝 (新統古今・雑下・二〇一五)

【箱根山】(相模)

●玄々集……用例無
●能因法師集…用例無
●勅撰和歌集…一例
照射を、詠める
橘俊綱朝臣
照射して 箱根の山に 明けにけり 二度三度 逢ふとせし間に (千載・雑下・一一八三)

【羽束師の森】(山城)

●玄々集……用例無
●能因法師集…用例無
●勅撰和歌集…六例
題知らず (読人知らず)
忘れて 思ふ嘆きの 繁るをや 身を羽束師の 森と言ふらん (後撰・恋二・六六四)

この集撰し侍りける時、歌請はれて
贈るとて、詠める 藤原顕輔朝臣
家の風 吹かぬもの故 羽束師の 森も言の葉 散らし果てつる (金葉・雑上・五五五)

百首の歌召しける時、詠ませ給うける 崇徳院御製
敷島や 大和の歌の… 世の人聞きは 羽束師の 森もやせんと… (千載・雑下・一一六二)

題知らず 皇太后宮大夫俊成
漏らしても 袖や萎れん 数ならぬ 身を羽束師の 森の雫は (続拾遺・恋一・八一八)

久安の百首の歌奉りける時の長歌 大炊御門右大臣
山の辺の 跡も伝へぬ… 言の葉の みな羽束師の 森に吹く… (新千載・雑下・二一三四)

百首の御歌の中に、独述懐と言ふ事を、
詠ませ給うける 後小松院御製
蜻蛉羽の 姿の国と… 愚かなる身を 羽束師の 森の下草… (新統古今・雑下・二〇四四)

【初瀬の川】(大和)

●玄々集……用例無
●能因法師集…用例無
●勅撰和歌集…二〇例
題知らず (読人知らず)
初瀬川 古る川野辺に 二本ある杉 年を経て またも相見む 二本ある杉 (古今・雑体・一〇〇九)

ある人賤しき名取りて、遠江国へ罷るとて、初瀬川を
渡るとて、詠み侍りける 読人知らず
初瀬川 渡る瀬さへや 濁るらん 世に住み難き 我が身と思へば (後撰・羈旅・一三五〇)

初瀬川 渡る瀬さへや 濁るらん 世に住み難き 我が身と思へば (後撰・羈旅・一三五〇)

撰政太政大臣家にて、詩歌を合せけるに、

水辺冷自秋と言ふ事を、詠みける 有家朝臣

涼しさは 秋や返りて 初瀬川 古る川野辺の 杉の下陰 (新古今・夏・二六一)

入道前関白、百首の歌詠ませ侍りける時、

年の暮れの心を、詠みて遣はしける

後徳大寺左大臣

石激る 初瀬の川の 波枕 早くも年の 暮れにけるかな (新古今・冬・七〇三)

(題知らず) 寂蓮法師

契りきな また忘れずよ 初瀬川 古る川野辺の 二本の杉 (続後撰・恋四・八九八)

題知らず 読人知らず

初瀬川 流るる水脈の 瀬を早み 井手越す波の 音ぞ清けき (続後撰・雑上・一〇一九)

建保四年、内裏の百番の歌合に 常磐井入道前太政大臣

初瀬川 花の水泡の 消えがてに 春現はるる 瀬瀬の白波 (続拾遺・春下・一一九)

文永二年九月十三夜、五首の歌合に、河月 光俊朝臣

初瀬川 井手越す波の 音よりも 明かに澄める 秋の夜の月 (新後撰・秋下・三五二)

建仁元年、三首の歌合に、遇不逢恋 皇太后宮大夫俊成

初瀬川 また見むとこそ頼めしか 思ふも辛し 二本の杉 (新後撰・恋五・一一四)

(題知らず) 前大僧正慈鎮

初瀬川 小夜の枕に 訪れて 明くる檜原に 嵐をぞ聞く (玉葉・旅・一一九三)

不逢恋の心を、詠み侍りける 後京極撰政前太政大臣

初瀬川 井手越す波の 岩の上に 己砕けて 人ぞつれなき (玉葉・恋一・一二八六)

文保の百首の歌奉りける時 前中納言為相

卯の花の 咲き散る頃や 初瀬川 白木綿波も 岸を越ゆらむ (続後拾遺・夏・一六一)

和歌所にて、釈阿に九十賀賜はせける時、

屏風に 大蔵卿有家

初瀬川 井手越す波の 屢も 音やは弱る 五月雨の頃 (続後拾遺・夏・二〇七)

寄水恋と言ふ事を 俊頼朝臣

初瀬川 岩本去らず 行く水の 湧き返りても 濡るる袖かな (続後拾遺・恋一・七一〇)

十首の歌召しける次に、寄河恋を、詠ませ

給うける 後宇多院御製

初瀬川 井手越す波の 流れても 絶えせぬ中と 契り置かなん (続後拾遺・恋二・七九五)

題知らず 読人知らず

石激る 滝ぞ流るる 初瀬川 絶ゆる事なく またも聞きてん (続後拾遺・雑上・九七四)

(老後歳暮と言へる事を、詠める) 前大僧正範憲

初瀬川 流るる年を 堰きかねて 今はた老いの 波ぞ数添ふ (新千載・冬・七三二)

中納言為藤家の五首の歌に、河氷 頓阿法師

初瀬川 井手越す波の そのままに 凍りて架かる 瀬瀬の柵 (新拾遺・冬・六三九)

(題知らず) 法印定為

初瀬川 結ぶ水泡の 憂き身世に 消え返りても 絶えじとぞ思ふ

(新拾遺・恋四・一二六七)

百首の歌奉りし時、寄杉恋 中園入道前太政大臣

初瀬川 また相見んと 頼めてし 標や何処 二本の杉 (新拾遺・恋四・一二六八)

【柞の森】（山城）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……九例

永承四年、内裏歌合に
堀河右大臣
如何なれば 同じ時雨に 紅葉する 柞の森の 薄く濃からん (後拾遺・秋下・三四一)

娘の草子書かせける置くに、書き付けける 源義国妻

子の許に 書き集めつる 言の葉を 柞の森の 形見とや見よ (詞花・秋下・三八〇)

左大将に侍りける時、家に百首の歌合し

侍りけるに、柞を、詠み侍りける 摂政太政大臣

柞原 雫も色や 変はるらむ 森の下草 秋更けにけり (新古今・秋下・五三一)

(左大将に侍りける時、家に百首の歌合し)

侍りけるに、柞を、詠み侍りける 定家朝臣

時分かぬ 波さへ色に 泉川 柞の森に 嵐吹くらし (新古今・秋下・五三二)

杜落葉 従二位隆博

散り敷ける 柞の紅葉 それをさへ 止めじと払ふ 森の下風 (玉葉・冬・八六二)

母身罷りて後、詠みける 賀茂遠久

立ち寄りて 時雨も暫し 過すべき 柞の森の 陰だにもなし (続千載・哀傷・二〇五二)

母の思ひにて侍りける時、藤原景綱が許に、

申し遣はしける 前大僧正禪助

忘るなよ 柞の森は 枯れぬとも 下葉に残る 露の縁を (続後拾遺・哀傷・一二四六)

返し 藤原景綱

枯れにける 柞の森の 露までも 縁と聞けば 涙落ちけり (続後拾遺・哀傷・一二四七)

未だ凡僧に侍りける時、母の常に、維摩講師

せんを見ばや、と申しけるに、身罷りて後、

程なく彼の請賜はりて、奈良へ下りけるに、

柞の森を過ぐとて、詠める 権僧正永縁

嬉しきに 先づ昔こそ 恋しけれ 柞の森を 見るにつけても (新千載・雑中・一九六六)

【浜名の橋】（遠江）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……二例

遠江に、公資朝臣許に送之于時在撰州

目にちかき 難波の浦に 思ふかな 浜名の橋の 秋霧のまを (一二三九)

浜名の橋をはじめて見て

今日みれば 浜名の橋を 音にのみ 聞きわたりける ことぞくやしき (一一五八)

● 勅撰和歌集……一二例

恒徳公家の彰子に 兼盛

潮満てる 程に行き交ふ 旅人や 浜名の橋と 名付け初めけん (拾遺・別・三四二)

父の供に遠江国に下りて、年経て後、下野守にて

下り侍りけるに、浜名の橋の本にて詠み侍りける

大江広経朝臣

東路の 浜名の橋を 来て見れば 昔恋しき 辺りなりけり (後拾遺・羈旅・五一六)

橋上初雪と言へる事を、詠める 前斎院尾張

白波の 立ち渡るかと 見ゆるかな 浜名の橋に 降れる初雪 (金葉・冬・二七九)

藤原実宗、常陸介に侍りける時、大蔵省の

使ども厳しく責めければ、卿匡房に言ひて

侍りければ、遠江に立て替へて侍りければ、

言ひ遣はしける 太皇太后宮肥後

筑波山 深く嬉しと 思ふかな 浜名の橋に 渡す心を (詞花・雑下・三七三)

(前関白家の歌合に、名所月を、詠み侍りける)

藤原光俊朝臣

澄み渡る 光も清し 白妙の 浜名の橋の 秋の夜の月 (新勅撰・雑下・一二九三)

題知らず 読人知らず

恋しくは 浜名の橋を 出でて見よ 下行く水に 影や止まると (新勅撰・雑下・一二九四)

題知らず 前内大臣家

朝朗け 浜名の橋は 跡絶えして 霞を渡る 春の旅人 (続後撰・羈旅・一三一六)

東に罷りける時、浜名の橋の宿りにて、

月隈なかりけるを見て 政村朝臣

高師山 夕越え暮れて 麓なる 浜名の橋を 月に見るかな (続古今・羈旅・八七八)

題知らず 前大納言為家

風渡る 浜名の橋の 夕潮に 差されて上る 海人の釣舟 (続古今・雑下・一七三〇)

都より東へ還り下りて後、前大僧正慈鎮の

許へ、詠みて遣はしける歌の中に 前右大将頼朝

返る波 君にとのみぞ 言伝し 浜名の橋の 夕暮れの空 (続後拾遺・羈旅・五七五)

題知らず 大江広秀

打ち渡す 浜名の橋の 曙に 一群曇る 待つ薄霧 (風雅・秋下・六五八)

夏の歌の中に 津守国道

いとどなほ 入海遠く なりにけり 浜名の橋の 五月雨の頃 (新後拾遺・夏・二三七)

【平野】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……四例

初めて平野祭に男使立てし時、唱ふべき歌、

詠ませしに 大中臣能宣

千早振る 平野の松の 枝繁み 千代も八千代も 色は変はらじ (拾遺・賀・二六四)

源遠古朝臣、子生ませて侍りけるに 元輔

生ひ繁れ 平野の原の 綾杉よ 濃き紫に 立ち重ぬべく (拾遺・神楽・五九二)

平野社の歌合に 従二位家隆

難波津に 冬籠りせし 花なれや 平野の松に 降れる白雪 (続古今・神祇・七一三)

建春門院、同じ(平野)社に参らせ給うけるに、

御供の上達部の中に、詠み侍りける 読人知らず

千早振る 平野の松も 今日こそは 花咲く春の 例なるらめ (新千載・神祇・九三九)

【比良の山】（近江）

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…二〇例

花の歌とて、詠み侍りける 右近中将良経
桜咲く 比良の山風 吹くままに 花になり行く 滋賀の浦波 (千載・春下・八九)

湖上落葉と言へる心を、詠める 形部卿範兼
楽浪や 比良の高嶺の 山嵐 紅葉を海の ものとなしつる (千載・秋下・三六六)

(時雨の歌とて、詠める) 道因法師
嵐吹く 比良の高嶺の 嶺渡しに あはれ時雨るる 神無月かな (千載・冬・四一〇)

五十首の歌奉りし中に、湖上花を 宮内卿
花誘ふ 比良の山風 吹きにけり 漕ぎ行く舟の 跡見ゆるまで (新古今・春下・一二八)

(題知らず) 法性寺入道前関白太政大臣
楽浪や 志賀の唐崎 風冴えて 比良の高嶺に 霰降るなり (新古今・冬・六五六)

題知らず 読人知らず
楽浪の 比良山風の 海吹けば 釣りする海人の 袖反る見ゆ (新古今・雑下・一七〇二)

高野に侍りける頃、寂然法師大原に住み
侍りけるに、遣はしける 西行法師
大原は 比良の高嶺の 近ければ 雪降る程を 思ひこそ遣れ (新勅撰・冬・四一五)

麗景殿女御の歌合の歌 兼盛
見渡せば 比良の高嶺に 雪消えて 若菜摘むべく 野はなりにけり (続後撰・春上・三四)

入道前撰政家歌合に風前擣衣 後鳥羽院下野
吹き下す 比良山風や 寒かるらん 真野の浦人 衣擣つなり (続後撰・秋・三九九)

題知らず 大納言経信
雲払ふ 比良山風に 月冴えて 氷重ぬる 真野の浦波 (続古今・冬・六一八)

(題知らず) 院大納言典侍
秋の夜は 比良の山風 冴えねども 月にぞ凍る 志賀の浦波 (新後撰・秋下・三五五)

(月の歌の中に) 鎌倉右大臣
楽浪や 比良の山風 小夜更けて 月影寒し 志賀の唐崎 (続千載・秋下・五一〇)

(秋の歌の中に) 行観法師
志賀の海人の 釣する袖に 月冴えて 雲吹き返す 比良の山風 (続千載・雑上・一七五七)

題知らず 伏見院御製
滋賀の浦や 寄せ来る波も 白妙に 花吹き下す 比良の山風 (新千載・春下・一五七)

湖辺冬月と言ふ事を、詠み侍りける 僧正慈能
鳩の海や 比良の山風 冴ゆる夜の 空より凍る 有明の月 (新拾遺・冬・六二九)

貞和の百首の歌奉りし時 等持院贈左大臣
霧払ふ 比良の山風 更くる夜に 楽浪晴れて 出づる月影 (新拾遺・雑上・一六四九)

題知らず 源藤経
比良の山 高嶺の嵐 吹くなへに 花を寄せ来る 志賀の浦波 (新後拾遺・雑春・六三八)

題知らず 従三位頼政

題知らず

近江路や 真野の浜辺に 駒止めて 比良の高嶺に 花を見るかな

(新統古今・春下・一三〇)

湖水を

後二条院御製

楽浪や 比良の山風 冴ゆる日は 汀凍りて 寄る舟もなし

(新統古今・冬・六六〇)

題知らず

恵慶法師

氷だに 未だ山水に 結ばねど 比良の高嶺は 雪降りにけり

(新統古今・冬・六八九)

【広沢の池】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

広沢の池に罷りて、詠み侍りける 天台座主道玄

老いて見る 我が影のみや 変はるらむ 昔ながらの 広沢の池

(新後撰・雑下・一四六八)

春の歌の中に 前大納言為家

広沢の 池の堤の 柳影 緑も深く 春風ぞ降る

(風雅・春中・九九)

釈教の心を、詠ませ給ひける 後宇多院御歌

志 深く汲みてし 広沢の 流れは末も 絶えじとぞ思ふ

(風雅・釈教・二〇八〇)

遍照寺にて、月を見て、詠める 從三位頼政

古への 人は汀に 影絶えて 月のみ澄める 広沢の池

(新千載・雑中・一八五〇)

元亨二年四月、龜山殿にて、人々題を探りて

五十首の歌仕うまつりけるに、釈教 権僧正道我

広沢の 代代の流れを 如何にして 狭き袖にも 受け始めけん

(新統古今・釈教・八六二)

【深草の山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…五例

堀河の太政大臣、身罷りける時に、深草の

山に納めてける後に、詠みける 僧正勝延

空蟬は 殻を見つとも 慰めつ 深草の山 煙だに立て

(古今・哀傷・八三一)

延喜御時、中宮歌合 読人知らず

夏来れば 深草山 郭公 鳴く声繁く なり増さるなり

(拾遺・夏・一二三)

(秋の歌の中に) 寂超法師

深草の 山の裾野の 浅茅生に 夕風寒み 鶉鳴くなり

(続古今・秋下・四八八)

同じ(後深草院、崩れさせ給ひにける)年の

秋の末つ方、人の許へ、詠みて遣はしける

前中納言経親

深草の 山の紅葉に この秋は 嘆きの色を 添へてこそ見れ

(玉葉・雑四・二四〇七)

後深草院、崩れさせ給うける頃、深草へ御幸

侍りけるに、霧の深く立ちて侍りければ

伏見院御製

消え果てし 煙の末の 一面影も 立ち添ふ霧の 深草の山 (新千載・哀傷・二二四四)

【吹上の浜】(紀伊)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一四例

熊野へ参り侍りける道にて、吹上の浜を見て 懷円法師

都にて 吹上の浜を 人間はば 今日見るばかり 如何が語らん (後拾遺・羈旅・五〇四)

堀河院に、百首の歌奉りけるに 祐子内親王家紀伊

浦風に 吹上の浜の 浜千鳥 波立ち来らし 夜半に鳴くなり (新古今・冬・六四六)

教長卿、名所の歌詠ませ侍りけるに 祝部成仲

打ち寄する 波の声にて 著きかな 吹上の浜の 秋の秋風 (新古今・雑中・一六〇九)

(題知らず) 正三位家隆

時しあれば 桜とぞ思ふ 春風の 吹上の浜に 立てる白雲 (新勅撰・雑四・一三二八)

名所のうた、詠み侍りけるに 前参議教長

波寄する 吹上の浜の 浜風に 時しも分かぬ 雪ぞ積もれる (新勅撰・雑四・一三二九)

(月の歌の中に) 藤原基綱

都にて 如何に語らん 紀の国や 吹上の浜の 秋の夜の月 (続後撰・秋中・三五三)

九月十三夜、十首の歌合に、名所月 権大納言実雄

沖つ風 吹上の浜の 白妙に なほ澄み上る 秋の夜の月 (続後撰・秋中・三五四)

建保二年、内大臣家の百首の歌、名所恋 前中納言定家

世と共に 吹上の浜の 潮風に 靡く真砂の 砕けてぞ思ふ (続後撰・恋二・七五七)

名所の百首の歌奉りける時 僧正行意

藤代の 御坂を越えて 見渡せば 霞みもやらぬ 吹上の浜 (続後撰・羈旅・一三一五)

海辺月を 法印最信

久方の 雲居をかけて 沖つ風 吹上の浜は 月ぞ明けき (新後撰・秋下・三六七)

文保の百首の歌奉りける時 三条入道前太政大臣

吹上の 浜の真砂の 潮風に 汀の千鳥 跡の残らず (新千載・冬・六六〇)

冬の歌の中に 光明峰寺入道前撰政太政大臣

沖つ風 吹上の浜の 潮干潟 真砂乱れて 霞降るらし (新千載・冬・六八七)

加賀乳母、紀の国へ下りける時、餞賜はすとて 円融院御製

朝夕に 馴れし見し事を 思ひ出でよ 吹上の浜の 風につけても (新千載・離別・七三六)

遠山霞と言ふ事を 権中納言雅縁

春寒み なほ吹上の 浜風に 霞みも果てぬ 紀路の遠山 (新続古今・春上・二九)

【富士(の)川】(駿河)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…四例

西園寺入道前太政大臣家の三十首の歌詠み

侍りけるに、秋の歌 従二位家隆

朝日射す 高嶺の深雪 空晴れて 立ちも及ばぬ 富士の川霧 (続後撰・秋中・三一六)

(寄河恋と言ふ事を)

藤原基政

舟呼ばふ 富士の川門に 日は暮れぬ 夜半にや過ぎん 浮島の原

(続古今・羈旅・九三二)

題知らず

正三位知家

流れてと 思ひしものを 富士川の 如何様にして 澄まずなりけん

(続古今・恋五・一三五六)

弘安元年、百首の歌奉りし時 入道二品親王性助

時雨るる 高嶺は空に 現はれて 山本上る 富士の川霧 (新後撰・雑上・一三〇二)

【富士の山(嶺)】 (駿河)

●玄々集……二例

胸は富士 袖は清見が 閑なれや 煙も浪も たたぬ日ぞなき (平祐挙・九〇)

ひぐらしに 山路の昨日 時雨しは 富士の高嶺の 雪にぞありける (大江嘉言・九七)

●能因法師集……一例

返し

東路は いづかたとかは 思ひ立つ 富士の高嶺は 雪降りぬらし (一一二(大江嘉言詠))

●勅撰和歌集……九九例

(題知らず) (読人知らず)

人知れぬ 思ひを常に 駿河なる 富士の山こそ 我が身なりけり (古今・恋一・五三四)

(題知らず) 藤原忠行

君てへば 生まれ見ずまれ 富士の嶺の 珍しげなく 燃ゆる我が恋 (古今・恋四・六八〇)

題知らず

読人知らず

逢ふ事の 稀なる色に…… 天雲の 晴るる時なく 富士の嶺の…… (古今・雑体・一〇〇一)

古歌奉りし時の目録の、その長歌 貫之

千早振る 神の御代より…… 世の人の 思ひ駿河の 富士の嶺の…… (古今・雑体・一〇〇二)

(題知らず)

紀乳母

富士の嶺の ならぬ思ひに 燃えば燃え 神だに消たぬ 空し煙を (古今・雑体・一〇〇二)

(題知らず)

(読人知らず)

恋をのみ 常に駿河の 山なれば 富士の嶺にのみ 泣かぬ日はなし (後撰・恋一・五六五)

題知らず

平定文

我のみや 燃えて消えなん 世と共に 思ひもならぬ 富士の嶺の如 (後撰・恋二・六四七)

返し

紀乳母

富士の嶺の 燃え渡るとも 如何がせむ 消ちこそ知らね 水ならぬ身は (後撰・恋二・六四八)

思ひ掛けたる女の許に

朝頼朝臣

富士の嶺を 外にぞ聞きし 今は我が 思ひに燃ゆる 煙なりけり (後撰・恋六・一〇一四)

返し

読人知らず

験なき 思ひとぞ聞く 富士の嶺も 託言ばかりの 煙なるらん（後撰・恋六・一〇一五）
（題知らず）（人麿）

千早振る 神も思ひの あればこそ 年経て富士の 山も燃ゆらめ（拾遺・神祇・五九七）

富士の山の形を作らせ給ひて、藤壺の御方へ遣はす 天曆御製

世の人の 及ばぬものは 富士の嶺の 雲居に高き 思ひなりけり（拾遺・恋四・八九一）

永承四年、内裏歌合に、詠める 相模

何時となく 心空なる 我が恋や 富士の高嶺に 掛かる白雲（後拾遺・恋四・八二五）

題知らず

大江嘉言

日暮らしに 山路の昨日 時雨しは 富士の高嶺の 雪にぞありける（詞花・冬・一五五）

題知らず

読人知らず

年を経て 燃ゆてふ富士の 山よりも 逢はぬ思ひは 我ぞ勝れる（詞花・恋上・二〇二）

家に歌合し侍りけるに、詠める 佐京大夫顕輔

終夜 富士の高嶺に 雲消えて 清見が関に 澄める月かな（詞花・雑上・三〇三）

百首の歌召しける時、月の歌とて、詠ませ給うける

大炊御門右大臣

小夜更けて 富士の高嶺に 澄む月は 煙ばかりや 曇りなるべき（千載・秋上・二八三）

題知らず

赤人

田子の浦に 打ち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ

題知らず

貫之

（新古今・冬・六七五）

験なき 煙を雲に 紛れへつつ 世を経て富士の 山と燃えなん

（題知らず）

深養父

（新古今・恋一・一〇〇八）

煙立つ 思ひならねど 人知れず 侘びては富士の 嶺をのみぞ泣く

（題知らず）

深養父

（新古今・恋一・一〇〇九）

（撰政太政大臣家の百首の歌合に） 家隆朝臣
富士の嶺の 煙もなほぞ 立ち上る 上なきものは 思ひなりけり

（新古今・恋二・一一三二）

五月の晦に、富士の山の雪白く降れるを見て、

詠み侍りける

業平朝臣

時知らぬ 山は富士の嶺 何時とてか 鹿の子斑に 雪の降るらむ

（新古今・雑中・一六一六）

入道二品親王家に五十首の歌詠み侍りけるに、

寄煙恋

入道前太政大臣

富士の嶺の 空にや今は 紛へまし 我が身に消たぬ 空し煙を（新勅撰・恋一・六八七）

（寛平御時、後の宮の歌合の歌）（読人知らず）

年を経て 燃ゆてふ富士の 山よりも 逢はぬ思ひは 我ぞ勝れる

（新勅撰・恋二・七一〇）

（題知らず）

九条右大臣

富士の嶺に 煙絶えずと 聞きしかど 我が思ひには 立ち遅れけり

（新勅撰・恋二・七二八）

建保三年、内裏歌合に

藤原信実朝臣

東路の 富士の柴山 暫しだに 消たぬ思ひし 立つ煙かな（新勅撰・恋五・九八七）

平兼盛、駿河守になりて下り侍りける時、
餞し侍るとて、詠める 大中臣能宣朝臣

往き換り 手向駿河の 富士の山 煙も立ち居 君を待つらし (新勅撰・雑四・一五九五)
家の五十首の歌 仁和寺二品法親王守覚

富士の嶺は 問はでも空に 知られけり 雲より上に 見ゆる白雪

(新勅撰・雑四・一二九六)

名所の百首の歌奉りける時、詠める 従三位範宗

世と共に 何時かは消えむ 富士の山 煙に馴れて 積もる白雪

(新勅撰・雑四・一二九七)

清見潟、富士の山を、詠み侍りける 藤原行能朝臣

君偲ぶ 夜な夜な分けし 道芝の 変はらぬ露や 絶えぬ白玉 (新勅撰・雑五・一三七一)

(九月十三夜の十首の歌合に、名所月) 藤原教定朝臣

時知らぬ 雪に光や 冴えぬらん 富士の高嶺の 秋の夜の月 (続後撰・秋中・三六一)

(雪を) 藤原基雅朝臣

時知らぬ 山とは言へど 富士の嶺の み雪も冬ぞ 降り増さりける

(続後撰・冬・五一八)

題知らず

忠岑

侘び人の 心の中を 較ぶるに 富士の山とや 下焦れける

(続後撰・恋二・七七四)

(題知らず)

京極前関白太政大臣

年を経る 思ひなりけり 駿河なる 富士の高嶺に 絶えぬ煙は (続後撰・恋二・七七五)

(百首の歌奉りし時、寄煙恋) 少将内侍

煙立つ 空にも知るや 富士の嶺の 絶えつつ永久に 思ひありとは

(続後撰・恋二・七七七)

返し

清慎公

富士の嶺の 絶えぬ煙も あるものを 燻ゆるは辛き 心なりけり

(続後撰・恋三・八五五)

(題知らず)

(読人知らず)

果てぬ身の 富士の山とも なりぬるか 燻ゆる思ひの 煙絶えねば

(続後撰・恋五・九四一)

四月二十日余りの頃、駿河の富士の社に籠りて侍りけるに、桜の花盛りに見えければ、詠み侍りける

法印隆弁

富士の嶺は 咲きける花の 慣らひまで なほ時知らぬ 山桜かな

(続後撰・雑上・一〇四九)

同じ(東)道にて、詠める

源兼朝

外に見て 幾日来ぬらん 東路は さながら富士の 山の麓を (続後撰・羈旅・一三一〇)

(題知らず)

後鳥羽院御製

富士の嶺の 月に嵐や 払ふらむ 神だに消たぬ 煙なれども (続古今・秋上・三九〇)

十首の歌講じ侍りし時、関路雪を 藤原光俊朝臣

秋までは 富士の高嶺に 見し雪を 分けてぞ越ゆる 足柄の関 (続古今・羈旅・九〇九)

千五百番の歌合に

二条院讃岐

富士の嶺も 立ち添ふ雲は あるものを 恋の煙ぞ 紛ふ方なき

(続古今・恋二・一〇七八)

冬の歌に

中宮権大納言

富士の嶺は 雪の内にも 現はれて 埋もれぬ名に 立つ煙かな

(続古今・雑上・一六二九)

(題知らず)

中務卿親王

立ち帰り 見てこそ行かえ 富士の嶺の 珍しげなき 煙なりとも

(続古今・雑中・一六四七)

月の歌の中に

登蓮法師

清見瀉 月澄む夜半の 群雲は 富士の高嶺の 煙なりけり

(続拾遺・秋下・三一)

建保五年、内裏歌合に、冬海雪

信実朝臣

田子の海人の 宿まで埋む 富士の嶺の 雪も一つに 冬は来にけり

(続拾遺・冬・四五三)

(恋の歌の中に)

前大納言為氏

徒に 立つ名ばかりや 富士の嶺の ならぬ思ひの 煙なるらん (続拾遺・恋二・八三〇)

弘長元年、百首の歌奉りける時、同じ心《霞》を

衣笠内大臣

立ち昇る 雲も及ばぬ 富士の嶺に 煙を籠めて 霞む春かな

(新後撰・春上・三一)

寄煙忍恋の心を

鷹司院按察

胸に満つ 思ひはあれど 富士の嶺の 煙ならねば 知る人もなし

(新後撰・恋一・七七八)

弘長三年九月十三夜、十首の歌合に、

寄煙忍恋

前大納言資季

富士の嶺の 消たぬ煙も 立たば立て 身の思ひだに 人し知らずは

(新後撰・恋一・七九六)

千五百番の歌合に

二条院讃岐

富士の嶺も 立ち添ふ雲は あるものを 恋の煙ぞ 紛ふ方なき

(新後撰(異本)・恋二・一六〇九)

旅の心を

前大僧正隆弁

日に掛けて 幾日になりぬ 東路や

み国を境ふ

富士の柴山

(玉葉・旅・一一六五)

春の歌の中に

前僧正道性

春は未だ 霞に消えて 時知らぬ 雪とも見えず 富士の柴山

(続千載・春上・三九)

(題知らず)

相模

煙立つ 富士の高嶺に 降る雪は 思ひの外に 消えずぞありける (続千載・冬・六七二)

嘉元の百首の歌奉りける時、旅

前大納言有房

言の葉も 及ばぬ富士の 高嶺かな 都の人に 如何が語らん (続千載・羈旅・八三九)

建長三年九月十三夜、十首の歌合に、

同じ心《寄煙恋》を

前大納言為家

名に立たん 後ぞ哀しき 富士の嶺の 同じ煙に 身を紛へても

(続千載・恋一・一一〇三)

弘安の百首の歌召されし次に

龜山院御製

富士の嶺の 煙の末は 跡なくて 燃ゆる思ひぞ 身をも放れぬ

(続千載・恋二・一一六六)

千五百番の歌合に

宜秋門院丹後

時知らぬ 恋は富士の嶺 何時となく 絶えぬ思ひに 立つ煙かな

亭子院歌合に、子日の松

紀友則

(続千載・恋二・一一六七)

片恋を 駿河の富士の 山よりも 我が胸の火の 先も燃ゆるか

(続後拾遺・物名・五〇七)

(題知らず)

今出河院近衛

富士の嶺に 寄そへて言はば 我が恋の 例あるにも なりぬべきかな

(続後拾遺・恋一・六四〇)

文永二年七月、白川殿の七百首の歌に、寄煙恋

前大納言為家

如何にせん 富士の高嶺の 名にだにも 立たば苦しき 下の煙を

(続後拾遺・恋一・六四一)

千五百番の歌合に、春の歌 前大納言忠良

花や雪 霞や煙 時知らぬ 富士の高嶺に 冴ゆる春風

(風雅・春上・三七)

(題知らず)

藤原行朝

富士の嶺を 山より上に 顧みて 今越えかかる 足柄の関

(風雅・旅・九〇八)

羈中嵐を

前参議俊言

吹き下す 富士の高嶺の 朝嵐に 袖萎れ添ふ 浮島が原

(風雅・旅・九二五)

(題知らず)

(読人知らず)

我妹子に 逢ふ由もなみ 駿河なる 富士の高嶺野も 燃えつつあらん

(風雅・恋四・一二三二)

野夕立

惟宗光吉朝臣

富士の嶺は 晴れて行く空に 現はれて 裾野に下る 夕立の雲 (風雅・雑上・一五一五)

文保の百首の歌奉りける時 中宮大夫公宗母

消ぬが上に 珍しげなく 積もるらし 富士の高嶺の 今朝の白雪 (新千載・冬・七二七)

弘長元年、百首の歌奉りける時、同じ心〈旅〉を

前大納言為氏

都出でて 日数思へば 富士の嶺も 麓よりこそ 立ち上りけれ (新千載・羈旅・八一九)

前大僧正慈鎮の、おほけなく浮世の民に覆ふかな、

と侍る歌を始めに置きて大日経の品品を詠み侍り

ける歌の中に、布字品を 入道二品親王尊円

並べて世の 恋の煙に 立ち代はれ 胸の中なる 富士の柴山 (新千載・釈教・八八一)

(題知らず)

津守国助女

富士の嶺に ならぬ思ひの 燃え初めて 我が為辛く 立つ煙かな

(新千載・恋一・一一二〇)

六百番の歌合の歌

後京極摂政前太政大臣

忍びかね 心の空に 立つ煙 見せばや富士の 山に紛へて (新千載・恋一・一一二三)

(題知らず)

伏見院御製

立つ紛ふ 方こそなけれ 富士の嶺や 絶えぬ思ひに 燻ゆる煙は

(新千載・恋一・一一二五)

(題知らず)

基俊

終夜 恋の煙に 咽びつつ 富士の妬くも 燻ゆる頃かな (新千載・恋一・一一二六)

(題知らず)

左近中将具氏

年を経て 燃えつつ永久に 思へとや 富士の妬くも つれなかるらん

題知らず

前中納言有忠

(新千載・恋一・一一二七)

雲はなほ 麓に見えて 立ち昇る

煙ぞ高き 富士の柴山

(新千載・雑上・一六四七)

百首の歌奉りし時、霞

権大納言義詮

富士の嶺の 雪には春も 知られぬを 煙や空に 霞み初むらん

(新拾遺・春上・二七)

題知らず

祝部行氏

時知らぬ 山郭公 五月まで 雪にや富士の 嶺を惜しむらむ

(新拾遺・夏・二七一)

題知らず

源有長朝臣

白妙の 富士の高嶺に 月冴えて 氷を敷ける 浮島が原

(新拾遺・秋下・四三一)

建長元年、五首の歌に、寄山恋

前大納言為氏

富士の嶺や 燃えつつ永久に 嘆きても ならぬ思ひの 果てぞ哀しき

(新拾遺・恋一・九八二)

宝治の百首の歌奉りける時、寄煙恋 常磐井入道前太政大臣

駿河なる 山は富士の嶺 我が如や 絶えぬ煙に 結ぼほるらん

(新拾遺・恋一・九八三)

家に五十首の歌詠み侍りけるに、同じ心(寄煙恋)を

入道二品親王道助

富士の嶺や 絶えぬ煙の 行く方に 知らぬ思ひの 年の経ぬらん

(新拾遺・恋一・九八四)

貞和二年、百首の歌奉りし時

民部卿為明

富士の嶺の 永久に燃ゆれば 憂き人や 珍しげなく 思ひ消つらん

(新拾遺・恋一・九八五)

恋の歌の中に

素暹法師

神代より 煙絶えせぬ 富士の嶺は 恋や積もりて 山となるらむ

(新拾遺・恋一・九八九)

秋の歌の中に

左兵衛督基氏

秋ながら 影こそ凍れ 富士の嶺の 雪に映ろふ 夜な夜なの月

(新拾遺・雑上・一六二五)

返し

大納言経信

富士の嶺に 振り積む雪の 年を経て 消えぬ例と 君をこそ見め

(新拾遺・雑上・一七二〇)

嘉元の百首の歌奉りし時、山

法印定為

富士の嶺を 田子の浦より 見渡せば 煙も空に 立たぬ日ぞなき

(新拾遺・雑中・一七三九)

富士の山を望みて、詠める

赤人

天地の 分かれし日より… 駿河なる 富士の高嶺を 天の原…

(新拾遺・雑下・一八七九)

(題知らず)

卜部兼直

雲昇る 富士の山風 空冴えて 煙も見えず 雪は降りつつ

(新後拾遺・冬・五六四)

題知らず

前大納言為氏

富士の嶺は 冬こそ高く なりぬらめ 分かぬ深雪に 時を重ねて

(新後拾遺・雑秋・八一四)

(題知らず)

昭祐法師

雲よりも 上に見えたる 富士の嶺の 雪は何とて 降り始めけん

(題知らず)

宗久法師

(新後拾遺・雑秋・八一五)

武蔵野も さすが果てなる 日数にや

富士の嶺ならぬ

山も見ゆらん

(新後拾遺・羈旅・九二一)

旅行の心を

藤原長秀

富士の嶺を 振り放け見れば

白雪の

尾花に続く

武蔵野の原

(新後拾遺・羈旅・九二二)

寄煙恋

前大納言為定

絶えず立つ 煙よりこそ

富士の嶺の

ならぬ思ひも

身に時雨れけれ

(新後拾遺・恋一・九六一)

山霞を

従三位雅家

春霞 立つも煙の 色なれば

なほ時知らぬ

富士の柴山

(新統古今・春上・七)

建長三年九月十三夜、影供歌合に、寄煙忍恋

山階入道前左大臣

富士の嶺に 絶えぬ煙も

心せよ

我が下燃えの 思ひある世に

(新統古今・恋一・一〇二七)

恋の歌の中に

法印継尊

如何にせん 富士の嶺にこそ

立てねども

袖に思ひの

絶えぬ煙を

(新統古今・恋一・一〇二八)

弘安の百首の歌に

前大納言為言

富士の嶺に 煙も雪も

年経りて

消えぬ思ひの

程ぞ知らるる

(新統古今・恋一・一〇九四)

題知らず

源高国

富士の嶺に 絶えぬはなほも

煙にて

我が身一つぞ

消なば消ぬべき

(新統古今・恋一・一〇九五)

春の歌の中に

祝部成茂

富士の嶺は そことも見えず

田子の浦の

藻塩の煙

空に霞みて

(新統古今・雑上・一六一六)

【伏見里】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

長谷寺にまうづとて、伏見の里にやどりて

昔こそ 何ともなしに

恋しけれ

伏見の里に

こよひやどりて

(一三)

●勅撰和歌集……二〇例

如月の頃ほひ、花見に俊綱朝臣の伏見の

家に人々罷れりけるに、誰れとも知つれ

で、挿し置かせ侍りける

皇后宮美作

羨まし 入る身ともがな

梓弓

伏見の里の花の円居に

(後拾遺・春上・七九)

伏見と言ふ所に、四条の宮の女房数多遊びて、

日暮れぬ前に帰らむとしければ 橘俊綱朝臣

都人 暮るれば帰る

今よりは

伏見の里の

名をも頼まじ

(後拾遺・雑五・一一四六)

乍臥無実恋

藤原頭仲朝臣

結び置く 伏見の里の 草枕 解けで止みぬる 旅にもあるかな (千載・恋二・七一〇)
寄郷恋と言へる心を、詠める 左衛門督家通
逢ふことを さりともとのみ 思ふかな 伏見の里の 名を頼みつづ (千載・恋二・七四三)

花園左大臣の家に侍りける女、伊予と申しけるに、
未だ中納言など申しける頃、もの申し渡りけるを、
離れ離れになりければ、思ひや絶えにけん、前
山城守なりける者にも申すと聞きて、言ひ遣は
しける 中院右大臣

真にや 三年も待たで 山城の 伏見の里の 新枕する
かく言ひて侍りければ、あひなくかの男に、
逢はずなんなりにけるとなん (千載・恋五・九一七)

同じ〔撰政太政大臣(良経)〕家にて、所の
名を探りて、冬の歌詠ませ侍りけるに、伏見
の里の雪を 有家朝臣
夢通ふ 道さへ絶えぬ 呉竹の 伏見の里の 雪の下折れ (新古今・冬・六七三)

後徳大寺左大臣の十首の歌詠み侍りけるに、
遠村霞と言へる心を、詠み侍りける
皇太后宮大夫俊成
朝と明けて 伏見の里に 眺むれば 霞に咽ぶ 宇治の川波 (新勅撰・春上・一三)

早苗を 土御門院御製
早苗採る 伏見の里に 雨過ぎて 向ひの山に 雲ぞ掛かれる (続後撰・夏・一九五)

恋の十首の歌合に、寄筵恋 入道撰政太政大臣
笛竹の 伏見の里の 菅蓆 音にのみ泣きて 一人かも寝ん (続後撰・恋二・七三一)

名所の百首の歌奉りける時 皇太后宮大夫俊成女
嘆きつつ 伏見の里の 夢にさへ 空しき床を 払ふ松風 (新後撰・恋二・八七八)

伏見にて、近聞郭公と言ふ事を、詠み侍りける
皇太后宮大夫俊成
あはれにも 共に伏見の 里に来て 語らひ明かす 郭公かな (玉葉・夏・三三六)

(冬の御歌の中に) 式子内親王
旅枕 伏見の里の 朝朗け 刈り田の霜に 鶴ぞ鳴くなる (玉葉・冬・九三二)

初瀬に詣でけるが、伏見の里に宿りて、
能因法師
詠める
昔こそ 何ともなしに 恋しけれ 伏見の里に 今宵宿りて (玉葉・旅・一一八二)

正治の百首の歌奉りける時 式子内親王
荒れにける 伏見の里の 浅茅原 空しき露の 掛かる袖かな (続千載・雑上・一七四四)

里郭公と言ふ事を 入道二品親王尊円
呉竹の 伏見の里の 郭公 忍ぶ二代の 事語らなん (風雅・夏・三二四)

洞院撰政家の百首の歌に、逢不遇恋を 正三位知家
通ひ来し 里は伏見の 秋風に 人の心の 荒れまくも惜し (新拾遺・恋四・一二九七)

建保二年、内裏の百首の歌に 従二位家隆
遠からぬ 伏見の里の 関守は 木幡の峰に 君ぞ据ゑける (新後拾遺・恋二・一〇三七)

(題知らず)

右衛門督忠基

片糸の 伏見の里は 名のみして 逢ひ見ぬ恋は 夜ぞ苦しき

(新統古今・恋二・一一四〇)

里竹と言事を、詠ませ給うける 崇光院御製

何時までか 里の名に負ふ 吳竹の 伏見にのみも 我が世尽くさん

(新統古今・雑下・二〇〇〇)

同じ心(里竹)を 八条入道前内大臣

忘れずよ 伏見の里の 遙々と 御幸に馴れし 竹の下道 (新統古今・雑下・二〇〇一)

【伏見山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…九例

百首の歌奉りし時 皇太后宮大夫俊成

伏見山 松の陰より 見渡せば 明くる田の面に 秋風ぞ吹く (新古今・秋上・二九一)

秋の歌の中に 常磐井入道前太政大臣

伏見山 麓の霧の 絶え間より 遙かに見ゆる 宇治の川波 (続拾遺・秋上・二七五)

題知らず 前大僧正慈鎮

あはれにも 衣擣つなり 伏見山 松風寒き 秋の寢覚めに (新後撰・秋下・四一七)

(河霧を、詠み侍りける) 前大僧正実超

伏見山 麓の稲葉 雲晴れて 田の面に残る 宇治の川霧 (風雅・秋下・六六七)

伏見にて、人々題を探りて、歌仕うまつり

ける次に、水郷 伏見院御歌

伏見山 荒田の面の 末晴れて 霞まぬ下ぞ 春の夕暮れ (風雅・雑上・一四三九)

貞和の百首の歌召されける次に 光厳院御製

伏見山 門田の霧は 夜を籠めて 枕に近き 鳴の羽搔き (新後拾遺・雑秋・七五八)

(山を、詠める) 永福門院内侍

伏見山 裾野をかけて 見渡せば 遙かに下る 氏の柴舟 (新後拾遺・雑上・一二七六)

田鹿と言ふ事を 養徳院贈左大臣

伏見山 麓の小田の 寝ねがてに 松風寒し 小雄鹿の声 (新統古今・秋下・五〇五)

百首の歌奉りし時 無品親王

伏見山 昔の跡は 名のみして 荒れまく惜しき 代代の古里

(新統古今・雑下・二〇〇七)

【双見山】(双見山)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

下野に罷りける女に、鏡に添へて遣はしける

読人知らず

双見山 共に越えねど 真澄鏡 底なる影を 副へてぞ遣る (後撰・離別・一三〇七)

【二村の山】(三河)

●玄々集……用例無

- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…九例

朝廷使にて、東の方へ罷りける程に、初めて相知りて侍りける女に、かく止む事なき道なれば、心にもあらず罷りぬるなど申して下り侍りけるを、後に改め定めらるる事ありて、召し還されければ、この女聞きて喜びながら訪ひに遣はしたりければ、道にて人の志贈りて侍りける呉織と言ふ綾を二疋包みて、遣はしける
清原諸実

呉織 文に恋しく ありしかば 二村山も 越えずなりにき
返し 読人知らず (後撰・恋三・七一二)

唐衣 立つを惜しみし 心こそ 二村山の 関となりけめ
武蔵国より上り侍りけるに、三河国 (後撰・恋三・七一三)

幾らとも 見えぬ紅葉の 錦かな 誰れ二村の 山と言ひけむ
堀川院御時、後の宮にて、閏五月郭公と (詞花・秋・一三一)

言へる心を、詠み侍りける 権中納言俊忠
五月閏 二村山の 郭公 峰続き鳴く 声を聞くかな (千載・夏・一九三)

(題知らず) 順徳院御歌
照射して 今夜も明けぬ 玉匣 二村山の 峰の横雲 (続古今・夏・二五三)

旅の道にて、詠める 平泰時朝臣
近付けば 野路の笹原 現はれて 未だ未霞む 二村の山 (続古今・羈旅・八六五)

都に上るとて、二村山を越えけるに、詠める
前右大将頼朝

外に見し 小篠が上の 白露を 袂に掛かる 二村の山
(題知らず) 堀河院中宮上総 (続古今・羈旅・八七二)

郭公 二村山や 越えつらむ 明け果ててのみ 声の聞こゆる
都に上り侍りける時、二村山を越ゆとて、 (続後拾遺・夏・一九二)

詠める 藤原行朝
越え行けば 一方ならず 霞むなり 二村山の 春の曙 (新千載・羈旅・八〇八)

【藤代の御坂】(紀伊)

- 玄々集…用例無
- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…四例

名所の百首の歌奉りける時 僧正行意
藤代の 御坂を越えて 見渡せば 霞みもやらぬ 吹上の浜 (続後撰・羈旅・一三一五)

大宝元年十月、天皇紀伊国に御幸し給うけるに
読人知らず

藤代の 御坂を越ゆと 白妙の 我が衣手は 濡れにけるかな (続古今・羈旅・九一六)

百首の歌奉りし時、眺望 前大納言公蔭
藤代の 御坂の松の 木の間より 夕日に見ゆる 淡路島山 (新千載・雑中・一八九三)

百首の御歌に
太上天皇
衣手よ さのみな濡れそ 藤代の 御坂を越ゆる 恋の道かな (新後拾遺・恋一・九九四)

【不破の関】(美濃)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……五例

同じ家に、久しう侍りける女の、美濃の国の

親の侍りける、訪ひに罷りけるに 藤原清正

今はとて 立ち帰り行く 古里の 不破の関路に 都忘るな (後撰・離別・一三二三)

旅の歌とて、詠める 大中臣親守

霰漏る 不破の関屋に 旅寝して 夢をもえこそ 通さざりけれ (千載・羈旅・五四〇)

和歌所歌合、関路秋風と言ふ事を 摂政太政大臣

人住まぬ 不破の関屋の 板廂 荒れにし後は ただ秋の風 (新古今・雑中・一六〇一)

西園寺入道前太政大臣家にて、閏月と言へる心を、

詠み侍りける 信実朝臣

秋風に 不破の関屋の 荒れまくも 惜しからぬまで 月ぞ漏り来る (新後撰・秋上・三四八)

東より上りける時、不破関にて恵鎮上人入滅の

事を聞き侍りて、思ひ続けける 惟賢上人

甲斐なしや 何ぞはありて 終に行く 人をば止めぬ 不破の関守 (新千載・哀傷・二一七五)

前参議為忠美濃国より都に上り侍りし時、

詠める 源頼康

古里に 立ち帰るとも 行く人の 心は止めよ 不破の関守 (新拾遺・離別・七五五)

【布留の社】(大和)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……六例

(題知らず) (読人知らず)

石上 布留の社の 木綿襷 掛けてのみやは 恋ひむと思ひし (拾遺・恋四・八六七)

同じ《久安》百首の歌奉りける時の長歌 待賢門院堀河

時知れぬ 谷の埋れ木… 名草の浜の 慰みて 布留の社の 当時に… (千載・雑下・一一六三)

草子に、葦手長歌など書いて、奥に 女御徽子女王

皆人の 背き果てぬる 世の中に 布留の社の 身を如何にせん (新古今・雑下・一七九六)

題知らず 正三位経家

宮居せし その始めにも 石上 布留の社と 人や言ひけん (続古今・神祇・七二四)

懐旧の心を 前大納言為家

さてもなほ 布留の社の 御標繩 あはれ昔を 掛けて恋ひつつ (続後拾遺・雑下・一一四六)

堀河院御時、百首の歌奉りけるに、霞を

大納言師頼

石上 布留の社の 春の色に 霞棚引く 高田の山

(新拾遺・春上・三〇)

【堀江】(撰津)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……一例

嘉言つしまになりて下るとて、津の国のほど
よりかくいひおこせり

- 命あらば 今かへり来む 津の国の なにはほり江の 蘆のうら葉に (三二 (大江嘉言))
- 勅撰和歌集……一例

(題知らず)

(読人知らず)

堀江漕ぐ 棚無し小舟 漕ぎ返り 同じ人いや 恋ひ渡りなむ

(古今・恋四・七三二)

(題知らず)

(読人知らず)

真菰刈る 堀江に浮きて 寝る鴨の 今宵の霜に 如何に侘ぶらん

(後撰・冬・四八三)

返し

定文

君を思ふ 深さ較べに 津の国の 堀江見に行く 我にやはあらぬ (後撰・恋一・五五四)

(題知らず)

(読人知らず)

津の国の 堀江の深く 思ふとも 我は難波の 何とだに見ず

(拾遺・恋四・八八三)

舟に乗りて、堀江と言ふ所を過ぎ侍るとて、詠める

藤原国行

過ぎ難き 覚ゆるものは 葦間かな 堀江の程は 綱手弛べよ (後拾遺・羈旅・五〇六)

(題知らず)

人丸

小夜更けて 堀江濃くなり 松浦船 梶音高し 水脈早みかも (続古今・雑中・一六四二)

題知らず

平政村朝臣

御舟漕ぐ 堀江の葦に 置く露の 玉敷くばかり 月ぞ清けき (続拾遺・秋下・三〇五)

元正天皇、難波宮に御座しましける時 井手左大臣

堀江には 玉敷かましを 大君の 御舟漕がんと 予て知りせば

(続千載・雑上・一六三七)

(題知らず)

津守国夏

今は早 堀江の小舟 漕ぎ離れ 同じ人とも 見えぬ中かな (続後拾遺・恋四・九四〇)

九条前内大臣の三十首の歌の中に、

江上暮春を

前中納言定家

堀江漕ぐ 霞の小舟 行き悩み 同じ春をも 慕ふ頃かな (新後拾遺・春下・一五七)

左大臣詠ませ侍りし新玉津島社の三十首

の歌に、江螢

前撰政左大臣

螢飛ぶ 堀江の波の 夜毎に 敷くてふ玉の 数や添ふらん (新続古今・夏・三〇五)

【堀兼の井】(武蔵)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……一例

法師品、漸見湿土泥、決定知近水の心を、

詠み侍りける

皇太后宮大夫俊成

武蔵野の 堀兼の井も あるものを 嬉しく水の 近付きにける (千載・釈教・一二四一)

【籬の島】 (陸奥)

●玄々集……用例無

●能因法師集…一例

まがきの島

面影の なほ忘れられで 見ゆるかな まがきの島と むべもいひけり (一四五)

●勅撰和歌集…七例

(陸奥歌)

我が背子を 都に遣りて 塩釜の 籬の島の 松ぞ恋しき (古今・東歌・一〇八九)

定国朝臣の御息所、清蔭朝臣と、陸奥国にある所々を

尽くして歌に詠み交はして、今は詠むべき所なしと言

ひければ

源清蔭朝臣

さてもなほ 籬の島の ありければ 立ち寄りぬべく 思ほゆるかな

(後撰・恋二・六六六)

題知らず

読人知らず

卯の花の 咲ける垣根は 陸奥の 籬の島の 波かとぞ見る (拾遺・夏・九〇)

陸奥守に侍りける時、忠義公の許に、申し

贈り侍りける

源信明朝臣

明け暮れば 籬の島を 眺めつつ 都恋しき 音をのみぞ泣く (新勅撰・雑四・一三二三)

名所の歌数多詠み侍りし中に 前大納言為家

陸奥の 籬の島は 白妙の 波もて結へる 名にこそありけれ (続後撰・雑上・一〇二四)

夏の歌の中に

好忠

夕闇に 海人の漁火 見えつるは 籬が島の 螢なりけり (続後拾遺・夏・二二七)

百首の歌奉りし時

権大納言実量

秋霧の 籬の島の 隔て故 そことも見えぬ 千賀の塩釜 (新続古今・秋下・五五二)

【槿尾山】 (山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…七例

後鳥羽院に奉りける百首の歌に 入道前太政大臣

立ち昇る 川瀬の露や 晴れぬらん 槿尾山を 出づる月影 (続古今・秋上・三八七)

建暦二年、内裏の詩歌合に 参議雅経

春来ても 誰れかは訪はん 花咲かぬ 槿尾山の 曙の空 (新後撰・春上・五二)

千五百番の歌合に

土御門内大臣

朝朗け 槿尾山は 霧籠めて 宇治の川長 舟呼ばふなり (玉葉・秋下・七三三)

(題知らず)

前太政大臣

物部の 八十宇治川や 隔つらん 槿尾山に 霧立ちぬなり (続後拾遺・秋上・三一五)

月を歌として

永福門院

更け行けば 槿尾山に 霧晴れて 月影清し 宇治の川波 (続後拾遺・秋下・三三八)

百首の歌奉りし時、郭公

前中納言有光

橋姫の 待つ夜更けてや 郭公 槇尾山に 初音鳴くらん (新拾遺・夏・二二八)
嘉元の百首の歌奉りける時、五月雨 後照念院関白太政大臣
雲暗き 槇尾山の 五月雨に 八十字治川は 水増さるらし (新拾遺・夏・二六三)

【益田の池】(大和)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…六例

(題知らず) (詠人知らず)

根尊菜の 苦しかるらん 人よりも 我ぞ益田の 池る甲斐なき (拾遺・恋四・八九四)

(題知らず) 小弁

我が恋は 益田の池の 浮き蓴菜 苦しくてのみ 年を経るかな (後拾遺・恋四・八〇三)

池水を、詠める 前斎宮内侍

波枕 如何に浮き寝を 定むらん 氷益田の 池の鴛鴦 (金葉・冬・二九七)

弘長三年、内裏の百首の歌奉りし時、寄池恋

前大納言為氏

根尊菜の 寝ぬ名は掛けて 辛さのみ 益田の池の 自ぞ憂き (続拾遺・恋二・八五八)

名所の百首の歌奉りける時 皇太后宮大夫俊成女

思ひのみ 益田の池の 浮き蓴菜 絶えぬ契りぞ 苦しかりける

(続千載・恋三・一三八四)

建保の名所の百首の歌召されける次に 順徳院御製

思ひのみ 益田の池の 水隠れに 知らぬ菖蒲の 根に乱れつつ

(新統古今・恋一・一〇三四)

【待兼山】(摂津)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無
- 勅撰和歌集…四例

堀河院御時、百首の歌奉りけるに、詠める

太皇太后宮肥後

来ぬ人を 待兼山の 呼子鳥 同じ心に あはれとぞ聞く (詞花・春・四七)

寛治八年、前太政大臣高陽院歌合に、

郭公を

周防内侍

夜を重ね 待兼山の 郭公 雲居の外に 一声ぞ聞く (新古今・夏・二〇五)

高陽院歌合に、郭公を 藤原顕綱朝臣

明くるまで 待兼山の 郭公 今日も聞かでや 暮れんとすらむ (続後拾遺・夏・一六八)

契不来恋と言ふ事を 大納言成通

頼めつつ 君が来ぬ夜の 衣手や 待兼山の 雫なるらん (新統古今・恋三・一二五)

四)

【松が崎】(近江)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集…用例無

● 勅撰和歌集…二例

松が崎

清原元輔

千歳経る 松が崎には 群れ居つつ 鶴さへ遊ぶ 心あるらし

(拾遺・神楽・六〇七)

松が崎

兼盛

鶴の住む 松が崎には 並べたる 千代の例を 見するなりけり

(拾遺・神楽・六一七)

【松島】(陸奥)

● 玄々集…用例無

● 能因法師集…用例無

● 勅撰和歌集…一五例

題知らず

源重之

松島や 雄島の磯に 漁せし 海人の袖こそ かくは濡れしか

(後拾遺・恋四・八二七)

(守覚法親王家に、五十首の歌詠ませ侍りける、

旅の歌)

(皇太后宮大夫俊成)

立ち帰り またも来て見む 松島や 雄島の苦屋 波に荒すな

(新古今・羈旅・九三三)

(久安六年、崇徳院に百首の歌奉りける、

春の歌)

前参議親隆

松島や 雄島の崎の 夕霞 棚引き渡せ 海人の栲縄

(新勅撰・春上・一一二)

建保六年、内裏歌合、恋の歌

前内大臣

松島や 我が身の方に 焼く塩の 煙の末を 訪ふもがな

(新勅撰・恋三・八四八)

(題知らず)

柿本人麿

逢ふ事を 何時しかとのみ 松島の 変はらず人を 恋ひ渡るかな

(続古今・恋二・一一〇六)

題知らず

読人知らず

陸奥に ありと言ふなる 松島の 待つに久しく 訪はぬ君かな

(続古今・恋四・一二九三)

海月と言ふ事を、詠ませ給うける 今上御製

藻塩焼く 煙も絶えて 松島や 雄島の波に 晴るる月影

(新後撰・秋下・三六〇)

千五百番の歌合に 皇太后宮大夫俊成女

松島や 雄島の磯に 寄る波の 月の氷に 千鳥鳴くなり

(新後撰・冬・四七九)

返し

蓮生法師

闇路には 迷ひも果てじ 有明の 月松島の 人の導に

(新後撰・釈教・六五六)

(題知らず)

遊義門院

つれなくも なほ逢ふ事を 松島や 雄島の海人と 袖は濡れつつ

(新後撰・恋二・九〇四)

建保六年、内裏歌合に 後久我太政大臣

松島や 我身の方に 焼く塩の 煙の末を 訪ふもがな

(新後撰・恋二・九二五)

正治二年、百首の歌奉りける時 後京極摂政前太政大臣

長閑なる 春の光に 松島や 雄島の海人の 袖や干すらん

(続千載・春上・四二)

名所の百首の歌奉りける時

正三位知家

松島や 雄島が海人に 尋ねみん 濡れては袖の 色や変はると

(続千載・恋二・一一七六)

題知らず

前参議忠定

松島や 雄島が海人の 捨て衣 思ひ捨つれど 濡るる袖かな (続千載・恋二・一一七七)
老後述懐と言ふ事を 前大僧正定助
つれなくも 今は何をか 松島や 惜しまぬ老いの 波を重ねて
(新統古今・雑中・一九四六)

【待乳の山】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一二例

遠き国に侍りける人を、京に上りたりと聞きて
相待つに、罷で来ながら訪はざりければ

(詠人知らず)

何時しかと 待乳の山の 桜花 待ちても外に 聞くが悲しき (後撰・恋四・一二五五)

ある男のもの言ひ侍りける女の、忍びて逃げ侍りて、
年来ありて消息して侍りけるに、男の詠み侍りける

詠人知らず

今はとも 言はざりしかど… 古里に 帰りや来ると 待乳山… (拾遺・雑下・五七三)

(題知らず)

来ぬ人を 待乳の山の 郭公 同じ心に 音こそ泣かるれ (拾遺・恋三・八二〇)

(題知らず)

誰をかも 待乳の山の 女郎花 秋と契れる 人ぞあるらし (新古今・秋上・三三六)

恋の歌とて

太上天皇

頼めずは 人を待乳の 山なりと 寝なましものを 十六夜の月

(新古今・恋三・一一九七)

能宣朝臣、大和国待乳山近く住みける女の許に、

夜更けて罷りて、逢はざりけるを恨み侍りければ

詠人知らず

頼め来し 人を待乳の 山風に 小夜更けしかば 月も入りにき

(新古今・雑上・一五一八)

(題知らず)

弁基法師

待乳山 夕越え行きて 庵崎の 隅田河原に 一人かも寝む (新勅撰・羈旅・五〇二)

題知らず

天曆御製

かくばかり 待乳の山の 郭公 心知らでや 外に泣くらん (続古今・夏・一九六)

(題知らず)

正三位知家

打ち渡す 駒泥むなり 白妙に 凍る待乳の 山川の水 (続古今・冬・六三四)

題知らず

鎌倉右大臣

我が背子を 待乳の山の 葛鬘 偶にだに 来る由もなし (続古今・恋二・一一一七)

(題知らず)

前参議定宗

誰れにかも 宿りを問はん 待乳山 夕越え行けば 逢ふ人もなし

(新千載・羈旅・八〇七)

百首の歌奉りし時、待花

前摂政左大臣

咲き遣らぬ 花を待乳の 山の端に 人頼めなる 春の白雲 (新統古今・春上・一一〇)

【松山】（讃岐）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……七例

山に郭公の鳴きたるを聞きて、詠める 貫之

郭公 人松山に 鳴くなれば 我打ち付けに 恋増さりけり (古今・夏・一六二)

讃岐へ罷りける人に、遣はしける 中納言定頼

松山の 松の浦風 吹き寄せば 拾ひて忍べ 恋忘れ貝 (後拾遺・別・四八六)

俊綱朝臣、讃岐守に罷れりける時、祝の心を、
詠める 藤原孝善

君が代に 較べて言はば 松山の 松の葉数は 少なかりけり (千載・賀・六三三)

百首の歌奉りし時 二条院讃岐

永らへて なほ君が代を 松山の 待つとせし間に 年ぞ経にける (新古今・雑中・一六三六)

(夏の歌の中に) 法印寛寛

諸共に 誘ひて出でよ 郭公 待つ山の端の 有明の月 (続後撰・夏・一八五)

(百首の歌奉りし時、夜鹿) 藤原信実朝臣

秋風に 妻松山の 夜を寒み さこそ尾上の 鹿は鳴くらむ (続後撰・秋上・三〇五)

(照射を、詠める) 権中納言為重

五月闇 照射す火串の 松山に 待つとて鹿の 寄らぬ夜もなし (新後拾遺・夏・二四七)

【真野の浦】（摂津）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……五例

(題知らず)

人麿

我妹子が 袖を頼みて 真野の浦の 小菅の笠を 過ぎて着にけり (続後撰・羈旅・一三一九)

寄橋恋 従三位経朝

真野の浦の 淀の継橋 尽きもせず 辛しと人を 聞き渡るかな (続古今・恋五・一三二二)

正治の百首の歌奉りける時 後京極摂政前太政大臣

乱れ葦の 穂向けの風の 片寄りに 秋をぞ寄する 真野の浦波 (新拾遺・秋下・四四九)

前大僧正桓守の勧め侍りける日吉社の

三首の歌合に、冬月を 前大僧正実超

真野の浦や 入海寒き 冬枯れの 尾花の波に 凍る月影 (新拾遺・冬・六二八)

鹿苑院入道前太政大臣家の百首の歌に、

渡月 権大僧正堯尋

舟呼ばふ 真野の浦波 遙々と 月も夜渡る 淀の継橋 (新統古今・雑上・一七一九)

【三笠山】（大和）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

●勅撰和歌集…一〇三例

唐土にて、月を見て、詠める 安倍仲麿

海人の原 振り放け見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも

この歌は、昔仲麿を唐土に、もの習はしに遣はしたり

けるに、数多の年を経て、え帰り詣で来ざりけるを、

この国より、また使罷り至りけるに、伴ひて詣で来な

むとて出立ちけるに、明州と言ふ所の海辺にて、かの

国の人餞別しけり。夜になりて、月のいとおもしろく

射し出でたりけるを見て、詠めるとなむ語り伝ふる。

(古今・羈旅・四〇六)

(題知らず)

貫之

君が差す 三笠の山の 紅葉葉の 色神無月 時雨の雨の 染めるなりけり

(古今・雑体・一〇一〇)

少将真忠、通ひ侍りける所を去りて、異女に付きて、

それより春日使に出で立ちて、罷りければ 元の女

空知らぬ 雨にも濡るる 我が身かな 三笠の山を 外に聞きつつ (後撰・恋三・七一五)

男の許に、雨降る夜、笠を遣りて呼びけれど、

来ざりければ

読人知らず

差して来と 思ひしものを 三笠山 甲斐なく雨の 漏りにけるかな

(後撰・恋六・一〇二九)

返し

(読人知らず)

守る目のみ 数多見ゆれば 三笠山 知る知る如何が 差して行くべき

(後撰・恋六・一〇三〇)

兼輔朝臣、宰相中将より中納言になりて、

またの年、賭弓の帰り立ちの饗に罷りて、

これかれ思ひ述ぶる次に

兼輔朝臣

古里の 三笠の山は 遠けれど 声は昔の 疎からぬかな

(後撰・雑一・一一〇六)

(天曆の帝四十になり御座しましたしける時、

山階寺に金泥寿命経四十巻を書き、供養

し奉りて、御巻数鶴に食はせて、州浜に

立てたりけり。その洲浜の敷物に、数多

の歌葦手に書ける中に) 仲算法師

声高く 三笠の山ぞ 呼ばふなる 天の下こそ 樂しかるらし

(拾遺・賀・二七四)

(題知らず)

貫之

名のみして 山は三笠も なかりけり 朝日夕日の 射すを言ふかも

(拾遺・雑下・五四七)

題知らず

読人知らず

桜花 三笠の山の 陰しあれば 雪と降れども 濡れじとぞ思ふ (拾遺・雑春・一〇五六)

同じ少将通ひ侍りける所に、兵部卿致平の親王

罷りて、少将の君座したりと言はせ侍りけるを、

後に聞き侍りて、かの親王の許に、遣はしける

(藤原義孝)

奇しくも 我が濡れ衣を 着たるかな 三笠の山を 人に借られて

(拾遺・雑賀・一一九一)

男のもの言ひ侍りける女を、今はさらに行かじと
言ひて後、雨のいたく降りける夜罷りけりと聞き
て、遣はしける (和泉式部)

三笠山 差し離れぬと 言ひしかど 雨催にとは 思ひしものを (後拾遺・雑二・九二七)

二条前太政大臣、少将に侍りける時、春日使に
罷りて、またの日霧のいみじう立ち侍りければ、
入道前太政大臣の許に、遣はしける (前大納言公任)

三笠山 春日の原の 朝霧に 帰り立つらん 今朝をこそ待て (後拾遺・雑五・一一一四)
山階寺供養の後、宇治前太政大臣の許に、
遣はしける 堀河右大臣

深き海の 誓ひは知らず 三笠山 心高くも 見えし君かな (後拾遺・雑五・一一四三)
後冷泉院御時、后の宮の歌合に、春日祭を、
詠み侍りける 藤原範永朝臣

今日祭る 三笠の山の 神座せば 天の下には 君ぞ栄えん (後拾遺・雑六・一一七八)
八月十五夜に、人々歌詠みけるに、詠める 平師季

三笠山 光を射して 出でしより 曇らで明けぬ 秋の夜の月 (金葉・秋・二〇〇)
奈良花林院歌合に、月を、詠める 権大僧正永縁
如何なれば 秋は光の 増さるらむ 同じ三笠の 山の端の月 (金葉・秋・二〇二)
詠月歌 藤原顕輔朝臣

三笠山 漏り来る月の 清ければ 神の心も 澄みやしぬらん (金葉・秋・二〇三)
摂政左大臣、中将にて侍りける頃、春日使にて
下り侍りけるに、周防内侍、女の使にて下りた
りけるに、為隆卿行事弁にて侍りけるに、遣は
しける 周防内侍

如何ばかり 神も嬉しと 三笠山 二葉の松の 千代の気色を (金葉・賀・三二二)
(宇治前太政大臣、家の歌合に、
祝の心を、詠める) 大蔵卿匡房

君が代は 限りもあらし 三笠山 峰に朝日の 射さむ限りは (金葉・賀・三二五)
親しき人の、春日に参りて、鹿ありつる
由など申しけるを聞きて、詠める

三笠山 神の験の 著く 鹿あいけりと 聞くぞ嬉しき (金葉・雑上・五八二)
左京大夫顕輔、中宮亮にて侍りける時、下臈に
越えらるべしと聞きて、宮の女房の中に、嘆き
申したりける返事に、誰れとはなくて

世の中を 思ひな入りそ 三笠山 射し出づる月の 澄まむ限りは (詞花・雑上・二九一)
山階寺に罷りたりけるに、宋延法師に会ひて、終夜
もの言ひ侍りけるに、有明の月三笠山より射し昇り
けるを見て、詠め 琳賢法師

永らへば 思ひ出でにせむ 思ひ出でよ 君と三笠の 山の端の月 (詞花・雑上・三〇六)
後二条関白、儂き事にて憤り侍りければ、家の内
には侍りながら、前へもさし出で侍らで女房の中
に、言ひ入れ侍りける 源仲正

三笠山 さすがに陰に 隠ろへて 経る甲斐もなき 雨の下かな (詞花・雑上・三三五)

京極前太政大臣家に、歌合し侍りけるに、

詠める

大藏卿匡房

君が代は 曇りもあらず 三笠山 峰に朝日の 射さん限りは

(詞花 (異本) ・賀・四一六)

後一条院の御時、春日の行幸御輿に侍はせ給ひける

上東門院

三笠山 指して来にけり 石上 古き御幸の 跡を訪ねて (詞花 (異本) ・雑下・四一八)

後一条院御時、初めて春日社に行幸ありけるに、

一条院御時の例を思し出でさせ給うて、

詠ませ給うける

上東門院

三笠山 指して来にけり 石上 古き御幸の 跡を訪ねて (千載・神祇・一一五六)

(百首の歌召しける時、神祇歌とて、詠ませ給うける)

藤原清輔朝臣

天の下 長閑けかれとや 榊葉を 三笠の山に 挿し始めけん (千載・神祇・一一六〇)

文遣はしける女に、同じ官の上なる人通ふと

聞きて、遣はしける

藤原義孝

白雲の 峰にしもなど 通ふらん 同じ三笠の 山の麓を (新古今・恋一・一〇一一)

家に、百首の歌詠み侍りける時、神祇の心を

入道前関白太政大臣

天の下 三笠の山の 陰ならで 頼む方なき 身とは知らずや (新古今・神祇・一八九七)

冬の歌、詠み侍りけるに

正三位知家

時雨には 濡れぬ木の葉も なかりけり 山は三笠の 名のみ古りつつ

(新勅撰・冬・三八四)

寛治八年八月、高陽院家歌合に、月の歌 周防内侍

常よりも 三笠の山の 月影に 光射し添ふ 天の下かな (新勅撰・賀・四四五)

祝の心を、詠める

藤原行家朝臣

天の下 久しき御代の 標には 三笠の山の 榊をぞ挿す (新勅撰・賀・四四六)

采女町にて、右近の司の曹司に罷り出づる人を

待ち侍りけるに、行き過ぎながら立ち寄らず侍

りければ

采女明日香

三笠山 来ても訪はれぬ 道の辺に 辛き行く手の 陰ぞつれなき

(新勅撰・恋四・八八五)

年若く侍りける時、初めて百首の歌詠み侍りける、

述懐の歌

前大僧正慈円

差し離れ 三笠の山を 出でしより 身を知る雨に 濡れぬ日ぞなき

(新勅撰・雑二・一一四〇)

述懐の心を、詠み侍りける 内大臣

如何様に 契り興てし 三笠山 影靡くまで 月を見るらん (新勅撰・雑二・一一五八)

定家、少将になり侍りて、月明かき夜、慶び

申し侍りけるを見侍りて、朝に遣はしける

権中納言定家母

三笠山 道踏み初めし 月影に 今ぞ心の 止みは晴れぬる (新勅撰・雑二・一一五九)

同じ〔高光、横川に住み侍りける〕時、恒徳公、
兵衛佐に侍りける、代はりの少将になり侍りて、
慶びに大納言の許に罷で来て侍りけるを見て、

詠み侍りける

大納言師氏女高光妻

それと見る 同じ三笠の 山の井の 影にも袖の 濡れ増さるかな

(新勅撰・雑三・一二〇九)

前関白家歌合に、名所月 源家長朝臣

何処にも 振り放け今や 三笠山 唐土掛けて 出づる月影 (新勅撰・雑四・一二七七)

題知らず

京極前関白太政大臣

三笠山 峰より出づる 月影の 天つ空にも 照り増さるかな (続後撰・秋中・三二八)

(題知らず)

源家長朝臣

初時雨 振り放け見れば 茜射す 三笠の山は 紅葉しにけり (続後撰・秋下・四一七)

権僧正円経、人々に詠ませ侍りし名所の

十首の歌に、神祇

基俊法師

春日なる 三笠の山の 宮桂 立てし誓ひは 今も古りせず (続後撰・神祇・五五一)

家の七首の歌合に、月下鹿と言ふ事を

光明峰寺入道前撰政左大臣

三笠山 月射し昇る 空晴れて 峰より高き 小雄鹿の声 (続古今・秋下・四五〇)

宝治二年、百首の歌に、山紅葉 太宰権帥為経

露時雨 漏らぬ三笠の 山の端も 秋の紅葉の 色は見えけり (続古今・秋下・五二三)

左右大将の相具して、最勝講に参り侍り

ける時、言ひ遣はしける 後鳥羽院下野

藤波の 影差し並ぶ 三笠山 人に越えたる 梢をぞ見る (続古今・賀・一八五三)

返し

入道前太政大臣

思ひ遣れ 三笠の山の 藤の花 咲き並べつつ 見つる心は (続古今・賀・一八七四)

建長三年九月十三夜、十首の歌合に、

名所月

冷泉太政大臣

年を経て 光射し添へ 春日なる 山は三笠の 秋の夜の月 (続拾遺・秋上・二八八)

中将を望み申して、年久しくなりけるに、

五月雨の頃、人の許に遣はしける 侍従雅有

如何にせむ 我が身古り行く 五月雨に 頼む三笠の 山ぞ甲斐なき

(続拾遺・雑春・五五一)

少将に侍りける頃、詠み侍りける 藤原隆博朝臣

幾年か 挿頭来ぬらん 三笠山 同じ麓の 秋の紅葉葉 (続拾遺・雑秋・六二四)

建長六年、三首の歌合に、桜を

万里小路右大臣干時右大将

待たれ来し 三笠の山の 桜花 久しき春の 挿頭にぞ挿す (続拾遺・賀・七三四)

建長五年七月、三首の歌に

冷泉太政大臣干時内大臣左大将

影靡く 光は身にも 余るらん 昇る三笠の 山の端の月 (続拾遺・賀・七五五)

大将に侍りける頃、文遣はしける人の、散らすな

と申したりける返事に 万里小路右大臣

三笠山 さしも漏らさぬ 言の葉に 徒にも露の 掛かるべきかは

(続拾遺・恋一・八一三)

中将にて、年久しく沈み侍りける頃、

詠み侍りける

中納言教良

さしもなど 秋ある道に 迷ふらん 三笠の山の 名さへ変はらで

(続拾遺・雑上・一一五八)

建長五年七月、三首の歌に、述懐 前右兵衛督為教

射し昇る 跡とは見れど 三笠山 仕ふる外の 道は頼まず

(続拾遺・雑上・一一五九)

(神祇の歌、詠み侍りける)

前内大臣公

三笠山 仰ぐ駿に 春雨の 古りぬる身さへ なほ頼むかな

(続拾遺・神祇・一四二九)

(神祇の歌、詠み侍りける)

前内大臣師

神だにも あはれを残せ 三笠山 花の外なる 我が身なりとも

(続拾遺・神祇・一四三〇)

(神祇の歌、詠み侍りける)

前摂政左大臣

曇らじと 思ふにつけて 頼むかな 三笠の山の 秋の月影

(続拾遺・神祇・一四三一)

春日若宮神主にて、久しく仕へまつる事を思ひて、

詠める

中臣祐茂

霜雪を 頂くまでに 仕へ来て 六十年三笠の 山に古りぬる (続拾遺・神祇・一四三三)

春の歌の中に

前関白太政大臣

三笠山 高嶺の花や 咲きぬらん 振り掛け見れば 掛かる白雲

(新後撰・春上・六二)

(春の歌の中に)

前関白太政大臣

年を経て なほ幾春も 三笠山 木高く掛かれ 松の藤波

(新後撰・春上・一四九)

(題知らず)

前僧正公朝

春日野の 野守の鏡 これなれや 外に三笠の 山の端の月

(新後撰・秋下・三七二)

中納言成家歌合に、祝

藤原道経

三笠山 生ひ添ふ松を 君が代の 千代の例と 神や見るらむ

(新後撰・神祇・七三〇)

題知らず

題知らず

天の下 治まりぬらし 三笠山 遍く仰ぐ 神の恵みに

(新後撰・神祇・七三一)

祝の心を、詠ませ給うける

法皇御製

三笠山 祈る心の 曇らねば 月日と共に 千代や巡らむ

(新後撰・賀・一五八〇)

関白、少将にて慶び申し侍りける次の日、

前関白の許へ、詠みて遣はしける 前大納言為氏

射し昇る 光に付きて 三笠山 影靡くべき 末ぞ見えける

(玉葉・賀・一〇六三)

嘉元の百首の歌奉りけるに、山 左近中将為藤

天の下 曇りなかれと 照らすらし 三笠の山に 出づる朝日は

(玉葉・賀・一〇六四)

神祇の歌の中に、春日を 常磐井入道前太政大臣

曇りなく 分きても袖に 影止めよ 頼む三笠の 山の端の月

(玉葉・神祇・二七六二)

(神祇の歌の中に、春日を)

九条左大臣女

三笠山 檜原松原 緑なる 色もて榮す 朱の玉垣

(玉葉・神祇・二七六三)

題知らず

権大納言冬基

三笠山 森の辺りは 神寂びて 月澄む野辺に 小雄鹿の声

(玉葉・神祇・二七七四)

(題知らず)

小弁

天の下 神の坐すてふ 三笠山 陰に隠れぬ 人はあらしな

(玉葉・神祇・二七七五)

(神祇の心を)

大中臣泰方

三笠山 神は捨てじと 思ふこそ 憂き身に残る 頼みなりけれ (玉葉・神祇・二七七八)
題知らず 土御門院御製

三笠山 射すや朝日の 松の葉に 変はらぬ春の 色は見えけり (続千載・春上・六)
前関白太政大臣、春日社に詣で侍りけるに、

山階寺の別当にて代代の跡に変はらず執り行
なひて、思ひ続け侍りける 前僧正実聡

三笠山 古い木も今は 花咲きて 代代に変はらず 春に会ひぬる (続千載・神祇・八七五)

題知らず 前参議雅孝

三笠山 春の恵みの 遍くは 藤の末葉も なほや栄へん (続千載・神祇・八七六)

嘉元の百首の歌奉りし時、山 一条内大臣
照らせなほ 山は三笠の 朝日陰 仰ぐ心も 曇りやはする (続千載・神祇・八七七)

西行法師、人々勧めて、百首の歌詠ませ侍りけるに
前中納言定家

なかなか 指してても言はじ 三笠山 思ふ心は 神も知るらん (続千載・神祇・八七八)

題知らず 読人知らず

雁が音の 来鳴きにしより 春日なる 三笠の山は 色付きにけり (続後拾遺・秋下・三八九)

宇治関白前太政大臣、少将にて侍りける時、

春日使に立ち侍りてまたの日、雪降り侍り
けるに、花山院より、我すらに思ひこそ遣
れ春日野の雪間を如何で人の分くらむ、と

御言ありける御返事に 法成寺入道前撰政太政大臣

三笠山 雪や積むらんと 思ふ間に 心の空に 通ひけるかな (続後拾遺・雑上・九八七)

題知らず 前関白左大臣九条

行末も 神の恵みを 三笠山 絶えずぞ代代の 跡は栄へん (続後拾遺・神祇・一三二五)

後三条前内大臣、大将になりて、春日社に
神拝し侍りける時、相伴ひて、詠み侍りける
入道前太政大臣

今ぞ知る 五十の老いの 三笠山 この世に見るも 神の験と (続後拾遺・神祇・一三二六)

社頭祝を 津守国助

神垣や 三笠の山に 差し添へて 君が常磐に 祝ふ榊葉 (続後拾遺・神祇・一三二七)

文保の百首の歌に 芬陀利花院前関白内大臣
曇らじと 思ふ心を 三笠山 出づる朝日も 空に知るらむ (風雅・雑下・一八〇五)

三笠山 雲居遙かに 見ゆれども 真如の月は ここに澄むかな
この二歌は、暦応三年六月の頃、春日の神木
山階寺の金堂に渡らせ給ひける時、告げさせ

給ひけるとなむ 我かくて 三笠の山を 浮かれなば 天の下には 誰れか住むべき (風雅・雑下・二二〇四)

これは、春日の御榊、都に御座しましける春
の頃、ある人の夢に、大明神の御歌とて見え

けるとなむ

(風雅・雑下・二二〇六)

春日社に参りて、身の数ならぬ事を思ひて、
詠み侍りける

京極前関白家肥後

三笠山 その氏人の 数なれば 差し放たずや 神は見るらむ

(風雅・雑下・二二二九)

雑の歌の中に 前太政大臣

當時を 思へば我も 三笠山 さして頼みを 掛けざらめやも

(風雅・雑下・二二三〇)

春日社へ参りて、詠める

刑部卿頼輔

数ならで 天の下には 古りぬれど なほ頼まるる 三笠山かな

(風雅・雑下・二二三一)

社頭月を

前左大臣

今までは 迷はで月を 三笠山 仰ぐ光よ 末も隔てつな

(風雅・雑下・二二三六)

春日社にて、月を見て

中臣祐春

我が心 曇らねばこそ 三笠山 思ひしままに 月は見るらめ

(風雅・雑下・二二三七)

宝治の百首の歌の中に、寄日祝と言ふ事を

冷泉前太政大臣

三笠山 峰立つ昇る 朝日影 空に曇らぬ 万代の春

(風雅・賀・二二六一)

題知らず

柿本人丸

春日なる 三笠の山に 月は出でぬ 咲ける桜の 色も見ゆらん

(新千載・春上・八四)

京極の御息所、春日に詣で給うける時、国の司、

二十一首の歌詠みて、奉りける中に、桜花 三

笠の山の 陰しあれば 雪と降るとも 濡れじ

とぞ思ふ、と侍りける返しの歌 読人知らず

木の間より 花の雪のみ 散り来るは 三笠の山の 漏るにやあるらん

(新千載・春下・一五二)

題知らず

三条入道前太政大臣

雨露も 漏らぬ三笠の 山なれど 頼むにつけて 袖は濡れつつ

(新千載・神祇・九七七)

(題知らず)

法成寺入道前関白太政大臣

神の坐す 三笠の山の 月影の 木綿掛けてしも 射し昇るかな

(新千載・神祇・九七八)

題知らず

人麿

君が着る 三笠の山に 居る雲の 立てば別るる 恋もするかな

(新千載・恋三・一四二一)

春日社に、詠みて奉りける百首の歌の中に 参議雅経

天の原 振り放け仰ぐ… 春日なる 三笠の山の 名にし負はば…

(新千載・雑下・二二三五)

神祇を

藤原長能

三笠山 麓を巡る 佐保川の さして祈りし 身を頼むかな

(新拾遺・神祇・一四一五)

春日社に罷りて、大将の事祈り申すとて、

思ひ続け侍りける 二条入道前内大臣

三笠山 さすがに如何が 捨て果てん 重なる家の 藤の末葉を

(新拾遺・神祇・一四一八)

月の歌として、詠める

中納言為藤

三笠山 その名を掛けて 見し秋も 遙かになりぬ 峰の月影

(新拾遺・雑中・一七八二)

題知らず

中臣延朝

仕へ来し 跡をぞ頼む 三笠山 さすがに神の 捨てじと思へば

(新後拾遺・神祇・一五一〇)

応永十四年、内裏にて、人々題を探りて

百首の歌仕うまつりけるに、同じ心(山

霞)を 鹿苑院入道前太政大臣

三笠山 峰も遙かに 霞むなり 春日の里の 春の曙 (新統古今・春上・八)

寄日祝と言ふ事を 源持賢

朝日射す 影にも千代を 三笠山 峰なる松の 緑のみかは (新統古今・賀・七九九)

弘安の百首の歌に 藤原為顕

昔我が 名をさへ掛けぬ 三笠山 如何なる藤の 下葉なるらむ (新統古今・神祇・二一〇七)

百首の歌奉りし時 按察使公保

三笠山 及ばぬ藤の 末葉まで 掛けてぞ頼む 広き恵みを (新統古今・神祇・二一〇八)

【み熊野】 (紀伊)

● 玄々集……一例 (詞書)

熊野に参りて、月を見て

都にて 眺めし月の もろともに 旅の空にても 出でにけるかな (道命阿闍梨・一二六)

● 能因法師集……一例 (詞書)

熊野にまうでて、熊野河に舟にのりて下るほどに、

川の紅葉を見て

我ひとりかは 底のみくずは (五八 a)

とあれば、みづからかうもとをつく

くまかはの 淵瀬に心 なぐさめつ (五八 b)

● 勅撰和歌集……六例

(題知らず) (読人知らず)

み熊野に 高麗の蹟く 青葛 君こそ我が 絆なりけれ (金葉・恋下・四九三)

法印良守、熊野の二十首の歌とて勧め侍り

けるに、雪 藤原季宗朝臣

み熊野や 幾重か雪の 積もるらん 跡だに見えず 浦の浜木綿 (続古今・冬・六五一)

熊野に詣で侍りける時、神倉にて、太政大臣従

一位極めぬる事を思ひ続けて、詠み侍りける

入道前太政大臣

み熊野の 神倉山の 岩畳 登り果てても なほ祈るかな (続古今・神祇・七三六)

熊野の御幸、第三十二度の時、御前にて

思しめし続けさせ給うける 後白河院御製

忘るなよ 雲は都を 隔つとも 馴れて久しき み熊野の月 (玉葉・神祇・二七八二)

御返し、 巫に託宣せさせ給ひける

屢も 如何が忘れん 君が守る 心曇らず み熊野の月 (玉葉・神祇・二七八三)

題知らず 法印良守

み熊野の 南の山の 滝つ瀬に 三年ぞ濡れし 苔の衣て (玉葉・神祇・二七八四)

【御倉山】 (山城)

● 玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一例

真卷の矢立

源俊頼朝臣

御倉山 真木の屋立てて 住む民は 年を積むとも 朽ちじとぞ思ふ

(千載・雑下・一一七四)

【御手洗川】(山城)

●玄々集…一例

前一宮より、亀の形を、造りて、一眼など有て、奉り侍りければ

罪深き 御手洗川の 亀なれば 法の浮き木に あはぬなりけり (前齋院・五八)

●能因法師集…一例

夕立

なるかみの 夕立にこそ 雨は降れ 見たらし川の 水まさるらし (二五六)

●勅撰和歌集…三一例

(題知らず)

(読人知らず)

恋せじと 御手洗川に せし禊 神は受けずぞ なりにけらしも (古今・恋一・五〇一)

賀茂に詣でて侍りける男の見侍りて、今は

な隠れそいとよく見えてき、と言ひ遣せて侍

りければ

伊勢

空目をぞ 君は御手洗 川の水 浅しや深し それは我かは (拾遺・雑下・五三四)

女院、御八講捧物に、金して亀の形を作りて、

詠み侍りける

齋院

業尽くす 御手洗川の 亀なれば 法の浮木に 逢はぬなりけり (拾遺・哀傷・一三三七)

賀茂成助に、初めて逢ひてもの申しける次に、

杯とりて、詠める

津守国基

開き渡る 御手洗川の 水清み 底の心を 今日ぞ見るべき (金葉・雑上・五九二)

(賀茂社後番歌合とて、神主重保が詠ませ

侍りける時、詠める)

藤原公時朝臣

石間行く 御手洗川の 音冴えて 月や結ばぬ 氷なるらん (千載・秋上・二九三)

堀河院の御時、立春の朝に、今日の心仕ふ

まつるべき由侍りければ、奏し侍りける

源俊頼朝臣

君が為 御手洗川を 若水に 掬ぶや千代の 始めなるらん (千載・賀・六一〇)

上西門院、賀茂の齋院と申しけるを、代はらせ

給うて、唐崎に被し給ひける御供にて、女房の

許に、遣はしける

八条前太政大臣

昨日まで 御手洗川に せし禊 志賀の浦波 立ちぞ代はれる (千載・雑上・九七二)

賀茂の齋院代はり給うて後、唐崎の祓侍りける

またの日、雙林寺の御子の許より、昨日何事か

など侍りける返事に、遣はされ侍りける 式子内親王

御手洗や 影絶え果つる 心地して 志賀の波路に 袖ぞ濡れ来し (千載・雑上・九七三)

鏡にも 影御手洗の 水の面に 映るばかりの 心とを恐れ

これまた、賀茂に詣でたる人の夢に見えける

と言へり

賀茂に参りて

周防内侍

(新古今・神祇・一八六二)

年を経て 憂き影をのみ 御手洗の 変はる世もなき 身を如何にせん

(新古今・神祇・一八八八)

文治六年、女御入内屏風に、臨時祭描ける所を、
詠み侍りける

皇太后宮大夫俊成

月冴ゆる 御手洗川に 影見えて 氷に摺れる 山藍の袖

(新古今・神祇・一八八九)

神祇の歌の中に

太宰大式高遠

潔き 御手洗川の 底深く 心を汲みて 神は知らなん

(続古今・神祇・七〇六)

賀茂社に詣でて、詠み侍りける 安喜門院大式

御手洗や 身は沈むとも 長き世に 名を流すべき 泡沫もがな

(続拾遺・秋上・一一一〇)

(夏の歌の中に)

鷹司院按察

千早振る 袖だに消たぬ 思ひとや 御手洗川に 螢飛ぶらん

(新後撰・夏・二三四)

(神祇の心を)

天台座主道玄

千早振る 其神山の 中に落つる 御手洗川の 音の清けさ

(新後撰・神祇・七二三)

(神祇の心を)

前大僧正禅助

住み初めし 昔を神も 忘れずは なほ御手洗の 末も濁らじ

(新後撰・神祇・七二四)

新院位去らせ給ひにける年の四月、祭の頃、

権大納言三位の許より、女使せし世のこと

など言ひて、あはれなり君もや偲ぶ当時の

御手洗川の今日の面影、と申して侍りける

返事に、書き添へ侍りける 従三位為子

今日はいとど 偲びぞ増さる 御手洗や 川瀬の波の 返り来ぬ世を

(玉葉・雑一・一九一九)

(百首の歌奉りし時)

昭訓門院春日

分きてまた 涼しかりけり 御手洗や 禊に更くる 夜半の川風

(続千載・夏・三三八)

文保の百首の歌奉りし時

前大納言為定

御手洗や 禊に流す 大幣の 終に寄る瀬は 秋風ぞ吹く

(新千載・夏・三〇七)

嘆く事侍りける頃、賀茂に詣でて、詠める

前右近大將家教

我が頼む 御手洗川の 絶えばこそ 沈み果てぬと 身をば思はめ

(新千載・神祇・九六六)

等持院贈左大臣、詠ませ侍りける賀茂社の七首

の歌に、神祇 源和氏

如何ばかり 神も嬉しと 御手洗や 底まで澄める 君が心を (新拾遺・神祇・一四一三)

社頭祝 従三位氏久

万代と 君を祈りて 振る袖は 影御手洗に 神や受くらん (新拾遺・神祇・一四一四)

百首の歌奉りし時、六月祓 権大納言為遠

御手洗や 誰が禊とも 白木綿の 知らず流るる 夏の暮れかな (新後拾遺・夏・二八〇)

(百首の歌奉りし時、六月祓) 入道二品親王尊道

御手洗や 引く手も今日は 大幣の 幾瀬に流す 禊なるらん (新後拾遺・夏・二八一)

(題知らず)

読人知らず

和むてふ 神の駿も 御手洗の 川の瀬清き 夏祓へかも (新後拾遺・雑春・七一〇)
題知らず 太上天皇

折り来し 幾年波の 御手洗の 受けぬ禊は 言ふ甲斐もなし (新後拾遺・恋二・一〇六七)

題知らず 賀茂脩久

雲分けし 神代は知らず 今もなほ 影御手洗に 宿る月かな (新後拾遺・神祇・一五二二)

嘉元の百首の歌奉りける時 正二位隆教

忘れずよ 御手洗川の 深き江に 馴れて影見し 山藍の袖 (新後拾遺・神祇・一五二三)

(題知らず) 前中納言匡房

神山の 麓を止むる 御手洗の 岩打つ波や 万代の数 (新後拾遺・慶賀・一五三三)

神主辞して後社頭の六月祓を思ひ出でて

従三位脩久

御手洗や 昔は我も せし禊 今宵は神も 思ひ出づらむ (新続古今・雑上・一六九一)

神祇の心を 前参議雅有

神も見よ 御手洗川に 行く水の 心清くも 世を祈るかな (新続古今・神祇・二〇九八)

【美豆の森】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二例

人の許に、遣はしける 読人知らず

逢ふ事を 淀にありてふ 美豆の森 辛しと君を 見つる頃かな (後撰・恋六・九九四)

返し (読人知らず)

美豆の森 漏るこの頃の 眺めには 恨みも敢へず 淀の川浪 (後撰・恋六・九九五)

【水無瀬川】(摂津)

●玄々集……用例無

●能因法師集……一例

水無瀬河のわたりにをかしき女のあるを、むかへに

やらん、ただにはあらし、歌よみてやれとなれば、

かういひやる

ながらへて すまむとやする 水無瀬河 うき瀬おほかる わたりとぞ聞く (五六)

●勅撰和歌集……一九例

(題知らず) 友則

言に出でて 言はぬばかりぞ 水無瀬川 下に通ひて 恋しきものを (古今・恋二・六〇七)

(題知らず) (読人知らず)

相見ねば 恋こそ増され 水無瀬川 何に深めて 思ひ初めけむ (古今・恋五・七六〇)

(題知らず) 読人知らず

水無瀬川 ありて行く水 なくはこそ 終に我が身を 絶えぬと思はめ (古今・恋五・七九三)

人の許に文遣はしける男、人に見せけりと聞きて、

遣はしける

(読人知らず)

皆人に 文見せけりな 水無瀬川 その渡りこそ 先づは浅けれ (後撰・雑三・一二一八)
語らんと言ひて、道命法師の許に詣で来たる人の、

詠み侍りける

読人知らず

絶えやせん 命ぞ知らぬ 水無瀬川 よし流れても 試みよ君 (後拾遺・雑四・一〇九二)
堀河院御時、百首の歌奉りける時、恋の心を、
詠み侍りける 大納言公実

思ひ余り 人に問はばや

水無瀬川 掬ばぬ水に 袖は濡るやと (千載・恋二・七〇四)

中納言国信家歌合に、恋の心を、詠める 藤原基俊

人心 何を頼みて 水無瀬川 堰の古枕 朽ち果てぬらん (千載・恋五・九一五)

男ども詩を作りて、歌に合はせ侍りしに、

水郷春望と言ふ事を

太上天皇

見渡せば 山本霞む 水無瀬川 夕べは秋と 何思ひけむ (新古今・春上・三六)

返し

康資王母

深からじ 水無瀬川の 埋れ木は 下の恋路に 年古りぬとも (新勅撰・恋一・六五六)

河月を

平時直

水無瀬川 凍るも月の 影なれば なほありて行く 水の白波 (続古今・秋上・四〇九)

題知らず

丹波尚長朝臣

降り隠す 木の葉の下の 水無瀬川 何処に水の ありて行くらん (新後撰・冬・四五五)

二品法親王家の五十首の歌に、絶恋 前大納言為世

終にさて 絶えけるものを 水無瀬川 ありて行く水 今は頼まじ (続千載・恋四・一四七一)

(題知らず)

西音法師

見れば先づ 涙流るる 水無瀬川 何時より月の 独り澄むらん (続千載・雑下・一九五四)

題知らず

紀俊文

数ならぬ 水無瀬の川に 行く水の 深き思ひぞ ありて甲斐なき (続後拾遺・恋一・七〇六)

冬の歌に

藤原成藤

凍りても 音は残れる 水無瀬川 下にや水の ありて行くらむ (風雅・雑上・一六一三)

建武二年、内裏にて、人々題を探りて千首の歌

仕うまつりける時、五月雨 前中納言公脩 (新千載・夏・二六九)

(題知らず)

瓊子内親王家小督

水無瀬川 逢ふ瀬は外に ありて行く 流れの末を 如何が頼まん (新千載・恋五・一六一二)

貞和の百首の歌召されし時

中宮大夫公宗母

かくしつづ 積もれば老いの 水無瀬川 さのみやありて 袖濡らすべき (新拾遺・雑中・一七五六)

(題知らず)

源光正

如何なれば 数にもあらぬ 水無瀬川 憂き瀬ながらに ありて行くらん (新統古今・雑中・一九二九)

【湊川】（撰津）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……八例

夜泊鹿と言へる心を、詠める 刑部卿範兼

湊川 浮寝の床に 聞こゆなり 生田の奥の 小雄鹿の声 (千載・秋下・三一二)

(夜泊鹿と言へる心を、詠める) 道因法師

湊川 夜舟漕ぎ出づる 追風に 鹿の声さへ 瀬戸渡るなり (千載・秋下・三一五)

建保二年、秋の歌奉りけるに 内大臣

湊川 秋行く水の 色ぞ濃き 残る山なく 時雨降るらし (新勅撰・秋下・三四一)

河五月雨と言へる心を 藤原為信朝臣

五月雨に 夕潮迎ふ 湊川 堰かれていとど 水増さりつつ (新後撰・夏・二一四)

宝治の百首の歌奉りける時、寄湊恋 山階入道左大臣

堰き兼ねぬ もの思ふ袖の 湊川 今は包まぬ 名をや流さん (新後撰・恋一・八一五)

(六月祓を) 順徳院御歌

湊川 夏行くては 知らねども 流れて早き 瀬瀬の木綿垂 (風雅・夏・四四五)

嘉元の百首の歌奉りけるに 前中納言為相

湊川 上波早く かつ越えて 潮まで濁る 五月雨の頃 (新後拾遺・夏・二二六)

河上落葉と言ふ事を 良心法師

湊川 紅葉吹き越す 木枯しに 山本下る 朱の楳舟 (新統古今・冬・六三一)

【みなれ川】（大和）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一例

題知らず 読人知らず

世の中は など大和なる みなれ川 見馴れ初めずぞ あるべかりける

(新勅撰・雑四・一二七三)

【耳成山】（大和）

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……三例

(題知らず) (読人知らず)

耳成の 山の梶子 得てしかな 思ひの色の 下染めにせむ (古今・雑体・一〇二六)

宇多院に侍りける人に、消息遣はしける返事も

侍らざりければ 読人知らず (後撰・恋六・一〇三四)

宇陀の野は 耳成山か 呼子鳥 呼ぶ声にだに 答へざるらん

返し 女五の内親王

耳成の 山ならずとも 呼子鳥 何かは聞かん 時ならぬ音を (後撰・恋六・一〇三五)

【三室の岸】（大和）

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……二例

(百首の歌奉りける時、無常の心を、詠める)

花園左大臣家小大進

明日知らぬ 三室の岸の 根なし草 何徒し世に 生ひ始めけん (千載・雑中・一一三一)

入道二品親王道助家の五十首の歌に、

岸柳 源家長朝臣

竜田川 三室の岸の 古柳 如何に残りて 春を知るらむ (新統古今・春上・九二)

【都島】 (陸奥)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……一例

沖の井、都島 小野小町

燠のゐて 身を焼くよりも 哀しきは 都島辺の 別れなりけり (古今・墨滅・一一〇四)

【宮路山】 (三河)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……二例

題知らず

読人知らず

君が辺り 雲居に見つつ 宮路山 打ち越え行かん 道も知らなく (後撰・恋五・九一八)

東より上るとて、三河国宮路の山を、十月晦に

過ぐるに、紅葉未だ盛りに見えければ 菅原孝標朝臣女

嵐こそ 吹き来ざりけれ 宮路山 未だ紅葉葉の 散らで残れる (玉葉・冬・八九一)

【武蔵野】 (武蔵)

- 玄々集……用例無
- 能因法師集……用例無
- 勅撰和歌集……五四例

(題知らず)

(読人知らず)

秋風の 吹きと吹きぬる 武蔵野は 並べて草葉の 色変はりけり (古今・恋五・八二一)

(題知らず)

(読人知らず)

紫の 一本故に 武蔵野の 草は皆がら あはれとぞ見る (古今・雑上・八六七)

延喜御時、秋の歌召しければ、奉りける 貫之

女郎花 匂へる秋の 武蔵野は 常よりもなほ 睦ましきかな (後撰・秋中・三三七)

(題知らず)

(読人知らず)

武蔵野は 袖漬つばかり 分けしかど 若紫は 訪ね侘びにき (後撰・雑二・一一七七)

石南草

如覚法師

紫の 色には咲くな 武蔵野の 草の緑と 人もこそ見れ (拾遺・物名・三六〇)

同じ (入道摂政の賀し侍りける) 屏風に、

武蔵野の形を描きて侍りけるを、詠める

(平兼盛)

武蔵野を 霧の絶え間に 見渡せば 行末遠き 心地こそすれ (後拾遺・賀・四二七)

法師品、漸見湿土泥、決定知近水の心を、

詠み侍りける 皇太后宮大夫俊成

武蔵野の 堀兼の井も あるものを 嬉しく水の 近付きにける (千載・釈教・一二四一)

水無瀬にて、十首の歌奉りし時 左衛門督通光

武蔵野や 行けども秋の 果てぞなき 如何なる風か 末に吹くらむ

(新古今・秋上・三七八)

五十首の歌奉りし時、野径月 撰政太政大臣

行末は 空も一つの 武蔵野に 草の原より 出づる月影 (新古今・秋上・四二二)

題知らず 西行法師

玉に貫く 露は零れて 武蔵野の 草の葉結ぶ 秋の初風 (新勅撰・秋上・一九六)

(内大臣に侍りける時、家に百首の歌

詠み侍りけるに、名所恋と言ふ心を)

(前関白)

武蔵野や 人の心の 朝露に 貫き止めぬ 袖の白玉 (新勅撰・恋三・八五八)

(題知らず) 九条右大臣

武蔵野の 野中を分けて 摘み初めし 若紫の 色は限りか (新勅撰・恋四・八六九)

(題知らず) (読人知らず)

露霜の 上とも知らじ 武蔵野の 我は緑の 草葉ならねば (新勅撰・恋四・八七八)

(若草を、詠み侍りける) 前大僧正慈円

武蔵野の 春の気色も 知られけり 垣根に芽ぐむ 草の縁に (新勅撰・雑一・一〇二七)

題知らず 小町

武蔵野の 向岡の 草なれば 根を訪ねても あはれとぞ思ふ (新勅撰・雑四・一三〇〇)

亭子院に、奉りける 監命婦

あはれてふ 人もやあると 武蔵野の 草とだにこそ なるべかりけれ

(続後撰・恋三・八五二)

建保三年、内裏歌合に 大納言通方

武蔵野は 月の入るべき 峰もなし 尾花が末に 掛かる白雲 (続古今・秋上・四二五)

題知らず 土御門院御歌

いづれぞと 草の縁も 訪ひ侘びぬ 霜枯れ果つる 武蔵野の原 (続古今・冬・五九〇)

入道二品親王道助家の五十首の歌に、

野径月 正三位知家

武蔵野は 行末近く なりにけり 今宵ぞ見つる 山の端の月 (続古今・羈旅・八七九)

名所の歌、詠み侍りけるに 後鳥羽院下野

逢ふ人に 問へど変はらぬ 同じ名の 幾日になりぬ 武蔵野の原 (続古今・羈旅・九二一)

題知らず 小野小町

武蔵野に 生ふとし聞けば 紫の その色ならぬ 草も睦まし (続古今・恋四・一二八六)

野外霞 土御門院御製

春の着る 霞の妻や 籠るらん 未だ若草の 武蔵野の原 (続拾遺・春上・二四)

建保五年、内裏歌合に、冬夕旅 正三位知家

冬の日の 行く程もなき 夕暮れに なほ里遠き 武蔵野の原 (続拾遺・羈旅・六九八)

(題知らず)

権大納言師信

懂れて 行末遠き 限りをも 月に見つべき 武蔵野の原

(新後撰・秋下・三七三)

(雑の歌の中に)

右大臣

旅人の 行く方に 踏み分けて 道数多ある 武蔵野の原

(玉葉・旅・一一七六)

(月を、詠み侍りける)

法印能海

出づるにも 入るにも同じ 武蔵野の 尾花を分くる 秋の夜の月

(玉葉・雑一・一九八七)

(題知らず)

伊勢

武蔵野の 草葉に宿る 白露の 幾世あるべき ものならなくに (玉葉・雑四・二二九四)

弘長二年、亀山院に、十首の歌奉りける時、

野郭公 山階入道左大臣

郭公 一声故に 武蔵野の 野を懐かしみ 過ぎも遣られず

(続千載・夏・二六四)

題知らず 読人知らず

武蔵野は なほ行末も 秋萩の 花摺り衣 限り知られず

(続千載・秋上・三八七)

月の歌の中に 式部卿久明親王

武蔵野や 入るべき峰の 遠ければ 空に久しき 秋の夜の月

(続千載・秋下・五〇八)

後九条内大臣家に五首の歌詠み侍りける時、

武蔵野 従二位家隆

春も未だ 色には出でず 武蔵野や 若紫の 雪の小草

(続後拾遺・春上・一八)

百首の歌奉りける中に、野を 安嘉門院四条

武蔵野は 皆冬草の 萎れ葉に 霜は置くとも 根さへ枯れめや (風雅・雑上・一五九七)

宝治の百首の歌奉りける時、野月 鷹司院帥

武蔵野や 草葉皆がら 置く露に 末遙かなる 月を見るかな (新千載・秋上・四三一)

後醍醐院御時、武者所に侍ひけるに、原霞と

言へる題を給はりて、仕うまつりける 源知行

いとどなほ 霞めば遠し 山の端は さらでも見えぬ 武蔵野の原

(新千載・羈旅・七八〇)

建仁元年、五十首の歌奉りける時、野径月

前中納言定家

巡り逢はん 空行く月の 行末は 未だ遙かなる 武蔵野の原

(新千載・羈旅・七八一)

題知らず

従三位為理

草枕 同じ旅寝の 変はらねば 日数忘るる 武蔵野の原 (新千載・羈旅・七八二)

(題知らず)

藤原雅家

果て知らぬ 身の類かと 武蔵野を 分け迷ふにも 濡るる袖かな

(新千載・羈旅・七八三)

家に詩歌を合はせ侍りける時、野径夕秋と

言ふ事を 前中納言定資

濡れて干す 限りぞ知らぬ 武蔵野や 分け行く末の 袖の夕露 (新千載・羈旅・七八四)

(野鹿と言へる事を)

従二位家隆

小雄鹿の 夜半の草伏し 明けぬれど 帰る山なき 武蔵野の原 (新拾遺・秋下・四六九)

宝治元年、十首の歌合に、野外雪 後嵯峨院御製

いとどまだ 限りも見えず 武蔵野や 天霧る雪の 曙の空 (新拾遺・冬・六六〇)

旅の歌に

藤原行春

分け行けど 花の千種の 果てもなし 秋を限りの 武蔵野の原 (新拾遺・羈旅・七八一)
清輔朝臣四位して侍りけるに、遣はしける

太宰大式重家

武蔵野の 若紫の 衣手は 縁までこそ 嬉しかりけれ (新拾遺・雑中・一七四七)

題知らず 読人知らず

行末は 露だに置かじ 夕立の 雲に余れる 武蔵野の原 (新後拾遺・夏・二六八)

建保の百首の歌奉りけるに 前中納言定家

誰が方に 夜鳴く雁の 音に立てて 涙移ろふ 武蔵野の原 (新後拾遺・秋上・三三二)

題知らず 兵部卿長綱

月影も 露の宿りや 訪ぬらん 草に果てなき 武蔵野の原 (新後拾遺・雑秋・七四四)

旅行の心を 正三位経朝

夕煙 訪ふべき里の 導だに 未だ遙かなる 武蔵野の原 (新後拾遺・羈旅・八七五)

貞和二年、百首の歌に 等持院贈左大臣

東路は 古里ながら 武蔵野の 遠きに末を なほや迷はん (新後拾遺・羈旅・九一九)

題知らず 源頼康

草枕 数多旅寝を 数へても 未だ武蔵野は 末ぞ残れる (新後拾遺・羈旅・九二〇)

(題知らず) 宗久法師

武蔵野も さすが果てある 日数にや 富士の嶺ならぬ 山も見ゆらん (新後拾遺・羈旅・九二一)

旅行の心を 藤原長秀

富士の嶺を 振り放け見れば 白雪の 尾花に続く 武蔵野の原 (新後拾遺・羈旅・九二二)

最勝四天王院の障子に武蔵野描きたる所

前中納言定家

武蔵野の 縁の色も 訪ひ侘びぬ 皆が霞む 春の若草 (新統古今・春上・六一)

旅の歌の中に 源頼豊

今日もただ 暮るるばかりを 限りにて 先づ行き止まる 武蔵野の原 (新統古今・羈旅・九三八)

(題知らず) 読人知らず

武蔵野は 今日も果てなく 行き暮れぬ またや結ばん 草の枕を (新統古今・羈旅・九六七)

延文二年、百首の歌奉りける時 前大納言為定

武蔵野を 今日こそ分けて 限りなく 遠く来にける 旅は知らるれ (新統古今・羈旅・九六八)

(新統古今・羈旅・九六八)

【梅津河】 (山城)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一例

(題知らず) 読人知らず

名のみして 生れるも見えず 梅津川 井堰の水も 漏ればなりけり (拾遺・雑下・五四八)

(拾遺・雑下・五四八)

337

【紫野】(山城)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……三例

円融院法皇失せさせ給ひて、紫野に御葬送侍り

けるに、一年この所にて、子の日せさせ給ひし

ことなど思ひ出でて、詠み侍りける 左大将朝光

紫の 雲のかけても 思ひきや 春の霞に なして見むとは

(後拾遺・哀傷・五四一)

世の中騒がしう侍りける時、里の刀禰、宣旨にて

祭仕うまつるべきを、歌二つなんいるべき、

と言ひ侍りければ、詠み侍りける 藤原長能

白妙の 豊幣を 採り持ちて 祝ひぞ初むる 紫の野に

この歌は、ある人云く、世の中の騒がしう

侍りければ、船岡の北に、今宮と言ふ神を

祝ひて、朝廷も神馬奉り給ふとなん、言ひ

伝へたる。

(後拾遺・雑六・一一六四)

文永二年九月十三夜の歌合、野鹿を 太上天皇

寝られずや 妻を恋ふらむ 標野行き 紫野行き 鹿ぞ鳴くなる (続古今・秋下・四三五)

【望月の駒】(信濃)

● 玄々集……用例無

● 能因法師集……用例無

● 勅撰和歌集……一五例

延喜御時、御馬を遣はして、早く参るべき由仰せ

遣はしたりければ、即ち参りて、仰言承れる人に、

遣はしける 素性法師

望月の 駒より遅く 出でつれば 辿る辿るぞ 山は越えつる (後撰・雑二・一一四四)

延喜御時、月次御屏風に 貫之

逢坂の 関の清水に 影見えて 今や牽くらん 望月の駒 (拾遺・秋・一七〇)

花山に罷りて侍りけるに、駒牽きの御馬を

遣はしたりければ 素性法師

望月の 駒より遅く 出でつれば 辿る辿るぞ 山は越えつる (拾遺・雑上・四三八)

八月駒迎へを、詠める 良運法師

逢坂の 杉の群立ち 牽く程は 尾斑に見ゆる 望月の駒 (後拾遺・秋上・二七八)

屏風絵に、駒迎へしたる所に、詠み侍りける

惠慶法師

望月の 駒牽く時は 逢坂の 木の下闇も 見えずぞありける (後拾遺・秋上・二八〇)

駒迎へをの心を、詠める 源仲正

東路を 遙かに出づる 望月の 駒に今宵や 逢坂の関 (金葉・秋・一八四)

後白河院、栖霞寺に御座しましけるに、

駒牽きの引き分けの使にて参りけるに

定家朝臣

嵯峨の山 千代の古道 跡留めて また露分くる 望月の駒 (新古今・雑中・一六四六)

文治六年、女御入内屏風に、駒迎への所

後京極撰政前太政大臣

東より 今日逢坂の 山越えて 都に出づる 望月の駒

(新勅撰・秋上・二六八)

駒迎への心を 大藏卿雅具

逢坂の 関立ち出づる 影見れば 今宵ぞ秋の 望月の駒

(続後撰・秋中・三四〇)

駒迎へを 後嵯峨院御製

年を経て 雲の上にて 見し秋の 影も恋しき 望月の駒

(続拾遺・秋上・二九二)

承久三年八月、駒牽きの上卿に参りて侍りける時、

前中納言定家参議にて参りて侍りけるに、殿上の硯

にて檜扇の端に書き付けて、出でける車に、遣はし

侍りける 常磐井入道前太政大臣

引き代へて 今日を見るこそ 哀しけれ さやは待たれし 望月の駒

(玉葉・雑一・一九七〇)

返し 前中納言定家

もの毎に 去年の面影 引き代へて 己れつれなき 望月の駒

(玉葉・雑一・一九七一)

堀河院の百首の歌に、駒迎へ 権中納言国信

逢坂の 関の杉群 葉を茂み 絶え間に過ぐる 望月の駒

(続後拾遺・秋上・三二五)

後宇多院七夕の七百首の歌に、駒迎へを 権中納言公雄

今もかも 絶えせぬものか 年毎の 秋の半ばの 望月の駒

(風雅・雑上・一五五三)

駒牽きの歌とて、詠ませ給うける 花園院御製

昔見し 雲居は遠く 隔てつれど 面影近き 望月の駒

(新千載・秋上・三九〇)

【守山】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一九例

守山の辺りにて、詠める 貫之

白露も 時雨もいたく 守山は 下葉残らず 色付きにけり

(古今・秋下・二六〇)

守山を越ゆとて 貫之

足引きの 山の山守 守山も 紅葉せさする 秋は来にけり

(後撰・秋下・三八四)

題知らず 読人知らず

旅行かば 袖こそ濡るれ 守山の 雫にのみは 課せざらなん

(拾遺・別・三四一)

(題知らず) 藤原忠隆

押さふれど 余る涙は 守山の 嘆きに落つる 雫なりけり

(金葉・恋下・四四七)

関白前太政大臣家にて、詠める 藤原重基

秋の夜の 月の光の 守山は 木の下陰も 明けかりけり

(詞花・秋・九九)

嘉応元年、高倉院御時、大嘗会悠紀方神遊

の歌、近江国神山を、詠める (宮内卿永範)

天皇を 八百万代の 神も皆 常磐に守る 山の名ぞこれ

(千載・神祇・一二八五)

千五百番の歌合に

家隆朝臣

露時雨 守山陰の 下紅葉 濡るとも折らむ 秋の形見に

(新古今・秋下・五三七)

永承元年、大嘗会悠紀方屏風、近江国守山を

式部大輔資業

天皇を 常磐堅磐に 守山の 山人ならし 山鬢せり (新古今・賀・七四九)

千五百番の歌合の歌 参議雅経

この頃は 月こそいたく 守山の 下葉残らぬ 木枯しの風 (続古今・冬・五七一)

内大臣の時の百首に、名所恋 光明峰寺入道前撰政左大臣

如何にせむ 袖より外に 守山の 下草掛けて 色に出でなば (続古今・恋一・九五六)

寄名所恋 前大納言伊平

時分かぬ 涙よ如何に 守山の 下葉の露も 秋ぞ染むなる (続古今・恋三・一一九六)

承久元年、内裏歌合に、庭紅葉 前中納言定家

守山も 木の下までぞ 時雨なる 我が袖残せ 軒の紅葉葉 (続拾遺・秋下・三六二)

恋の歌として 祝部成良

如何にせん 袖に人目を 守山の 露も時雨も 色に出でなば (新後撰・恋一・八〇四)

紅葉葉を、といふ五文字を句の頭に置きて、 貫之

詠める 守山の 峰の紅葉も 散りにけり 儂き色の 惜しくもあるかな (玉葉・雜三・二二九一)

後鳥羽院に奉りける百首の歌の中に 如願法師

思ふこと 知らじな人目 守山の 下吹く風の 色し見えねば (新千載・恋一・一〇三八)

名所の百首の歌奉りける時 皇太后宮大夫俊成女

如何にせん 繁き人目を 守山の 下葉残らず 時雨れ行く頃 (新千載・恋四・一五三六)

寄山恋 法印寛為

夕時雨 守山陰に 立ち濡れて 移ろふ袖の 色や紛へむ (新拾遺・恋一・九五七)

(題知らず) 読人知らず

人目守る 山下潜る 水茎の 書き絶えぬるか 音信もせぬ (忞後拾遺・恋四・一一九〇)

月照紅葉 侍従為敦

露ながら 月も木の間を 守山の 下照る色と 紅葉してけり (新続古今・秋下・五八二)

【八十島】(撰津)

●玄々集……用例無

●能因法師集…一例(詞書、出羽国)

出羽の国にやそしまに行きて、三首

●勅撰和歌集…二例 世中は かくてもへけり きさかたや あまのとま屋を わが宿にして (一一三)

建久二年、八十島祭に、住吉に罷りて、

詠み侍りける 西園寺入道前太政大臣

君が代は 八十島掛くる 波の音に 風静かなり 住吉の松 (新拾遺・賀・六七九)

後白河院御時、八十島祭に、住吉に罷りて、

詠み侍りける 前大納言隆季

住の江に 八十島かけて 来る人や 松を常磐の 衣と見るらん (新拾遺・神祇・一四四〇)

【八橋】(三河)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…四例

返し

(読人知らず)

打ち渡し 長き心は 八橋の 蜘蛛手に思ふ 事は絶えせじ

(後撰・恋一・五七〇)

三河国八橋を通るとて

安嘉門院四条

細小蟹の 蜘蛛手危ふき 八橋を 夕暮れ掛けて 渡りかねぬる

(玉葉・旅・一一八四)

題知らず

前大納言為家

旅衣 遙々来ぬる 八橋の 昔の跡に 袖も濡れつつ

(新拾遺・羈旅・八一〇)

幼きなく侍りし時、親に具して東に下りけるに、三河の

八橋と言ふ所にて、詠み侍りける 堀河院中宮上総

八橋を 行く人毎に 訪ひ見ばや 蜘蛛手に誰れを 恋ひ渡るぞと

(新統古今・羈旅・九七八)

【山科】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……五例

(題知らず)

読人知らず

山科の 音羽の山の 音にだに 人の知るべく 我が恋ひめかも

(古今・恋三・六六四)

返し

山科の 音羽の滝の 音にのみ 人の知るべく 我が恋ひめやま (古今・墨滅・一一〇九)

題知らず

人麿

山科の 木幡の里に 馬はあれど 徒歩よりぞ来る 君を思へば (拾遺・雑恋・一二四三)

河千鳥を

権中納言公雄

山科の 音羽の川の 小夜千鳥 及ばぬ跡に 音をのみぞ鳴く (新拾遺・雑上・一六九六)

千五百番の歌合の歌 後京極摂政前太政大臣

徒歩人の 道をぞ思ふ 山科の 木幡の里の 秋の夕暮 (新統古今・秋下・五四〇)

【万木の森】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……例

笠置の窟

登蓮法師

名にし負はば 常は万木の 森にしも 如何でか驚の 寝は安く寝る

(千載・雑下・一一七九)

隱題の歌、詠み侍りける時、紫の袈裟を 入道二品親王覚性

如何なれば 万木の森の 群鷺の 今朝しも殊に 立ち騒ぐらん

(新千載・雑下・二一四六)

【余呉の浦】(近江)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一例

宇治前太政大臣家歌合に、雪の心を、詠める 源頼綱朝臣

衣手に 余呉の浦波 冴え冴えて 己高山に 雪降りにけり (金葉・冬・二七八)

【淀川】(摂津)

●玄々集……一例

取り繫げ 美豆野の原の はなれ駒 淀の川霧 秋立ちにけり (藤原長能・六九)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…九例

淀川 (貫之)

足引きの 山辺に居れば 白雲の 如何にせよとか 晴るる時なき (古今・物名・四六一)

(題知らず) (読人知らず)

淀川の 淀むと人は 見るらめど 流れて深き 心あるものを (古今・恋四・七二一)

延喜御時歌合に 読人知らず

五月雨は 近くなるらし 淀川の 菖蒲の草も 木草生ひにけり (拾遺・夏・一〇八)

淀川 在原元方

植ゑて去にし 人も見なくに 秋萩の 誰れ見よとかは 花の咲きけむ (拾遺・物名・三七九)

(淀川) 貫之

足引きの 山辺に居れば 白雲の 如何にせよとか 晴るる時なき (拾遺・物名・三八〇)

鷹狩の心を、詠み侍りける 左近中将公衡

狩り暮らし 交野の真柴 折り敷きて 淀の川瀬の 月を見るかな (新古今・冬・六八八)

七月ばかり、美作へ下るとて、都の人に、遣はしける 前中納言匡房

都をば 秋と共にぞ 立ち初めし 淀の川霧 幾世隔てつ (新古今・離別・八七六)

千五百番の歌合に 後京極摂政前太政大臣

朝日射す 氷の上の 薄煙 未だ晴れ遣らぬ 淀の川岸 (玉葉・冬・九三四)

(百首の歌奉りし時) 左近中将定親

五月雨に 淀の川岸 水越えて あらぬ渡りに 舟呼ばふらし (新統古今・夏・二九三)

【吉野川】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…八二例

吉野川の辺りに、山吹の咲けりけるを、詠める 貫之

吉野川 岸の山吹 吹く風に 底の影さへ 移ろひにけり (古今・春下・一二四)

(題知らず) 紀貫之

吉野川 岩波高く 行く水の 早くぞ人を 思ひ初めてし (古今・恋一・四七一)

(題知らず) (読人知らず)

吉野川 岩切通し 行く水の 音には立てじ 恋ひは死ぬとも (古今・恋一・四九二)

(題知らず) (読人知らず)

吉野川 水の心は 早くとも 滝の音には 立てじとぞ思ふ (古今・恋三・六五一)

(題知らず) (読人知らず)

逢ふ事は 玉の緒ばかり 名の立つは 吉野の川の 滝つ瀬の如 (古今・恋三・六七三)

(題知らず) 躬恒

吉野川 よしや人こそ 辛からめ 早く言ひてし 事は忘れじ
(古今・恋五・七九四)
(題知らず) 読人知らず

流れては 妹背の山の 中に落つる 吉野の川の よしや世の中
(古今・恋五・八二八)
(題知らず) (読人知らず)

花盛り 未だも過ぎぬに 吉野川 影に映るふ 岸の山吹
(後撰・春下・一二一)
反歌 (人麿)

見れど飽かぬ 吉野の川の 流れても 絶ゆる時なく 行き帰り見む
(拾遺・雑下・五七〇)

春日社歌合とて、人々詠み侍りける時、詠める 顕昭法師
吉野川 水嵩はさしも 増さらじを 青根を越すや 花の白波
(千載・春上・六五)

水辺款冬と言へる心を、詠める 藤原範綱
吉野川 岸の山吹 吹きぬれば 底にぞ深き 色は見えける
(千載・春下・一一四)

(百首の歌奉りし時) 藤原家隆朝臣
吉野川 岸の山吹 咲きにけり 峰の桜は 散り果てぬらむ
(新古今・春下・一五八)

五十首の歌奉りけるに 嘉陽門院越前
吉野川 激つ岩根の 藤の花 手折りて行かむ 波は掛くとも
(新勅撰・春下・一三二)

寛喜元年、女御入内屏風 前関白
吉野川 川波高く 禊して 白木綿花の 数増さるらし
(新勅撰・夏・一九一)

家の歌合に 後京極摂政前太政大臣
吉野川 早き流れを 堰く岩の つれなき中に 身を砕くらむ
(新勅撰・恋一・六九五)

恋の歌数多詠み侍りけるに 藤原頼氏朝臣
つれなさの 例はありと 吉野川 いはど柏を 洗ふ白波
(新勅撰・恋一・六九六)

正治の百首の歌奉りける時 式子内親王
今はただ 風をも言はじ 吉野川 岩越す花の 柵もがな
(続後撰・春下・一三七)

(題知らず) 郁芳門院安芸
水上に 桜散るらし 吉野川 岩越す波の 花と見えつつ
(続後撰・春下・一三九)

亭子院歌合せに 延喜御製
水底に 春や来るらん み吉野の 吉野の川に 蛙鳴くなり
(続後撰・春下・一五〇)

家に五十首の歌詠み侍りける時、河款冬
二品法親王道助
吉野川 言はで移るふ 山吹に 春の日数を 知らせ顔なる
(続後撰・春下・一五二)

三月尽の心を 土御門院御製
吉野川 返らぬ春も 今日ばかり 花の柵 掛けてだに堰け
(続後撰・春下・一六五)

堀川院御時、百首の歌奉りける時、霧 権大納言師頼
吉野川 辺りも見せぬ 夕霧に 梁瀬の波の 音のみぞする
(続後撰・秋中・三一五)

建仁元年八月十五夜、和歌所の撰歌合に、
河月似氷と言へる事を 嘉陽門院越前
月影は 氷と見えて 吉野川 岩越す波に 秋風ぞ吹く
(続後撰・秋中・三四二)

人に賜はせける 延喜御製
世々を経て 絶えじとぞ思ふ 吉野川 流れて落つる 滝の白糸 (続後撰・恋三・七九二)

(題知らず) 基俊法師
吉野川 其其や村雨 降りぬらん 岩間に激つ 音響むなり (続後撰・雑上・一〇一七)

述懐の歌の中に 雅成親王

世の中は 淵瀬もあるを 吉野川 我のみ深き 水層なりけり (続後撰・雑中・一一七〇)
(花の歌の中に) 祝部成茂

吉野川 花にも水や 増さるらむ 散れば落ち添ふ 滝の白波 (続古今・春下・一五八)
弘長三年十二月、内裏にて、三首の歌講せ

られけるに、同じ心《河水》を 中納言為氏
吉野川 激つ川風 音冴えて いはど柏に 凍る白波 (続古今・冬・六三二)
(題知らず) 慈鎮大僧正

我が涙 吉野の川の よしされば 妹背の山の 中に流れよ (続古今・恋一・一〇二二)
亭子院より、世々を経て、絶えじとぞ思ふ、と

言ふ御歌を奉らせ給ひたりける御返し 延喜御製
末絶えぬ 吉野の川の 水上や 妹背の山の 中を行くらん (続古今・雑中・一六六〇)
大峰通るとて、詠み侍りける 僧正行意

七度の 吉野の川の 身を尽くし 君が八千代の 験ともなれ (続古今・賀・一九〇五)
建保二年、詩歌合に、河上花 順徳院御製

吉野川 雪消の水の 春の色に 誘ふともなき 花の下風 (続拾遺・春下・一一六)
春の歌の中に 従二位行家

吉野川 滝の上なる 山桜 岩越す波の 花と散るらし (続拾遺・春下・一一七)
道助親王家の五十首の歌の中に、河款冬 正三位知家

吉野川 折られぬ水に 袖濡れて 波に映ろふ 岸の山吹 (続拾遺・春下・一三五)
水辺落花と言へる心を 藤原泰綱

吉野川 峰の桜の 移り来て 淵瀬も知らぬ 花の白波 (続拾遺・雑春・五一五)
河五月雨 藤原景家

浅き瀬は 徒波添へて 吉野川 淵さへ騒ぐ 五月雨の頃 (続拾遺・雑春・五五〇)
(題知らず) 正三位知家

落ち激つ 吉野の川や 妹背山 辛きが中の 涙なるらん (続拾遺・恋五・一〇九三)
題知らず 後九条内大臣

吉野川 激つ岩波 木綿掛けて 古里人や 禊しつらむ (新後撰・夏・二四九)
建保五年、内裏歌合に、冬河風 光明峰寺入道前摂政左大臣

吉野川 清き河内の 山風に 凍らぬ滝も 夜は冴えつつ (新後撰・冬・四八六)
冬の歌の中に 前僧正実伊

吉野川 岩切り落つる 滝つ瀬の 何時の淀みに 凍り初むらむ (新後撰・冬・四八七)
無量寿経四十八願の心を、詠み侍るに、聞名具徳願 権少僧都俊誉

吉野川 花の岩波 冬に立てて 寄る瀬を春の 泊とぞ聞く (新後撰・釈教・六五八)
(暮山の心を) 西園寺入道前太政大臣

今はとて 桜流るる 吉野山 水の春さへ 堰く方もなし (玉葉・春下・二七四)
題知らず 権大納言為家

落ち激つ 音には立てじ 吉野川 水の心は 湧き返るとも (玉葉・恋一・一二五九)
妹のをかしきを見て、書き付けて侍りける 参議篁

中に行く 吉野の川の 褪せななん 妹背の山を 越えて見るべく (玉葉・恋一・一二七七)

返し

参議峰守朝臣女

妹背山 影だに見えで 止みぬべく 吉野の川は 濁れとぞ思ふ (玉葉・恋一・一二七八)

(題知らず)

前内大臣通

吉野川 花の柵 掛けてけり 尾上の桜 今や散るらん (続千載・春上・一五二)

(題知らず)

津守国平

我が涙 よしや吉野の 川となれ 妹背の山の 影や映ると (続千載・恋二・一二五五)

題知らず

元証上人

ありとても 憂き身はよしや 吉野川 早く此世を 厭ひ果てん

(続千載・雑下・一九九六)

花満山河と言ふ事を 光明峰寺入道前撰政左大臣

吉野川 岩本桜 咲きにけり 峰より続く 花の白波

(続後拾遺・春上・七二)

河花を、詠ませ給うける

御製

吉野川 波さへ花の 匂ひにて 影見る水の 春風ぞ吹く

(続後拾遺・春下・八七)

落花を、詠める

前大納言経継

常磐なる 色とも見えず 吉野川 いはど柏の 花の白波

(続後拾遺・春下・一一七)

恋の歌の中に

贈従三位為子

吉野川 渡りて後の 如何ならん 無き名だにこそ 早流るなれ

(続後拾遺・恋一・六七四)

嘉元の百首の歌召しける次に、河 (後宇多院御製)

吉野川 よしとは誰れか 岩波の 高き昔の 道慕へども

(続後拾遺・雑下・一一四五)

(春の歌の中に)

法印定円

吉野川 岩波払ふ 伏柳 早くぞ春の 色は見えける

(風雅・春中・一〇〇)

水上落花と言ふ事を

従三位頼政

吉野川 岩瀬の波に 寄る花や 青根が峰に 消ゆる白雪

(風雅・春下・二五六)

春の御歌の中に

後鳥羽院御歌

吉野川 桜流れし 岩間より 移れば変はる 山吹の色

(風雅・春下・二七四)

題知らず

読人知らず

春風に 霞流れて 吉野川 水の上行く 花の白波

(新千載・春下・一五九)

(題知らず)

正三位知家

吉野川 落つる白泡の 消え返り 残るも辛き 花の色かな

(新千載・春下・一六〇)

嘉元元年、百首の歌奉りける時、

同じ心(款冬)を 後照念院関白太政大臣

吉野川 早瀬の波に 影見えて 花も岩越す 岸の山吹

(新千載・春下・一七六)

題知らず

順徳院御製

吉野川 いはど柏の 初時雨 常磐の色は 今朝もつれなし

(新千載・冬・五九七)

題知らず

行念法師

妹背山 渡らぬ中の 吉野川 誰が為変はる 恋の淵瀬ぞ

(新千載・恋三・一三一九)

河上落花と言ふ事を

前参議教長

吉野川 花の白波 流るめり 吹きにけらしな 山嵐の風

(新拾遺・春下・一五六)

百首の歌奉りし時

関白前左大臣

吉野川 岩打つ波の 高ければ 咲ける山吹 散らまくも惜し

(新拾遺・春下・一七五)

(百首の歌奉りし時、夏祓)

前内大臣実

波掛くる 袂も涼し 吉野川 祓にやがて 秋や来ぬらん

(新拾遺・夏・三〇八)

百首の歌奉りし時、氷 右兵衛督為遠

冴ゆる夜は 凍るも早し 吉野川 岩切り通す 水の白波 (新拾遺・冬・六四〇)

(恋の歌の中に) 大藏卿隆博

我が袖に ありとや言はん 吉野川 絶えず落つなる 滝の水上 (新拾遺・恋一・九三六)

(恋の歌の中に) 読人知らず

浅き瀬ぞ 波は立つらん 吉野川 深き心を 君は知らずや (新拾遺・恋一・九三七)

恋の歌の中に 平親清女

憂き事も 幾夜かあらん 吉野川 よしや人も 今は恨みじ (新拾遺・恋五・一三六二)

滝氷を 藤原長秀

吉野川 滝つ流れも 凍るなり 山下風や 冴え増さるらむ (新拾遺・雑上・一六九二)

嘉元の百首の歌召しける次に、款冬 後宇多院御製

散る花の 形見もよしや 吉野川 あらぬ色香に 咲ける山吹 (新後拾遺・春下・一四八)

題知らず 前中納言匡房

吉野川 流れて過ぐる 年毎に 立ち居の影も 暮れにけるかな (新後拾遺・冬・五七一)

(題知らず) 源頼貞

峰に立つ 雲も分かれて 吉野川 嵐の増さる 花の白波 (新後拾遺・雑春・六三四)

(題知らず) 法眼頼英

吉野川 いはど柏の 色変へて 花散り掛かる 岸の山吹 (新後拾遺・雑春・六四五)

河五月雨 為冬朝臣

吉野川 水の心も 今更に 早さ知らるる 五月雨の頃 (新後拾遺・雑春・六八四)

建保四年、百首の歌に 前中納言定家

吉野川 いはど柏の 越す波の 常磐堅磐ぞ 我が君が御代 (新後拾遺・慶賀・一五三四)

弘安元年、百首の奉りける時 式乾門院御匣

吉野川 氷溶け行く 春風に 現はれ初むる 波の初花 (新統古今・春上・四一)

(正治の百首の歌奉りける時、氷を)

後京極摂政前太政大臣

吉野川 滝の白波 氷して 岩根に落つる 峰の松風 (新統古今・冬・六五六)

後小松院にて、人々題を探りて五十首の歌仕う

まつりけるに、寄波恋を 成恩寺関白前左大臣

知らせばや 己砕けて 吉野川 岩打つ波の 言はぬ思ひを (新統古今・恋一・一〇六二)

有妨恋と言ふ事を 神祇伯頭仲母

君だにも 堰き止めずは 吉野川 流れて早く 澄みもしてまし

(新統古今・恋四・一三八四)

款冬を 源顕氏朝臣

吉野川 早くも春の 行く水に 影さへ映る 山吹の花 (新統古今・雑上・一六五三)

題知らず 雄運法師

吉野川 よしやと思ふ この世をも 渡りかねては また嘆くかな

(新統古今・雑中・一九二八)

百首の御歌の中に、独述懐と言ふ事を、詠ませ給うける

後小松院御製

蜻蛉羽の 姿の国と… 色をも香をも 白波の 吉野の川に 水隠るる…

(新統古今・雑下・二〇四四)

【吉野山(嶽)】(大和)

●玄々集……二例

はじめの春

吉野山 峰の白雪 いつ消えて 今朝は霞の 立ちかくすらん (源重之・二九)
年を経て 吉野の山に 住みなれし 目にめずらしき 今朝の白雪 (藤原義忠・一六五)

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…一一五例

題知らず

読人知らず

春霞 立てるや何処 吉野の山に 雪は降りつつ (古今・春上・三)

(題知らず)

(読人知らず)

夕されば 衣手寒し み吉野の 吉野の山に み雪降るらし (古今・冬・三一七)

(題知らず)

(読人知らず)

古里は 吉野の山し 近ければ 一日もみ雪 降らぬ日はなし (古今・冬・三二一)

大和に侍りける人に、遣はしける (貫之)

越えぬ間は 吉野の山の 桜花 人伝てにのみ 聞き渡るかな (古今・恋二・五八八)

冬の長歌

凡河内躬恒

千早振る 神無月とや… 古里の 吉野の山の 山嵐も… (古今・雑体・一〇〇五)

(題知らず)

左大臣

唐土の 吉野の山に 籠るとも 遅れむと思ふ 我ならなくに (古今・雑体・一〇四九)

法師にならむの心ありける人、大和に罷りて

程久しく侍りて後、相知りて侍りける人の許

より、月来は如何にぞ、花は咲きたりや、

と言ひて侍りければ (読人知らず)

み吉野の 吉野の山の 花桜 白雲とのみ 見え紛ひつつ (後撰・春下・一一七)

女に、遣はしける

贈太政大臣

一向に 厭ひ果てぬる ものならば 吉野の山に 行く方知られじ (後撰・恋四・八〇八)

題知らず

(読人知らず)

数ならぬ 身を持荷にて 吉野山 高き歎きを 思ひ懲りぬる (後撰・雑二・一一六七)

返し

(読人知らず)

吉野山 越えん事こそ 難からめ 懲らぬ歎きの 数は知りなん (後撰・雑二・一一六八)

冷泉院、東宮に御座しましける時、歌奉れ、

と仰せられければ 源重之

吉野山 峰の白雪 何時消えて 今朝は霞の 立ち代はるらん (拾遺・春・四)

題知らず

中務

吉野山 絶えず霞の 棚引くは 人に知られぬ 花や咲くらん (拾遺・春・三七)

題知らず

読人知らず

吉野山 消えせぬ雪と 見えつるは 峰続き咲く 桜なりけり (拾遺・春・四一)

初雪を、詠める

源景明

都にて 珍しと見る 初雪は 吉野の山に 降りやしぬらん (拾遺・冬・二四三)

題知らず

能宣

我が宿の 雪に付けてぞ 古里の 吉野の山は 思ひ遣らるる (拾遺・冬・二四七)

入道撰政家屏風に

兼盛

見渡せば 松の葉白き 吉野山 幾代積もれる 雪にかあるらん (拾遺・冬・二五〇)

御嶽に、年老いて詣で侍りて 元輔

古へも 上りやしけん 吉野山 山より高き 齢なる人 (拾遺・雑下・五六三)

遠山桜と言ふ心を、詠める 藤原清家

吉野山 八雲立つ峰の 白雲に 重ねて見ゆる 花桜かな (後拾遺・春下・一二一)

花薫風と言へることを、詠める 撰政左大臣

吉野山 峰の桜や 咲きぬらん 麓の里に 匂ふ春風 (金葉・春・二九)

人々桜の歌十首詠ませ侍りけるに、詠める 修理大夫顕季

桜花 咲きぬる時は 吉野山 立ちも昇らぬ 峰の白雲 (金葉・春・四七)

遙見山花と言へる事を、詠める 藤原忠隆

吉野山 峰に波寄る 白雲と 見ゆるは花の 梢なりけり (金葉・春・五二)

堀河院御時、花の散りたるを搔き集めて、大

なるものの蓋に山の形に積ませ給ひて、中宮の

御方に奉らせ給ひたりけるを、宮の御覧じて、

歌詠め、と仰言ありければ 御匣殿

桜花 雲掛かるまで 搔き集めて 吉野の山と 今日は見るかな (金葉・春・六五)

山里に人々罷りて、花の歌詠みけるに、詠める

源定信

皆人は 吉野の山の 桜花 折知らぬ身や 谷の埋れ木 (金葉・雑上・五二三)

(同じ〔京極前太政大臣家〕歌合に、詠める)

大藏卿匡房

白雲と 見ゆるに著し み吉野の 吉野の山の 花盛りかも (詞花・春・二二)

大和守にて侍りける時、入道前太政大臣の

許にて、初雪を見て、詠める 藤原義忠朝雄身

年を経て 吉野の山に 見馴れたる 目に珍しき 今朝の初雪 (詞花・冬・一五四)

堀河院御時、百首の歌奉りけるに、詠める 修理大夫顕季

我が恋は 吉野の山の 奥なれや 思ひ入れども 逢ふ人もなし (詞花・恋上・二二二)

(花の歌とて、詠める) 藤原為業法名寂念

吉野山 花の盛りに なりぬれば 立たぬ時なき 峰の白雲 (千載・春上・七〇)

百首の歌奉りける時、花の歌とて、詠める 藤原季通朝臣

吉野山 花は半ばに 散りにけり 絶え絶え残る 峰の白雲 (千載・春下・八〇)

吉野の滝を、詠み侍りける 中納言経忠

白雲に 紛ひやせまし 吉野山 落ち来る滝の 音せざりせば (千載・雑上・一〇三四)

(題知らず) 西行法師

吉野山 桜が枝に 雪散りて 花遅げなる 年にもあるかな (新古今・春上・七九)

花の歌とて、詠み侍りける 西行法師

吉野山 去年の枝折りの 道変へて 未だ見ぬ方の 花を訪ねん (新古今・春上・八六)

題知らず 藤原家衡朝臣

吉野山 花や盛りに 匂ふらむ 古里沓えぬ 峰の白雪 (新古今・春上・九二)

春日社歌合とて、人々詠み侍りけるに 刑部卿頼輔

散り紛ふ 花の余所目は 吉野山 嵐に騒ぐ 峰の白雲 (新古今・春下・一三二)

残春の心を 撰政太政大臣

吉野山 花の古里 跡絶えて 空しき枝に 春風ぞ吹く (新古今・春下・一四七)

(題知らず)

従三位頼政

今宵誰れ 篠吹く風を 身に染めて 吉野の嶽に 月を見るらん (新古今・秋上・三八七)
世を遁れて後、百首の歌詠み侍りけるに、花の歌とて

皇太后宮大夫俊成

今は我 吉野の山の 花をこそ 宿のものとも 見るべかりけれ

(新古今・雑上・一四六六)

題知らず

西行法師

吉野山 やがて出でじと 思ふ身を 花散りなばと 人や待つらむ

(新古今・雑中・一六一九)

(題知らず)

権中納言長方

花故に 踏み馴らすかな み吉野の 吉野の山の 岩の懸道

(新勅撰・春上・五四)

(家に花の五十首の歌詠ませ侍りける時) 寂連法師

如何ばかり 花咲きぬらむ 吉野山 霞に余る 峰の白雲

(新勅撰・春上・五九)

山花未落と言へる心を、詠み侍りける 橋俊綱朝臣

未だ散らぬ 桜なりけり 古里の 吉野の山の 峰の白雲

(新勅撰・春下・七七)

冬の月を、詠み侍りける 左兄大夫頭輔

雪深き 吉野の山の 高嶺より 空さへ冴えて 出づる月影

(新勅撰・冬・四二〇)

花の歌詠み侍りけるに

前大僧正慈円

吉野山 なほ霜置くに 花咲かば また懂るる 身とやなりなむ

(新勅撰・雑一・一〇五一)

年の内に春立つ心を、詠み侍りける 皇太后宮大夫俊成

年の内に 春立ちぬとや 吉野山 霞掛かれる 峰の白雲

(続後撰・春上・一)

後京極摂政家の花の五十首の歌の中に 前中納言定家

桜花 咲きにし日より 吉野山 空も一つに 薫る白雲

(続後撰・春中・七四)

十首の歌合に、山桜

太上天皇

見てもなほ 奥ぞゆかしき 葦垣の 吉野の山の 花の盛りは

(続後撰・春中・七八)

正治の百首の歌奉りけるに

皇太后宮大夫俊成

名に高き 吉野の山の 花よりや 雲に桜を 紛へ初めけむ

(続後撰・春中・九一)

名所花と言ふ事を

藤原隆祐朝臣

吉野山 一つに見えし 花の色の 移ろひ変はる 峰の白雲

(続後撰・春中・一〇七)

花の歌の中に

藤原雅有朝臣

吉野山 花より奥の 白雲や 重なる峰の 桜なるらん

(続古今・春上・九四)

日吉社へ五十首の御歌奉られけるに 後鳥羽院御歌

吉野山 桜に掛かる 夕霞 花も朧の 色はありけり

(続古今・春下・一二八)

修行し侍りける時、月を見て 僧正行意

今宵我 吉野の嶽の 高嶺にて 雲も及ばぬ 月を見るかな

(続古今・秋上・四〇三)

守覚法親王家に五十首の歌詠み侍りける時

皇太后宮大夫俊成

吉野山 花の盛りや 今日ならむ 空さへ匂ふ 峰の白雲

(続拾遺・春下・七五)

弘長三年、内裏の百首の歌奉りし時、

同じ心へ山花を 前大納言為氏

吉野山 幾世の春か 経りぬらん 尾上の花を 雲に紛へて

(続拾遺・春下・八三)

(題知らず)

西行法師

吉野山 人に心を 付け顔に 花より先に 掛かる白雲

(新後撰・春上・五四)

題知らず

太上天皇

吉野山 尾上の桜 咲きぬれば 絶えず棚引く 花の白雲

(新後撰・春下・七〇)

山花を、詠ませ給うける 今上御製

吉野山 空も一つに 匂ふなり 霞の上の 花の白雲

(新後撰・春下・七三)

宝治元年、十首の歌合に、山花 万里小路右大臣

吉野山 峰に棚引く 白雲の 匂ふは花の 盛りねりけり

(新後撰・春下・七八)

山花似雲と言ふ心を 前大納言兼宗

吉野山 峰立ち隠す 雲かとして 花故花を 恨みつるかな

(新後撰・春下・八七)

光明峰寺入道前撰政家歌合に、雲間花 藤原光俊朝臣

吉野山 棚引く雲の 跡絶えとも 外には見えぬ 花の色かな

(新後撰・春下・八八)

守覚法親王家に、五十首の歌詠み侍りける時 寂連法師

木の本を 訪ねぬ人や 吉野山 雲とは花の 色を見るらむ

(新後撰・春下・八九)

(花の歌の中に)

権中納言長方

いざさらば 吉野の山の 山守と 花の盛りは 人に言はれむ

(新後撰・春下・九八)

家に五十首の歌詠み侍りけるに 後京極撰政前太政大臣

驚の山 御法の庭に 散る花を 吉野の峰の 嵐にぞ見る

(新後撰・积教・六三三)

金剛般若経、不応取法不応取非法 法印定円

吉野山 分きて見るべき 色もなし 雲も霞も 春風ぞ吹く

(新後撰・积教・六八四)

弘安元年、百首の歌奉りし時 二品法親王覚助

契りあらば またや訪ねん 吉野山 露分け侘びし 篠の下道 (新後撰・雑中・一三七五)

雪の歌、数多詠み侍りける中に 光明峰寺入道前撰政左大臣

時雨れつる 外山の里の 冴ゆる夜は 吉野の嶽に 初雪や降る

(玉葉・冬・九四五)

題知らず

皇太后宮大夫俊成

雪降れば 道絶えにけり 吉野山 花をば人の 訪ねしものを

(玉葉・冬・九九四)

(帰雁の心を)

中宮

吉野山 峰飛び越えて 行く雁の 翼に掛かる 花の白雲

(続千載・春上・五九)

正治の百首の歌奉りける時 宜秋門院丹後

吉野山 霞の上に 居る雲や 峰の桜の 梢なるらん

(続千載・春上・八〇)

山花と言へる心を 談天門院

吉野山 紛ふ桜の 色ならば 外にや見まし 峰の白雲

(続千載・春下・九三)

百首の歌奉りし時 権大納言経継

白雲は 立ちも分かれで 吉野山 花の奥より 明くる東雲

(続千載・春下・九八)

嘉元の百首の歌奉りし時、花 津守国冬

桜花 散り残るらし 吉野山 嵐の跡に 掛かる白雲

(続千載・春下・一六二)

題知らず

後鳥羽院御製

吉野山 曇らぬ雪と 見るまでに 有明の空に 花ぞ散りける

(続千載・春下・一六八)

冬の歌の中に 法印定為

吉野山 峰の嵐も 今よりは 寒く日毎に 積もる白雪

(続千載・冬・六五七)

(題知らず)

西行法師

吉野山 麓に降らぬ 雪ならば 花かと見てや 訪ね入らまし

(続千載・冬・六七一)

(題知らず)

源重泰

吉野山 同じ桜の 色ながら 折られぬ花や 峰の白雲

(続千載・雑上・一六七四)

嘉元の百首の歌奉りし時、雪 二品法親王覚助

降る雪も 幾重か埋む 吉野山 見しは昔の 篠の下道 (続千載・雑上・一八〇三)

弘安の百首の歌奉りける時 静仁法親王

老いの身に 吉野の峰の 篠分けて 憂き世を出づる 道は知りなき

(続千載・雑下・二〇一一)

春の初めの歌 源信明朝臣

吉野山 雪には跡の 絶えにしを 霞ぞ春の 導なりける (続後拾遺・春上・四)

題知らず 読人知らず

吉野山 霞立ちぬる 今日よりや 朝の原は 若菜摘むらん (続後拾遺・春上・二〇)

題知らず 藤原為道朝臣

桜花 咲きぬと見えて 吉野山 ありしにもあらぬ 雲ぞ掛かれる (続後拾遺・春上・六九)

花の歌の中に 西行法師

吉野山 梢の花を 見し日より 心は身にも 添はずなりにき (続後拾遺・春下・一〇一)

童友だちにて、語らひ侍りける人、頭剃して後、

嵐のいみじう吹き侍りける頃、芳野山に罷りた

りと聞きて、遣はしける 山田法師

吉野山 紅葉の色や 如何ならん 外の嵐の 音ぞ激しき (続後拾遺・雑上・一〇三九)

(春の歌の中に) 紀貫之

み吉野の 吉野の山の 春霞 立つを見る見る なほぞ雪降る (風雅・春上・三二)

(春の歌に) 従二位家隆

行末の 花かかれとて 吉野山 誰れ白雲の 種を播きけん (風雅・春中・一五四)

百首の歌奉りし時、春の歌 覚誉法親王

吉野山 花の為にも 訪ねばや 未だ分け初めぬ 篠の下道 (風雅・雑上・一四五五)

大梅山別伝院に御幸侍りける時、僧問雲門、

樹凋葉落時如何、雲門云、体露金風と言ふ

因縁を頌せさせ給ひける次に 院御歌

竜田川 紅葉葉流る み吉野の 吉野の山に 桜花咲く (風雅・釈教・二〇七三)

春の初めの歌 衣笠前内大臣

消え敢へぬ 何時の雪間に 春の来て 吉野の山の 先づ霞むらん (新千載・春上・二)

嘉元元年、同じく(後宇多院に)奉りける

百首の歌に、霞を 贈従三位為子

春来れば 霞の色に 染めてけり 吉野の山の 滝の白糸 (新千載・春上・七)

山花と言へる事を、詠ませ給うける 後鳥羽院御製

吉野山 雲居に見ゆる 滝の糸の 絶えぬや花の 盛りなるらむ (新千載・春下・一〇四)

弘安の百首の歌奉りける時 後九条前内大臣

訪ねても 誰れかは分かむ 吉野山 花より花の 奥の白雲 (新千載・春下・一一九)

正中の百首の歌奉りける時 二品法親王覚助

冬籠る 吉野の嶽に 降る雪を 誰れ有明の 月とだに見ん (新千載・冬・七一一)

元亨三年八月、内裏にて上の男ども題を

探りて歌仕うまつりける時、月前雪と言

へる事を 按察使公敏

花を見し 面影去らで 吉野山 月に磨ける 峰の白雪 (新千載・冬・七一二)

冬の歌として、詠める 前大納言俊定

並べて咲く 花かとぞ見る 吉野山 梢を分かず 降れる白雲 (新千載・冬・七一三)

(題知らず) 藤原景綱

花にのみ なほ分け入れば 吉野山 また跡埋む 峰の白雲 (新千載・雑上・一六九六)

(題知らず) 大江頼重

吉野山 散りぬる花の 形見さへ 跡なき雲に 春風ぞ吹く (新千載・雑上・一七二二)

(題知らず) 藤原基俊

立つ日より 花と見よとて 吉野山 雪の梢に 春や来ぬらん (新拾遺・春上・六)

東三条入道撰政治家賀屏風に 大中臣能宣朝臣

雪も降り 霞も立てる 吉野山 何方をかは 春と頼まむ (新拾遺・春上・二八)

春の歌とて、詠める 一条院讃岐

日に添へて 立ちぞ重なる み吉野の 吉野の山の 花の白雲 (新拾遺・春下・九八)

(題知らず) 源重之

吉野山 麓の桜 散りぬらし 立ちも昇らで 消ゆる白雲 (新拾遺・春下・一四六)

文永二年、白河殿にて、人々題を探りて七百首の

歌仕うまつりける次に、暁花 後嵯峨院御製

これもまた 有明の影を 見ゆるかな 吉野の山の 花の白雪 (新拾遺・春下・一六三)

(題知らず) 読人知らず

花咲かぬ 梢と見しは 吉野山 春に遅るる 桜なりけり (新拾遺・夏・一九九)

文保の百首の歌奉りける時 津守国冬

吉野山 雪降り果てて 年暮れぬ 霞みし春は 昨日と思ふに (新拾遺・冬・六七二)

得未曾有非本所望 法印房観

予ねて我が 思ひしよりも 吉野山 なほ立ち増さる 花の白雲 (新拾遺・釈教・一四五七)

百首の歌奉りし時、花 前中納言有光

朝朗け 積もれる雪と 見るまでに 吉野の山は 花咲きにけり (新拾遺・雑上・一五四五)

正治二年、後鳥羽院に百首の歌奉りける時 後京極摂政前太政大臣

吉野山 今年も雪の 古里に 松の葉白き 春の曙 (新後拾遺・春上・八)

霞間花と言ふ事を、詠ませ給うける 伏見院御製

桜花 咲けるや何処 み吉野の 吉野の山は 霞籠めつつ (新後拾遺・春上・七七)

(題知らず) 道命法師

吉野山 花の下伏し 日数経て 匂ひぞ深き 袖の春風 (新後拾遺・春下・八四)

(題知らず) 惟明親王

吉野山 嵐や花を 渡るらん 梢に薫る 春の夜の月 (新後拾遺・春下・一〇九)

(題知らず) 津守国助

吉野山 奥より積もる 白雪の 古里近く なり増さるかな (新後拾遺・冬・五四三)

(題知らず) 津守国量

古里に 間近ければや 葦垣の 吉野の山と 名にし負ふらん (新後拾遺・雑上・一二七四)

(題知らず) 津守量夏

世を背く 山は吉野と 聞きながら 心の奥に 何時導せん (新後拾遺・雑上・一三二三)

住吉社に奉りける三十首の歌に、山花を 儀同三司資

(題知らず)

津守量夏

新後拾遺・雑上・一二七四

新後拾遺・雑上・一三二三

新後拾遺・春上・二八

新拾遺・春下・九八

新拾遺・春下・一六三

新拾遺・夏・一九九

新拾遺・冬・六七二

吉野山 滝の白糸 繰り返し 見てしも飽かぬ 花の色かな (新統古今・春下・一三二)

家の百首の歌に、囊を 後京極撰政前太政大臣

風寒み 今日も曇の 古里は 吉野の山の 雪消なりけり (新統古今・冬・六八五)

百首の御歌の中に、雪を 土御門院御製

吉野山 今朝降る雪や 積もるらん 入りにし人の 跡だにもなし

(新統古今・冬・七〇〇)

新玉津島社の三十首の歌に、雪 前大僧正良瑜

消ぬが上に なほ降り頻きて 吉野山 雪さへ深き 岩の懸道 (新統古今・冬・七〇六)

正治の百首の歌の中に 従二位家隆

嵐吹く 篠の下草 未枯れて 吉野の山に 時雨降るなり (新統古今・雑上・一七五三)

【和歌の浦】(紀伊)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一六〇例

頼国朝臣紀伊守にて侍りける時、言ふべき事ありて

罷りて侍りけるを、殊更にも言はざりければ、

詠み侍りける

老いの波 寄せじと人は 厭へども、待つらんものを 和歌の浦には

(後拾遺・雑五・一一三二)

堀河院御時、中宮の女房たちを、亮仲実、紀伊守に

侍りける時、和歌の浦見せん、とて誘ひければ、

数多罷りけるに、罷らで、遣はしける 前中宮甲斐

人並みに 心ばかりは 立ち添ひて 誘はぬ和歌の 浦見をぞする (金葉・雑上・五七八)

修理大夫顕季美作守に侍りける時、人々誘ひて右近の

馬場に罷りて、郭公待ち侍りけるに、俊子内親王の女

房二車詣で来て、連歌し歌詠みなどして、曙に帰り侍

りけるに、かの女房の車より 俊子内親王の女房

美作や 久米の佐良山と 思へども 和歌の浦とぞ 言ふべかりける

(詞花・雑上・二八三)

この返しせよと言ひ侍りければ、詠める 贈左大臣

和歌の浦と 言ふにて知りぬ 風吹けば 波の立ち来と 思ふなるべし

(詞花・雑上・二八四)

和歌の浦を、読み侍りける 祝部宿禰成仲

行く年は 波と共にや 帰るらん 面変はりせぬ 和歌の浦かな (千載・雑上・一〇五一)

和歌所の開闢になりて初めて参りし日、奏し侍りし 源家長

藻塩草 書くとも尽きじ 君が代の 数に読み置く 和歌の浦波 (新古今・賀・七四一)

八月十五夜、和歌所にて、男ども歌仕うまつり侍りしに

民部卿範光

和歌の浦に 家の風こそ なければども 波吹く色は 月に見えけり

(新古今・雑上・一五〇六)

和歌所歌合に、海辺月と言ふ事を 前大僧正慈円

和歌の浦に 月の出潮の 差すままに 夜鳴く鶴の 声ぞ哀しき

眺望の心を、詠める

寂蓮法師

(新古今・雑上・一五五六)

和歌の浦を 松の葉越しに 眺むれば 梢に寄する 海人の釣舟

(新古今・雑中・一六〇三)

(和歌所にて、述懐の心を)

家隆朝臣

和歌の浦や 沖つ潮会ひに 浮かぶ出づる 哀れ我が身の 寄る辺知らせよ

(新古今・雑下・一七六一)

上の男ども、海辺月と言へる心を、仕うまつり

ける次に

御製

和歌の浦 葦辺の鶴の 鳴く声に 夜渡る月の 影ぞ久しき

(新勅撰・秋上・二七一)

題知らず

法眼宗円

和歌の浦に 知られぬ海人の 藻塩草 弄びばかりに 朽ちや果てなむ

(新勅撰・雑二・一一九五)

(題知らず)

行念法師

藻塩草 書き置く跡や 如何ならむ 我が身に寄らぬ 和歌の浦波

(新勅撰・雑二・一一九六)

返し

西行法師

和歌の浦に 塩木重ぬる 契りをば 書ける炊く藻の 跡にてぞ見る

(新勅撰・雑二・一一九八)

百首の歌奉りし時、潟千鳥

前太政大臣

和歌の浦や 潮干の潟に 住む千鳥 昔の跡を 見るも畏し

(続後撰・雑上・一〇二六)

題知らず

正三位知家

和歌の浦の 四方の藻屑を 書き置きて 海人の仕業の 程や知られん

(続後撰・雑中・一一四六)

歌を贈りて侍りし奥に、書き付けて侍りし 藤原為綱朝臣

和歌の浦 隔てし跡の 藻塩草 かく数ならで またや朽ちなん

(続後撰・雑中・一一四八)

為家参議のとき、八代集の作者、四位

以下の伝記してと申し侍りしを、送り遣

はすとて、書き添へて侍りし 中原師季

藻塩草 書き集めても 甲斐ぞなき 行く方も知らぬ 和歌の浦風

(続後撰・雑中・一一四九)

(題知らず)

後京極摂政前太政大臣

如何ばかり 和歌の浦風 身に染みて 宮始めけん 玉津島姫

(続古今・神祇・七二五)

家隆卿の十三年に、隆祐朝臣勸め侍りける歌に 平時直

鳴く鳴くも 跡訪ふ和歌の 浦千鳥 如何なる波に 立ち別れけん

(続古今・哀傷・一四二七)

神亀元年十月、紀伊国に行幸の時、詠める 山辺赤人

和歌の浦に 潮満ち来れば 潟を無み 葦辺を指して 鶴鳴き渡る

(続古今・雑中・一六三四)

弘長二年、勅撰の事仰せられて後、十首の歌講じ

侍りしに、海辺月を

藤原光俊朝臣

和歌の浦や 知らぬ潮路に 漕ぎ出でて 身に余るまで 月を見るかな

(続古今・雑下・一七三一)

父秀能が歌を書きける時、詠める 藤原秀茂

袖濡らす 形見なりけり 藻塩草 書き置く跡の 和歌の浦波 (続古今・雑下・一七四〇)

返し 太上天皇

和歌の浦に 波寄せ掛くる 藻塩草 書き集めてぞ 玉藻見えける

(続古今・賀・一八九五)

宝治元年、十首の歌合に、海辺月 正三位経朝

和歌の浦や 昔に帰る 波の上に 光遍き 秋の夜の月 (続拾遺・賀・七四一)

文永三年三月、続古今集竟宴の歌 後花山院入道前太政大臣

数々に 磨く玉藻の 現はれて 御代静かなる 和歌の浦波 (続拾遺・賀・七五一)

同じ心(述懐)を 藤原泰朝

和歌の浦に 昔を偲ぶ 浜千鳥 跡思ふとて 音をのみぞ鳴く (続拾遺・雑上・一一一三)

前大納言為宇治、玉津島社にて、歌合し

侍りし時、湖月 権律師定為

和歌の浦の 波の下草 如何にして 月に知らるる 名を残さまし

(続拾遺・雑上・一一一四)

弘長元年、百首の歌奉りける時、述懐 前大納言為家

和歌の浦に 生ひずは如何で 藻塩草 波の仕業も 書き集めまし

(続拾遺・雑上・一一五六)

皇太后宮大夫俊成、前中納言定家書きて侍り

ける草子を、凶らざるに伝へたりけるを、夢

の告げありて、為氏が許に贈り遣はすとて 通洪法師

絶えもせじ 昔の御代の 跡止めて 立ち返りぬる 和歌の浦波

(続拾遺・雑上・一一五七)

続拾遺集奏覧の日、雪の降り侍りければ、前大納言

為氏の許に、申し遣はしける 前関白太政大臣

和歌の浦に 降り積む雪も 今日しこそ 代代に変はらぬ 跡は見ゆらぬ

(新後撰・冬・五二三)

住吉社に詠みて奉りける百首の歌の中に 皇太后宮大夫俊成

和歌の浦の 道をば捨てぬ 神なれば あはれを掛けよ 住吉の波

(新後撰・神祇・七四一)

人々勧めて、玉津島社にて、歌合し侍りけるに、

社頭述懐を 前大納言為家

跡垂れし 本の誓ひを 忘れずは 昔に帰れ 和歌の浦波 (新後撰・神祇・七五七)

百首の歌奉りし時、千鳥 前大納言為世

和歌の浦や 五代重ねて 浜千鳥 七度同じ 跡を付けつる (新後撰・雑上・一三三〇)

三十首の歌召されし次に、浦千鳥 院御製

我が世には 集めぬ和歌の 浦千鳥 祖らしき名をや 跡に残さん

(新後撰・雑上・一三三一)

弘安元年、百首の歌奉りし時

葦原の 跡とばかりは 忍べども 寄る方知らぬ 和歌の浦波 (新後撰・雑中・一三八八)

司召の頃為世参議を望み申すとて、奏し侍りける 前大納言為氏

和歌の浦に 独り老いぬる 夜の鶴の 子の為思ふ 音こそ鳴かるれ

御返し

法皇御製

(新後撰・雑中・一三八九)

和歌の浦に 子を思ふとて 鳴く鶴の 声は雲居に 今ぞ聞こゆる

(新後撰・雑中・一三九〇)

内大臣に侍りける時、法性寺入道関白の例にて、
人々に歌詠ませ侍りけるに、鶴契齡と言ふ事を 前関白太政大臣
和歌の浦や 長く久しき 跡しあれば なほ千代添へて 鶴も鳴くなり

(玉葉・賀・一〇七六)

二条院御歌、中宮の御方に歌合あるべしとて、
清輔朝臣殿上許されて侍りける喜び申し遣は
すとて 太宰大貳重家

和歌の浦に 年経て住みし 葦鶴の 雲居に上る 今日嬉しさ (玉葉・賀・一〇八九)

千載集奏覧の時、入れて侍りける手箱に、葦手に
蒔きたりける歌 皇太后宮大夫俊成

和歌の浦に 千千の玉藻を 書き集めて 万代までも 君が見ん為 (玉葉・賀・一〇九三)

大納言に侍りける時、家に十首の歌人人に詠ませ侍り
けるに、大納言三位歌を贈りて侍りけるを見て、為教
卿の許に、詠みて遣はしける 入道前太政大臣

和歌の浦や 書き置く中の 藻屑にも 隠れぬ玉の 光をぞ見る (玉葉・雑五・二四四九)

返し 前右兵衛督為教

和歌の浦に 道踏み迷ふ 夜の鶴 子の情にぞ 音は鳴かれける (玉葉・雑五・二四五〇)

新後撰集に漏れて侍りける時、貞時朝臣訪ひて
侍りければ 藤原為守

和歌の浦の 友を離れて 小夜千鳥 その数ならぬ 音こそ鳴かるれ (玉葉・雑五・二四五二)

同じ集(新後撰集)に、名を隠して入り侍る事を思ひて 中臣祐臣
和歌の浦に 跡付けながら 浜千鳥 名に現はれぬ 音のみぞ鳴く

(玉葉・雑五・二四五三)

富小路殿、永仁に焼け侍りける時、和歌の草子、
巻物など入りたる箱を人の取り出でて侍りける
を、伝へ取てり内裏に参らすとて、暮れないの
薄様に書きて箱の中なる物に、結び付け侍りける

前関白太政大臣

藻塩火の 煙の末を 頼りにて 暫し立ち寄る 和歌の浦波 (玉葉・雑五・二四五四)

和歌の浦を、詠み侍りける 皇太后宮大夫俊成女
人並みに 君忘れずは 和歌の浦の 入江の藻屑 数ならずとも (玉葉・雑五・二四五五)

持明院殿にて、題を探りて人々歌詠み侍りけるに、
玉と言ふ事を 前参議為相

藻屑にも 光や添はん 和歌の浦や 甲斐ある今日の 玉に混じりて

(玉葉・雑五・二五三三)

名所の歌詠み侍りける中に、和歌の浦を 従三位為子
和歌の浦に 沈む水屑よ 磨かれん 玉の光を 見る由もがな (玉葉・雑五・二五三四)

続古今集撰ばれ侍りける時、撰者、数多加へられ

侍り後、述懐の歌の中に、詠み侍りける 前大納言為家
玉津島 あはれと見ずや 我が方に 吹き絶えぬべき 和歌の浦風

(玉葉・雑五・二五三六)

題知らず

前関白太政大臣家讃岐

和歌の浦や 藻に埋もれし 玉も今 光を添へて 神ぞ見るらし (続千載・神祇・八七一)

(題知らず)

津守国助

和歌の浦に 立てし誓ひの 宮柱 幾世も守れ 敷島の道 (続千載・神祇・八七二)

新後撰集に漏れて、詠める 平貞俊

徒に 心ばかりは 寄すれども 未だ名を掛けぬ 和歌の浦波 (続千載・雑中・一九三一)

為世東に罷れ頃、式部卿親王並びに平貞時朝臣

など、代代の跡に変はらずこの道の師範に定め

られ侍りし時、題を探りて歌詠み侍りけるに、

浦を

藤原景綱

この春ぞ 東に名をば 残しける 代代の跡ある 和歌の浦波 (続千載・雑中・一九三二)

前大納言為氏、続拾遺集撰び侍りて後、石山寺

にて人々に読ませ侍りける歌の中に 惟宗忠景

和歌の浦に またも拾はば 玉津島 同じ光の 数に漏らすな (続千載・雑中・一九三三)

題知らず

藤原忠定朝臣

藻塩草 書く甲斐あらば 和歌の浦に 跡付けぬべき 言の葉もがな

(続千載・雑中・一九三四)

百首の歌召されし次に

法皇御製

集め置く 詞の森 散りもせで 千歳変はらし 和歌の浦松 (続千載・賀・二二三〇)

文永三年三月、続古今集竟宴の歌 前大納言為氏

和歌の浦に 磨ける玉を 拾ひ置きて 古へ今の 数を見るかな (続千載・賀・二二三七)

題知らず

平貞直

甲斐もなき 和歌の浦曲の 藻塩草 書き置くまでを 思ひ出でにせん

(続後拾遺・雑中・一〇八三)

(題知らず)

源高氏

書き捨つる 藻屑なりとも この度は 返らで止まれ 和歌の浦波

(続後拾遺・雑中・一〇八四)

(題知らず)

藤原範秀

数ならぬ 水屑ながらも 和歌の浦の 波に引かれて 名をや掛けまし

(続後拾遺・雑中・一〇八五)

(題知らず)

侍従隆教

憂きにのみ 袖は濡るとも 代代経ぬる 跡をば残せ 和歌の浦波

(続後拾遺・雑中・一〇八七)

(題知らず)

前中納言定資

代代の跡と 思へば和歌の 浦千鳥 迷ふ潟にぞ 音も鳴かれける

(続後拾遺・雑中・一〇八八)

法眼源承患ひ侍りける時、相伝の文台とて送り

遣はして侍りければ

法眼行濟

和歌の浦や 代代に変はらず 住む鶴の 文置く跡を 形見とも見ん

(続後拾遺・雑中・一〇八九)

返し

法眼源承

葦鶴の 代代に文置く 跡なれば 忘れず偲べ 和歌の浦風 (続後拾遺・雑中・一〇九〇)
亀山殿にて、人々七百首の歌仕うまつりける時、
権中納言公雄参りて侍りければ、申し遣はしける
丹波忠守朝臣

和歌の浦に 代代の重ぬる 老いの波 また立ち出づる 道ぞ畏き

(続後拾遺・雑中・一〇九一)

題知らず

藤原長遠

和歌の浦や 雲居を知らぬ 葦鶴は 聞こえん方も 波に鳴くなり

(続後拾遺(異本)・雑中・一三五四)

同じ心(浦千鳥)を

紀行春

跡付けん 方ぞ知られぬ 浜千鳥 和歌の浦曲の 友なしにして (風雅・雑上・一六一二)

皇太后宮大夫俊成、千載集撰び侍りける時、申し

遣はし侍りける 前左兵衛惟方

藻塩草 書き集めたる 和歌の浦の その人並みに 思ひ出でずや

(風雅・雑下・一八三三)

返し

皇太后宮大夫俊成

今もなほ 馴れし昔は 忘れぬを 掛けざらめやは 和歌の浦波 (風雅・雑下・一八三四)

題知らず

平久時

書き集もる 藻屑のみして ある甲斐も 渚に寄する 和歌の浦波

(風雅・雑下・一八三五)

(題知らず)

大江宗秀

和歌の浦に 心を寄せて 年経れど 藻屑ぞ集もる 玉は拾はず (風雅・雑下・一八三六)

賀茂重保が堂の障子に、時の歌詠みどもの形を

描きて、各詠みたる歌を色紙形に書くべき由申

し侍りければ、我も入りたるらん、と尋ね侍り

けるに、位高き人は畏れありて書かぬ由申した

りければ、色紙形書きて遣はすとて 後徳大寺左大臣

和歌の浦の 波の数には 漏れにけり 書く甲斐もなき 藻塩草 (風雅・雑下・一八三七)

宝治の百首の歌奉りける時、浦舟を 前大納言為家

和歌の浦に 身ぞ憂き波の 海人小舟 さすが重なる 踏みな忘れそ

(風雅・雑下・一八四四)

従三位頼政、正下五位に叙して侍りける時、その喜び

言ひ遣はすとて

藤原隆信朝臣

和歌の浦に 立ち上るなる 波の音は 越さるる身にも 嬉しとぞ聞く

(風雅・雑下・一八四五)

返し

従三位頼政

如何にして 立ち上るらん 越ゆべしと 思ひも寄らぬ 和歌の浦波

(風雅・雑下・一八四六)

続古今の竟宴に

冷泉前太政大臣

昔今 拾へる玉も 数々に 光を添ふる 和歌の浦波

(風雅・賀・二一九三)

続千載集に入りて侍る由聞きて、詠める 源宗氏

古へも 跡見ぬ和歌の 浦千鳥 今踏み初めて 名を残すかな

(新千載・冬・六六一)

題知らず

前大僧正道意

君が代に 集むる和歌の 浦千鳥 跡付け初めし 跡を忘るな (新千載・冬・六六二)

人々に百首の歌召されし次に、千鳥を 御製

集め来し 代代の跡とて 浜千鳥 我が名も隠る 和歌の浦波 (新千載・冬・六六三)

(人々に百首の歌召されし次に、千鳥を) 前大僧正賢俊

和歌の浦の 夕波千鳥 立ち返り 心を寄せし 方に鳴くなり (新千載・冬・六六四)

不逢恋の心を、詠ませ給うける 土御門院御製

妹に恋ひ 和歌の浦松 恨みても つれなき色に 年ぞ経にける

(新千載・恋二・一二二三)

元亨三年八月十五夜、後宇多院に、月の五十首の歌

召されける時 前大納言為世

和歌の浦に またこの秋も 名を掛けて 六代まで同じ 月を見るかな

(新千載・雑上・一七七八)

正中二年、百首の歌奉りける時 後照念院関白太政大臣

和歌の浦や 思ひしよりも 浜千鳥 跡付け添ふる 旅ぞ重なる

(新千載・雑上・一八一六)

(千鳥を、詠める) 前僧正道性

立ち帰り 跡を付けても 浜千鳥 来し方慕ふ 和歌の浦波 (新千載・雑上・一八一八)

千鳥を、詠める 入道二品親王尊円

和歌の浦や 道踏み迷ふ 小夜千鳥 跡付けんとは 思はざりしを (新千載・雑上・一八一九)

新後撰集に入り侍りて後、玉葉集に漏れ

侍りければ、詠める 大僧正道順

和歌の浦に ありと知られば 浜千鳥 通はぬ方は 跡付けずとも

(新千載・雑上・一八二〇)

題知らず 藤原頼時

和歌の浦や 道を訪ねて 真鶴の 学ぶる跡に 迷はずもがな (新千載・雑中・一九五四)

建武二年、内裏の千首の歌に題を給はりて詠みて

奉りける時、雑の動物と言ふ事を 津守国夏

和歌の浦や 汀の鶴の 声ばかり 身は下ながら 聞こえ上げつつ

(新千載・雑中・一九五五)

寛喜元年、女御入内屏風に、鶴ある所 従二位家隆

和歌の浦や 入江の葦の 霜の鶴 かかる光に 逢はんとや見し

(新千載・雑中・一九五六)

三十首の御歌の中に 花園院御製

年古りて 世を憂み渡る 葦鶴の なほ立ち交じる 和歌の浦波

(新千載・雑中・一九五七)

新後撰集に初めて名を掛け侍りける時、

詠み侍りける 祝部行氏

今よりは 家の風にぞ 伝ふべき 名を掛け初むる 和歌の浦波

(新千載・雑中・一九七三)

題知らず 権大僧都宋縁

年経ぬる 松は知るらん 昔より 吹き伝へたる 和歌の浦波 (新千載・雑中・一九七四)

(題知らず)

読人知らず

言の葉の 積もらば名をや 掛けまくも 畏き御代の 和歌の浦風

(新千載・雑中・一九七五)

続千載集撰びける頃、御歌を書き集めて、

後醍醐院へ奉らせ給ふとて、書き添へら

れて侍りける 達智門院

玉ならぬ 藻屑ながらも 和歌の浦に 君磨かばと 書き集めつる

(新千載・雑中・一九七六)

百首の歌奉りし時、浦松 徽安門院一条

玉寄する 波も長閑けき 御代なれば 風も正しき 和歌の浦松

(新千載・雑中・一九七九)

後後撰集奏覧の本を伝へ取りて、前大納言

為定の許へ送り侍りし包み紙に、書き付け

侍る歌 等持院贈左大臣

玉もなほ 光添へとて 古への 跡にぞ返す 和歌の浦波 (新千載・雑中・一九八〇)

返し 前大納言為定

和歌の浦の 波に思はぬ 心より 添ふべき玉の 光をぞ見る (新千載・雑中・一九八一)

雑の御歌の中に 後伏見院御製

和歌の浦や 憂き人並の 身も辛し 磨きし玉の 跡の藻屑は (新千載・雑中・一九八二)

前大納言為世、三福寺にて聴聞の次に、歌詠み

侍りける時、述懐 示証上人

名を掛けし 跡を訪ねて 藻塩草 またも漏らすな 和歌の浦波 (新千載・雑中・一九八四)

嘉元の百首の歌奉りける時、同じ心(述懐)を 従二位為子

和歌の浦に 漂ふ名のみ 名ばかりを かけて憂き身の ある甲斐ぞなき

(新千載・雑中・一九八五)

題知らず

前大納言為氏

名を掛けて ある甲斐もがな 和歌の浦に 年経る老いの 波の泡沫

(新千載・雑中・一九八六)

貞和の百首の歌召されし時、読ませ給うける 法皇御製

四つの海 住み難の世の 思ひ出でに 古き返れ 和歌の浦波 (新千載・雑中・一九八七)

百首の歌奉りし時、述懐 等持院贈左大臣

我が方に 和歌の浦風 吹きしより 藻屑も波の 便をぞ待つ (新千載・雑中・一九八八)

同じ心(述懐)を 等持院贈左大臣

我が心 慰む程の 言の葉も なほ寄りかぬる 和歌の浦波 (新千載・雑中・一九八九)

百首の歌奉りし時 大納言顕実母

和歌の浦や その人並に 永らへて 漏れぬ恵みの 身に余りぬる (新千載・雑中・一九九〇)

題知らず

法印淨弁

如何にせん 和歌の浦曲の 濤標 身を立てながら 浅き心を (新千載・雑中・一九九一)

和歌所の寄人に初めて召し加へられて侍りける頃、

詠み侍りける 惟宗光吉朝臣

数ならぬ 我が身の程に 越えてけり 心を掛けし 和歌の浦波

述懐の歌とて、詠める

藤原雅顕

(新千載・雑中・一九九二)

和歌の浦に 通ふばかりの 道はあれど 昔の跡に 踏み迷ふかな

(新千載・雑中・一九九三)

続千載に名を掛けながら、続後拾遺に漏れて侍り

行乗法師

ける頃、浦千鳥と言ふ事を、詠める
和歌の浦や 跡付け初めし 浜千鳥 今は外なる 音をのみぞ鳴く

(新千載・雑中・一九九四)

題知らず

性遵法師

和歌の浦に 揺蕩ふ舟の 綱手縄 引く人あらば 道も迷はじ (新千載・雑中・一九九五)

(題知らず)

法印実清

和歌の浦や 昔の波の 跡にしも 身の浮舟の など迷ふらん (新千載・雑中・一九九六)

久安の百首の歌奉りける時の長歌 大炊御門右大臣

山の辺の： 心に掛けぬ 時もなく 和歌の浦波 うち出でても：

(新千載・雑下・二一三四)

(建仁三年十一月、和歌所にて九十賀賜はりける時、

仕うまつりける)

正三位経家

和歌の浦に 寄る年波を 数へ知る 御代ぞ嬉しき 老いらくの為 (新拾遺・賀・七〇五)

題知らず

法印定熙

和歌の浦に 二度玉を 磨くこそ 明らけき世の 験なりけれ (新拾遺・賀・七二六)

嘉元の百首の歌奉りける時、神祇を 後西園寺入道前太政大臣

和歌の浦に 玉拾ふべき 詔 道をば守らば 神も受くらん (新拾遺・神祇・一四三〇)

百首の歌奉りし時、千鳥 二品法親王尊胤

人並に 名をや掛くとも 和歌の浦に なほ跡慕ふ 友千鳥かな

(新拾遺・雑上・一六九七)

同じ心〈千鳥〉を

信快法師

人知れぬ 音をのみ嘆きて 浜千鳥 跡をぞ託つ 和歌の浦波 (新拾遺・雑上・一六九八)

題知らず

正三位通藤女

和歌の浦に 心を止めて 浜千鳥 跡まで思ふ 音こそ鳴かるれ

(新拾遺・雑上・一六九九)

文保三年、百首の歌奉りける時

前大納言為世

立ち帰り 和歌の浦波 この御代に 老いて二度 名をぞ掛けつる

(新拾遺・雑中・一七五四)

返し

按察使実継

和歌の浦に 年経る鶴の 雲居まで 聞こえ上げける 道ぞ畏き

(新拾遺・雑中・一七七八)

弘安の百首の歌奉りし時

藤原為顕

和歌の浦に 沈み果てにし 捨舟も 今人並の 世に引かれつつ

(新拾遺・雑中・一七九三)

(題知らず)

小槻匡遠

古への 跡ある和歌の 浦千鳥 立ち帰りても 名をや残さん (新後拾遺・雑秋・八〇一)

題知らず

前中納言親賢女

和歌の浦に 通ひけりとも 浜千鳥 心の跡を 何時か知られん

百首の歌奉りし時

左大臣

(新後拾遺・雑秋・八〇二)

和歌の浦の 松に絶えせぬ 風の音に 声打ち添ふる 鶴ぞ鳴くなる

(新後拾遺・雑上・一二八一)

題知らず

一品法親王寛尊

藻塩草 さすが書き置く 跡なれや 八十を超ゆる 和歌の浦波

(新後拾遺・雑上・一三一二)

述懐の歌の中に

源義将朝臣

人並の 数にとのみや 和歌の浦の 入江の藻屑 書き集めまし

(新後拾遺・雑上・一三二三)

(述懐の歌の中に)

読人知らず

磨くなる 玉と聞くにも 和歌の浦の 藻屑はいとど 寄るかたもなし

(新後拾遺・雑上・一三一四)

(述懐の歌の中に)

(読人知らず)

及ぶべき 便りもあらば 松が枝に 名をだに掛けよ 和歌の歌波

(新後拾遺・雑上・一三一五)

後鳥羽院御時、和歌所に候ふべき由仰せられければ 鴨長明

沈みにき 今さら和歌の 浦波に 寄らばや寄せん 海人の捨舟

(新後拾遺・雑上・一三一六)

題知らず

読人知らず

さても何時 誰れかは引かん 和歌の浦に 未だ寄り遣らぬ 代代の捨舟

(新後拾遺・雑上・一三一七)

百首の歌召しける次に

順徳院御製

和歌の浦や 羽打ち交はし 浜千鳥 波に書き置く 跡や残らん

(新後拾遺・雑上・一三一八)

題知らず

従二位家隆

さてもなほ あはれは掛けよ 老いの波 末吹き弱る 和歌の浦風

(新後拾遺・雑上・一三一九)

百首の歌奉りし時、述懐

権中納言為重

敷島の 道は代代経し 跡ながら なほ身に越ゆる 和歌の浦波

(新後拾遺・雑下・一四一六)

正治の百首の歌に

二条院讃岐

今はとて 沢辺に帰る 葦鶴の なほ立ち出づる 和歌の浦波

(新後拾遺・雑下・一四一七)

延文二年、百首の歌奉りける時 等持院贈左大臣

我が方に 和歌の浦波 吹きしより 藻屑も波の 便りをぞ待つ

(新後拾遺・雑下・一四一八)

元久二年、新古今竟宴の歌

従二位家隆

君住まば 寄する玉藻も 磨き出でつ 千代も伝へよ 和歌の浦風

(新後拾遺・慶賀・一五五一)

(新玉津島社歌合に、浦霞)

前参議行忠

和歌の浦の 葦辺の鶴の 声ばかり 波に聞こえて 立つ霞かな

(新統古今・春上・三一)

永和の百首の歌奉りける時 後八条入道前内大臣

和歌の浦の 跡をも添へよ 友千鳥 度重なれる 数に漏れずは (新統古今・冬・六七三)
(同年(貞和二年)十一月、風雅集竟宴行なはれ

ける時、仕うまつりける) 前大納言公泰

治まれる 和歌の浦風 静かにて 拾へる玉は 千代の数かも (新統古今・賀・八〇二)

延文元年六月、内裏にて、人々三首の歌仕うまつり

ける時、寄道祝言と言ふ事を 民部卿為明

和歌の浦に 集めて磨く 玉梓の 道ある御代は 光添ふらん (新統古今・賀・八〇三)

題知らず 源経有朝臣

人知れぬ 和歌の浦廻に 鳴く千鳥 絶えぬ跡をも 世に残さばや

(新統古今・雑上・一七七九)

応永十四年、内裏の三首の歌合に、浦雪 前大納言為定女

和歌の浦や 老木の松に 降る雪の 積もれる年も 今ぞ甲斐ある

(新統古今・雑上・一七九二)

題知らず 読人知らず

皆人の 心の種も 変はらねば 今も昔の 和歌の浦松 (新統古今・雑中・一八九一)

永和の百首の歌に 従三位雅家

藻屑ぞと 見えても交じる 言の葉や その名ばかりの 和歌の浦松

(新統古今・雑中・一八九二)

百首の歌奉りし時、述懐 左大臣

立ち返り 和歌の浦波 誘はずは かかる藻屑の 如何で知られむ

(新統古今・雑中・一八九三)

嘉元の百首の歌奉りけるに 前大納言経継

立ち返り 思へばさすが 古りにけり 五十馴れぬる 和歌の浦波

(新統古今・雑中・一八九四)

百首の歌奉りし時、述懐 権中納言雅世

掛けてだに 及ばずながら 代代の跡 返るも嬉し 和歌の浦波

(新統古今・雑中・一八九六)

弘安元年、百首の歌に 大蔵卿隆博

和歌の浦や 古りぬ代代の 跡をだに 憂き我からに なほ辿るかな

(新統古今・雑中・一八九七)

題知らず 三善為種

嘆くぞよ 和歌の浦波 代代掛けし 跡を見るにも 愚かなる身を

(新統古今・雑中・一八九八)

返し 頓阿法師

雲居まで 聞こえけるかな 和歌の浦の 葦辺の鶴の 音にも立てぬを

(新統古今・雑中・一九〇〇)

百首の歌奉りし時、浦鶴 無品親王

和歌の浦や 雲居の友に 誘はれて 葦間隠れの 鶴も鳴くなり

(新統古今・雑中・一九〇一)

題知らず 従三位行文

和歌の浦の 塵に続けとや 書き置かん 甲斐も波間の 藻屑なれども

(新統古今・雑中・一九〇二)

貞和の頃、新後撰集よりこの方風雅集に至りて、
五代の撰集に遭ひて名を掛け侍りぬる事を思
ひて、詠みける 前中納言雅孝

和歌の浦に 身は七十の 老いの波 五度同じ 名をぞ掛けつる

(新統古今・雑中・一九〇二)

寄船述懐と言ひ事を

藤原秀茂

和歌の浦や 風を頼りの 導にも 身ぞ出でがての 海人の釣舟

(新統古今・雑中・一九〇五)

名所鶴と言ふ事を

法印慶運

遅れ居て 道迷へとは 和歌の浦に 夜鳴く鶴や 思はざりけん

(新統古今・雑下・一九九〇)

歌合し侍りける次に、前大僧正慈鎮の許に、

詠みて遣はしける 後京極撰政前大政大臣

和歌の浦の 契りも深し 藻塩草 沈まん代代を 救へとぞ思ふ

(新統古今・雑下・二〇二九)

後福光園撰政薨れ侍りての頃、源義将朝臣の許より、

年月馴れにける事など申して侍る返事に 権中納言雅縁

春日山 木高き松も… 立ち隔てたる 和歌の浦の 沖を深めて…

(新統古今・雑下・二〇四六)

続後拾遺集奏覧の後、法眼行済の許に、
申し遣はしける 法印宋助

和歌の浦に 迷ひや果てん み熊野の 神の導の なき世なりせば

(新統古今・神祇・二一一六)

この集仰せ出だされし時、和歌所の開闔に

なさるる由承りて、仕うまつり侍りし 権大僧堯孝

なほ守れ 和歌の浦波 かかる世に 逢へるや道の 神も嬉しき

(新統古今・神祇・二一三八)

【小倉の山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集…用例無

●勅撰和歌集…六八例

長月の晦の日、大井にて、詠める (貫之)

夕日夜 小倉の山に 鳴く鹿の 声の内にや 秋は暮ららむ (古今・秋下・三一二)

朱雀院の女郎花歌合の時に、女郎花と言ふ五文字を、

句の頭に置きて、詠める 貫之

小倉山 峰に立ち馴らし 鳴く鹿の 経にけむ秋を 知る人ぞなき (古今・物名・四三九)

人の許に、遣はしける

藤原師尹朝臣

如何にせむ 小倉の山の 郭公 覚束なしと 音をみのぞ鳴く (後撰・夏・一九六)

(題知らず)

(読人知らず)

春近く 降る白雪は 小倉山 峰にぞ花の 盛りなりける (後撰・冬・五〇一)

大井なる所にて、人々酒食うべける次に 業平朝臣

大堰川 浮かべる舟の 篝火に 小倉の山も 名のみなりけり (後撰・雑三・一二三二)

九条右大臣家の賀の屏風に

平兼盛

奇しくも 鹿の立ち処の 見えぬかな 小倉の山に 我は来ぬらん (拾遺・夏・一二八)

(題知らず)

読人知らず

紅葉せば 明かくなりなん 小倉山 秋待つ程の 名にこそありけれ (拾遺・夏・一三五)

大井河に、人々罷りて、歌詠み侍りけるに

能宣

紅葉葉を 今日のはなほ見む 暮れぬとも 小倉の山の 名には障らじ (拾遺・秋・一九五)

女郎花と言ふ事を、句の上に置きて 貫之

小倉山 峰に立ち馴らし 鳴く鹿の 経にけむ秋を 知る人ぞなき

(拾遺・雑秋・一一〇二)

亭子院、大井河に御幸ありて、行幸もありぬ

べき所なりと仰せ給ふに、事の由奏せんと申

して

小一条太政大臣

小倉山 峰の紅葉葉 心あらば 今一度の 御幸待たなん (拾遺・雑秋・一一二八)

屏風絵に、夏の末に、小倉の山の形描き

たる所を、詠める 大中臣能宣朝臣

紅葉せば 明かくなりなん 小倉山 秋待つ程の 名にこそありけれ

(後拾遺・夏・二三二)

(祐子内親王家歌合に、詠む侍りける) 江侍従

小倉山 立ち処も見えぬ 夕霧に 妻惑はせる 鹿ぞ鳴くなる (後拾遺・秋上・二九二)

落葉埋橋言へる事を、詠める 修理大夫顯季

小倉山 峰の嵐の 吹くからに 谷の懸橋 紅葉しにけり (金葉・秋・二五二)

題知らず

道命法師

朧けの 色とや人の 思ふらむ 小倉の山を 照らす紅葉葉 (千載・秋下・三五六)

(題知らず)

読人知らず

小倉山 麓の野辺の 花薄 仄かに見ゆる 秋の夕暮 (新古今・秋上・三四七)

(題知らず)

大江千里

何処にか 今夜の月の 曇るべき 小倉の山も 名をや変ふらん (新古今・秋上・四〇五)

(題知らず)

清原深養父

鳴く雁の 音をのみぞ聞く 小倉山 霧立ち晴るる 時しなれば

(新古今・秋下・四九六)

(題知らず)

西行法師

小倉山 麓の里に 木の葉散れば 梢に晴るる 月を見るかな (新古今・冬・六〇三)

法輪寺に住み侍りけるに、人の詣で来て、暮れぬ、

とて急ぎ侍りければ 道命法師

何時となく 小倉の山の 陰を見て 暮れぬと人の 急ぐなるかな

(新古今・雑中・一六四五)

(題知らず)

西行法師

小倉山 麓を籠むる 夕霧に 立ち漏らさるる 小雄鹿の声 (新勅撰・秋上・二八〇)

建保六年、内裏の歌合、秋の歌

八条院高倉

我が庵は 小倉の山の 近ければ 憂き世をしかと 泣かぬ日ぞなき

(新勅撰・秋下・三〇六)

(題知らず)

(西行法師)

限りあれば 如何がは色の 増さるべき 飽かず時雨るる 小倉山かな (新勅撰・秋下・三三九)

(関白左大臣家の百首の歌、詠み侍りけるに)

従三位範宗

露時雨 染め果ててけり 小倉山 今日や千入の 峰の紅葉葉 (新勅撰・秋下・三四七)

後朱雀院未だ春宮と申しける時、聞鹿声と

言へる心を、人々詠み侍りけるに 権大納言長家

妻恋ふる 鹿ぞ鳴くなる 小倉山 峰の秋風 寒く吹くらし (続後撰・秋下・二九九)

山鹿と言ふ事を 藤原経定朝臣

小倉山 暮るる夜毎に 秋風の 身に寒しとや 鹿の鳴くらん (続後撰・秋下・三〇六)

(擣衣の心を) 順徳院御製

小倉山 裾野の里の 夕霧に 宿こそ見えね 衣擣つなり (続後撰・秋下・三九五)

建保五年四月庚申、秋朝 前中納言定家

小倉山 時雨るる頃の 朝な朝な 昨日は薄き 四方の紅葉葉 (続後撰・秋下・四一八)

建長二年九月、山中秋興と言ふ題にて、詩歌を

合せられ侍りし次に 太上天皇

古への 跡を訪ねて 小倉山 峰の紅葉や 行きて折らまし (続後撰・秋下・四二〇)

弘長元年、百首に、鹿を 前大納言為家

小倉山 秋は慣らひと 鳴く鹿を 何時とも分かぬ 涙にぞ聞く (続古今・秋下・四四九)

嵯峨の辺りに罷りて、数多の歌、詠み侍りけるに

関白前左大臣

明けぬとも えこそ思はぬ 川霧の 今朝も小倉の 山の麓は (続古今・秋下・四九四)

建長六年、龜山仙洞にて、五首の和歌講じ

侍りしに、初紅葉を 衣笠前内大臣

この里は 何時時雨れけん 小倉山 外に色見ぬ 峰の紅葉葉 (続古今・秋下・五〇二)

(文永二年九月十三夜歌合、山紅葉を) 藤原光俊朝臣

小倉山 今一度も 時雨れなば 御幸待つ間の 色や増さらん (続古今・秋下・五一二)

正治二年、百首の歌 前中納言定家

露霜の 小倉の山に 家居して 干さでも袖の 朽ちぬべきかな

(続古今・雑中・一六九七)

暮秋の心を 前大納言為氏

小雄鹿の 声より外も 小倉山 夕日の影に 秋ぞ暮れぬる (続拾遺・秋下・三七三)

百首の歌奉りし時、鹿 津守国冬

都より 訪ねて聞けば 小倉山 西こそ秋と 鹿も鳴くなれ (新後撰・秋上・三一四)

(題知らず) 前大納言為家

住み初めし 跡なかりせば 小倉山 何処に老いの 身を隠さまし (新後撰・雑中・一三六八)

小倉の山庄、思ひの外なる事出て来て住まず なりにける頃、詠み侍りける 権中納言公雄

世世掛けて 思ひ小倉の 山水の 如何に濁れば 澄まずなりけん

(新後撰・雑中・一四六一)

広田社の歌合に 基俊

暁に なりやしぬらん 小倉山 鹿の鳴く音に 月傾きぬ (玉葉・秋下・七一七)

(月の御歌の中に)

前大納言為家

小倉山 都の空は 明け果てて 高き梢に 残る月影 (玉葉・秋下・七二〇)

桂なる所へ罷りて帰り侍りけるに、小倉山にて月の
入りにければ、詠み侍りける 四条太皇太后宮信濃

音に聞く 小倉の山は 月影の 入りぬる時の 名にこそありけれ (玉葉・秋下・七二四)

龜山院より召されける秋の十首の歌の中に 延政門院新大納言

小倉山 秋とばかりの 薄紅葉 時雨れて後の 色ぞゆかしき (玉葉・秋下・七六六)

嵯峨の家に、年久しく住みて、詠み侍りける 前大納言為家

小倉山 松を昔の 友に見て 幾年老いの 世を送るらん (玉葉・雑三・二二二)

嵯峨の家にて、秋の歌、詠み侍りけるに 右大臣

小倉山 軒端の西に 近ければ 外には入らぬ 月ぞ隠るる (玉葉・雑三・二二三)

(題知らず) 中務卿宗尊親王

小倉山 峰の秋風 吹かぬ日は あれども鹿の 鳴かぬ夜はなし (続千載・秋上・四〇五)

秋の歌の中に 権中納言公雄

小倉山 心に染むる 紅葉葉は 時雨の外の色や優らん (続千載・秋下・五七七)

弘長の百首の歌奉りし時、同じ心 (五月雨) を

前大納言為家

大堰川 音増さるなり 居る雲の 小倉の山の 五月雨の頃 (続後拾遺・夏・二一〇)

亭子院西川に御座しましける日、望秋山と言ふ

事を題にて、詠み侍りける (坂上是則)

秋の色は 千種ながらに 清けきを 誰れか小倉の 山と言ふらむ

(続後拾遺・秋下・三八六)

伏見院に、十首の歌講ぜられける時、秋山

前中納言為相

小倉山 秋の梢の 初時雨 今幾日ありて 色に出でなん (続後拾遺・秋下・三九三)

滝紅葉と言ふ事を

紅葉する 小倉の山の 時雨にも 染めぬ戸無瀬の 滝の白糸 (続後拾遺・秋下・四〇五)

春の歌の中に

小倉山 春とも知らぬ 谷陰に 身を古るすとや 鶯の鳴く (続後拾遺・雑上・九八五)

宝治の百首の歌奉りける時、山家水 前大納言為家

小倉山 陰の庵は 結べども 堰く谷水の 澄まれやはする (続後拾遺・雑中・一〇七二)

文保の百首の歌奉りける時

かくてしも 身をば何時まで 小倉山 老いの命の ありて憂き世に

(続後拾遺・雑中・一〇七二)

和歌所にて、暮山遠雁と言ふ事を講ぜられけるに

皇太后宮大夫俊成

小倉山 麓の寺の 入相に あらぬ音ながら 紛ふ雁が音 (風雅・秋中・五三六)

三十首の歌の中に、山家松 前中納言定家

忍ばれん ものともなしに 小倉山 軒端の松ぞ 馴れて久しき (風雅・秋中・一七四四)

秋の歌の中に

鎌倉右大臣

夕されば 霧立ち来らし 小倉山 山の常陰に 鹿ぞ鳴くなる (新千載・秋下・四六六)

建長二年、仙洞詩歌合に、山中秋興 (前大納言為氏)

小倉山 脆き木の葉の 秋風に 時雨れて残る 有明の月 (新千載・秋下・五六三)

建武二年、人々題を探りて、千首の歌仕うまつりける次に、秋植物と言へる事を、詠ませ給うける

後醍醐院御製

夕月夜 小倉の峰は 名のみして 山の下照る 秋の紅葉葉 (新千載・秋下・五六五)

題知らず 法印弁教

月の入る 後は小倉の 山陰に 独り明けき 小雄鹿の声 (新千載・雑上・一七八七)

元亨三年九月十三夜、後宇多院に三首の歌

講ぜられけるに、月前鹿 中納言為藤

小倉山 秋は今夜と 小雄鹿の 妻問ふ峰に 澄める月影 (新拾遺・秋下・四五七)

(題知らず) 清輔朝臣

小倉山 木々の紅葉の 紅は 峰の嵐の 下すなりけり (新拾遺・秋下・五四〇)

秋の頃、嗟峨なる所に罷りて、歌詠み侍りけるに、

山鹿を 円照法師

小倉山 紅葉吹き下す 木枯しに また誘はるる 小雄鹿の声 (新拾遺・雑上・一六一三)

百首の歌奉りし時、紅葉 前参議実名

今はただ 外にて見つる 小倉山 峰の紅葉の 秋の盛りを (新拾遺・雑上・一六六八)

題知らず 権僧正良憲

月もなほ 木の葉隠れの 小倉山 秋待つ程と 何思ひけん (新後拾遺・雑秋・七四二)

貞和の百首の歌に 前大納言公泰

小倉山 麓の尾花 袖見えて 絶え絶え晴るる 秋の朝霧 (新統古今・秋下・五四二)

大堰川 紅深く 匂ふかな 小倉の山の 紅葉散るらし

(月前鹿を) 宗仲法師 (新統古今・冬・六二九)

小倉山 峰立ち馴らす 程なれや 月の辺りの 小雄鹿の声 (新統古今・雑上・一七三七)

山紅葉を 従三位雅宗

時雨れつる 雲を重ねて 小倉山 紅葉も秋も 深き色かな (新統古今・雑上・一七五八)

中務卿宗尊親王家の百首の歌に 前左兵衛督教定

小倉山 跡は昔と 来て見れば 荒れたる軒に 松風ぞ吹く (新統古今・雑中・一八四三)

【小倉野山(峰)】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二例

百首の歌奉りし時 藤原定家朝臣

白雲の 春は重ねて 竜田山 小倉の峰に 花匂ふらし (新古今・春上・九一)

題知らず 舒明天皇御歌

夕されば 小倉の山に 鳴く鹿の 今宵は鳴かず 寝ねにけらしも

(続古今・秋下・四四四)

【小塩の山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……二一例

二条の後の、未だ東宮の御息所と申しける時に、
大原野に詣で給ひける日、詠める 業平朝臣

大原や 小塩の山も 今日こそは 神代の事も 思ひ出づらめ (古今・雑上・八七一)

左大臣の家の男子女子、冠し裳着侍りけるに 貫之

大原や 小塩の山の 小松原 早木高かれ 千代の影見ん (後撰・慶賀・一三七三)

三条院御時、大嘗会御祓など過ぎての頃、雪の
降り侍りけるに、大原に住み侍りける少将井の
尼の許に、遣はしける 伊勢大輔

世に響む 豊の祓を 外にして 小塩の山の 御幸をや見し (後拾遺・雑五・一一一八)

返し 少将尼の井

小塩山 梢も見えず 降り積みし その天皇の 御幸なりけん (後拾遺・雑五・一一一九)

後冷泉院幼く御座しましける時、卯杖の松を人の
子に賜はせけるに、詠み侍りける 大式三位

相生ひの 小塩の山の 小松原 今より千代の 陰を待たなん (新古今・賀・七二七)

返し 能宣朝臣

身をばかつ 小塩の山と 思ひつつ 如何に定めて 人の入りけむ (新古今・雑中・一六二九)

大原野祭に参りて、周防内侍に、遣はしける 藤原伊家
千代までも 心して吹け 紅葉葉を 神も小塩の 山風の風

最勝四天王院の障子に、小塩山描きたる所 前大僧正慈円 (新古今・神祇・一八九九)

小塩山 神も験を 松の葉に 契りし春は 返るものかは (新古今・神祇・一九〇〇)

大原野の社に詣で侍りけるに、霞を見て、
詠み侍りける 皇太后宮大夫俊成

春霞 立ちにけらしな 小塩山 小松が原の 薄緑なる (続後撰・春上・三五)

清慎公の家の屏風の歌 中務

小塩山 松風寒し 大原の 冴野の沼や 冴え増さるらん (続後撰・冬・六二二)

光明峰寺入道前撰政家歌合に、名所月 藤原信実朝臣

小塩山 尾上の松の 秋風に 神代も古りて 澄める月影 (続後撰・神祇・七一一)

神祇の歌の中に 山階入道左大臣

千早振る 小塩の山の 峰に生ふる 松ぞ神代の 事は知るらん (続拾遺・神祇・一四三四)

中務卿宗尊親王家の百首の歌に 前左兵衛督教定

小塩山 知らぬ神代は 遠けれど 松吹く風に 昔をぞ聞く (新後撰・神祇・七三四)

題知らず 狛秀房

双葉より 神をぞ頼む 小塩山 我も相生ひの 松の行末 (続千載・神祇・八八六)

弘安の百首の歌奉りける時 入道前太政大臣

色に出でて 言はぬばかりぞ 小塩山 待つとは風の 便りにも聞け (続千載・恋三・一二九四)

題知らず 中原師宗朝臣

暮れて行く 秋の名残りを 小塩山 鹿も今宵や 鳴き明かすらん (続千載・雑上・一七七八)

同じ心(郭公)を 左大臣

大原や 小塩の山を 郭公 我に神代の 事語らなむ (続後拾遺・夏・一六九)

社頭雪と言へる心を

従三位氏久

積もるらむ 年をば言はず 小塩山 神代の松に 降れる白雪

(続後拾遺・神祇・一三二八)

宝治の百首の歌に、嶺松を

前大納言為氏

古りにける 神代も遠し 小塩山 同じ緑の 峰の松原

(風雅・神祇・二一三二)

文保の百首の歌奉りし時

前大納言為定

千早振る 神代も聞かぬ 紅に 小塩の山は 紅葉しにけり

(新千載・秋下・五七五)

永和の百首の歌に

後八条入道前内大臣

知るや如何に 小塩の山の 峰の松 我も神代の 同じ種とは

(新統古今・神祇・二一〇五)

【男山】(山城)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一三例

僧正遍昭が許に、奈良へ罷りける時に、男山にて

女郎花を見て、詠める

布留今道

女郎花 憂しと見つぞ 行き過ぐる 男山にし 立てりと思へば (古今・秋上・二二七)

(題知らず)

(読人知らず)

今こそあれ 我も昔は 男山 栄ゆく時も ありこしものを

(古今・雑上・八八九)

(題知らず)

後久我太政大臣

なほ照らせ 世世に変はらず 男山 仰ぐ峰より 出づる月影

(続後撰・神祇・五四五)

石清水の社に、詠みて奉りける 後土御門内大臣

神も見よ 姿ばかりぞ 男山 心は深き 道に入りనికి

(続後撰・神祇・五四六)

大納言通方、詠ませ侍りける石清水の

歌合に、社頭月と言ふ事を、詠める

卜部兼直

久方の 月の桂の 男山 明けき影は 所柄かも

(続古今・神祇・七〇〇)

(神祇の歌の中に)

法印行清

男山 跡垂れ初めし 袖の上の 光と見えて 映る月影

(続拾遺・神祇・一四一四)

題知らず

後嵯峨院御製

男山 老いて栄ゆく 契りあらば 衝くべき杖も 神ぞ切るらん

(続拾遺・神祇・一四一六)

題知らず

正三位知家

当時や 古り増さるらん 男山 代代の御幸の 跡を重ねて

(続拾遺・神祇・一四一七)

神祇の歌とて

法印頼舜

男山 峰より照らす 月影は 曇らぬ人の 心にぞ澄む

(玉葉・神祇・二七七一)

神祇の心を

後二条院御製

世の為も 仰ぐとを知れ 男山 昔は神の 国ならずやは

(続千載・神祇・九一八)

神祇

前中納言有光

登るべき 跡をぞ祈る 男山 埋もれ果つる 峰の白雪

(新拾遺・神祇・一四〇〇)

貞和の百首の歌に

等持院贈左大臣

身を祈る 人よりもなほ 男山 素直なるをぞ 守りとは聞く

(新後拾遺・神祇・一五〇七)

題知らず

権大納言具通

男山 今を百代の 始めにて さらにや君を また守らまし (新後拾遺・慶賀・一五三九)

【姨捨山】(信濃)

●玄々集……一例

思ひ出でも なくてや我身 やみなまし 姨捨山の 月見ざりせば (芥慶法師・一六六)

●能因法師集……四例

いまの男の、せきもりありけりなどいひたるに、又かはりて

をばすての 山となりにし 我なれば いまさらしなに 関守もなし (四四)

女、かへし

をばすての 山をば知らず 月見るは なほ哀れます 心地こそすれ (六八)

また返し

月はなほ 哀れと物を 思ふなり つれなき人は 見ぬにやあるらん (六九)

九月十三夜の月を、ひとり望月詠之

さらしなや をばすて山に 旅ねして こよひの月を むかし見しかな (二一三)

●勅撰和歌集……三〇例

(題知らず) (読人知らず)

我が心 慰めかねつ 更級や 姨捨山に 照る月を見て (古今・雑上・八七八)

その程に帰り来ん、とても野に罷りける人の、程を

過ぐして来ざりければ、遣はしける (読人知らず)

来むと言ひし 月日を過ぐす 姨捨の 山の端辛き ものにぞありける (後撰・恋一・五四二)

女の許より罷りて、朝に、遣はしける 源重之朝臣

帰りけん 空も知られず 姨捨の 山より出でし 月を見し間に (後撰・恋二・六七五)

越後より上りけるに、姨捨山の麓に月明かりければ

橘為仲朝臣

これやこの 月見る度に 思ひ遣る 姨捨山の 麓なりける (後拾遺・羈旅・五三三)

人の許より今宵の月は如何が、と言ひたる

返事に、遣はしける 藤原範永朝臣

月見ては 誰れも心ぞ 慰まぬ 姨捨山の 麓ならねど (後拾遺・雑一・八四八)

義忠朝臣もの言ひける女の姪なる女に、また

住み移り侍りけるを聞きて、遣はしける 赤染衛門

真にや 姨捨山の 月は見る 世に更級と 思ふ辺りを (後拾遺・雑一・一〇九二)

題知らず

律師濟慶

思ひ出でも なくてや我が身 止みなまし 姨捨山の 月見ざりせば (詞花・雑上・二八七)

父永実、信濃守にて下り侍りける供に罷りて、上り

たりける頃、左京大夫頭輔が家に歌合し侍りけるに、

詠める

藤原為実

名に高き 姨捨山も 見しかども 今宵ばかりの 月はなかりき (詞花・雑上・二八八)

摂政前右大臣家に、百首の歌詠ませ侍りける時、

月の歌として、詠める

藤原隆信朝臣

出でぬより 月見よとこそ 冴えにけれ 姨捨山の 夕暮れの空 (千載・秋上・二七八)

人に餞し侍りける暁、詠める 右衛門督頼実

忘るなよ 姨捨山の 月見ても 都を出づる 有明の空 (千載・離別・四九六)

(百首の歌召しける時、旅の歌とて、詠ませ給うける)

藤原季通朝臣

更級や 姨捨山に 月見ると 都に誰れか 我を知るらん (千載・羈旅・五二二)

(題知らず) 八条院六条

待つ程は いとど心ぞ 慰まぬ 姨捨山の 有明の月 (千載・雜上・一〇〇六)

(勸持品を、詠める) 藤原敦仲

恨みける 気色や空に 見えつらん 姨捨山を 照らす月影 (千載・釈教・一二二四)

題知らず 伊勢

更級や 姨捨山の 有明の 尽きずものを 思ふ頃かな (新古今・恋四・一二五七)

題知らず 正三位家隆

更級や 姨捨山の 高嶺より 嵐を分けて 出づる月影 (新勅撰・秋上・二五四)

九月十三夜の月を、一人眺めて、思ひ出で侍りける

能因法師

更級や 姨捨山に 旅寝して 今宵の月を 昔見しかな (新勅撰・秋下・二八二)

題知らず 西行法師

現はさぬ 我が心をぞ 恨むべき 月やは疎き 姨捨の山 (新勅撰・雜一・一〇八四)

(九月十三夜、十首の歌合に、名所月) 前参議為氏

秋毎に 慰め難き 月ぞとは 馴れても知るや 姨捨の山 (続後撰・秋中・三六〇)

善光寺に詣でける時、姨捨山の麓に宿りて、

詠み侍りける 前大僧正覚忠

今宵我 姨捨山の 麓にて 月待ち侘ぶと 誰れか知るべき (続古今・羈旅・八七六)

(題知らず) 小野小町

奇しくも 慰め難き 心かな 姨捨山の 月も見なくに (続古今・雜下・一八五〇)

千五百番の歌合に 宜秋門院丹後

郭公 汝も心や 慰まぬ 姨捨山の 月に鳴く夜は (新後撰・夏・一九一)

名所夏月と言ふ事を 大江貞重

明け易き 空にぞいとど 慰まぬ 姨捨山の 短夜の月 (続千載・夏・二九六)

題知らず 鎌倉右大臣

月見れば 衣手寒し 更級や 姨捨山の 峰の秋風 (続千載・秋下・四五九)

題知らず 祝部成茂

更級や 姨捨山の 昔より 秋の心は 月ぞ知るらむ (続後拾遺・秋下・三五六)

信濃へ下る人に餞するとて、詠める 貫之

君が行く 所と聞けば 月見つつ 姨捨山ぞ 恋しかるべき (続後拾遺・離別・五四七)

(題知らず) 源信明朝臣

秋の夜の 暁方の 月見れば 姨捨山ぞ 思ひ遣らるる (新千載・秋上・四五〇)

正治二年、百首の歌に 三条入道左大臣

更級や 姨捨山の 月は見じ 思ひ遣るだに 涙落ちけり (新拾遺・秋上・四〇六)

月の歌とて、詠ませ給うける 後二条院御製

更級や 姨捨山も さもあらばあれ ただ我が宿の 雲の上の月

(新後拾遺・秋上・三六三)

信濃へ下りける人に、大納言師氏の餞し
侍りけるに、詠める 貫之

君が行く 所と聞けば 月見つつ 姨捨山ぞ 恋しかるべき (新後拾遺・離別・八五三)

月多遠情と言ふ事を 源有宗朝臣

更級や 姨捨山の 峰まども 思ひ遣らるる 夜半の月影 (新続古今・秋上・四六六)

【小初瀬の山】(大和)

●玄々集……用例無

●能因法師集……用例無

●勅撰和歌集……一〇例

伏見と言ふ所にて、この心を、これかれ

詠みけるに 読人知らず

菅原や 伏見の暮れに 見渡せば 霞に紛ふ 小初瀬の山 (後撰・雑三・一二四二)

歌合し侍りける時、花の歌とて、詠める 太宰大弐重家

小初瀬の 花の盛りを 見渡せば 霞に紛ふ 峰の白雲 (千載・春上・七四)

(花の歌、詠み侍りけるに) 後京極摂政前太政大臣

花は皆 霞の底に 移ろひて 雲に色付く 小初瀬の山 (新勅撰・春下・一一四)

(千五百番の歌合の歌) 宜秋門院丹後

春風に 知られぬ花や 残るらん なほ雲掛かる 小初瀬の山 (続古今・春下・一四五)

最勝四天王院の障子に 前中納言定家

小初瀬や 峰の常磐木 吹き萎り 嵐に曇る 雪の山本 (続古今・冬・六四九)

百首の歌奉りし時、月 前中納言有房

霧晴るる 伏見の暮れの 秋風の 月澄み昇る 小初瀬の山 (新後撰・秋上・三四四)

右大臣に侍りける時、家に百首の歌奉りける中に 後法性寺入道前関白太政大臣

桜咲く 高嶺に風や 渡るらん 雲立ち騒ぐ 小初瀬の山 (玉葉・春下・二二〇)

日吉社に奉りける百首の中に 前大僧正慈鎮

鐘の音を 友と頼みて 幾夜かも 寝ぬは慣らひの 小初瀬の山 (続千載・雑中・一九〇九)

正治二年、後鳥羽院に、百首の歌奉りける時

前大僧正慈鎮

入相の 音は霞に 埋もれて 雲こそ薫れ 小初瀬の山

文保の百首の歌奉りける時 忠房親王 (新拾遺・春上・八九)

春の夜は 明け行く鐘の 響きまで 花に霞める 小初瀬の山

(新拾遺・春下・一四八)